鷗外全集

第廿五巻

解説

これは故松本觀阿翁の「張交」中に發見せられた作者の遺墨である。觀阿翁の右上方にある註によると、「明治八年六月南鍋町多賀良喜開店うちわの裏其水の筆」とある。其水は默阿彌の俳名である。「多賀羅喜主人が、座禪豆の開店に、其水、御贔屓をとも〳〵仰ぐ團扇哉」と讀める。「□」の中は「南なべ丁、多から喜」である。開店に際して配つた團扇の裏へかういふ狂句を寄せた、その下書なのである。

不動の文次
尾上菊五郎
奉納大山大権現

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集

第廿五卷

東京　春陽堂刊行

默阿彌全集　第二十五巻目次

挿繪目次

因幡小僧雨夜噺

時も小春の麗かに梅も幸ひ歸り咲花の色香に造酒介が迷ふ小萩が夜に紛れ逃し手引は部屋方のお民が仕業と手ひどき拷問涙の雨に濡し身の男は追手に谷底へ突落されて蟒に呑れし難も刃にて腹を切割助かりて毒氣に二目と見れぬ面體憂ふし繁き竹川と千種が異見に是非なく／＼妾になりしを權兵衛に焚附られし才次郎へ身の言譯に散る櫻芽出紅葉の血まぶれに馬淵戸倉が殺害せし恨みは殘る死靈の祟り柳も凄き寺門前に其日に困る初右衛門が難儀を娘のおのちに聞き救ひに來たも八王子で密通なして切れるを助られたる恩返しにおさよを賣て貢ぎし百兩其深切も血違ひ故お辰はそれと白鞘の菊一文字が手に入て主家へ歸參の繁之丞善と惡事に忠次が繩目名も高輪の大木戸で召捕られたる入墨新助

「因幡小僧」は明治二十年十一月、作者七十二歳の時、中村座に稿下上演された。小間物屋才次郎の件は三世梅壽菊五郎の演じたといふ筋により、因幡小僧と組合せて構案されたもの。「續續歌舞伎年代記」から當時の評を抄出する。「梅幸五世菊五郎得意の世話物とて相變らず好評。落語家の柳亭燕枝才次郎が蟒の腹より出て菊一文字を突附けての幕切に感服し、「蛇切ると見れば恐ろし菊の腕」といふ一句を示したといふ。福助の小萩よく嵌りてよし。高砂屋福助の博勞助右衞門は、申分なき出來にて大當り松之助のおさよはいなせ肌よく嵌りて面白いことなりし、菊五郎の才次郎扮裝何れも御工夫よし、新助役にて富士松の明烏を使ひおさよの所へ忍び込み酒盛をする所專賣の意氣事小にくらしい程よくしてゐたり。中洲出茶屋の場に馬士の勘八が我身分を知つてゐるのもビクともせずキメつける所大出來々々。」とある。

書卸しの時の役割は五世尾上菊五郎（因幡小僧新助、小間物屋才次郎）中村芝翫（穗積兵左衞門）、中村福助（腰元小萩）、高砂屋中村福助（博勞中野初右衞門、召使お民）、坂東家橘（曾根繁之丞、神原造酒之助）、尾上松助（神原の中間權兵衞、初右衞門女房お辰）、中村鶴藏（醫師竹齋、おくろ）、片岡市藏（馬淵運藏）、中村勘五郎（戸倉傳八、大戸のかん八）、岩井松之助（相模屋のおさよ）、嵐璃幸（奧女中千種、曾根の下女おのぶ）、澤村千鳥（奧女中竹川）、岩井粂松（曾根の後家おちゑ）、尾上榮之助（初右衞門娘おのち）、尾上榮次郎（巾着切まむしの次郎松）等であつた。

挿繪にしたのは作者自筆の役者の名前で書いてある稿本の一部と、歌舞伎新報の挿繪（菊五郎の新助、芝翫の穗積）とである。

大正十五年七月下旬　　校訂者

因幡小僧雨夜噺（因幡小僧――七幕）

序幕

上野山下廣小路の場
同寒松院奥座敷の場
同玄關口受附所の場
（返し）同奥御殿裏塀外の場
護持院原松並木の場

〔役名――小間物屋才次郎、盜賊因幡小僧新助、中間權兵衞、馬淵蓮藏、戶倉傳八、巾着切小鼠忠次、夜蕎麥賣仁助、寺男佐吾兵衞、家老穗積兵太夫。神原の腰元小萩、曾根の下女おのぶ、奥女中千種、蓮茶屋の下女お幸、甘酒屋の婆おつん、繁之丞母おちゑ其他。〕

（上野山下廣小路の場）――本舞臺上手より下へ斜に小高き石垣の二重、此上草土手、松の立木、向う池の端より黑門を見たる遠見、上手葭張り見世物小屋の横手にて見切り、此間出這入りあり、小屋の横手より敷紙の日除を張り、此下へ甘酒の荷を並べ、床几二脚出し、下手袴腰の張物にて見切り、總て上野山下廣小路の體。爰に甘酒屋の婆おつん、白髮鬘、前垂にて甘酒を汲んでゐる。仕出し四人

○△□◎床几にかけ煙草をのんでゐる。此模樣見世物の鳴物にて幕明く。

つん　はい、お待ちどほ樣でござりました。（ト出す。四人飮みながら、）

○　いや、何時も上野の山下はよく人の出る所だが、わけて今日は天氣のせゐか、人の出がいゝやうだ。

△　陽氣がおひ〳〵直つたのに櫻がそろ〳〵開いて來たから、盛り場は大繁昌で、今見た天の岩戸などは、實に八文ぢや安いものぢや。

つん　八文どころか、もつと安うございますよ、

□　なあに、甘酒ではない、天の岩戸さ。

つん　蛤なら田町が流行りますよ。

◎　その田町から吉原へ行かうか、いつそ今日は午の日だから笹の雪で飯を仕上げ、根岸通りをぶらと、飛鳥山から王子へ行かうか。

○　さう定つたら急がないと、笹の雪がなからうぜ。

△　違えねえ、大抵午限り賣り切るから、あそこで喰ひ損なふと海老屋か扇屋だ。

□　先づそこらはむづかしいから、豆腐が若し賣り切れたら、芋坂下の團子ときめよう。

◎物見遊山に出掛けながら、餘り節儉過ぎるではないか。

○いや、爰らが眞の風流人だ。

　トやはり見世物の鳴物になり、○錢を出し皆々小屋の内へはひる。おつん跡を片附けながら、

つん　耳が遠いからはつきりとは聞えぬが、田町だの王子だのと、江戸方角の事を言うたは、ありや手習の御師匠さんか、それとも身裝がよくないから、こりや飛脚屋かも知れぬわい。

　トやはり見世物の鳴物になり、花道より巾着切小鼠忠次半纒着流し、三尺、駒下駄、少し後より紙屑買作兵衛、やつし裝、股引草履にて、紙屑の鐵砲籠を肩へかけ出來り、

作兵　もし〳〵、そこへおいでなさるのは、忠次さんではありませぬか。

忠次　おい。（ト振りかへり、）ヨウ親方か、久し振りだの。

作兵　後ろ姿が似てるから、てつきりさうとは思つたが違ふといかねえから、そうツと呼んだのさ。

忠次　何處かへ行つて掛けながら、儲け口でも聞かうかの。

作兵　幸ひ向うの甘酒屋は、かな壺だから丁度いゝ。

忠次　そいつア有難く出來てゐる。（ト兩人舞臺へ來り、床几へかける。）

つん　是はおいでなさいまし、甘いを上げませうか。

忠次　熱くして二杯くんねえ。（ト指を出す。）

つん　いえ、二文ぢやござりませぬ。四文づゝでござります。

忠次　なあに、二杯くんねえよ。（ト大きく言ふ。）

つん　はい、生姜は入れて上げますよ。

作兵　どうだえ、內證話しにはお誂へだ。

忠次　違えねえ。

作兵　さうして今日は、買物はねえかえ。

忠次　まだ旅から歸つたばかりで、何にも賣る物はねえ。

作兵　それぢや旅へ行きなすつたかえ。

忠次　八王子に遊んでゐたが、面白い錢儲けもなし、それに故鄉忘じ難しで、二三日跡歸つて來たのだ

作兵　いや錢儲けはどこにもねえ。おいらなどは此間つまらねえ奴の物を買つて、丁度二た月喰ひ込み百背負つて出て來たが、いゝ代物でも手に入つたら、その埋合せに儲けさして下せえ。

忠次　そいつア馬鹿な目に逢つたな。いゝや、おれがみつちり儲けさしてやらう。

作兵　そいつア有難え、もうどぢな買物はこり〳〵した。

ト爰へおつん甘酒の茶碗を二つ盆へ載せて持ち來り、

つん　はい、お待ちどほさま。(ト大きな聲にて兩人の前へ出す。)

忠次　えゝ、恂りしたぜ。

つん　なアに、そんなに熱くはござりませぬ。

作兵　甘酒の事を言やあしねえ。

トおつんは聞えぬこなしにて、澄して後ろへ行く。見世物の鳴物、ばた／＼になり、花道より巾着切り蝮の治郎松、若衆鬘にて逸散に走り出て、下手へ逃げてはひる。直後より雇婆おくろ、白髪鬘やつし裝の裝、脚絆草鞋にて絲立を抱へ走り出來り、

くろ　もし、泥坊ぢや／＼。

ト舞臺へ來り、上手へ行かうとして躓き、ばつたり轉ぶ。是を忠次、作兵衛介抱なし、

忠次　おい／＼、何處も怪我はしやあしねえか。

くろ　はい／＼、其の怪我よりも今のお金が、(ト立上らうとして)あいたゝゝゝ。

作兵　金と言ひなさるのは、盜まれなすつたのか。

トおくろ軀を押へながら、

くろ　はい、只今向うの繪草紙屋で立止つて見てゐますと、小い丁稚が横合より、わしの懐へ手を入れて巾着を抜いてしまひ、爰迄來たが追付かず、とう〳〵見失つてしまひました。

忠次　あゝ、それぢやあ今の奴だな。(トうなづき。)何しろ災難だつたが、さうして巾着の中には幾ら入つてゐたのだえ。

くろ　はい、金が三分に、小遣ひのおあしが二三百ございましたが、あれを取られてしまふ時は、江戸で頼る所もなし、是から夜通し何も喰べずに、八王子迄行かねばならぬ。あゝ、とんだ事がはだけました。

トおくろ泣くを、忠次思入あつて、

忠次　それぢやあお前は、八王子の人か。さうして何の用で江戸へ來たのだ。

くろ　わたしの末の餓鬼が、去年抜け詣りに出ましたが、此間六社前から炭を積んで來た人の話しに、江戸の山下で見掛けたから、早速尋ねて行くがよいと敎へてくれましたから、今日、わざ〳〵出て參りました。(ト愁ひのこなしにて言ふ。忠次思入あつて、おつんに向ひ。)

忠次　おい、婆さん。

つん　はい〳〵。

忠次　今度はよく聞えたな。一杯やつてくんねえ。
つん　はい〳〵。（ト忠次おくろに向ひ、）
忠次　おい、婆さん。
つん　はい〳〵。
忠次　お前ぢやあねえ、こつちの婆さんだ。
くろ　はい〳〵。
忠次　おれも八王子へ行つてゐたが、お前の内は何處の所だ。
くろ　はい、先の棒鼻の德利龜屋の四五軒手前で、荒物を賣つてをりましたが、去年爺に死なれてから茶飲友達を迎へた所、その野郎に裸にされ、どうもかうもならなくなり、たうとう内をしまひまして、今伯勞の初親分の所へ奉公人替りに行つてをります。
ト爰へおつん、茶碗を盆へ載せ持つて來り、
つん　はい、甘酒。
くろ　いえ、甘酒どころか湯も飮めませんよ。
忠次　いや、決して心配しねえで、甘酒でも飮んで、氣を落ちつけなさるがいゝ。

くろ　有難うはございますが、どうかしてあの泥坊は知れますわけには行きますまいか。

忠次　これから直追つかけても、お前の足ぢや追ッつかねえから、無え昔と諦めねえ。その代り是をやらう。

ト財布より二分金を二つ出し、おくろに渡す。

くろ　え、こりや一兩ございますな。

忠次　三分と二三百取られた所へ、一兩やつたらそれでよからう。

くろ　どういたしまして、こんなに貰つては濟みませぬ。是は返しまする。

作兵　おい、一旦兄貴が出した錢だ。其遠慮には及ばねえから、默つて貰つて置くがいゝ。

くろ　それでもどうも、氣味が惡いからね。

忠次　是は御挨拶だが、實はお前が厄介になつてゐる、八王子の初右衛門親分は、おれが友達の恩人だから、それでお前を救ふのだ。

くろ　はゝお内の親分を知つた人では、やつぱり碌でなしだね。いえ碌々見たこともないお人だが、お前樣いつ頃ござられたね。

忠次　なに、おれぢやねえ、友達の新助だが、又行つてお前の世話になるめえとも言へねえから、其の

一兩を受取つて、息子の居所を尋ねた上、淺草へでも廻つて歸んねえ。
くろ　それではお貰ひ申していゝかね。
作兵　いゝどこぢやあねえ。初手からお前にやる積りだ。默つて貰つて置くがいゝ。
くろ　それはどうも、お有難うござりまする。
　ト件の金を押し頂き、紙へくるみ帶の間へ入れる。
つん　もし／＼お嬶さん、甘酒をお上りなされませ。遠慮されてはわたしが迷惑だ。
くろ　はい／＼、そんだらお呼ばれ申しまする。（トおくろ甘酒を飲みながら）今お前さんが言ひなすつた新助さんは、此頃は何處においでなさいますね。
忠次　兄貴は當時、淺草にごろついてをるさうだ。
くろ　八王子ではお世話になりましたから、若しお逢ひなすつたら、よろしく言つて下せえまし。
作兵　是から淺草へかけて、尙往來が混雜するから、今の金を取られてはいかねえぜ。
くろ　今度は人込では、つかんで居ります。（ト茶碗を置き）あゝ旨い甘酒だつた。大きに呼ばれ申しました。
　ト禮を言ひ立上る。おつんおくろの傍へ來り、

つん　一杯四文でござりまする。

忠次　それはおれが拂ふからいゝ。

つん　矢張り年寄りのせゐでござります。

忠次　何を言つてゐるのだ。

くろ　そんなら親方さま、是は御厄介になりました。

　　トやはり見世物の鳴物になり、おくろ皆々に挨拶なし、悦びながら、上手へはひる。

作兵　今婆さんの言つた、八王子の初右衛門といふ人は、兄貴も知つてゐる人かえ。

忠次　おらあまだ近附きぢやあねえが、因幡小僧はあそこの家で、子のやうにして育てられた恩人だといふことだ。

作兵　それぢやあお前も今の婆に、恩を被せて置きなさるのも、まさかの時の用心だね。

忠次　言つて見りやあそんなものよ。

作兵　いや、すばしツこい男だな。

　　ト爰へ上手より、巾着切蝮の治郎松いで來り、

治郎　兄貴、婆は行きましたか。

忠次　今の仕事は手前だな。

治郎　繪を見てゐたから切りましたが、どうぞ受取つておくんなさい。

ト紐の切れし巾着を出す。

忠次　いゝや、それは手前取つて置け。

作兵　おい治郎兄い、お前がそれを切つたばかり、兄いが一兩散財したぜ。

治郎　そいつァ濟まねえ、どうぞ取つておくんなせえ。

忠次　八王子の親分のとこに厄介になつてゐる婆と聞いてやつたのだから、其の斟酌には及ばねえ。

治郎　それではどうも濟みませぬ。

作兵　かう見たところ、百にもふめねえ内拵への古巾着、一兩ぢやあ婆さんは仕合せだ。

ト鳴物になり、下手より巾着切り隼の高吉、若衆鬘、着流し前掛、雪駄、商人丁稚の装にて、出來り。

高吉　治郎、いゝ仕事をしたな。

治郎　田舍者を切つて、兄いにそつくら貰つたから、何ぞ手前に奢つてやらう。

作兵　いや、まるで大店の小僧さんだな、形は小粒でもひりゝと辛いと、大抵な者は一杯喰ふな。

高吉　御店の小僧も今朝ッから、まだ一朱も稼がねえが、さうして何を仕事をした。

治郎　むゝ、此の巾着よ。（ト件の巾着を見せる。）

高吉　やあ見た樣な巾着だ、ちよつと見せねえ。（ト受取り、よく／＼見やり、）や、こりやおれのおつかあのだ。

忠次　なに、お袋のだ。奴のお袋はどこのものだ。

高吉　八王子の初親分の所に、去年から奉公して居ます。

忠次　おゝそれぢやあ手前を搜すと言つて、お袋は江戸へ來たのだ。

高吉　えゝ、それぢやあおつかあは來ましたかえ。

伊兵　慥な事は知れねえが、目尻の下つた足許の惡い、白髮交りの婆さんだ。

高吉　目尻が下つてゐりやあ違えねえ。（ト巾着の中より書附を搜し出し、）此の書附を讀んでくんねえ。

作兵　おい／＼。（ト高吉より受取り、）『武州八王子宿博勞初右衛門方同居、作兵衛後家おくろ』としてある。

高吉　おゝそれぢやあおつかあが、行倒れの用心に入れて置いたに違ひねえ。おゝ、おつかあだ／＼。（トいきなり治郎吉の胸ぐらを取り、）やい、よくもおつかあの物を切りやあがつたな。

治郎　お前のおつかあとは知らねえから、切るのは生業で仕方がねえ。

高吉　えゝ、生意氣なことを言やあがるな。

ト治郎吉を打ちにかゝるを、忠次作兵衞おつん止めて、

忠次　これ高、そりやあ手前が悪い、治郎が是を切つたればこそ、お袋が知れたのだ。

作兵　か　して皆が止めるから、おとなしくして默つてゐねえ。

高吉　いゝや、おらあいやだ。此の山下で隼と異名をとつた高吉だ。先祖へ對しておらあ濟まねえ。

忠次　これさ、ぱつぱと物を言ふな。盛り場だ、靜かにしろ。

高吉　それでも、あんまり馬鹿にするから。

忠次　止せと言つたら、止さねえか。（トきつと言ふ。）

治郎　それ見ろ、ざまア見ろ。

高吉　なに、ざまア見ろ。

ト立ちかゝらうとするを、作兵衞止めて、

作兵　これさ、今納まつたばかりぢやあねえか。

忠次　まあ、おれに預けて仲直りをしろ。（ト是をおつん聞き附け、）

つん　お仲直りに、甘酒を上げませうか。

忠次　馬鹿言ひねえ。餓鬼は餓鬼でも甘酒ぢやあ。

作兵　こゝ迄おいでに御店の小僧が、うんとは來ねえ大酒飮み。（ト財布へ手を入れるを、道具替りの知せ、）一杯やらうよ。

ト甘酒の錢を拂ふ。此模樣よろしく、輕業の鳴物にて道具廻る。

（上野寒松院奥座敷の場）――本舞臺一面の平舞臺、上手九尺の床の間、三幅對の軸をかけ、此次一間違ひ棚、此下一面の壁、上下一間の附屋體、獅子の狂ひを畫きし杉戸、高麗縁の薄縁を敷詰め、總て上野寒松院奥座敷の體、爰に所化兩人、鼠の衣にて煙草盆菓子器などを運びゐる。此見得音樂にて道具止る。

○　何とけふの讀經位、心の散つたことはござらぬの。

△　さうぢやとも〳〵、神原樣は御老女が御代參に御出なさるが、此頃はお腰元の小萩樣が御出ゆゑ實に御經は上の空ぢや。

○　こなたは施主と向ひ合ひで、十分に顏が見られたが、わしは丁度裏向きだから、まさか振返るこ

△　とも出來ず、向う側の者が經の上へ涎をたらすを見たばかりぢや。

△　嘸今頃は御廟前で嚏をしてござらうが、出家と立派に文字には書くが、小萩殿の姿を見ては、煩惱の雲晴れやらずぢや。

○　もう御墓參も濟む時分ぢや、噂話は禁制々々。

ト三絃入り音樂になり、下手の杉戸を明け、小姓袴裝にて出來り、下手に辭儀をする。此跡より千種片はづし奥女中の拵へ、神原の腰元小萩、島田鬘にて出來る。

小姓　あれへお通り下さりませ。

千種 小萩　眞平御免下さりませ。

ト上手へ通る。所化兩人杉戸の内より高抔へ茶碗を載せ、持つて出で、兩人の前へ置く。

○　今日は御苦勞樣でござりました。

○　お構ひ申しもいたしませぬが、ゆつくりと御休息遊ばしませ。

△　御墓參りの濟みし趣きを、ちよつと院主へ傳へませう。

小萩　いえ只今あれなる御小姓と、院主さまへ御目通りいたし、御禮を申し上げました。

○　はゝ左樣でござるか。さやうなら御ゆるりと遊ばしませ。

ト所化兩人子役辭儀をし、下手へはひる。

小萩　事なう御法事濟みましたれば、民が是へ戻り次第、御暇いたすでござりませう。

千種　その民が戻りましたら、お廻りの所がござりませうな。

小萩　御代參の御役目ゆゑ、別に他へ寄ります所は。

千種　さあ、その御代參故猶更に、お寄りなさらねばなりますまい。

小萩　そりや、何れへ參りまするな。

千種　さ、不忍邊にお待ち申して、あなたにお目通りしたいと申す、御用のお方がござりませうがな。

小萩　え。（トぎつくり思入。）

千種　何もお驚きには及びませぬ。（ト合方になり、）あなたはお隱しなされませうが、又女子は女子同志とやら、よく／＼あなたのお胸の内をお察し申すと、お氣の毒故、それで申上げました。

小萩　是は以ての外の仰せ、誰が何と申しましたか、左樣な事は一向に覺えのない事でござりまする。

千種　そりやお覺えはござりますまいが、御佛參の芝居見物、ないとは限りもござりませねば、お心おきなくあなたの御用を、お足しなされたがよろしうござります。

小萩　その御詞は忝けなけれど、どうも形のない事は申されませぬわいなあ。

ト爰へ下手杉戸の内より、以前の小姓出來り、

小姓　只今小萩さまへ御目にかゝりたいと、女中衆が參られました。

小萩　何れよりの御使ひか、只今民が戻りますまで、どうぞお待たせ下さりませ。

小姓　はゝあ。（ト下手へはひる。）

千種　お女中樣とあれば、猶の事、是へお通しなされませ。

小萩　いえ／＼民に逢ひますれば、委細の用事がわかりませう。

ト下手より以前の○の所化先に、跡よりお幸島田鬘前垂料理屋下女の拵へにて附添ひ出來り、

○　お供の衆の戻る迄控へさせませうと存じましたが、是非お目通り願ひたいと、是へお出でござります。

お幸　是は憚りでござりまする。

ト是にて所化小姓辭儀なして下手へはひる。お幸下手へ佇び、

おや、あなた、よい所でお目にかゝりましたわいな。

トなれ／＼しく言ふ。小萩心遣ひのこなし。千種是を悟り、

千種　さあ／＼遠慮なく、是へおいでなさんせ。

お幸　はい〳〵。あなたにお屆け物がござりまして、急いで是へ上りました。
小萩　あゝもし、民が戻りますまで、どうぞお控へ下さりませ。
千種　あもし〳〵、其御遠慮には及びませぬ、外に人目もないお座敷、さあそのお屆け物をお出しなさんせ。
お幸　はい〳〵、あなたへ差上げましてもよろしうござりますかえ。
千種　はて、よいどころではござんせぬわいな。
　　ト此内小萩は出しては惡いといふこなし、お幸心附かず、帶の間より手紙を出し、
お幸　此のお手紙の御返事を、どうぞお聞かせ下さりませ。
　　ト出すを千種受取り、上書を見やり、
千種「小萩さまへ才次郎、」それ御覽じませ。あなたのやうに御心配性では、奧勤めは出來ませぬぞ。さあ、こんなお文の來る程でお隱しには及びませぬ。すぐ御覽なされませ。
　　ト小萩の前へ出す。小萩面目なきこなしにて、
小萩　誠にあなたの前へ對し、顏向けが出來ませぬ。
千種　あれまあ、まだ堅苦しい、こんな事はお互ひに御代參の役德でござんすわいなあ。もウしお女中

さん。

お幸　左様でござりますとも、わたくしどもとは違ひまして、不斷はお堅いお屋敷故、かういふお樂しみがござりませんでは、實に御壽命が縮まりまする。

小萩　千種樣が御親切なるそのお詞を、聞くにつけても穴へでも這入り度い、蓬萊屋さんの女中衆迄へ面目なうござんすわいな。

千種　あなたはまだ初心故、その樣に思召すが、その言譯より少しも早く、お暇乞ひして忍ケ岡の、あなたが戀の、それ、な、池の鯉鮒眺めながら、彼の蓮茶屋にて御用の御方と四方の詠めのお話しを、遊ばしたがようござりませう。

お幸　それはよい思召し、あなたのお詞二つには、あちら樣の御返事を、早く歸つて申しませうから、お文を御覽下さりませ。

小萩　それぢやというて、まさか爰では、(ト文を額へ當て、恥しきこなし、)

千種　えゝ、ぢれつたい、何の恥しい事がござんせう。御屋敷中で誰一人思はぬ者なきあのお方、あなたに手柄と申すもの、もうお讀みなさるに及ばぬ。今直においでゆゑ、早う歸つて言うて下さんせ。

お幸　左樣なればお先へ參り、お待ち申してをりませうか。
小萩　さあ、それでもあつかましいゆゑ。
千種　はて、よいというたら、ようござりますわいな。
小萩　千種さま、何も申しませぬ。有難うござりまする。
千種　あゝ、やう〳〵本音をお吹きなされた。
お幸　左樣なれば、一足お先へ。（ト此内小萩文を開き見て）
小萩　只今直に參りますと、どうぞおつしやつて下さりませ。（ト恥かしさうにて言ふ。）
お幸　はい〳〵、畏まりましてござりまする。あなた、眞平御免下さりませ。（トいそ〳〵下手へはひる。）
千種　さあ、もうお文は癡話の種として、早うお支度をなされませ。
小萩　さやうなれば仰せに從ひ、是より直に蓮茶屋へ。
　　ト兩人立上る。此時上手より以前の△の所化出來り、
△　只今是へお屋敷より、御二方御入來にござりまする。
　　ト言ひ捨てはひる。
千種　何も今日お屋敷より、お出のお方はなき筈なれど。

小萩　でも、折惡い事ぢやなあ。

ト心遣ひのこなし。合方になり、上手杉戶の內より馬淵運藏、羽織袴大小、次に戶倉傳八同じく袴大小にて出來り、上手へ住ひ、

運藏　いや、これはよい所でお目に掛つた。

傳八　實は最早御歸邸なされたかと、心配いたして參りました。

千種　只今御法事濟みましたれば、御墓所へ參詣いたし、

小萩　只今戾りますところでござりまする。

運藏　左樣でござつたか。然らば最早、御用濟みでござるな。

小萩
千種　はい、左樣でござりまする。

運藏　いや、それは重疊、實は我々兩人にて、當院へ罷り越せしは。

傳八　ちとお屋敷では申しにくき、密談故にまゐつてござる。

千種　して、御用の趣きはな。

運藏　小萩殿へ內々にて、申し談ずる儀がござる。

ト是にて小萩才次郎の事を心遣ひのこなしにて、ぎつくりなし、

小萩　して、私へお話しとはな。

傳八　よろしく御發言下されい。

ト合方きつぱりとなり、

運藏　外の事でもござらぬが、當殿樣には日頃より、小萩殿を御執心にて、豫て老女へお話しある由、然る所他の女中と違ひ、いと堅固なる御性質に、若し此事申出し整はぬ其時は、上の御氣に逆らふ道理と、一日々々日を延ばし、是迄は參つたが、扨さうなると猶の事、まだか／＼と御催促、御殿の内にて斯樣な事を、申すも如何と存ぜし故、老女に篤と相談の上、此御代參を幸ひに他聞のあらぬ寺院にて、竊にお話しいたすのぢやが、御承知あらば今宵より、御側へ上りお寢間の御伽一足飛びの御立身ゆゑ、お受けなされては如何でござるな。

傳八　しかのみならず殿樣の、御意に從ふその時は、御身ばかりか繁之丞殿の、御出世も目の當り、まして況んや御身にもお羽振りよく、心の儘に言ふ目の出るは知れし事、それに奧樣へも此事は、内内申上げし所、小萩なれば仔細なき故、早速上げよと仰せられしも、そこは日頃お氣に入りの小萩殿故、御機嫌よく心にかゝる雲晴れて、表向きなる御部屋の身の上、實に結構な事でござる。

運藏　それに上には御案内の御性急なる御氣質ゆゑ、兩人の歸邸をお待兼ねなれば、只今御返事下され

て、御承知なれば殿樣より、直御宿許へ御沙汰あらん。

傳八　御身の出世になることなれば、早く御受けを、

運藏
傳八　なさるがよからう。

ト此内小萩心苦しき思入、千種心遣ひのこなしにて、

千種　御二方の御入來は何事なるかと存じましたら、小萩殿の御出世の事、此樣な出世はござりませぬが、御老母並に繁之丞樣もござれば、こりや卽答も出來ますまいが、それともあなた今爰で、（ト小萩へ思入あつて、）こりや御返事は出來ぬ筈、一旦お屋敷へお戻りありて、その上の事でござりませうな。

小萩　まあ、左樣でござります。

運藏　これ〳〵、まあ左樣では安心出來ぬが、若し此事御不承知の時は、隨分疳癖のお強いお上、急に御身や繁之丞殿へお憎しみがかゝるまいとも申されぬ、是は御承知なされた方が、なう戸倉、御爲めにならうと思ふがの。

傳八　左樣々々これが町家より上りし者なら、其儘暇を願ふ時はそれ迄のことでござるが、主家來の御間柄では、こりやちと不爲でござらうがな。

ト小萩は俯きゐるゆゑ、千種小萩の心を察し、

千種　さあ、それでござりますから、よいと御挨拶も申上げられず、又お斷りも申上げぬは、これは小萩殿のせつなき場合、かうなすつては如何でござりまする。只今一存の御挨拶も出來ぬことでござりませうから、一旦お引取りなされまして、その上御挨拶いたしましたらよからうやうに思はれまする。小萩樣、どんなものでござりますな。

小萩　おつしやる通り今爰で、御返事もなり兼ねますれば、左樣なされて下さりませ。

運藏　然らば左樣いたさうが、必ずお斷りは不爲でござるぞ。

傳八　そこの所は御承知あつて、どの道御受けいたされよ。

千種　それはもう私も、承知いたしてをりますれば、よう當人へも傳へまする。

運藏　然らばよきに、

傳八
運藏　お賴み申すぞ。

ト千種手を叩く、下手より小姓出來り、

千種　御二方の御案內、

小姓　はあゝ。

運藏　後刻拜顏。

傳八
運藏　いたすでござる。

ト合方になり、小姓案内して馬淵運藏、戸倉傳八下手杉戸へはひる。兩人跡見送りほつと思入あつて、

小萩　もし千種さま、こりやどうしたらようござりませう。

千種　さあ、どうというて殿樣より、仰せとあればどうあつても、お召仕へにならずばなりますまい。

小萩　そんならどうでも私は。

千種　なれどもそこが一つの御思案。

小萩　なに、思案とは。

千種　お受けをなさるかなさらぬかは。（トあたりへ思入あつて、ちよつと囁き、）

小萩　すりや、池の端にてとつくりと。

千種　あもし、とつくりお支度なされたら。

小萩　（形を改め、）御暇いたすで、（ト衣紋を直すを、道具替りの知せ、）ござりませう。

ト此模樣よろしく、音樂にて道具廻る。

(同　玄關先の場)――本舞臺三間常足の二重、ずつと前へ出して本庇、幅廣の式臺、向う雲母形の襖、二重の左右に間平戸を建て、平舞臺の下手白壁、金剛格子の窓、此下簓子の板羽目、下手九尺の下家、此内一間落間、向う上り段、障子を建切り、下手練塀の見切り、いつもの所鑄物の天水桶、總て前の寺院玄關先の體、式臺の端に權兵衞紺看板一本ざし、中拔草履、中間にて煙草を呑みゐる、此見得木魚入りの合方にて道具留る。

權兵　鰻屋の上りツ端で旦那のお供で待つてゐるより、お寺の方が少しはいゝが、まだ二月の半だといふに、火の氣なしの吹きツ晒しは、素だこぢやあ滅法こでえるが、冷でもいゝが一杯やりてえ。

トやはり木魚入りの合方にて、花道より小萩、召使お民、丸髷斉流し、白足袋麻裏草履、部屋方の拵へにて、小包を持ち出來り、直ぐ舞臺へ來て、

お民　おゝ權兵衞どの、まだお歸りにはなりませぬかえ。

權兵　さつき御經が濟んだから、もうかれこれお歸りだらうと首を延ばして待つてをります。

お民　お年寄りのお誂へで、日野屋へ買物に行きましたが、見世が込んで遲くなり、どんなに心配したか知れぬが、わたしをお待ちなさつてゞはないか。

權兵　そりやあさうかも知れませぬが、いつもならもう疾うに、お歸りの時分だから。

お民　まあ何にせえ、お目にかゝつて來ませうわいな。

ト式臺より二重へ上らうとするを、權兵衞袂を捉へ、

權兵　あゝもし／＼お民さん、ちよつと待つておくんなせえ。

お民　何ぞお取次でもござんすかえ。

權兵　いやお取次ではござりませぬ、ぢかにお前さんに言ひたいのさ。

お民　なに、わたしにぢかとは。

權兵　お民さん、わつちの言ふ事を聞いてくんなせえ。

お民　えゝ。（トびつくりする。合方になり、）

權兵　かう言つたらば、お前さんは定めしびつくりしなさるだらうが、戀に上下の隔てはないと言ふ程違つた身分でもなし、部屋方と折助なら大抵位は同じ事、人目があつて屋敷ぢやァうつかり口も利かれねえから、丁度幸ひ御代參の此お寺で、權兵衞に極樂往生させて下せえ。

ト袂を持つたまゝ、お民の傍へ寄るを、お民袂を振拂ひ、

お民　何の事かと思うたら、道ならぬ不義のいたづら、町家の事は知らぬけれど、掟きびしいお屋敷でもしもそんな事が知れたら、お前の身にも拘はること、ちとたしなんだがよいわいの。

トきつと言ふ。權兵衞せゝら笑ひ、

權兵　成程御挨拶は御尤もだ。掟嚴しい屋敷方、こりやかうなくては叶ふまいが、もしお民さん、さういふこなたの旦那さまは、掟を破つてゐなさるだらうね。

お民　えゝ。（トぎつくり思入。）

權兵　現在お前が取持で、小間物屋の才次郎を池の端の蓮茶屋で、逢曳きをさせた事は、ちやんと手目が上つてゐるぜ。

お民　えゝ。

權兵　ねえ、それだからお前を口說くが、若しもいやだと言ひなさりやあ、出來ねえものはそれ迄だが、おれも此儘引込まれねえから、お前の旦那の一埒を言ッ附口をする積りだ。さうしたならば主從共、安閑としてはゐられめえぜ。

お民　さあそれは。

權兵　先それよりはいつそのこと、草履取りから關白に出世をした例もあるから、此權兵衞の言ふ事を聞いてくれてもいゝぢやアねえか。

トしなだれる、お民當惑の思入あつて、

お民　言はしておけば勝手次第に、跡形もないその言ひがけ、さあそれには何ぞしかとした、證據があつてお言ひのか。

權兵　さあ別に證據はねえけれど、去年の秋の御代參も、おれが供で池の端へ、行つたがたしかな證據と言ふのだ。

お民　そりやあの時は、蓮茶屋へ、蓮を見にお立寄りで、お前もわたしもお供はしたが、出逢ひなどした覺えはないが、その時の證據といふは、何を以て言ひなさんす。

權兵　さあ、別に是といふことも。

お民　なければこなた、言ひがゝりぢやな。

權兵　それだといつて、みす〱それと。

お民　お末なれども潔白な、心に變りはござんせぬぞ。（トきつと言ふ。）

權兵　えゝ、寶の山へ入りながら、證據のねえばつかりに、こいつア一番はじかれたか。えゝいま〱しいなあ。（ト腕組みをなし、ぢつとなる。爰へ下手の口より下男白髮鬘やつし裝にて出來り、）

下男　御供の衆、お歸りの前方に、ちよつと一合つけたから、茶碗で一杯ひつかけなさい。

權兵　いや、そいつア有難へ、今直に行きますが、ちつと爰に用があるから。

下男　いや／＼今に御立になるかも知れぬ。さあ、早く一緒にござらつしやれ。

權兵　それでも少し用があるから。

下男　えゝ、さう落着いてゐられては。もし御供のお女中さま、ちよつと一杯馳走しますから、左様思召して下さりませ。さあ來なせいよ。

權兵　それでも今ちつと。

下男　えゝ、早く來なせいといふに。

ト合方になり、下男無理に權兵衞の手をとり、落間の内へはひる。お民ほつと思入あつて、式臺の角より臺所を見送り居る。合方きつぱりとなり、奥より以前の小萩出來り、あたりを伺ひ、

小萩　民。（ト呼ぶ。是にてお民二重の下手へ來る）、委細はあれで聞いてをつたが、ひよんな事になつたわいの。

お民　證據のなきを幸ひに言張りは張りましたが、滅多に油斷はなりませぬ。

小萩　まだそればかりか殿様より、此身にかゝる御難題、それは後で話さうが、して彼の御方の首尾はどうぢやな。

お民　さ、それもわたくしと行違ひに、あなたへ御文が参るくらゐ、疾うよりお待ち兼ねでござります

る。

ト此時奥にて、

○△　御立でござりまする。

ト合方きつぱりとなり、以前の所化小姓案内して千種出來り、

千種　おゝ、小萩殿はもう是へ、おいでなされましたか。

小萩　民を見に參じました。

ト千種手をつかへ、

千種　今日は種々お世話に相成りました。

小萩　方丈樣へよろしうお禮を、お傳へ下さりませ。

○△　委細承知いたしてござる。（ト挨拶なして、兩人式臺を下り）

千種　供のものは何れへ行きしか。

○　只今申し次ぎましてござりまする。

小萩　そんなら是より不忍へ。

お民　あ、もし。

ト千種心遣ひのこなしにて、小萩の袂を引く、此時權兵衞下手より出で、三人思はず顏見合せる。千種氣を替へて、

千種　不忍へおりませずと、黑門通りを眞直に。

小萩　往來はげしき廣小路も、

お民　人目の關の御成道、

權兵　お寄り道はござりませぬか。

千種　御佛參も相濟めば。（ト小萩心殘りの思入にて、）

小萩　どうでも直にお屋敷へ。（トお民權兵衞が邪魔といふ思入あつて、）

お民　はて、こゝが御奉公で。（トお民小萩へ呑み込ませるな、道具替りの知せ、）ござりまする。

ト權兵衞所化へ憚るこなし。權兵衞氣味合ひの思入、皆々よろしく本釣鐘の寺鐘にて

ひやうし　幕

ト時の鐘、風の音にてつなぎ、直に引返す。

（神原家御殿裏塀外の場）——本舞臺一面の平舞臺、上寄りに九尺土藏の横手、庇附き、土藏の窓に金

網を張り、是に續いて下手へ練塀、眞中三尺同じく練塀と見たる非常口出這入りあり、後ろ黒幕、内より見越しの松、裾通り溝の敷布、此際並びよく捨石、總て神原家御殿裏塀外の體。爰に○△の紺看板の中間弓張提灯、六尺棒をもち、立ちかゝり居る。此見得風の音にて幕明く。

○ 八ツでござい。（ト上手へ行き、六尺棒で叩き、）

△ もう一日増しに暖くなるから、時廻りも樂になるの。

○ それに當時は火事沙汰はなし、賊の氣は猶少し、ほんのお役の時廻りで、外に心配な事はない。

△ 是を廻つたら跡の半廻りは、夜明け迄抜きにして、一時づゝ寐るがよからう。

○ あんまりよくもないけれど、穩な時節だから、まあ止しとしてもいゝ。

△ 今日此頃のやうな、靜かな時が火の廻りの附目時だ。

○ それでは無常門を廻つて、部屋へ歸つて寐るとしよう。

△ 八ツでござい。（ト大きく言ふ。）

○ えゝびつくりした。大層威勢がいゝの。

△ ちよつと働らき振を見せたのだ。

兩人 八ツでござい／＼。

ト六尺棒を叩きながら、下手へはひる。合方になり、前幕の巾着切り小鼠忠次頬冠りの尻端折りにて出來り、あたりを窺ひながら、

ト眞中の練塀の下へ來り窺ふ。此時下手より犬出來り、忠次を見附け吠える。是にて袂より握飯を出しはふる、犬是を喰ふ。

忠次　濱田で飲んだ醉が醒め、べらぼうに寒くなつた。もう新助は出て來る時分だが、めつぽう遲いな。非常口の錠を捻ぢ切り、逃げ道は拵えて置いたが、何をしてゐるだらう。

トあたりへ思入あつて、練塀へ寄りかゝり、後ろ手にて引張り見る。是にて動くゆゑ頷き、

今時廻りの場合はいゝが、やりそこなやあしねえか知らぬ。

ト窺ひ居る。時の鐘合方になり、非常口の練塀を内より明ける。是にて忠次下へ避ける。内より盗賊因幡小僧の吹替へ、紺の頬冠り目許り出し、三尺帯尻端折り、白鞘の短刀を差し窺ひ出て、忠次の姿を見て、ちよつと躊躇ふ、忠次うなづき上手を見込み、

兄貴か。

ト吹替「これ」と押へ下手へ行き懸る。犬吠える故、忠次又握飯をやる。是にて犬啼きやむ。此時上

手より家老穗積兵太夫、羽織袴大小手丸の提灯を持ち出來る、兩人是を見て塀の裾へ蹲む。兵太夫目早く提灯を兩人の前へ差出す。是にて吹替、手丸を打落すを、兵太夫其手を押へ、前へ引出す。これを忠次割つてはひる。此間に吹替脱れて、逸散に花道へはひる。忠次是を見遣り、逃げにかかるを兵太夫支へ、ちよつと立廻つて忠次の襟頸をとり引附ける。此時非常口より小間物屋才治郎頬冠り尻端折り、跣足にて先に、小萩手拭を吹流しに冠り、手を引かれ出で、下手へ行かうとし、此時兵太夫に突當る。是にて上下へほぐれ双方窺ふ。是を忍び三重になり、三人世話ダンマリよろしく、此中へ忠次からみ、小萩の懷中よりはこせこを拔きとり、下手へ來て手探りにて中の金を拔きとる。三人は立廻りあつて、トゞ忠次はひり、立廻りの内件のはこせこを見物に見ゆる樣に塀の内へはふり込む。才次郎小萩は花道へ退れ行き、兵太夫はすかし見て、忠次の襟上をとり、引附けるを道具替りの知らせ。才次郎小萩は逸散に花道へはひる。兵太夫是を見送る。此模樣時の鐘の送りにて道具とまる。

(護持院原松並木の場)――本舞臺一面の平舞臺、向う屋敷町、夜の遠見、此遠見より少し前へ出して低き石垣の蹴込み、此内一面松の立木、上下練塀にて見切り、總て護持院原夜更の體。爰に仁助の夜蕎麥賣荷をおろし呼んでゐる。時の鐘合方にて道具留る。と下手より○△の仕出し兩人弓張提灯を

持ち出來り、

○　梅は咲いたが、まだ夜更は滅法寒いことだの。

△　丁度お誂へだ、一杯喰つて行かう。(ト荷の側へ來り、) 熱くして二杯下さい。

仁助　へい、畏りました。(ト蕎麥を拵へ乍ら、) まだお寒うござりますな。

○　寒いどころかわたし達は、不斷夜更しをしつけねえから、何だか軀が馬鹿になつた。

仁助　あなた方は、御遠方でござりますか。

△　牛込の者だが、不幸があつて下町へ今報せに來ましたのだ。

仁助　へい、お誂へ。(ト出す。兩人喰ひ乍ら、) それは御苦勞さまでござりますな。

○　是から先は町家だから、少しは心丈夫になるが、まだ一ヶ所恐れる所がある。

仁助　へえ、どちらでございます。

○　本所の法恩寺へ屆けに行かねばなりませぬ。

仁助　はゝあ、それぢやあ御宗旨は法華でございますな。

△　佛が大のかたまりで、饅頭などは凝り込んで、橘町の井桁屋へ誂へるくらゐだ。

仁助　それでは大方御註文は、饅頭ではござりませぬで、胡麻の牡丹餅でござりませう。

○△ 違えねえ。（ト錢を出し、）おい、錢をとつて下せえ。

仁助 是は有難うございます。お早く行つていらつしやいまし。

○ 此の蕎麥屋さんも御宗旨と見えて、蕎麥のつゆが多いやうだ。

仁助 いえ、さういふ筈はございませぬが。

○ それでも腹がだゞぶ〳〵だ。

三人 はゝゝゝ。

トやはり時の鐘、合方にて兩人上手へはひる。此合方ばた〳〵になり、花道より忠次逃げて出來り、花道にて跡をすかし見て、ほつと思入あつて直ぐ舞臺へ來り、上手を見やり、

忠次 おい、一杯くんねえ。

仁助 へい、畏りました。（ト蕎麥を拵へる、此内忠次はあたりへ思入あつて、）

忠次 甘鹽がいゝぜ。

仁助 へい。（ト出す。忠次喰ふ。仁助思入あつて、）あゝ、こりやしまつた。あそこの窓の丼を取らずに來た。（ト上手を見遣り、心遣ひのこなしあつて、）もしお客樣え。只今向うの屋敷の窓へ丼を置いて參りましたから、行つて取つて來る間、ちよつとお願ひ申しまする。

忠次　おゝ行つて來ねえとも、めつぽふ熱いから、急には喰えねえ。
仁助　それぢやあちよつと行つて參ります。
忠次　おい／＼、錢を預けて置かうか。
仁助　どういたしまして、御常談おつしやつてはいけませぬ。
ト上手へ駈けてはひる。忠次は喰つてゐる。時の鐘新内の合方になり、花道より因幡小僧新助、頰冠り、尻端折り、三尺、麻裏草履にて出來り、直ぐ舞臺へ來て、行燈の灯に上手をすかし見て、
新助　おい、忠次か。
忠次　えゝ。（ト丼を持つたまゝ上手へ飛退き、よく／＼見て、）おゝ、兄イか。
新助　何をそんなにびつくりするのだ。
忠次　今少しおぢけが附いてるから。さうして、屋敷はどうしました。
新助　どうしたといつておれの事だ、外しッこはありやあしねえ。かう見や、此通りだ。
ト財布を出して見せる。
忠次　又しめたね。
新助　當りめえよ。ちよつと待つてゐや。（ト中より百兩包みを出し、二つにねぢ切り、）さ、こりやあ今夜

の骨折りだ。（ト忠次受取りながら、）

忠次　えゝ、めつぽふあるが、是をくれるのかえ。

新助　百兩を二つにしたのだ。

忠次　何だかこつちは多いやうだぜ。

新助　多けりや手前の徳にして置け。

忠次　いや、氣前のいゝ兄ィだなあ。

新助　只取る金だ、構ふものか。

ト爰へ仁助出來り、

仁助　え、金とはえ。（ト前へ出る。新助ハッと思入あつて氣を替え、）

新助　金か、金は時の鐘のことよ。

仁助　へい、時の鐘でござりますか、大方八つでござりませう。

新助　むゝ八つか。（ト殘りの金を鼻紙で捻るを木の頭、）おれにも一杯くんねえ。

仁助　へいへい。

ト新助忠次と顏見合せ、肩で笑ふ。仁助蕎麥を拵へる。此模樣新内二挺の打合せにてよろしく、

ひやうし幕

二幕目

神原家中曾根宅の場
奥庭先於民詮議の場
（返し）小佛峠裏手拔道の場
同黑闇谷蟒河原の場

〔役名〕━━小間物屋才次郎、小萩の召使お民、曾根繁之丞、中間權兵衞、馬淵運藏、醫者藪原竹齋、戶倉傳八、駕籠舁げんこの五介、同闇の三次、杣斧右衞門、中間太介、同勘藏、家老穗積兵太夫。腰元小萩、中間竹川、曾根の下女おのぶ、奥女中千種、繁之丞母おちゑ、家中女房おふで、同おせい等。〕

（神原家中曾根宅の場）━━本舞臺一面の平舞臺、上手一間の床の間、續いて三尺の違棚、此下太鼓張の襖、腰張の壁、上手附屋體の所、向う建仁寺垣、梅の立木、下手葺きおろし玄關の横手を見せ、いつもの所肘掛窓の見切り、總て屋敷內家中住居の體、爰に老母おちゑ褥の上に住ひ、癪の差込むこな

し、これを下女おのぶ介抱してゐる。下手に家中女房おふで、おせき見舞に來てゐる。此見得合方しらべにて幕明く。

ふで　承はればこちらでも、とんだ御心配が出來まして、嘸お取込みでござりませう。

せい　不斷お世話になります代り、かういふ時にはどの樣にも、お手傳ひをしませうから、

ふで　御用があらば、御遠慮なく。

せい　おつしやり付けて下さいまし。

ちゑ　御親切にお二人共、ようお尋ね下さいました。如何なる事で娘がかゝる淫らをしましたか。夫に早く先立たれ、母の手しほに甘やかし、育てしゆゑと皆さんに思はれますのも恥かしい。長生きすれば恥多しとは、此事でがなござりませう。

のぶ　お年の行かぬお孃さまゆゑ、これは全く相手の男に、そゝのかされてのお立退き、斯ういふ事のない樣にと、お民どのをお孃樣のお附人にしてござりまするに、賴み甲斐ない不調法、あなた樣迄御持病をお起しなされてお惱みでは、旦那樣の御心配が猶一倍でござりますれば、これも何ぞの因緣とお諦めなされませ。

ふで　そりやおのぶ殿のお言ひの通り、お年の行かぬあのお子ゆゑ、お一人ならばお若い內はまゝある

事と思ひますが、

せい　御異見番に附いてゐるお民どのがありながら、此様な事を仕出かすとは、誰よりいつちお民どのが行屆かないと思はれます。

ちゑ　それゆゑ悴繁之丞が、民をお奥へお屆けして、取調べると言うたれば、程なく連れて戻るであらう。

のぶ　何れ是にはいろ〳〵と、譯ある事と存じますれば、餘りきな〳〵御心配を、なさらぬがようござりまする。

ふで　案じるよりは生むが易く、その居所も早速知れ、

せい　御内分にて何事も、輕く濟まうと思ひますれば、

ふで　必ずお案じ、

兩人　なされますな。

ちゑ　日頃お慈悲なお上ゆゑ、それが一つの頼みなれど、何につけても憎いは娘。

のぶ　いえ御當人さまよりも、お附き申せしお民どのが、不調法でござりまする。

ふで　それではどうぞ繁之丞様が、お下りになり御様子が、知れたら聞かせて下さんせ。

せい　その様子にて及ばずながら、お手助けをする心ゆゑ、どうぞ知らせて下さりませ。
ちゑ　折角おいでのお二人へ、お茶さへもまだ進ぜませぬ。
のぶ　只今お茶を入れますれば、暫くお待ち下さりませ。
ふで　いえ、お取込みの中なれば、
せい　又出直して參りませう。
ちゑ　それではどうぞお二人さん、
のぶ　失禮御免下さりませ。
ふで
せい　どれ、お暇いたしませう。
　　ト合方きつばりとなり、兩人は下手へはひる。右の合方にて花道より曾根繁之丞、繼上下、大小にて出て、直ぐに舞臺へ來り、
繁之　母上、それにおいでありしか。(ト内へはひる。)
のぶ　最早お下りにござりまするか。
ちゑ　おゝ悴、待ち兼ねました。して〳〵お上の御様子は、如何でありしか、その次第を、早う聞かせてくりやいなう。

ト是にて繁之丞肩衣を取りよろしく住ひ、

繁之　思ひがけなき妹が不埒、母上の御心配ゆゑ、早速お奥へ推參なし、附添ひをりしお民めを申受けて連れ歸り、篤と調べをいたしませうと、役人中へ願ひしが、御嫌疑かゝりし附人ゆゑ、詮議遂げざるその內は引渡す事なり難しと內意の程も實に尤も、その儀について今一つ心配な儀が出來いたし、次第によらば一命にも拘はる大事にござりまする。

ちゑ　なに、一命にも拘はる儀が、又も出來せしとはな。

ト是より合方替つて、

繁之　妹が昨夜逐電せしは不屆き至極と申しながら、若氣の至りに御法を犯し、不義を働らき身をあやまつは例なしとも申されませぬが、お手許金三百兩と菊一文字のお短刀が同じ昨夜に紛失せしは、妹が手引のものあつて、奪ひしならんと御嫌疑かゝり、一方ならぬ上の混雜、よもや妹を連出せし相手の密夫が左樣な儀を働らきしとも思はれませぬが、かゝる汚名をうけまするも、不義をなしたる妹ゆゑ、家名の恥辱拙者が不運、殘念至極にござりまする。（トよろしく思入。）

ちゑ　おゝ尤もなるその述懷、親の口から申すのも他人の前では恥ぢ入るが、若いに似合はず物堅く、忠義大事と勤むるゆゑ、子を持ちしものは誰彼なく、あの繁之丞を見習へと、家中の手本になる

と聞き、悦んでゐた甲斐もなく、不所存もの、妹ゆゑ家名を穢すは嘸残念、多分相手はお出入りの町人の内に違ひないと、人の噂を聞くにつけ、そちへ對して此母も面目なうてなりませぬ。

のぶ　そのお悔みを承り、差し出まするも失禮ながら、日頃からしてお内輪なあの孃様が盜賊の、お手引なさるゝ筈もなし、御法を破りお屋敷をお立退きになりましたも、御幼年より奥様に一方ならぬお惠みを、お受け遊ばすお身の上に、殿様よりの御内意にて、お妾様になるのをば奥様へのお義理立てゞ、相手を拵へお屋敷をお立退きかと存じまする。

繁之　あの節も申せし如く、何の功なき拙者めに、五十石といふ御加增ありしも、妹を妾になされんとお心あつての御恩賞、然るを妹が逐電なし、菊一文字のお短刀にお手許金迄紛失なし、それを存ぜずをつたるは、昨夜宿直のわが越度、さすれば今にもお上より、重きお咎めあるは必定、あれ見よ曾根は妹の蔭にて功なき加增を得たるゆゑ、忽ち祿を召上げられ、重き咎めを蒙りしは、諂ひ武士の手本なぞと、誹謗さるゝは目のあたり、それが無念にござりますれば、役目の越度を恥入りて、切腹なして相果てんと、所あを決してござりますれど、あなたに先立つ不孝の大罪、何卒お許し下さる様、偏に願ひ上げまする。（ト思入にて言ふ。）

ちゑ　いやその詫には及びませぬ。忠義の手本と言はれたに、そちが汚名の恥辱を取り、切腹するを餘

所に見て、母がながらへ居られうぞ、此身も共に自害して、冥土へ行つて亡き夫に言譯すれば潔う、そちも切腹するがよい。

繁之　すりや母上にも拙者諸共、御自殺なさるお覺悟とな。

ちゑ　老の此身に杖柱と、思ふそなたに先立たれ、何樂しみにながらへん。共に冥土へ行くわいなう。

トよろしく愁ひのこなし、

のぶ　足らはぬ身にて御主人をお諫め申すは恐れながら、今旦那樣が御切腹を遊ばす時は御隱居樣が共に御自害なされるとお覺悟ありしその御樣子、それもお上の御沙汰にて、お果てなさらで叶はずば、是非ないことでござりますれど、そのお咎めもなき内に、御親子共に御生害をなされまするはそりや御短慮、どうぞ御無事で濟む樣なよい御思案はござりませぬか。そのお詞を伺うては、お傍にをりますわたくしも、共に死にたうござりまする。

ちゑ　定めてそちも本意なからう。遠緣なれど緣者ゆゑ、行儀作法や裁ち縫ひの道を教へて貰ひたいと、亡き兩親の遺言に十四の年より家へ引取り、女子がはりに使へども、素直な氣質に末々は悴の嫁に娶せんと言ひし甲斐なくそなたにも、暇をやらねばならぬ仕儀、それが如何にも氣の毒ぢや。

のぶ　冥加に餘るお詞を伺ひまして末々を、樂しみました甲斐もなく、お二人共に御自殺をなさらで叶はぬ事なれば、お邪魔ながらもわたくしを、お供にお連れ下さりませ。二世の御縁をたのしみに嬉しう自殺をいたしまする。

繁之　いやその自殺は無益な事、我は役目の越度ゆゑ、切腹なして一家中の笑ひを防ぐ所存なるが、母は勿論そち迄が一命捨つるは宜しからず、此世の縁は薄くとも、未來の縁をたのしみに、母の介抱してくりやれ。妹はあれど不所存にて、逐電いたす程なれば、そちが只今相果てなばわが亡き跡で我菩提を、問ひ弔ふ者があらざるぞ。

のぶ　それでは此身も諸共に、冥土のお供は叶ひませぬか。

ちゑ　親子が死ねばその跡を、弔ふものゝあらざれば、そちはながらへゐてくりやれ。

のぶ　こりやどうしたらよからうか。悲しい事になりました。

　　トよろしく泣伏す。此以前下手より、家老穂積兵太夫羽袴大小にて出で、門口に窺ひ居て、

兵太　いや、その切腹には及び申さぬ。

　　ト門口を明ける。皆々穂積兵太夫を見て、びつくりして、

繁之　思ひがけない、御家老樣。

ちゑ　先々お通り下さりませ。

兵太　繁之丞殿許さつしやい。

ト合方替つて兵太夫内へはひり、上手へ住ふ。

繁之　お茶煙草盆を差上げてくりやれ。

のぶ　はい。

ト奥へはひり、茶煙草盆を持つて出で、兵太夫の前へ出して奥へはひる。おちゑ前へ出て、

ちゑ　隱居の身ゆゑその後は、御無沙汰のみにござりまするが、穗積樣にはいつもながら、御壯健にて御精勵のよし、恐悅な儀にござりまする。

兵太　お手前とても、御老後のお障りもなくお達者にて、手前も祝着至極にござる。

繁之　して御家老にはわれ〳〵が、覺悟の樣子を門口にて、お耳に入つてござりまするか。

兵太　如何にもあれより承つた。忠義一途な其許ゆゑ、役目の越度を思はれて、もし早まつた事あつては、あたら壯士をやみ〳〵と失ふ事の殘念と、忍び參つたあれなる門口、切腹なぞとは短慮の至り、まづ〳〵思ひ止まり召され。

ちゑ　不調法なる悴めを、左樣に仰せ下さりまするは、冥加に餘るお心添へ。

繁之　身の面目にはござりますれど、一命捨てねば我君へ、申譯がござりませぬ。
兵太　いやその申譯がござるゆゑ、わざ〳〵參つて止め申した。
ちゑ　なに、申譯が。
兩人　ござりますとは。（ト合方きつばりとなり。）
兵太　手前はお身も知らるゝ通り、日頃よりして圍碁を好み、昨夜出入りの小道具屋正阿彌方にて好き者打寄り、圍碁の集會ありしゆゑ、われも招かれ一二席手合せいたして夜を更かし、子の刻過ぎとも思しき頃、暇を告げて歸る途中、お馬場の裏手へ來りし折、怪しき者に出逢ひしが、若き男女の二人連れ、一人は正しく當家の娘、小萩と跡にて悟りしが、一人は連退く男ならん、外に兩人手拭にて面體深く隱せしは、これぞ金子と短刀を奪ひし賊に相違なし、然れば昨夜立退きし二人の外に兩人の曲者ありしを認めたれば、その盜賊を詮議なし、失せた金子と短刀の在所を求むるそれ迄は、命をつなぐわが證人、早まる場所ではござるまいがな。（ト思入にて言ふ。）
繁之　すりやそれゆゑに拙者めの、覺悟をお留め下されしか、外に二人の賊ありしを、御存じあつて證人にお立ち下さる御仁情、忝くはござりますれど、かゝる盜賊ある事を、存ぜずをりしはわが越度、それゆゑ御沙汰のなき内に。

兵太　いや、御沙汰のなきその内に切腹めさるはそりや犬死、盗賊あつて越度となり、その身の恥辱を思はれなば、死する一命延ばゝりて、詮議なすこそ忠義の道御加増ありし殿樣のお目鏡違ひとなる所へ、お身は心が附かれぬか。

繁之　いや、左樣ではござりませねど。

兵太　死する許りが忠義ぢやと、思ふは大きな不覺でござる。（トきつと言ふ。）

ちゑ　成程あなたの御異見は、世に有難きお心添、こりや穗積樣の仰せ通り、死を止まらねばなるまいぞや。

のぶ　そのお詞を承はり、どうやら安心いたしました。えゝ有難う存じまする。

トよろしくこなし、繁之丞思入あつて、

繁之　御家老樣の御異見や、母の諭しに死を止まり、御沙汰を待つでござりませうが、して盗賊の兩人は如何なる奴でござりました。

兵太　されば暗夜に面體を包みしゆゑに盗賊は、如何なる奴とも見とめぬが、その骨柄は三十前後、忍びに慣れたる振舞こそ、此頃諸家へ忍び込み、噂の高き盗賊の因幡小僧にあらざるかと、われは推察いたしたり。

繁之　その仰せにて拙者めも、思ひ當りし事こそあり、昨夜宿直の詰所にて聊か油斷はなかりしに、物音もなく今曉まで、お奥へ賊の這入りしを知らずにをりしも、かの曲者忍びに慣れし故ならん

ちふ　世の風說に盗賊の、因幡小僧といふものは、不思議な術を使ふとやら。

のぶ　左樣な術がござりましては、容易に知れぬその行方。

兵太　はて如何程の術ありとも、やがては掛る天の網、如何で知れずにをるべきや。

繁之　さは言へ今にも切腹の、御沙汰が上より下りなば。

兵太　手前がよしなに。（ト膝へ手を置き、しやんとなるを、道具替りの知せ、）執成し申す。

トよろしく思入。跡三人はツとひれ伏す。此模樣合方にて道具廻る。

（神原家詰所庭先の場）――本舞臺四間通し中足の二重、本庇本椽附き、眞中書院階子、上の方一間塗骨の障子屋體、正面雲母形の襖、二重の下手折廻しの本椽、廊下の心にて、後へ下げて椽側の屋體ずつと下手のつま廊下口の出這入り、此前へ梅の立木、その外庭石樹木のあしらひよろしく、いつもの所枝折の庭木戸、總て神原家詰所庭先の體、二重の上手に馬淵運藏、繼上下一本差しにて刀を傍へ置き仕ひ、つゞいて戸倉傳八同じく繼上下一本差しにて控へ、よき所に書院火鉢あり、下手に前幕

の奥女中千種、裲裝にて住ひ、合方時計の音にて道具留る。

千種　思ひがけなき昨夜の椿事、してわたくしをお表へ召されましての御詮議とは、如何なる次第にござりまする。

運藏　昨日上野寒松院へ御代參に參られしは、其許と小萩なり、然るに昨夜非常門より小萩は拔出し行方知れず、昨日同道ありしゆゑ、何か途中でその意を得ぬ怪しき事でもなかりしか、それをお尋ね申さんため、是へお招き申してござる。

傳八　傍輩同士の儀でござれば、日頃のよしみに口外はせまいと約せし事などが、ござるまいとも申されぬが、打捨ておかれぬ御家の大事、不義の逐電ばかりでなく、御大切なるお短刀と金子が紛失いたせしは、容易ならざる椿事ゆゑ、怪しき事でも聞かれしなら、包み隱さずお聞かせなされい。

千種　そのお尋ねがござりませいでも、降つて湧いたる昨夜の椿事、殊に昨日御代參に連立ち來りし小萩どのが、何ものにか誘き出され、行方知れずと相成りしは、以ての外と驚き入り、心を痛めをりますれば、胡散な事でも存じてをらば、有體に申しまするが、滯りなく相濟みし御法會の儀にござりますれば、心得難き事もなく、まして昨夜の事なぞは一向に存じませぬ。

運藏　いや〳〵それは呑み込めぬ。知らぬと言へば何事も無難と思つてござらうが、御法會濟んで歸り

がけ、辨財天へ參詣をいたすと言つて蓮茶屋へ立寄りしとある事迄も、調べし上の此詮議、包み隱すは卑怯でござらう。

千種　そは何ものが左樣なるさかしら言を申せしか、跡方もないお疑ひ、一向覺えはござりませぬ。

傳八　いや有體に申されたら、その身も疑ひかゝらうと、お隱しあるも尤もながら、當人の外迷惑のかからぬ樣にいたすのが、調べる役の寛仁大度、お家のために何もかも、包み隱さず申してしまへば、必ず惡しくは計らはねば、白狀をしてしまはつしやい。

千種　いえ、何樣におつしやつても、覺えなき身は何處が何處迄、存じませぬと申すより外に詞はござりませぬ。

運藏　すりや此樣に尋ねても、覺えはないと言はつしやるか。

千種　その御念には及びませぬ。

傳八　然らばこれへ呼出して、調べるものがござるから、その口よりして白狀を、いたした時はお手前も同罪なるが御承知か。

千種　何ものなりともこれへ呼び、どうぞ御詮議下さりませ、よもや覺えのなき事を、白狀なぞはいたしますまい。

運藏　それ戸倉氏呼び出しめされ。

傳八　心得ました。（ト下手へ向ひ）やあ〳〵御兩所、その女を引立てゝ、これへお連れなされい。

　ト下手の廊下にて、

侍二人　はあゝ。

　ト聲する。是より床の淨瑠璃になり、

〽はッと詞の下侍、なさけ容赦も長廊下酷く引出す部屋方の、お民は涙にかきくれて、詰所の縁にひれ伏せば、取卷く二人はさし控へ。

　ト此内下手の廊下口より○△の侍二人、袴裝にて前幕のお民を縁傳ひに引立て出て、下手の縁ばなへ引据ゑ、よろしく控へ、

○　はッ、大膽不敵の女めを。

△　引立てましてござりまする。

〽惡と見なせば女菩薩も、内心如夜叉と睨みつけ、

運藏　こりや民とやら、面を上げい。（ト張扇の入りし合方になり、）昨日上野へ御代參につらなり參りしそちが主人、豫て不義せし密夫あつて、然も不忍境内なる、蓮茶屋に於て密會なし、昨夜お奥へ手

引の魂膽、牒し合せし事迄を慥かに聞知るものあつて、調べ屆きし此詮議、如何程陳じ僞はるとも、最早叶はぬ上からは、有體に言つてしまへ、おのれの不義を隱さうため、附添ふ主人を唆のかし、大事を引出す憎い奴、飽くまで陳じてぬかさずば、辛き憂き目をいたさせても、白狀させねば相成らぬ。女めきり／＼ぬかしてしまへ。

〽その身も不義の疑ひも、重ね／＼の難題に、泣きはらしたる顏を上げ。

トお民こなしあつて。

お民　さあ、その樣な淫らな儀がござりましては私も親御樣から仰せつかり、お附き申した御主人故なんで打捨ておかれませう、昨夜御主人小秋樣がお行方知れずなりましたを、知らずにをつたは私の越度に相違ござりませねど、昨日上野の御代參に蓮茶屋抔へ寄りました、覺えは毛頭ござりませぬ。何より證據は御一緒においでなされし千種樣、それにござるがよい證人、此身の不義を隱さうため、御主人樣を唆かし、手引きいたしたなんぞとは、思ひも寄らぬお疑ひ、どうぞそれなる千種樣に、お問ひ合せを願ひまする。

傳八　いやさう旨くは拔けさせぬ。互に不義の樂しみは、假令どこからあらはれても、決して他言はせぬといふ、誓ひを立てあらうも知れぬ、出先きの連などを問ひ合せたとて、役に立たぬその證人

より、此方では確といたした證人も取調べある此詮議。不義の取持ばかりでなく、お手許金や短刀を盗む賊まで手引いたせし、大膽不敵の下司女郎、ほえづらかわいて知らぬとは、何處迄太いか知れぬやつめが。

〽證人ありて盗賊の、手引の調べと聞くやしさ。（トお民思入あつて）

お民　いえその樣な盗賊の手引をいたしたなんぞとは、跡方もないお疑ひ、さうしてそれは何者が、虚言を申上げましたか、ならう事ならその者に、お逢はせなされて下さりませ、

〽始終の樣子庭口に窺ふ下部權兵衞は、爰ぞと思ひしや〳〵り出で、

ト此以前下手より前幕の權兵衞出で、枝折戸の外に聞いてゐて、

權兵　おゝ、その證人は此の權兵衞、なんと動きはとれまいがな。

〽ぬつと這入つて緣先に、そら嘯くを見てびつくり、

ト權兵衞下手下に居る。お民は扨はといふこなしあつて、

お民　これで解つたお疑ひ、戀の遺恨で御主人や此身に惡名つけようと、跡方もない事のみを、そなたが申上げたのぢやな。

權兵　これ〳〵そりやあ何を言ふのだ。おのれの憂目が脱れてえとて、戀の遺恨で權兵衞が、お上へ嘘

お民　でもついた様に、言ひがゝるとは恐しい、お前は女の病犬だ。
お民　さういふこなたがしら〴〵しい、心に恥ぢて控へなさんせ。
權兵　あれ〳〵、あんな太い事を。
お民　でも、憎らしい。
權兵　えゝ、いけツぷてえ。（ト兩人爭ふ。）
運藏　えゝ、控へをらぬか。
お民 權兵　へい〳〵。（ト控へる。）
運藏　中間小者の申する事は此方にては取上げねど、小萩が不義を致せしは、お家にかゝはる大事ゆゑ取調べねば相成らぬ、口出しいたさず女めは、きつと蟄して控へをらう。
傳八　こりや〳〵權兵衞、苦しうない、證人なりと申すからは、委しき事を存じをらう。それにて逐一申すがよい。
權兵　へい〳〵、小萩の色男は、此權兵衞が知つてをれば、有體に申上げます。
運藏　なに、その方が不義者の、相手を存じてをると申すか。
權兵　然も昨日御代參の、お供をいたした私ゆゑ、委しく知つてをりまする。

傳八　して〳〵それは何者か、早くそれにて申すがよい。

權兵　へい、その不義の相手と申すは、お屋敷樣に出入の町人、神田新石町にをりまする、小間物屋の才次郎でござりまする。

運藏　すりや、小間物屋の才次郎めが、

傳八　不義の相手でありしよな。

〽不義の相手を有體に言はれて是非も泣くお民、權兵衞得たりと進み出で、

トよろしくこなしあつて、合方になり

權兵　あれ〳〵斯やうに、お民めが、泣出したのが何より證據、毎月上野へ御代參に出かける時は才次郎と出逢つて樂しむ打合せ、寒松院の本堂でお經が濟むのを待兼ねては、歸りはいつも蓮茶屋で忍ぶが岡の森蔭を、見ながら濡れる下露も、此權兵衞に聞かれては、事面倒と鼻藥の酒代をくれて山下で遊んで來いと言はれても、お家の不爲めと氣が附いては、酒も咽喉へは通りませずいつも一杯やつた積りで、上野の鐘を權兵衞が、待ち草臥れては歸りますが、取持役は此のお民、自分も男と蓮飯を喰ひちらかしの仕たい三昧、呆れたものでござりまする。

〽口から出任せ戀の意趣、晴らすを千種は怺へかね、

千種　これ〳〵權兵衞、そりや何事、常は兎もあれ昨日は此千種も小萩どのと、同道なせし御代參、左樣な淫らのない事は、わしが慥な證人ぢやが、跡方もなきその言ひかけ、慮外申すと許さぬぞ。

權兵　それ〳〵それがお前樣も、一つ穴なる古狐、穴の稻荷へ引込んで、默つておいでなせえまし。

千種　やあお民は主人の越度ゆゑ、口をつぐんで控ゆるとも、千種がおのれを許さうや。

〽覺えなき身にせき上ぐれば、

トきつとなる。此時奧より醫者竹齋好みの鬘羽織着流しにて出で、

竹齋　いや、その一條につきまして、慥な證據がこれにござる。

〽ぬつと出でたる藪原竹齋、人々これはと打見やり、

運藏　誰かと思へば竹齋老。

傳八　慥な證據がござるとは、

千種　して〳〵それは如何なる譯。

權兵　早く證據が見たいものだ。（ト竹齋よろしく住ふ。合方替つて。）

竹齋　證據は外でもござらぬが、お屋敷内の篠田方に、大病人がござるゆゑ、今朝未明に宅を出で、お馬場の脇迄參りまするど、何やらぴか〳〵草原に光るものが落ちてをれば、合點行かずと立寄つ

て取上げ見れば此はこせこ、はて何者が落せしか、主が判らば早速に屆けてやらうと存じたゆゑ中を調べて見しところ、男の方より送りたる艶書が這入つてをつたので、扨はと思ひその儘に、懷中いたし御家中で、樣子を聞きし昨夜の椿事、いざ御覽下されい。

〽差出す品は覺えある、主人が所持のはこせこに、はツと驚く證據物こなたは艶書開き見て、

ト此内竹齋懷中より前幕のはこせこを出し、運藏に渡す、お民これを見てびつくりこなし、運藏はこせこの内より文を出し開き見て、

運藏　こりやこれ昨日才次郎より、小萩の方へ送りし艶書、かゝる證據がある上は、不義を働き逐電なす、その行がけに二品を奪ひ出せしに相違ない。

お民　いえ〳〵お文の取りやりは、なされましたでござりませうが、なんで主人がお短刀や金子を奪ふ盜賊の、お手引なぞをなされませう。

傳八　やあ、まだ〳〵陳じるしぶとい女郎、かゝる證據が出る上は、それへおくのも穢らはしい、詮議の科人すさりをらう。

〽はつたと庭へ蹴落せば、得たりかしこし權兵衞が、襟上とつて押へつけ、

ト文句の通りよろしくあつて、

權兵　さあどうだい、幾ら噓だと爭つても、天道樣が見通しに、證據の出たが何より潔白、これぢや誰れが何んと言つても動きの取れぬ昨日の意趣、いやなに、昨日の淫らを吐かしてしまへ、言はにやあ爰で權兵衞が、忠義の爲めの憎まれ役、折檻しても言はさにやならぬ。

運藏　艶書の取りやり致すのを、附添ひをつて知らぬなぞと、言張りをつたづぶとい奴、權兵衞、そやつを打ち据ゑて、眞實を白狀いたさせい。

權兵　心得ましてござりますが、なんぞこいつを責むるものが。

〽見廻す後の床下に有り合ふ箒の柄を拔取り、丁度手頃と素振りなし。（トよろしくあつて、）

これお民、もう隱しても無駄だから、早く白狀してしまへ、主人に不義の取持をしたのも、矢張供先でおのれも好いた男と出逢ひ、ふざけた眞似がしたさゆゑ、よくも上野で此のおれを、いやさ、よくもおれの目をぬいて、淫らな事をしやあがつた、その返報を思ひ知れ。

〽叶はぬ戀の意趣ばらし、思ひ知れやと打据ゑる、それと知れどもさし當る不義の證據に爭ひし、千種も無念堪え忍ぶ、お民は悔しき聲顫はせ。

ト此内千種よろしくこなし、お民は權兵衞に打たれ、悔しき思入にて、

お民　これ權兵衞どの、そりや何事、わたしを捕へお前こそ、淫らな事を言ひかけて、戀の叶はぬ意

趣ばらしに、責め折檻をなさんすのぢやな。えゝ恨めしい、お前はなあ。

ト齒を喰ひしばれば、せゝら笑ひ。

權兵　へゝゝ、おのれの不義を隱さうと、又言ひかけをしやあがるか、幾ら彼是吐かしても、あれに並んだ重役の、旦那のお目が曇らぬ鏡、その淨玻璃の御前にて、本音を吐かせるそれ迄は、手前の骨が碎けるか、箒の竹がへし折れるか、腕と命の根比べ、亡者め覺悟をしやあがれ。

ト又打ち据ゑる節竹の骨身にこたへ悔しさと痛さに叫ぶ有様は、地獄の責に異ならず、見るに見兼ねて緣先へ、千種は進み聲をかけ、

千種　その折檻、まあ待つた。

ト此内權兵衞お民を責めることよろしくあつて、トヾ千種前へ出で、

權兵　なんで留めだてなさるのだ。

千種　主人の不義に是非もなく、身を蟄しては打たるれど、日頃正路なそのお民、現在昨日此千種も同道いたして途中にて、淫らな事のないといふ證人に立つ程なれば、酷い折檻見てゐられぬ。但しそなたが日頃から戀の遺恨があるゆゑに、お民を折檻しやるのか。

運藏　いや〳〵それが横合から、入らぬ贔屓の庇ひ立て、主人に不義を取持つ奴、その身に不義がない

とは言はぬ。權兵衞もつと打据ゑい。

千種　いえ主人が不義をいたせしとて、家來が不義をいたすといふ、極りし事もござりますまい。

運藏　いや主が主なら家來までも、不義働らくは理の當然。

傳八　それを留めだて召さるのは、御身も不義をさつしやれたか。

千種　何で左樣な淫らな儀を。

運藏　左樣でなくば御家のため、詮議をいたすあの女郎。

傳八　口出しせずと、控へさつしやい。

千種　えゝ、さりとては情ない。

運藏　やあ、殿の上意だ。

運藏
傳八　控へてよからう。

〽ぜひなくこらえ控ゆれば、（ト千種思入、）

權兵　どれ、もう一責め責めてやらうか。

〽思ひ知れやと振上ぐる、笞も強き續け打ち、醫者をかへてと竹齋が庭へおり立ち佛顏。

ト竹齋二重より降りて、權兵衞を留め、

竹齋　いや權兵衞どの、待たつしやい。愚老に暫時任せて下さい。
權兵　いや先生の匙先では、こいつの療治は無駄な事だ。
竹齋　いや〳〵そこが醫者は醫者、まづ〳〵愚老に任せて下さい。

〽猫撫で聲にさし寄りて、

これお民どん、さて〳〵こなたは惡い合點、主人は不義をしたであらうが、執持つた事はない抔と、今更になり未練らしく、いくら詞を飾つても證據があつてお調べが、屆いてゐればもう叶はぬ。又拙老が豚體を引かぬ先から容態を見たばかりでも知れてゐるのは、あの小萩どのは利發と言へどまだ十代の年若に、屋敷育ちの世間見ず、それが出入の町人と不義をするには附人のこなたが萬事切廻して、逢曳きさせねば出來ぬ筈、どこへ逃げたかその先を言ひさへすれば卽刻に、追手をかけて引戻し、お屋敷内にて事が濟めば、こなたも痛い目せぬだけがその身の德と言ふものぢや。今も今とて拙老がお上の容體伺ひしが、一旦妾にいたさうと思ひ込んだるあの小萩、憂い目を見せぬその内は、腹が癒ぬとの御癇癖、あのお怒りを宥めねば妹の蔭で兄御迄、どんな難儀にならうも知れぬ。そこを思はゞ有體に早く白狀するがよい。言はねば昨日同道の、千種どのまで疑ひうけ、迷惑せねばなりませぬぞ。

〽瞞すに手なしと長袖の、なが〳〵しくも言ひとけど、その行方さへ知らざれば、

ト よろしくこなしあつて、

お民 いえ、如何樣におつしやつても、全く主人が逃げました、先きは何處か存じませねば、申す譯にはなりませぬ。

竹齋 それではこれ程諭しても、矢張り知らぬと言ひ張るか。

お民 知らぬ事ゆゑ是非もなし、御免なされて下さりませ。

竹齋 えゝさりとては強情な、然らば思入れ責められて、勝手に苦痛をするがよい。

〽脉が上れば藥禮も無駄と手荒く突倒せば、笑壺に入りし權兵衛が、

ト 双方よろしくこなしあつて、

權兵 それだから先生の、匙では行かぬといつたのだ。

運藏 一と筋繩では行かぬ奴、打つて〳〵打ち据ゑい。

權兵 とてものことに引くゝり、動けぬ樣にしておいて、責めてはどうでござりませう。

傳八 おゝ、責め殺しても大事ない。くゝり上げて打ち据ゑい。

千種 いや左樣な事をなされては、お奧へ對して濟みますまい。

運藏　さあ、いらぬ口出し控へてござれ。

權兵　どれ一と拷問してやらうか。

〽襟頸取つて引立てる、折からあなたの障子の內。

ト上手の障子屋體の內にて、

竹川　いや、その拷問はなりませぬ。粗忽の折檻控へてよからう。

〽聲かけまくも奧方の賢き仰せ蒙りて、中老しづ〳〵立出づれば、

ト中老竹川裲裝にて出てよろしく住ふ。運藏傳八此體を見て、

運藏　殿樣よりの御意をうけ、詮議をいたすわれ〳〵を、何ゆゑお留めなされしか。

傳八　粗忽の折檻いたすとは、さういふ御身が過言でござらう。

竹川　我君よりの仰せつけにて、御詮議なさるはお役目にて、粗忽と申すいはれもなく、御苦勞至極に存じますれど、女中の詮議は奧向きにて致すが御家の掟なるを、一應奧へお屆けなく、責め殺しても苦しからずと、荒き拷問なされうとは、ちと御粗相かと存じまする。

〽理詰めで押せど橫紙を、破る權威に我を通し、

運藏　いやそれとても我君の、嚴命なれば是非なき事、不義をなしたる科のみなら、女任せにいたさん

傳八　が、容易ならざる二品の紛失なせしその調べ。嚴しき拷問いたしても詮議を遂げよと我君の、嚴命うけし我々を、粗忽なぞとは奇怪なり、お家のお爲にや替えられ申さぬ。

竹川　そりやもうお家の大事ゆゑ、嚴しき詮議をいたせとの仰せはあつたでござりませうが、命を取れと殿樣より、よも嚴命は下りますまい。

運藏　いやその詮議の次第により、命を斷つても苦しからずと、嚴命下りし此詮議。

傳八　高の知れたる下司女、打殺したとて御當家の、一大事には替へられぬ。

竹川　我君樣には御癎癖の募らせ給ふお怒りより、そのお詞がありしにせよ。臣たる身には後々のお爲を思ひ何事も、取計らはねばならぬ筈、御兩所樣には今日の、御命日をお忘れありしか。

運藏
傳八　やあ。（トぎつくりこなし。）

竹川　昨日上の御代參に女中が上野へ參りましたは、重陽院殿と申し上ぐる先殿樣の御忌日に相當いたすお逮夜ゆゑ、今日こそは御追善に魚鳥を放し例年の、御放生會を遊ばさるゝその當日に萬物の靈と稱する人命を、詮議に事寄せ斷ちましても、御粗相には相成りませぬか。

運藏
傳八　さあ、それは。

竹川　君命とあれば御先祖の、御尊靈に背きましても、不忠でないと思召すか。

運藏
傳八　さあ。

竹川　さあ。

三人　さあ〳〵。

竹川　奧樣よりの御内意にて、御大切なる御忌日ゆゑ、粗相なき樣計らへと仰せつかりし竹川が、お止め申せし此詮議、よもあやまりではござりますまい。

ト實に中老の役柄に、詞よどまず言ひ解けば、兩人我慢のへらず口、

トよろしくこなしあつて、

運藏　いや、その邊も心得をれど、餘りかれめが強情ゆゑ、おどしに申したこの拷問、

傳八　又奧樣は奧樣だけ、古例を守るお心づけ、御奇特の程感心いたした。

竹齋　何にもいたせ御前樣が、御執心なる小萩どの、行方知れずとなりましては、醫者も逃げ出す御癇癖。

傳八　此はこせこにて才次郎めが、仕業と知れし上からは。

傳八　早速此儀を我君へ、言上なして追手の手配り。

竹齋　かれの産れは甲州と、豫て愚老が聞き及べば、十に八九は甲州路へ、連れ退きましたと察しまする。

運藏　然らばその儀を我君へ、

傳八　お身も共々言上召され。

竹齋　左樣いたすでござりませう。

○　して又あれなる女めは。

△　如何いたすでござりませう。

運藏　それも只今我君に、伺ひし上取調べん。

傳八　先づそれ迄は竹川どの、あの女めはお預け申した。

竹川　しかと糺明いたさせまする。

竹齋　それではお奥へ。

○△　御兩所樣。

運藏　何れもござれ。

〽詞をしほに奥の間へ、皆打ち連れて入りにける。（ト運藏先に、敵役皆々奥へはひる。）

〽跡に權兵衞氣味惡く、塵打ち拂ひ立上り、

權兵　どれ〳〵、こつちも引下らうか。（ト下手へ行きかける。）

竹川　權兵衞待つた。

權兵　何ぞ御用でござりますか。

竹川　そちや何者に許されて、此お庭へは立入りしぞ。

權兵　さあ、それは。

竹川　中間風情の身をもつて、詮議の席へ差出しは、無禮至極な事なるぞ。

權兵　へい。（ト下に居る。）

竹川　奧樣よりの仰せもあれば、きつと咎めを申しつけ、詮議に及ぶ奴なれど、御大切なる御先祖の御忌日ゆゑに此儘に、許しおくのもお慈悲の御沙汰、向後かやうな事あつては、その分にはしておきませぬぞ。

權兵　それは何よりよいお裁き、お慈悲をお願ひ申上げます。

〽尻尾を卷いて逃げて行く。（ト下手へはひる。跡替つた合方になり、）

千種　小萩どのには奧樣へ濟まぬとあつて日頃より、言交したるその者と、昨夜逃げしと覺ゆれど、全

く金子やお短刀を奪ひしものは餘人の業、それを不義せし兩人の仕業であらうと疑ひうけ、不便やお民が此責苦、どうなる事かと存じましたに、竹川樣のお計らひにて、私迄が卷添への憂目を脱れましてござりまする。

竹川　これと申すも我君より、御加增ありし曾根どのを、嫉む輩の皆さかしら、さて〳〵憎い奴ではある。

　〽こもる情の計らひに、體の痛みをおし怺え、お民は庭へ這ひ出でゝ。（トよろしくあつて、）

お民　お中老樣へ申上げます。あの權兵衞は日頃より、無體な事を申しかける、人でなしめにござりますゆゑ、昨日上野の山内にて恥ぢしめやりしを遺恨に思ひ、身に覺えもない濡衣を負はせましての責め折檻、お情お慈悲のお計らひで、脱れましたは身の仕合せ、えゝ有難う存じまする。

　〽嬉し淚と悔し泣き、打混じてぞ伏し沈む。

千種　定めて左樣な事なりと、思へど此身も疑ひは、晴れぬ昨日の御代參、

竹川　やがて御家老穗積樣が、邪正をお調べなさるれば、先づそれ迄は疑ひのかゝりし民は身を愼み、部屋へ參つて休息しや。

お民　そのお詞に從ひまして。（ト立たうとして、あいたゝゝゝと體の痛むこなし。）

竹川　その様子では、一人では。

千種　どれ、介抱してやりませう。（ト下へおりようとする。お民思入あつて）

お民　あゝもし、それでは恐れ入りまする。

〽痛みを怺えて、

ト お民立上る。竹川千種はこれないたばろこなし、此模様床の三重、時の鐘にて、

ト 幕引きつけると、道具廻しにて、直ぐ引返す。

幕

（小佛峠裏手拔道の場）――本舞臺一面の平舞臺、後ろ山の張物、上の方に斜に上る山路あり、上下杉林。下手よき所にしるべの建石、總て甲州街道小佛の裏手、大戸の觀音道の體。爰に前幕の戸倉傳八半纏股引、ぶつさき羽織大小草鞋にて、中間大介、同勘藏旅裝にて立ち掛り居る。下の方に駕籠舁げんこの五介、同やみの三次、雲助にて山駕籠を下し、駕籠を勸めて居る。此見得山おろし馬士唄にて幕明く。

五介　もし御武家樣、案内村迄峠越しをさつしやるなら、安くやるから乘つてござらつせえ。

三次　もう四五町も行かつしやると、とつぷり暮れてしまふから、案内なしぢやあ越されませんぜ。
傳八　たはけ面め、日が暮れたとて武士たるものが夜道の出來ぬことがあらうか。然しわいらが賴むとあるなら、乘つてやるまいものでもないが、只今申した案内村迄道程は何程ある。
五介　道は僅かな丁場だが、爰は關所の拔道だから、晝なら知らず日が暮れちやあ、勝手を知らにやあ越されません。
三次　一町ばかりのその間は、どつちを見ても谷底で、踏み外したらそれツきり、蟒が出て呑まれると觀念しにやあなりません。
大介　そんな不氣味な所では、うつかり先へは行かれない。
勘藏　いつそ今夜は八王子へ、泊るとお極めなさいまし。
傳八　跡へ歸つて泊る程なら、此裏道へ廻りはいたさぬ。然らば道の案内がてら、駕籠を雇つて乘るといたすが、して駕籠賃は幾ら出すのだ。
五介　幾らかくらは先へ行き、命拾ひをした上で、お貰ひ申すとしておきます。
三次　旦那に幾ら貰つても、途中で今言ふ蟒に呑まれてしまへば駄目な事だ。
傳八　いや駕籠賃が極らねば、こつちもうつかり乘れぬわけだ。

大介　それよりやつぱり八王子へ。
勘藏　歸つて泊るとなさいまし。
傳八　いや兩腰をたばさみをれば、蟒などは恐れぬが、無駄な金子を駕籠賃に、貪られるのも馬鹿げた事。
　れば、爰が一つの思案ものだ。さてそち達に尋ねたいは、十七八の屋敷風の娘を連れた町人が、
　此街道を通りはせぬか、行くも歸るもそれ次第だ。
五介　それぢやあ峠へおいて來た、あの二人連れをお前樣が、お捜しなさるのでごぜえますか。
傳八　何だ、峠へおいて來たとは。
三次　今がた乘せた二人連は、十七八の屋敷娘と二十五六の町人體、てつきりあれに違ひはない。
傳八　何故又それを貴樣達は、峠へおいて參つたのだ。
五介　此裏道を女連で、通るは何れ駈落もの。
三次　關破りをしておきながら、酒手があんまり少ないから。
五介　それで峠へ、
兩人　おいて來ました。
大介　それではいよ〳〵此先きの、

勘藏　難所を越すのでござります。
傳八　然らば直に駕籠に乘り、彼等の跡を追つかければ、二人をおいて來たといふ、その峠迄やつてくりやれ。
五介　酒手次第でどんなにも、急いで跡から追つかけますが。
三次　さうして幾ら下さるか、それから極めておきませう。
傳八　はて蟒に呑まれずに、その娘さへ取返せば、蟒同樣二人にも、酒は存分飮ませてやる。
五介　酒に糸目はつけぬといふ、旦那が氣前の觸れ込みなら、
三次　そんな仕事はこつちの得手、一と骨折つて上げませう。
大介　旦那は駕籠でよからうが。
勘藏　こつちは矢張り歩くのか。
傳八　えゝ意氣地のない事を申すな。娘を首尾よく捕へれば、跡で一杯飮ませるから、わいらもその氣で追つかけろ。
五介　そんなら旦那、此駕籠へ。
三次　ちつとも早くお乘んなせえ。

傳八　然らば駕籠屋、急いでくれ。

ト駕籠に乘る。駕籠屋兩人これを舁き上げる。山おろしにて此道具廻る。

(同　黑闇谷　蟒河原の場)——本舞臺一面常足の二重六枚飾り、山組の蹴込み、花道の所、上り口、二重の上手、畫心に藁葺本屋根の辻堂、本緣附き、此下吹ぬき正面狐格子、古びたる板羽目、下の方杉の立木、うしろ谷間の心にて、此向う山又山切出しの遠見、所々に熊笹の繁み、蔦のからみし松の立木などよろしく、總て山中峠の體、山おろしにて道具留る。と鳴物打上げ、兩吟の唄、淨瑠璃になり、

〽曉の星に悟りて出し山も迷ひて入れば小佛の、峠の道もありながら裏手へ廻る朧夜や、手に手を取りて遠近の手附も知らぬ山中に、覺束なくも呼子鳥。

ト此内よき程に、本釣鐘を打込み、花道より前幕の才次郎頰冠り尻端折にて誂への短刀をさし、これに手を引かれ小萩同じく手拭ひを冠り、連れ立ち出來り、花道に留り、

才次　春とは言へど山中は、まだ雪のある谷影や、峰の氷の解け兼ぬれば、江戶の冬にも勝つた寒さ、嘸難儀ではあらうけれど、人目を忍ぶ旅なれば、どうか辛抱して下さい。

小萩　何處如何なる所へなと、連れ退いてさへ下されば、寒い位は厭ひませぬが、月はあれども朧にて行く先き知れぬ此難所、今の駕籠屋の言ふ通り、もし蟒でも出はせぬかと、それが苦勞でなりませぬ。

才次　いや、それとても駕籠屋めが、脅しに言つた詞だが、十分酒手を取りながら、それでも不足と言ひがゝり、途中で駕籠をおろすなぞとは、さりとは憎いやつらめだ。

小萩　どうぞ無難で此先の、案内村とやらいふ所へ、少しも早う着きまして安心したうござります。

才次　此難所さへ越してしまへば、追手の憂ひを脱れるから、その氣で我慢をして下さい。

小萩　お前も道を氣をつけて、轉ばぬ樣にして下さい。

才次　どれ、手を引いてやりませう。

〽寒さましらの啼く聲も、もしやそれかと谷の戸を閉めては茂る笹啼きに、經讀む鳥か觀音の、慈悲に導く辻堂へ、やう〳〵辿り月のかげ、

ト此内兩人舞臺へ來る。よき程に後ろの遠見へ切拔きの朧月を出す。才次郎上手の辻堂を見て、

幸ひあれに辻堂があれば、足を休めて行くとしよう。

小萩　ほんに地獄で佛樣とは、此事でがなござりませう。

〽思ひ大戸に二世かけし、誓ひの緣の塵ほこり、拂へば淸き極樂の蓮の臺へ法の庭、
ト才次郎手拭にて辻堂の緣の塵を拂ひ、兩人腰をかけることよろしくあつて、これよりこだまの入り
し合方になり、

才次　あゝやれ〳〵、爰迄來る道で、追手の者に出逢はぬゆゑ、それが一つの安心だが、人の通らぬ拔
道を越すといふは難儀なもの、わしさへ足がたまらぬから、嘸足の裏が痛むであらう。

小萩　駕籠から下りて爰迄は僅かな道でござりますが、もう足の裏へ底豆が出來た樣でござりまする。

才次　おゝ尤もだ、さうであらう、その代りには此先の、案内村の三軒家へ一晩泊り明日からは、通し
駕籠にて甲府迄行かれる樣にしますから、惡い駕籠屋に乘つたのだ、不承と思つてゐて下さい。

小萩　さうしてその甲府迄は、幾日かゝれば行かれます。

才次　まだ爰からは二十四五里、男の足なら二日路で道を急げば行かれるが、足弱連れの道中では三日
と思つてゐねばならぬ。

小萩　そこがお前のお產れの、故鄕とやらでござりますか。

才次　あの小間物屋の養父といふは、死んだ親父の弟にて、伯父に當れば親類中、子供がないので十
の年に、江戶へ貰はれ幼年から、神田の水で育つたゆゑ、先づ江戶ッ子も同樣だが、產れは甲府

の穀問屋、今は兩親亡くなつて、兄の代にはなつてゐれど、別家親類多くあれば、どこへ行つても身寄りの內、必ず世話をしてくれゝば、それが賴みで行きますのだ。

小萩　それは嬉しうござりますが、三日もかゝる道中に路用のお金が手薄いと、おつしやつたのがお氣の毒、僅かながらもはこせこへお金を入れておいたのを、逃げるあの折取落し、皆お前の御厄介ゆゑ、濟まない事でござりまする。

才次　いやその替りに又わしは、その場で拾つた短刀を、今朝方見れば殿樣のお守り刀と聞き及ぶ、菊一文字としてあれば、もしも路用に手支へたら、濟まぬことではあるなれど、これを途中で賣代なし、故鄕へ安々行かうから、その心配はせぬがよい。

小萩　その短刀を拾ひしは、心丈夫の樣なれど、昨夜宿直のお夜詰は兄の御番と聞くからは、盜賊人つてその品が紛失すれば越度となり、兄へお咎め母上も共に御難儀なされませう。それを思ふとその品は、手放しともなうござります。

才次　さあそれゆゑになるべくは、此短刀も賣りたくなく、人を賴んでお屋敷へ返して上げたく思へども。

小萩　それもならぬは一日も、江戶に居られぬ身の上に、もし盜賊の疑ひでもお前にかゝるその時は、

才次　十の年から十何年、養育受けた兩親に、不孝を重ね恩をあだ、

小萩　とあつてそれがない時は、役目の越度に兄上や、母上迄が嘸御難儀、

才次　それを知りつゝ此短刀、

小萩　持つて退かねばならぬとは、

才次　思へば濟まぬ、

兩人　此二人。（ト唄淨瑠璃になり、）

〽いとゞ浮世を忍び路の、言譯暗き夜の梅、互ひに晴れぬ心をば、つい遣り水の底すます。

ト此内兩人向うへこなしあつて、手を合せ詫びることよろしく、

才次　身の出世ゆゑ殿樣の、お妾になるその時は、兄御を始め御老母も、御安心とは知り乍ら、一旦堅く言ひかはし、末は夫婦と頼みたる、こなたを手活けにながめさせ、餘所に見るのが悔しさに、大恩のある養父母を捨てる心になるこの身。

小萩　そりやわたし迚も同じ事、七つの年にお姫樣のお相手役に召出され、十何年と奥樣の御恩になりし身の上が、如何にお許しあればとて、御恩を仇に殿樣のおてかけなぞになられませう。

才次　親の許さぬいたづらは、せまじきものと知りながら、

小萩　何んの因果で此樣に、お前がいとしうござんすか。
才次　掟嚴いお屋敷を命にかけても誘ひ出し、
小萩　添ひとげたいと思ふのも、出雲とやらで結ぶ緣。
才次　月下の神が赤繩を、
小萩　つなぎしものか山中に、
才次　凍る寒さも苦にならず、
小萩　二人連立つ嬉しさは、
才次　是が戀路の、
兩人　初旅ぢやなあ。
〽まだ春寒き山梨子の花に情なき風ぞ物憂き。
ト唄淨瑠璃の上げにて、兩人傍へ寄添はうとする、此時山おろしはげしく、ばた〳〵になり、上手より杣の斧右衞門筒袖、達附裝にて斧を擔ぎ、逃げて出來り、兩人を見て、
斧右　むゝ。（ト倒れる。これにて兩人びつくりして、）
小萩　あれえゝゝゝ。

ト才次郎へ縋る。ト才次郎月明りにすかし見て、

才次　何も驚くことはない。所の木樵が山からでも、落ちて氣絶をした樣子。

小萩　さういふ事なら呼びいけて、助けてやりたうござりまする。

才次　心が附いてくれゝばよいが。

ト傍へ立寄り、斧右衞門を抱き起し、介抱する事よろしくあつて、

これ、所の衆、心を慥に持たつしやい。

小萩　水を一と口あげたいにも、勝手わからぬ此山中。

才次　いや〳〵どうか氣が附きさうだ。これ、所の衆、氣をしつかりと持たつしやい。

ト呼びいける。これにて斧右衞門心附きあたりを見て、

斧右　はい、もうよろしい、大丈夫ぢや。やれ〳〵怖や恐ろしや、よく親切にこなた衆は、介抱をして下された。

ト手拭を出し汗を拭ひゐる。

才次　さうして何でこなたには、是へ氣絶をなされたか。

小萩　お見うけ申せば御持病の、起りし樣でもござりませぬ。

ト是より替つた合方になり、

斧右　はい、わしは直此麓に居る斧右衛門といふ木樵だが、今日三人で山へ出て薪を切つてゐる内に、深入りしたのでわし一人。取残されて日を暮し、夜道を急いで下る道、今此先の山間で、蟒に逢ひすんでの事、吞まれる所を薪を捨て、やうく逃げて來ましたが、こなた衆二人の居るのを見て、やれ嬉しやと氣がゆるみ、息を切らして倒れたが、お蔭で命を助かりました。

ト思入にて言ふ。

才次　そんなら今方駕籠舁の、話した通り此山に。

小萩　あの蟒がをりますか。

斧右　ゐるのなんのと此峠の、下は名代の蟒河原、毎年人が二三人吞まれて死ねば夜に入つては、土地のものさへ通りませぬ。

小萩　そのお話を聞きましては、もう一と足も此先きへは、足が竦んで行かれませぬ。

才次　私共は此先の案内村迄參りたく、夜道をかけて此峠へかゝつて難澁いたすもの、どうか無難に越されまする、替つた道はござりますまいか。

斧右　いや、道とては外にないが、今こなた衆が爰にゐて、わしが命を捨てる所を助けてくれたその禮

に、今夜一と晩連れて行き、宿をするから泊らつしやい。
才次　さうしてあなたのお宅といふは、
小萩　どちらの方でござります。
斧右　直き此先の崖道を、四五町下りればわしの内ぢや。（ト此時小萩向うを見て）
小萩　麓の方から提灯の、明りがちら〳〵見えまする。
才次　もしや、二人の追手では。
斧右　や。
才次　いえなに二人がをつてお前樣に、樣子をお聞き申したので、命拾ひをいたしまする。
　ト山おろしきつぱりとなり、花道より以前の駕籠舁げんこの五介、同やみの三次提灯をつけ山駕籠を擔ぎ戸倉傳八これへ乘つてゐる。跡より中間大介、同勘藏附いて出來り、舞臺へ來る。これにて才次郎小萩は顏を背ける。中間大介、勘藏傍へかけ寄り、
大介
勘藏　おゝ、二人とも爰にをつたか。
小萩　こりやもう、爰には。（ト逃げにかゝるを、中間一人づゝ捉へ）
大介
勘藏　どつこい、逃がしてつまるものか。（ト此内駕籠屋も駕籠を下し。）

五介　野郎め身動き、

五介
三次　しやあがるな。

卜よろしく取卷く。才次郎南無三といふこなしにて、伴の短刀を懐へ隱す。戸倉傳八駕籠より出て、

傳八　素町人の分際で、殿御執心の奥女中を連れて逃げる憎いやつ、繩打つて引く、覺悟いたせ。

卜これを聞き、

勘右　さては二人は追手のかゝる、駈落者でござつたか。

才次　見付かる上は尋常に、もう逃げ隱れはいたしませぬ。どうぞお繩を打つ事は、お許しなすつて下さいまし。

五介　いや、さう言つて氣を弛させ、逃げるはそつちの手であらうが。

三次　駈落者を捕へるは、不斷手馴れたおらッちだ。

五介　滅多にその手を、

兩人　喰ふものか。

傳八　そやつは兎もあれ、大切な、女は直に駕籠へ入れ、繩でからげて取逃がすな。

大介
勘藏　心得ました。

ト兩人にて無理に小萩を山駕籠へ入れ、繩にて體を駕籠へからげ附けてゐる。

才次　縛るとあればもうこれまで。

ト駕籠屋二人を突退け、逃げにかゝる。傳八これを逃がすまいとごつちやの立廻りになり、トゞ過つて才次郎は後ろの谷へ落ちる。斧右衛門此體を見てびつくりして、

斧右　やゝ。こりや若いのは谷へ落ちたか。（ト小萩これを聞いて、）

小萩　なに、才次郎樣が谷底へ。

傳八　跡に構はず、急げ〳〵。

ト山おろしになり、駕籠屋二人、駕籠を舁き、傳八中間附いて花道へ引返してはひる。跡に斧右衛門呆れしこなしにて、

斧右　一と目見るより女を連れ、駈落者とは氣が付いたが、命の禮にわしの内へ泊めてやらうと思つたも、追手の爲に娘はつかまり、男は谷へ突倒され、わしの代りに蟒に呑まれて死ぬに違ひない。やれ、氣の毒な事だなあ。

ト此時山おろし烈しくなり、斧右衛門後ろの谷を覗いて見て、

あれ〳〵向うの谷間から、鏡の樣な目を光らせ、こつちを目がけて來る樣子、わしもうつかり爰

には居られぬ。いや、南無阿彌陀佛々々。

ト斧を擔ぎ、逸散に花道へ逃げてはひる。是にて道具廻る。

(同黑闇谷蟒河原の場)——本舞臺後ろ一面の岩組、是に熊笹生茂り、所々に蔦の絡みし松杉の立木あり。上下切立ての岩の張物にて見切り、平舞臺は一面の谷川、流れの布を張り詰め、所々に大石を大分に轉がしあり、總て谷底河原の體。東西の窓ぶたをおろし、水の音にて道具留る。とこれより大薩摩になる。

〽夫萬山翠りして、峨々たる巖千仭の底に漲ぎる谷川や、高嶺の嵐谺して、早瀬に押され巖石の流るゝ音ぞ凄じき。爰に年經る全身の苔むす大蛇寶劍の、奇特に依つて惱亂なし、炎に等しき息を吐き、狂風山野に吹き起り、眼の光り稻妻の雲を貫ぬく有樣は恐しくも又物凄し。

ト此切れにて山荒れの鳴物になり、正面の崖の熊笹の茂みより、誂への大蟒、頭を出して口を開き、火炎を吐いて苦しむこなしあつて、のたうち廻り、トゞ頭を引込ませ、上手の崖の所へのたくり行く。これにて正面の崖へ胴中の所出る。よき程に胴中を割き、才次郎蟒に吞まれし好みの拵へに

て短刀の白刃を抜き、持ち出で崖より下へ落ちる。これにて蟒は狂ひながら、上手の岩蔭へはひる。

ト嬉しき思入にて流の水を呑み、大石へ縋り、起上りほつとこなし、これにて鳴物止んで、本釣鐘を打込み、跡凄味の合方になり、

才次　嬉しや、命が助かりしか。

蟒取りが蟒にわざと呑まれて腹を割き、退治る話は聞いてゐたが、その用意もなく蟒に呑まれて命を助かりしも、昨夜拾ひし短刀の菊一文字を懐へ、隠して持つてゐたゆゑか、毒氣の爲に惣身は熱して自由に動かぬが、今方峠で出逢つたる、斧右衛門といふ杣を便り、身の養生をした事なら、達者になれぬこともあるまい。どうか無難に本復して、元の體になりたいものだ。

ト此時稲光り、雷の音になり、才次郎きつとこなしあつて、

年經る大蛇が死ぬる時は、雷鳴ありといふ事は、物の本に記してあつたが、今時ならぬ雷鳴は、ハテ爭はれぬ。

ト空を見上げるを、木の頭、

ものだなあ。

ト此模樣雷の音稻光りにて、

幕

三幕目

龜井戸神原下邸の場
押上土手茶屋の場
（返し）小梅川〆切堤殺の場

（竹本連中）

〔役名――修行者齋心實は小間物屋才次郎、因幡小僧新助、神原造酒之助、中間權兵衛、馬淵運藏、戸倉傳八、腰元野菊、尼妙林、中間三平、植木屋寺島の松、同押上の竹、醫者籔原竹齋、家老穗積兵左太夫。腰元小萩後に妾小萩、奥女中千種、小萩の召使お民、女小姓房次、小尼妙眞、竹川の召仕おかつ、腰元桔梗、同尾花、お民の母おかや、中老竹川等。〕

（神原家下邸の場）――本舞臺三間の間平舞臺、向う上手一間床の間好みの掛物、籠の花活に山吹を活け、續いて一間袋戸棚、此下違棚、下手一間杉戸、上の方折廻し障子屋體、下の方廊下の出這入り、下座の前中窓のある板羽目、此前に鐵網の行燈、總て神原家下邸中老部屋の體、下手廊下口に野菊片はづし奥女中の拵へ、島田鬘の腰元にて立掛り居る。おかつ丸髷鬘部屋方の拵へにて煙草盆を拭ひゐる

此見得常の唄にて幕明く。

野菊　これかつや、旦那は何處へおいでなされた。
かつ　奥樣よりお召しにて、お手水をお遣ひなされて、直にお上りなされました。
〇　御中老竹川樣を、奥樣よりのお召しとは、何の御用でござりませうな。
△　誰か昨夜粗相でもいたしたものはござりませぬか。
野菊　此御用は外でもない。小萩どのゝ事であらう。
〇△　小萩どのゝ事とは。（ト上手屋體へ思入あつて、）
野菊　大きな聲では言はれないが、お前方も知つての通り、小萩どのは小間物屋の才次郎と密通して、その上竊に非常門から夜に紛れて逃げたれば、是が外の者ならば、どの樣な仕置に逢はうも知れぬが、殿樣が御執心ゆゑ、宿へも下げず御中老の竹川樣へお預けにて、妾になるを得心なれば、罪を許してやるとの仰せ、何と器量のよい者は、その身の德でござりまするな。
〇　さう言ふ事なら小萩どのは早く御意に從うて、お妾になつた方が、よさゝうなものでござりまするに。
△　言ひかはせしとは言ひ乍ら、生死の知れぬ才次郎へ、義理を立て殿樣に從はぬのは濟まぬわけ。

野菊　私ならば二つ返事で直に御意に從ひますのに、今日御中老がお召しになつたは、從ふ樣に奥樣からお頼みだらうと思はれます。戀の叶はぬ所から、兎角に御前のお氣が荒く、お附きの衆が迷惑いたすと申す噂でござりまする。

○　成程左樣でござりませう。昨日もお小姓の林彌殿が、差し控へになりましたが、

△　今日も御茶道の珍才殿が何の粗相をいたしたか、しくじりましたと申す事。

かつ　そのお噂を私も承りましてござりますから、旦那樣のお身の上に、何事もないやうにお初もどきで觀音樣へ、お願ひ申して居りまする。

野菊　そなたが信心しやるなら、觀音樣より天王樣を、信心したらよからうに。

かつ　そりや何故でござりまする。

野菊　はて唐茄子が好きだから、よい〳〵にならぬやう。

かつ　又悪口をおつしやりまする。

ト合方きつぱりとなり、下手廊下口より竹川、千種奥女中の拵へにて出來る。下手にて、

竹川　さあ、お這入りなさりませ。

千種　まづ〳〵お先へ、

かつ　おゝ、お下りでございましたか。
野菊　只今かつに承はりましたが、奥様よりのお召しと言ふのは、
〇　何か御心配な事では、
三人　ございませぬか。
竹川　いえ心配な事ではございませぬ。
野菊　それは宜しうございました。實は何の御用かとお案じ申してをりました。
竹川　有難うございまする。
千種　今お年寄の槇の尾様がお前方が見えぬと言うて、お尋ねなされてゞございました。
野菊　それでは何か私共に、御用でもござりますか。
〇　女子同志は寄り合ふと、ついお話が長くなり、
△　御用の間をば缺きますゆゑ、槇の尾様に叱られます。
千種　何か御用がありませうから、早くおいでなされませ。
野菊　左様なれば又後程、お奥でお目に、
三人　掛りませう。

ト合方きつぱりとなり、三人辭儀をして下手廊下口へはひる。竹川千種よきところに住ひ。

竹川　これかつや、竹齋様はまだお見舞なされぬか。

かつ　へい、まだお見舞はござりませぬ。

竹川　お奥でお目にかゝつた時、これから見舞ふとおつしやつたが。

千種　紅梅殿が風氣にて、お願ひ申すと言うたから、お寄りなされたかも知れませぬ。

かつ　それではちよつと見て參りませうか。

竹川　いえ〳〵それには及ばぬわいの。

ト合方調べになり、廊下口より醫者藪原竹齋羽織着流しにて出來り、

竹齋　御免下され。

かつ　竹齋様がいらつしやいました。

竹川　さあ〳〵これへお通り下さりませ。

竹齋　最早お下りでござりましたか、紅梅殿が風邪氣で、見てくれと申すので、大きに遲くなりました。

千種　大方左様とわたくしも、お噂いたして居りました。

竹齋　左様でござつたかな。

ト竹齋眞中よきところへ住ふ。おかつ茶を出す。

竹川　かつや、小萩殿をこれへ。

かつ　畏りました。（トおかつ立上り、上手屋體へはひる。）

竹齋　いつも乍らこなたのお茶は、結構な茶でござる。

竹川　そのお茶は奥樣から、頂戴いたしましてござりまする。

千種　小萩どのも竹齋樣のお骨折で、思ひの外早く治りましてござりまする。

竹齋　元より大した病ひでなく、恐怖いたして發せし病、最早御全快でござるから伺ふにも及ばぬが是よりお表へ參るゆゑ、御前がお尋ねあつた時、容態を申さねばならぬ。

ト合方きつぱりとなり、上手屋體より小萩振袖、病人の拵へにて出來り、上手へ住ひ、

小萩　竹川樣お下りでござりまするか。

竹川　只今下りました。

小萩　竹齋樣には毎日のお見舞。御苦勞樣にござりまする。

竹齋　早速の御全快でよろしうござる。

竹川　これと申すも竹齋樣の全くお蔭でござりまする。

竹齋　實は殿樣より御内意ゆゑ、同僚とも相談いたし、調劑をいたしましたお藥の効驗が見えまして、愚老に於ては大慶至極、最早お藥にも及ばぬが、ちよつとお脈を伺ひませう。

小萩　左樣ならば御覽下さりませ。

ト合方きつぱりとなり、竹齋小萩の脈をみることあつて、

竹齋　全く御平脈にござれば、おなかは見るに及びませぬ。

ト　おかつ銅盥にて手水を出す。竹齋手を洗ひながら、

幸ひ今日は暖氣ゆゑ、お髮を揃へて湯浴をなされ。（ト手を洗ひしまふ。）

竹川　もうよろしうござりませうか。

竹齋　よろしいとも〳〵。愚老御受合ひ申すから、早くお髮をお揃へなされ。

小萩　有難うござりまする。

ト　おかつ銅盥を片附け、是を持つて杉戸の内へはひる。竹齋思入あつて、

竹齋　それについて殿樣より、かね〴〵御内命を蒙むり居るが、御病氣御全快の上からは、御執心の事なれば御前の御意に從うて、表向きお妾におなりなされては如何でござる。

竹川　今その事は私より、申しませうと存ぜし所、今朝奥樣へ召されしも矢張り小萩どのゝ事にて、竹

川其方よく勸め、御前の御意に從ふやう、くれ〴〵賴むと有難い奧樣よりの御意なれば、御恩になりて濟まぬと言ふ、お前の遠慮ももう入らねば、早うお受けをしたがよい。

千種　多く女中のある中で、かほどに御前に思はれるのは、お前の器量が勝れしゆゑ、幾ら側で羨んでも外の者では及ばぬこと、冥加に餘りし事なれば、竹川殿の勸めに從ひ、お受けしたがよからうぞえ。

竹齋　繁之丞殿が先達、五十石の御加增ありしは小萩どのが欲しいゆゑ、兄に否やを言はせぬ爲、得心あれば此上に又々御加增あらうも知れず、その替りに又得心なければ盜賊入りし越度にて、繁之丞殿は直に切腹、家內の者は門前拂ひ、さうなる時は數代續きし曾根の家名も退轉なし、先祖へ對して濟みますまい。

ト三人思入あつて言ふ。小萩術なき思入あつて、

小萩　足らはぬ此身をそれ程迄に、思召して下さりまするは有難うはござりますが、小さい折より御恩になりし奧樣へ對しまして、どうも心がすみませねば、

竹川　それは今も言ふ通り、奧樣よりのお賴みなれば、その遠慮には及ばぬわいの。

小萩　就ては一旦言交せし才次郞どのへ對しまして、此身の出世になります事ゆゑ、慾に迷つて二世か

けし誓ひを仇に破りしかと、思はれますが恥しく、御前の御意に從へば、女子の操を破らねばなりませぬゆゑ、是ばかりはどうも御返事がなりませぬ。

竹齋　そのお前が義理立てする、小間物屋の才次郎は、小佛峠の裏道で崖より谷へ突落され、下は早瀬に岩石するどく、五體碎かれ果敢なくも、非業な最期を遂げたさうだ。

ト小萩びつくりなし、

小萩　えゝすりや才次郎殿は谷へ落ち、非業な最期を遂げしとか、ても情ない事ぢやなあ。

ト泣き伏す。竹齋思入あつて、

竹齋　世になき男に義理を立て、親なき後の親といふ。兄繁之丞殿に切腹させ、曾根の家名を退轉させそれでも濟まうと思はるゝか、先祖へ對して濟みますまい。

小萩　はあゝ。（ト泣く。）

竹齋　さりとはわからぬことで御座る。（トきつと言ふ。竹川思入あつて、）

竹川　女子は女子同志にて跡でとつくり私が、よく申し聞けませうから、竹齋樣には御前よしなに、お執成しをお願ひ申しまする。

竹齋　實は日々御催促なれど、小萩どのゝ病氣を幸ひに、申し延べて置きましたが、最早全快の上から

は、御前へ申し述べやうがござらぬ。

竹川　奥樣よりも御内意あれば、千種どのと二人して、小萩どのに申し聞かせ。

千種　何れいなやの御返事は、後方迄に申上げます。

竹齋　何分ともにお賴み申す。(ト竹齋立上る。)

竹川　左樣なれば、

千種　竹齋樣。

竹齋　否やの御返事、お待ち申す。

ト唄になり、竹齋下手廊下口へはひる。跡合方になり、竹川思入あつて、

竹川　これ小萩どの、もうお前も子供ではなし、よく考へてみたがよい。言交したるその男へ、操が立たぬと言ふけれど、お召仕へになるも家の爲、曾根の家名の立つ立たぬは、お前の心たつた一つ、譬にするもおほけなけれど、常盤御前が淸盛に身を任せしも家の爲、命のあらぬ三人の子供が助かり、源氏の世になりしも操を破りしゆゑ、それに習うてお前も御前に、身を任したがよからうぞえ。

千種　事を別けて竹川殿の異見をなさるもお前の爲。家の大事を思ふなら、御前の御意に從うて、親兄

弟に安心さすが、それが孝行でござりますぞ。
竹川　是程言ふに返事をせぬは、どうでも御意に從はぬか。
小萩　さあ、それは。
千種　家を思うてお受けをなすか。
小萩　さあ、それは。
竹川　御意を背くか。
小萩　さあ、それは。
千種　從ひなさるか。
小萩　さあ。
兩人　さあ。
三人　さあ〳〵。
竹川　篤と思案を。（膝へ手を突ききつとなるを、道具替りの知せ、）したがよい。
ト竹川、千種詰め寄る。小萩はハア、と泣伏す。此模樣よろしく、唄にて道具廻る。

（押上土手茶店の場）＝本舞臺一面の平舞臺上の方に松の大樹、下の方葭簀張りの茶店、臺の上に小さな竃茶釜をかけ、此脇に茶碗を載せし茶棚、後ろ葭簀で圍ひ、軒口に妙見の奉納手拭をかけ、向う小梅曳船通りの遠見、總て押上土手通りの體。爰におかや白髪鬘やつし裝婆の拵へ、中間權兵衞紺看板一本差し、床几に腰をかけ茶を飲み居る。茶見世の前に、尼妙林坊主鬘鼠の着附、紺木綿の衣、白の手甲脚絆、草鞋網代笠を持ち尼の拵へ、小尼妙眞同じく坊主鬘同じ拵へて立掛りゐる。此の見得妙見の題目太鼓にて道具留る。

妙林　これ、何でぐづ〳〵してゐるのだ。さつさと早く歩かねえか。

妙眞　草鞋ッ喰が痛くツて、さう早くは歩かれない。

妙林　歩かずば内にゐればよいのに。（ト妙眞の天窓を打つ。）

權兵　これ、小さい者を可愛さうに、手荒い事をしねえがいゝ。

妙林　手荒い事をしたくもないが、却々こいつは喰えない奴で、甘い詞をかけた口には少しも修行をいたしませぬ。

妙眞　さういふお前も髪結ひ床の、若い衆にからかつて、さつぱり修行をしないくせに。

妙林　おいらは修行をしなくつても、比丘尼橋に居た時分、馴染のお客がたんとあるから、四百や五百

のお錢を取るのは、何の造作もないことだわ。
權兵　それぢやあお前は比丘尼橋で、客をとつてるたといふのか。
妙林　比丘尼仲間ぢやあ客取りで、大層是れでも賣つたものさ。
權兵　折助にやあ附物の、夜鷹は買つた事があるが、比丘尼の味はまだ知らない。
妙林　一晩洒落に遊びにおいでな。
權兵　いつでもいゝが夏座敷は、劍呑だからおらあいやだ。
妙林　なに、夏座敷とはえ。
妙眞　鼻に障子がないといふのだ。
妙林　又口を出しやあがる。（ト天窓を打つ。）
妙眞　瘡ツかきのふがく〳〵やアい。
妙林　うぬ、待ちやあがれ。
ト題目太鼓にて逸散に花道へ逃げてはひる。跡から追駈けてはひる。
權兵　成程、口のへらねえ尼だ。
ト題目太鼓を冠せし合方になり、下手よりお民丸髷世話裝、前垂掛けにて出來り、

お民　かゝさん、大きに遲くなりました。

かや　まだ、ゆつくりでもよかつたに。

お民　早く來ようと思つた所へ、又お隣りの夫婦喧嘩で、見てもゐられず留めに這入り、それで遲くなりました。（ト權兵衞へ背中を見せ、床几へかける。）

權兵　おゝお民さん、お前の來るのを待つてゐたに、背中を向けて知らぬ顏は、餘り邪險な仕方だぜ。

お民　お前にはお屋敷で、酷い憂目にあつたから、それで詞もかけないのさ。

權兵　そんな愛想盡しは言はねえものだ。主命ゆゑに仕方なく、打ちは打つたが可愛いお前、手酷くしねえを覺えてゐやう。

お民　手酷くしない事があらうか。不斷わたしに兎やかう言うた刎附けたのを遺恨に思ひ、いまだに體の痛む程、手酷くお前に打たれたから、生涯忘れはしませぬわいな。

權兵　お前を打つたは今も言ふ、主命だから堪忍しねえ。腹が立つならあやまるから、遺恨に思はず見世へ寄つたら、そんな怖い顏をせずと、笑ひ顏を見せてくんなせえ。

　　ト袖を引くを振拂ひ、つんとして、

お民　わたしの顏の怖いのは、生れ附きゆゑ仕方がない、不人相の評判ゆゑ、笑つた事はござんせぬ。

權兵　さう氣當りを言はれちやあ、これからおれも見世へは寄らねえ。お禮はその內きつとするから、樂しみにして待つてゐろ。
お民　わたしやお前に禮をされる、覺えがないから受けませぬよ。
權兵　受けようが受けまいが、持つて來るからさう思へ。（ト立上る。）
かや　どういふ譯か知らないが、權兵衞さんも使ひ先、早くおいでだつたらよからう。
權兵　行かうと行くめえと、おれが勝手だ。
ト題目太鼓になり、權兵衞下手へはひる。お民跡を見送り、
お民　をとゝひ來い。（ト鹽を蒔く。）
かや　これ、聞えると惡いわいの。
お民　あゝいふ奴は腹を立たせ、二度と再び來ないやうにしないと、見世の邪魔になります。
かや　今のやうに言つたらば、もう此後は來やあしまい。
お民　なに、押しの強い奴だから、又來ないとは言はれませぬ。
かや　いやわしは仕掛けた用があれば、內へ行つてもよからうかの。
お民　もう宜しうございますから、早くおいでなさいまし。

かや　又暮れ方にしまひに來ませう。

ト題目太鼓にておかや下手へはひる。お民思入あつて、

お民　小萩さんの逃げたのを、知らぬといふは僞りだと、縛り上げての打ち打擲、餘り非道な仕方ゆゑ、暇をとつて内へ歸り、かゝさんの手助けに仕馴れぬ茶見世へ出てるが、捨つる神ありや助ける神と、妙見樣のお蔭にて、樂に暮らして行かれるとは、有難いものぢやわいの。

ト時の鐘、誂への合方になり、お民は茶釜の下を焚き附ける。花道より才次郎、そぼろなる好みの拵へ、古草履、古き菅笠を冠り、顏を隱し竹の杖を突き出來り、直に舞臺へ來り思入あつて、

才次　もし御無心でござりますが、お湯を一杯下さりませ。

お民　あい、藥でも飮みなさんすか。

才次　はい、胸が支へて困りますから、丸藥を飮みますのでござりまする。

お民　それでは溫くして上げませう。

才次　有難うござりまする。

ト合方きつぱりとなり、お民茶碗へ湯をつぎ、水をうめて出す。才次郎思はずお民の顏を見て、

や、お前はお民どのではござらぬか。

お民　はい、私は民でござります。お前はどなたでござります。

才次　お見忘れなされたか、才次郎でござります。

お民　え。(トぎつくり思入。)

才次　以前と變つて私も、こんな姿になりました。

ト冠りし菅笠を取る。才次郎所々に毛の生えし好みの鬘、眉毛が拔け、引ツつりのある顏の拵へ、お民見てびつくりなし、

お民　あれえ。

ト思はずどうとなる。本釣鐘の寺鐘、お民顫へてふる。誂への合方になり、才次郎思入あつて、

才次　その驚きは尤も至極、既に先頃命をば、失ふところを助かりましたが、その替りには此樣な片輪者になりました。

お民　成程お前は才次郎さん。顏は變れど覺えの聲音、どういふことでその樣な姿におなりなされしぞ。

才次　話せば長い事ながら、まあ一通り聞いて下され。

ト合方きつぱりとなり、兩人床几へかけ思入あつて、

小萩殿を殿樣が、妾にするとおつしやるので御恩になつた奧樣へ義理が濟まねば何れへか、伴ひ

くれと頼まれて、神原様のお屋敷を夜半に[illegible]れて連れ出し、生れ故郷の甲府を目當に、裏道通しに八王子迄は行つたれど、駒木の關所が通られねば、是非なく大戸の觀音道を籠の者を案内に、嶮しき山路へかゝりし折、過分の酒手をねだるゆゑ、困ると知りつゝ歸せしが、其の駕籠舁を知べとして、傳八殿が下部を連れ、二人の跡を追ひ掛け來て、小萩殿を駕籠に乘せ連れて行くのをやるまいと、爭ふところを傳八殿に崖から谷へ突落され、體に數ヶ所の疵を受け、動けぬ足をやうやうに立上れども谷間には木の間が明るく見ゆるのみ、途方にくれし折も折、俄に笹の動く音、猪狼の類ひかと、見ればこなたの山蔭に、鏡の如き目の光り、何かと思へば蟒にて、ぞつと身の毛も立つ凄さ、幸ひ拾ひし短刀を持つて居たゆゑそれを拔き、寄らば突かんと思ひしに、炎の如き舌を吐き、只一と呑に呑まれました。

お民　え、すりや蟒に呑まれなさんしたとか、よくまあ命が助かりましたな。

才次　不思議に命の助かりしは、あつと言ふ間もあらばこそ、忽ち腹へ入つたかと思ふに神の加護なりしか、思はず知らず短刀でその蟒の腹をさき、計らずそこへ轉がり出しが、折よく流れのありしゆゑ、夢中で水を掬ひ飲み、その夜は谷に夜を明かし、朝日の光によく見れば、大樹の如き蟒にて如何はせんと思ふ所へ、宵に逢つたる杣が來て、田舍氣質の親切に、我家へ伴ひ醫者にかけ、

一月餘り世話になり、やう〳〵達者になつたれど、毒氣を受けて髮は拔け、見られぬ顏になりましたが、少しも早く江戸へ來たく、僅かなれども所持せし金を禮に置いて出て來ましたが、宿屋はもとより木賃宿でも、かゝる姿に泊めてはなく、野宿をなして此江戸へやつとの事で來ましたのだ。

お民　それはまあ恐ろしい怖いめにお逢ひなされましたが、命に別條ござりませぬは、おつじやる通り神の加護、お仕合せな事でござりました。（ト才次郎思入あつて、）

才次　早速乍ら聞きたいは、小萩どのはあの折に、屋敷へ連れて來られしか。

お民　はい、傳八殿が手柄顏に駕籠でつれて歸られましたが、小萩樣も心配ゆゑか、持病の癪と血の道で床に就いてござりまする。

才次　それでは屋敷へ歸つた後、煩うてをりまするか、其後互ひの安否も知れねば、大方わしが死んだであらうと思うてゐるに違ひない。さうしてお前はなんで又、此の茶見世にゐなさるのだ。

お民　小萩樣を私が逃がしたやうにお上では、思召して嚴しい御詮議、あの意地惡の運藏殿や傳八殿が權兵衞めに言ひ附けて、覺えがないと言ふものを、行方を言へと打ち打擲、酷い憂目に逢ひましたが、小萩殿がお歸りなされ、此身の明りが立ちましたから、お暇願つて押上の母の所へ歸りま

したが、打たれた跡が今もつて、痛みますゆゑ奉公にも、出られませねば仕方なく、母の代りに此の茶見世へ、すけに參つて居ります。

才次　その難儀をお前がしたも、元の起りはわたしらゆゑ、氣の毒なことでござりまする。何にいたせ小萩殿に、逢つて話がしたいものだ。

　ト此以前より、下手より以前の權兵衞出來り、窺ひゐて、

權兵　いや、小萩樣には逢はれねえぞ。（ト前へ出る。才次郎見て、）

才次　や、さう言ふこなたは、權兵衞殿。

お民　又爰へ來なすつたのか。

權兵　團子を買つて歸りがけ、お前の機嫌が直つたかと、嫌はれながら廻つて來たのだ。

お民　えゝ、廻つて來ずともよいことを。

才次　して小萩殿に逢はれぬとは。

權兵　こなたは情人の積りだから、逢ひてえなどゝ言ふだらうが、小萩樣は殿樣の大祕藏のお妾だ。乞食坊主を見たやうな、こなたなぞが逢はれるものか。

才次　えゝ、それではあれから小萩殿は、殿の妾になりましたか。

權兵 そこが當世流行の薄情、傳八樣が甲州から連れて歸ると以前に替り、いや應なしに殿樣の御意に隨ひお妾に、なつたも尤もそのはずだ、一晩御寐間の御伽をすると、直に明くる日越後屋へ御用が下つてお召が出來、頭の物から持ちものまで、いゝ日が出るからどんな者でも乘替る氣にならずにやあ居られねえ。流行唄にもよく唄ふが、男がよくて金持で、それで調子のいゝ殿樣、御年寄を初めとして、お側女中が一同に岡燒餅を燒く程だ。それといふのも朝から晩まで聖天樣のにこごりだ。何んと氣の惡い話ぢやあねえか。いつぞやこなたと逃げたのは、御恩になつた奧樣へ義理を立てゝ逃げたのだが、その奧樣からお許しが出たので直にお妾に、なつたは利口な小萩樣。

ト權兵衞氣を持たせるやうに言ふ。お民噓だといふ思入あつて、

お民 いえ〳〵、それは噓でござんす。小萩樣は甲州から歸りなさると病氣にて。

權兵 これ〳〵、そりやあお前の言ふのが噓だ。此才次郎が氣を探らうと、いゝ加減なことを言ふのだ。

お民 何で噓を言ひませう。現在お側にゐたわたし。

權兵 お側にゐたと言ふけれど、小萩樣が甲州から歸つて間もなく願ひにより、長の暇になつたこなた、こつちは今日今迄も、一つ屋敷にゐる權兵衞、噓か誠か誰にでも、出入りの者に聞いて見ねえ。

ト此内才次郎腹の立つ思入あつて、

才次　神を誓ひに二世迄も言交したる小萩どの、よもやと思へど人心、いよ〳〵それに相違なくば存分恨みを言はねばならぬ。

權兵　屋敷へ來れば殿樣の、思ひのかゝつた小萩樣を、誘ひ出した不義の科、來りやあ直に殺されるぞ。

才次　えゝ。

權兵　惚れた女に寐返りを打たれたからは仕方がねえ。恨みを言ひに屋敷へ來て、首を切られて死ぬよりやあ、自身に首でもくゝるがいゝ。

才次　ちえゝ。（ト口惜しき思入。）

權兵　所詮そんな面になつちやあ、小萩樣は言ふに及ばず、どんな不器量な女でも、お化と一緒に寐やあしねえ。まあ生きてゐても詮がねえ。早く死んだ方がよからう。手前が死んだと聞いたなら、小萩樣が嘸悦び、あゝ、生甲斐のねえ事だなあ。

お民　これ、誰に頼まれたか知らないが、憎まれ口もよい加減に、言つたら早く歸りなさんせ。

權兵　詰らぬお化に掛り合ひ、茶うけの使ひが遲くなつた。どれ急いで歸らうか。

ト時の鐘、合方、權兵衞風呂敷を提げ上手へはひる。跡に才次郎口惜しき思入にて、

才次　ちえゝ腹の立つ今の話、密通せしが露顯なし、添はれぬ時は命を捨て、あの世へ行つて添はうと言ふ、堅い誓紙を取交せしに、慾に迷つておれを捨て、殿にその身を任すとは、言はうやうない人でなし、屋敷へ踏込み小萩めに、存分言はねば腹がいぬ。

ト才次郎せき込み、上手へ行かうとするをお民留めて、

お民　誠の事ならお前の腹立ち、それも無理ではござんせぬが、嘘八百のあの權兵衞、何を言ふか知れませぬ。嘘か誠は明日迄にわたしが聞いて上げようから、木賃宿へ今夜は泊り、明日爰迄來なさんせ、いよ〳〵誠に相違なくば、其時こそはお前の存分、恨みをお晴らしなさいまし。

才次　いや〳〵今のは嘘ではない、小佛峠で谷底へ突落されたその時に、此才次郎は死んだと思ひ、妾になつたに違ひない、刃物があれば生かして置かぬが、路用に困つて短刀を賣つたが今での殘念だ。喰附いてなと小萩めに、疵でも附けねば料簡ならぬ。

お民　そりやさうでもあらうけれど、お前が屋敷へ行つたならば、今權兵衞が言ふ通り、小萩樣を連出した不義の科あるお前ゆゑ、どんな憂目に逢はうも知れぬ。今日は思ひ止まらしやんせ。

才次　いや〳〵思ひとまられぬ。妾となつたと聞いたので、此の胸が裂けるやうだ。（ト悔しき思入。）

お民　腹の立つのは尤もだが、小萩樣が操を捨てる、そんな事はあるまいから、明日迄待つて下さんせ

才次　生甲斐のない體ゆゑ、殺されるのを厭はねば、何でもこれより屋敷へ行き。

ト才次郎一途に行かうとするを、お民留め、ちよつと立廻つてお民才次郎をぢつと留め、

お民　すりや、是程にわたしが留めても、

才次　死ぬと覺悟をしたからは。

お民　思ひとまつて下さんせぬか。

才次　いつかな思ひ、

ト振拂つて行かうとするを、お民ぢつと留めるを、道具替りの知せ。

とゞまられぬ。

ト才次郎上手な見込み拳を握り、口惜しき思入、お民は情ないといふ思入にて留める。此見得早めた
る木魚の勤めにて道具廻る。

(神原亀井戸下邸の場)——本舞臺四間中足の二重、本庇本緣附、向う上手に九尺塗りがまちの床の間、誂への掛物、大花瓶へ櫻を活け、續いて一間袋戸棚、四尺の地袋戸棚、下手銀襖の出這入り、上の方後へ下げて障子屋體、此前に御影春日形の大石燈籠、振よき松の立木、下の方同じく障子屋體、

四間の屋體へ廻り緣側出這入り、二重一面に本疊と見えるやうに薄緣を敷詰め、總て神原龜井戸下邸御殿の體。二重上手に神原造酒之助、羽織着流し、殿の拵へ褥の上に住ひ、傍に曲彔、刀掛に大小を掛け、蒔繪の煙草盆を置き、此下手に馬淵運藏、戸倉傳八、継上下にて控へ、下手に以前の醫者藪原竹齋住ひ、此の見得琴唄にて、道具留る。

造酒　竹齋、小萩が病氣は全快せしか。

竹齋　一日も早く全快なすやう、肺肝を碎き配劑なせしが、藥効あつて速かに全快いたしてござりまする。

運藏　殿御執心の小萩どのゆゑ、我々ども共々に、全快あるを待ち居りしが、流石は醫道に勝れし貴老。

傳八　早速快氣に至りしは、全く竹齋老のお手柄でござる。

造酒　して兼々汝に頼み置きし、小萩は得心いたせしか。

竹齋　はッ竹川千種諸共に、兄繁之丞が身の上に、且は曾根の家名にもかゝはる事故御受けをいたせと、詞を盡して勸めましたが、いまだお受けの返事をいたさず、病で申さば極く難症、耆婆扁鵲はいざ知らず、愚老などの匙先にては、あの頑な料簡は治りませぬと存ぜられます。

運藏　察する所密通せし才次郎に心を殘し、お受けをなさぬに疑ひなし、かれも曾根の娘にて、お上の御扶持で育ちし者、御主の仰せに隨はぬは、家來の身にて不屆き千萬。

傳八　善惡ともに從ふべきを、御意をもどく上からは、御威光にもかゝはる次第、嚴しき御仕置仰せつけられ、然るべきかと存ぜられます。(ト造酒之助思ひ入あつて、)

造酒　小萩が心に從はゞ、宿直の役を怠りし繁之丞が罪科をば、宥してくれんと思ひしに、予に隨はぬ上からは、今戸倉が申す如く、重き仕置に行はん。小萩は不義の科あれば、掟通り死刑に行ひ、又繁之丞は家の重器菊一文字の短刀を盜賊入つて奪ひしを知らぬは宿直の越度なり、かれには切腹申し附けい。

運藏　畏つてござりまする。重役共に申しなば君へ御慈悲を願はんと、止めまするは必定ゆゑ、是より拙者が立越えて、君の嚴命申し聞け、即刻かれに切腹させ、檢分いたすでござりまする。

傳八　拙者は是より竹川の部屋へ參つて君命を、小萩にとくと申し聞け、成敗いたすでござります。

造酒　さまたげなき內繁之丞に、とく〳〵切腹申附けい。

運藏　畏つてござりまする。(ト立ちかゝる。下手にて、)

兵太　その御使者暫く。

造酒　我が中附を止めしは、

竹齋　正しく御家老。

三人　穗積殿か。

ト合方調べにて下手屋體の障子をあけ、前幕の穗積兵太夫總上下一本差し刀を提げ出で、緣側傳ひに出來り、下手へ刀を置き、

兵太　眞平御免下さりませ。

ト二重下手へ住ひ、辭儀をなす。造酒之助見て、

造酒　兵太夫には何ゆゑに、予が中附けを背きしぞ。（ト合方きつぱりとなり、）

兵太　今日御前には御下屋敷へいらせられしと承り、御庭前の櫻をば、拙者も拜見いたさんと、是へ參つて計らずも、御次に於て承れば、曾根繁之丞が宿直の夜、盜賊入つて御家の重寶菊一文字の短刀に御手許金三百兩紛失せしが越度となつて、暫く差し控へ罷り居る繁之丞を、俄かの御仕置、家老中へ御沙汰なく、切腹仰せつけられしは、御發明に似合はざる御前の仰せと、存ぜられます。

造酒　家の重寶菊一文字を盜賊入つて奪はれしは、宿直の者の越度ゆゑ、切腹申し附けたるを、予に似

合はぬとは何ゆゑぞ。

兵太　器物にかへて人命を斷つは不仁の至りかと、憚りながら存じまする。

造酒　なに、切腹申し附けたるを、不仁の仕置と申すのは、如何なる譯のあつての事ぢや。

兵太　臣下の者を何の爲に、君には御扶助遊ばしまする。

造酒　何と申す。（ト誂への合方、張扇の音になり、）

兵太　今泰平の御代なれど謀叛を企む者あつて、數千人の徒黨を集め、蜂起なしたる其時に公義よりして追討の命令蒙むる事あらば、何をもつて蜂起せし謀叛人を亡ぼし給ふぞ。君御一人にて數千人の敵を討つ事難かるべし。あまたの家來のあらざれば、公義よりして命令下りし討手の御役は勤まりますまい。

造酒　むゝ。（ト思入。）

兵太　器物を失ふ科により、切腹仰せ附けられし、其後短刀出づるとも、死したる者が蘇生をなすまじ上のお役を勤むべき臣下の者を器物にかへ、切腹させて失ふは、無益な事ではござりませぬか。

造酒　むゝ。

兵太　紛失なせし短刀を日數百日のその内に、繁之丞に申附け、詮議し出し差上げん。何卒御猶豫下さ

るやう、偏に願ひ奉る。（ト兵太夫辭儀をなす。）

造酒　むゝ。（ト造酒之助敵役と顔見合せ、思入。）

運藏　治にゐて亂を忘れざる御家老職の今の御異見、御尤なる事なれば、その意に御委せ下さりませ。

傳八　日數百日のその間に、短刀詮議を繁之丞へ仰附けられ然るべし。

造酒　むゝ、猶豫いたして遣はさん。

兵太　すりやお聞屆け下さりますか。

造酒　如何にも、承知いたせしぞ。

兵太　はゝ有難う存じまする。（ト辭儀をなし、）まつた腰元小萩事、不義をせしとは申せども、その相手たる才次郎が行方知れざる上からは、是又暫く御猶豫あつて、彼が行方の知れたる上、兩人揃へて御成敗然るべきかと存じまする。先づそれ迄は竹川へお預けあつて御仕置を、何卒御猶豫下さりませ。

造酒　むゝ、その儀も承知いたしたぞ。

兵太　兩樣共に御聞濟み下され、大慶至極にござりまする。

運藏　此御猶豫のその內に、小萩が御前に隨へば。

傳八　不義の罪科はお許しあつて、お召仕へに御取立て、

竹齋　緣につながる繁之丞殿も、その時こそは御免にならん。

兵太　拙者はこれより繁之丞が、切腹御猶豫下されし、御慈悲の趣き申聞け、猶も短刀詮議の儀、御免になりしを申傳へ、親子に安堵いたさせん。

運藏　すりや御家老には曾根方へ、

傳八　これよりお越しなされまするか。

兵太　如何にも善は急げの譬、善事を知らせて悅ばせん。

竹齋　御家老職の御執成にて、助命になりし曾根氏は高運な事でござる。

兵太　御免を蒙る上からは、拙者はお暇仕らん。

造酒　おゝ、隨意にいたせ。

兵太　はッ、有難う存じまする。

傳八　左樣ござれば、

三人　穗積どの。

兵太　何れも御免。

ト唄になり、兵太夫は敵役を尻目にかけ、廊下傳ひに下手へはひる。跡を見送り合方になり、

造酒　我なき後は我と思へと、亡父の遺言あるゆゑに、何事によらず兵太夫が申す事は聞かねばならぬ。家來と言へど氣詰りなるが、退座いたして安堵いたした。

運藏　まだ今日は御酒宴の、御催しがございませぬな。

造酒　是へ參つて庭前の、花を見乍ら一獻汲まんと、存ぜし所へ邪魔が這入り、大きに遲刻いたしたり。

運藏　左樣なれば片時も早く、御料理方へ支度なすやう。

傳八　いや、それは先刻仰せを受け、申附けてござりまする。

運藏　然らばこれへ持參なすやう。

竹齋　愚老が參つて申附けん。

ト合方になり、竹齋下手へはひり、直に三つ組を載せし杯臺を持ち出來り、跡より腰明きの腰元野菊銚子を持ち、腰元二人八寸へのせし藤の硯蓋、八寸へのせし鉢肴を持ち出來り、眞中へ並べ、腰元三人辭儀をなす。

運藏　先づ一獻、お過し遊ばしませ。

ト杯臺を造酒之助の前へ出す。造酒之助杯を取上げる。

野菊　どれ、お酌をいたしませう。(ト酌をなす。)
運藏　此のお酌が小萩であらば、嘸御前には御滿足、
造酒　それはその方が申す通り、一段酒が旨う飲める。
野菊　左樣なれば私では、御酒がおいしくござりませぬか。
傳八　それは言ふだけ野暮な事、較べものになりはせぬ。
竹齋　小萩殿とお前とは、譬へて言はゞ雪と炭。
造酒　そちが黑いその顏へ、白粉を塗つた所は、
野菊　美しう見えまするか。
造酒　とんと人參の白和へのやうだ。
野菊　えゝお惡口をおつしやいますな。
○　人參の白和へは、
△　よいお見立でござります。
野菊　えゝ、お前方迄同じやうに。
ト野菊二人を睨み附ける。此時下手より女小姓房次出て、

房次　はツ馬淵樣へ申上げます。中老の竹川殿が、只今御前へお目通りをお願ひ申しに參られましてござりまする。

竹齋　竹川殿が參られしは、もしや色よい御返事なるか。

運藏　何にもいたせ、是へと申せ。

房次　畏りました。（ト下手へはひる。）

竹齋　凶事か吉事か、吉事か凶事か、早く樣子を聞きたいものぢや。

ト合方きつぱりとなり、下手より房次先きに、以前の竹川出來り、小腰をかゞめ下手へ來る。

房次　これへお通りなされませ。

竹川　はツ。（トよき所へ住ひ、辭儀をする。）

造酒　おゝ竹川か、近う參れ。

竹川　はツ。

運藏　御前のお召し、

傳八　お進みなされ。

竹川　御免遊ばしませ。（ト前へ出る。）

造酒　早速ながら竹川、小萩は得心いたさぬか。
竹川　いえ、お悦び遊ばしませ。御前の御意に從ひまする。
造酒　なに、予が心に從ふとか。
竹川　御意にござりまする。
運藏　扨は竹川殿のお勸めにて、
傳八　小萩どのが我君の、
竹齋　お心に從はるゝか。
竹川　是迄御意を背きしは、奥樣への御遠慮ゆゑ、此身がなくばとお屋敷を立退きましてござりまするがその奥樣よりのお勸めに、左程迄に思召して下さりまする事ならばと、得心いたしてござりまする。
運藏　偏にこれは物慣れたる、竹川殿のお骨折り、
傳八　いや、お手柄な、
三人　事でござる。
造酒　小萩が得心せしとあらば、直にこれへ伴ひ參れ。

竹川　只今髮をとり揃へ、身仕舞の出來次第、千種がこれへ伴ひまする。

造酒　いまだ支度が出來ざるか、誰か參つて見て參れ。

竹齋　畏つてござりまする。愚老が引立てに參りませう。（ト竹齋立掛る。下手にて、）

千種　その御出には及びませぬ。同道いたしてござりまする。

ト琴唄になり、下手障子を明け、以前の千種を先きに、小萩振袖衣裳にて俯き出來り、下手へ住ふ。

竹川　心得違ひでお屋敷を、立退きました小萩が科、

千種　何卒お許し下さりますやう。

竹川　偏にお願ひ、

兩人　申上げまする。

造酒　小萩が屋敷を立退きしは、全く是は才次郎が誘ひ出せしものならん。小萩が科は許して遣はす。

竹川　はゝ、有難き御前の御意。

千種　よう御諚をおつしやりませ。

小萩　不埒をいたせし私を、お咎めもなくお許し下され、冥加にあまる身の仕合せ、有難う存じまする。

ト辭儀をなす。

竹川　お詫が濟めば、

千種　御前のお側へ。

小萩　御免遊ばしませ。（ト會釋して造酒之助の側へ住ふ。造酒之助は嬉しき思入にて、）

造酒　過ぎ去りし事は水となし、今日からしては予が妾、目をかけて遣はすぞ。

小萩　有難う存じまする。

造酒　久しく不快でをつたさうぢやが、どうぢや快うなつたか。

小萩　竹齋殿のお蔭にて、病ひは拭ひましたやうに、治りましてござりまする。

造酒　それは何より重疊ぢや、目出度う祝うて、一つ返しやれ。

小萩　有難うはござりまするが、不調法でござりますれば。

運藏　常は兎もあれ今日は、

傳八　申さば御前と婚姻同樣、

竹齋　是非とも一獻、過しなされ。

小萩　左樣なれば、おてう附けに。（ト小萩杯を取り上げる。）

房次　どれ、お酌をいたしませう。
ト杯へつぎに掛る。ばた〳〵早舞にて、花道より才次郎出て來るを、權兵衛留め乍ら出來り、花道にて、
權兵　えゝ、ならねえと言ふに。
才次　何でも通らにやなりませぬ。
權兵　やあ、お庭先へつか〳〵と、通す事はならねえぞ。
ト才次郎行かうとするを、權兵衛支へる立廻りよろしくあつて、舞臺へ來り、才次郎を突倒す。
運藏　こりや〳〵權兵衛、御前がこれにいらせられるに、何者なるか見苦しい。
傳八　誰がお庭へ入れたのだ。
權兵　生憎只今掃除の者が、御庭口を明放し、水を入れてをる内に、這入りましてござりまする。
運藏　見れば二目と見られぬ坊主。
傳八　きり〳〵外へ引出せ。
權兵　畏つてござりまする。さあ、爰には置かれぬ、一緒に來い。
ト才次郎の胸倉をとり、引立てる。

才次　いえ〱わたしは行きませぬ。小萩どのに逢はぬ内は、行けと言つても行きませぬ。
運藏　小萩殿に逢ひたいとは、大それた事を言ふ奴だ。以前と違つて殿のお妾。
傳八　逢いたいなどゝは不屆き至極。
竹齋　して〱われは何者だ。
權兵　小萩樣のお出の前では、ちと申憎うござりまする。
運藏　なに小萩どのゝゐる前では、
傳八　申憎いと、
三人　申すは。（ト才次郎顏を上げ、）
才次　へい、私は小間物屋の、才次郎でござりまする。
皆々　えゝ。（ト皆々びつくりする。小萩見て、）
小萩　あのお前が、えゝ。（ト驚く。）
竹齋　こいつは正しく僞り者、小間物屋の才次郎は、役者の樣なよい男。
竹川　いつも御殿へ商ひに、來る度毎に御錠口で。
千種　今業平と噂して、お末の衆が大騷ぎ。

野菊　私共でも顏を見たさに、入らぬものをば買ひました。

○　その美しい才次郎の、

△　俤もない、あの姿。

才次　さあかやうな姿になりましたは、小萩と連立ちまして小佛峠の裏道を、通ります時傳八樣が、追手にござつて小萩殿を、連れて行くのを爭ふ折、遙の谷へ突落され、何處から上る所もなく、途方にくれてをつたる所へ、柳島の松よりも太いと思ふ蟒に、只一呑みに呑まれましたが、刃物を持つて居たお蔭に、思はず知らず腹を割き、計らず外へ轉け出で、危ふい命を助かりました、才次郎がなれの果、顏に覺えがあるかないか、とつくりと見て下さりませ。

ト此内小萩才次郎をよく〳〵見て、

小萩　聲音は錆びて變れども、その面差は何處やらに、面影殘る才次郎殿、ても情ない姿ぢやなあ。

ト小萩ぢつと泣く。

蓮藏　お出入り屋敷の女中をば、誘ひ出したる才次郎、身の大罪も顧みず、不屆き至極の横道者。

傳八　何用あつてその方は、お庭先へ踏込みしぞ。

才次　言交したる小萩殿に、逢つて恨みが言ひたいゆゑ。

小萩　わたしに恨みが言ひたいとは。
竹齋　當時御前の思ひ者、小萩殿へ失禮千萬。
權兵　きり〳〵爰を立ち去らぬか。（ト引立てにかゝる。その手に縋り、）
才次　歸れとあらば歸りますが、たつた一言小萩どのに、恨みを言はして下さりませ。
權兵　まだぐづ〳〵とぬかしやあがるか。（ト酷く引立てるを、）
造酒　權兵衞待て。
權兵　はツ。
造酒　小萩に恨みがあると申すは、如何なる事か申させい。
權兵　いや、ろくた事ではござりますまい。
造酒　大事ない、申させい。
運藏　御前のお許し、
四人　疾く疾く申せ。
才次　これ小萩どの、今更言ふも愚癡ながら、かゝる姿になつたのも、皆こなた故なるぞ。（ト胡弓入り誂への合方になり、）御出入屋敷の腰元と、不義をなしては濟まぬのも存じてゐれど思案の外、初めは

文のやりとりに、心を通はすのみなりしが、去年上野の御代參から、歸りを待つて蓮茶屋で忍び逢ひしも度重り、遂には人の噂となり、兎やせん角と思ふ折から、御前が妾になれとのお勸め、御意に從ふその時は、大恩受けし奧樣へ義理が濟まねばいづれへか、屋敷を連れ出しくれとの賴み、連れて逃げれば親仁からお出入りなせしお屋敷を捨てねばならぬと知りながら、癡情に迫つて跡先の、考へもなく連れ出して、故鄕の甲府へ落ちる途中、傳八樣に捉つて、こなたは直に捕へられ、此身は谷へ蹴込まれて、今も話せし蟒に呑まれてかゝる姿になり、恥を忍んで此江戶へ歸つて來たも小萩どの、こなたに逢ひたいのみならず、最前これなる權兵衞殿に、柳島の茶見世で出逢ひ話を聞けば心替り、御前へその身を委すのみか、我は谷にて死んだと思ひ、惡しざまに言ひしとは、見かけによらぬ不實な心。かういふ姿に今なつても、取交したる血起請は肌身放さず持つてゐるが、こなたは反故になしたであらう。

ト才次郎思入にて言ふ。小萩も切なき思入あつて、

小萩　成程お前の言ふ通り、わたしが賴んでお屋敷を連出して貰うたゆゑ、恨みを言ふも無理ならねど、これには深いわけある事。なんでわたしが惡樣にお前の事を言ひませう。證據は今に血起請を。

ト言ひかけるを冠せて、

蓮藏　あこれ、小萩どの、何も隱すには及びませぬ。起請と言ふは今しがた、破つて御前へ御見せなされた、あの血起請でござらうな。

小萩　てもまあ、そんな僞り事、いつ私が破りました。

蓮藏　いやさ、思ひ切つてござつても、今才次郎が參つては、さうすげなくもなりますまいが、かくお妾になつた上は、最早用なき才次郎。

竹齋　彼めに義理はござりませぬ。隱さず申しておやりなされ。

傳八　これ才次郎、今そちが言ふ血起請は、すんぐ\に引裂いて、煙管通しにしてしまつた。

才次　すりや二世かけし血起請も、煙管通しになしたるとか。（ト口惜しき思入。）

權兵　さあ長居をせずと早く歸れ。小萩樣が殿樣に乘替たのはお仕合せ、以前の手前は音羽屋氣どりで御錠口で持てたものだが、今はお化もよろしくといふ、のつぺらぼうの乞食坊主、野菊さんもかうなつては、惚れる氣はありますまいね。

野菊　ないともぐ\、誰がお化に惚れませうか。お前もいやだらうね。（ト腰元へ思入。）はい、皆がいやだと申します。

竹川　これ野菊どの、どうしたものだ、御前の前でつかぐ\と。

千種　ちと、おたしなみなされませ。
野菊　へゝえ。（ト造酒之助思入あつて、）
造酒　すりやあの者が此小萩と、密通なせし才次郎とか。以前は美男か存ぜぬが、二目と見られぬあの顔色。これ小萩、かれがかゝる姿になつても、そちは今に心が殘るか。
小萩　はツ。（ト俯き居る。）
造酒　あの見苦しい顔を見ては、よもや心は殘るまいな。
小萩　はツ。（ト俯き泣く。）
運藏　何で心が殘りませう。男でさへもかれが顔を見ては酒が飲めませぬ。
傳八　女子の惚れるも男がよいから、かういふ片輪になつた上は。
竹川　最早つばきの掛けてもない、早く諦めて歸るがいゝ。
權兵　とは言ふものゝその身になつたら、嘸悔しい事だらうな。（ト憎く言ふ。才次郎口惜しき思入にて、）
才次　扨はいよ／＼心が變り、おれに愛想が盡きたのか。
權兵　そりやあ言はねえでも知れた事だ。手前に愛想が盡きたから、お妾樣になつたのだ。
才次　かゝる姿になつたのも、屋敷を連れて逃げてくれと、そなたがおれに賴んだゆゑ、言ふのも愚癡

だが照手姫は、夫小栗判官が惣身くづれし癩病になりしを介抱なせしゆゑ、末世に傳ふ貞女の鑑、如何に心が變ればとて、ろく〳〵物も言はぬとは、餘りと言へば不實な女。

小萩　さあ、假令どの樣な姿になるとも、見捨てる心はなけれども。（ト造酒之助むつとして）

造酒　それでは彼に、心が殘るか。

小萩　さあ、それは。

運藏　なまじ情をかけるより、愛想が盡きたと、

三人　おつしやりませ。

小萩　はあゝ。（ト泣き、癪の痛む思入にて）あいたゝゝゝ。（ト胸を押へる。）

竹川　小萩殿には、どうなされしぞ。

小萩　持病の癪がさし込みて、あいたゝゝゝ。

竹川　おゝ癪の起きるは尤もぢや。側に見てゐるわたしさへ、胸が痛くなりまする。

千種　御前樣へお願ひ申し、お部屋へ行つてお藥を、早うお上げなされませ。

竹齋　癪を押へる丸藥あれば、これを服用いたされよ。（ト紙入より丸藥包みを出し、竹川へ渡す。）

小萩　左樣なれば暫しの間、御免なされて下さりませ。

造酒　おゝ、部屋へ參つて養生いたせ。

小萩　有難うござりまする。

才次　おのれを此儘、逃がしては。（ト飛びかゝらうとするを、權兵衞抱き留め、）

運藏　才次郎にお構ひなく。

竹川　小萩殿には、

女皆　少しも早く。（ト小萩才次郎を見て、）

小萩　これが別れに。

才次　何と。（ト立掛るを、權兵衞留め、）

千種　さあ、おいで、

皆々　なされませ。

ト唄になり、竹川小萩の手を取り、千種はじめ腰元皆々奥へはひる。才次郎立ちかゝるを、權兵衞留めて、

權兵　これ、幾ら手前がじたばたしても、御愛妾の小萩樣へ、近よることは叶はねえぞ。

運藏　たつてと言へば不義の科、首打ち落すが得心か。

才次　一日逢ひたく甲州から、歩けぬ足を引ずつて三度の食もろく／＼喰はず、艱難をして來た甲斐もなく、小萩が寢返りせし上は、此世に生きて詮ない體。さあ、殺さば殺せ命は惜しまぬ。

運藏　むゝ、望みとあれば此場にて。

ト運藏刀を持ち立ちかゝるを、

造酒　運藏待て。

運藏　はツ。（ト控へる。）

造酒　近う。

運藏　はツ。（ト造酒之助運藏に囁く。）

造酒　命を取るも不便ゆゑ、只此儘に助けつかはせ。（ト思入にて言ふ。）

運藏　心得ました。（ト才次郎に向ひ、）命を助け遣はせと、お情深き御前の御意、今日は此儘助け遣はす。有難い事と三拜して、疾く／＼此場を歸りをらう。

才次　いえ／＼わしは歸りませぬ。小萩に逢うて今一度。

傳八　まだ／＼申すか、叶はぬ事だ。

竹齋　たつてと言へば命がないぞ。

才次　どうで命は無い體。
運藏　ぐづ〳〵申さばお目障り。
傳八　御門前へ引きずり出せ。
權兵　さあ、おれと一緒に早く來い。（ト才次郎を引立てる。）
才次　えゝ、此儘歸るは口惜しい。
　　　ト跡へ歸らうとするを、酷く引きずり行く。才次郎振りかへり〳〵、誂への合方にて花道へ引きずら
　　　れてはひる。跡を見送り、
造酒　密通なせし才次郞に、小萩が心殘りをらうと、心中案じをつたるが、かゝる姿になつた上は、最
　　　早心殘りはあるまい。
運藏　如何程深きかたらひなりとも、以前に變る才次郎。
傳八　あのお化では愛想盡し、まづ御前にも御安心。
竹齋　しかしかれめが生きてをつては、小萩どのゝ御外聞。
造酒　それゆゑ討つべき才次郎を、情をかけて歸せしは。
運藏　是よりかれが跡を附け、暮れては人の往來も稀なる、

傳八　押上堤に待伏せなし、竊に殺害いたしませう。
竹齋　それは何よりよき御手段。
運藏　小萩殿へは極内々。
造酒　最早暮るに間もあるまじ、兩人共に跡をつけよ。
運藏傳八　畏つてござりまする。
竹齋　愚老も同道仕つらうか。
運藏　悪事にかけては力になる。
傳八　權兵衛がをればおいでに及ばぬ。
竹齋　左樣なれば御兩所には。
造酒　急いで參れ。（ト道具替りの知らせ。）
運藏傳八　はッ。
ト辭儀をする。天神の時の太鼓へ鈴の音を冠せ、引張りよろしく、この道具廻る。
（竹川部屋の場）――本舞臺幕明きの竹川部屋の道具、眞中に小萩住ひ、上手に中老竹川下手に千種住

ひ、ずつと下手に召仕おかつ、こんろへ湯沸し藥罐をかけ、扇で煽ぎゐる。合方にて道具留る。

竹川　小萩どの、嘸最前は御前の前で、切ない事でござりましたらう。道ならぬ不義なれば、言交したる男ゆゑ、假令姿は變るとも見捨てないのが女子の操。

千種　詞をかけたく思つても、御前の前ゆゑかけられず、言ひたい事も言はずして、怺えるお前の胸の内二人共推量して、癪と言ふのを幸に、

竹川　お暇願うて伴つたは、せつない難儀を救ふため。

千種　才次郎殿も仕方なく、今歸りしといふことなれば、

竹川　氣を落付けて血の道の、

千種　起らぬ樣になされませ。（ト小萩涙を拭ひて、）

小萩　有難うござりまする。此間から夢見の惡いも、體の疲れと思ひましたが、かういふ事のある知せか、それにつけても才次郎殿、世にも稀なる蟒に呑まれて姿の變りしは、如何なる前世の因果なるか、情ない事でござりまする。

竹川　言交したる男ゆゑ、假令姿が變るとも、見捨てる心はありますまいが、こゝを思ひ切らないと、お前ばかりか繁之丞殿の、お身の上にかゝはりませう。

千種　世の譬にも言ふ通り、背に腹は替えられませぬ。才次郎殿をふッつりと思ひ切つておしまひなされ、さすれば御前の御首尾もよく、御家の爲でござります。
竹川　母御も呼んで御相談をなされた事ならお年の功で、よき御工夫もござりませう。
小萩　母を呼びたうござりますが、兄が御免になりませねば、それも心に任せませぬ。
竹川　それは二人で奥樣へ、お執成しをお願ひ申せば。
小萩　さうなりますれば母兄も、嘸悦びますでござりませう。何分ともに奥樣へよろしうお願ひ申しまする。（ト此時下手より、以前の女小姓房次出來り。）
房次　竹川樣、千種樣、奥樣が召しまする。
かつ　旦那樣、お聞きなされましたか。
竹川　おゝ、お召しがなくとも上らねば。
千種　ならぬ所へ丁度幸ひ、
かつ　左樣なれば、是より直に、
竹川　お執成しを二人して、
千種　奥樣へお願ひ申さん。

小萩　何分ともに、御前よろしう。

竹川
千種　承知しました。
　　　　　　ト合方になり、竹川千種下手へはひる。小萩跡を見送り、

小萩　これかつや、暮れぬ内に柳島まで、ちよつと行つて貰ひたい。

かつ　どちらへ參りますのでござりますか。

小萩　竹川殿へお預りの身も、今日お召仕へになつたので、お許し受けし御禮をわたしの代りに妙見樣へ、ようお禮を申してくりや。（ト紙包みの賽錢を渡す。）

かつ　畏りましてござります。是より直に參りまするが、行燈を出して置きますから、暮れたらお點け下さりませ。（ト戸棚より行燈を出す。）

小萩　承知しました。

かつ　もし房次樣、わたしが歸つて來るまで、遊んでゐて下さりませ。

房次　あいく。

かつ　どれ、お參り申して參りませう。（ト合方にておかつ下手へはひる。跡を見送り思入あつて、）

小萩　わたしは急な用事があつて、文を書かねばならぬから、誰ぞ來たら知らしてくりや。

房次　畏りました。

ト時の鐘、誂への獨吟の唄になる。

〽あすありと思ふ心の仇し世に、無情を告ぐる入相の、鐘の音しづむ春の暮、

ト此内小萩硯箱と卷紙を出し、暗いといふ思入あつて、行燈を點ける。房次あり合ふ鏡山の草双紙を取り、取上げて、

こゝにござります此御本を、見ましてもようござりまするか。

小萩　それは鏡山の狂言を、草双紙にしたので、面白いから讀んで見な。

房次　有難うござります。（本を開き見て、）「跡に尾上は胸迫り、忍び涙の淵も瀬も思はずわつと伏ししづみ、此間も母樣よりこま〴〵との御文を下され、この頃はおしなべて引風の流行煩ひ、朋輩衆も多い事、惡い病の折見舞、まだその上に身の用心、喰べ物に氣をつけて煩はぬ樣、第一は御奉公を大切に、もう三年で御年も明き、首尾よく宿へ下るのを指折つて待つてゐると、小さい子供か何んぞの樣に、成人した此わしを大事がつてござるその中へ、今日の樣子を知らせたら、何んと身も世もあられうぞ、常に氣細な母樣ゆゑ、その場で直に死なさんしよ。」

ト此内小萩硯箱をあけ、墨をすり書置を書きかゝり、房次が讀む本を聞き、我が身につまされ、愁ひ

の思入よろしくあつて、

小萩　これ、文を書くのに邪魔になるから、聲を出さずに讀んでくりや。

房次　はい〳〵。

〽空も曇りて晴れやらぬ、思ひを野邊の筆つばな、筆の運びもはかどらぬ、跡や先きなる言の葉も、涙ににじむ菫草。

ト此内小萩は書置を書く。房次は口の内にて本を讀み、睡氣づきし思入にて、こくり〳〵と居睡りをなし、トヾ本の上へ俯伏に寐る。小萩は書きしまひ、

小萩　これ、房次どの〳〵。今迄本を讀んでゐたが睡くなつたか俯伏して、いつの間にやら高鼾、あゝ子供は苦勞のないものぢやなあ。

〽うすき由緣の花香とぞ、惜しむ名殘りに故鄕へ、花を見捨てゝ歸る雁。

ト小萩書置を卷き上封じをして、上手屋體より、匕首を出し房次の寢息を考へ、合方思入あつて向うへ向ひ、小聲にて、

小萩　才次郎殿、堪忍して下さりませ。（ト合方になり）嘸やわたしを不實なものと、恨みなさんした事であらうが、何をいふにも殿樣が傍においでなさるゆゑ、言譯したくも言ふことならず、心で詫

びてをりました。妾になれとおつしやるのを、昨日迄も今朝迄も、わたしやお前に義理を立て、お斷りを申しましたが、小佛峠の裏道で崕より落ちて果敢なくも石に打たれて死んだとあるゆゑ、それでは此世になき人と、思ふにつけて殿樣の御意に背けば我兄の、繁之丞殿は短刀を盜み取られし越度にて、切腹の上御扶持を上げられ、曾根の家名の絕える事、わたしが御意に隨へば、家名も立つて又兄の命も助かりますことゆゑ、操を破つて殿樣の妾になれどお伽をせねば、是がお前へ一つの言譯、ながらへをれば殿樣の、どうしてもお心に從はねば家名の立たぬことなれば、此身をお任せ申さにやならぬ。その言譯を母兄へ、書遺して自害なし、冥土で待つてをりますから、お前も冥土へ來て下され、假令醜い顏になつても、一旦二世の契りをなせば、あの世で夫婦になりまする。

〽結び甲斐なき夢の世を、誰れが憂き世と諦めし。

ト小萩匕首を出し、死なうといふ思入。此長ゼリフのうち房次目を醒し窺ひゐて、

房次　あゝもし、待つて下さりませ。（ト匕首を持つ手に縋りつく。）

小萩　や、お前は寢たと思つたに。

房次　つい睡くなつて寢ましたが、直眼が醒めてわたくしは、殘らず聞いてをりました。

小萩　聞いてをつたとあるからは、別に言はぬが聞く通り、死なねばならぬ譯ゆゑに、どうぞ止めずに
　ゐてくりやれ。
房次　あなたが死ぬとおつしやるのを、どうして止めずにをられませう。
小萩　それではどうでも、止めると言やるか。
房次　はい、お止め申しまする。
小萩　さう聞く上は、少しも早く。

〽春に別るゝ霜のはかなさ。

ト匕首を拔く。房次止めるを突退け咽喉へ突き立てる。房次びつくりして縋る。此見得、唄の上、本釣鐘を冠せ、

幕

ト時の鐘、稽古囃子にてつなぎ、直に引返す。

（小梅川〆切堤殺しの場）――本舞臺前へ出して常足の二重六枚飾り、上手に大樹の柳、此後ろ藪疊、下手樹木の張物、後ろ三尺程の草土手、向う田圃越しに小梅曳船通りの後ろを見たる夜の遠見、日覆

より柳の釣枝、舞臺前一面に川浪を畫きし波布を張り、總て小梅より押上へ入口の體よろしく、爰に植木屋二人、松櫻の鉢植を載せし荷をおろしゐる。此見得時の鐘、水の音にて幕明く、

松　けふは藥研堀の緣日だから、早く出かける積りだつたが、村の寄合ひで遲くなり、今ツから出掛けて行つても、出る所があればいゝ。

竹　請地の作や松公が、早くから行つて居るから、何處へか中へ割込んで、場所を取つて置いてくれたらう。

松　今しがたから曇つて來たが、えつちらおつちら見世を飾つて、直ぐに水ばれと來た日にやあ、骨折損の草臥儲けだ。

竹　雨を見込んで安買の客が無暗に値切りつけ、擔いで內へ歸るよりましだと思つて賣つてしまふが、どうぞ降られたくねえものだ。

松　隨分こつちも滅法界なかけ値を言ふが客人も、思ひ切つて値切るぢやあねえか。

竹　此間も南天を二分だと言つたら客人が、たつた百に値切つたが、實は掛値が多いからだ。

松　しかし緣日なれねえ人に、知らず半分値につけられた時は、思ひがけねえ餘祿をする。

竹　それだから、つい高く餘計に掛値をする氣になる。

松　何にしろ降らねえ内に、ちつとも早く出掛けよう。

竹　どうか、知らず半分値の客人が引かゝればいゝが。

ト時の鐘、水音にて兩人下手へはひる。時の鐘打上げ、床の淨瑠璃になる。

〽行く空の星も微に二つ三つ、雲間の影をよすがにて、心も細き田圃道、杖に縋りて漸々と歩み來りし才次郎、道のかたへに彳みて、

ト時の鐘かすめて水音、上手より前幕の才次郎、打たれて體の痛む思入、垣根の古き竹を杖にして出來り、思入あつて床の合方にて、

才次　あゝ悔しい〳〵、小萩ばかりはあの樣な、不實な者とは思はなんだが、二世の誓ひを反故になし、殿に隨ひ妾となり、最前逢つた其時に、碌々おれに詞もかけず、持病の癪が起りしと、僞り言うて奥へ逃げ込み、見下げ果てたる不實者、いつか拾つた短刀を持つてゐたなら飛びかゝつて、殺さぬ迄も小萩が顏へ、疵でも附けてやらうもの、路用に困つて屑買ひに僅かな金で賣つてしまひ、今更思へば殘念な、刃物がなくては叶はぬゆゑ、すご〳〵歸る不甲斐なさ、どうした事なら腹が癒えやう。えゝ口惜しい事ぢやなあ。

〽齒嚙みをなしてはら〳〵と悔し涙にくれ果てゝ、寺島村の尼寺へ歸る小尼が行き當り、顏

を覗きてびつくりなし、

ト才次郎跡を振りかへり、悔しき思入、上手より前幕の小尼妙眞、鼻緒の切れし片々の草履を提げ、しく／＼泣き乍ら出來り、才次郎に行當り、顔を見てびつくりなし、

妙眞　あれ、怖いわいの。（ト顫えてゐる。）

才次　これ／＼、何をお前は驚くのだ。

妙眞　どうぞ助けて下さりませ。

才次　何を助けてくれといふのだ。

妙眞　大方わたしを喰はうと思つて、それで爰へ出たのであらう。

才次　お前を喰はうとは、そりや誰が。

妙眞　誰でもない、お化のお前が。

才次　そんならわしがこんな顔ゆゑ、化物だと思つたのか。

〽その化物と思はるゝも、是も誰ゆゑ小萩ゆゑ、

恨みを返してやりたいにも、毒氣に弱りし體ゆゑ。

〽所詮及ばぬ事なれば、いつその事に身を投げて、死んで恨みを晴らさんと、見かへる顔の

物凄く。

ト才次郎上の方へ向ひ、きつと凄き思入、妙眞は逃げようとして、足が竦み行かれぬこなし。

妙眞 誰ぞ來て下されく。（ト才次郎氣を替へ、）

才次 これく、何も怖いことはない。こんな顔になつたゆゑ、化物と思ふであらうが、わしはたゞの人間なるぞ。

妙眞 それではお前は、たゞの人かえ。

才次 おゝたゞの人ともく、神田產れの商人だ。

妙眞 神田は何處だか知らないが、おいらも神田の生れだよ。

才次 同じ神田の生れかえ。さうして何處へ歸るのぢや。

妙眞 向島へ歸ります。

才次 暮れては淋しい向島、早う寺へ歸るがよい。

ト言はれて小尼はしくく泣き、

妙眞 お師匠さんに叱られますから、今夜は寺へ歸られませぬ。

才次 そりや何ゆゑに。

妙眞　今日貰うた手の內を。

〽今土手に居る野伏りに皆取られてしまつたから、庵へ歸ればお師匠樣に、何におあしを遣うたと、折檻されるが怖いから、

今夜は庵へ歸りませぬ。

才次　さういふことなら使ひ殘りの僅かなれどもおあしがあるゆゑ、是をお前に上げるから、貰うた積りで歸るがよい。

ト財布から端錢を出してやる。妙眞頂いて、

妙眞　有難うござります。これで庵へ歸られまする。

才次　そのかはりに折入つて、わたしがお前に賴みがある。

妙眞　わたしに賴みとおつしやいますは。

〽襟にかけたる守を出し。

ト掛守袋を出し。

才次　是をお前に上げるから、わたしと思うて念佛を守袋へ唱へて下さりませ。（ト妙眞に渡す。）

妙眞　あい〳〵、今日のお禮に、お勤めの時每に唱へて上げませう。

才次 それを頼めば川はない。少しも早く歸りなされ。

妙眞 そんならお別れ申しまする。

〽小尼は跡を振りかへり、小梅の方へ急ぎ行く。〽跡を見送り吐息をつき、

ト妙眞跡を見返りながら下手へはひる。才次郎思入あつて、

才次 年はゆかねど利口な小尼、勤めの時に念佛を唱へてくれゝば此身の引導、暮れゝば往來も稀なれば、枕橋より身を投げて死んで恨みを晴らしてくれん。

〽萌出し草に置く霜も、一足づゝに消えて行く、命も詰る春の夜に、

ト才次郎しを〳〵と下手へ行つては立留り、死兼ねる思入。

とは言へ此儘死ぬのも殘念、とても死ぬなら屋敷へ踏込み、恥でもかゝして腹癒せん。

〽又も恨みを返さんと、筑波おろしの風烈しく、立かへりたるこなたより、跡を附けたる三人が顯はれ出て取圍み、

ト此内才次郎思入あつてきつとなり、恨みを返さうと後へ立ちかへる。時の鐘、風の音になり、上手より、馬淵運藏戸倉傳八、中間權兵衛尻端折りにて出來り、

運藏 わざ〳〵屋敷へ行くに及ばぬ、爰でおのれを殺してやらう。

才次　や、さういふこなたは運藏殿、それに荷擔の二人の者、さてはわしを殺さうと、後から附けて來たのだな。

運藏　如何にもわれが言ふ通り、最前屋敷で殺さうと、存じたなれど悪事は千里、世間の噂になる時は、御家の恥辱になることゆゑ、そのまゝ無事に歸したは、往來稀な此土手で、殺す積りで附けて來たのだ。

才次　さては小萩が邪魔になるゆゑ、殿が殺せと言附けたか。

傳八　いや、殿ばかりではないお妾の、小萩どのも共々に、殺してくれろと頼んだのだ。

才次　え、すりや小萩迄共々に、我を殺せと言ひましたか、思へば憎き女よな。

〽憎しと思ふ一心に、眼逆ずり生え殘る髪も逆立つ如くにて、睨み詰めたる物凄さ。

　トオ次郎上手を見詰め、悔しき思入。權兵衞側へ寄り、

權兵　嘸悔しからう〳〵、手前は以前は小萩樣に、二つ枕でしつぽりと汗をかゝせたことがあらうが、今は御前の妾となり、その樂しみに輪をかけて、嬉しい思ひをするだらう。不便やそんな面になつては、人は愚か雌犬でも手前と一緒に寐やあしねえ。

運藏　そりや權兵衞が言ふ通り、世間知らずの御前だから、あたりの人の居るのも構はず、とつ附いた

りひつ附いたり、まだ我々も四十にならねば、實に氣の惡いことではある。

傳八　しかし乍ら我々は、小萩どのにどのやうな、旨味があるか知らないが、それを知つてる才次郎、思ひ出したら腹が立たう。嘸悔しくつてたまるまい。

運藏　氣を揉ませるも不便ゆゑ、今夜爰で殺してやるから、再び娑婆へいゝ男に、生れ替つて出るがいゝ。

傳八　さうしたならば女も惚れやう。よく人三化七と醜いもの ゝ 事を言ふが、手前は七と三所か十二分の化物面、早く死んだがましだらう。

運藏　どれ、一思ひに殺してやらうか。

才次　そんならどうでも殺す氣か。

運藏　小萩どの ゝ 邪魔になる、以前の情人の才次郎。

傳八　手前を殺してしまはにやあ、枕を高く寐られぬわ。

才次　む ゝ 殺さば殺せ今爰で、刀の銹になるとても、憎しと思ふ一念は、此世に殘つて殿を初め、小萩の命をとらでおかうか。

〽屋敷の方を見返りて、欺かれたる悔しさに、我と我身を搔きむしり、物狂ほしき有樣は、

身の毛もよだつばかりなり。

トうすき風の音、才次郎口惜しき思入よろしく、

權兵　それぢやあ手前は音羽屋に面が似てゐる所から、幽靈になつて殿樣や、小萩樣を殺す氣か。

才次　爰で非道に我を殺すおのれらとても生けてはおかぬ、共に冥土へ連れて行くぞ。

運藏　所謂これが下世話に言ふ、引かれ者の小唄とやら、取り殺すなら殺して見ろ。

傳八　默つてゐりやあ不便だから、唯一思ひに殺してやるが、

權兵　憎まれ口を利くからは、嬲殺しにしてくれるぞ。

才次　あゝとても命のない體、心の儘に殺してくれ。

運藏　えゝしやらくせえ世迷言。どれ一思ひに、

三人　殺してくれう。

〽運藏、傳八兩人が刀拔きつれ斬りかゝるを、拔けつ潛りつ風に散る梢の花と諸共に、明日は世になき才次郎、死ぬる覺悟に立ちかゝるを、襟上取つて權兵衛が引擦り倒せば起上り、武者ぶり附くを面倒と弓牛馬手より斬下ぐれば。

ト此内運藏、傳八拔きつれ斬つてかゝるを、才次郎拔けつ潛りつ、砂をとつて打ち附け立廻りよろし

く、權兵衞才次郎の襟上を取つて酷く引倒す、起上つてひよろ〳〵と立掛るを兩人斬下げる。これにて糊紅になり、これより合方誂への鳴物になり、四人立廻りよろしくあつて、

〽しち面倒と運藏がはつたと蹴れば才次郎、川へどんぶとおちこちに鳴き居る蛙も音を止めて水音殘る川中より、岸へ縋りて匐上るを、ぐつと突込むとゞめの刀、走る血汐に水面は、芽出し紅葉の唐紅、物凄くこそ見えにける。

ト文句の如く運藏才次郎を蹴る。才次郎よろ〳〵として川へ落ちる。是にて蛙の聲止み、三人水中を見る。爰へ川の中より才次郎の吹替顏へ糊紅を附け、後向きに岸へ手をかけ匐上らうとするを、運藏肩先へ刀を突立て、ぐつと川の中へ突込む、ドロ〳〵のやうな水の音にて、波布へ血汐にじむ仕掛よろしく。

運藏 やれ〳〵、骨を折らしやあがつた。(ト兩人刀を拭ひ、)先づ才次郎を殺してしまへば、

傳八 小萩どのゝ惡足なく。

權兵 これで殿樣も御安心だ。(ト川で手を洗ひながら)此才次郎はわしなどには、口塞げに酒を買ひ、隨分めりを出したから、別れに恨みもねえけれど、あの美しい小萩樣をあいつが抱いて寐たかと思ふと、岡燒餅で面が憎く、さつき押上で出逢つた時、小萩どのは甲州から歸ると直にお妾になつ

た樣に噓をつき、氣を揉まして歸したら、小萩樣がお妾になつたといふも不思議な事だ。

運藏　それは手前ばかりでなく、我々どもゝ岡燒餅、それゆゑ疾うからお妾になつて御前と仲がよく、夜晝なしに睦じい樣に言つたがその實は、今夜が御前と新枕、

傳八　定めて祝ひの御酒宴が、御殿で立派にありませう。

權兵　早く歸つて私共も、御酒を頂戴したいものだ。

ト ばたく水の音にて、上手より紺看板の中間、桐の紋の附きし箱提灯を持ち出來り、三人を見て、

中間　そこにおいでなさいますは、馬淵樣ではございませぬか。

運藏　そちは三平、何んぞ御用か。

中間　もし大變が出來ました。

三人　なに、大變とは。

中間　只今小萩樣が自害をなされ、お果てなされてござります。

三人　えゝ。（トびつくりなし、）

運藏　すりや、自害なされしとか。

傳八　早く知つたら才次郎を。

運藏　これ、滅多なことを。
傳八　何にしろ骨折損、こんな詰らぬことはない。
中間　それゆゑ早くお歸りあるやう、御前よりの御意でござりまする。
運藏　然らば直に歸邸いたさん。
傳八　どれ、御同道、
兩人　いたします。
ト時の鐘、合方にて三人に中間附き上手へはひる。上手藪の蔭よりお民出て、
お民　今中間衆の言ふのを聞けば、小萩樣が自害してお果てなされし御樣子、如何なる譯か知らねども
あゝ惜しい事をしましたなあ。それにつけても才次郎殿、さつきわたしが留めるも聞かず、屋敷
へ恨みを言ひに行つたが、是も生死の程もわからず、あゝ、心掛りな事ぢやなあ。
ト案じる思入、後ろへ權兵衞窺ひ出て、お民に抱き附く。
あれえ。（ト振り解く。）
權兵　何も驚くことはねえ、ちらりとお前の姿を見たから、取つてかへした此權兵衞、うんと言つて抱
かれて寐るか、いやだと言やあ腕づくで、縛り上げても抱いて寐るぞ。

お民　なんでおのれの自由にならうぞ。

權兵　うぬ、さうぬかしやあ、手短かに。

ト水の音、稽古囃子になり、お民逃げるを追廻す立廻りよろしく、よき程に上手より、因幡小僧新助好みの拵へ、尻端折り草履にて出來る。權兵衞これをお民と思ひ新助に抱き附く。

新助　えゝ、何をしやあがる。

ト突退け、ちよつと立廻る。此時誂への人魂ふわ〳〵と出る。お民見て、

お民　あれえ。（ト新助に縋り附く。權兵衞かゝるを引付け、）

新助　今の光りは。（ト權兵衞を突倒す。これを木の頭。）人魂だ。

ト流行唄の合方、稽古囃子にて、

ひやうし　幕

四幕目

八王子驛博勞内の場

同横山横町妾宅の場

〔役名――因幡小僧新助、博勞中野初右衞門、馬士大戸の勘八、同小金井の佐九郎、同八王子の九郎

八、同小佛の藤次、同高雄の吉藏。初右衞門女房おたつ、雇婆澁紙のおくろ、初右衞門妾おさよ、同娘おのち、おくろの悴高吉等。」

（八王子博勞宅の場）――本舞臺四間中足の二重、藁庇本緣附き、眞中丸木の沓脱ぎ、上の方一間反故張の障子屋體、正面上手一間の押入、つゞいて一間障子の出這入、下の方一面鼠壁、これへ馬の尻がひ轡など釣しあり、二重の下手九尺の馬部屋、藁庇、前へ莚をおろしあり、いつもの所竹簀の門口此下手に草井戸あり、ずつと下の方生垣にて見切り、總て八王子博勞住家の體、二重の上に馬の鞍を二つおき、平舞臺の後ろに飼葉の藁を大分積み重ね、よき所に裾を遣ふ盥をおき、馬士小金井の佐九郎、同八王子の九郎八、草鞋を脫ぎ、下駄を履き、足を拭ひ居る。此見得宿場騷ぎにて幕明く。

佐九　まだ日が暮れるか暮れねえ内から、だいぶ宿で騷ぎやあがるが、おれの女のとけえでも、晝から寄つた客ぢやあねえか。

九郎　裾を遣つて部屋へ入れ、飼葉をあてがへば役は濟むんだ。夜食を喰つたら八藏のとけえ小皿が毎晩出來るから、小遣え取りに出かけべい。

佐九　そりやあ駄目だから止すがいゝ、小遣ひ取りになりやあいゝが、取られて歸つて親分に、がりを喰ふのが見える樣だ。

九郎　いゝがりを喰ふとは手前の事だ。錢もねえのに又昨夜、女の所へ行つたでねえか。

佐九　そりやあさうと、昨夜親分の妾のとけえ行つて、酒の錢でも借るべいと障子の穴から覗いたゞ、するとあの新助野郎とおさよ女郎がちゝくつて、いゝべろごつこをしてゐたと思へば、おつくり返つて押ツくらだ。

九郎　あに、押ツくらア始めた。

佐九　間男するも同然だと、中へ這入つておッ捕へべいにも新助野郎に借りはあるし、業が煮えてなんねえから、こつちも一と晩道化べいと、女のとけえ揚つたが、生憎廻しが三人あつて、たうとう今朝まで來ずじめえだ。

九郎　さういふ事を親分が、知らずに女馬に乘つてゐるたあ、日野の原ぢやねえけんど、鼻の下が長丁場だ。

佐九　違えねえ、あはゝゝゝ。

ト笑つてゐる。爰へ上手の障子屋體より、娘おのちやつし裝、博勞の娘の拵へにて出來り、一間を氣遣ふこなしにて、

のち　あれ靜かにしておくれでないか。そんな大きな聲で言ふと、お母さんに聞えるわいなあ。

九郎　大きな聲をする氣もないが、これが地聲の馬士調子だ。
佐九　そんなら奥へ聞えたか。
のち　今お母さんが、すや／＼と寐ておいでだからよいけれど、手に取る樣に聞えたわいなあ。
佐九　煩つてゐる姉御が聞いたら、大騷動がはだかるべい。
九郎　あの血の道の病にやあ、江戸の大坂町の本家だといふ、高木の清婦湯が一番だが、此宿にも取次ぎがあるから、あれエ買つて飲ませたがいゝ。
のち　その清婦湯のお蔭にて、昨日から漸々と、落着いた樣子やわいなあ。
九郎　血の道で逆上せるなら、高雄山の瀧へかゝつて、おツ下げたらどうだんべい。
のち　その瀧よりは父さんが、優しくして内にゐれば、それが一番利くわいなあ。
佐九　あんでも姿のおさよ狐を、
九郎　おツ拂はにやあ駄目なこんだ。
のち　あれ、又奥へ聞えるわいなあ。
　ト氣遣ひながら、上手へはひる。騷ぎ唄きつぱりとなり、花道より澁紙のおくろ、雇ひ姿にて、高吉の小僧ツ子を引きずり出來り、花道にて、

高吉　おつかあ、今度から行かねえから、堪忍してくんねえな。
くろ　いや手前の樣な碌でなしは、親分樣に言ツ附けて、仕置をしにやあ直らねえ。えゝ、さつさと歩きやあがれ。

ト舞臺へ來る。佐九郎、九郎八門口へ出て、

佐九　誰かと思やあ、おくろ婆あさん。
九郎　又小僧がしくじつたか。
くろ　二人の衆聞いておくれ、誰に似たのか此餓鬼は、產れ立ちから手癖が惡く、奉公先きで錢をくすね、伊勢參りに行つた限りで、其後行方が知れぬのは、厄介拂ひだと思ふ內にわたしが爰の飼ひ殺しになつてゐるのを聞出して、來ずともいゝに尋ねて來て、わたし同樣親分の御厄介になつてゐながら、惡戯をしちやあならないと、口五月蠅く言ふ口の下から、賭場へ立入り皆から、使ひの錢を貰つたと、まだ椎の實の癖にして、女郎買ひをして昨夜一晚こちらの內を明けたとは、呆れて物が言はれぬから、居所を搜して親分に仕置をして貰はうと、今引ずつて來ました。
佐九　それぢやあ奴は昨夜女郎買ひに行つたとか。
九郎　外の親なら叱るもいゝが、お前の子ぢやあ無理はねえから、捨てゝ置いたがよかんべい。

しくトゞ梅枝、あやめハせりふ行て（兩人）に大事になさ
れ升せト兩人ハ下手へとゝ入る跡向ふゟ（家橘）曽根梁之丞
裃上下大小にて出て來り、母上只今詣り升た（璃）はんに
旦那殿（芝げ）ヲ、待兼たゥ／＼お上の御様子ハト家橘
有絹など取りこなし有て（家）思ひ懸ない妹が不埒兩人お
民を連詣り迯義数さんと役人中へ願ひし處御嫌疑懸りし
付人お民此方にて御許義の濟ざる内ハ引渡す事相成らぬ
と厳しき御沙汰夫に付又一命に係ハるべき心配の義が出
來いたし升た（芝げ）ヱ、スリヤ又何故ト是ゟ（家）不義を
働らき出奔せしハ不埒なれども若氣の至
りと御宥免もあるべけれど昨夜お手元金
三百兩と則一文字のお短刀が同時に紛失
正しく妹が手引にて奪ひしものならんと
の御嫌疑妹と共に出奔せし相手の男が所
行とも思ハれねど妹故よ忠義一圖の拙者
まで斯くお疑ひを受るの無念一家中への
決白に某し切腹いたしアわけ何卒先立不
孝ハお免下されト思入にて云（芝げ）ヲ、

くろ　いえ、こんな奴は捨ておくと、どんな惡戯をするかも知れぬ。
佐九　さういふお前が十二の年に、男をこせえて親の內を、つん逃げたといふ話だから。
九郎　奴がその氣を受けついて、今から女郎の味を覺え、おえねえものになるだんべい。
くろ　あれ、だれがそんな事を言つたか、此餓鬼の前でよして下さい。
高吉　なに、おつかあの助平は、下つた眼尻で知れてゐらあ。
くろ　えゝ、又親を馬鹿にしやがるか。
　　ト高吉を追廻す。騷ぎ唄きつぱりとなり、花道より博勞中村初右衞門、好みの鬘着流し、派手なる拵へ、駒下駄にて出來り、舞臺へ來て此中へはひり、
初右　これさ、おつかあ、門端で、何をそんなにおこつてゐるのだ。
くろ　親分樣聞いて下さい。昨夜此餓鬼が內をあけて、女郎買ひに行つたといふ事。
初右　はて、お前の子だもの、その位な事はするだらう。
くろ　お前さん迄が、そんな事を。
佐九　誰の心も違はぬから、
九郎　そんなに奴を叱らぬもんだ。

高吉　言へば言ふだけ親の恥だ。
くろ　うぬ、どうするか見やあがれ。
初右　はてまあ、內へ這入るがいゝ。
　　ト皆々內へはひり、よろしく住ふ。上手の屋體よりおのち出て、
のち　お父さん、お歸んなさい。（ト辭儀をする。）
初右　昨夜は日野の三五郎の、賭場開きで呼ばれて行き、遲くなつて泊つたから、お辰がぐづ／＼言や
　　あしねえか。
のち　あい、それゆゑに昨夜一晚、わたしや少しも寐ませなんだ。
初右　長い病氣で寐てゐながら、あいつの愚癡にも困つたものだ。
　　ト此時上手の障子屋體より、女房お辰やつれし病人の拵へにて出來り、やにはに初右衞門の胸倉を取
　　り、
お辰　さあ何處へ泊つて歸んなすつた。こんなに氣ばかり揉ませるゆゑ、段々病氣が重るばかり、所詮
　　治らう筈はない。大方わたしの死ぬのをば、お前は待つてゐなさるだらう。（トよろしくこなし。）
初右　えゝ、見つともねえ、放さねえか。昨夜は日野の三五郎の所で、夜を更かして泊つたのだ。

お辰　何で日野へ泊るものか。おさよの所へしけ込んで、鼻毛をよまれて寐ねえから、今頃晝寐をして寐ほけツつらで歸つたのだ。

くろ　あゝもし〳〵お上さん、親分さんは昨夜は全くおいでなさいません、何より證據は私が、おさよさんの内にゐるから、よい證人でござります。

お辰　胡摩摺り婆め、默つてゐろ。何んでおのれが當になるものか。頼みに思ふ亭主に迄、こんなに邪魔にされるなら、早く死んでしまひたい、わたしや悔しい、悔しいわいなう。

　　　ト　よろしく泣く。おのち氣を揉むこなしにて、

のち　これおッ母さん、その樣に氣をお揉みだと病ひの毒、なほ〳〵重るばかりだから、氣を落着けて下さんせ。（ト是れにてお辰、おのちを引寄せ、）

お辰　そなたが不便なばつかりに、切ない思ひを辛抱して、ひく〳〵活きてゐるけれど、そなたがなければ井戸へでも、這入つて疾うに死ぬ軀、あゝ悔しい〳〵、悔しいわいなう。

　　　ト　又泣伏すをおのち介抱する。佐九郎、九郎八此體を見て、

佐九　親分、どうかこれからは、なるたけわきへ泊らぬ樣に、内へ寐て下せえまし。

九郎　姉御がこれだとおのちさんが、氣を揉んでなりましねえ。

ト是にて初右衞門思入あつて、

初右　女は愚癡といひながら、かうも手前はわからねえか、長煩ひで寐てゐるから、おれに何かと氣の毒ゆゑ、外に馴染の氣に入つた女があるなら内へ入れ、手かけ妾においてくれと、手前が勸めておきながら、何でそんなに燒きやあがるのだ。（ト是にてお辰くわつとせき立て、）

お辰　さあ何でおいらが分からねえのだ。あんな女を内へ入れては、爲にならねえから追ひ出したを外へ圍つて死ねがしに煩つてゐるわたしをば、邪魔にされては此子迄、大方お前は邪魔であらう。わたしが死ねば女郎にでも賣る料簡に違ひない。さあその憂目を見やうより、此子とわしを殺しなさい。さあ殺せ〳〵殺さぬかいなあ。（ト初右衞門へ喰つてかゝるを留めて、）

のち　あれお母さん、それが惡い、お前がそんなにお逆上だと、わたしや悲しい、悲しいわいなあ。

お辰　いや殺されて死ぬ方が、そなたも苦勞が休まらう。留めずとそつちへ退いてゐや。さあおさよめに化されて、わしがそれ程邪魔ならば、早く爰で殺しなさい。

ト立騷ぐゆゑ、おくろ、佐九郎、九郎八留める。此内高吉おろくの帶の間より巾着を拔きとり、下手にて金をくすねてゐる。おくろ心附かず。

くろ　まあ〳〵、下においでなさい。

お辰　えゝ、邪魔をせずと退いて居ろ。

ト立騒いでゐる。初右衛門もきつとなつて、

初右　默つてゐりやあいゝかと思つて、いゝ加減に暴れておけ、死損ひのくせとして、亭主に向つてふざけるな。

くろ　あれ、そんな事をおつしやると、猶々あちらが募りますから、あなたは何んにもおつしやるな。

お辰　えゝ、おのれ迄が此わしを、踏附けにしたその詞、あゝ悔しい〳〵、悔しいわえ。（ト泣伏す。）

のち　母さん、後生でござんすから、氣を落ちつけて下さんせ。

佐九　何にしろ爰にゐては、猶々病氣が募るばかりだ。

九郎　悪い様にやあせまいから、奥へ行つてせぶらつせえ。

お辰　いや〳〵何で寐られるものか。

佐九　はてまあ、奥へ、

兩人　ござれといふに。

ト厭がるお辰を無理に連れて、佐九郎、九郎八上手へはひる。おのちも泣き乍ら附いてはひる。跡におくろ思入あつて、

くろ　私がゐてはお上さんの、猶々お氣に障るから、早くお暇いたします。
初右　こんな話しはあのおさよに、下らねえから言つてくれるな。
くろ　それはよろしうござります。

ト爰へ奥より佐九郎、九郎八出來り、

佐九　やれ〳〵、内の姉御の燒餅は、世間並より餘程えらい。
九郎　やつとの事で寐かしたから、親分逆らつちやあなりましねえ。
初右　手前達にも詰らぬことで、厄介をかけて氣の毒だ。
くろ　あちらのお内へ親分さん、何も御用はございませんか。
初右　いゝから早く行けといふに。
佐九　わしらも是から風呂へ行くから。
九郎　道迄一緒に連立つて行くべい。
くろ　おや、道行きとは有難い。
高吉　婆あの癖に呆れたもんだ。
くろ　えゝ、此餓鬼め、何を言やあがる、親分さんにお願ひ申して、きつと仕置をしにやあならぬが、

こちらの内のお取込みに、出直して來るから、すつこんで居ろ。
ト三人連立ち門口へ出る、おくろ帶の間を探りながら、
さあ〱ないぞ、こりや大變、今の騷ぎのごた〱に、内へ落したに違ひない。（ト立戻る。）

佐九　おい〱、おくろどん。

兩人　何が無いのだ。

くろ　一分はひつた巾着を、今の騷ぎで落したから。
ト此時高吉　巾着を出し、

高吉　おつかあ、おれが拾つておいた。

くろ　箸にも棒にもかゝらぬ奴だが、是ばつかりは感心だ。（ト巾着の中を改め、）こりやあ肝腎の一分が無い。

高吉　その一分は、おいらが貰つた。

くろ　えゝ、ふざけるな、こつちへよこせ。

高吉　是で今夜も、泊りに行くのだ。（ト逸散に花道へはひる。）

くろ　うぬ、待ちやあがれ。（ト追ひかけてはひる。）

佐九　どつちもこつちも、

佐九
九郎　呆れたものだ。

ト宿場騷ぎにて、兩人花道へはひる。跡時の鐘になり、初右衞門思入あつて、

初右　いや、成程女といふものは、心の狹えものだなあ。（ト變つた合方になり、）自分が長の病氣でるから、妾を置いてくれとの頼み、丁度いつぞや江戸へ行き、仲間に誘はれ新宿で一晩遊んで喰附きに、馴染を重ねたあのおさよ、親は勿論身寄りもなく、便りなき身と泣き附かれ、思ひも寄らぬ惡錢の手にある内と年季を拔き、連れて歸つて内へ入れ、酒の相手においてみたが、もう追々に年頭の娘があつては當人も、居憎からうと此宿の横山町へ別にして、世話をするのも相談づく、あんなに燒かれる筈はねえが、跡の月から打つて變り、氣を揉み出して騷ぐのは、おくろ婆あが内々で、おれに知らせた一件でも、女房が外から聞込んだか、何につけても親方とか馬方株とか言はれるおれが、女郎を請出しいゝ氣になり、圍つておいたが皆誤り、こりや一と工夫しにやあならねえ。

トぢつとこなし、是より又宿場騷ぎになり、花道より馬士大戸の勘八、同　小佛の藤次、同　高雄の吉藏の三人、褞袍三尺裝の馬士にて安下駄を履き出來り、直に内へはひり、

勘八　親分、内にゐなすつたか。
初右　珍しく三人連れでよく出て來た。こつちへ上れ。
勘八　それぢやあ親分、御免なせえ。二人とも上るがいゝ。
藤次　親分御無沙汰しましたが、月が替つてめつきりと夏の陽氣になりました。
吉藏　どうでも陽氣の替り目で、姉御はどんな容態か、つい〳〵無沙汰になりました。
初右　知つての通り長の病人、寐たり起きたりしてゐるので、側も困れば當人も只焦れ込んで、愚癡ばかりこぼしてゐるには困りきる。
勘八　それといふのも狐から。
初右　えゝ。
勘八　いやさ、それも常から氣の狹い姉御の事ゆゑ氣で氣を病み、煩つてゐる樣子だが、さて女房に煩はれる程何かと不自由なものはない。
初右　それはさうと、日暮に三人連れで、なんぞ用でもあつて來たのか。
勘八　ちつと親分に折入つて、賴みがあつて參りました。
初右　なに、折入つて賴みがあるとは。（ト合方きつぱりとなり、）

勘八　外の事でもござえませんが、此三人はお前さんの長らくお世話になりまして、お世話になつた馬士仲間、どこへ行つても八王子の初右衞門の子分だと、言へば仲間の通りもよく、肩身を廣く街道で馬追ひをして居ましたが、ちつとこれにやあ譯あつて、今度三人親分と子分の縁を切つて貰ひ、一本立の馬士になり、奥州の方へ出かけたく、それで揃つて出て來ました。

藤次　定めて三人藪から棒に、こんな勝手を言ひましたら、不實な奴とお前さんが思はつしやるでござらうが、是にやあちつと譯あつて、親分子分でゐる時は、都合の惡い一件があるので是非なく此頼み。

吉藏　何れ跡ではその譯も、自然と分かるでござりませうから、まあ何がなしに三人の頼みを聞いて親分の、廐だけ拔いて下せえまし。長年受けた恩返しは、縁は切れても三人で、きつとする氣でるますから、

勘八　頼みを聞いて、

三人　下せえまし。

ト是にて初右衞門思入あつて、

初右　そりやあそつちで頼むなら、親分子分の縁を切るのは、何の造作もねえことだが、これにやあ何

か込み入つた深い譯でもある樣子、それを打明け言つてから、緣を切るなら切るがいゝ。
勘八　いや、その譯は、なう二人。
藤次　言はねえ方が男らしく、
吉藏　跡でどの道分かる事だ。
勘八　聞かずに緣を、
三人　切つて下さい。
初右　いや、一生涯知れずにしまふ他言の出來ぬ譯ならば、こつちも無理には聞くめえが、跡で分ると
いふからは、おれの身分にかゝはつた事でもどうかある樣子、まあ遠慮なしに言ふがいゝ。
勘八　それ程迄に言ひなさるなら、それぢやあ爰で打明けようか。
藤次　言やあかれこれ親分も、氣を揉む程の話だが。
吉藏　打明けてから緣を切れと、言ひなさるなら是非がねえ。
勘八　實は親分譯といふのは、こなたが不便をかけなすつて、餓鬼の折から育つてやつた、新助野郎を
三人で、おつ拂ひたく思ふのだ。
ト是にて初右衞思入あつて、

初右　いや、その譯なら知つてゐる。三人ともに、耳を貸せ。

勘八　なに親分が。

三人　知つてゐるとは。（ト是にて初右衛門三人へ囁く事よろしく、）

勘八　それぢやあ疾うから、

三人　何もかも。

初右　はて、知らずに惡婆が、

トにつたり笑ふを道具替りの知らせ、

乗れるものか。（ト此模様騒ぎ唄にて道具廻る。）

（同　横山横町妾宅の場）――本舞臺四間常足の二重、上手一間、後へ下げて障子屋體、正面上手三尺の延喜棚、此下はめ込みの簞笥、續いて一間の押入、その外腰張りの茶壁、ずつと下手臺所口の心にて、一間の間障子の出這入り、下手二重の棲肘掛程の出格子の窓、此外正面後へ下げて格子戸の入口、三尺の戸袋、此下手三尺の路地口、つゞいて黒塀にて見切り、總て八王子横山町妾宅の體、能き所に行燈を灯し、上の方におさよ女郎上りの妾の拵へ、湯上り浴衣にて鏡臺に向ひ、化粧をしてゐ

る。眞中長火鉢の脇に以前のおくろ火を起してゐる。此見得、端唄の合方にて道具留る。

くろ　埋けた火が消えてしまつて、鐵瓶の湯が水になるとは、間の悪い時は一から十迄、皆とんちんかんに行くものだ。

さよ　何をそんなに愚癡を言ふのか。火鉢の火だつて留守にすれば、たまにやあ消える事もあるわね。

くろ　昨夜新さんにお貰ひ申した、お金をちよろり奴めに掻浚はれてしまつたので、延喜が悪くつてなりやあしない。

さよ　お前の子にお前のものを、持つて行かれたのは仕方がない。自分も昔親のお金を、持出した事があらうから、自業自得とお諦めな。

くろ　あの一分で移更への、浴衣が出來たと悦んだも、玉なしにしてしまひました。

さよ　單衣物位は此頃に、わたしがどうかしようから、そんなに愚癡をおこぼしでない。

くろ　さういふ金主が附きさへすれば、決して愚癡は申しませぬ。

さよ　それはさうと小母さん、わたしがお湯へ行つた留守に、新さんは見えなんだかえ。

くろ　いえ、お留守には見えませんが、さつき途中で逢ひましたら、晩に行くからとおつしやいました。

さよ　今夜は丁度親分が府中へ行くと言つてゐたから、その積りにはしてあるが、出掛けに寄らうも知れないから、今來られてはばつが惡い。

くろ　そんならちよつと捜しに行つて、さう申して置きませう。

さよ　何の、新さんの事だから、そこらに如在はあるまいが、知らせて置けば倘いゝが。

くろ　それでもちよつと行つて來ませう。（ト立上り、ハクシヨと嚔をして、）大そう寒くなりました。お前さんも湯ざめをして、お風を引くといけません。

さよ　着物を着換へてしまふから、鏡臺を片附けておくれ。

くろ　はい〳〵、畏りました。

トおさよ上手の障子屋體へはひる。おくろは件の鏡臺を後ろの押入にしまひゐる。合方きつばりとなり、花道より以前の初右衞門、好みの脇差を差し出來り、直に門口へ來て、窓の外より内を覗き、

初右　おい、おさよはゐるか。おさよ、おさよ。

くろ　はい〳〵、親分さんでござりますか。おさよさんがさつきから、お待ち兼ねでございます。

初右　いやおさよには言つてあるが、今夜は府中の六二の所に催しがあつて出向いて行き、向うへ泊るつもりだから、早く締めて寐るがいゝと、おさよにさう言つてくんなせえ。

くろ　はい〳〵畏りました。（ト上手へ向ひ、）もしおさよさん、親分さんがお出でゞございますよ。
初右　いや、直に行くから呼ぶにやあ及ばねえ。
くろ　いえ、ちよつとお待ち下さいまし。
　　ト此時上手よりおさよ、袷下浴衣の裝にて出來り、下手の格子戸のところへ來て、
さよ　おやもう、お出掛になりますか、まだ早いから親分さん、一と口上つておいでなさいな。
初右　いや日野へ一軒寄つて行くから、さうしちやあゐられねえ。それぢやあ今夜は歸らねえから、早く、締めて寢るがいゝ。
さよ　いえ、どうか遲くも歸られますなら、なるたけ歸つておくんなさい。
初右　歸ると思つて待つてゐて、寐ずにゐると氣の毒だから、向うへ泊るときめて行くのだ。
さよ　それでも府中は玉のいゝのが、門並あると言ひますから、浮氣をするといけません。
初右　よしてくれ、いゝ年をして、おれに浮氣が出來るものか。
くろ　いえ親分のお口前では、何處の女も迷ひます。
初右　おつウ油を掛けやあがる。（トおさよ長煙管へ煙草を吸ひ附けて、）
さよ　親初、爰から御免なさい。（ト下手の格子の間から出す。）

初右　こいつァとんだ袖引き煙草だ。（ト煙草を呑んでゐる。）
くろ　とんと花魁がいゝ人に、格子で逢ふやうでございます。
さよ　ほんにわたしとした事が、つい、お里が出てならないわね。
　　ト此内初右衛門煙草を呑んで、おさよに煙管を返し、
初右　それぢやあおさよ、行つて來るぜ。
さよ　お待ち申してをりますよ。
初右　手前の調子は、實に無類だ。（ト端唄になり、初右衛門思入あつて花道へはひる。）
くろ　さあ〳〵、是れで一安心、早く新助さんを搜して來ませう。
さよ　次手にお酒と二つ物を、若松へ寄つて誂へておくれ。
くろ　はい〳〵、よろしうござります。
　　トおさよ煙草箱の抽出しより金を出して、
さよ　さあ小母さん、こりやあさつきの入合せにおし。（トおくろ取つて、）
くろ　おや二分ございますが、これを下さいますか。
さよ　それでお前の氣に入つた、單衣物でもお拵へ。

くろ　悪い跡はよいと言つて、こんな有難い事はない。これにつけてもさつき取られた、一分があつたら三分になり、帯の側迄質はれるものを。
さよ　あれ、そんな愚癡を言はないで、早く新さんを見ておいで。
くろ　よければよいで慾が出て、濟まない事を言ひました。それでは是を頂いて、ちよつと行つて參ります。
さよ　それぢやお小母さん、頼んだよ。
くろ　直に搜して參ります。（ト右の端唄にておくろ花道へはひる。跡におさよ思入あつて、）
さよ　濟まない事とは知りながら、あの親分に請出され、世話になる身で新さんと、かうして逢曳きしてゐるも、知れた時には命懸け、こんな思ひをする程なら、いつそ二人で此土地を逃げてしまふが安心だ、今夜はゆつくり新さんと、相談をして見ねばならぬ。
ト是より下座の新内になり、
〽夕暮時の浮雲に心を乘せし四ツ手駕籠、ほんに揃うた肩と肩、時次郎は山名屋を、せかれて忍ぶ鷹の目に、かゝる浮身の夜の鶴、
ト此内おさよ下手の臺所の口より膳と燗徳利、その外酒道具を持つて出で、酒の支度をしてゐる。よ

き程に花道より新助袷下浴衣の裝にて駒下駄を履き出來り、直に門口へ來て、窓より內を覗き、

新助　おいおさよさん、お前一人か。（ト此聲を聞きおさよこつちを見て、）

さよ　おゝ新さん、丁度よかつた、早くこつちへ這入つておくれ。

〽かけると思ふおのが身も、かけられてゐる心どし、

ト此內新助內へはひりながら、駒下駄を持つてこちらへ來り、

新助　いつもの通りこの下駄は、何處ぞへ忍ばしておいてくんねえ。

さよ　今夜ばかりは安心だが、しまつて置くからこつちへお出し。

〽逢へば別れが思はれて、烏もさのみ憎からで、

トおさよ件の下駄を取つて、下手臺所の口へはひる。新助火鉢の脇へよろしく住ふ。おさよも出てよろしく住ふ。是より合方になり、

新助　大分いゝ聲が聞えるが、あの新內は後の內か。

さよ　今夜表の髮結の內へ、江戶から來た新內語りが、一二段語るから聞きに來いとさつきがた、內へも迎へが來てゐますよ。

新助　そりやあ此宿ぢやあ珍しくつて、嘸聞人が多からう。

さよ　さうしておつかあを迎ひに出したが、まだお前お逢ひでないか。

新助　今來る道でおつかあに出逢つて樣子は聞いて來たが、今夜は府中へ親分が、泊り込みとはいゝ首尾だ。

さよ　それについてゆつくりと、今夜はお前に相談をしたいと思つてゐますのは、何時が何時迄かうやつて危い橋を渡つてもゐられず、いつそお前と此土地を逃げた方がよからうかと、わたしや思ふがどうだらう。

新助　さあおれもお前とかうやつて、きはどく逢曳きしてゐるのも、薄々世間へ知れた樣子、いつその腐れ此の土地を、逃げようかとは思つてゐるが、お前を連れて逃げた日にやあ、大恩ある親分の顏へ泥迄塗らにやあならぬ。それよりいつそ今の内、互ひにさつぱり思ひ切り、是迄の事は水にして、知らねえ仲になつた方が、上分別だと思つてゐる。

さよ　あれ、それが出來る位なら、こんな苦勞はしやあしない。お前も恩があるだらうが、わたしもかうして請出され、何不自由なく世話になり、恩のあるのを知りながら、その親分の目を忍び、お前に逢ふは命懸け、義理人情を考へては、出來ない譯だがそれ程に、お前は恩が怖いのか、そんな事を言ひ立に、今更になり逃げようとは、そりやあ卑怯といふものだ。

新助　いや卑怯でもなんでもねえが、あの親分に受けた恩は、並一通りのわけでなく、話に聞いたか知らねえが、おれの親父は因州の大塚村の百姓で嘉右衛門といふ律義者、女房が死んで菩提の爲に十三になるおれを連れ、順禮に出て西國から美濃路へかゝり坂東を廻る積りで此宿迄、來た時丁度大雪で持病の惱みに取詰められ、おれを殘して往生したを、あの親分が親切に、取片附けをした上に、世に便りねえ此おれを、小僧代りに遣つてくれ、一人前になる迄は、どんなに恩があるかは知れぬ。それゆゑおらあ相談づくで、綺麗さつぱり今の內、別れてしまつて親分の顏を汚さぬ分別が上分別だと思ふのだ。

さよ　義理を思へばさうだけれど、わたしも初手からお前の話を委しく聞いて知つてゐれば、幾ら勤めの體でも、あの親分に買はれもせず身請をさせもせぬけれど、知らぬ勤めの一夜妻、出たのが緣で馴染になり、深いお前は譯あつて江戶に居られぬ事ができ、旅へ出たきり便りさへ、なしもつぶても長の月、ふさいでゐたその矢先き、江戶の歸りに親分が、連と一座で相模屋へ揚つた晩に見立てられ、出たのが緣で身請をされ、かうして妾になつたのも、色や浮氣といふでなし、新さんお前が不實をして、手紙を一本寄越さぬから、死んだと思つて親分に、身を任せたのも本妻が悋氣で內が揉めると聞いては、義理を捨ても逃げるより、外に思案はなからうと、思へどお前が

二の足とは、男らしくもござんせぬ。

新助　それぢやあおれが厭だと言つても、お前はどの道此土地を、逃げる覺悟に極めてゐるのか。

さよ　金で縛られその義理で、圍はれてゐるわたしでも、悋氣嫉妬で本妻が恨んでゐると聞く辛さ、もう此土地にゐる氣はない。可哀さうだと思ふなら、新さんどうぞ見捨てずに、一緒に逃げておくんなさい。

新助　さういふ覺悟と聞いてみりやあ、おれも恩ある親分に、義理は濟まぬが一工夫、どうにか法をつけにやあならぬ。

さよ　新さん今更見捨てると、わたしや死んで取り附くよ。

新助　まあ何にしろゆつくりと、今夜は相談するとしよう。

さよ　あのおつかあはどうしたか、早くお酒が來ればいゝ。

〽あの鷄が目かりせぬ、早く謳ふも客による、しんき〱とさしつめて、胸のつかへも今は早や、おすにさがらぬ揚屋町。

ト此内花道より以前のおくろ、岡持と酒樽を提げて歸り、內へはひる。新助びつくりして、

新助　格子が明いたが、誰だ〱。

さよ　なに、おつかあが歸つて來たのさ。（トおくろこちらへ來り、）
くろ　大きに遲くなりました。
さよ　それぢやあお前がお肴も、待つてゐて持つておいでか。
くろ　若松の出前持が出拂つたと言ひますから、酒屋の歸りに持つて來ました。
新助　そいつア大きに御苦勞だつた。骨惜しみをしねえ所が、此のをばさんの身上だ。（ト丼の錢入れより金を一分出し、）こりやあちつとばかりだが、好きなものでも買つて喰ひねえ。
　　トおくろ手に取つて見て、
くろ　これはまあお氣の毒な、今もおさよさんからお貰ひ申し、又こんなお心付けでは、濟みませんが頂きます。おさよさん、どうぞよろしく。
さよ　それではをばさん、さつきの樣に、もう愚癡はこぼすまいね。
くろ　奴に取られた一分があると、丁度一兩にまとまりますが、何んでも十分にはならないものだ。
新助　それぢやアあの奴に、をばさんは一分の金を取られたとか。
くろ　新さん聞いておくんなさい。まだ椎の實の餓鬼の癖に、女郎買をはじめまして、親の金を引浚ひ裏を返しに行きました。

新助　流石はお前の子程あつて、末頼しい料簡だ。
くろ　あれ新さん、いやでございますよ。
さよ　どうぞをばさん、お酒が來たらお燗を早くつけておくれ。
くろ　畏りました。

〽夜見世の支度にそれ〴〵の、部屋へ櫛箱鏡立、中のよい同士二三人、新造交りに打寄つて

ト此内おくろ件の樽より酒を徳利へあけ、鐵瓶にて燗をつける。おさよ岡持より二つ物の肴を出し、膳拵らへをする。新助これを手傳ふことあつて、

新助　裏の新内も今の内は、まだ下稽古をして居る樣だ。
くろ　御用がなくば裏へ行つて、聞いて來たうござりますが、なんぞお使ひはありませんか。
さよ　丁度よいからわたしの代りに、ゆつくりと聞いておいで。
くろ　それは有難うござります。新さん、今晩は御ゆるりと泊つてあげて下さいまし。
新助　泊つても居られないが、話してゐるから行つて來なせえ。
くろ　新内位世の中に、いきなものはありやあしない。

〽皆一同にばら〳〵と、下りる梯子の音絶えて、座敷々々も靜かなる。

トおくろ門口を出て思入あつて、下駄を脱ぎ、さし足して花道へはひる。おさよ燗徳利を鐵瓶より出し、

さよ　お燗がついたら、始めて下さい。

新助　若松の料理では、お前と二人で旨く飲める。

〽春雨の眠ればそよと起されて、みだれそめにし浦里は（ト新助酒を飲むことあつて、）あの明烏の新内を、聞くにつけても思ひ出すのは、お前が以前新宿の相模屋にゐたその時分、忘れもしねえ十月の、會式歸りに初會で揚り、明くる日降つてぶん流し、藝者を呼んだことがあつた。

さよ　あの時お前が蘭蝶を語つた聲を聞きつけて、二階中での岡惚れに、お玉といふ流行ツ子のお職がお前に血道をあげ、わたしをよさせていゝ人に、取らうとされて氣が氣でなく、

新助　嘘にもそんな意氣張りと、聞いてこつちも自惚れが、嵩じて通ふ四月越し。

さよ　三日と逢はねば又外へ、心が外れてこれぎりに、なりはせぬかと呼びたさに。

新助　勤め放れた扱ひと、思へば二日と足を拔き、その辛抱がしてゐられず、

さよ　人に痩せたと言はれる程、茶斷鹽斷してなりと、呼び通したく思つたも、

新助　今ぢやあかうした氣樂な身に、痩せる所か太り過ぎた。
さよ　お前に捨てられ自棄酒を、飲んでこんなに太つたのさ。
新助　なに、酒どころか親分を喰ひしめたので太つたのだ。
さよ　あれ、憎らしい。（ト新助をつめる。）
新助　あゝ痛え、そんなに憎けりやあ歸らうか。
さよ　歸られるなら、歸つて御覽。
新助　さう言はれると、居たくなる。
さよ　まあ一杯お飮ませな。
〽どうした緣でかの人に逢うた初手から可愛さが、身にしみ〴〵と惚れ拔いで、こらへ情なき懷しさ、人目の關の夜着の中、明けて悔しき鬢の髮、撫で上げ〳〵。
ト此内兩人新内を聞きながら、酒盛りよろしくあつて、
新助　どう考へても今言つた、恩があるから此土地に、うか〳〵しちやあゐられねえ。
さよ　わたしも一緒に逃げるから、卑怯なことをお言ひでない。
〽そなたも共にと言ひたいが、いとしいそなたを手に掛けて、

新助　いや〳〵おらあどうあつても、お前を連れちやあ逃げられねえ。

〽言ひ捨て立つを取付いて、

さよ　そりやあお前、情ないぢやないか。

〽今宵離れてこなさんの、まめで居さんすその身なら、又逢ふ事もあらうかと樂しむ事もあるべきが、

言ひかはしたのを反故にして、今更となり見捨てる氣なら、死ぬと覺悟をしてゐるから、お前の手にかけ殺しておくれ。

新助　これさ、そこが相談づくだ。そんな短氣は出しなさんな。

さよ　そんなら連れて逃げておくれか。

新助　どうもそれぢやあ親分へ。

さよ　えゝもう、そんなぢれツたい、わたしや死んでも別れませんよ。

〽男の肩に喰付いて、身を顫はして泣き居たる。

ト此内兩人新内を遣ひよろしくあつて、おさよ新助の側へ寄る。此以前下手より、大戸の勘八出て門口より内を窺ひ、窓より覗く。

〽遣り手のかやが聲として。（ト新助下手を見て、）

新助　誰か表に。

〽浦里はッと思へども、そしらぬ顔して、

トおさよ下手の窓の所へ來る。勘八差足して花道の方へ行く。

さよ　誰だえ。そこへ行くのは。

ト聲をかける、勘八びつくりして聲を違へ。

勘八　按摩ア、はりイ。（ト呼びながら花道へ逃げてはひる。）

さよ　按摩の癖に新内なぞを、聞かずともよいことを。

〽門の戸はたと差しかため、錠さす音ぞきびしける。

トおさよ下手の窓へ戸をはめて、締りをしてこちらへ來る。

新助　目が見えねえから聞くものは、按摩の方が巧者なものだ。

さよ　新さん、お前はどうあつても、わたしを捨て逃げる氣かえ。

新助　まあ何にしろゆつくりと、寐てから相談するとしよう。

さよ　それでは奥へ支度をするから、表の締りをしておくれ。

新助　締りはいゝがおつかあが、もうかれこれ歸る時分だ。

さよ　なに、おつかあも苦勞人だから、お前に渡りは貰つてあるし、今夜は多分歸るまい。

新助　それぢやあ裏だけ明けておかう。

ト替つた合方、時の鐘になり、おさよ上手の屋體へはひる、新助は門口を締め、酒肴の道具を片寄せてゐる。よき程におさよ出て、

さよ　さあ新さん、あつちへおいで。

新助　行くのはいゝが、爰をちつと片附けて置かずばなるめえ。

さよ　それはおつかあが明日の朝、歸つて來てから片附けるよ。

新助　それぢやあ直にお床入りか。

さよ　今夜はわたしや寐かさないよ。

ト兩人上手の屋體へはひる。矢張り合方時の鐘にて、花道より以前のおくろ先に、初右衞門、勘八、藤次、吉藏尻端折りにて出來り、おくろ門口を明けようとして明かぬゆゑ、初右衞門囁き、皆々を案内して下手の路地口へはひり、正面の舞臺の口より、初右衞門先に子分三人出る。此物音を聞きつけ上手の障子の内にて、

さよ　歸つたのは、をばさんかえ。（ト障子をかける。）

初右　いや、おれだ。初右衞門だ。

ト此障子を開き、上手の障子屋體の内にて、あわてる物音して、おさよ帶を締めながら出て、

さよ　おや親分、大層お早うございました。

初右　酒肴を誂へ込み、留守に浮かれてゐることを、知らせがあつて歸つて來た。

さよ　えゝゝ。（トびつくりする、子分三人前へ出て、）

勘八　文句は入らねえ、みんなして、野郎を爰へ引擦り出さう。

藤次
吉藏　それがいゝ〳〵。

ト上手の屋體へ立ちかゝる。此時屋體より新助出て、

新助　いや、引擦り出すにやあ及ばねえ。もうかうなつたら親分さん、逃げ隱れはいたしません。

ト前へ出る。

勘八　うぬ、その口から、

三人　ひん曲げて。（ト立ちかゝるを留めて、）

初右　あゝこれ、みんなまあ待ちやれ。野郎が覺悟をしてゐるのを、立騷ぐのは無駄なことだ。

勘八　でも、しやあ〳〵と、

三人　してうせれば。

初右　はてさ、おれに任せておきやれ。

　トきつと言ふ。是にて子分三人下手へ控へる。新助おさよはさし俯きて、面目なきこなし。初右衛門上手下にゐて、

やい新助、もうかうなつちやあ愚癡らしく、おれも手前が孤兒で、路頭に迷ふを引上げて、是迄世話をした事を、並べ立てちやあ言はねえが、恩はそつちに覺えがあらう、その恩人の目を盜み女と二人でちよくり合ひ、寐てゐる所を見られたら、覺悟をするより外はあるめえ。又女とても同じ事、新助程の恩はなくとも、苦界の勤めを請出され不足ながらもそれ相應、世話厄介になつた身で、ふざけた眞似をするからにやあ、罪は言はずと覺えがあらう。莫連女の根性ぢやあ、高が八王子近在で、馬を扱ひ世を渡るぼくねんじんと思つてゐようが、その伯勞のおれの目に屆かぬ女馬と睨んだから、飼つておいても尻癖の見出しにおくろを馬部屋の張番がてらに附けておき、野郎とふざけて居る事は、疾うから聞いて知つてゐたのだ。

勘八　大腹中な親分に、それと知つても知らねえ顏で、今日迄我慢をしなすつたが、子分の身ぢやあ見

てゐられず。

藤次　それと言はずに親分と、子分の仲を切つて貰ひ、他人になつて二人共、簀巻で川へぶち込まうと、

吉藏　三人揃つて出かけたも、又親分は親分だけ、料簡あつて二人共、寐込みへしかけばらすのが、早手廻しと出て來たのだ。

勘八　野郎め覺悟を、

三人　しやあがれ。（トきつと言ふ。新助思入あつて顏をあげ、）

新助　厚い恩義を並べ立て、おつしやらねえ程猶の事、面目もねえ此の新助、今更何を言つたとて、もう言譯は立ちませんが、何を隱さう此女は、まだ新宿で親分が買はねえ以前に馴染になり、末は一緒にならうといふ、女房約束した女、その頃江戸にゐられねえ、不始末あつて旅へ出かけ、上州路から出羽奥州、それからそれと歩いても流れ渡りに便りもせず、音信不通な所から、死んだと思つて親分に身を任せたも此土地で、思ひがけなく出逢つたのが、世にいふ惡縁、燒け木杭、それも濟まねえ義理合に、今夜さつぱり話をつけて切れる積りで出て來たも、犯した罪の振り切れず、種迄上つてしまつちやあ、命を投出し親分に詫びるの外はごぜえません。お腹も立たうが存分に成敗なすつて何事も、帳消しにして下せえまし。

さよ　さういふ譯なら此土地で、思ひがけなく出逢つた時、何故打開けて言はないと、お思ひなさるでございませうが、そこが女の淺はかに、明して言へば義理詰めで、亭主と思つた其人に別れる事にならうかと、思ひ過して親分のお顏へ泥を塗る樣な、そでない事をいたしました。又おつかあが親分の犬に這入つてゐた事を、知らぬ愚に何事も、お察しなすつて存分に、命を取つて是迄の罪を許して下さいまし。

新助　濟まぬ〳〵と言ひながら、矢張り未練に此内へ、しけ込んだのが身の誤り、

さよ　もうかうなつたら二人共、少しも未練はございません。

新助　さあ存分に、

兩人　して下さい。（トぢつとこなし。）

勘八　引かれもの〻小唄とやらで、惚け交りに身の言譯、聞きやあ聞く程癪に障らあ。

藤次　然し未練を言はねえで、二人命を差出すとは、惡黨だけにい〻覺悟だ。

吉藏　時代な樣だが二人共、重ねておいてばらさずば、親分恥が雪げますめえ。

ト是にて初右衞門思入あつて、

初右　言ふ迄もねえこいつらに、泥を塗られたおれが面、分別盛りの年をして、大人げねえと笑はれて

も二人をはらしてしまはにやあ、此後世間に面が出せねえ。言ひ置く事がそれ限りなら、並べて置いてばらすから、その氣でそれへ出やあがれ。

新助　もうかうなりやあ二人共、言ひ置く事はごぜえません。

さよ　どうぞ親分すつぱりと、おやんなすつて下さいまし。

初右　どれ、存分にしてやらうか。

ト合方きつぱりとなり、初右衛門は長脇差を抜き、後へ廻る。新助おさよは襟の毛を掻き上げ、目を閉ぢてぢつとこなし、子分三人これを見詰めてゐる。初右衛門思入あつて、刃を鞘へ納める。子分三人合點の行かぬこなし。

勘八　親分なんで、

三人　止めなすつた。

初右　今こいつらを殺した所が、一旦穢れたおれの面が、淨まるといふ譯ぢやあなし、年中甲斐もねえ仕方だと、中にやあ笑ふ人もあらう。元より浮氣な家業をする、藝者や女郎を請出して圍つておくのは當座の花、おれより先に新宿で夫婦約束した仲なら、綺麗に女はくれてやるから、どこへなりとも連れて行き、世間を晴れて夫婦になれ。

勘八　いや、腹さんざ此奴らにふざけた眞似をされた上に。
藤次　此儘見脫しやんなさるとは、そりやああんまり馬鹿々々しい。
勘八　それぢやあ親分つぶされた、こんたの顏が立ちますめえ。
初右　いや女房と言ふぢやあなし、何れ終ひは金でも附け、手切れ話にする女、掃場の出來たは幸ひだ。
　ト爰へ下手の障子をあけ、おくろ出て、
くろ　ほんに今迄親分が、知らない顏をなすつたのも、その御料簡でござりましたか。
　ト新助おさよ思入あつて、
新助　その親分の思召しは、淚の出る程有難えが、十二の年からお世話になり、恩も返さず目を盜み、そでねえ事をした新助、
さよ　またわたしとても新宿で、首の廻らぬ借金に跡へも先きへも行かれぬのを、救はれて來た親分のお顏へ泥を塗りましては、
新助　切られて死なにやあ濟まぬわけ、
さよ　罪滅しでござりますから、
新助　すつぱりやつて、

兩人　下さいまし。

初右　いや、そつちはおれに切られるのを、罪滅しだと思はうが、おれの方ぢやあ陰徳におさよを手前にくれてやるのは、女房の長の煩ひで、氣違えじみた譫言を、言ふのを治してやらう爲だ。

ト此時早い合方ばた〳〵になり、花道より以前のお辰逆上せし思入にて跣足で走り出る。是を娘のおのち、同じく跣足にて留めながら出來り、花道にてちよつと立廻り、直に舞臺へ來り門口にて、

のち　かゝさん、お前その體で、なんで驅出しなさんしたのぢや。

お辰　今夜もきつと此内へ來てゐるのに違ひない。女と喰合つて死んでしまへば、留めずに内へ歸つて居ろ。（ト格子へつかまり居る。）

勘八　外に居るのは、姉御の聲だ。

藤次　この夜半にどうして來たか。

吉藏　どれ〳〵、明けて見てやらう。（ト門口を明ける。）

お辰　さあ、おさよめは何處にゐる。爰の内へ死に來たのだ。（ト内へはひる。おのちも留めながらはひり、）

のち　どうぞ伯父さん、かゝさんを落着かせて下さりませ。（トおろ〳〵して居る。子分三人よろしく留めて、）

勘八　これ姉御、恨みの女は親分が、すつぱり切れてしまつたから、

藤次　もう心配をするにやあ及ばぬ。
吉藏　どうぞ心を、
三人　しづめて下せえ。
お辰　何で内の二木棒が、女を手離しやるものか。
勘八　はて、嘘か誠か、
三人　見てゐなさい。（ト無理に下にゐさせる。）
初右　さあ此始末だから二人共、ちつとも早く外へ出ろ。
くろ　長居をするだけお二人さん、却つて罪が重なりますぞえ。
新助　それぢや一旦立退いても、重なる御恩は忘れません。
さよ　もしお上さん、何事もどうぞ堪忍して下さい。
お辰　えゝ體のいゝ事を言やあがるな。
勘八　はてまあ、心を、
三人　しづめなせえ。
初右　さあ、是だから早く出ろ。（ト是にて新助、おさよを連れて門口へ出る。初右衛門下手の窓を明けて、）

これお辰、見て居る通り新助に、おさよをやつて追出すから、これで手前も安心しろ。

お辰 それぢやあ狐が落ちかゝつたか、はゝゝゝ。

ト笑つてうつとりとなる。此時日覆にて時鳥笛になり、

新助 今更何と言譯も、言つて返らぬ身の罪に、

さよ 雲井をかけて行く鳥と、共に落ち行く旅の空。

初右 歸るにしかずだ、早く行かぬか。

新助 御恩はきつと。（ト入替つておさよの手を取るな木のかしら、）お返し申します。

ト此模樣合方へ迷子の鉦太鼓を冠せ、本釣鐘の送りにてよろしく、

ひやうし 幕

五幕目

中洲新地水茶屋の場

〔役名――因幡小僧新助、馬士大戸の勘八、巾着切木鼠忠次、判人平家蟹の源次、雜俳宗匠、船頭。

水茶屋大和屋のおさよ、初右衞門娘おのち、巾着切蝮の次郎松、茶見世の小娘おでん等。〕

（中洲新地水茶屋の場）――本舞臺上の方、葭簀張りの出茶屋二軒、一軒は床几など片附け休みし體、下

寄りの一軒は大和屋といふ掛行燈、茶道具よろしく、後ろ竹の手摺、向う深川より永代橋を見たる遠見、裾通り石垣のはな、水除杭の天窓を見せ、下手船板の塀、内より見越しの松、「御料理樂庵」と記せし幟を出し、茶見世の前床几二脚、總て大橋中洲埋立地の體。爰に料理屋の若い者印絆纏着流し、船頭着流し三尺帶、宗匠道行ぶり、商人の若い者着流し前垂にて、四人床几に掛け、語呂の詠草を見てゐる。おでん島田鬘前垂、水茶屋娘の拵へにて茶を出して居る。此見得波の音、見世物の鳴物にて幕明く。

宗匠　お忙しいのに、よく出て來られたの。

料理　どうせ立話でございますから、肴拵えをしてしまつて、ちよつと詠草を見に來ました。

船頭　此中洲も大繁昌で、先づお前の所の福壽を始め、四季庵、樂庵、川越屋におらの生業の船宿が、丁度此頃十五軒になつた。

商人　當時は藝者幇間で三十人も出來たといふが、水茶屋抔の繁昌といひ、三日見ぬ間でござりまする。

宗匠　御船藏前の川土を上げたは此間の樣であつたが、瞬く間にかういふ所になつたと言ふのは、早いもので、實に今日日の語呂のやうに、流行ものは妙なものだ。

料理　そこで跡の語呂は、何といふのでござりますな。

宗匠　お粥を待ちく竈の外。

船頭　いや、こいつア意地がきたねえ語呂だ。飛んで奥前は何でござります。

宗匠　田舎侍茶見世に胡坐。

商人　はゝあ、死なざ止むまい三味線枕、成程こりやあものがいゝ。さうして奥は何でござりました。

ト宗匠明けて見やり、

宗匠　角力取にて白藤源太。昨日堀にて酢蛸で飲んだ。

船頭　こりやあ成程奥の點だ。

ト此内商人詠草を見る思入にて、横目でおでんを見る。

料理　もし、何處を見てゐなさるのだ。

商人　なに、實はおさよさんが歸つたかと、ちよつと見世を見ましたのさ。

船頭　この多い水茶屋でも、爰の内が中洲の呼びもの、姉さんとお前には叶はねえ。

でん　嘘ばつかりおつしやいますな。

商人　何にしろ兩國が、此中洲に押されたのも、かういふ娘があるからだ。

宗匠　姉さんの戻る迄、ちよつとそこらを廻りませうかな。

商人　それはよいが、又来る迄逢はずにいんでは此胸が、とはどうだね。

料理　そんな語呂は吉田屋で、

船頭　きざ〳〵といはれませうぜ。

宗匠　成程皆さまは御執心ぢや。

商人　そんなら、おでんさん。

船頭　語呂仲間でもう一廻り。

宗匠　そこらを廻つて、

商人　来ますぞや。

船頭
料理　わつちらも又出直します。

　トやはり右の鳴物にて、四人捨ゼリフにて上手へはひる。跡流行唄、波の音になり、花道より巾着切小鼠忠次、袷着流し、雪踏、同巾着切蝮の次郎松着流し、三尺、藁草履にて連れ立ち出来り、

次郎　兄イ、お前も中洲をひやかしかえ。

忠次　久しく手前も見えなかつたが、旅へでも行つてゐたのか。

次郎　なあに直近所にゐましたよ。

忠次　近所といふのは江戸の内か。
次郎　なに、直向うに見える所さ。
忠次　なに、向うに見える。（ト此内舞臺へ來り、）
でん　おや忠さん、おいでなさいまし。
忠次　姉さんは、まだおいでゞねえかえ。
でん　いいえ、今お客樣と樂庵へ行きました。
忠次　さうかえ。（ト此内おでん茶を出す。）さうして深川の岡場所か。
次郎　なに、永代向うの事さ。
忠次　むゝ、佃へ行つたのか。
次郎　丁度丸三月行つてゐましたが、やう／＼昨日歸つて來ました。
ト忠次おでんへ心遣ひのこなしあつて、
忠次　おでんさん、姉さんに逢ひてえが、まだ間があるだらうか。
でん　もう餘程になりますから、御用なら迎ひに行きませう。
忠次　それぢやあ氣の毒でも、お前行つて呼んで來ておくんな。

でん　あい、それでは行つて來ますから、見世をお頼み申します。

ト流行唄にておでん下手へはひる。次郎松は片手を懷へ入れたまゝゐるを、

忠次　次郎、何か懷へ入れてゐるのか。

次郎　えゝ、實は一本呑んでゐます。

忠次　なにを呑んでゐるのだ。

次郎　今日鍔店を通りかゝると刀脇差が並べてある、小道具屋の見世先で小僧が居睡りをしてゐたから、そつと一本あげて來たのは、こいつを遣つて見ようかと、それでおれが呑んでゐたのだ。

ト懷中より序幕の白鞘の短刀を出し、忠次に見せる。

忠次　豪氣にしまつた短刀だな。（ト拔きながら、）あゝ佃で學問して來たので、こいつで押込みをやる氣だな。

次郎　なあに、そんな大仕事な見込みはありやあしませぬよ。

ト此内忠次思入あつて、柄をとり銘を見やり、

忠次　菊一文字の銘があるが、おゝ、こりやあ兄貴が落した短刀だ。

次郎　兄イ、知つてゐるなさるかえ。

忠次　こりやあいつぞや神原の、屋敷へ行つた其時に、兄貴が落した短刀だが、手前押込みを初めねえなら、おれに賣つてくんねえか。

次郎　入るなら持つておいでなさい。賣らなくつてもようございます。

忠次　なあにさうでねえ。(ト財布より二分金を一つ出し、)おれには値段が知れねえから、まあ二分に買つて置くから、兄貴に逢つて値賣が出來たら、利附は跡から屆けてやるから、それ迄是を取つて置け。(ト次郎松受取る。)

次郎　こいつア有難え、それでは是は貰つて置きます。今迄もつそうを喰つた代り、是で鰻飯でも喰つて、腹にこやしをしなくつてはならねえ。

忠次　佃から歸つて來て改心すると思ひの外、まだ十代の奴の癖に、どすを打込み出掛けようとは、末頼母しい料簡だ。

次郎　そりやあわつちも親の子だから、巾着切はあたりめえだが、そんなことぢや名も賣れず、詰らねえから大けさに、よく芝居でいふが、夜盜かつさき矢尻切、これから立派な賊になり、イヨ音羽屋と褒められる氣だ。

忠次　えゝ飛んだ親を引合に出しやあがらあ。

ト此内次郎松件の金を懷中なし、

次郎　そんなら兄イ又逢はうぜ。

忠次　さうして手前何處にゐるのだ。

次郎　山崎町のぐれ宿で、半田屋といふ家にゐます。

忠次　さうか、其内又尋ねてやらう。

次郎　なあに、おいらの方から逢ひに來ますよ。

ト流行唄になり、次郎松挨拶して上手へはひる。此唄にて下手より、おさよ島田鬘着流し、前垂駒下駄茶屋女の拵へにておでんと出來り、

さよ　おや忠次さん、お待遠でござりました。

忠次　別に待遠でもねえけれど、無沙汰をしたから、廻つて來ました。

さよ　さうして私を呼んだのは、何ぞ用でもござんしたかえ。

忠次　なに、別に用はねえが、穴ツ這入ぢやあねえかと思つて、それで此子を呼びにやつたのさ。

さよ　人聞きの惡い事を、そりやあさうと丁度よかつた、花見酒のお客だから、實は樂庵へお氣の毒でどうか切拔けようと思つた所、こんないゝ都合はない。

でん　忠次さん、わたし迄瞞かして、きつと覺えてゐなさんせ。
さよ　それに此子はお前の事を、始終思つてゐるのだから、瞞しては筋が悪いね。
忠次　いや酷い大風呂敷だが、そんな事は是迄ねえよ。
さよ　なに、ない事はござんせぬ。此中洲へ多く出來た、水茶屋の女の子は、大抵お前を思つてゐるよ。
忠次　そいつァ嘘にも有難え、おいおでんさん、今のは本當かえ。
でん　知りませんわいなあ。（卜恥しきこなしにて俯く。）
さよ　おやお前、本當に知らないのかえ。
でん　いゝえ、さうぢやあないけれど。
さよ　それ御覽、こんなおとなしい無口の子でさへ、忠次さんを思つてゐるもの、中洲の相場は狂ふ筈さね。
忠次　いや、こいつァどうしても奢るやうに出來てゐる。
卜席亭の鳴物になり、花道より判人平家蟹の源次、半合羽、判人の拵へにて出來り、
源次　少しこつちへ來ねえ内に、めつぽふけえ賑かになつたが、全く時節がいゝせるだ。（卜舞臺へ來り、）

さよ　おや、お珍しい、まあお掛けなさい。
源次　眞平御免なさい。（ト床几へかける。おさよさん、お見世かね。おでん茶を出し、）少しこつちへ來ねえ内に、大層色々殖ゑましたね。
さよ　水茶屋許り九十軒もあるのに、料理茶屋から藝者や幇間と、まだずん〳〵出來るから、ます〳〵土地は賑かさ。
源次　さう土地が盛つて來ては、新宿などになさるより、氣樂で錢が儲かりませうね。
さよ　それが今言ふ同生業が九十軒もある位だから、いゝ所はいゝが骨が折れて、却つて以前の勤めの方が、どつちかと言つたらいゝかも知れない。
源次　成程類の多いのも、隨分骨が折れませうが、もし、何と物は相談だが、もう一遍泥水へ這入つてはどうでござります
さよ　まさかあの人へ對しても、さういふ譯には行くまいわね。
源次　久しくいゝ玉にぶツつからないので、實は今日も此中州の五十嵐へ見る女があつて、わざ〳〵山から出て來たが、（トおでんへ思入あつて小聲になり、）もしおさよさん、あの女はどうでござります

ね。

さよ　ありやあ堅氣の所の娘で、大事な預りものだから、お前の手には乘らないよ。

ト源次思入あつて下手へ行き、

源次　お前さんさへ承知なら、いつもの傳で湊つて行くが、どうか儲けさしておくんなさらねえか。

さよ　馬鹿な事をお言ひでない。そんな事が聞えると、世間體が惡いわね。

源次　えゝ尤もらしいことを言つて、白無垢でつかの夫婦の癖に、

さよ　あゝもし、ちつと目先を利かせなさんせ。

トおでんへ思入、源次心附き。

源次　いえなに、新宿もお前さんが出た跡は、相模屋の内もげつそり落ちて、二十か三十が玉高だから

いゝ子があつたらお頼み申します。

さよ　ないとも限らないから、又心掛けて置きませうよ。

源次　是から五十嵐へ行つて、玉を一つ見て來ます。

さよ　又お金儲けだね。

源次　なあに、理道の口だから、どうだか知れたものぢやあねえ。

さよ　又歸りがけに寄つておいで。
源次　えゝ有難うございます。どれ、代物を見て來ませうか。
　　ト矢張り寄席の鳴物になり、源次挨拶をして上手へはひる。
忠次　姉さん、今のは判人かえ。
さよ　あれは四宿で札附の、平家蟹の源次といふ、筋の惡い判人さ。
忠次　おでんさんのちやんに似てゐるやうだ。
さよ　可愛さうに、あんなに天窓は大きくないわね。
　　ト船の端唄になり、花道より因幡小僧新助着流し、袷絆纏駒下駄にて出來り、直舞臺へ來り、
新助　おゝ忠次、來てゐるな。
忠次　兄貴いゝ所へおいでなすつた。今お前さんに逢ひに來ました。
　　ト此内床几にかけ、
新助　久しく逢はなかつたが、どうかしたか。
忠次　いえ、度々爰へも遊びに來ますが、丁度かけ違つて逢ひませんだつた。（ト新助上手を見やり、）
新助　隣の家ぢやあ來ねえのか。

さよ　今日はお客と葺屋町へ、見物に行つたので、二軒共出さないのさ。
新助　むゝ、向うの家も休みか、そいつァ一軒で一人じめだな。
さよ　一人じめと言へば、お前家をしめておいでか。
新助　しめるのは面倒だから、隣の家へ頼んで來た。
さよ　此節は物騒だのに、不用心ではないかえ。
新助　貧乏人は氣散じだ、そんな事は金持の言ふ事だ。
さよ　それでも、あんまり暢氣ではないかね。
新助　なあに盗まれりやあ又新規に買ふばかりよ。
さよ　大層氣前がいゝねえ。（ト此内おでん上手の床几に殘りし煙草入を取上げ）
でん　どなたか煙草入が殘つてゐますよ。
さよ　おゝ、是は源次さんが今忘れて行つたのだらう。
新助　源次とは、判人の源次か。
さよ　今爰へ寄つて行つたが、五十嵐だといつたから、ちよつとお前屆けておやりな。
でん　それでは屆けて上げませう。

さよ　早く行つておやりよ。

でん　あい〳〵。（トやはり流行唄にて、おでん足早に上手へはひる。）

忠次　あの子が居たから話が出來ねえが、お前に見せるものがある。（ト懷より短刀を出し、）さ、是れを見ねえ。（ト新助に渡す。是をよく〳〵見て、）

新助　おゝ、こりやあおれの持つてゐた、菊一文字の短刀だが、どうして是を持つてゐた。

忠次　次郎の餓鬼に逢ひましたら、今日鍔店の小道具屋であけて來たといふから見たら覺えの菊一文字、此春お前が神原の、屋敷で盜んだ短刀ゆゑ、二分やつて取つて置きました。

新助　そいつアよく買つてくれた。實はあの時非常門から逃げ出す時におつことし、殘念ながら其儘に後をたづねることも出來ず、惜しいことをしたと思つたが、今日戻らうとは思はなかつた。

さよ　それぢやあ大方落した時に、けいず買ひでも拾つたのであらう。

ト此内新助財布より二分金を五兩紙に包み、

新助　ちつと見込のある短刀、惜しい事をしたと思つたら、お前のお蔭で戻つて來た。こりやあその立替賃だ。（ト渡す。忠次開き見て、）

忠次　五兩なんてとんでもねえ、二分やつたからそれだけくんねえ。

新助　なあに、お前の目に掛つたからこそおれの所へ戻つたのだ。いゝからそれを取つて置け。
忠次　あの餓鬼だつて喰えねえから、二分で買つたと言ふものゝ、ちやりくつて來たかも知れねえから
　餘計な金はいりませぬ。
新助　いゝからそれを骨折りに、手前取つておくがいゝ。
忠次　それぢやあ折角の思召しだ。あいつに二兩やつて、跡はわつちが貰ひます。
　　ト懐中する。新助短刀を抜き、中身を見やりにつたり思入あつて、
新助　こいつがありやあ一と働らき。
さよ　あもし往來だ、靜におしよ。
新助　違えねえ。（ト鞘へ納め、）こりやあ御尤もだ。
　　トあたりへ思入あつて、懐へ入れる。米山甚句になり上手より馬士大戸の勘八、着流し三尺、藁草履
　にて少し酒に酔ひたるこなしにて出來り、
勘八　おさよさん、又來たよ。（ト床几にかける。）
さよ　來ずともよい事を。
勘八　おい、誠にお氣の毒だが來ずにはゐられねえのだ。もしおさよさん、一服貸してくんねえ。

さよ　生憎だが、煙草がないよ。

勘八　そいつア御あいにくだ。（ト新助を見て、）イヨウ目がちらついて氣が附かなんだが、爰に立派な煙草がある。おゝ新助さん。おい因幡小僧新助さん、いやさ入墨新助、やい聾か啞か、因幡小僧返事をしろ。（ト大きく言ふ。）

新助　えゝやかましい靜にしろ。

勘八　いゝや靜かにやあ出來ねえ。馬士調子で大聲だ。此中洲の埋立地へ響くやうに言ふ積りだ。

新助　はゝさうか、さうして何でおれを呼ぶのだ。

勘八　むゝ、一服貸して貰ひてえと、いふのはほんの表向き、小遣ひ錢を借りてえのだ。

さよ　此間から貸せ〳〵と度々爰へ來なさんすが、何の緣でそんなに來るか、餘りづう〳〵しいではないか。

勘八　何がづう〳〵しいのだ。借りる譯があつて借りるのだ。（トきつと言ふ。）

新助　これ靜に言へ、客商賣を附込んで、そんな大きな聲をされては、外の客の不吉にならあ。

勘八　そりやあ當りめえだ。借りていゝ筋があつて來たのだ、おい默つておれに貸しねえよ。

ト皮肉に言ふ。新助思入あつて財布より一兩出して紙に包み。

新助　さあ、是をやるから默つて行け。

勘八　いや、こいつァ有難え。（ト開いて見遣り、）おい、一兩か。

新助　さうよ。

勘八　何ぼ馬方でも見くびるな。一兩位えのはした金は、おれの方でくれてやらあ。

さよ　もし〳〵勘八さん、そりやあお前何をお言ひだ。一兩所か二朱のお金で、此大河へ身を投げて、死ぬものは幾らもあるよ。今日初めてゞもあることか、度々爰の店へ來て、いやがらせてゐるぢやないか。

勘八　成程お前の言ふ通り、二朱の金でも迫つて來ては、生きてゐられぬこともあるが、そりやあ正道の人の話しだ。それとは一緒にならねえ新助、煙草が一つねえなどゝは、そんなけちな扱ひするな。どうせ死ぬ迄來るおれだ、褒められる樣に金を貸せ。

忠次　おい〳〵勘八さんとかいふ人、そりやあちつと無理だらうぜ、緡賣りやごろんぼうが茶屋小屋船宿藝者屋へ錢貰ひに來たところが、一百二百の錢を貰つて歸るが關の山だ。一兩で少ねえとはちつと贅澤過ぎやうぜ。

勘八　お前達は其以前の、譯を知らねえからさう思ふだらうが、來てもいゝから度々來るのだ。默つて

そつちへ引込んでゐろ。
忠次　いゝや引込んぢやあゐられねえ。不斷世話になつてゐる兄イに不法の事を言やあ、おれが買つても出にやあならねえ。
勘八　幾ら買はうと言つたつて、お前には賣らねえから、此一兩を元へ返す使ひでもしてくんねえ。
忠次　それぢやあ、どうしても任せねえのか。
勘八　分らねえ奴に話しても、馬の耳に念佛だ。
忠次　なに、この野郎め。（ト立掛るを新助留めて、）
新助　これ、止さねえか。
忠次　それでも癖になりますから。
新助　えゝ、よせといふに。（ト是にて餘儀なく控へる。）やい勘八、今爰で聞いてゐりやあ、來る筋があると言ふが、何の筋があつて來るのだ。
勘八　そりやあ手前の胸に聞きねえ。
新助　なに、胸に聞けとは。（ト合方きつぱりとなり、）
勘八　生れは武州の足立郡新井方村の水呑百姓、市右衛門の一人息子が今ぢやあ立派な兄イ株、是とい

ふのもおれの親分、八王子の初右衛門どんに育てられたお蔭だらう。その頃一緒にゐた勘八、今ぢやあ澄ました面をしたつてお前の身性は知り抜いた、おれに向つて一兩許りの、はした金は出せねえ筈。なそれ、五宿在の小砂利の流れへ蒔く、葉山葵ぢやあねえけれど、肥いらずにめきめきと金が芽を吹くお前の腕前、はしたに取つちや實にならねえ。そこで今日は束にして、問屋へ出す程貰ひてえのだ。

ト圖々しきこなし、

新助　むゝ、さうして手前は幾ら取る氣だ。

勘八　あんまり來て五月蠅からうから、當分の內來ねえとして、先づ五十兩貰ひてえ。

新助　ふざけた事を言やあがるなえ。

勘八　どうしたと。（ト誂への合方になり、）

新助　鎭守祭りの素人角力、褌擔ぎか飛入り同樣、おつウおれを下目に見ていやがらせの言ひ掛り、産れは同じ百姓でも、流れ流れて水道の水で腹の中まで洗ひ上げた、おれに向つてごたくをつきやあ、一兩の事はさて置いて、百の錢もやられねえ。と言つたら押へた轡面に馬に手慣れた手前だから、泣きでもさせる料簡で惡事を訴人するだらうが、おれは犯した科だから、自業自得で仕

方もねえが、遣つた奴は不正金で、一緒に御用にならにやあなるめえ。それとも一番突張るか。

勘八　む丶。

新助　身分相應馬士らしく、大取りするより小荷駄馬で、ちび〳〵運んで遣つた方が、まあよからうと、おれは思ふが、それとも太く短く取る氣か。取る氣なら取る樣に、晒しを切つて肚胸を据ゑ、行く氣でおれに挨拶しろ。

ト きつと思入、勘八ぢつとなつて、

勘八　こいつアおれが惡かつた。それぢやあ細く長く貰ふと、言つた所がさう度々此下町へ來られもせず、それではかうしてくんねえな。是切りもう來ねえから、五十兩の一割にして、どうぞ五兩くんねえな。

新助　い丶や、是でよけりやあ持つて行け、いやなら遣らねえよしにしろ。

勘八　何もいやとは言はねえが、せめて一割にしてくんねえ。

さよ　もし勘八さん、もう是切り來ないといふのはいつもお前のきまり文句、直翌日來たこともあるね。

忠次　さう〳〵下町へ來られねえと、本當らしい嘘をつかずと、こいつを貰つて、おとなしく立つ鳥跡を濁すなと、笑つて歸るがよからうぜ。

勘八　さあ、それだからせめてのこと、一割にしてくんねえといふのだ。
新助　えゝ五月蠅え、出來ねえといふに。
勘八　それぢやあどうでも是切りか。（ト是にて餘儀なく件の一兩包みを取上げ、）出來ねえものは仕方がねえ。是でも取らねえには增しだ。
忠次　何とか詞もあらうのに、取らねえに增しとは何のこつた。
新助　えゝ、默つてゐろ。
忠次　それでも餘り癪にさはるから。
さよ　えゝお構ひでないといふに。
忠次　えゝ、忌えましい野郎だなあ。（ト餘儀なく控へる。此内勘八金を財布へしまひ乍ら、）
勘八　餘りぎやあ〳〵言やあがるので、醉がすつぱり醒めてしまつた。一兩許りぢやあ何にも飲めねえ。（ト立上りながら、）そんなら新助、緣があつたらまた來るぜ。（ト下手へ行き乍ら、）どれ親父橋で、えゝい、一杯やらう。（ト波の音米山甚句になり、勘八今に見ろといふ思入あつて花道へはひる。）
さよ　糶賣などゝは事が違ひ、種を知つてる油虫には、實にやるせがないと思ふよ。
ト門口へ鹽を振る。忠次此内跡を見送りゐて、

忠次　今歸つて行つたあいつの素振、ちつと胸に落ち入らねえから、兄イわつちやあ附けて見ませう。
新助　なあに、何處へ行くものか。打つちやつて置くがいゝ。
忠次　それでもどうも安心ならねえ。
さよ　さういふ事なら、御苦勞でも。
忠次　えゝ一ツ走り行つて來ます。
　ト流行唄波の音にて忠次逸散に花道へはひる。新助ちつとなつてゐる。おさよあたりへ思入あつて、
さよ　珍らしくはないが、飛んだ奴が舞込んだね。（ト合方になり、）
新助　丁度隣りが二軒共、今日出さねえのはこつちの幸ひ、あの馬方の勘八が、二人の惡事を知つてるとこから、二言目にはいやがらせ、もう此中洲へ廻つて來ては、そろ〳〵巢椊えをせざあなるめえ。
さよ　隨分方々歩いたから、もう此上は氣の附かない、旅へでも出掛けないと、互に體が劍難だねえ。
新助　今となつて考へると、只の一晩樂々と枕を高く寢られねえとは。
さよ　好き合ふ仲とはいひながら、心柄で仕方がないね。
　ト兩人ちつとなる。合方浪の音になり、花道より前幕のおいちそぼろなる裝、藁草履にてあたりを伺

ひながら出來り、

のち　只中洲と聞いた許りで、雲を當なる尋ねもの、どうか婆やに逢ひたいものぢやなあ。

ト舞臺へ來り、あたりを見廻しながら上手へ行かうとするを、新助おのちを見附け、

新助　もし〳〵、おのちさんではござりませぬか。

のち　えゝ、おゝ、新助でござんすか。

新助　へい新助でござります。久しくお目に掛りませなんだ。

さよ　ほんに親分の所のお娘御、まあ是れへおかけなされませ。

ト兩人介抱して床几に掛けさせ、おさよ茶を出し、

新助　やれ〳〵、久し振りでお目に懸りました。此夏も八王子へお尋ね申して行つた所、何かお取込みな事があつて、四谷へお引越しと聞きましたから、それからそれと聞き糺し、やう〳〵四谷を捜し當てると又何處かへお引越しと、それ限りお内が知れおじまひで、實にお案じ申しました。

さよ　内の人が十二の年からお世話になつたお父つァん、又わたしは新宿の相模屋にゐた時に、身請け迄して下さつた大恩のあるお方ゆゑ、どんなに尋ねたか知れませぬが、どういふ譯でさう度々お引越しをなさいましたが、それに又親御さん達は、お替りはござりませぬか。

のち　知つての通り父さんが、勝負事がお好きゆゑ、今日は府中、明日は小金井と、それからそれへ泊り歩き、顏役衆と一緒になり、とゞの仕舞が御損をなされ、内はもとより着類諸道具賣拂つても纏まり兼ね、夜逃げ同樣四谷へ來て、長家を借りて居りましたが、街道筋に貸方が行き戻りに寄りますので、今の所へ引越しました。

新助　そりやあ何にしろ御心配だつたが、さうして今のお家といふのは何處においでなさいますな。

さよ　さあ、その家は。（ト我が身に恥ぢ、ちつと俯き、）どうも是は言はれませぬ。

ト涙を拭ふ。兩人は氣の毒なるこなしにて、

新助　御尤もでござります。お察し申します。失禮ながらそのお裝では、どんなにお困りなさるか知れませぬ。そして今では子分の衆が、ちつとはお尋ね申しますか。

のち　落目になるとあゝしたものか、四谷にゐた時分から只の一人も來てくれず、それに此頃父樣は、喘息にて床に就き、又お母さんはそれを氣病みに、取止まらぬ事を言ひ、實に一人で困つてをりまする。

さよ　すりや子分の衆も行きませぬとか、八王子時分は大勢の、よく世話をした親分だのに、ても薄情なものぢやなあ。

新助　以前の恩を返さうと、八王子迄お尋ね申しに出て行く位な新助ゆゑ、疾より御恩は返す心、御遠
　　慮なさらずお家をば、どうぞ教へて下さりませ。
のち　さあ、言ひたいは山々なれど、みす／＼恥をかくゆゑに。
新助　はて、其の御遠慮には及びませぬから、どうぞお言ひなすつて下さいまし。
　　　ト是にておのち思入あつて、
のち　實は品川の東海寺門前に、少し知るべのあるを便つて、其日をやう／＼送れども、是ぞといふ生
　　業もなく、只ある物を賣喰ひに細き煙を立てますれど、病が起るとお母さんが、御膳の時にお粥
　　を啜くので、たしないお米もそれぎりに、喰べずに居ることもあります。（トぢつと俯く。）
新助　そりやあお困りでございませうが、爰でお前さんのお家を聞くのも、盡きぬ御縁と申すもの、早
　　速お尋ね申しますから、くよ／＼お思ひなさいますな。
のち　實は父さんも男泣きに、泣いてばつかり居ります。
さよ　さうして此中洲へ、何のお使ひでお前さん、おいでなさいました。
のち　以前遣つたおくろ婆やが、中洲のお茶屋にゐると聞いて、それを尋ねに參りました。
さよ　おくろさんはついに一度、此中洲では見かけませぬが。

新助　何の御用か逢ひましたら、お言傳をして上げませう。

のち　それではどうぞ婆やあに、來られる事なら内へ來て、病人の世話を頼みたいと、さう言つて下さります。

新助　お母さんがさういふ御病氣では、嘸お一人でお困りなさるだらう。

のち　いいえ、さうでもございませぬ。

新助　さうでないとお言ひなさいますのは、

のち　婆やに頼んで私は、

ト跡言ひさして泣伏す。新助おさよ顏見合せ思入あつて心附き、

新助　はゝあ、それではお前さんは、身をお賣りなさるのだね。

のち　はい。（トやはり泣いてゐるゆゑ、兩人愁ひの思入にて、）

さよ　まだお年も行かないのに、親御の爲に身を賣るとは、ても感心な事ぢやなあ。

トおのち顏を上げ、

のち　是から段々寒くなるのに、かける物が何にもないゆゑ、内から近い品川へ、女郎に行つてお金を拵へ、お藥や夜具蒲團を買つて上げたうございまする。

新助　それぢやあ今迄お二人とも、お藥は上りませぬか。
のち　藥禮が滯り、お醫者樣に行かれぬから、よんどころなく飲まされませぬ。
新助　そりやあとんだこつた。ゑゝようございます。もうおくろ婆やを搜すにも及びませぬ。又身を賣らうなどゝいふ事も、決してさせやしませぬから、是から直にお家へ歸り、私の行くのを待つておいでなさい。
のち　え、そんなら内へ來て下さりますか。
新助　かうお聞き申すからは、どんな事をしてもお二人は、きツとお世話いたしまする。
さよ　爰へ來ておいでなさる間は、誰がお内においでなさいます。
のち　お隣へ賴んで參りましたから、早う行かねば案じまする。（ト新助思入あつて、）
新助　直一緒に行つて上げてえが、なう、おさよ。
トおさよもうなづき、新助と顏見合せ、金の都合するといふ思入あつて、
さよ　一足跡から行くとおしな。
新助　さうよ、一緒には行けねえの。（ト此内一兩紙に包み、）こりやあ一兩ありますから、是から葭町へ行つて駕籠に乘つて早くお歸りなされませ。（ト件の紙包を出すを、おのち押戾し、）

のち　有難うはござんすが、わたしや歩いて歸りますから、是はお返し申しまする。

新助　其の遠慮には及びませぬ。もし又此處らでお乘りなさらずば、新橋を越えると、品川の歸り駕籠が居りますから、あれなら心配はありませぬ。

のち　いえ〳〵歩いて歸りませぬと、親に不孝になります。

ト包みを戻すゆゑ、新助餘儀なく受取り、

新助　それでは何れ私が、上る時に持つて行きませう。（トおさよ空を見やり、）

さよ　もうかれこれ八ツ前だらう。急いでおいでなすつたら、日一杯に歸られませう。

のち　そんならこれでわたくしは、直家へ歸ります。

新助　親御の事は引受けますから、御安心なさいまし。

のち　有難うござります。おいでなされるをお土産に、お先へ私は參りまする。

ト下手へ行きかけるを、

新助　おゝ、肝腎の事を忘れた。あゝもし〳〵、東海寺門前で、何と尋ねたら知れまする。

のち　はい、家主作吾兵衞の店子で、やはり初右衞門で分りまする。

新助　それさへ聞けばお歸り道を、

さよ　氣を附けておいでなさいまし。
新助　のち有難うござりまする。
ト波の音合方にて、おのち悦びながら花道へはひる。
さよ　まだ安心もさせないのだが、お寺參りをした跡のやうで、こんないゝ心持はないね。
新助　思ひがけなく居所の知れたは、恩を返せといふ知せだ。
さよ　直ぐ行くとお言ひだが、纒めて持つてゐるのかえ。
新助　今爰にたんとねえから、せめて百兩も拵へて、持つて行かうと思つてゐるのよ。
さよ　さうさ、どうせけちにしても百兩より下は出せまいが、差當つて出來るのかえ。
新助　そりやあ今夜直出來るが、親分が馬鹿堅いから、不正金と認められたら、なかなか受取る事ではねえ。
さよ　何ぞ取らせる工夫はないかね。
新助　むゝ、お前ちつとの間身を賣つてくれめえか、さうして金を持つて行つたら、不正金でねえと知れ、安心して受けなさるだらう。
さよ　それは何より明らかゆゑ、お前の都合の出來る迄一年でも二年でも、わたしや勤めをするとしよ

う。

新助　直こせえて出しに行くから、ほんの僅かの内でいゝのだ。それにしても急ぎだから、誰かに話を向けてえものだ。（トおさよ上手を見やり、）

さよ　おゝ丁度いゝ、さつき寄つた平家蟹か、今向うから歸つて來たよ。

ト波の音、流行唄にて、上手より以前の源次出來る。

源次　おゝ兄イ儲かるかね。今お前を待つてゐた所だつた。

新助　お前に儲けさせるのだが、おさよを何處かへ世話をしてくれめえか。

源次　えゝ、何か悶着でも起つたのか。

新助　なあにそんな事ぢやあねえ。急に百兩半許りやる所が出來て、無據沈めなくつちやならねえのだ。

源次　そんな急場なら、お前どつかへ這入ればいゝに。（ト言ひかけて思入あつて、）いや、さうされてはこつちが上つたりだ。だが、それッぱかりでいゝのかえ。

新助　悪いたつて仕方がねえ。もう婆あの小口だもの、幾らに買ふものか高が知れてゐらあ。

源次　常談を言つちやあいけねえ。昔で言やあ三角の塵塚お松か當時なら、橘町の辨天お豐も三舍を避けるおさよさん、婆あどころか賣り出しだ。

さよ　おつウわたしに油を掛けて、禮をたんと取らうと思つて。

源次　そこで先は品川の、新百足はどうでござりますね。

新助　そりやあ丁度いゝ、近所だから親分の所へ便りが出來てお誂へだが、今夜金が手取れようか。

源次　今夜直にはむづかしい、先づ兎も角も目見得をして、あした直に證文と引替へに渡します。

新助　それぢやあ今夜鮫洲へ泊つて、あした親分の所へ行かう。

さよ　そんなら店はおでんさんに任して置いて、是から直に目見得がてら駕籠で行かうよ。

新助　おれもどうせ行くのだから、三人一緒に船にしよう。

源次　風がねえからなぐらが立たず、高輪べりは安心だ。

新助　それぢやあ是から話しながら、

さよ　猪牙で南へ行くとしませう。

新助　おい、お傳を呼びながら船をさう言つてくんねえ。

さよ　あいよ。（ト此時後ろにて船頭の聲する。）

船頭　おも楫よ。取りかぢ。

ト大きく言ふ。新助思入あつて、

新助　金の都合の幸先に、

さよ　取楫といふ辻占は、

源次　受取るといふいゝけんとく。

新助　天明ぶりなら。（ト煙管を灰吹へ當てるを木の頭）面白く出來るだらう。

ト此模樣よろしく、波の音佃にて、

ひやうし　幕

六幕目

東海寺門前貧家の場
隣合繁之丞浪宅の場

〔役名――因幡小僧新助、中野の初右衛門、曾根繁之丞、判人平家蟹の源次、家主與次右衛門、店行事左治郎、所化雲鐵。初右衛門女房お辰、新助女房おさよ、繁之丞妻おのぶ、初右衛門娘おのち、繁之丞母おちゑ等。〕

（東海寺門前貧家の場）——本舞臺三間の間常足の二重四枚飾り、向う上手一間の中段に佛檀のある押入戸棚、此次一間古障子出這入り、下手一間破れたる鼠壁、上の方跡へ下げて小窓のある雪隱、本緣附き、いつもの所門口、下の方四尺程の木戸口、『曾根』といふ表札、左右玉椿の生垣、此向う障子屋體の前側、總て品川東海寺門前町家の體。爰に合長屋の女房おこは、同おとも、おらい結び髪やつし裝、裏店の女房の拵へ、おこは抱子を肌に脊負ひ、下手に立掛りゐる。此見得木魚入りの合方にて幕明く。

こは　おともさんお聞きか、今日江戸向うから東海寺へ立派な葬式が來たさうだが、饅頭かと思つたら折詰のお强飯、幕の内のやうなお煮染に、お香々が奈良漬に、日光唐辛子だといふことだ。

とも　その噂を臺所で、鐵棒引のお鐵さんが聞いて來たからたまらない、こつちの長家は言ふに及ばず町内中へ觸れたから、東海寺の門前は近所の者で一杯だ。

らい　こんな襤褸ツこぢやあ仕方がないが、小薩張とした着物があれば、伊勢屋八兵衛と附けて下さいと、出鱈目の名を帳場へ附け、のこ／＼座敷へ上り込んで、一つは早くどめてしまつて、まだ爰へは參りませんと、二つもしめて歸るけれど。

とも　所が乞食もよろしくといふ、こんな穢い裝をしては、上へ上がることが出來ず、玄關前に待つて

ゐて、殘りを貰ふかさもなくば、御幣擔ぎに貰ふのだが、近年呉れてが少くなつた。

らい　そりやあ少くなつた筈だ。立派な黑の羽織を着たそんじよそれの旦那樣が、小風呂敷を御持參で皆土產に持つて歸るよ。

こは　わたしの子供の時分には見えばつた人が多かつたから、持つて歸る者はなく、皆んな呉れて行つたから、五つと六つ貰つたものだ。

とも　今夜は御膳が少ないから、二つ許りお强飯を貰つて、夜食の代りにしたいものだが、何時に出る葬式だな。

らい　九ツ半だといふ事だから、八ツ半迄には來るだらう。そろ／＼徒黨の人數を集め、玄關前へ繰り出さう。（トおこは門口へ來て、）

こは　おのちさん、内においでか。お葬式のお强飯を貰ひに、みんなが行くから一緒においでな。

ト合方になり、奧よりおのち前幕の拵へにて出來り、

のち　有難うござりますが、お母さんが差込みますので、胸を押へてをりますから、今御一緒に參られませぬ。少しもよくばお跡から、參りますからお構ひなく、お先へおいで下さりませ。

こは　さういふ事なら先へ行き、若しも餘計に貰つたら、お前に持つて來て上げよう。

のち　有難うござります。
とも　大きな聲ぢやあ言はれないが、此お隣りも一ツ長家、貰ひに行くか行かないか、ちよつと誘つて
みようぢやないか。
らい　そりやあ聞くだけ無駄なこと、武士は喰はねど高楊枝、貰ひたくても貰やあしない。
こは　それぢやあこつち三人で、五人前も貰つて來よう。（ト赤子笛になり、）えゝ、此餓鬼はよく泣くな。
トこづく。
とも　そんなに酷くしなさんな。背中に一人居りますと、一人前の役をするよ。
こは　ほんに、それもさうだねえ。
らい　どれ葬式に行つて來ようか。
ト木魚入りの合方になり、おこは、おとも、おらい下手へはひる。おのち跡を見て、
のち　ほんにお長家の小母さん達は、氣輕なお方でござんすなあ。
ト合方になり、下手木戸口より、おのぶ丸まげ家中女房やつし裝にて出來り、
のぶ　おのちさん、お前さんもおいでなさいませんか。
のち　お母さんが病氣に託けお斷り申しましたわいな。

のぶ　皆さん方のお話を、内で聞いて居りましたから、今に誘ひにおいでなさるかと、ひや／＼いたしてをりました。

のち　わたしなどゝ違ひまして、あなた方はお武家様ゆゑ、嘸おいやでござりませう。

のぶ　お長家とやらのお附合をいたした事がござりませねば、何と申してよい事やら、誠に困り切りまする。

のち　さういふ時には店行事へ、お頼みなさるとよきやうに、取計らつてくれますから、必ずお出かけなさいますな。

のぶ　大分お髪がこはれましたが、私でよろしくば、いつでも結うて上げますから、御都合次第で御遠慮なく宅へおいでなされませ。

のち　有難うござりまする。今日は手前へ懇意な者が、尋ねて參りまするゆゑ、あしたお願ひ申します。

のぶ　それでは明日おいでなさりませいな。

ト合方になり、おのぶ下手木戸口へはひる。葬禮の鳴物になる。

のち　もうお葬式が來たと見える。

ト右の鳴物にて、奥より四幕目の初右衛門すつぺがしの月代延びし、誂への鬘着流し絆纏病人の拵へ

にて出來る、おのち見て、

初右　父さん、爰へござんしたか。

のち　母さんは寐てござんすか。

初右　俄天氣で逆上せるから、端近へ出て來たのだ。（ト上手へ住ふ。）

のち　今迄何か喋べつてゐたが、喋べり草臥れたかよく寐てゐる。

初右　お葬式の鳴物で騷々しうござんすなア

のち　むゝ、今日東海寺へ來る葬式は、日本橋の富岡といふ金持ちだが、あの人聲の鹽梅では、千人からの人と見える。

初右　大層立派な葬式だと、申すことでござりまする。

のち　今日一日の入用は、何百兩か知れやあしねえ。

初右　ほんにお金といふものは、ある所には、澤山あるものでござんすな。

のち　さてない所にはないもので、百の錢にも困るものだ。

ト右の鳴物にて、下手より小坊主珍海、坊主鬘、鼠の着附、黒の腰衣、小坊主の拵へにて箍折を二つ持ち出來り、門口から、

珍海　もしおのちさん、氣に掛けずば、葬式の此のお強飯を上げませうか。（ト折を出す。）
のち　これは〳〵有難うござります、少しも氣には掛けませぬから、お貰ひ申しませうわいな。
初右　裏の衆が今しがた、貰ひに行つたは此葬式だな。
珍海　地中が人で一杯ゆゑ、なか〳〵貰ひに行つたとて、貰ふことは出來ませぬ。
のち　父さん、珍海さんが、此お強飯を持つて來て下さんした。（ト初右衞門の前へ折を出す。）
初右　これは何より有難い、成程これは立派な折詰め、これでは貰ひてが多い筈だ。
珍海　殘りがあつたら又後に、持つて來て上げませう。
のち　いえ〳〵、是で澤山ゆゑ、もう下さるには及びませぬ。
初右　最早お經の初まる時分、早くおいでなさりませ。
珍海　今日は立派な大人のみ、子供に用はござりませぬ。
初右　そりやさうでもござりませうが、遊んで居たら意地惡るの、雲鐵殿に叱られませう。
珍海　ほんに小言を聞かぬ內、庫裏へまゐつて手傳ひませう。
　　ト右の鳴物にて下手へはひる。初右衞門折の蓋をあけて見て、
初右　成程これは立派な煮染、思ひがけない葬式で、夜食のおかずが出來たわえ。

のち　以前の身なら葬式の、お強飯なぞは貰はぬに。

初右　そこが時節だ、仕方がねえ。

ト又右の鳴物にて、下手より家主與次右衛門、羽織着流し、更けたる家主の拵へ、店行事左次郎着流し、店行事にて錢を結附けし、店賃日掛の札を持出來り。

左次　もと博勞だと言ひますから、なか〳〵人の惡いやつ、嚴しく言はねば取れませぬ。

與次　何でも今日はいしかつて、少しなりとも取つて歸らにや、段々日掛けが溜るばかり、それに店受けといふ奴が、矢張り同じ貧乏人、立替えるといふ力はない。

左次　とんだ者にお貸しなさいましたな。

與次　どうで始終は、店立てものだ。（ト門口へ來り。）

左次　はい御免なさい、大家樣がおいでなさいました。

初右　それ、大家樣がおいでなすつたと。

のち　又御催促でござんせうな。

ト兩人内へはひり、與次右衛門上手へ通る。

初右　これは〳〵大家樣、ようおいでなさいました。

與次　いや餘りよくも參らぬて。（ト合方になり、）扨店賃も此邊では、纏めて月に四貫五百出すのは大儀と言ふ譯は、此隣が一軒別で、小前の裏長家、先づ入口がらうのすけかへ、續いて八百屋紙屑買又は辻駕籠日傭とり、碌なものは一人も、いや久兵衛殿へ失禮だが、その日に困るものが多く、かためて出すより日々に百五十づゝ日掛にして、行事が集めてわしが方へ毎日持つて來る所、今日の明日のと言譯して、段々溜りに十五日、二貫二百五十の貸しだ。

左次　わたしも同じ貧乏人ゆゑ、遣ひ込みでもしたやうに思召があらうかと、思ひまして大家さまを、一緒にお連れ申しました。

初右　女房はもとより私迄、煩ひまして何にもいたさず、居喰ひにいたしてをりましたからその日に困つて店賃の、日掛もついに溜りましたが、明日は殘らず差上げます。

左次　その言譯も聞き倦いた。惡い月の行事に當り、幾度足を運んだか、しかしもう少しで月が替れば隣りへ送つて肩拔けだ、よく大家樣へお頼みなさい。

與次　あんまり自慢も出來ないが、おそらくわしが長家ぐらゐ、貧乏人の多い長家は、先此町内にはないけれど、皆堅氣な人達ゆゑ、百五十の日掛の店賃、誰一人明日迄と言譯をする者はない。こなたに貸しておく時は、外の者が貸してくれと言つた時に貸さねばならぬ。それだによつて是迄の

貸を殘らず取りに來たのだ。

初右　今もおつしやる半月分、二貫二百五十の錢、金にいたして一分二朱、僅かな金ゆゑありさへすれば、殘らず勘定いたしますが、生憎今日は小遣ひの遣ひ殘りも五十か百、今夜はきつと手に這入る、金の當がござりますれば、明日迄待つて下さりませ。

與次　いや〳〵今日は待たれない。僅かな金もない癖に、大きな事を言ふならば、耳を揃へて勘定さつせえ。

初右　ありさへいたせば一分二朱、纏めてあなたへ上げますが、ないものは上げられませぬ。

與次　なに上げられぬとは何のことだ。最初店を貸す時に、四貫五百の店賃を、百五十づゝ日掛けにするを、承知でこなたも借りたであらう。ないものは上げられぬとは、何んといふ挨拶だ。

ト與次右衞門腹を立てゝ言ふ。

のち　お腹もお立ちなさいませうが、實は只今百のお錢も、手許にござりませぬから、どうぞ明日迄大家樣、お待ちなされて下さりませ。

與次　おむすには氣の毒だが、親仁の今の言ひ草が、肝の蟲に障つたからもう一時も待たれない、二貫二百五十の錢、殘らず爰で勘定するか、但しは店を今明けるか。

初右　何で店を明けられませう。
左次　それぢやあ勘定さつしやるか。
初右　さあ、それは。
與次　店を明けるか。
初右　さあ。
兩人　さあ。
三人　さあ〳〵。
與次　勘定せずば、明けて下せえ。

トきつと言ふ。初右衞門かばかりの錢をといふ思入。此時下手より以前の小坊主珍海出て、是を聞き思入あつて下手へはひる。

初右　御尤もではござりますが、女房が長の煩ひに又私も疝積にて共に煩つてをりますので、終には段々溜つた日掛け、あなたばかりぢやござりませぬ。米屋薪屋を初めとして、八百屋醬油屋、鹽屋迄いくらか借がござりますゆゑ昨日娘が身を賣る心で、人を頼みに參つた途中、以前世話をいたした者に計らず出逢ひ、今日に困ることを話しましたら、明日、金を持つて行くから、安心を

して待つて〻くれと申したと、申しますに最前から來るのを待つて居りまする、今にも金を持つて參れば直に御勘定いたしますから、お待ちなされて下さりませ。

與次　いや〳〵、待たれぬ〳〵、今勘定をすればよし、出來ずば、店を明けて下せえ。

のち　さうおつしやらずと大家樣、明日までお待ち下さりませ、晩程迄にはお金をば、きつと持つて參ります。

初右　僞り言はぬ此娘が、慥な證據でござります。

左次　これ初右衞門さん、わざ〳〵爰へ大家樣が出掛けておいでなされたからは、丸々出來ずば半分でも、趣意を附けてお賴みなさい。

初右　それが出來ます位なら、お腹を立たせはいたしませぬ。

與次　無いと言へばよいかと思つて、いけしやあ〳〵とした奴だ。もう片時も待たれない、きり〳〵店を明けて下さい。

　　トきつと言ふ。此時下手より小坊主珍海出て、

珍海　あゝもし、暫くお待ち下さりませ。

與次　待てと言ふのは、東海寺の小坊主の、珍海か。

左次　何でこなたが出しやばつたのだ。
珍海　その店賃の借り二貫二百五十文、只今お上げ申しませう。
與次　なに、此の店賃を出すと言ふのか。
珍海　不斷わたしがいたづらして綻び切つたその時に、おのちさんに縫つて貰ふお禮にこれを上げます る。（ト紙に包みて一分と錢を八百出す。）
のち　お志は嬉しいが、お前にこれを貰うては。
珍海　濟まずば跡でお返しなさい。
のち　父さん、これはどうしませう。
初右　今にも金が手に入らば、その時利を附け返すとして、時の用には何とやら、暫しの間借りるがよい。
のち　それではこれを借りまする。
珍海　どうぞ遣つて下さりませ。
のち　さあ大家樣、一分と八百ござります。お持ちなされて下さりませ。（ト金と錢を出す。）
與次　是では少し釣が行くが、後の日掛に取つて置きます。

左次　よもや今日は取れまいと、思つてゐたに忝い、これでわしは肩拔だ。

與次　然し合點の行かないのは、珍海どのが一分と八百、どうして持つてござつたぞ。

珍海　さあ、それは。（ト詰る。）

與次　出所を聞いて受取りませう。

　　ト ばた〳〵になり、所化雲鐵白の着附け、墨衣、所化の拵へにて出來り、門口から、

雲鐵　やい珍海、おのれは〳〵太い奴だな。（ト珍海の襟上をとり引倒す。）

珍海　どうぞ堪忍して下さりませ。

初右　これ雲鐵どの、こりやどうしたのでござります。

雲鐵　どうのかうのと子供の癖に、偸盜戒を犯しました。

左次　濱邊近くに居りますが、ちうとうかいはまだ見ませぬが、あさりや蛤とは違ひますか。

與次　えゝ何を馬鹿を言はつしやる、偸盜戒は盜みの事だ。

左次　それでは盜みをしましたのか。

雲鐵　二百三百貰つたお布施を、金にとり替へ一分と八百、文庫へ入れてしまつて置いたを、こいつが盜み出しました。

初右　えゝ。（トびつくりする。）
與次　大方そんなことであらうと、出所をわしが聞いたのだ。
左次　お前のお布施を盗んだのか。
雲鐵　今葬式をしまつたゆゑ、貰つたお布施をしまはうと、文庫を明けて見てびつくり、金もなければ錢もなし、扨は誰にか盗まれたかと言ふのを聞いて相弟子の、妙眞といふ小坊主が、今そのお布施は珍海が持つて行つたと言ひますから、跡を追つ駈けて來ましたのだ。
與次　いや、人は見掛けによらぬもの、扨々太い。
與次　小坊主だ。（ト初右衛門前へ出で。）
左次
初右　これ珍海どの、よもや〳〵と思ひますが、お前は盗みをさつしやつたのか。
のち　さあ、默つてゐずと盗まぬなら、盗まぬと言はしやんせ。
珍海　さあ、その言譯のならぬのは。
のち　それでは、お前が盗んだのか。
珍海　あい、盗みましでござりまする。
初右　えゝ。（トびつくりする。）
のち

雲鐵　何んでおのれは盜んだのだ。

トきつと言ふ。珍海思入にて、

珍海　わたしの死んだ父さんにこちらの主人が似てゐる故、何となく懐しく、思ふに日掛けのおあしに困り、難儀を見兼ね雲鐵殿の、お布施を手ごめに出しましては言譯けのない我身の科、打つて腹が癒るならば、存分にして下さりませ。

雲鐵　いや〳〵いくら打つたとて、その金の出るではなし、偸盜戒を犯したからは、師匠の前へ連れて行き、きつと仕置をせねばならぬ。

珍海　どうぞ堪忍して下さりませ。

雲鐵　いや、堪忍ならぬ、きり〳〵うせろ。

ト所化雲鐵、珍海を引立て行かうとする。此以前能き程に花道より前幕の新助出來り門口を伺ひ、爰だといふ思入あつて、此樣子を聞いてゐて、

新助　あもし、そのお連れなさるのを、暫らくお待ち下さりませ。（ト言ひながら内へはひる。）

雲鐵　待てと止めなすつたのは。（トおのち見て）

のち　おゝ新助か、父さん新助が參りました。

初右　それはよい所へ來てくれた。

新助　御無沙汰の申譯は跡でゆつくりいたしまする。今門口へ參り合せ、樣子はあらまし聞きましたが、此子が遣つた一分と八百は、私がお返し申しますから、御師匠樣にお連れなさるをお待ちなすつて下さりませ。

雲鐵　すりや見ず知らずのお前さんが、金を返して下さりますとか。

新助　これで料簡して下さりませ。（ト二分金を雲鐵に渡す。）

雲鐵　取られた高は一分と八百、二分では多うござりまする。

新助　殘りは利子と思召し、それで料簡して下さりませ。

雲鐵　あゝしますとも〳〵、二朱から儲かる事だから、師匠へ言はずに濟ませます。

與次　やれ〳〵嬉しや、今受取つた店賃を取り返されることかと思つた。

左次　左もなく無事に納つたれば、もう歸らうではござりませぬか。

與次　如何にも、直に歸りませう。

雲鐵　それではわたしも一緒に行かう。（ト三人門口へ出て、）

與次　これ雲鐵さん、お前は取られたばつかりに、二朱金が儲かつたな。

左次　歸りに蕎麥でも奢んなさい。
雲鐵　いや、かすりへ廻る人達だ。
卜木魚入りの合方にて、三人下手へはひる。新助初右衞門に向ひ。
新助　扨親分、お前さんが爰においでなさるのを、一向存じませなんだから、御無沙汰をいたしましたは、御免なされて下さりませ。
初右　そりやあ手前が知らぬ筈、見る通りの姿ゆゑ、成るたけ人に知れねえやうに、かういふ所に隱れてゐるのだ。
のち　昨日お前に逢つてから、內へ歸つて父さんに、その話をしましたら、早く新助に逢ひたいと、今朝から待つてゐなさんした。
新助　そりやあこつちも同じ事、早くお目に掛りたく、お尋ね申して參りました。八王子以來の身の上をゆつくりお話し申しませう。（卜珍海顏を上げ思入あつて、）
珍海　いゝお方がおいで下され、此身の難儀を脫れまして、有難うござりまする。
新助　お前が盜みをしなすつたのも、二人の衆を助ける爲、惡い心ぢやあないけれど、表沙汰になる時は暗い所へ行かねばならぬ。これから決してしなさんな。

珍海　悪い事と知りながら、盗み心の出ましたのは親の胤でござります。（ト泣く。）
新助　なに、親の胤とは。
珍海　何をお隠し申しませう。親父は盗みをいたしまして、鈴ヶ森へ獄門に掛りましたと申す事、はかない死をばいたせしゆゑ、菩提のためになくなつた、母が出家にいたしましたが、計らず只今盗みをせしも、親父の氣をば受けついだと、思へば悲しうござります。
　　ト泣く、新助思入あつて、
新助　それぢやあお前の親父といふのは、盗みをした人であつたか、して、名は何と言ひなすつた。
珍海　はい、生れは武州の八王子で、猿猴四郎と申しました。
初右　えゝ。（ト初右衛門びつくりする。新助も思入あつて、）
新助　猿猴四郎と言ひなさるは、慥か親分お前の弟
初右　如何にもおれの弟だ。
珍海　え。（ト珍海驚く。）
初右　兄弟他人の初まりと、若い時に喧嘩をして、それから音信不通の弟。
珍海　それでは伯父さんでござりましたか。

初右　名乘つて見れば眞身の伯父甥
のち　わたしの爲には從弟同士。
珍海　死んだ親父にその顏の、似たのも道理實の伯父樣、えゝお懷しうござりまする。
　　　ト珍海初右衞門に縋る。
新助　こいつア不思議な出逢ひだな。
珍海　名乘り合ふのも面目ない、惡名とりし我身の科、これも親父が盗みをせしゆゑ。
新助　そんなに親父を恨みなさんな。假令盗みをしようとも、その子が盗みをするといふ、そんな譯は必ずない、おれが親父は佛さまと言はれ、惡い心のない人だつたが、その子のおれが。（ト言ひかけ思入あつて。）盗みはしねえが、惡い根性。
初右　新助手前も止めるがいゝぜ。
新助　時候も丁度初袷、命の捨利を拂つても、惡い心の入替時、質屋の繩にかゝらぬやう、こつちも思ひ切りませう。
初右　それは何よりいゝことだ。それにつけても珍海どのに、聞きたい事もあるけれど、最前から餘程の間

のち　お住持樣に御用があらう。

初右　あしたゆつくり來て下さい。

珍海　御禮ながら上りまする。

ト合方にて下手へはひる。ト下手にて、

とも
らい　泥坊々々々々。

トばた〳〵早めたる木魚入りの合方になり、幕明きのおこは、强飯の折を持つて逃げて出る。これを
おともおらい追つて來て、

とも　人の貰つた强飯を。

らい　橫取りをする泥坊女め。

こは　えゝ馬鹿な事を言やあがるな。是はおれが貰つたのだ。

とも　うぬ、さう吐かしやあ、

らい　腕づくで、

こは　取れるものなら取つてみろ。

ト三人門口で强飯の折をかいせに攫み合ひの立廻り、

初右　表で喧嘩をするのは誰だ。
のち　お葬式へ貰ひに行つた、お上さん達でござんすわいな。
初右　又強飯の爭ひだらう。これを持つて行つてやつてくれろ。（ト以前の折を出す。）
のち　あい〳〵。（トおのち折を持ち出て、）まあ〳〵皆さん、待つて下さいまし。
こは　これ〳〵、姉さん危ないから、
三人　退いておいで〳〵。
のち　お強飯からの喧嘩なら、内へ貰つた此折を、お三人に上げますから、仲を直して下さいまし。
こは　なに、このお強飯をおくれだえ。
とも　あれを貰へば三人へ、
らい　丁度仲よく一つづゝ。
のち　是で笑つて下さいまし。
こは　あゝ笑ひますとも〳〵、二人共お禮を言ひなさい。
三人　えゝ有難うございます。（ト三人下手へはひる。）
初右　新助見たか。

新助　はい、見ました。

のち　お強飯一つで喧嘩をする。

初右　今の衆を見るにつけ、以前のことを思ひ出すと、

新助　嘸親分の心ぢやあ。

初右　實に涙が、(ト目を拭ふを道具替りの知らせ、)出るやうだ。

ト初右衛門、おのち恥しいといふ思入、新助はこれを見て氣の毒だといふ思入よろしく、寺鐘にて道具廻る。

(曾根繁之丞浪宅の場)——本舞臺三間の間、常足の二重、向う上の方一間床の間、一行物の掛物、宗全籠に芍薬を活けあり、正面一間襖出はひり口、下手一間腰張りの茶壁、上の方先の屋體の入り口、下の方一間中窓上下板羽目、總て曾根侘び住居の體、繁之丞母おちゑ袖なし羽織、更けたる拵へ同じくおのぶ着流し、嫁になりし拵へにて、おちゑの肩を柔み居る。合方にて道具留る。と合方弾き流しにて、

ちゑ　よう解れたから、もうよいわいの。

のぶ　まあ宜しうございまする。御遠慮なさらず何時迄も、お揉ませなされて下さりませ。

ちゑ　以前と違つて浪々の今は日陰の身の上に、そなたも嫁になつた甲斐なく、やはり以前の水仕の業、その上肩迄揉ませては、氣の毒でならぬわいの。

のぶ　なぜ母様にはその様な、隔てたことをおつしやいます。賤しい此身を引上げて、嫁になされて下さりました、深い御恩の母様ゆゑ、揉み擦りは愚なこと、どのよな事でもいたしますから、おつしやり附けて下さりませ。

ちゑ　その優しい心根を、見込んで嫁に直したそなた、世間の人の目につく程、孝行にしてくれるので實に嬉しう思ひまする。

のぶ　素より足らはぬ生れゆゑ、嘸お目まだるうございませうに、のぶやかうせいあゝせいと、お敎へなされて下さりまする、あなた樣のお志有難うございまする。

ちゑ　此上の母が望みは、紛失なせし短刀を、尋ね出して歸參をなし、二人が仲に初孫の顔を早う見たいわいの。

のぶ　さうなりましたらどの位、嬉しいことでございませう。

ちゑ　それにつけても短刀の、行方を尋ねに參つた悴、もう歸りさうなものぢやわいの。

のぶ　噂を申せば影とやら、裏の鳴子の鳴つたのは、慥にお歸りでござりませう。

ト合方にて奥へはひる。

ちゑ　それでは、忰が歸つて來たか。

ト合方きつぱりとなり、奥より曽根繁之丞羽織着流し大小にて出て來る。おのぶ跡より附添ひ出て、

繁之　母樣、只今戻りました。

ちゑ　だいぶ今日は遲かつたの。

繁之　詮議の日延も昨今ゆゑ、足手許りに歩きました。

のぶ　嘸お草臥なさいましたらう。

繁之　三里許りの道なれど、新橋より品川へ戻り駕籠があつたゆゑ、それに乘つて歸つたれば、さのみ草臥も致さなんだ。

のぶ　それはよろしうござりました。

ト此内大小をおのぶへ渡し、後の刀掛へかける。繁之丞上手へ住ふ。

ちゑ　いくつになつても親の身では、子供の樣に思ふゆゑ、歸りの遲いを案じました。

繁之　お年寄りに御苦勞かけ、不孝なことでござります。

ちゑ　なんの不孝なことがあらう。今浪々の身となりて、かやうに貧しい暮しをなすも、家來の身にて御主様をお恨み申しては濟みませぬが、御前様が惡いゆゑ、妹小萩が非業な最期、叶はぬ戀の遺恨にて、そなたが宿直の其晩に賊が入りて紛失せし、菊一文字の短刀に、お手許金が三百兩、それが越度で長のお暇、町家にたよる知邊もなく、菩提所ゆゑに東海寺の和尚様へお話し申し、明家のありしを幸ひに、此門前に侘住居、不自由勝のその中で、孝行にしてくれるわいの。

繁之　以前と違ふ身の上に、心に任せぬことばかり、お許しなされて下さりませ。

ちゑ　して紛失の短刀は、未だ手がゝりあらざるか。（ト合方になり、）

繁之　既に今日日蔭町より、神田をかけて所々方々小道具屋を尋ねましたが、仲間内の話しにも聞かぬとあれば短刀は未だ小道具屋の手へ渡らず、盗みし者が所持なしゐるか、但し遠國へ賣渡せしか。詮議の日限りも早明日、明日の夜迄にありかゞ知れねば、我歸參の叶はぬのみか、お執成し下されし穗積様の御身にかゝれば、何卒在所の知れるやう、豫て神佛へ祈誓をかけ、刀劍商ふ小道具屋へ頼み置きしに知れざるは、よく〳〵武運に盡きたるか、最早明日一日が歸參の叶ふか叶はぬ境、繁之丞が心中を、お察しなされて下さりませ。

ちゑ　おゝその心中を察し居るゆゑ、日限迄に短刀の、どうぞ在所の知れるやう、朝夕嫁女と共々に。

のぶ　八幡樣や觀音樣へ、お願ひ申してをりまする。
繁之　母上にまで此樣に御苦勞かけるも宿直の夜に賊の入つたる我誤り、就ては殿の御意をそむき、自殺なしたる妹ゆゑ、
ちゑ　今存命でをつたらば、かゝる事にもなるまいに、思へば不孝な娘なぞ。
のぶ　それも御殿でお小さいより、御恩になりし奥樣へ、御義理ゆゑでござりませう。
繁之　何にもせよ明日迄に、在所の知れぬ其時は、最早歸參の望みも叶はず、數代續きし曾根の家名、我に至つて退轉なすが、如何にも殘念至極なり、一命捨てねば御先祖へ、申譯がござりませぬ。

ト繁之無念口惜しき思入。

ちゑ　御先祖樣への申し譯は、母が代つてする程に一命捨つるなどゝいふ、必ず短氣を出すまいぞ。
のぶ　さういふ事のある時は、お年召されし母樣へ、第一不孝になりまする。
ちゑ　我身ばかりか此おのぶ、女夫になりし甲斐もなく、若い身空で後家になるゆゑ、
のぶ　短氣をお出しなさらずに、
ちゑ　朝夕願ふ神佛の、
のぶ　御惠みあるに疑ひなし。

ちゑ　時節を待つてくりやいなう。（ト繁之丞思入あつて、）

繁之　待つも待たぬもあす一日、

ちゑ　お惠みあらば、

のぶ　今宵の内に、

繁之　その手掛りが。

トうなづくを道具替りの知らせ、

知れゝばよいが。（ト三人ぢつと思入、時の鐘、合方にて道具廻る。）

（元の場）――本舞臺元の世話場の道具、新助は門口より向うを見てゐる。初右衛門は煙草を呑み居る。おのち古き火鉢へ土瓶をかけ、破れ團扇で火を煽ぎゐる。此見得時の鐘床の三重にて道具留る。

〽晴れやらぬ空も曇りし雨催ひ、野邊の千種の色あせて、此身の上も秋の末、哀れますほの穗芒に等しき鬢の毛を撫で上げ、

ト新助は跡から來るお辰を待つてゐる思入　初右衛門、以前に變る姿に面目なきこなし、

新助　あれ程道を教へておいたに、こいつア道を間違へたか知らぬ。

初右　新助、誰ぞ跡から來るのか。
新助　二人連がありますが、先へでも行きすぎましたか。
初右　然し東海寺の門前と言へば、爰より外にはない。
のち　どんなお方か裝を聞き、道迄行つて見て來ませうか。
新助　いえ〳〵それには及びませぬ。今に尋ねて參りませう。
ト新助思入あつて、能き所へ住ひ、合方になり、
〽言ひつゝこなたへ座をしめて、
昨日中洲で思はずも、おのちさんにお目に掛り、お前が難儀をしなさる事を、委しくお聞き申しましたが、早く是をば聞いたなら、長年受けた御恩送りに、どうにかいたしませうもの、江戸へおいでなすつた事は、勘八から聞きましたが、何處においでなさる事か、所が知れぬばつかりについそれなりになりましたが、以前は府中八王子きつて人に知られた博勞の親分、これ程迄に落ちぶれて、難儀をなさるとは知りませなんだ。
初右　かゝる難儀を今するも、皆おれが心から、四月手前に別れてから、何處の賭場でも目が立たず、追日々々に半月か一月立たねえその內に七八百兩取られてしまひ、終にやあ馬から家迄賣り、脊負

つて立たれぬ借金に、是非なく江戸へ逃げて來たが、知つての通りのお辰が病氣、かてゝ加へて癇癪で、不斷丈夫な此おれが、差込み通しの長煩ひ、扨かうなると誰一人、貢いでくれる者はなく、する事もなく賣り喰ひに、僅か三月か四月の内に、その日に困る樣になつて、日に百五十の日掛さへ、掛ける事の出來ねえ仕末、かくも落ちぶれるものかと思ふと、人にあふのも面目ない。

〽我身を託ち初右衞門が、しめる袂の初時雨、聞く新助も雨雲にふさがる胸の霽れやらず、

ト初右衞門我身をかこち、愁ひの思入、新助も思入あつて、

新助　かういふ事と早く知つたら、是程迄に親分に、餘計な苦勞を掛けまいもの、殘念な事をいたしました。

〽齒嚙みをなせば傍らに、泣き居る娘が涙を拭ひ、（トおのち思入あつて、）

のち　その父さんの御苦勞を、見るに忍びず品川へ。

〽此身を沈め金調へ、親の難儀を助けんと、思ひしゆゑに跡々の、世話を賴みに中洲迄、

おくろどのゝ賴みに行き、

〽思ひがけなく新助に、逢ひしも岸へ打ち寄する、月の出汐の深い緣、

これも偏に神樣の、

〽お引合せと悦べば、初右衛門も共々に、
ト此内おのちよろしくこなし、初右衛門も嬉しき思入にて、

初右　おのちが歸つてかう〳〵と、話しを聞いたおれの嬉しさ、實は今朝から手前の來るのを、心で待ちに待つてゐたのだ。

新助　少し出掛けに込入つた、用事があつて參るのが、大きに遲くなりました。

初右　さうして今ぢやあ何處にゐるのだ。

新助　知つての通りの身の上に、餘り人の通らねえ、六間堀の横町へ、おさよの名前で店をはり、兄の積りで一緒にゐますが、無生業で暮しちやあ、世間の聞えが惡いから、中洲の茶見世を一軒借り、おさよをそこへ出して置きます。

初右　六間堀といふ所は一遍行つたことがあつたが、阿部川を賣る近所かな。

新助　あれから半町先の横町、二間間口の格子戸造りで、桐屋といふ表札が、柱に打つてござりまする。

初右　その内病が治つたら、禮がてらに尋ねて行かう。

新助　どうぞ尋ねて來て下さいまし。

〽言ふ折門へ人音して、しはぶきなせば新助は、それと心得前へ出で、

ト此内花道より前幕のおさよ、源次出來り、直に門の前へ來り、爰だといふ思入あつて、源次咳拂ひをする。新助思入あつて前へ出で、

親父と一緒に因州から、秩父坂東順禮に八王子へ來たその晩に、急病起つて親父に死なれ、便る所もない身の上、不便に思つて親分に、助けられたは十二の年、それから段々年を越し、一人前になりますまで、大恩受けた此新助、命に代へても御難儀を、お救ひ申さにやなりませぬが、生憎當時都合が惡く、心ばかりの此金を、お受けなされて下さりませ。

〽守りを入れし胴卷より、取出す金の二包、内は黄金か白金か、差出す金を打ち見やり、

ト新助、うこんの守入れより、二分を五十兩包みしを二つ出し、初右衞門の前へ出す。初右衞門思入あつて、

初右　それぢやあおれが難儀を見兼ね、是を貢いでくれるとか。

新助　何の役にも立ちますまいが、小遣ひにして下さいまし。

初右　して此の金は幾らあるのだ。

新助　包の内は二分金で、五十兩づゝありますから、二つで百兩ござりまする。

初右　むゝ、百兩あるとか。

新助　七八百兩なくした跡、百兩ばかりのはした金、思召しには叶ひますまいが、先づ受取つて下さいまし。

ト言ふをば餘所に初右衞門、障子の内へ聞耳立て、
ト初右衞門奥へ思入あつて、

初右　これおのち、何かおつかあが言ふやうだ。奥へ行つて附いてゝくれ。

のち　あい〳〵。合點ぢやわいな。

ト親の詞に病床へ、心のこして入りにける。跡見送りて聲潛め、
トおのち思入あつて上手障子屋體へはひる。初右衞門あたりへ思入あつて、誂への合方になり、

初右　志は忝いが、此百兩は受けられぬ。

新助　え、受けられぬとは。

初右　無生業の身をもつて、百兩といふ大金が、容易に出來やう譯がねえ。その日に困つて親子三人、粥を啜つてやう〳〵に、はかない命をつなぐとも、譬にもいふ渴しても盜泉の水は飮まずとやら不正な金は受けられぬ。

新助　それぢやあわつちが持つて來た、金は不正と言ひなさるのか。

初右　大きな聲ぢやあ言はれねえが、肩書附きの因幡小僧、體にひゞの入つた新助、不正と言ふも無理
　ぢやアあるめえ。
新助　博奕は打つが堅氣な親分、大方こんな事だらうと、察したゆゑに持つて來た、此百兩は清い金、
　證據をお目にかけますから、どうぞ受けておくんなせえ。
初右　して此金が清い金とは。
新助　長年受けた御恩送りに、さつきおさよを品川へ、賣つて拵えた此百兩。
初右　すりや品川へおさよを賣り、此百兩を持つて來たとか。
　〽尋ねる折から門口に、窺ひ居たるおさよと共に、判人源次が入來り、
　　ト門口に窺ひ居たるおさよ、源次思入あつて内へはひり、
さよ　眞平御免、
兩人　下さりませ。
初右　おゝ、そちはおさよに判人の、八王子にゐた源次殿か。
源次　誠に親分久し振りで、計らずお目に掛ります。
初右　面目もねえ此の有樣、涼しい陽氣に汗が出る。（ト額の汗をふく。）

さよ　新宿以來お前さんには、厚いお世話になりましたから、御恩送りに品川の、新百足屋へ三年の、年季で此身を沈めました。

源次　その證人は判人の平家蟹の此源次、新助さんに頼まれて、爰迄一緒に參りました。則ち證據は年季證文、是を御覽下さいまし。

ト源次紙入から年季證文を出し、初右衞門に開いて見せる。

〽證文取出し判人が、押し開いて見せければ、

初右　それぢやあおれが氣質を知つて、おさよを宿へ賣つたとか。（ト忝いといふ思入あつて）思へばこれ迄人の世話を、何人したか知れねえが、只の一人一兩でも、貢いでくれる者はねえに、女房を賣つて百兩の、金を拵えてくれた親切、何にも言はねえ忝ねえ。

新助　おさよを賣つたも先達、親分の目をかすめた二人。

さよ　今日の難儀をお救ひ申すも、萬分の一の御恩送り、

新助　どうぞこれから以前の如く、

さよ　お內へ參られまするやう、

新助　お許しなされて、

兩人　下さりませ。

初右　子分も多くあつたれど、今かうなつては誰一人、尋ねてくれる者もねえに、以前の恩を忘れぬ二人。

＼先非を悔いて詫びければ、初右衛門もうなづきて、

新助　それぢやあ許して下さりますか。

初右　おゝ、許さねえでどうするものだ。

兩人　えゝ有難うござりまする。

源次　嘸お二人も嬉しからう。

＼詫びが叶ひて兩人が、悦ぶ所へこなたより、病みほうけたる女房が、留めるおのちを突き退けて、

トばた／＼になり、上手障子屋體より、女房お辰亂れし鬘、病人の拵へにて出て來るな、おのち捨セリフにて留めながら出るを、突退けて、

お辰　新助は兎も角も、おさよの出入は許さぬぞ。

新助　や、お上さんでござりますか。

さよ　そんなら矢張りわたしをば、

お辰　おのれは亭主を盗みに來たか。

〽血相變へて立ちかゝるを、娘おのちが縋りとめ。

ト　お辰立ちかゝるを、おのち留めて、

のち　これ母さん、お前は樣子を知らぬけれど、難儀を見兼ねて新助が、おさよを賣つて百兩のお金を持つて來てくれました。

お辰　金で人の心をゆるさせ、亭主を盗みに來たおさよ。うぬ、どうするか見やあがれ。

ト　又お辰立ちかゝるを、初右衞門留め、

初右　如何に逆上せてゐればとて、それは手前の思ひ違へ、誰が盗みに來るものか。

お辰　えゝ騙されるのを知らないか、鼻たらし親仁めが。

初右　なに鼻ッたらしとは誰が事だ。

お辰　誰でもないお前の事だ。色のあるのを知らないで、高金出して新宿から、連れて來たあのおさよ、圍つて置いて間男され、顏に泥を塗られたを、恥とも思はぬ鼻ッたらしめ。

初右　病人だから我慢をして、言はしておきやあいゝかと思つて、もう料簡がならねえぞ。

〽しん張棒をおつとつて、打つて掛るをもぎ取りて、

ト初右衛門あり合ふしんばり棒をとり、打つて掛るを新助抱き留め、棒をもぎとり、

新助　これさ親分、お上さんが愛想盡かしを、言ひなさるのも病ひのせゐ、お前がゐなすつちやあ、猶氣が立つばかりだから、腹も立たうが我慢をしなさい。

初右　それだと言つて手前達へ、言はしておいてはおれが濟まねえ。

新助　濟むも濟まぬも親分子分、そんな義理は入らねえから、どうぞ默つてゐてくんなせえ。

〽お辰は疳の高ぶりに、髮振り亂し聲あらゝげ、

お辰　人の亭主を騙し込み、取るだけ金をとつた上、間男をして出て行くとは言はう樣ない人でなし、今此樣に落ちぶれて、その日に困つて難儀をするも、もとの起りはおのれゆゑ、顏は勝れた顏なれど、心は犬に劣つたやつ。畜生々々、ゝゝ、どう畜生。

トおのちお辰を留め。

のち　これおつかさん、何故そんな事を言ひなさんす。お父さんも默りなさんしたから、お前も默つて下さんせ。

お辰　いやだ〳〵默つてはゐられない。明いた口だから言はにやあならぬ。人を化かす野良狐、犬め、

狸め、狼め、轉んだら喰はうといふ人の皮着た畜生め。

〽留める娘を突退けて、口から出仕せ罵れば、おさよも今は怺へかね。

トお辰けしきを變へて言ふ。おさよも怺へ兼れし思入にて、

さよ　さつきから默つてゐたが、人の皮を着た畜生とは、わたしの事を言ひなさるか。親分さんには請出され、御恩もあるがお上さん、お前さんには恩はない。よく畜生と言ひなすつたね。

新助　お上さんに口答へを、手前がしちやあ濟まねえぞ。假令何と言ひなすつても、病ひのせゐだ默つてゐろ。

さよ　さあ病のせゐと思ふから、それでわたしも默つてゐたが、親が滿足に產み附けた、片輪でもない此軀を、畜生と言はれては、わたしも蟲がありますから、默つて聞いちやあゐられません。

新助　えゝ、やかましい、まだ言ふか。默れと言つたら默らねえか。（トきつと言ふ。）

源次　新さんお前が留めなさるが、こりやあおさよさんの言ふのが尤もだ。默つて聞いちやあ居られねえ。今は新百疋で買つたからは、此品川の人別だ。何とやらも釣り方で、共々わつちも腹が立ちます。どし〳〵言つて遣んなせえ。

新助　お前迄が同じやうに、傍からおさよを焚附けちやあ、困る者はおればかりだ。

源次　お前にやあ氣の毒だが、おさよさんが丸潰れに、なるのを見ちやあ居られねえ。

新助　これ、後で事は分るから、どうぞ默つてゐてくんねえ。

〽又もお辰は角めだち、（トお辰きつとなつて、）

お辰　こんなに皆に言はれるのも、此世に生れてゐるからだ。さお宿六の鼻ツたらし、わたしが邪魔になるならば、早く殺してくんなせえ。

のち　これ、母さん、お前が死ねば跡に殘つて、どんなにわたしが困るか知れない。我子を不便と思ふなら、氣を沈めて下さいまし。

〽涙ながらに取り縋り、おろ〳〵なして止むるおのち、子の恩愛もあら〳〵しく、泣き居る娘を突倒し、

トおのちお辰に縋り留める。お辰はきよろ〳〵とあたりを見廻し、おのちを突倒し、

お辰　おれが産んだ子だけれど、親父の贔屓をよくするから、留められるのが癪にさはるわ。

ト立ちかゝるを、新助留めて、

新助　たつた一人のお前の娘、親孝行なおのちさんが、あんなに泣いて氣を揉むのを、不便に思ひなさらねえか。

お辰　餓鬼の折からあいつは泣蟲、何んで不便に思ふものか。（ト新助お辰を留めながら、）
新助　不斷は物のわかりのいゝ、人にまさつたお上さんが、病ひゆゑとは言ひながら、かうも心の變るものか。久し振りの新助がお留め申すも御身の爲、世間の噂にならぬやう、お氣を靜めて下さいまし。
お辰　いやだ〳〵、おれが心の變つたも、元はと言へばあのおさよ、それを盜んだ入墨新助、手前などの言ふ事を、何んでおれが聞くものか。
〽憎まれ口を聞きかねて、
初右　まだ、そんな事を言やあがるか。（ト立ちかゝるを、）
新助　これさ親分、今お前がおこりなすつちやあ、逆上せてゐるお上さんが鎭まらねえ。
初右　もう、かうなつたらこれ迄だ。
新助　お前がやけを言つちやあいけねえ。
〽止むる手をば振拂ひ、お辰を引附け打据ゑる。その手に縋るおのちを突き退け、又立かゝるを新助が、むんづと抱き止むる拍子、ばつたり落す短刀を、お辰は目早く取上げて、
ト初右衛門立ちかゝるを、新助留める。是を振拂つてお辰を引附け打つ。おのちその手に縋るを突退

け、又立掛るを、新助留める立廻りの内、新助の懐より短刀を落す。お辰これを取り上げる。初右衛門は病氣にて息の切れる思入にてどうとなる。これをおさよ介抱する。お辰きつと思入あつて、

お辰　新助、手前はおれを殺す氣か。

新助　何んでわつちがお前さんを。

お辰　いや〳〵殺すに違ひない。生きてゐては邪魔になるゆゑ、鼻ツたらしに賴まれて、手前はおれを殺す氣で、此の短刀を持つて來たか。

新助　そりやあわつちが用心に、不斷持つてる守刀、こつちへ返して下さいまし。

お辰　返してやるから是で殺せ。生甲斐のない軀だから、早く是で殺してくれ。

ト短刀を新助の前へ投出す。

新助　まだそんな無理を言ひなさるか。

お辰　無理は言はない。さあ殺せ〳〵。ぐづ〳〵せずと殺してくれ。

〽殺せ〳〵と身を摺附けられ、いかゞはせんと新助が、途方に暮れしを初右衛門、見兼ねて短刀引取つて、

トお辰、新助に軀を摺附け困らせる、新助困る思入。初右衛門見兼ねて傍にある短刀を取上げ、

初右　それ程手前が死にたくば、亭主のおれが殺してやらう。

　ト短刀を拔き、立ちかゝる。

新助　えゝ、短氣な事をさつしやるな。

初右　新助、留めるな、放せ〳〵。

新助　これが止めずにゐられませうか。

さよ　源さん、留めて上げておくれ。

源次　おゝ、こいつア見てはゐられねえ。

〽留めるも聞かず初右衛門が、お辰を目がけ振上ぐる刃の光に打驚き、堪忍してと身を顫はし、かつぱと伏して泣き居たる。〽こなたは短刀もぎとれば、初右衛門は息切なし、暫しはものも言へざりし。

　ト初右衛門短刀を拔き振上げる。これを新助、源次留める立廻りよろしく。お辰は殺せ〳〵と前へ出るを、おのち留める。トゞ初右衛門の前へ來る。初右衛門短刀を振上げる。お辰びつくりして堪忍して下さりませと身をかはし、はツとうつ伏せになる。おのち此上へ身を寄せ留める。新助短刀を取上げる。初右衛門息切れなし、物の言へぬ思入。おさよ水を汲み初右衛門に飲ませ介抱する。

のち　もし父さん、母さんがあやまつてゐる、堪忍して上げて下さいまし。
さよ　おのちさんが、おいとしいから、もう〳〵およしなさいまし。
初右　おれだと言つて女房なら、殺したくもねえけれど、云ひてえ事を言やあがるから。
新助　それもこんな病ひゆゑ、元はと言へば新宿からおさよをお前が連れて來たから。
源次　お腹も立たうが親分さん、堪忍をしてお上げなせえ。（ト初右衛門思入あつて、）
初右　是につけても新助が、隠して持つてるその短刀、お辰が恐れて顫えたは、正しくこれは業物ならん。
新助　そりやあ奇特がありませう。此短刀は世に稀な、菊一文字の銘作物。
〽かゝる所へ最前から門に窺ふ繁之丞、おのぶも共に入來り、
ト此の以前下手より以前の繁之丞、妻おのぶ見舞に來りし心にて、門に窺ひ居て、菊一文字と聞き思入あつて、門を明け、
繁之　御免下され、わたくしは御隣家の曾根でござる。
のぶ　お内樣の御病氣が、お惡いやうに存じますゆゑ。
繁之　お見舞に上りました。

初右　それは／＼有難うござりまする。御存じの病氣ゆゑ、時折おこつて御長家の、御厄介になりまする。
さよ　まあこちらへお通りなされませ。
繁之　御免下され。（ト今方になり、上手へ通る。）
のぶ　お内樣の御病氣も、早速お落付きなさいまして、よろしうござりましたな。
初右　殺せ／＼と申しますから、おどしに拔いた短刀に、恐れて病ひが納まりました。
源次　かうして見ると憑物でも、ありましたと思はれます。
繁之　唯今門に彳みて、承りましてござりますが、菊一文字の短刀を御所持なされてゞござりますか。
新助　へい、その短刀はわたくしが、所持いたしてをりまする。
繁之　菊一文字は稀なるもの、どうか拜見は出來ますまいか。
新助　お易いことでござります。とつくり御覽なされませ。
へ何心なく差出せば、押し頂いて拔き放し、槌と金色中身を見て、繁之丞は打驚き、
ト繁之丞短刀を篤と見て、
繁之　誠にこれは菊一文字、如何いたして此短刀を、貴殿は御所持なさるゝぞ。

新助　さる道具屋から買ひました。

繁之　さしつけがましき事ながら、此短刀をわたくしへ、お譲りなされて下さるまいか。

新助　譲つてくれとおつしやるのは、どういふ譯でござりまする。

繁之　何をお隠し申しませう。拙者は神原造酒之助の家來、曾根繁之丞と申すもの、當年二月十日の夜、裏手の塀より盗賊入りて、お手許金三百兩に菊一文字の此短刀を、盗み取られてござります。

新助　え。

〽扨はと新助打驚き、（ト新助ぎつくり思入あつて、）

すりや菊一文字の短刀は、神原様へ賊が這入つて、盗んだ品でござりますか。

繁之　その夜拙者が泊り番にて、盗賊入りしが越度となり、終には長の暇となり、菩提所ゆゑに東海寺の此門前へ引移り、侘住居をいたしまするが、其短刀を持參いたせば、再び歸參の叶ふ拙者、それゆゑお譲り下さるやう、平にお頼み申しまする。

初右　お隣同士の事なれば、あなたへお譲り申してくれ、表だつたらそなたの身に、いや、身分に應せぬ銘作を、持つて居たなら害をなさう。早くお譲り申すがいゝ。

　ト思入にて言ふ。新助も思入あつて、

新助　此短刀ゆゑ御浪人を、なされましたとあるからは、如何にもお讓り申しませう。
繁之　すりやお讓りなされて下さりますとか。してその價は何程に。
新助　是を持つてゐた道具屋が、菊一文字の銘作と、知らずに賣れば又買つた、私も存じませねば、僅かな金で買つた短刀、此家の主人はわたくしが大恩人でござりますに、お隣づからでござりますから、定めてお世話になりましたらう。お禮に是を差上げませう。
繁之　それでは却つてお氣の毒、なに程なりともその價を。
新助　決してそれには及びませぬ。
繁之　然らば是を下さるとか、何とお禮を申さうやら、あゝ有難うござりまする。
のぶ　此趣きを母様へ、早うお知らせ申しませう。（ト下手へはひる。）
繁之　短刀詮議も明日限り、その期を過さば歸參叶はず、今日是が手に入りしは、未だ武運に盡きざる證。
新助　あなたへ是をお返し申し、いや、お讓り申して御歸參が、叶ひますればわたくしも、共々嬉しうござります。
初右　こつちもこなたが貢いでくれた、此百兩で近邊の借を返せば是からは、親子が樂に暮される。

のち　此お金ゆゑ品川へ、わたしが此身を賣るところ、おさよが辛い勤めに行くのだ、わたしや氣の毒でならぬわいの。

さよ　いえ〳〵わたしは新宿で、一旦勤めをした軀、辛い苦界も苦にならねば、そのお案じには及びませぬ。

源次　最早日暮れに間もなければ、暮れないうちに少しも早く。

さよ　お前と一緒に行きませう。

〽折から爰へ曾根の母、嫁諸共に出來り、

トばた〳〵にて、下手の木戸よりおちゑおのぶ出來り。

ちゑ　今嫁女から聞きましたが、紛失なした短刀が、手に入つたとは悦ばしい。

のぶ　是ぞ朝夕お願ひ申す、神や佛の正しくお惠み。

のち　わたしも朝夕お願ひ申すが、なぜ母さんは治らぬか。

初右　此業病もその元は、悋氣と貧に迫りしゆゑ、

さよ　憎しと思ふわたしがまた、

新助　此親分を救ふため、品川宿へ身を賣れば、

源次　是で怨みは晴れませう。

新助　又親分が貧の病ひも、

初右　忽ち治る黄金水。

のち　なぜ母樣は治らぬか。

〽案じる娘の孝心が、通じて母は起上り、

ト ドロ〱の樣な風の音になり、お辰正氣になりし思入にて起上り、

お辰　嬉しや、病ひが治りしか。

のち　母さん正氣にならしやんしたか。

お辰　煩つてから今日迄は、夢か現の如くにて、只何事も知らざりしが、今短刀の光に恐れ、はつと思つて正氣になり、もとの軀になつたわいの。

新助　それぞ正しく菊一文字の、

繁之　此短刀の奇特なり。

初右　正氣になつたら是を見ろ、おさよを賣つて新助が、以前の恩を忘れずに、百兩貢いでくれたるぞ。

ト金を見せる。

お辰　それは何より忝い。（ト拜む。）

繁之　御當家にても御内儀の病ひが治りて誠に吉事。

ちゑ　此方にても短刀は、お上へ上げて御歸參叶へば、

のぶ　此上もない身の吉事。

さよ　目出度いうちに唯一人、（ト愁ひの思入。）

新助　それも程なく身請けをなせば、

源次　吉事を待つて少しも早く。

さよ　そんならわたしは、行きますぞえ。

〽名殘り惜しげに立上れば、流石夫婦の水放れ、

トおさよしを〳〵と立上る。新助あたりを兼ねて、名殘を惜しむ思入よろしく、本釣鐘を打込む。

新助　僅かな間でも水がはり、煩はぬやうにしてくれ。

さよ　あい。

〽あいとばかりに立出つれば、

ト おさよ涙をかくし、源次附いて門口を出る。初右衛門是を見て、

初右　おゝ、悦びあれば悲しみあり。

新助　是が浮世の、（ト門口をしめるを木の頭。）親分、習ひだ。

ト新助は顔を背ける。おさよ門口で泣く。初右衛門は不便だといふ思入。お辰は面目なく俯くを、おのち介抱する。繁之丞おちゑおのぶ感心せし思入、本釣鐘三重のやうな合方にて、

ひやうし　幕

七幕目　大切

龜井戸下邸怪異の場

高輪大木戸捕物の場

（淨瑠璃）冬とはいへど小六月　夏めく降に電光　墨流雲間の白浪（淸元連中）

〔役名――才次郎亡靈、因幡小僧新助、法華講中七兵衞實は手先七兵衞、神原造酒之助、法華講中十兵衞實は手先十兵衞、中間權兵衞、馬淵運藏、醫者藪原竹齋、戸倉傳八、穗積の忰富三郞、横川松藏、河原源九郞、赤井道三、茶屋の若い者千助、文使雁七、玉子賣玉藏、按摩杢市、大師參り八十八、同二十市、捕手、新助女房おさよ等。〕

（龜井戸下邸怪異の場）――本舞臺三間高二重、本庇本縁附き、向う一面銀襖、平舞臺に御影石の大踏段、屋體一面に障子立切りあり、上の方跡へ下げて障子屋體、二重の際に御影石の手水鉢、下草などあしらひ、ずつと下の方に同じく高二重の障子屋體、眞中の屋體と此間高欄附きの橋、これに仕掛あり、橋の向う泉水の書割、橋の下水布、所々に本物の樹木などあしらひ、總て神原下屋敷の體、下手屋體に○△□の諸士三人宿直なして居る。傍に行燈あり、二重の障子屋體にも灯りさして居る。時の鐘、合方にて幕明く。

○此龜井戸の御下屋敷は狐狸が多いから、大入道や一つ目小僧が時折り出ては脅されるが、それは獸の仕業ゆゑ、さのみ怖くも思はぬが。

△それに引換へ後の月、小萩殿の自害といひ、又才次郎が締切で、非業な最期を遂げたので、夜な夜な青い灯が燃えて、幽靈が出るといふ噂を専らいたすゆゑ。

□宵番はよいけれど、八ツから先の明番は大勢なれば怖くもないが、僅か二人か三人では、後ろが見られて居られない。

○小萩殿が死なれてから、御前はお氣が荒くなり、御發狂でもなさらねば、よいがと思ふ御癇癖。

△實にお側にゐる者は、薄き氷を踏む如く、常と違つて御不例ゆゑ、お上屋敷へお歸りがあつたら

よいにどういふことか。
□　此御下屋敷がお好きにて、跡の月から二月越し。
○　御上屋敷へお歸りの、御沙汰のないは恐れ入る。
△　早く御全快になるやうに、
□　いたしたいものでござる。
ト合方にて正面の屋體より、醫者藪原竹齋羽織着流しにて出來り。
竹齋　何れも方には、毎夜のお夜詰、御苦勞千萬にござりまする。
○　藪原老にもお詰切り、嘸お勞れにござりませう。
竹齋　生憎此頃同僚が、風邪で引込み居るゆゑに、愚老一人で困りまする。
△　して御前の御不例は、何と申す御病症でござるな。
竹齋　俗に申すおこりにて逆熱烈しく、それが爲お持前のお疳が高ぶり、少しの事がお氣に障り、お手討にでもなさりさうな御樣子ゆゑに、お側に居つても誠に劍難な事でござる。
□　おつしやる通りお氣に障りて、お手討にでもなる時は、
○　跡に殘つた妻子の難儀。

△　早く御全快になるやうな、

□　御配劑を願ひます。

竹齋　篤と考へもう一倍、愚老が骨を折つて見ませう。

ト此時正面屋體の内にて、

造酒　誰ぞ居らぬか。

竹齋　それ、御前が召しまする。

三人　はツ。（ト正面の屋體へ、褄よりはひる。）

造酒　發熱せしめゆ、障子を明けい。

三人　はツ。

ト合方になり、正面の障子を明ける。内に緞子の夜具蒲團、黑天鵞絨の長枕、煙草盆、刀掛へ大小な掛けあり、神原造酒之助羅紗張りの鬘、殿の拵へ病氣の體よろしく。奥より馬淵運藏繼上下にて出來り、手を突いて、

運藏　御前、お目覺めでござりまするか。

造酒　うつらうつらといたせしが、瘧にて心が勞れしか、兎角夢を見てならぬ。

運藏　如何なる夢を御覽遊ばしました。
造酒　むゝ、今まどろみしその夢は、腰元小萩と密通せし、才次郎が是へ參り、予に恨みを申せしゆゑ、憎き奴と一刀拔き、切倒せしと思ひしに、一睡の夢なりしぞ。
運藏　へえ、才次郎が恨みを申しに、これへ參つてござりまするか。（ト氣味の惡き思入。）
造酒　其方の居る所へ參つた。
運藏　え、あの爰へ。（トぞつとせし思入。）
○　扨はいよ〳〵噂の如く、
△　才次郎が出ましたとか。
□　それは氣味の惡い、
三人　事でござりまする。
竹齋　さりとては、各々は、臆病千萬な事でござる。才次郎が參りしは御前が夢の内なれば、さのみ驚く事はござらぬ。
運藏　竹齋老には常に變り、だいぶ氣丈な事でござるな。
竹齋　怖いと思へば我からとて、おどされるものでござる。人は心を丹田へ落ち着くれば怖くござらぬ。

○　それでは怖く。

三人　ござらぬとか。（ト造酒之助思入あつて、）

造酒　これ竹齋、才次郎が恨めしさうに、汝が後ろに坐つてゐるぞ。

竹齋　え〻。（トびつくりして飛退き、顫へて居る。）

運藏　成程心を丹田へ、落着けると違つたものだ。

竹齋　まだ落ち着けぬ所ゆゑ、思はずびつくりいたしてござる。（ト時の鐘。）

造酒　あの鐘は九つだやな。

運藏　御意にござりまする。

造酒　道理でだいぶ睡くなつた。

竹齋　お睡くおなり遊ばさば、御寢なるが何より御藥。

造酒　然らば暫時寢るであらう。

竹齋　それがよろしうござりまする。

造酒　皆の者は宵よりして、長い間大儀であつた。運藏一人是へ殘り、竹齋はじめ跡の者は、次へ參つて休息いたせ。

竹齋　はゝ有難う、
四人　存じまする。
運藏　すりや、拙者一人これへ殘り、
造酒　宿直いたせ。（ト きつと言ふ。）
運藏　はツ。（ト是非なく辭儀なする。）
竹齋　左樣なれば、
四人　御機嫌よろしう。
ト辭儀をなし、合方にて竹齋先に諸士三人、下手橋を渡り屋體へはひる。
造酒　發熱さめて勞れしゆゑか、俄に睡くなつたわえ。
運藏　もはや御寢なりまするか。
造酒　暫時枕につくであらう。
ト唄になり、神原造酒之助屛風を立廻し、內へはひる。
運藏　最早九ツを打つたのに、此御殿に我一人宿直いたすは不氣味な話し、主命もだし難けれど、さてさて難儀な事でござる。

ト風の音、凄き合方になる。

梢を荒す木の葉落し、ぞつとする程風が寒く、何んだか後ろが見らるゝやうだ。それに又行燈が明るくなつたり暗くなつたり、さて〳〵氣味の悪い晩だ。

ト行燈の灯り明るくなつたり、暗くなつたりする。運藏氣味の悪き思入。これにて兩窓を下す。

それに泉水は十軒川から汐入にて、橋の下の流れ迄、小梅の川から續いてゐるゆゑ、川の中で才次郎を殺した時に水面が、血潮で赤くなつたのが、いまだにおれの目に附いで、どうも赤く見えてならぬ、これも矢張り心の迷ひだ。

トドロ〳〵になり、橋の下の流の布へ赤く血汐染み、陰火燃える仕掛け、吹抜けの橋の上へ才次郎の幽靈現はれ、橋を渡り屋體下手障子の所へ來り、障子をあけず、仕掛にて内へはひり、運藏の後ろへ立つ。

えゝ、ぞく〳〵と寒氣立ち、脊中へ水を掛けられるやうだ。

ト此時屏風の内にてうなされる聲する。

や、御前は夢を御覧なさるか。おうなされなさるやうだ。

ト才次郎の幽靈、後ろから運藏の額を撫でる。運藏ぞつとして、

あゝ、冷たい何が顔へ觸つたか。
　ト振返る途端、幽幽顏を出す。運藏見て、
や、才次郎か、南無阿彌陀佛々々。
　ト顫へてゐる。幽靈屛風の方へ思入あつて屛風の上より仕掛にて逆に中へはひる、と内にて、
造酒　やあ、おのれは才次郎、又うせをつたか。
　ト屛風の内より造酒之助拔身にて出で、運藏へ切つて掛る。
運藏　御前、私でござりまする。運藏でござりまする。
造酒　何を、おのれ。
　ト誂へ寢鳥の入りし合方、ドロ／＼にて、造酒之助運藏が才次郎に見える心にて切つてかゝる。運藏逃げる立廻りよろしくあつて、造酒之助運藏を一刀に切倒し、ほつと思入、奧より戸倉傳八出來り、運藏を見てびつくりなし、
運藏　や、こりや運藏殿が、
造酒　おのれ才次郎め。
　ト傳八を目がけ切つて掛る。傳八びつくりして、

傳八　御前、傳八でござります〳〵。

造酒　我を恨む憎き奴め。

　　ト造酒之助切つてかゝり、拔けつくゞりつ立廻りよろしくあつて、切倒し、ほつと思入、屏風の内より才次郎の幽靈出て招く。花道より中間權兵衞走り出來り、

權兵　わたくしをお呼びなされたは、どなた様でござりまする。

　　ト暗き思入にて向うを見る。幽靈顏を出す。權兵衞見てびつくりなし。

や、才次郎か。

　　ト逃げ出す。幽靈襟髪を捉へ引戻す。

あゝ恨みに思ふは尤もだ。堪忍してくれ〳〵。

　　ト振りもぎつて行くを引き止め、咽喉へ喰附く。權兵衞糊紅になり、あつと苦しみ倒れる。幽靈造酒之助に向ひ、

幽靈　よく家來に言ひ附けて、我を非道に殺させたな。一念殘る我が恨み、汝へ返すぞ思ひ知れ。

造酒　やあ腰元小萩と密通なし、家の掟を破りしのみか、屋敷を連出す不屆き者、おのれが罪を顧みず我を恨むは道が違ふぞ。

幽靈　汝に恨みを返さにやおかぬ。

造酒　何を小癪な。

ト誂への合方ドロ〳〵にて、幽靈造酒之助の刀で切拂ふ。ばた〳〵になり、花道より穗積の悴富三郎、繼上下袱紗に包みし短刀を持ち出來る、これにて才次郎の幽靈上手障子の内へ消える。下手屋體より幕明きの三人、ぼんぼりを持ち出來る。造酒之助ほつと思入、

富三　御前、暫らくお下においで下さりませ。

ト直に舞臺へ來り。

造酒　さ言ふは穗積兵太夫が悴富三郎、其方には何用あつて夜陰に是へ參りしぞ。

富三　お悅び遊ばしませ。紛失なしたる菊一文字の短刀、繁之丞が詮議仕出し、只今持參仕つてござりまする。

造酒　なに、菊一文字が手に入りしとか。（ト刀を拭ひ鞘へ納める。）

○　これぞ御親父兵太夫殿が、仁愛深きお計らひゆゑ。

△　忠臣無二の繁之丞が、草を分けて詮議なせし、

□　その功顯はれ手に入りしは、此上もなき恐悅なり。

富三　父兵太夫即刻に、持參なして出仕なすべきを、兼ねてお屆け申せし如く、風邪に犯され打臥しなれば、取敢ず私が持參いたしてござりまする。いざお受け取り下さりませ。

ト合方きつぱりとなり、短刀を出す。造酒之助受取り拔いて見て、

造酒　まがふ方なき家の重寶、菊一文字の此短刀、再び我手に入つたるは誠に大慶至極なり。

富三　して、お咎め受けし繁之丞は。

造酒　短刀詮議仕出す上は、明日歸參いたさせい。

富三　はゝ有難う存じ奉りまする

〇　繁之丞殿にも嘸悦び。

△　我々共も朋輩の、

□　御歸參叶へばともぐに。

三人　悦ばしう存じまする。

富三　見ればあたりに運藏傳八、下部權兵衛が此死骸、如何の次第にござりまする。

造酒　我逆熱に犯されしか、腰元小萩と密通せし、才次郎が亡靈顯はれ、恨みを申すを憎しと、一刀の下に切り下げしが、才次郎と思ひしは、これなる運藏傳八兩人、又權兵衛は亡靈の爲に一命取ら

れしぞ。

富三　誠に彼等兩人は、佞奸邪智なる者共ゆゑ、父兵太夫常々より、その罪惡を糺さんと申し居りしに此最期は、則天の罰する所。

○　佞人亡びる上からは、

△　是にて御家の、

三人　病ひを去り。

造酒　我も夢のさめたる如く、

富三　御全快にござりまするか。

造酒　おゝ、心涼しく、

トうなづくを道具替りの知らせ。

相成りしぞ。

ト造酒之助はッと思入、皆々辭儀をする。此見得よろしく、小謠の入りし合方にて此道具廻る。

(高輪大木戸捕物の場)――本舞臺一面の平舞臺、上の方二間、柿葺の茶見世、葭簀で圍ひあり、此傍

に永代橋乗合船の立札、床几二脚重ねあり、下の方石垣の大木戸、此傍に大八車向う二尺程の地がすり、石垣のがんぎを見せ、後ろ打抜き海の張物二段にかざり、ずつと下二階家伊豫簾を掛けし淨瑠璃臺、手摺下板羽目、總て高輪大木戸の體。茶見世の軒下に茶屋の若い者千助雁七羽織着流し雪踏、文使雁七、千種の股引草履尻端折り、按摩杢市下駄がけ杖を突き、玉子賣り玉藏股引尻端折り草鞋、大師參りの八十八、二十市紺の脚絆麻裏草履、麥藁細工の笛を持ち、皆々雨宿りをせし體、波の音雨車、佃の唄にて道具留る。

千助　やれ／＼酷い降りであつた。今朝朝燒けが大層したから、降るだらうとは思つたが、とんと夕立同樣に、車軸を流すとは此ことだ。

雁七　お前さんは大野屋の千さんでござりますね。今日は掛金集めでござりますか。

千助　文使の雁七さんか、お前も江戸へ行つたか。

雁七　日本橋迄行きましたが、お客先で馳走になり、つい遲くなりました。

玉藏　もし雨宿りの皆さん方、玉子が三つ殘つて居りますが、お買ひなされて下さりませぬか。

杢市　今夜は宿で女郎衆から、餘計におあしを貰つたから、わたしが一つ買ひませう。

八十　殘りの二つはこつちへ買ふが、玉子は一つ幾らづゝだ。

玉藏　二十づゝに賣りましたが、殘りものでござりますから、十六文にしておきます。

杢市　それぢやあおいらが十六文、

八十　こつちが二つで三十二文。（ト錢をやる。）

玉藏　有難うござりまする。お二人さんは大師川原へ御參詣でござりますか。

八十　察しの通り參詣して、羽根田の茶屋で飲み過し、日暮にぶら〳〵出掛けた所、

二十　又濱川の川崎屋で飲直してとつぷり暮れ、こんなに遲くなりました。

千助　宿へお泊りなされたら、雨にお逢ひなさるまいに。

雁七　なぜ素通りをなさいました。

八十　よつ程上る氣があつたが、あしたの仕事の都合があるゆゑ。

二十　素通りをしたばかり、爰でずつぷり濡れました。

千助　雁七さんは見て來たらうが、今九町目の自身番に、大層人が立つてゐたが、お前樣子を聞かなんだか。

雁七　駒寄せへ取附いて、久しく聞いて居りましたが、小鼠の忠次といふ賊の詮議でござりました。

杢市　その小鼠の忠次といふは、因幡小僧の同類で、今度行けば四五度め、切られて死ぬかも知れませ

ぬ。

玉藏　それと一緒に上げられた巾着切の二人の小僧、隼の高吉に、蝮の治郎松と言つて、小僧仲間の頭分だ。

千助　濱の眞砂で昔から、盡きないものだが此頃は、上の御政事が嚴しいから、賊は少なくなりました。

八十　此頃世間に評判の、因幡小僧新助は、魔法を遣ふとよく言ふが、そんな事があるか知らぬ。

二十　忍び込むのが上手だから、それで魔法を遣ふなどゝ、そんな噂を人がするのだ。

玉藏　何もわしらの身分では、内に取られるものがないから、別に心配もないけれど。

杢市　兎角世間が穩かでなければいかぬ稼業ゆゑ、先づ泥坊にないやうにしたいものでござります。

ト千助空を見て、

千助　大きに雨は小降りになつたが、まだ南からずん／＼と、雲を上げて來ますから、もう一降り掛りませう。

八十　雨ばかりならいゝけれど、時ならない雷が鳴り、

二十　それにぴか／＼稻光りで、暗い夜道が明るく見えるが、あんまりぞつとしねえものだ。

雁七　たんと降らないその内に、

李市　少しも早く出掛けませう。

玉藏　それぢやあ皆さん御一緒に、

皆々　さあ行きませう。

ト浪の音にて茶屋の若い者、文使ひ、按摩は上手、大師參り、玉子賣りは下手へはひる。波の音打上げ下手二階家の伊豫簾を卷上げる、爰に清元連中羽織袴にて居並び、直に淨瑠璃になる。

〽時ならぬ雨も烈しき夕立に、ひとしき降りも小六月、きのふの北風吹きかはり、今日の南の遥かに會式櫻の歸り花。

ト本釣鐘合方かすめて、波の音になり、茶見世の葭簀を上げ、新助頬冠り尻端折り、好みの拵へにて出て、あたりを窺ふ。跡よりおさよ手拭を冠り、裾を端折り出て來る。

〽盛り短かき冬の日と、共に語りし新助が、世間も狹くおさよさへ、さえぬ心に雲とぢて、袖に涙の雨宿り、

ト新助は上手、おさよは下手を窺ひ見て、

新助　先づ見渡した所では、向うに追手の人は見えねえ。

さよ　さつき二階のお婆さんに、わざと厚木の道を聞き、あつちへ追手をやるつもり、大方直にあつち

の方へ、追手が行つたに違ひない。
新助　わざと厚木の道を聞いて、そこへ追手をやるなどは、なか〳〵手前も悪人になつた。
さよ　そりやあお前に仕込まれるからさ。
新助　何んにしろ、今しがたの夕立めいた降りにやあ困つた、傘を買ふにも夜更けだから、下駄屋の見世は知れやあせず、駕籠に乗りやあ足が附くから、見世をしまつて茶見世へ飛び込み、先づ仕合せと濡れずにしまつた。
さよ　しかし締りのしてある茶見世へ、断りもなく這入り込み、ほんにぶしつけ千萬だねえ。
新助　そりやあおれの生業がら、御免なせえと断つて、這入るやつがあるものか。
さよ　成程それもさうだねえ。
新助　もう今夜も九ツ過ぎだが、何處でか豪氣に騒いでゐるな。
さよ　七軒の茶屋のやうだが、いゝ聲の藝者だねえ。
新助　濱町といふ咽喉があるな。
〽軒端をもれて茶屋で彈く、端唄も浮いた若い同士。
〽忍び出ても人目の關に、もしも添はれぬ事ならば、別れともなき比翼の仲も、水に浮寐の

憂き別れ、なかざなるまい雁の聲。

ト兩人これを聞き、ちつと思入あつて、

かうして手前を連れては逃げたが、今雨宿りの人達が噂話は身の辻占、既に忠次が御用になり、田町の番屋にゐるやうだ。おれも詮議の嚴しいのを、疾うから聞いて知つてゐるから、足を拔いて上州へ、これから更けるつもりだが、今の端唄を聞くにつけ、手前に別れて行かざあなるめえ。

さよ　え、そりやどうした譯で。

新助　女連れでは目にたつて、兄が附くに違えねえ。連れては來たが手前は是から、宿へ歸つて半年ばかり、苦界の水を飮んでくれ。其内綺麗に身請けをして、江戸にゐられぬ事ならば、他國で氣安く二人で暮さう。

さよ　それはわたしも承知だが、今更爰で別れるも、

〽涙を拭ひ流し目に、男の顏を打ちまもり、

ト　おさよ新助をちつと見て、クドキになる。

〽今更言ふも愚癡ながら、その夜二人が馴染は、會式も過ぎて新宿も初會少なき霜枯れに、〽春を苦勞に奇功紙で、頭痛を凌ぐ雪催ひ、名ざしの客に廊下より、〽覗いて見ればお前ゆ

ゐ、胸に時うつ時さへも、〽忘るゝ程の嬉しさに、話して積る雪の朝。

トおさよ新助を提へ、よろしく振あつて、

無理留めをした居續けが、二人がかうなる縁となり、苦勞苦患をして來たも、お前と一緒になりたいばかり、少しはわたしが心の内も、推量をして下さんせ。

新助　むゝ、それ程迄に思ふなら、例へばおれが邪魔になるとも、死ぬといふのをその儘に見捨てゝ爰は行かれねえ。

さよ　それぢやあわたしも共々に。

新助　行ける所迄連れて行かう。

さよ　えゝ、嬉しうござんす。

〽袖に縋りて嬉し泣き、心は鬼の新助も、妹脊の情にからまれて、見捨て難なく見えにける。

トおさよ新助に縋り泣く。新助もぢつと思入。此時上の方にて題目太鼓の音する。新助思入あつて

新助　や今向うから爰へ來るは、池上參りの法華の講中、見咎められては身の大事。

さよ　それでは又も茶見世へ隱れて、

新助　むゝ、遣り過ごして跡から行かう。

〽葭簀の蔭へ入る折から、團扇太鼓を打ちつれて、

ト新助おさよ葭簀の蔭へはひる。

〽後生も德の雨宿り、暫し休みし夜明かしの、酒にたはいも生醉を、肩にかけたる道づれは、餠についたか餠好きに、下戸と上戸の右左り、よれつもつれつ歩み來て、

ト題目太鼓を冠せ、上手より法華講中七兵衞實は手先の七兵衞、紺の脚絆、草鞋講中の拵へ、團扇太鼓を持ち、法華講中十兵衞實は手先の十兵衞同じく講中の拵へ、團扇太鼓を帶へ差し、七兵衞を肩へかけて出來り、舞臺眞中にてよろしくふりあつて、

十兵　これ七兵衞、今に駕籠に乘せるから、もう少しだ我慢をして、田町迄歩いてくれ。

七兵　何、おらあ大丈夫だ、何處迄も歩くから、肩へ掛けるにやあ及ばねえ。

十兵　それでもおれが手を放しやあ、直にお前は轉ぶだらう。

七兵　旅藝者ぢやアあるめえし、滅多やたらに轉ぶものか。

ト十兵衞手を放す。七兵衞ひよろ／＼としてばつたり轉ぶ。

十兵　それ見た事か、直に轉ばあ。（ト七兵衞起上り、）

七兵　もう大丈夫だ、轉びやあしねえ。（ト此時雨車になり、）

十兵　こいつあ大變、又降つて來た。今の酒屋へ無心を言つて、傘を一本借りて來るから、少し爰に待つてゝくんねえ。
七兵　おゝ合點だ〳〵、幸ひ爰に茶見世があるから、爰へ這入つて待つてゐよう。（ト葭簀を明け内を見て）じや、誰か爰にゐなさるね。
新助　あい、雨宿りをしてをります。
七兵　見れば若い女中と二人、お樂しみの最中へ、とんだお邪魔をいたしました。
　　ト葭簀を元のやうに締める。
十兵　それぢやあおれは、行つて來るぜ。
七兵　おゝ、早く行つて來ねえ。
　〽おゝ合點とうなづき合ひ、左右へ別れて急ぎ行く。
　　ト兩人思入あつて、題目を唱へ、太鼓を叩き、上下へはひる。本釣鐘を打込み、
〽折から告ぐる鐘の音も、海へ響いてかう〳〵と、あたりに彈きし三味線も、ひつそとなりて上汐に岸打つ波の音ばかり、〽首尾も葭簀の片蔭より、伺ひ出て打ち立つる太鼓の音に聞耳立て、

ト此内本釣鐘をあしらひ、葭簀の内より新助、おさよ出る。此前より上下にて團扇太鼓を、ドン〳〵のやうに打つ。新助思入あつて、

新助　遠音に響くあの太鼓は、爰へ來た講中と思ひの外に拍子が違ひ、しきりに打つは若しおれを、取卷く合圖に打つ太鼓か。

さよ　心に怯ぢけのあるせゐか、胸騒ぎがしてならぬ。

新助　こいつア油斷がならねえわえ。

ト兩人きつと思入。

〽まさしく捕手と新助が、身構へなせど高輪の一筋道に是迄と、覺悟をなしたる後ろより、捕つたとかゝるあまたの捕手、

ト新助おさよ身構へなす。爰へ上下より三人づゝ襷鉢卷捕手好みの拵へにて、十手を持ち打つてかゝる。新助ちよつと立廻り、きつと見得。

〽時しも降り來る雨につれ、空に鳴り出すはたゝ神、光は海に輝きて、闇夜を照らすともし火に、捕手は得たりと組附くを、小がひな取つて投げぶしに。

なげぶし〽闇の夜道も何怖からう、命かけての戀ぢやもの。

ト此内新助六人を相手に立廻りよろしく、始終雨の音、電氣の稲光を遣ひ、此中へおさよよろしくあつて、上下より以前の七兵衞一本差し、十手を持ち出で來る。

七兵　やあ天命脱れぬ因幡小僧、水練あつて海中へ飛び入つたらば知らぬ事、

十兵　一方道の高輪へ、おのれを追込み前後を圍めば、最早脱れる道はなし。

七兵　さあ尋常に、

兩人　繩かゝれ。(ト新助思入あつて、)

新助　かくなる上は早や是迄、卑怯未練に逃げは致さぬ。

さよ　連れ添ふ女房のわたしも共に、

新助　さあ繩かけて、

兩人　下さりませ。(ト下に居る。)

〽どつかと座せば兩人が、さそくの早繩かけまくも、かしこき神の惠みにて、善は榮えて惡人の亡ぶる教へぞ。

ト新助おさよ下にゐて、後ろへ手を廻す。七兵衞十兵衞立ちかゝり、繩をかける。後ろへ捕手皆々居並び、此時頭取出て、

頭取 先づ今日は是ぎり。

ト皆々引張りよろしく、

目出度く打出し

因幡小僧（終り）

今文覺助命刺繡

今は昔の三絃堀夜るは往來も七つ藏のほとりでおさきがぬすまれし金ゆゑ身をば捨鐘と女ごゝろにつきつめし思ひは同じ林之助兄良作も浪々の貧苦に文次が引受れど才覺盡きて坪内の屋敷へ無心の强ねだり用人矢市があつかひ兼不義の露顯に後室の歎きをませし小澤が自殺慶十郎が成敗の手討も背中の刺繡に危急をのがれて百兩の思はぬ金が手にいりて悦ぶ甲斐も情なや鶍の嘴と喰違ひ途方に暮し只中へ駈込む姫に氣絶なす母は盲目に妹は啞遂にその身も聾となりねがふは不動明王と名に大山の大瀧へかゝりやつながる制吒迦矜羯羅闇夜をてらす松明のひかりを火焰に見立の尊像とんだ茶番の落合はしがらむ縁の藤澤宿に善人さかえ惡人の熊藏までが赦罪のをさまり

「今文覺、不動文次は」明治十六年九月、作者六十六歳の時、市村座に書き卸された。「曩に團十郎が文覺にて非常の好評を博したれば自分は是を世話にして勤めたしとて默阿彌にあつらへたもの」であつたといふが、比較的寂しい爲か大好評を得るに至らなかつたと年代記にはしるされてゐる。

書き卸しの時の役割は、尾上菊五郎（駕籠舁不動文次）、助高屋高助（旗本坪内慶十郎）、片岡我童（浪人萩原良作、駕籠舁矜羯羅幸次）、坂東家橘（駕籠舁制吒迦清太、坂倉の手代林之助）、市川壽美藏（家主太次右衞門、文次母おとり）、尾上松助（坪内の中間熊藏）、澤村訥子（用人倉澤矢一郎）尾上菊之助（文次妹おたき）、岩井松之助（坪内の息女小澤）、河原崎國太郎（良作妻お崎、坪内の後室慶壽）、中村翫太郎（坂倉の對談人鄕兵衞）、中村時五郎（奥役人六十兵衞）、尾上竹次郎（駕籠舁のうまく三次）等であつた。

口繪にした着色木版畫は豐原國周の筆で、菊五郎の文次と我童の矜羯羅幸次で、大山の瀧に打たれてゐる所、挿繪にしたのは、稿下當時の繪番附の一部である。

大正十五年七月下旬

校訂者

須田町文治内の場
同返し　相州大山大滝の場
清太　家橘
小沢　松之助

今文覺助命刺繡（不動文次――五幕）

神田旅籠町寄席の場
下谷三味線堀の場
駿河臺坪内屋敷の場

序幕

〔役名――坪内慶十郎、背高淸太、用人倉澤矢一郎、寄席の息子與吉、こんがら幸次、刀屋利兵衞、坪内の中間熊藏、寄席の亭主喜六、同下足德次郎、かりん糖屋、中間、丁稚、町人、文使、金貸太兵衞。坪内妹小澤、萩原妻お柳、淸太女房綱、腰元等。〕

（神田旅籠町寄席の場）――本舞臺上手九尺の入口、一間の土間、上り口に紺の暖簾をかけ、此前へ三尺程の上り口を出し、是に机を置き、此上に御一人前百文といふ小さき行燈、下足札と錢を積上げ此脇に盛鹽を飾り、續いて上手の板羽目に下足を大分掛けあり、下手は腰にすかしのある板塀、此外床几二脚、軒口に高く「昔噺　柳亭燕枝」といふ看板の行燈を掲げ、總て神田旅籠町寄席の體、爰に亭主喜六、机の前に居り、客より錢を受取り、下足札を渡して居る、此傍に下足番德次郎、大紋附き印絆天三尺帶をしめ、「サアいらはい〳〵」と客を呼んで居る、仕出しの客人〇△□思ひ〳〵の拵へに

て立掛り居る、此の見得寄席の人寄せの鳴物にて幕明く。

○何とまア、燕枝の人氣はえらいものでございますな、何處の寄席へ出ても、宵からお客が詰めかけて、此の通りでございます。

△左樣さ、噺は少し澁いが、人情噺の芝居掛りといふので、餘程面白うございます。

□それだから私共も、毎晩かうしてやつて來ますが、昨夜も半札で無駄をしました。

○時に席亭さん、

△今夜は燕枝が、

三人出ますかな。（ト亭主思入あつて、）

亭主へイ、まことにお客樣方にお氣の毒でございましたが、生憎昨夜は斷り切れませぬお客先へ呼ばれまして、つい出勤を致しませんでしたが、今夜はきつと出まするでございます。

下足それに今晩はお約束の、忠臣藏の大序より討入り迄の大茶番を致して御覽に入れますれば、お早くお上り下さいまし。

○忠臣藏の茶番は見物だ。

△こりやいゝ所へ來合せた。

〔〕　サア、直にはひりませう。

亭主下足　お早く入らつしやいまし。

ト是にて三人錢を拂ひ、札を持つて奥へはひる、右の鳴物にて、奥より席亭の息子與吉、着流し帶にて出來り、

與吉　何といつても柳派は格別だ、まだ日暮方だといふのに、モウお客が一百から通りましたね。

亭主　さうさ、師匠さへ毎晩出りやお席亭に損はねえが、時折拔かれるにやア一番困る。

下足　左樣さ、何でも眞打は勉強してくれなけりやいけませぬ。

與吉　さうしていつも定連の、御成街道の刀屋の旦那は、まだ來なさらねえか。

下足　えゝ、まだお見えになりませぬ。

亭主　大方今に來なさるだらうよ。（ト寄席の鳴物にて、花道より丁稚一人出來り、直に舞臺へ來て、）

丁稚　モシ席亭のをぢさん、私や御成街道の刀屋から參りましたが、內の旦那は來ておいでなさいませぬか。

亭主　さうよ、今噂をして居たとこだが、

與吉　どうなすつたか、まだ。

下足　來なさいませんよ。

丁稚　さうでございますか、それぢやあモシお出でなすつたら、阿部川町のおかみさんがお出でなさいましたから、直お歸り下さいましと、どうか言傳をして下さいまし。

亭主　へイ、ようございます。今にお出でなすつたら、

與吉　忘れずに申します。

丁稚　どうかお願ひ申しまする。

ト丁稚引返してはひる。右鳴物にて、上手より清太女房おつな、着附駒下駄にて出來り、

つな　モシ與吉さん、暫くお目にかゝりませんが、いつもお達者でようございますねえ。

與吉　おゝ誰かと思つたらお前はおつなさん、さうして何處へ行きなさるのだえ。

つな　サア、今日は私が去年まで、勤めて居た駿河臺の、坪内慶十郎樣の御誕生日ゆゑ、昔の御恩を忘れずに、お手傳ひに行きますのさ。

與吉　さうかえ、そりやまア感心なことぢや、然しまア此頃ぢやア子供の内から好いた仲の、あの清太と夫婦になり、さぞ嬉しいことだらうね。

つな　別段嬉しいこともありませんが、御屋敷勤めをして居た身には、結句氣樂でようございますよ。

下足　そりや惚れ合つた仲だといふから、どんな不自由な思ひをしても、嬉しいに違えねえ。
亭主　そりやモウ若い内は、親が堅い亭主をば持たせようといつたとて、氣に入らなけりや不縁の元。
まア好いた同士程、いゝ事はありませんのさ。
つな　親方さん迄そんな事をおつしやつて、私やきまりが惡うござります。
亭主　なに、亭主の事を言はれたとて、きまりの惡いことがあるものか、お前も如在はなからうが、内の人が家業をば精出して稼いだら、お前も共に骨を折つて、清さんの爲にならなけりやいけねえよ、兎角下々の者は共稼ぎでなけりやあ、世の中は渡れねえのよ。
つな　そりやモウ親方さんのおつしやる通り、それでなけりや其日稼ぎは、なか〳〵凌いぢや行かれません。
與吉　モウ直に世帶じみるので、それで亭主持はいやになるのよ。
下足　然し清さんは仕合せ者だ、かういふお上さんを持つといふのは、こりや今年は豐年だ。
つな　皆さんが寄つてたかつて、そんな事をおつしやると、モウ爰には居られませぬ。（ト向うへ思入あつて）どれ、お暇をしませうわいな。
與吉　まア、いゝぢやねえか。

つな　大きにおやかましうござりました。（トやはり右の鳴物にて、おつなこなしあつて花道へはひる。）

亭主　あのおつな坊も屋敷奉公してから、大分落着が出て、いゝかみさんになつた。

下足　親方、與吉さんにもいゝお上さんを、持たせて上げにやアいけませんぜ。

與吉　べらぼうめ、まだかかアなどを持つて苦しんでたまるものか。

下足　それぢやアやつぱり、散し喰かね。

與吉　えゝ餘計な事を言やアがるな。

ト此時花道より、坪内の中間熊藏、紺看板一本差し、藁草履にて出來る、後より宿場の文使ひ、文を持ち付き來り、花道にて、

文使　おゝお前さんは坪内様の御中間、熊藏さんではござりませぬか。よい所でお目にかゝりました。

熊藏　お前は使ひやのをぢさんだな、又文を持つて來たのか、文などをよこすのは止せと言つておくのに、又よこしたのか。

文使　そりやお前さんはさうおつしやりますが、それは／＼お八重さんだつて、ひど算段をしてよこしたお文、どうか晩にはきつと來てやつて下さいまし。

熊藏　なに、それぢや算段をしてよこした文とか、さうして見ると、萬更でもねえと見えるな。

文使　どうして〳〵、一晩顔を見ぬと、御膳もろく〳〵たべられぬと言つてゞござりました。

ト是を聞き嬉しき思入にて、熊藏文を受取り、懐のかます煙草入より、天保錢を二枚出してやることあつて、

熊藏　おい〳〵、これは少しばかりだが、道で蕎麥でも喰つて行きねえ。

文使　これは毎度、有難うござります。（ト辭儀をなし、受取り、）それぢやア晩には、きつと來てあげて下さい。

熊藏　ムヽ承知だといふことよ。

ト右鳴物にて、文使ひ下手へはひる。熊藏文を見て、

あんなでゞ福でも、かうして文をよこされりやア、ツイ行きたくなるやつだ。それにしても錢かねえが、向うの寄席で錢を借り、今夜は早く行つてやらう。（ト舞臺へ來る、與吉見て、）

與吉　モシ、お前は坪内樣の御中間熊藏さん、久しくお目にかゝりませんね。

熊藏　さうさ、此頃ぢや逢はなかつたが、いつも御機嫌でよろしいよ。

與吉　さうして、今日は何處へお出でなさいます。

熊藏　今用達しに出て來たのだが、ツイよんどころねえやつに逢つて、急に金が少し入用と來たが、ど

うだえ一兩ばかり貸してくれねえか。

與吉　なに、一兩、そりやモウありせえすりや貸しますが、今日は生憎持合せがござりません。

熊藏　オイ與吉兄い、そんな愛想のねえ事は言はねえものだ、此間も駿河臺の小屋敷の中間が、木戸でぐづ／＼いつたのを、おれが中裁にはひつて、喧嘩もせずにやつたが、其時の禮だと思つても、一兩ぐれえ貸してくれてもいゝぢやねえか。

與吉　そりやァおつしやる通りだが、それからあくる日金を一兩と酒を五升持つて、お前さんの部屋へ禮に行つたぢやござりませんか。

熊藏　その一兩と酒五升は、おればかりの物にやならねえ、直に一兩で肴を買ひ、大勢して飲んでしまつた。氣の毒だが、モウ一兩貸しておくんなせえな。

與吉　それぢや二重に禮をするやうなものだが、まアようござりまする、又お世話になりませうから、お貸し申すといたしませう。

ト懷の煙草入より一分銀を四つ出して、鼻紙に包み渡す。熊藏わざと氣の毒なるこなしにて受取り

熊藏　イヤ、流石は席亭の若親方、直に一兩貸してくれるとは、實に氣前に惚れるなア。（ト金を頂き、懷へ入れ、）大きに有難うござります。

與吉　オイ、そんなにおだつても、此後はお斷りだよ。

熊藏　そんなにづうづうしく來られるもんですかね。大きに有難うございます。

ト鳴物にて上手へはひる、與吉後を見て、

與吉　ほんたうに折助にやあ、弱い稼業をして居る者は、いつでも附け込まれて無心を言はれ、こんな馬鹿々々しいことはねえや。

亭主　オイ與吉、あんな奴に一兩とられちやア、此方の稼業がつゞかねえ、斷つて歸せばいゝのに。

與吉　それでも亦大勢して押してゞも來ると、一兩ぐらゐにやかえられませんから、溝へ投げ込んだと思つて貸してやつたのだ。

下足　わつちやあ此後來ねえやうに、ひどい目に逢はせてやらうと思つたが、與吉さんがおだやかに金を貸してやんなさるから、だまつて爰に見て居たが、手がむづむづしました。

與吉　べらぼうめ、後でいくら威張つても駄目の皮だ、此間中開衆が大勢押して來た時に、一番掛に逃げたぢやねえか。

亭主　そりや與吉の言ふ通りだ、此の野郎は口先きばかりで、此くれえ弱い奴は、おそらく世界にありやしねえ。

下足　さう二人してたゝみ附けられては、流行のおれも大閉口だ、實はやつぱり怖いから、默つて爰に見て居たのだ。

亭主　何を言やアがるのだ。

三人　アハヽヽヽ。

ト笑ふ、是な合方になり、上手より、刀屋利兵衞更けたるかつら、羽織着流し、雪駄にて出來る、寄席の三人は見て、

亭主　これは刀屋の旦那、今日はどちらへお出でになりました。

與吉　お出でが大分遲いゆゑ、今お噂を致してをつたところ。

下足　今日は師匠が間違ひなく出ますゆゑ、

三人　直にお上り下さいまし。

利兵　さうかえ、それぢや是非師匠の茶番が見たいが、少し商ひ用があつて不都合だ。

ト三人氣が付き、

亭主　ほんに、旦那今お内の小僧さんがまゐりまして、阿部川町のお上さんがお出でなすつて、お待ちゆゑ、

與吉　ちよつとお歸りなさいましと、お言傳がござりましたつけ。

下足　こつちも生業に身が入つて、濟みませぬが忘れました。

利兵　さうかえ、それぢやちよつと内へ行かすばなるまいわえ。

ト行きかける、爰へ下手より金貸郷兵衛、羽織着流しにて出來り、利兵衛を見て、

郷兵　モシ〳〵利兵衛さん〳〵、丁度よい所でお目にかゝりました、今お約束の金子を、あなたの所へ持つて行く所でござりました。

利兵　それは御苦勞樣でござりました、それでも御持參下さいましたか、大きに有難うござりまする。

郷兵　さうして急に百兩金御入用とおつしやいましたが、何か儲け口のお買物でもござりましたか。

利兵　左樣サ、以前はさる所の立派な侍であつたが、今は些細な事から浪人して、淺草の阿部川町に住んで居なさる御人から、家重代の刀だが、よんどころなく賣拂ふと言ふから、それをば買ふに差支へ、百兩御無心申しました。

郷兵　さうして其刀は、何といふ刀でござりますな。

利兵　さればサ、不動國行といふ銘刀でござる。

郷兵　さうして、其の刀を買つた上、直に賣り口でもござるのか。

利兵　それは幸ひ駿河臺の、坪内樣でほしいとの仰せ、御意に入れば百五十兩には、慥に賣付けまする積りさ。
鄉兵　成程そりやうまい儲け口だ、それでは爰で直にお貸し申しませうが、利息は五兩一分でござりますよ。
利兵　假令三日が四日でも、きつと附けて御返濟申しまする。
鄉兵　それを承知なら、サア渡しませう。
　ト百兩包みを財布より出して利兵衞に渡す、利兵衞受取り、やはり懷の財布に納めて、
利兵　大きに御世話樣でござりました、それでは急いでまゐりまする。
鄉兵　アヽ儲け口は早いがいゝ、ドレ、わしもモウ一二軒、貸付所へ廻つて行かう。
利兵　又お目にかゝりまする。
　ト冇の合方にて、利兵衞は花道へはひり、鄉兵衞は上手へはひる。此後へ上手より以前の熊藏頰冠りにて出來り、利兵衞の後を伺ひ、あれを取ればうまいといふこなしにて、尻を端折り、花道へ伺ひ伺ひ急いではひる。此の樣子を寄席の三人見て、
亭主　今の中間は、熊藏ぢやねえか。

與吉　わつちもをかしく思つてゐたが、刀屋さんの後をつけ、引つたくらうといふつもりぢやねえか。
下足　をかしな様子で行つたから、まさしくそれに違えねえ。
亭主　どうか刀屋の旦那に、間違えがなけりやいゝが。
與吉　熊鷹眼で狙はれては、
下足　鳶に油揚を見せたより、
亭主　餘程あぶねえ狙はれもの。
與吉　どうか無事に。（ト向うを見るを、道具替りの知せ」歸りなさりやあいゝが。
ト此の道具よろしく廻る。

（下谷三味線堀の場）——本舞臺一面の平舞臺、正面舊佐竹の土藏を斜に書割り、上手町家夜の遠見、上寄り樹木の張物にて見切り、上手屋敷の日窓のある張物、裾通り大溝の流れの書割、所々へ丸石を置き、すべて下谷三味線堀夜更の體、合方、時の鐘にて道具止る、と上手よりかりん糖賣、縞の着付三尺、頭へ手拭を吉原冠りにし、尻を端折り、草履にて大きなかりん糖と書きし提灯を、竹の先へ附けて背中へ差し、赤き紐の附きし辻占と書きし箱を斜に肩へ掛け出來り、

かり　深川名物かりん糖でござい〳〵。

ト呼びながら出來る。下手より○△□の中間三人、紺看板草履にて出來り、

○　オイ〳〵かりん糖屋さん、辻占はあるかえ。

△　是からきやつの所へ行くのだが、ちよつと辻占のけんとくが見てえ。

□　三人へ一袋、延喜のいゝ所を入れてくんねえ。

かり　ヘイ、おいくらばかり差上げます。

○　いくらかくらもありやあしねえ、おめえの方のいゝだけくんねえ。

△　どうせこちとらのことだから、錢は際拂ひだ。

□　際拂も死際だよ、其氣でどつさり負けてくんねえ。

かり　御常談おつしやつちやいけません、細い元手のかりん糖賣、たゞ上げるわけにやいきません。

○　なに、よこさねえ、そんなことを云やあがると、

△　箱ぐるみふんだくるぜ。

□　サア、いくらでも置いて行け。（ト是にてかりん糖屋びつくりして、）

かり　えゝ、ようございます。それぢやア一袋差上げませう。まア少し待つて下さい。（ト荷の箱よりかり

ん糖を少しばかり包みて出し、是れで御勘辨願ひまする。

ト中間三人受取り、めい〳〵開き見て、

○『今夜は待つて居るよ』と、これぢや早く行かなくつちやならねえ。

△おれのは何だ『きざな人だよ』と、こりやいけねえ。

□まて〳〵、おれのは『お酒はやめておくれ』え丶畜生め、有難え。（ト△腹の立ちしこなしにて）

△ヤイ、おれにい丶のをもつとよこせ。

ト此前方三人見て居る内に、かりん糖屋はぬき足にて下手へはひる、△捜して、

何だかりん糖屋め、いつの間にか行つてしまやアがつた。

○まア仕方がねえ、これから柳原の土手へ行かう。

△おらア板橋へでも行かうと思ふのだ。

□辻占が悪いからよせ、柳原で間に合せておけ。

△それぢや一緒に附合はう。

○□さうしなせえ〳〵。

ト有鳴物にて、三人は上手へはひる。直合方、時の鐘にて、花道より萩原良作の妻お柳、切つぎ衣裳

浪人者の女房にて、小田原提灯を提げ出て來り、花道にて、

お柳　あの鐘はモウ上野の五つ、あの刀屋の利兵衛殿が、生憎留守にて待合せたゆゑ、思はず知らず遲うなつたが、さぞ良作殿が待兼ねてござらう。ドレ／＼少しも早く行きませう。

ト舞臺へかゝる、此時熊藏いぜんのこしらへ、頰冠りにて付いて出で、

熊藏　モシ／＼お上さん／＼、ちよつと待つて下さいまし。

ト是にてお柳後を見て、

お柳　ハイ、さうおつしやるのは、あの私でござりまするか。

熊藏　さうよ、お前より外に、誰も居やあしねえ。

お柳　さうして、どなたでござりまする。

熊藏　イエ、わつちは往來の者でござりますが、今夜はまつくらで少しもあたりが分りませぬから、其の提灯のあかりをたよりに、どうか御一緒に連れて行つておくんなさいまし。

トお柳は氣味の惡きこなしにて、

お柳　さうしてあなたは、どこへお歸りでござります。

熊藏　エヽ、わつちやあ駿河臺でござりやす。

お柳　それぢやア私とは道が違ひまするゆゑ、お先へ參りまする。
熊藏　いえなに屋敷は駿河臺でござりまするが、すこし阿部川町へ用事がござりまして參りますから、御一緒にお連れなすつて下さいまし。
お柳　御一緒に參りたうござりますが、少し急ぎの用事でござりますから、お先へ御免下さいまし。
熊藏　そりやお急ぎかは知れませぬが、まアそんなことを云はずに、ト言ひ乍ら、わざと提灯の灯りを吹けし、ジヤア、こいつアとんだことをした。
ト提灯を探る振にて、お柳の懷ろへ手を入れ、財布を引出す。お柳びつくりして其の手をとらへ、
お柳　こりやあなた、何をなされまする。
熊藏　何をするものか、金を取るのさ。
お柳　え……。
トびつくりする。是を凄き合方になり、ちよつと立廻つて、財布を引出す、お柳しつかと押へ、
どうしてこなたは此の金を、所持して居るを知つたるか。
熊藏　そりやア知らなくつてどうするものだ、さつき旅籠町の寄席の前で、あの刀屋の利兵衞めが、高利貸から借りた金、何にするかと小影で聞けば、阿部川町の浪人から、刀の拂ひが出たゆゑに、

それを買つて外へ賣れば、直に五十兩儲かると、急いで行くゆゑ後を附け、道で取らうと思つたが、人絶のせぬ宵の內ゆゑ、たうとう內迄附けて行き、どうすることかと伺へば、賣人はお前で百兩を直に受取り歸る樣子、こりや女のことゆゑに、譯のねえ仕事だと付けて來たのも戀と慾、お前を戀でなくさんで、其上百兩貰ふ氣だ、もう斯うなつたら仕方がねえ、蛇が見込んだ青蛙、往生して金を渡し、おれの自由になんなせえ。

お柳　そんならお前は刀屋にて、受取る所を小影で見込み、私の後をつけて來たのか。

熊藏　サアそれだから仕方がねえ、素直に渡してしまひなせえ。

お柳　それ程見て居て附けて來ては、所詮取る氣であらうなれど、まア此金のなくてかなはぬ、其入譯を一通り、お聞きなされて下さりませ。(ト合方になり、)何をお隱し申しませう、私が夫と申すは、元鄕士を勤めまして、裕福に暮しましたが、少しの事より落ちぶれて、今は阿部川町に微な暮し一日々々と賣食ひなし、今は明日にも困れども、あの刀ばかりは先祖より傳はりまする銘刀ゆゑ、手放さぬ料簡にて、かたく所持して居りましたが、此度夫の弟に、林之助と申すがござりまして、若氣の至りに主人の金を、遣ひ込んで店をばしくじり、既に訴へられまして科人となる所をば、無理に願つて其金をば、返せば內濟にしてやると、それは〳〵有難い御主人樣の仰せにて、

やつと弟一人を、科人にせずに濟みましたが、扨其償ひの金に困り、放しともない刀なれど、餘儀なく放して調達した、此の百兩をお前樣に取られましては私が、所詮生きては居られませず、又弟も此金がなければ矢張り科を着て、お上の成敗受けねばならず、どうか二人三人迄、人の命の助かることゆゑ、是ばッかりは見脱して、お許しなされて下さりませ。

ト手を合せ頼む、熊藏わざと聞かぬ振をして、

熊藏　所詮おれが見込んだからは、どうお前が頼んでも、とても見脱す氣遣ひはねえから、そんなことをぐづ〱云はずと、早くおれに渡しなせえ。

お柳　そりやさうでもあらうなれど、今も云ふ弟の身分にかゝはる大事の金。

熊藏　えゝやかましい、それをおれが知るものかえ。

ト熊藏無理に財布を取らうとする、やるまいと爭ふはずみに、お柳の横腹を蹴る、お柳ウムと氣絶なする こと、熊藏すかし見て、

それ見ろ、目を廻しやがつた、此儘置くのは惜しいものだ。

トお柳にかゝる、此時向うにて人音するゆゑびつくりして、

えゝ生憎人が來る樣子だ。見付けられちやあ一大事だ、此の間に早く。

ト金財布を引たくり、早い合方にて下手へはひる。爰へ花道より、坪内の用人倉橋矢一郎袴羽織大小雪駄にて、中間小田原提灯を持ち先に立ち出來り、花道にて、

矢一　コレ可内、爰は佐竹の七ツ藏、いつもながら淋しいことぢやな。
中間　へイ、毎度追剝などが出まして、隨分物騷な所でござります。
矢一　左樣か、急げ〳〵。（ト舞臺へ來て、中間お柳に躓き、びつくりして、よく〳〵見て、）
中間　旦那樣、人が倒れてをります。
矢一　なに、人だ、ソレ灯しを見せろ。
中間　へイ。（ト提灯を差出す、矢一郎よく〳〵見て、）
矢一　おゝこりや婦人が倒れて居る、如何いたせし事なるか。（ト側へ寄り、引起し介抱して、）コリヤ婦人如何致せしぞ。コレ氣を慥に持たつしやい。
ト是にてお柳息を吹返し、心附き、
お柳　モシ、其お金を取られては。（ト矢一郎に取附く。）
矢一　こりや、氣を慥に持たつしやれ、シテ金子でも取られしか。
お柳　ハイ。（トよく〳〵見て、）是はまア、失禮を申しました、實は只今盜難にあひましてござります。

矢一　それゆゑ氣絶を致されしか、さうして金子は、どれ程とられたのぢや。
お柳　ハイ、百兩とられましてござりまする。
矢一　なに、百兩、それは大分大枚ぢやが、何しに夜中大金をば、所持して通行いたされしぞ。
お柳　ハイ餘儀なく持つて參りましたは、今宵につゞまる切ない譯、一通りお聞き下さりませ。（ト合方になり。）何をお隱し申しませう、今宵中に其金がなければならぬことあつて、家重代の刀をば賣代なして調達なし、夜に入りしも構はずに我家へ急ぐくらまぎれ、盜賊に付けられて、金を取られし其上に、足蹴にされて氣を失ひ、既に命の危ふき所を、何れの御方か存じませぬが、お助け下されし御親切、御禮は詞に盡されませぬ。
矢一　それは危き次第でありしが、もと〳〵そちが百兩の金子を所持なし居る事を、存じて居りし賊なるか。
お柳　それは右の刀屋より、付けて參りしとのことでござりまする。
矢一　シテ盜賊の面體恰好、そちは見覺えおかざりしか。
お柳　たしか中間衆の樣子なりしが、こはい〳〵が先に立ちまして、顏の樣子は覺えませぬ。
矢一　ムウ何にしても氣の毒千萬、然し其身に恙なく、又金錢はわきものゆゑ、是迄の災難とあきらめ

て歸るがよい。

ト矢一郎お柳のなりをよく〳〵見て、氣の毒に思ひ、懷中より金子一兩を出し紙に包み、

見れば身形もよろしからず、何れかの御浪人と推察いたす、甚だ失禮ぢやが、これは身共が寸志でござれば、どうか納めておいて下され。（ト渡す、お柳押頂き、）

お柳　見ず知らずのお方樣に、此樣なお惠みを受けましては、誠にどうもすみませぬ。お志しは無足にせず、頂戴いたして置きまするが、どうも百兩の金子をば、取られましては夫へ對し、顏向けが出來ませねば、いつその事に此身をば。

ト覺悟のこなし、矢一郎是を悟り、氣の毒なるこなしにて、

矢一　そりやはや、なくてならぬ金を盗まれては、夫へ對し申譯もあるまいが、もしやお前の其からだに、あやまちでもあつた時は、歎きの上の歎きゆゑ、何れ身寄もあらうゆゑ、それへ頼りて相談なし、決して惡氣は出すまいぞ。

お柳　有難うござりまする、命の御恩の旦那樣、其上お惠み受けまして、どうもあなたへ濟みませぬ。

矢一　イヤ、些細な事にて其樣に、禮を言はれては面目ない。（ト中間へこなしあつて、）可内、提灯やれ。

中間　ネイ。

ト矢一郎後を案じるこなしにて、中間付いて上手へはひる。お柳は後を伏拜み、思入あつて合方になり。

お柳　あゝ何れの御方か存じませぬが御親切なる旦那樣、よい御方に御目に掛り、氣絶なしたも助かつて、斯うして御金迄お惠み下され、何とお禮を申さうやら、有難うござりまする。（トよろしくこなしあつて、）それに付けても不仕合せは、七年後から打ち續く、貧乏暮しにかてゝ加へて、夫は長の病氣となり、少しの物も賣り盡し、其日にせまるやせ世帶、たゞさへ心細いのに、義理ある弟が身分の事より、手放し難き一品をば、賣代なして調へし、其百兩も賊にとられ、重なる不運の私等兄弟、どうも是れから取られしとて、何おめ〳〵と歸られませう。いつそこれより淵川へ、身をば投げてあの世にて、言譯をいたしませう。（ト小石を拾ひ、覺悟を極めて袂へ入れ、）いつそ向うのあたらし橋から、さうぢや。

ト早き合方にて、逸散に花道へ駈けてはひる。此後へ以前の熊藏、下手よりうろ〳〵捜しながら出來り、

熊藏　さつきのどさくさまぎれに、煙草入れを落したが、中には一分か二朱だから、少しもほしいこと

はねえが、おれが名宛の文があるから、若し人に拾はれては後日の難儀、どうか手に入れてえものだが。

ト合方にて、そこらを捜す。此内花道より、矜羯羅幸次、背高清太の兩人、駕籠舁き、廣袖のゆかた三尺帶にて、看板を付け出來り、熊藏に突きあたることよろしく、

幸次　えゝ邪魔になる所に居やがるナ。

熊藏　御免なせえ、今落しものをしたから、捜して居るのだ。

トそこらを尋ねて居る、此内清太熊藏が落したる煙草入を拾ひ、すかし見て、

清太　こりや煙草入だ。（ト熊藏聞いて、）

熊藏　なに、煙草入、それを。（ト引つたくるを幸次隔てゝ、）

幸次　何をしやがるのだ。

ト拂つて邪魔にはひる、三人双方へ別れて見得、是より誂への鳴物になり、世話ダンマリの模様、幸次清太彫物の肌ぬぎになり、煙草入を爭ふ立廻りあつて、熊藏は追はれて花道へ駈けてはひる。清太思はず煙草入を拾ひすかし見る、此の見得よろしく、此の道具廻る。

（駿河臺坪内屋敷の場）——本舞臺三間の間平舞臺、上手一間の床の間、不動の掛物、御神酒を備へあり、下手へ續いて襖の出這入り、明立あり、下手一間襖出這入り、高麗緣の薄緣を敷詰め、大欄間をおろし、總て坪内家座敷の體、爰に以前のおつな、腰元おまき、お筆の二人居並び、備へ物などをして居る見得、琴唄の合方にて道具止る。

まき　おつなさんには、よくまア今日はお上りなされましたなア。

お筆　當節は御奉公人ずくなの事ゆゑ、お前樣がお出でになり。

まき　わたしどもは、

お筆　助かりますわいな。

つな　いえ、もう今日は九月二十八日にて、毎年殿樣の御誕生日の事ゆゑに、いつでも忘れず長年の、御恩を少しはお返し申す心で、お手傳ひには上りましたが、モウ只今では町家の暮しにがせいな事は出來まするが、とんと几帳面の御用は出來ませぬわいなア。

まき　いえもう、長年の御勝手を、覺えしお前樣の事ゆゑ。

お筆　外のお方と違ひまして、私共がどのくらゐ、助かることではござりませぬ。

つな　何の私相應の、御用があらば御遠慮なく、仰せ付けられて下さりませ。

まき　いろ／＼お願ひ申しまするが、是非今夜はお泊りなすつて、

お筆　晩には私共が打寄り、面白い事をして遊びませうわいな。

つな　久し振にて私も、お邪魔をいたして、又笑ひまするでござりまする。

ト合方になり、奥より妹小澤、屋敷娘のこしらへ、振袖衣裳、高島田にて出來り。

小澤　おゝ綱や、爰に居やつたか。いかう最前からわしや捜して居ましたわいな。

つな　ハイ私は只今不動樣のお供へ物のお手傳ひをし乍ら、おまき殿とお筆殿と、面白い話をして居ましたわいな。

小澤　さうかいの、わしは又そなたに少し頼みたい話があれば。（ト腰元兩人を見て、）そなた衆は、少しつなに話しがあれば、奥へ行つてたもや。

まき
お筆　ハイ、畏りました。（ト合方にて、兩人下手へはひる。後小澤上手へ住ひ、こなしあつて、）

小澤　コレつなや、わしやそなたに、少し智慧が借りたいわいの。

つな　なに、私に智慧を借りたいとおつしやいますは、どのやうなことでござりまする。

ト合方になり、

小澤　そちも覺えて居やらうが、いつぞやお國へ行く時に、神奈川宿の泊りにて。

つな　ほんの旅路のうさはらしと、ふとした事よりお手引き申し、道ならぬお取持をいたしましたも、今々思へば勿體なく、濟まぬ事を致しました。

小澤　イエ〳〵、何の濟まぬことがあらう、私はあの時彼のお人に、心の底迄打明けて、語らふ間さへ僅の内名殘り惜しくも其儘別れ、今日此頃も忘られず、假令いやしい人にもせよ、戀に上下の隔てはなしと、今に忘れ兼ねるわいの。

つな　そりやお姬樣お心得違ひでござります る、此頃御川人の矢一郎樣から伺ひますれば、當御前樣御病氣ゆゑ、御隱居をば遊ばして、あなた樣へ御家督をお讓りなされ、御養子はお組頭の矢部樣の御次男樣ときまりしとやら、さすれば奧樣とおなり遊ばす御身分でありながら、賤しい家業の町人風情に、お心をお殘し遊ばし、思ひ切れぬなんぞとは、そりやお心得違ひでござりまする。どうぞお心取違へ、御養子樣と御祝言を遊ばして下さりませ。

小澤　そちは何を云ふぞいの、それ程異見をするくらゐなら、なぜあの時に取持ちしぞ、自分は好いた其人と夫婦になつてをりながら今となつて其樣に、まことらしう私に云ふは、そりや聞えぬそなたの心、今更恨みに思ふぞよ。

つな　そりやあの時はまだお一人、今はお聟樣も極つてをれば、御異見せねばなりませぬ。

小澤　イエ〳〵、何と云やつても、わしやどうあつても思ひ切られぬ、それぢやによつて認めておいた此文。(ト懐より文を出し、)どうぞあの人へ屆けてくりやれ。コレ、頼みますわいの。

ト文をおつなの懐へ入れようとする、おつなそれをつき返して、

つな　イエ〳〵、此のお文は受取れませぬわいな。

小澤　それでは、どうしても受取れぬか。

つな　それぢやと申して、こればかりは。

小澤　受取れぬと申すのか。

つな　サア、それは。

小澤　サアとは、ならぬと申すか。

つな　サア、

小澤　サア、

兩人　サア〳〵〳〵。

つな　あゝこりや、ひよんなことになつたわいなア。

ト當惑のこなし、此時下手より矢一郎、續いて刀屋利兵衛、刀の箱を持ち來る、おつな手早く文を懐

へかくす。

矢一　おゝこれは小澤様、これにおいでなされましたか。

小澤　そちは矢一郎、何ぞ用事でもありまするか。

矢一　これへ召しつれ参りましたは、刀屋の儀をお取次が、願ひたうござりまする。

ト利兵衛おづ〳〵出て、

利兵　これは〳〵お孃様にござりましたか、久々伺ひませぬが、いつも〳〵御機嫌よろしく、恐悦にござりまする。就きましては、殿様お誂への刀が見當りましたゆゑ、持參仕りましたと、どうか宜しく仰せ上げられて下さりませ。

小澤　おゝ、さうであつたか、それではこれからお兄様へ、申上げようわいの。つなそちも一緒におぢや。

つな　ハイ畏りました。

利兵　どうかよろしう、お願ひ申しまする。（ト合方にて小澤おつな兩人奥へはひる。後矢一郎思入あつて、）

矢一　今日は當殿樣の御誕生日にてお屋敷にも御客來があり、至極お取込みではあるなれど、御好みの品を持參の事ゆゑ、大方お逢ひになるであらう。

利兵　左樣にござりまするか、それは早お目出度うござりまする。然し御當家には不動樣は、餘程御信仰にござりまするな。
矢一　いやもう、大の信仰であらせられまして。
利兵　左樣にござりまするか。
　ト此時台方にて、奥より坪内慶十郎、袴羽織一本差しにて出來り、上座へ直り、
慶十　おゝ利兵衞、よく參つたな。
利兵　これは〳〵御前樣には、いつも御機嫌ようゐらせられまして、お目出度うござりまする。
慶十　おゝ、そちも達者でよいの。
矢一　御前、お誂への刀を、持參いたしましたとの儀にござりまする。
慶十　ムヽ、左樣か、そこに所持致して居るのぢやの。
利兵　ヘイ、かね〴〵お話し申上げました、不動國行の刀が手に入りましたゆゑ、お目にかけに參りました。
慶十　それは重疊ぢや、ドレ、早速に拜見いたさうか。
利兵　只今、御目にかけまするでござりまする。

ト白木の箱より、白鞘の刀を出し、矢一郎取次ぎ慶十郎へ手渡しなす、慶十郎刀を抜き、ほうしより
はゞき元迄見ることあつて、

慶十　これは、慥に國行ぢや。(ト矢一郎へも見せ、)何と見事ではないか。

矢一　成程銘刀にござりまするな。

慶十　シテ、是は何れより出た品ぢやの。

利兵　ヘイ、是はさる御方にて、元は代々郷士ゆゑ、刀劍類は元より諸道具は澤山御所持なされましたが、ふとした事より浪人なし、今は不自由な暮しにて、諸道具其外賣代なせども此刀ばかりは先祖より傳はる品ゆゑ拂はぬと、大切にして居りましたが、餘儀なき事から此度賣拂ふと申しまして持參いたしましたゆゑ、私が買求め手に入れましてござります。

慶十　ムウ水のしたゝるばかりなる、燒刃金色揃ひし銘刀、これを手放すとは、よく〳〵のことであらう。

矢一　さういふ人からでも出ませねば、なか〳〵お手には入らぬ銘刀、こりやお求めなされまするが、よろしいやうにござりまする。

慶十　ムヽ、シテ價は何程と申すのぢや。

利兵　ヘイ、百五十兩にござりまする。
慶十　ムウ、百五十兩よろしい、それにて求め遣はさう。（ト矢一郎に向ひ、）コリヤ矢一郎、奥へ參り、余が手箱の内より百五十兩持つて參れ。
矢一　畏つてござりまする。（ト矢一郎奥へはひる。後慶十郎こなしあつて、）
慶十　只今金子を持參いたせば、其内これにて受取りを書きやれ。
利兵　ヘイ、畏りましてござりまする。
ト利兵衞持紙を出して、腰より矢立を出し、百五十兩の受取を書き、紙入より印形を出して押す事あつて、
是にてよろしうござりまするか。
ト差出す、慶十郎見ることあつて、
慶十　是にてよろしい、只今金子と引替に致さう。
ト爰へ矢一郎奥より、金子を百五十兩袱紗に包み持ち來り、殿の前へ置き、
矢一　持參いたしましてござりまする。
慶十　左樣か。（ト袱紗の中より金子を出し、）さらば書付と引替へにいたさう。

利兵　承知いたしてござりまする。（ト刀と金とかへる事あつて、）是は有難うござりまする。

ト胴巻を出し金を入れて懐へ入れる。

慶十　我日頃信仰なす不動尊の利益にて、名さへ不動國行の名劍、速に手に入りしは、斯樣な悦ばしい儀はないて。

利兵　左樣にお悦び下さりまして、利兵衞も祝着に存じまする。

矢一　此頃は物騒ゆゑ、金子を所持なす上からは、少しも早く歸るがよい。

利兵　有難うござりまする。

矢一　先刻も拙者殿の御用にて淺草へ參り、三味線堀を通行なす時、女が氣絶いたして居れば、介抱なして樣子を聞けば、賊に金子を奪はれしと申す事、イヤハヤ油斷のならぬ儀ぢや。

慶十　シテ、其の婦人は若き女か、老人なるか。

矢一　ヘイ、年の頃は三十前後で、武士の果らしきこしらへにござりました。

ト此内利兵衞聞耳を立て、

利兵　只今お話しの女子は、もしや粗服ではござりませぬか。

矢一　ヂヽサ、貧窮の體でありしぞ。

利兵　エヽ、すりや三十前後であの粗服、武士の果らしうござりましたか。
矢一　いかにも。
慶十　さうして、心當りでもありやるのか。
利兵　イエなに、最早お暇いたしまする。（トそこ〳〵に挨拶して行きかけるゆゑ、）
矢一　コリヤ利兵衞、御門前迄見て遣はさう。
利兵　有難う存じまする。（ト殿に向ひ、）左樣なれば、御前樣。
慶十　ヲヽ氣を付けて參れ。（ト利兵衞先に、矢一郎付いて下手へはひる。）
慶十　我父主膳に一子無きゆゑ、大山不動へ祈願をかけ、終に母に身籠りなして、然も其の明王の緣日に相當る、二十八日に誕生せしゆゑ、不動明王の化身とて、深く信心いたす我へ、不動國行の銘刀が、授かるといふも利益ならん。
　　ト又刀を拔き、頻りと見てゐる、爰へ以前の小澤奧より出で、
小澤　モシ、お兄い樣〳〵。（トいへど氣の付かぬ體にて、）
慶十　此の一刀の切味を。（ト拔身を取直すゆゑ、小澤びつくりして、）
小澤　エヽ。（ト氣味の惡きこなし、慶十郎心付き、）

慶十　おゝ妹小澤か。

小澤　びつくりいたしました。

慶十　ムヽよい業物が。（ト鞘へ納めるを、木の頭、）手に入りしぞ。
ト悦ぶ、此の模樣合方、風の音にて、

ひやうし　幕

二幕目　阿部川町浪宅の場

〔役名‖萩原良作、不動文次、家主太次右衛門、坂倉屋手代林之助、合長屋金平、同十右衛門、金貸郷兵衞。良作妻お柳等。〕

（阿部川町浪宅の場）‖本舞臺一面の平舞臺、向う上手一間反故張り障子屋體。折廻し上手三尺の佛檀、下錦畫を張りし二枚引の戸棚、續いて三尺暖簾口、出這入、下手鼠壁、折廻し臺所の模樣、竹を打ちし半窓、いつもの所世話門口、此の外藪疊み、古き薄緣を敷詰め總て阿部川町寺門前、裏借家の道具爰に萩原良作、病氣の體にて蒲團の上に住ひ、枕頭に煙草盆、藥包み、盆へ茶碗土瓶などのせ

てあり、下手に合長屋金平、十右衞門控へ、さんげ〳〵の合方にて、宜しく幕明く。

金平　ときに良作殿、此頃は病氣はどうでござりまするな、少しはよろしうござりますか。
十右　イヤもう、一つお長屋に居ながら、御存じの通りの其日稼ぎ、朝から晩迄内に居ぬゆゑ、
金平　一向に尋ねませぬが。
十右　困つたものでござりまするな。
良作　イヤもう、御親切に毎度お尋ね下され、有難うござりまする、私も長の病氣に弱りきりまして、もうほと〳〵いたしまする。
金平　イヤもう、身體が達者で稼いで居てさへ、今日に困りまするに、さうして煩つて居なすつては、
十右　大抵のことぢやござりますまい、さうして御新造は、どこへお出でなされました。
良作　あれは餘儀ない事に付まして、先程御成道迄使ひにやりましたが、大分歸りが遲いので、案じまするが、どうか早う歸つてくれますれば、よろしうござりますが。
金平　さうしてもう、疾に歸んなさる時分かの。
十右　一人ではさぞ淋しい事でありませう。
良作　ヘイ、それ故只今林之助を、道迄見せに遣はしましたが、これとてもまだ歸つて參りませぬ。

金平　それは氣のもめた事ぢやが、何か道に間違ひでもありはせぬか。
十右　わしらも尋ねに行きませうか、遠慮なしに言はつしやれ。
良作　イエ、どうか御無用になすつて下さいまし、今に林之助も歸りませう程に、まア御ゆるりとお話し下さりませ。
ト是な合方になり、花道より林之助、手代のこしらへ、着流し前だれ掛けにて出で來り、花道にて、
林之　さぞ兄上のお待兼ねならんが、どういふ事か姉上に、逢はぬといふも一つの不思議、道でも違ひし事なるか。早う歸つて尋ねて見ん、さうぢや〳〵。（トやはり合方にて門口へ來り、內へはひり。）ハイ、只今戾りましてござりまする。（ト下手へ住ひ兩人を見て。）こりやお長屋の衆、ようお出でなされました。
ト挨拶をする、良作せき込みし思入にて、
良作　ヲヽ、林之助戾つたか、最前から待兼ねて居た、さうしてお柳は如何いたした。
林之　それでは姉上には、まだお歸りはござりませぬのぢやな。
金平　サア、それゆゑさつきから病人が、心配をさつしやつて、
十右　わしらも今見に行かうと、いうて居た所ぢやわいの。

林之　左樣でござりましたか、それはまア有難うござりまする。それに付けても姉上は、如何なされし事なるか、私も取急ぎ、御成道の刀屋へ參り、直と尋ねましたる所、姉樣には夕方に、金を受取り戻りましたと、聞いてどういふ事ぢややら、道でも違つて行違ひ、先へ內へお戻りかと、又引返して參りましたが、希代なことでござりまするな。
良作　ムヽスリヤ刀屋利兵衞には、刀を受取り代金は、慥に渡したと申せしか。
林之　ハイタ方に受取つて、急いでお歸りなされましたと、慥に申しましてござりまする。
良作　ムウ、それではもしや途中にて、間違ひでもありはせぬか、こりや氣がもめてならぬわえ。
金平　成程先方では金を受取り、歸つたと云ふし。
十右　林之助殿が歸つても、まだ歸らぬ所を見れば、
金平　コリヤ打捨てはおけませぬ。
十右　わしらがこれから二人して、
金平　手分けをして、
十右　搜しませうわい。
良作　お氣の毒ではござりまするが、御長屋の誼、御苦勞ながら、

林之　どうかさうなされて下さりませ。
金平　承知ぢや〳〵。
十右　ドレ、出かけませうか。
　　ト四ッ竹の合方にて、兩人下手へはひる。爰へ花道より坂倉の對談人郷兵衛出來り、花道にて、
郷兵　あの坂倉から頼まれて、林之助の事に付き、わざ〳〵萩原の内迄來たが、あの良作になか〳〵以
　て、百兩の調達はむづかしからうが、受合つたことだから、まア一と談判やつて見よう。（ト右合
　方にて、門口へ來り。）ハイ、御免なさいまし。（ト門口を明ける、是にて林之助立つて行き、）
林之　これは郷兵衛樣、お出でなさいまし、まア此方へお通り下さりませ。
郷兵　ハイ、眞平ゆるして下されや。（ト内へ通り、下手へ住ふ、林之助茶を出す、良作見て、）
良作　これは〳〵郷兵衛樣、わざ〳〵お出で下さりまして、御苦勞樣にござりまする。
郷兵　チ、良作殿、御病氣は如何でござりまするな。
良作　どうも勝れませぬので、まことに困りきりまする。
郷兵　扨外の事でもありませぬが、爰にお出での林之助殿の一條、引負金内濟の金子は、約束通り御調
　達が出來ましてござりまするか。（ト良作思入あつて、）

良作　サア、御約束の事ゆゑに、どうにか致して調へませうと、先程妻を御成街道迄遣はしましたが、モウ疾に歸りまする所を、今以て歸りませず是なる林之助を只今見せに遣はしましたが、先方は疾に出ましたとの事ゆゑ、氣掛りでなりませねば、今も今とて御長屋の衆迄頼み、捜しに行つて貰ひました。

鄕兵　それは甚だ迷惑な儀だが、わしもなか〳〵いそがしい人間ゆゑ、さうべん〳〵と待つわけにもゆかず、どうにかしては下さるまいか。

良作　左樣なれば甚だ勝手ではござりまするが、御用を達した其後にて、お出で下さりませぬか、さすれば何とか其譯が、分りまするでござりませう。

鄕兵　イヤさういふ事をいつてはならぬ、それはよくある斷り口ぢやが、モウ少し〳〵と一寸脱れを言ふのでござらう。

良作　イエ決して僞りは申しませぬ、現在この林之助が只今も、迎ひに參つたのでござりまする。

林之　誠に申兼ねましたが、今少々の所御猶豫を、お願ひ申上げまする。

鄕兵　イヤ日延は是迄度々の事、モウ一時も待たれませぬ。コレ、よく物を積つて見なされや、此の金は元が百五十兩、それも林之助殿が引負の金、表向にしたら首に繩がかゝりますぞや、それを百

兩にて扱つてやるは此の鄕兵衞が寸志、あんまりそれぢや勝手過ぎるといふものぢや、よく性根をすゑて挨拶をしなせえ。（ト煙草を呑み居る、良作林之助も困りしこなしにて、）

良作　そりやモウ御尤もにござりまするが、今夜こそ間違ひなく出來まする金。

林之　度々御苦勞をかけましたが、今少しの間御迷惑でも、

良作　お待ちなされて、

兩人　下さりませ。

鄕兵　それはどうも困りましたな、然しさう堅く云ひなさるのを、待てぬとも云ひ憎ければ、それでは後迄待つて上げるが、其時間違へばそれぎりだよ。

良作　イエ、どういたしまして、後程迄には妻がきつと歸りますれば、速かに御返濟申しまする。

林之　それ迄の所をば、よろしうお願ひ申しまする。

鄕兵　どうも仕方がござらぬの。（ト鄕兵衞不承々々に立上り、門口へ出て、）それではどうか、間違ひなく、

良作　承知いたしてござりまする。

ト合方にて、鄕兵衞花道へはひる。後兩人困りし思入にて、

一寸延びれば尋とやら、暫時が間はのがれたが、こりやもう何かお柳の身に、凶事でもありしに

相違ない、ア、早う安否が聞きたいものぢや。

林之　慥に金子を受取つて、夕方に刀屋をば、出たといふのが心掛り、左すれば私よりいくらか先へ、お戻りなさらにやならぬ筈。

良作　誠に困つた事ぢやなう。

ト良作ふさぐ思入、林之助背中をさすり、介抱をなす。此時誂への合方にて、花道より、家主太次右衛門羽織着流し雪駄にて、小田原提灯をつけ、いぜんのお柳を連れ出來り、花道にて、

太次　コレお柳殿や、假令内で良作殿が、小言をいくら云はうとも、たゞおとなしく默つて居なさい、さうさへすればわしが幾重にも、執成してやりますから。

お柳　御家主様の御親切なお詞、誠に有難うはござりまするが、いかにも此身を捨てませねば、申譯がござりませぬ。

太次　其様な事を云うてはならぬ。まア、わしに任せておかつしやれ。

ト右合方にて、門口へ來り、お柳を脇へ待たせて置き、

ハイ、御免下さい。

林之　どなたにござりまする。（ト門口を明けることあつて、）ヲ、御家主様にござりまするか。

太次　ハイ、わしだが、外の事でもない、こちのお柳殿を連れて戻りました。（ト林之助お柳を見て心付き、）

林之　オヽ、姉様、お歸りなされましたか。

お柳　ハイ。（トもぢ〳〵して居る、良作氣をいらち、）

良作　コレ、そちは何を致してをつた、まアはひるがよい。（ト是にて太次右衛門先に、お柳內へはひり住ふ。）さうして、何より先へ問ひたいは、申付けてやりし事、首尾よう調うて歸りましたか。

ト是を聞き、お柳じゆつなきこなし、太次右衛門氣をもみ、

太次　サ、それに付いて良作殿に、勘辨をして貰はねば、ならぬ事が出來ましたわいの。

良作　なに、お家主様が、

林之　勘辨しろとは。（ト合方になり、）

太次　サア、其の譯は、まア聞いて下され。わしは今日用事があつて、京橋邊迄行きし所、よんどころなく遲うなり、通り掛りしあたらし橋、ふと見ると女の人影、ハテナ、大方これは身投だらうと、小影へ寄つて樣子を見れば、何やら口の內に濟まぬと云うて、旣に橋の上から飛込まうとするゆゑに、後ろから抱きとめて、樣子を見ればお柳殿、それから段々聞いて見れば、大事な物を三味線堀で、盜賊に取られたゆゑ、爰から飛込み死ぬ覺悟と、何と云うても聞かぬゆゑ、やう〳〵な

だめ連れて來ました、どうか人の命をば、折角拾うた太次右衞門へ、任せてやつてはくれまいか。

　　ト此内良作悔しき思入にて、お柳に向ひ。

良作　コリヤ女房、そちも知つて居やる通り、なくて叶はぬ事ゆゑに、大切なる品をば賣り、やう〳〵調へた金子をば、取られたで濟まうと思ふか。

お柳　御尤もではござりまするが、私とてもそれゆゑに、大事にかけて急ぐ途中、どうした事か賊につけられ、金子は取られて氣を失ひ、倒れて居りしを御侍に、助けられて正氣になり、どう考へて見ましても、死んで云譯いたすより、外に思案はござりませねば、あたらし橋より身を投げて、死なうとせしを御家主に、助けられて詮方なく、戻りましてござります。

良作　サア是が子供でもあることか、今宵につゞまるあの金を、取られるといふ事が、命を捨てゝもあるものか、一體おのれどうせうと思うて居るのぢや。

太次　サアそれゆゑに命を捨て言譯をしようとしたが、命を捨ては仕方がない、又ながらへて居た事なら、どう才覺のつくまいものでもない、それゆゑわしが連れて來たのぢや。まア勘辨さつしやるがいゝ。

良作　イヤ〳〵是ばつかりは勘辨ならぬ、おのれの體のきかぬやう、病人ながら致してくれるぞ。うぬ

覺えて居れ。

ト良作體のきかぬこなしにて、煙管を持ち立ちかゝる。林之助止めて、

林之　モシ兄樣、そりや御尤もにはござりまするが、死んで言譯すると迄に、御決心なされし姉上、あなたが折檻なされればとて、金の出る氣遣ひもなし、まア〳〵氣を靜めてお怒りを、お留めなされて下さりませ。今によい思案もござりませう。

ト太次右衞門此内お柳を外へつき出し、

太次　ハテまア良作殿、さう怒つては病ひの毒ぢや、まア〳〵氣を靜めて居さつしやれ。

林之　姉上や兄上へ、此の御難儀をかけまするも、元はと云へば私から、どうぞ此の林之助を、御折檻なされて下さりませ。

良作　イヤ〳〵、聞かぬ、退いて居れ。（ト此内お柳覺悟のこなしにて）

お柳　命を助けて下されし、御家主樣には濟まざれど、こりやモウいつそ。

ト褄を甲斐々々しく取り、早き合方にて花道へ走りはひる。林之助は此の聲を聞き、門口の外を見て、

林之　や、表においでの姉上樣は、

太次　又死にでも行つたのか。

良作　なに、女房は見えぬ。

太次　遠くは行くまい、おれが後から。（ト太次右衛門尻をはしをり、）ソレ。

ト逸散に花道へはひる。後林之助濟まぬといふ思入にて、良作のそばへ行き脇差をとり、

林之　さうぢや。（ト自害しようとするを、良作とめて、）

良作　コリヤ弟、何をいたす。

林之　サア、私の事よりして、姉上に迄變死させては、どうも義理が濟みませねば、いつそ此身を捨てまして。

良作　ヤア不所存者の弟　おのれ迄か死んだ日には、此の良作は後へ殘り、如何致すと思ひ居るぞ、まだ〳〵此の上此の兄に、難儀をかけるか不屆きやつめが。（ト脇差をもぎとる。）

林之　さりとて姉に死なれましては、なにおめ〳〵と居られませう。又私が死ぬ時は、御病人のあなた御一人、誰が御介抱をいたしませう。コリヤ死ぬにも死なれませぬか。

ト林之助餘儀なきこなし、又早い合方になり、以前の太次右衛門息を切つて駈け出來り、

太次　コレ〳〵良作殿、大變だ〳〵。

良作　チヽ家主樣、大變とおつしやるは。

林之　やつぱり姉には、死にましたか。

太次　イヤ助かつたく。

良作　なに、それでは。

林之　助かりましたのか。（トこれにて太次右衛門胸をたゝき、）

太次　あわをくふまいく。まア聞かつしやれ、かういふ譯だ。（ト合方になり、）サアお柳殿の後を追ひかけ、むやみと走つて行つたところ、此の先の大井戸へ今身を投げた女がある。イヤ助けた人があると評判とりぐ、それゆゑに急いで駈付け見ましたら、よいあんばいに助かつて、大勢人が居るゆゑに、人を分けて樣子を聞けば、助けた人はこつちの內の、身寄の人だといふ噂、今後からお柳殿を連れて來るから、わしは先へ御注進に來たのぢやわえ。

良作　ムツ、それでは此方の身寄の者が、助けましてござりまするか。

林之　身寄りというても外にない筈、誰人にござりませうや。

良作　今爰へ參ると申せば、樣子を篤と糺して見ん。

トやはり合方にて、花道より不動文次、駕籠屋の親方のこしらへ、廣袖の着附、三尺帶、草履にて先に立ち、お柳を連れ出來り、花道にて、

文次　定めしお内でも、御案じなされておいでゞござりませうが、まア別條がなくて、お仕合せにござります。

お柳　イエ/\、お前の御恩は無にはいたしませぬが、どうも生きてはをられませぬ。

文次　又其樣な事を云ひなさるか、まアおいでなさいまし。(ト門口へ來る、太次右衞門伸上り待つて居て、)

太次　おゝ、御苦勞樣にござりました。まア、よく連れて來て下すつた。サアお柳殿はひらつしやれ。

ト　お柳面目なきこなしにて、

お柳　イエ/\私は、はひれませぬわいな。

太次　假令はひらぬと云ひなすつても、現在姉を見殺しにすることが出來るものか。

ト是にて良作見て、

良作　ヲヽ誰かと思へば文次殿。

林之　よく助けて下さりました。

文次　すんでの事にあぶない所へ、わつちが駈付けやう/\に、お助け申しましてござりまする。

良作　何は兎もあれ、まア/\こちらへ。

文次　眞平、御免下せえまし。(ト内へはひろ、お柳もしな/\ついてはひる事、)

太次　今聞いてゐれば、こなたはこちのお柳殿を、姉と云うたが全くの兄弟か。
文次　ヘイ兄弟仲ではござりまするが、私の生業は下司家業の駕籠渡世、神田須田町に居りまして文次と申す、まつたく生業違ひの弟でござりまする。
太次　やれ〳〵、それでは噂に聞いた、勇みの親方、不動文次殿でござつたか。
文次　ヘイ、其の不動文次と申す、しがない者にござりまするが、實は此方の良作殿は、以前は立派な郷士にて、私風情のいやしい者とは、附合ひも出來ませぬ程の大家でござりましたを、ふとした事より姉が親御の許しで緣付き、度々重なる不幸にて此の有樣、又私は毎度お世話になりましたが、（ト太次右衞門へ挨拶して、良作の方へ向ひ、）就いては姉が死ぬといふ其の入譯は、どういふ事か、それを聞かして下さりませ。
良作　其譯は仔細あつて、なくてかなはぬ品を賣り、折角調へた其の金をば、賊に取られしそれゆゑに此良作に云譯ないと、それで左樣な死ぬ氣をば、出したのでござりまする。
林之　それも元は私ゆゑ、まア其の入譯をば一通り、お聞きなされて下さりませ。（ト合方になり。）私は五年以前藏前の札差、坂倉屋へ奉公に參り、だん〳〵と勤める內、主人の氣に入り出世をばいたしまして、得意先にも御贔屓にあづかりまして、今日は番町のお屋敷、あすは本所の御屋敷

と、使ひに參り其先にて、殿樣の御用を聞き、金の調達いたしまする其の挨拶に馳走になり、いつしか若氣の誤りに、遊里へ通ひ多くの金を、費せし其の引負が百五十兩、つひに不首尾で宿へ返され、どういたさうと思う內、お慈悲深い御主人にて、百五十兩の內百兩を調へたら、表向にせずにやると、おつしやりまするそれゆゑに、其の金策に姉が出て、終に賊に取られましたゆゑ、兄は怒つて姉をせめる、又姉さんは兄へ濟まずと、命を捨てる氣になりましたを、お前樣に助けられ、私も安堵いたしましてござりまする。

文次　ヘエ、それぢやお前が主人方へ、引負をしたそれゆゑに、姉が金子を調へんと。

良作　イエ〳〵それは僞りにて、まことは林之助が申しました引負といふ金子は、此の兄夫婦を救ひたいと弟が送りし寸志の金。

林之　アコレ、決してそんな事はござりませぬ、やつぱり私の放蕩ゆゑ、遣ひ込みましたのでござりまする。

良作　ハテ、それではそなたの志しが。

林之　イエ〳〵やつぱり私が、遣ひ込みましたのでござりまする。

お柳　それは夫の申します通り、全く私等夫婦の者が、今日に差支へて困るを知つて、助けてくれし夫

ゆゑに、大切の品を。

林之　姉さん迄其様に、おつしやつては私が、此身に罰があたりませう、やつぱり金は私の遣ひ込みにございまする。

文次　まアどつちにしても主人の金を、遣ひ込んでは濟まぬわけ、さうして百兩の其の金は、どうして調達なされました。

良作　其の譯は斯ういふ譯ぢや。(ト合方になり、)私事も以前と代り、御存じの通りの姿にて、だんだんとの、不仕合せ、かてゝ加へて長の病氣、其日暮しにも困りしを、見兼ねて弟が貢ぐ金、けふは三兩あすは五兩と、送つてくれし嬉しさは、弟が永の辛抱ゆゑ、商ひの利益より儲けて貢ぐと思ひしに、皆御主人の金子をば、私夫婦の其爲に、引負ひなして送りし金、それゆゑ終にお暇出で、内へ戻りし其事を、知つては一日も打捨て置れず、第一天道樣へ濟みませねば、賣殘せし大切の、不動國行の銘刀を、刀屋利兵衛へ賣代なし、折角調へた百兩をば、これなるお柳が賊にとられ、面目ないと入水の覺悟、たゞ何事もいすかとなり、猶も病の種となる、此の良作の胸の内、どうぞ察して下されい。

ト涙ながらに云ふ、文次も氣の毒に思ひ、

文次　成程それで分りし今日の一埒、良作殿にも不仕合せで、斯く迄零落なされしを、林之助殿が身に引受け、主人の金とは云ひ乍ら、兄へ義理を立てなさるを、其の又兄のこなさんは、家重代の刀を賣り、御主人へ其の金を償ふといふ志し、それをば姉が賊にとられ、云譯なさに死ぬと云ふも、聞いて見れば一々尤も、然しいくら歎いても、返らぬ事ゆゑあきらめて、まァ落着いて居さつしやれ、膝とも談合といふ事がござりまする。

太次　イヤ聞けば聞く程あはれな話し、皆義理ゆゑに此の仕末、然し是れなる文次殿は、音に聞えし俠氣ゆゑ、マアとつくりと相談して、よい思案を出さつしやい、必ず短氣を出さつしやるな。

良作　まことに御家主樣にも御心配かけ、何とも申譯がござりませぬ。

太次　イヤ〱、わしの心配ぐらゐは何でもない事、店子と云へば子も同然、決して心配さつしやるな。
（ト文次に向ひ、）然し文次どの、どうかよい思案はござるまいかの。（ト文次考へて居て、）

文次　イヤ其の百兩は私が、調達いたしませう。

良作　なに、百兩を。

お柳
林之　お前さまが。

文次　今直と云ひたいが、高が駕籠屋の此の文次、三日の内とは思ひますが、五日の内には調へませう。

良作　スリヤ大枚の百兩を拵へて、兄弟三人を救つて下さるとか。
お柳　誠に濟まぬ事ながら。
林之　さうさへして下されば、
太次　それで事なく、
皆々　納まりまする。
文次　ヘエ、それも皆の御恩返し。
良作　なに、昔の恩とは。
文次　まア聞いて下さりませ。元あなた樣は相州足柄郡萩原村の豪家にて、五百石も田地を持ち、肩を並ぶる者もない、御身分でござつたが、重なる不幸に故鄕を出て、此の江戶の佗住居、わしが親の文左衞門は、御先代の旦那へ仕へ、大恩受けた御主筋、其の頃是なる姉者人が、御奉公に上つて居る內、若旦那のお氣に叶つて、本妻にお直しなすつた身の出世、今ではかゝる御身分でも、以前の御恩を忘れずに、此の文次が金調へ、御恩報じをいたしますれば、必ずきな〳〵思召しまするな、きつとこしらへて上げまする。
良作　イヤモウ、さしてもない事を、それ程迄に云うてくれる志し忝い、然し今にも又坂倉殿より、

林之　又受取りに參りなば、何と言譯いたしませう。

文次　イヤ私がお受合ひ申せし上からは、たとひ何と申さうとも、きつと言譯仕りまして、埒を明けるでござりませう。

お柳　私の粗相が元となり、既に命を捨てます所を、其樣に云うて下さるは、地獄で佛と申さうか。

林之　有難うござりまする。

ト合方になり、花道より、以前の鄕兵衞出來り、直ぐ門口へ來て、

鄕兵　ハイ、御免下さい。（ト明ける、林之助見て、）

林之　おゝ、是れは鄕兵衞樣、お出でなさいまし。（ト鄕兵衞內へはひり、よろしく住ひ、）

鄕兵　おゝ是は皆さんお揃ひで。（ト挨拶をして、）ときに先刻お約束の金子は、調達が出來ましたか。

お柳　サア其お金にて、兄弟打寄り、

林之　苦勞をいたしてをりまするが、

良作　今少しお待ち下さりませぬか。

鄕兵　何だ、又對談が違つたのか、モウさうべん〳〵と待つては居られぬ、金が出來ずば氣の毒だが、表向き町奉行へ訴へる分のこと、まア、さう思つて貰ひませう。（ト立ちかゝるを文次留めて、）

文次　アモシ〳〵、ちよつと待つて下さりませ。
鄕兵　ハヽアわしを留めまするは、いつたいお前は何だね。
文次　ヘエ、少し身寄りの者でござりまするが、其の金の事に付き、今私が引受けましたから、どうか少々お待ち下さりませ。
鄕兵　ムウ、百兩の金を受合つたのか、受合つたのなれば、直受で貰ひませう。
文次　サア直と云つても百兩の金、いま少しお待ち下さりませ。
鄕兵　其今少しは度々の事、モウどなたでも待たれませぬ。
文次　さうおつしやられては、いたし方もござりませぬが、そこをあなたへ達てのお賴み、わッちもこんなけちな野郞だが、少しは人にも知られた不動文次でございます、あなたに御損はかけませねば、モウ三日お待ち下さりませ。
鄕兵　ヘエ、それではお前さんが、須田町の不動文次殿か。
文次　ヘエ大山の不動樣へ信心ゆゑに、不動文次と異名を取つた、けちな野郞でござります。
鄕兵　それぢやあお前が評判のきほひ、不動文次殿か。
文次　こなたが受合つた上からは、間違ひはないゆゑに、親船にのつた氣で安心をしておいでなさい。

郷兵　それぢやこなたが聞及ぶ、いよ〳〵不動文次どのか。
文次　正眞正銘まがひなしだ、どうか五日待つて下せえ。（ト是にて郷兵衞相手が惡いといふ思入にて）
郷兵　成程外ならぬ文次殿の頼み、それではもう五日待ちませう。
太次　それでこそ金貸しの親玉、イヨ郷兵衞様えらいものぢや。
良作　流石は名うての郷兵衞様。
お柳　待たれぬ所を文次殿の。
林之　顏に免じて待ちなさるとは。
文次　わしも是にて安堵しました。
郷兵　どうも待たれぬ所だが、不動様を信心するゆゑ、無理な所を待ちまする。
文次　其の代り五日目には、相違なく調へまする。
郷兵　きつと親方頼みましたぞ。（ト合方にて門口へ出て）ヤレ〳〵世話を燒かせる事ぢや。
ト花道へはひる、後皆々よろしく思ひ入あつて、
良作　文次殿の情にて、因業なあの郷兵衞、五日の日延を受合ふ上は。
太次　氣の毒ながらどうにかして、よろしく工面を頼みまする。

文次　是から金の工面をするから、お二人ながら氣を樂に、どうか悪いお心をば、出さずにおいで下さいまし。

お柳　今宵につゞまる所をば。

良作　そなたが來合せ、先づ無事に、

太次　濟んだといふも文次殿の、

林之　お顔に負けしあの鄕兵衛。

良作　何分よろしう頼みまする。

文次　きつと引受け調へまする。（ト此時時の鐘鳴る。）アリヤもう淺草の四つの鐘、そんなら皆さん。

良作　大きに有難うござりまする。（ト此内履物をはき、文次表へ出て、）

文次　とは云へ、百兩。

皆々　エヽ。

文次　イヤ、百も承知だ。（ト胸を打つを、木の頭。）案じなさんな。

ト皆々見送る、此模樣よろしく、時の鐘合方にて、

ひやうし　幕

三幕目

須田町文次内の場
駿河臺坪内邸の場

〔役名――不動文次、坪内慶十郎、倉澤矢一郞、中間熊藏、寄席の倅與吉、のうまく三吉、ばさらだ千吉、酒屋の丁稚、料理屋の若い者、奧役人十兵衞、中間、萩原良作、背高淸太。後室慶壽院、妹小澤、文次母お鳥、良作女房お柳、文次妹お瀧、淸太女房お綱、腰元三人等。〕

（須田町文次内の場）――本舞臺三間の間常足の二重、下手九尺の落間、是へ四ツ手駕籠を二挺程置き、柱に相模屋といふ掛行燈下の見切丸に文の字を書きし障子一枚建てあり、舞臺正面上手一間上下の戸棚、奧の入口暖簾口、下手板羽目是へ帳面などを掛けあり、下手の圍爐裡に大藥罐をかけ戸棚の上神棚總て須田町文次内の體、爰に駕籠舁のうまく三吉、ばさらだ千太の兩人、掃除をして居る、下手に酒屋の丁稚かきそ帆木綿の前掛にて一升德利を持立ちかゝり居る、此の見得よろしく、飴屋の鳴物にて幕明く。

丁稚　おい若い衆さん、お前が今誂へた、酒を一升持つて來たよ。

三吉　何だ伊勢屋の小僧さんか、大變に遲いぢやねえか。

千太 肴拵へはとうに出來てしまつたのに、何でこんなにおくれたのだ。
丁稚 私や遲いか早いか知りやあしねえが、今内へ歸つたら文次親方の内の若へ衆の誂へだから、早く持つて行けと云付けられたのだ。
三吉 それぢや手前のせゐぢやねえが、内へ歸つたら、よく番頭にさう云へ。
千太 借はあつても決して倒しやしねえから、びく〳〵するなとさう云つてくれ。
丁稚 そんな憎まれ口はきくものぢやねえ、番頭さんがさう云つたが、先の分が大分たまつて居るから今日は現金に貰つて來いと云つたぜ。
三吉 なに、そんな事を云やあがつて、べらぼうめ、二升や三升の酒の借りで、出奔はしやしねえ。
千太 太きな身代をして居ながら、けちな事を云ふなと、歸つたらさう云つてくれ。
丁稚 そんな事を云つたらお前達は、あしたから酒が飲めめえ、それよりは、稼いだらぽつ〳〵入れて、相變らず借りて置く方が利口者だ。
三吉 此の畜生め、小さな形をして、異見がましい事を云ふな。
千太 早く其の德利をおいてけえりやあがれ。(ト德利を引たくる。丁稚びつくりして、)
丁稚 いゝよ何も引たくらなくつても、持つて來たものだから、置いて行くよ、どうせいゝ酒を持つて

來やしねえから。
兩人　何だと。
丁稚　なにさ、いゝ酒だから早く飲めといふのだ。
ト言ひ乍ら、丁稚は右の鳴物にて駈けて下手へはひる　後兩人思入あつて、
三吉　いめえましい奴だ、小僧迄馬鹿にしやあがる。
千太　モシ酒が惡かつたら、おれが行つて取替て來る。
三吉　さうして內の親方は用があると云つて、昨夜家を出たきりだが、どつか遊びにでも行つたのか知らん。
千太　ナアニそんな事ぢやねえ。何だか大金が急に入用だと云つて、餘程苦勞にして居たから、なかなか遊びになざァ行きやしめえ。
三吉　それでもそは〳〵して居たから、きつと吉原か根津へでも、行つたに違えねえと思ふ。
千太　手前は又そんな馬鹿な事を云ふのか、內の親方は知つてる通り、人の事と云ふと身に引受け、世話をするのがこれが病ひだ。
三吉　そりやあ人に賴まれた事は、後へ引かねえ氣性だが、何も夜る夜半迄泊りあるきをして、義理を

盡すこともあるめえ。

千太　そりや事によりやあ、夜る夜半でも駈けあるき、片を付けてやらにやあ、人に尊敬はされやあしねえ。

三吉　さうだ〳〵手前の云ふ通り、おれも此間廓のあまッちよが二兩の無心よ、それから雜物をあつめて方々駈けあるき、やつと拵へてやつたことがある。

千太　何を云やあがるのだ、女郎の無心や何かに駈けあるくのと、親方の達引とは譯が違ふわ。

三吉　違つたつて、矢張り頼まれたことは後へ引かねえのだ。

千太　馬鹿なことを云ふな。女郎の無心はいゝ人に、つぎ込む元手をこしらへてやるやうなものだ。

三吉　それでもあいつは、本物だよ。

千太　えゝ、此のたほしものめ。（ト背中を打つ。）

三吉　何をしやあがる、嘘だと思ふなら、晩に一緒に行つて見ろ。

千太　誰が一緒に行く奴があるものか、いゝかげんにしやあがれ。

三吉　まアそんな事はどうでもいゝや。仲直りに今の酒を奥でやると仕ようぢやねえか。

千太　其事々々、サア來ねえ。

ト兩人は德利を持ち奧へはひる。やはり右の合方にて、花道より料理屋の若い者出來り、見世へ來て、

若者　モシ〳〵、四ッを一挺、あたらし橋迄やつて下さい、モシ〳〵。

ト此聲にて、奧より文次妹お瀧、島の着附、前掛にて出來り、啞の思入にて口の利けぬこなしにて眞似をする、

違えねえ、爰の娘は啞であつたな、分かるか知らん。わつちや横町の常磐屋だよ、四ッを一挺あたらし橋迄やつて下さい。

ト是にてお瀧わかつたといふ思入、若い衆もこなしあつて、

どうか聞えたと見える。イヤ娘は、十人並に勝れた器量だが、病ひの爲に口が利けず、又お袋がそこひで目が見えず、文次は信心者で不動講の世話人だが、イヤ神の力もねえものと見える。(トお瀧へこなしあつて)それぢやあ直と賴みますぜ。

ト瀧は承知だとうなづく、若い衆は花道へはひる。奧より以前の兩人出來り、

三吉　モシお瀧さん、誰ぞ來ましたかえ。

千太　人聲がしましたねえ。

トお瀧うなづき、向うへ思入あつて、料理屋だと酒をのむ眞似をして、横町だと曲る眞似をして、四

つ手駕籠へ指をさし、持つて來てくれとかつぐ眞似をする。

三吉　ムウ、それぢや横町の料理屋、常磐屋さんの見世か。

千太　成程、駕籠を一挺直ぐよこせか、分つた。

トお瀧も早く行つてくれろと手眞似をする。兩人うなづき見世へ行き、釣つてあるわらぢをはき、息杖二本を揃へ駕籠をかついで尻を端折り、それぢや行つて來るといふこなしにて、お瀧に挨拶をする、お瀧もうなづく。

兩人　サア行かう。

ト駕籠をかき、花道へはひる。奥より文次の母お鳥、更けたるかづら、眼病みにて、探り〳〵出來り、お瀧をさぐり、爰に居るといふこなしにて、

お鳥　コレお瀧、爰に居やつたか、さつぱりとわしには分らぬ、そこに居ても口が利けず、又わしはそこひにて目が不自由、何の因果か二人居ても、とんと若い衆の留守の間には、ちつとも用が足りやしない、困つた事ではあるわいなア。

トこなし、お瀧は自分の口に指さしを、もが〳〵やつて口の利けぬをつぶやくこなし、此時誂への合方にて、花道より文次、廣袖着附三尺帶、ひくき駒下駄にて、思案のこなしにて出來り、花道にて、

文次　扨出來さうで出來ぬものは金の才覺、今日一日あちこちと、算段にあるいて見たが、これぢや受合つた阿部川町へ、どうも義理が立たねえわえ。（ト右の合方にて見世へ來り、）おゝお袋にお瀧、見世で何をして居るのだ。

ト二重へ上り、上手へ住ふ。兩人思入あつて、

お鳥　おゝ文次歸りやつたか、さうして昨夜はどこへ泊つて來たのぢや、きつう案じて居ましたわいの。

トお瀧もおなじ樣な事を仕打にして見せる。

文次　えゝ昨夜は早く歸らうと思つて、方々駈け歩いたが、此間話した金の工面に、たうとうしまひが四ツ谷へ行き、歸りが遲くなりましたゆゑ、一晩泊つて參りました。

お鳥　おゝさうであつたか、それはまア大儀な事であつたが、さうして金は調ひましたか。

文次　サア、それが駕籠屋の身分ゆゑ、十兩とまとめて貸してくれ手はなく、爰で三兩かしこで五兩と少しづゝ集めますので、たうとう半分もまとまりませぬ。さうして昨日阿部川町の、姉御は來ませなんだか。

お鳥　いゝえ、お柳はまだ來ない樣であつた、なうお瀧。

トお瀧の顏を見る、お瀧手眞似にて首をふり、人指ゆびを出して見せる、是にて文次さとり、

文次　アヽ、それぢや林之助が來たと云ふのか。
お鳥　おゝ林之助は見えた樣ぢやが、わしも目が不自由ゆゑ、ツイ忘れて居たわいの。
文次　左樣でござりましたか、やつぱりあの事であらうが、こつちもぬからず走り歩き、餘所へ泊つて歸る仕儀、何にしても困つたものぢや。
お鳥　わしもお前の歸らぬので苦勞をしたゆゑ、餘計に肩が張つて目が痛むわいの。
文次　さうでござりますか、そりやアお氣の毒でござりまする、それぢやアお瀧を連れて、奧で肩をもんでお貰ひなさいまし。
お鳥　ほんにさうしませうわい。サアお瀧、一緒に來や。
ト手を取ろ、是にてお瀧うなづき、唄になり、奧へ兩人はひる。
文次　目かいの見えぬお袋や、口の利けぬ妹に迄、苦勞をかける此身の切なさ、アヽどうにか金策をしたいものぢやなア。
ト是を合方になり、花道より萩原良作、浪人病みほうけし體にて、杖にすがり出來り、花道にて、
良作　阿部川町から爰迄は、左のみ遠くもない道だが、何と云つても病後の勞れ、大分足が勞れたわえ、それにしても文次殿が、内に居てくれゝばよいが。（ト合方にて本舞臺へ來り）ヲヽ是は文次殿には

よいあんばいに、内に居られたか。（ト文次も見て、）

文次　これは〳〵お體の惡いのに、よくまアお出かけなさいました、サア、先づこちらへお通り下さりませ。

良作　然らば許さつしやれ。（ト二重へ上り住ふ、文次きまりの惡きこなしにて、）

文次　就きましては、誠にあなた樣へ顏を合せまするも面目なうござりますが、五日限りの御約束ゆゑ、どうにか才覺いたしませうと、昨日も所々へ出かけまして、あちらこちらと賴みましたが、實は今以て調ひませぬ。

良作　それでは今以て調ひませぬか。（トふさぎし思入にて、）わしとてもそなたばかりに、苦勞をさせるも氣の毒ゆゑ、所々方々と金策なせど、何分にも今の所では、大枚の百兩ゆゑ、とても調ふやうはなし、昨日も例の紳兵衞がやつて參り、日限が切れても拂はぬゆゑ、弟の罪をば直に訴へ、表向にするとの事、それともせめて半金でも、直に拵へ入れる事なら、モウ少しは猶豫をすると、やかましく云ひますが、せめて半金も出來ますまいか。

文次　誠にあなたにお約束が違ひまして濟みませぬが、とても今は出來兼ねますが、夕方迄には必ずとも半金は調へませう。

良作 さうさへして下されば、林之助の引負の罪も、内濟にて濟みます事ゆゑ、お氣の毒ではござれども、どうか骨を折つて見て下され。

文次 それも昔受けました御恩返しと存じますゆゑ、心ばかりの忠義の赤心、まアモウ少しお待ち下さりませ。

良作 たとひ少しは延びようとも、外に手立もあらざれば、力と頼む文次殿、よろしく骨を折つて下されｏ

文次 今日こそは一生懸命、きつと才覺いたしますれば、お氣を丈夫においでなさりませ。

良作 さう云つて下されば、モウ少し鄕兵衛方を待つて貰ふといたしますれば、氣の毒作ら手廻次第。

文次 きつと持參いたしまする、まアそれ迄は御宅にて、暫くお待ち下さりませ。

良作 然らば何分、頼みまする。

文次 ヘイ、承知いたしてござりまする。

ト良作暇を告げ、杖を突き、合方にて花道へはひる。文次後を見送り、

アヽ氣の毒な良作殿、夕方迄と受合つたが、所詮出來ねえ百兩の金、モシ出來ぬと云つたら、不慮な事でもなからうかと、思つて受合ひ返したが、アヽこんな苦しい事はねえなア。

ト合方にて、文次奥へはひる。此時花道ばた〳〵になり、合方にて前幕の中間熊藏、背高清太へ突當り、清太の胸倉をとり出來り、花道にて、

熊藏　ヤイ此の野郎、町人風情の分際で、何で屋敷のお中間樣に、つき當りやあがつたのだ。

清太　つきあたつたもねえものだ、そつちからつき當つておきながら、太えことを云やあがる。

ト清太の顏を見て、

熊藏　うぬは相模屋の駕籠舁だな。

清太　おゝ、おのれもどこかで見たやうだ、まア此方へ來やあがれ。（ト舞臺へ來て、）おゝ思ひ出した、此間三味線堀のくらまぎれ。

熊藏　や。（トびつくり思入。）

清太　おゝ、其時出逢つたお中間に違えねえ。

熊藏　何だ、三味線堀で出逢つた、そりやあ人違えだ、おらア知らねえ。

清太　なに知らねえことがあるものか。（ト爭ふ、此時奥より文次出て、）

文次　えゝやかましい、靜にしろ。

熊藏　靜にしろとは誰れに云ふのだ、紺看板を着て居ても、これでも同じ武士の家來だ。サア屋敷へつ

れて行くからさう思へ。

清太　べらぼうめ、まだ手前達にしよびいて行かれる、耄碌はしねえ。

熊藏　なに、ゆかねえ、行かなけりやあ行かねえ様にして顔を立てろ。（ト文次見て居て、）

文次　なに、顔を立てろも大層だ、それ、是を持つて歸りやあがれ。

ト腹掛のかくしより、天保錢を四枚出し投げてやる、熊藏見て、

熊藏　馬鹿にしやあがるな、四百や五百のはした錢はいるものけえ。

ト手に持ちしかます煙草入にて舞臺を叩く、此拍子に小判出る、文次思入あつて、

文次　ムウ、成程四百や五百は入るめえ。然し折助にやあ不相應な此の小判、毎日作る草鞋に、よう似た形の山吹色、こいつア餘程怪しいわえ。（ト熊藏あわてゝしまひ、）

熊藏　なに、こりや本物ぢやねえ、辨天樣のむかで小判だ。

文次　なに、本物ぢやねえ、そんならモウ一遍出して見せろ。

清太　見せなけりやアあやしいぞ。

熊藏　あやしからうがあやしくなからうが、手前達の世話になるものか。（ト少し氣味の惡きこなしにて、）

ドレ〱歸らう〱、こんな所でかゝり合つてもむだ骨だ。

ト行きかける。此以前下手より、前幕のお柳出來り、様子を見て居て、

お柳　モシ、ちよつとお前さん、待つて下さい。(ト熊藏びつくりして、)

熊藏　なに、待てとは、おれにか。(ト顔を見合せ、)おゝこなたは。(ト驚く、文次も思入あつて、)

文次　おゝお前は姉御、さうして此の中間を呼んだのは。

清太　何か譯がありますのか。

お柳　サア、ちつと聞きたい其譯は、六日後に三味線堀で、私が所持した百兩を、取つた覺えがござらうがの。

熊藏　えゝ。(トおこつく、文次思入あつて、)

文次　ムウ、そんならお前の金を取つたは、

清太　此の折助でござりましたか。(ト熊藏わざときつとなり、)

熊藏　なに、金を取つた、途方もねえ事を云やあがる、何を證據にそんなことを。

お柳　證據といふは外でもない、くらがりながらとつくりと、そなたの顔を見ておいたわ。

清太　さう云ひなさりやあ三味線堀で、わつちも出逢つた此の中間。

ト云ふを熊藏聞き咎め、

熊藏　ヤイ〳〵〳〵、うぬらア寄つてたかつて三味線堀々々と、馬鹿な事を云ひなさんな、いつにも此頃ぢやあ三味線堀は、通つた事はありやしねえ。

ト此内淸太、序幕で拾ひし煙草入を出し、

淸太　サア、名も熊藏と云ひなさりやあ、此の中にある文を見ろ、先は女郎の名前だが、客の宛名は慥に熊藏。

熊藏　えゝ。(ト熊藏びつくりなし、おこつく。)

文次　さうして見れば持つて居た、煙草入から出た小判も、

お柳　やつぱりそなたが、取つたに相違ない。(ト熊藏顔色をかへて、)

熊藏　こいつらは皆して、よくもおれに言ひがゝりを云ふな。それとも達て怪しくば、爰からおれを直に突き出せ、宿小屋のねえ者ぢやねえ。おれが主人は駿河臺で、三千石を取りなさる、坪内慶十郎樣といふ、御旗本の御中間だぞ。サア、早くおれを突き出してくれろ。

文次　ムウ、それではこなたは坪内樣の、中間衆であんなさるのか。

熊藏　知れたことだ。(ト爰へ下手より序幕の與吉、着流し絆纏、駒下駄にて出で、中へ割つてはひり。)

與吉　ヲイ〳〵、熊藏さんぢやねえか。何をお前云つて居るのだ。往來中で見つともねえぢやねえか。

文次　チイ、寄席の息子の與吉さん、お前此の中間を知つて居るのか。

清太　いつたいこいつア太えやつだぜ。

熊藏　何が太えのだ、チイ若えの、太えか細へか、早く突き出や。

與吉　まアいゝや、そんな事を云はねえで、おれに今日は任せてくんねえ。

熊藏　そりやア任せもするけれど、おれを盜人だとぬかしやあがるから。（ト文次考へ居て、）

文次　與吉さん、よく仲裁をして下さつた、つい喧嘩に花が咲き、とんでもねえ事を云つたんだらうが
こりや此方の云ひ過ぎだ、うまくそこを計らつてくんねえ。

與吉　へエ、そりやようごぜえます、わつちがきつと受合ひます。

熊藏　與吉兄イ、捨てておきねえ、餘計な世話は燒いてくれるな、かうして人に惡名を付けられた上から
にやあ、突き出して貰はにやあ腹がいねえ。

トあぐらをかき、あばれる。

文次　これ程與吉兄イが云ふのに歸らなけりやあ、望み通りに突き出してやらうか。

ト云ふゆゑ、熊藏少し氣味惡く、

熊藏　イヤ、それにも及ばねえ。

與吉　サア、一杯やるから一緒に來ねえ。(ト無理に引張り、花道へ行き、舞臺を見返り、)

熊藏　よもやと思つたあの女が、おれの顔をば覺えて居て。

與吉　エヽ。(ト聞き咎める。)

熊藏　イヤ、芝居なら覺えて居ろと、一番力んで引込むとこだが、お前に任せて歸るとしよう。

與吉　何を云ふのだ。(ト端唄の合方にて、兩人花道へはひる。後三人見送り、)

お柳　みす〳〵金を取られた奴を、なぜゆるして返したのだ。

清太　兄貴の心が分らねえ、直突き出してやりやあいゝのに。(ト文次思入あつて合方になり、)

文次　そりやあ姉さんや清太の心ぢや、是程迄に手掛りのある奴をば、なぜ許して歸したと、思ふのは尤もだが、今爰で突き出せば、手が掛つた其上に、却て後の難儀となれば、金の工面も出來ねえ道理、それに清太の煙草入にて、名前迄分かつて居れば、氣を許させて今日は歸し、町方手先の衆へ頼み、後日に白狀させて見せまする。

清太　成程親方の云ふ通り、こりやあそれもいゝ考へだ。

お柳　それはそれにもしておいた所が、今日につゞまる金の才覺、それが胸に支へまして、苦勞で〳〵なりませぬ。

文次　サアそれはさつきも良作様へ、受合つて歸したれば、たとひ骨が舍利になつても、調達をいたしまする、必ずお案じなされまするな。

お柳　そなたに苦勞をかけまするも、元は私の不束ゆゑ、どうか此姉を助けると思ひ、晩方迄に安否を聞かして下されいの。

文次　ヘイ、七十借をいたしましても、きつと持つて參じまする。

お柳　それで安心しましたわいの。（トよろしく思入あつて、）さうして母樣の御目は、少しはよろしい方でありますか。

文次　イヤもう、かいもくお見えなされませぬ。

お柳　それは困つたものでござりまするわいの、しかし惡い耳をお聞かせ申しても、お目の障りゆゑ、わしは直に歸りまする。

文次　それなれば、清太に送らせてあげませう。（ト清太に向ひ、）コイ、清太、大儀ながら、道まで見てあげてくれ。

清太　ヘイ宜しうござります、それでは阿部川町迄、お供いたしませう。

お柳　イエ〳〵、それには及びませぬ、そればかりは止して下さい。

文次　ナニ、どうせ遊んで居るからようございます。遠慮なしにつれて行つて下さい。
清太　わつちが付いて參りますれば、決して間違ひはありませんから、親方安心して下さいまし。
文次　そいつア有難え、それぢやあ賴むぜ。（ト お柳清太履物をはき、）
お柳　それぢやあ文次殿。
文次　夕方きつと上りまする。
清太　サア、おいでなされませ。（ト合方にて、お柳清太兩人花道へはひる、後文次ホツト思入あつて、）
文次　あゝ女の事ゆゑ心ゆかしに、晩迄と受合つてやつたが、どう考へても晩迄に、金の工面の出來る氣遣ひはねえ。身の言譯に死なうと思へど、母はそこひ妹は疳の病で口が利けず、みす〳〵おれがない後は、さぞ困らうと死なれもせず、あゝ切ない義理になつて來たなア。
ト思案の思入、爰へ奧より妹お瀧、茶を持つて來る事、文次お瀧の顏をつく〴〵見て、
妹乍ら此のお瀧は、勝れた器量と云ふではねえが、是で口さへ利かれたら、女郎に賣つたらせめて百兩、調ふであらうに、あゝ役に立たぬ片輪ぢやなア。
ト是にて、お瀧悲しき思入あつて、機を織る手眞似をして見せる。
ムヽ、機を織る眞似をするのは、せめて機場へ奉公に、やつてくれろといふことか、たとひ遠い

上州へやつた所が給金は、十五兩か二十兩のはした、それさへ直の間に合はず、何の役にも立らやあしねえ。

是にてお瀧悲しき思入、此時合方になり、下手より前幕の淸太の女房おつな出來り、

つな　今日は、親方よくおいでなさいました。

文次　おゝ誰かと思つたら、おつな坊、さうして何か用か。

つな　ハイ、少しお目に掛りたくて、お待ち申してをりました。

文次　さうして留守へ來たのかえ。

つな　えゝ先刻伺ひましたら、お留守だとおつしやつたゆゑ、又出直して參りました。

文次　おゝさうかえ、まア掛けるがいゝ。

つな　御免下さいまし。（ト二重へかける。）

文次　さうして、用といふのは。

つな　ハイ。

トおつな他聞を憚るといふこなし、文次心附きお瀧に向ひ、奧のお袋の所へ行けと手眞似でをしへる。

お瀧承知して奧へはひる。

文次　あたりを憚る其の用はえ。

つな　其用と申しますのは、あの坪内樣のお姬樣から、お前へお文が來ましたわいなア。

　　ト前幕の文を出す、文次見て、

文次　なに、おれの所へお文が來た。

つな　サ、聞いて下さりませ。（ト合方になり、）私は此間からお姬樣の、御誕生のお祝ひの御手傳ひに上つた所、まア今日は歸るな、あすはよいとお姬樣に引留められ、うか〳〵遊んで居つた所、竊に私をそばへよび、去年お國へお供の時、どさくさ紛れに神奈川で、そつとお前に取持つたを、いつ迄もお忘れなされず、間がなすきがな私を口說き、文を屆けてくれろとお賴み、なれども身分も違ふことゆゑ、表立ては濟まないと、御異見を申して見たが、何と云つてもお聞きなされず、それゆゑ餘儀なく持つて來たが、まア何と書いてあるか、ちよつと讀んで御覽なさい。

　　ト文を渡す、文次はふり出し、

文次　それ所ぢやねえ、この二三日はなくてならねえ其金で、苦勞をして居る其中で、文どころの話ぢやアありやあしねえ。（ト不きげんの體、おつなこなしあつて、）

つな　まア、それはそれ、憂晴しに、ちよつと讀んで見たがようござんすわいな。（ト上へあがり、）私や

ちよつとお袋さんの、御門を尋ねてまゐりまするわいな。

ト合方にて、おつな奥へはひる。後文次腕組をして、

文次　舊主の恩に約束した、金の工面に差支へ、調達の出來ぬ上は、何もかもう是迄、たとひ死罪になるとても、盗みをするより外はねえ。（ト以前の文に心附き、）盗みをしても拵へたき、今日につづまる金の工面、幸ひ小澤様から來た此のお文を種にして、坪内様の屋敷へ行き、金の無心を云つて見よう、そでねえ事ではあるなれど、是も舊主へ盡す忠義、ちつとも早く、ムヽ、さうだ。

ト文を煙草入へ入れ、きつと思入、爰へ以前のお瀧出て留める。

ヤア、お瀧か、放せ／＼。

ト振り切り、思入あつて早い合方にて、花道へ走りはひる。此後お鳥さぐり／＼出來り、

お鳥　お瀧、文次はどこへ行きました。

トお瀧屋敷へ驅けて行つたと仕方する、お鳥じれしこなしにて、

あゝこれ、仕方でしても、（トお瀧の手を拂ふを、道具替りの知せ、）目が見えぬわいなう。

トお鳥親子めい／＼の因果を歎くこなしよろしく、此の道具廻る。

（駿河臺坪内邸の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面銀地山水の襖出這入り、上手一間の床の間、左右折廻しぬり骨障子屋體、大欄間をおろし、高麗縁の薄縁を敷詰め、總て坪内家奥座敷の體、爰に腰元お末、お崎の二人居並び、宜しく琴唄の合方にて、道具止る。

お末　モシお崎さん、此頃二町目の芝居でして居る狂言の、あの中幕の十段目は、大層いゝさうでござりますね。

お崎　左樣さ、芝翫の光秀に、操が團十郎、又十次郎が高助だといふことでござりまするな。

お末　それぢやあ音羽屋は、一番目だけですか。

お崎　さうでござりますとも、二番目は新富町へ掛持ださうにござります。

お末　あの音羽屋といへば、須田町の駕籠屋の文次は、音羽屋丸だしでござりますねえ。

お崎　さうでござります。あの姿なり形なり、そつくりでござりますよ。

お末　私は文次はひいきでござります。

お崎　おやまア、あなたも御ひいきで。

お末　それではお前樣も。

兩人　ヲホヽヽヽ。

ト笑ふ。爰へ奥役人六十兵衛羽織袴にて、下手より出來り、

六十　おゝお末殿にお崎殿、爰にござつたか、後室樣へ御用人の倉澤樣がお目通りを願ひまする。

お末　左樣にござりまするか。

お崎　それでは、お取次を、

兩人　いたしませう。(ト立ちかゝる、此時奥にて、)

慶壽　イヤ、來るに及ばぬ、今そこへ行くわいなう。

ト襖を開かせ、後室慶壽院襠裲衣裳切髪、好みの拵へにて出る、腰元兩人は烟草盆を持ち出て前へ直す、慶壽院此上へ住ふ。

六十　ハヽツ。(ト平伏する。)

慶壽　倉澤を是れへ呼べ。

六十　ハツ。

ト下手へはひる、直合方にて倉澤矢一郎繼上下一本差しにて出來り、下手へ平伏する。慶壽院思入あつて、

慶壽　コリヤ矢一郎、わしに面會いたしたいとは、何事なるぞ。

矢一　ハッ、恐入つてはござりまするが、暫時の間お人拂ひを。
慶壽　お丶、腰元共、次へ立ちや。
兩人　畏りました。（ト兩人は下手襖の内へはひる。）
慶壽　して、他聞を憚る儀とは、何事なるぞ。
矢一　ハッ、御人拂ひを願ひました其譯と申しまするは、昨年お國へお出での砌り、お供いたせし須田町の、駕籠屋文次郎が參りまして、金子百兩後室樣より、拜借いたして貰ひたいと申す其譯は、ちと斷り憎き儀がござりますれば、お伺ひに出ましてござりまする。
慶壽　ムウ、駕籠屋文次が妾より、百金借りてくれと申し、斷りにくきことありとは。
矢一　其の譯と申しまするは、お國へお出での其砌り、神奈川泊りの其晩に腰元綱が手引にて、お姫樣と申交し、お約束申したことあれば、それを御縁に願ひ出しと達ての頼み、お物堅きお孃樣に左樣な事のあるべき樣なしと、拙者に於ては存じまするが、文次は慥な證據ありと強ひて申せばあなた樣より、お姫樣へ内々にてお問合せ下さりませ。
ト慶壽院びつくりして、
慶壽　それは思ひもよらぬこと、娘に限り左樣なるみだらな事はあるまいと、思うてゐたれど男女の道

は遠くて近きものなれば、これより小澤を呼びよせて、事の實否を糺して見ん。

矢一　どうか左樣に願ひまするが、然し此事ばつかりは、御前の御耳へはひらぬやう。

慶壽　承知しました、篤と糺して其方へ、申し通じるであらうわえ。

矢一　くれ〴〵も穩便に、お聞き取りを願ひまする。

慶壽　それは妾が胸にたゝみ、決して洩らしはせぬ程に、心配はなけれども、もし露はれて表向き、悴の耳へはひりなば、其時こそは娘の命。

矢一　御身から出た銹ながら、情ない御亂行、たゞ濟まざるは腰元お綱。

慶壽　これも篤と聞糺し、其上にて成敗せん。先づそれ迄は穩密々々。

矢一　ハツ、宜しくお願ひ申し上げまする。

ト合方になり、矢一郎元の所へはひる。慶壽院思案のこなしにて、

慶壽　幼きより利發な娘、めつたに左樣な事いたす、不所存者にはあらざれど、何かこれには譯のある事、然し何れにして見ても、もしやそれが實正なら、義理ある殿へ濟まぬ義理、早う樣子を、さうぢや〳〵。（ト柏手を打つ、下手より以前の腰元出來り、）

お末　御用にござりまするか。

慶壽　奥に小澤が居やらうから、ちよつと是れへ呼んでたも。

お末　ハイ、畏りました。（ト腰元下手へはひる。是より床の淨瑠璃になり、）

〽後には一人後室が、胸に思案のとつおいつ、あたり見廻し待つ所へ、何心なく立出づる小澤はそれへ手をつかへ。

ト下手の襖を明け、小澤旗本姫の拵へにて出來り、手を支へ、

小澤　御母様、何か御用にござりまするか。

〽會釋をなして控ゆれば、慶壽院は差しまねき、

ト慶壽院そばへ寄れといふこなし、姫は恐る〳〵傍へ進む、慶壽院思入あつて、

慶壽　コレ小澤、今そなたを呼びにやりしは、外の事でもあらざるが、去年在所へ行つた時、供に參りし須田町の、駕籠屋文次を存じてをるか。

小澤　え〻。（トびつくりなす。）

慶壽　サ、存じてをるならをるやうに、あきらかに申しやいの。

〽言はれて小澤ははづかしく、顔赧らめていらへなく、暫し言葉も出でざりしが、や〻あつて顔を上げ、（トよろしくあつて、）

小澤　ハイ、それはあの、存じて居りまするでござりまする。
慶壽　さうして、近しくしやつたか。
小澤　いえ、近しくはいたしませぬ。
慶壽　いや、致さぬことはない、腰元綱の手引にて、文次と通じて居る事を、妾は疾うより存じて居る
ぞ。
小澤　えゝ。
慶壽　その方覺えがあることか。
〽念を押されて娘氣に、あからさまにも云ひかねて、
小澤　いえ、其樣な覺えは、一向にござりませぬ。
慶壽　そりやはや覺えのないことなら、それで妾も嬉しいけれど、モシ心得違ひがあつては、是迄物堅
いと噂の高い、當家へ疵の附く上に、義理ある殿へ言譯なし、まこと覺えのないことか。
小澤　サア、それは。
慶壽　サア、それはとは、覺えがあるか。
小澤　サア、

慶壽　サア、

兩人　サア〳〵。

〽問ひ詰められて娘氣の、何と答へん樣もなく、いつそ打明けありのまゝ、云はんとせしが大切の御家に疵の付く時はと、思ひ直して威儀をつくろひ、

ト小澤思ひ切つて云はうといふ思入あつて、又心付き、

小澤　其事ばかりはどのやうに、仰せられても存ぜぬ事ゆゑ、申上樣はござりませぬ。

慶壽　サア、そりや云ひにくい事ゆゑに、あから樣にも申されまいが、此事ばかりは證人あつて、慥にそれと分りをるぞよ。

小澤　エヽ其の證人とは、誰があなたへ申上げましたぞ。

慶壽　誰でもない、用人の矢一郎より聞きましたぞ。

小澤　エ、すりや矢一郎が申上げましたか。

〽不審の思ひに慶壽院、猶も小澤のそばへ詰めより、

慶壽　其譯は矢一郎が、只今わしへ密々に、面會を遂げたいと申し參りしそれゆゑに、あたりの者を遠ざけて、次第を聞けば須田町の、文次が今日屋敷へ參り、小澤と情を通ぜしゆゑ、金子を百兩貸

してくれと、餘儀なき賴みに其の次第を、詳しく尋ねたる所、全く通ぜし證と云ふは、これだと云うて懷より、そちが自筆の文を出し、それをかせに無心の條々、斷り難き筋なれば、そちによく〳〵糺してくれと、妾に內々含ませに、まゐりしゆゑにそちを呼び、誠の次第か聞き糺すのぢや。

小澤　スリヤ、あの文次が參りまして、おのれと左樣な次第をば。

慶壽　申せし事ゆゑ聞き糺すのぢや、かくし立せず云つてしまや。

小澤　ハイ。

へハイと一言小澤の當惑、何といらへん詞なし、後室は聲ひそめ。

慶壽　ハイと云ふのは、覺えがあるか。

小澤　サア、それは。

慶壽　口ごもるのは其身にとり、覺えありと覺えたり、あゝ情ないことをしてくれたなう。(ト床の合方になり、)そちも知つて居やる通り、妾は此家の後添にて、當主慶十郎とは生さぬ仲、そちは妾の腹をいため、出來た子故に不便がり、左樣なみだらな事をさせ、此の坪內家へ疵を附けしと、申されるその時は、親類一同へ對しましても、此母は何として申譯がありませう。人もあらうに駕

籠屋風情と、何で左樣な不料簡をいたせし事か此母は、お前の料簡が分りませぬ、それに聞けば腰元綱が、取持をせしなど〻、思へば憎き下司女め、こりやどうしたらよい事やら、母も當惑しますわいなう。

〽言はれて姫は面目なく、たゞさめ〴〵と泣くばかり、やゝあつて顏を上げ、

ト よろしくあつて、

小澤 お慈悲深い母樣の其のお歎き、何をおかくし申しませう、まことは去年神奈川にて、ふとした事よりなれなじみ、

〽たとひ身分は變るとも、戀に上下の隔てはない、一生つれ添ふ殿御ぢやと、思うて末の約束を、

重々濟まぬ事ながら、いたしましてござりますれば、今更となり僞つても、とても脱れぬ身の罪科。

〽お許しなされて下されとかつぱと伏して泣沈む、後室も不便の思ひうるむ涙を呑込みて、

ト 文句の通りよろしくあつて、

慶壽 そりやはや出來た事ゆゑに、最早責めても詮ないこと、然し相手が下司ゆゑに、そちを遣はすこ

ともならず、此事自然慶十郎へ、知れた時は如何にせん。此母一人を困らせるわいなう。

小澤　私が居りましては、母様の御難儀ゆゑ、家出いたして何處へでも、身をかくすでござりませう。

慶壽　イヤ〳〵其樣な事をしては、此の母が苦勞の種、矢張り矢一郎に相談して、内濟にして貰はうわいの。

小澤　いえ〳〵、とても生きては居られぬゆゑ、私の樣な不孝者は、ないものとおあきらめ下さりませ。

慶壽　イヤ其樣な短氣な事、そちを左樣な身にしては、母も生きては居られぬわいなう。

〽親子のきづなにせめられて、非を悔みたる歎きの中、襖押明け慶十郎、しづ〳〵と立出て、

ト兩人歎く、奧より慶十郎、着流し羽織一本差しにて出てよろしく住ひ、

慶十　最前より襖越しに、樣子は殘らず聞きましたが、コリヤ妹、そちは不所存な事をいたせしよな。

慶壽　すりや何もかも襖越しにて、聞き取りやつたとあるからは、包んで詮なき今日のしだら、妾も面目ないわいの。

小澤　お兄イ様のお耳に入り、何と申譯をいたさうやら、穴へも入りたき此の場の仕儀、お許しなされて下さりませ。

慶十　そりや早昔が今に至る迄、色情にて身をあやまる者、世間にいくらもありうち乍ら、私事は惣

領なれど日頃多病のたちなれば、一旦家督いたせしなれど、此度隱居なせし上、妹小澤へ後日
を讓り、聟養子をいたさんと、既に同役矢部氏の次男を貰ふ内約迄、内々調ふ今日に、殘念な事
いたせしよなア。
〽信あり義ある兄の情、妹はあるにもあられぬ思ひ、何思ひけんかたへなる、硯箱のさす
がを取り、既に斯うよと見えければ、
ト床の間にありし硯箱の小刀を取り、自害を仕ようとする、慶十郎其の手をとらへ、
こりや、うろたえて何をいたす。
小澤　いえ〳〵命を捨てませねば、申譯がござりませぬ。
慶十　そりや其方は命を捨つれば、それでよいと思はうが、命を捨ても其身の汚名は、どこで晴れると
思ひをるぞ。
慶壽　慶十郎が情の詞、よう心得て短氣なことなど、必ず共にしてくりやるな。
小澤　有難うはござりますれど、犯せし罪は妾一人、生きてゐては申譯がござりませぬ。
慶十　イヤ此の出來事は必ずとも、文次一人にある事ぢや、かれは下賤のことゆゑに、腰元綱をそゝの
かし、妹と密會いたせしならん、仕儀に依つては文次めを、此間求めし刀で試し切りに打果さ

ん。

慶壽　スリヤ、文次をば吟味の上にて、成敗すると言やるのか。

慶十　彼を討たねば腹が癒ぬが、事を好むも何とやら、一旦矢一郎に申附け、金子を遣はし本人を、事おんびんに計らはん。

慶壽　どうぞさうして下さりませ、めつたな事して下さりまするな。

慶十　然し無法を申しなば、助け置かれぬ刀の手前。

慶壽　ならうことなら穏便に。

慶十　是よりまゐり、計らひ見ん。

ヘ何か思案の慶十郎其儘奥へ入りにける、後に二人は差しうつむき、しばし涙にくれたりしが、慶壽院は小澤に向ひ、

ト慶十郎思案なして奥へはひる。兩人は後を見送り、よろしく愁ひの思入にて、

慶壽　斯樣な心根には仕付けねど、いかなる天魔が魅入りしか、見下げ果てた不義いたづら、よくも一人の此母に、恥を與へてくりやつたなう。

小澤　其樣に仰せられては、何とも申譯はございませねど、是には深き譯あつて。

慶壽　なに、いたづらせしに譯あるとは。（ト床の合方になり、）
小澤　其譯と申しまするは、お兄ィ樣には實の母樣に、二つの年にお別れ遊ばし、それよりは二度添ひのあなた樣の御養育受け、是れ迄御成長になりしゆゑ、何がな御恩を送らんと、御病身を云立に奧樣さへお迎へなされず、是より御隱居遊ばして、私へ養子をなし、此家の後目を下さるといふお志し、それを妾か見拔きしゆゑ、其のお志しのおいとしさに、妾は又此家に居りさへせねば、兄樣にも奧樣をお迎へ遊ばし安泰に、坪内家の納まる事も出來ませうと、義理にからむ淺はかより、神奈川に於て文次郎と、不義いたづらをいたしましたは、此身に疵を附けまして、家出をなさん心はかり、申譯には似たれども、小澤が切ない此胸を、母樣御推量下さりませ。
〽泪乍らに事譯を言はれて、母は尙悲しく、（トよろしくあつて、）
慶壽　ムヽ、スリヤ義理ゆゑの不義いたづらでありしよな。それに付けても當殿には、日頃病身々々と云はるゝゆゑに案じられ、醫者に容態聞いて見れば、常に變らぬ丈夫の產れ、心得難く思ひしに扨はそれを種にして、隱居をなして妹に、家督を讓らん爲なりしか。
小澤　たゞ其事をあなた樣へ、申上げれば私は、思ひ置く事更になし、おさらば。
ト又小刀を取り、死なうとするを、慶壽院其手を押へ、

慶壽　たとひ不義をいたせしとて、其の心なら死ぬに及ばぬ。

小澤　それぢやと申して。

慶壽　ハテまア、母に任しやいなう。

〽こもる情ぞ、

ト床の三重、風の音にて、此の道具まはる。

（坪内家庭先の場）——本舞臺三間の間中足の二重、本庇本緣附き向う正面上手三尺の床の間、續いて地袋、違ひ棚、山水の襖、出這入り、上手庭にて、建仁寺垣、松楓の植込み、石燈籠、石の沓脱ぎ、飛石松あり、下手大柱より斜に庭木戸出這入り、二重薄緣を敷詰め、總て坪内家庭先の體宜しく、以前の文次奥へ行かうとして居るを、○△の中間二人是を取押へて居る見得、合方にて道具止る。と直ぐ床の淨瑠璃になる。

〽時刻も延びて庭先に、待あぐみたる氣早の文次、奥を目がけて行かんとなすを、さうはさせじと引きとむる、中間共は氣をいらち、（ト中間二人は文次を留めて、）

コレ〳〵文次、きつさうして何處へ行くのだ。

△　そんな無法な事をしたら、手前の爲になるめえぜ。
文次　爲にならうがなるめえが、御用人の倉澤樣に、お賴み申した事があるから、少しも早く逢ひてえのだ。
○　そんなら早くさう云へばいゝに、奧へ行かねえでも濟むことだ。
△　今お呼び申すから、靜かにして待つて居ねえ。
文次　そりやいつでもいゝ用なら、だまつて爰に待つても居ようが、さうべん〳〵としちやゐられねえ
○　さうでもあらうが。
△　まア待たつしやい。
〽爭ふ折柄奧の間より、矢一郎は立出て、文次の氣色を見向きもせず、靜々と座に着いて、
ト矢一郎出て、二重へ住ひ、
矢一　コリヤ文次、先刻よりして餘程の手間取り、さぞ待遠にあつたらうな。
文次　へイ少々時を切つた入用の金子にござりますれば、待遠でござりますゆゑ、只今奧へ推參なし、お目に掛らうと思ひし所、是れなる御中間衆に留められまして、餘儀なく爭ひをいたしました。
矢一　左樣であつたか。（ト中間に向ひ、）コリヤ〳〵、其方共は次へ參れ。

中間二人　ハツ、畏つてござりまする。

ト下部は次へ立つて行く、文次は庭にひざまづき、中間二人下手へはひる。文次思入あつて、下に居て、

文次　シテお頼み申した金子の儀は、如何相成りましてござりませうや。

矢一　其の儀ぢやて、餘儀なき其方の頼みゆゑ、後室樣へ申上げし所、其儀は以ての外の事ぢやが、然し日頃のお出入ゆゑ、抂げて十兩遣はせとの仰せぢやぞよ。

文次　そりやさうでもござりませうが、私も十や二十のはした金で、お屋敷へ愛嬌こぼしにや參りません、どうか幾重にも後室樣へ、お願ひなすつて百兩金、お借りなされて下さりませ。

矢一　そりや早再三願つて見たが、何度願つても同じ事、今日はおとなしく十兩金頂いて、早く屋敷を歸るがよい。

文次　私とても御恩を受けた、お出入り屋敷の事ゆゑに、無理な事は申度くはございませんが、どうでも百兩の金がなければ、生きて居られぬ此の文次、それゆゑ是非ともお借り申さにや、お屋敷は歸れませぬ。

矢一　ではモウ五兩拙者が足し、十五兩にして遣はさうから、それにて承知いたすがよい。

文次　えゝ十や十五のはした金は入りませぬと、申して居るぢやござりませぬか。
矢一　さうでもあらうが其様に、無法な無心を申さずと、今日は素直に歸るがよい。
文次　何と云つても百兩借りにやあ、此處は動きませぬ。
矢一　是程迄に申すのに、聞入れなければ勝手にいたせ、折角下さる十五兩もやられぬからさう思へ。
文次　何だと。
矢一　イヤ、腹を立てずに歸れと云ふに。
〽無理になだめて居れば居る程、ほぞを固めし一心に、猶も此方は圖にのつて、
トよろしくあつて、
文次　御用人様の仰せだが、百兩なけりやア歸りませぬ。
矢一　ハテ出來ぬを強ひて申すのは、其方は押借りだぞ。
文次　そりや御出入り屋敷でも、たゞ借りに來りやア押借りだが、縁があるから借りに來たのだ、押借りとは何が押借り、此の屋敷のお孃様を、たとひ一度でも抱いて寐りやあ、亭主も同然な此文次、百兩ぐれえ貸したつて、よささうなものだと思ふ。
矢一　イヤ、途方もないゆすりかたり。(ト下手へ向ひ、)ソレ中間共、文次を門前へ引きずり出せ。

中間二人　ハア。

〽ハッと答へて下部ども、打ちつれ立つて出來り、文次を庭へ引きすゑて、
ト以前の中間兩人へ、熊藏加はり三人して出來り、文次を引据ゑて、

熊藏　コレ文次、なんでそんな云掛りを云ふのだ。

○　十五兩頂いたら、

△　早く爰を歸るがいゝ。

文次　えゝうぬらが知つた事ぢやねえわ。

熊藏　何だ、知つた事ぢやねえと。

○　此の野郎、表へしよびいて、

△　たゝみ付けるぞ。（ト引立に掛るを、拂ひ退けてきつとなり、）

文次　サア身分は卑しい駕籠屋だが、此の屋敷のお孃樣の、聟になりやあ主人も同然、うぬらに罰があたるぞよ。

熊藏　罰があたると言はれるのは、そりやあ敵役のあたりまへだ。

○　いくらそんなごたくをついても、

△　誰か取上げるやつがあるものか。

文次　取上げなけりやお勝手にしろ。

熊藏　おゝ勝手にするから、

△○　さう思へ。

〽文次に掛るを左右へ投げのけ、身構へなせば熊藏すかさず、むしやぶり付くを又打する、

トごつちやの立廻りよろしくあつて、

〽奥の口がけて行かんとなす、折柄一間に聲あつて、（ト奥にて慶十郎）

慶十　コリヤ、皆の者、控へい。

○熊△　ヘイヽ。（ト控へる、文次も下に居る事）

〽主の詞に下郎共、うづくまつてぞ控へ居る、慶十郎は立出て、

ト慶十郎袴羽織にて小姓に白鞘の刀、手箱を持たせ出來り二重に住ひ、

慶十　文次、それへ出い。

文次　ヘイ。

熊藏　それへ出ろ。

文次　何だと。

慶十　はてさて、出よ。

文次　へイ。

慶十　委細は奥にて承りしが、神奈川宿の泊りにて、綱が手引に妹小澤と密通なし、それを縁に後室へ金の無心を申入れしと、知らざる内は兎も角も、耳に入つては捨置かれぬ。それには何ぞ密通せし、慥な證據がそれにあるか。

文次　へイ、そりやあ斯うして參るからは、慥な證據がござりまする。

慶十　ムウ、慥な證據之有らば、とく〳〵出して予に見せよ。

文次　へえお見せ申しませうとも、其の證據と申しまするは、以前お屋敷に勤めて居た腰元お綱、今はわつちの子分にて、清太郎の女房で、先日御誕生日にお手傳ひに上り、其時御姫樣より云付かつて、持つて參つた是なるお文、是が慥な證據でござりまする。

〽ト懷より取出す文はまがひもなき、小澤の水のよどみなく、書盡したる文字の跡、

ト手紙を出す、慶十郎見て、

慶十　おゝ見覺えのある妹が手跡、こりや慥な證據なるわえ。（ト思入あつて）かゝる慥な證據があれば

密通せしに相違はない。

矢一　たとひ證據があるにもせよ、身分の違ひし是なる文次、こりや内分にお頼みあるが、御家の御爲かと存じまする。

文次　サア、それだによつて私へ、百兩お貸し下さりませ。（ト慶十郎思入あつて、）

慶十　イヤ、其儀は決して相成らぬ。

文次　なに、成らぬとはどういふ譯で。

慶十　其の仔細は汝如き、下司の者には相知れまいが、家に左樣な瑕瑾があれば、きつと紏さにや公儀へ濟まぬ、それゆゑ成敗致してくれう。

〽言はれて文次打驚き、

文次　シテ、御成敗とは私一人。

慶十　イヤ、妹小澤諸共に、手討にするからさう思へ。

文次　エヽ。

熊藏　スリヤ、お姫樣と諸共に。

慶十　武家一統の掟なるぞ。

〽言ひ放したる武士の一徹、かたへの白鞘取直し、（トよろしくあつて、）
幸ひ此程求めし銘刀、切味ためすに最屈竟、サア覺悟いたせ。（ト文次後悔の思入にて、）

文次　今日に迫りし百兩の、金がほしさにお屋敷へ、文を證據に名のつて出たが、望みの金も手に入らず、武家の掟にお手討とは、こいつア一番しくじつて、藪をつついて蛇を出した。

ト歎息をして居る。慶十郎思入あつて、

慶十　コリヤ矢一郎、小澤を是へ。

矢一　ハヽ。

〽立たんとなす後より、後室は聲をかけ、

慶壽　イヤ、娘小澤は母が伴ひ、只今それへ參りまする。

〽と聲打ちかけの取りさばき、襖開かせ立出づる母親は何か片手に携へて、しをれ乍らに出來り、

ト慶壽院打掛にて、紫の袱紗に包みし書置を持出て、

則ち此の一通が娘小澤、推量してたもいなう。

慶十　なに、これが妹と仰せあるは。

慶壽　まづ、其の書置を讀んで下され。
慶十　ムウ、それではもしや、妹は。
慶壽　サア、兄へ云譯あらざるゆゑと、只今自害いたせしぞ。
皆々　えゝ。

〽皆々顔を見合して、御いたはしやと胸の内、歎きを包む其ひまに慶十郎は文押開き、

ト皆々氣の毒なるこなし、慶十郎書置を開き、

慶十　なに〳〵！「一筆書殘しまゐらせ候　私事ふとした心の迷ひより、文次と不義を働き、兄上へ御恥辱を與へ、其の上御家の御瑕瑾となる大罪ををかし、申譯なき此身のしだら、生きてお詫のいたし方も御座なく候まゝ、自害いたし相果て申候、何卒是迄の不孝の段々はお許し下され度く、申殘す事は山々御座候へ共、惜しき筆とめまゐらせ候、かしく」（ト讀終り愁ひの思入、文次もこなしあつて、）
文次　こりや、とんだ事になりましたなア。
慶壽　あたら蕾を散せし母が心の内を、推量してたもいなう。（ト慶十郎思入あつて、）
慶十　ムヽ、相手は自害せしとあれば、成敗致すはそち一人。サア、覺悟いたしてそれへ直れ。
文次　アヽ是非もなき此身の切羽、サアすつぱりとお切り下され。

慶十　おゝ、よい覺悟だ。

〽刀すらりと引拔けば、かたへにあり合ふ手桶の水、熊藏は打ちそゝぎ、

ト白鞘の不動國行を拔き、熊藏水をかける。

文次　サア、ぶる／＼せずと、それへ出ろ。

文次　なに、ぶる／＼とするものか、どうせ一度は死ぬ體、未練は出さねえ、サア、すつぱりとやつて下せえ。

〽肚胸をすゑて諸肌ぬげば、背中にあり／＼不動の靈像、生けるが如く彫りなせり、慶十郎は打見やり、（ト肌をぬぐ、慶十郎見てびつくりなし、）

慶十　や、そちの體の刺繡は、不動尊の靈像か。

文次　へイ、私の生れは相州厚木在でござりますれば、産神同樣大山の、不動尊を信心なすゆゑ、其の御像を背中へ彫り、忘れぬ爲めの此お姿、それゆゑ人が仇名に呼び、不動文次と申しまする。

慶十　スリヤ、ほり物は大山の、不動尊にてあつたるか。

〽聞くも尊き大山の、不動尊の御姿と聞いて三拜九拜なし、恐れをなして慶十郎、刀を鞘へ納むれば、皆々不審の思ひをなし、

ト慶十郎勿體なき思入にて、刀を鞘へ納める。皆々びつくりなし、

矢一　コリヤ、御前には何ゆゑに、御刀を納められしぞ。

熊滅　これにも仔細がござりますか。

慶十　其の仔細は聞いてくりやれ。（ト床の合方になり、）我領分は相州の大住郡坪内にて、今を去る事三十餘年、家督なすべき一子なきを、兩親が打歎き雨降山の不動尊へ、祈念をなして儲けしそれがし、代々我家にて信心なす、其の靈像を背中に彫りし、文次にいかでそれがし、刃をあてる事ならう、それゆゑ今日の手討の儀は、止めにするからさう心得よ。

〽家の筋目と兩親の養育ありし次第をば、物語るこそ頼もしゝ、文次は夢に夢見し心地、

ト文次嬉しき思入にて、

文次　スリヤ、それゆゑにお手討は、お止まり下さりまするか。

慶十　おゝ、いかにも助け遣はすぞ。

文次　御成敗のお手討は覺悟いたしてござりまするが、なくて叶はぬ金子ゆゑ、不義の汚名を打明し、申しに參つたそれゆゑに、御自害なされし御孃樣へ申譯がござりませねば。

〽あたり見廻し矢一郎の、差添手早くかい取つて拔くよと見えしが髻をふツつと切つて投げ

付けたり。

ト矢一郎の脇差をとつて、手早く拔き、髪の毛を切つて投付ける、皆々見て、

矢一 や、髻を切拂ひしは。

慶十 如何なる所存なるや。

文次 再び命を捨てます迄、坊主になつてお姫樣の、御跡を弔ひます心。

慶壽 すりや娘が跡を弔ひくりやるか、さぞや草葉の蔭にても、よろこぶ事であらうわいなう。

慶十 それに付けても最前より、なくて叶はぬ金子の無心、切なる事のある樣子、包まず爰にて申し聞かせよ。

文次 ヘイ、御無心申し上げましたは、實は主人の難儀をば、救ひますのでござります。

慶十 何と申す。（ト合方になり、）

文次 ヘイ、私の主人と申すは、元相州厚木にて、萩原良作と申しまする者、私の姉の夫にて、當時は江戸に浪々の身の上、病氣ゆゑに諸道具も、賣盡して只今では、其日に困る痩世帶、其の良作の弟にて林之助といふ者が、大小捨て藏前の、坂倉方へ奉公なし、兄が貧苦を助けんと、三兩五兩と貢ぎし金、それがたうとう露顯して、引負となり暇が出て、丁度高も百兩にて、それをば返

濟せぬ時は、表向きの細目に逢ひ、上のお仕置受けねばならず、どうぞ弟が大難を、救ひたいとの心より先祖傳來の不動國行の刀をば、御成道の刀屋へ、百兩に賣代なし、姉が金をば受取つて歸る道の三味線堀にて、其金をば賊にとられ、詮方なしに死なうといふ、姉を助けて其金を、調達仕ようと受合ひしが、賤しい身ゆゑ工面が出來ず、せつぱつまつて小澤樣と、不義の事をば云ひかけに、當御屋敷へ上つたも、是皆主人の爲ゆゑと、御免なされて下さりませ。

ト思入にて云ふ、慶十郎思入あつて、

慶十　扨は厚木の萩原殿は、そちの故主で之有しか、さるにても不思議なりしは、四五日以前求めたる不動國行の名劍は、良作殿の品なりしか。

矢一　其又賊に逢ひしといふ、其の夜拙者が三味線堀にて、氣絶なしたる女をば、介抱なせし事ありしが、承れば其女が、良作殿の妻でありしか。

文次　すりや姉をお助け下されしは、あなた樣でござりまするか。

熊藏　何にしろ其晩に、金を盜んだ泥坊は、どんな奴だか太え奴だ。

慶十　さうして其賊の手掛りは、未だにそれと知れざるか。

文次　其盜人は三十四五の中間なりと申す事、又其晚に子分の淸太が、三味線堀で拾ひたる、煙草入の

中にありし手紙に、熊藏と書いてありしが一つの手掛り。
熊藏　何だ熊藏だ、その熊藏といふ名前は、世間にやいくらもあらア。（卜慶十郎思入あつて、）
〽言はれてこなたの熊藏は、薄氣味惡く口を出し、
慶十　何にいたせ良作殿が、かく迄零落いたされしを、近しくせねば存ぜざりしが、我も同じ大住郡に
出生せし誼もあれば、そちの望みし百兩は、良作殿に進上申さん。
〽聞いて文次は飛立つ嬉しさ。
文次　え、何とおつしやりまする。それぢやあ良作殿の難儀をお救ひ下されし、あの百兩お惠み下さりま
するか。
慶十　いかにも、以前は隣家の誼、其の金子は貸與へん。
文次　えゝ有難うござりまする。
〽悅ぶ折しも、こなたなる手箱引きよせ金とり出し。
卜かたへの手箱の內より慶十郎百兩包みを出し、
慶十　ソレ、片時も早く良作殿へ。（卜投げてやる、文次受取り、）
文次　すりや、此の百兩を、えゝ有難うござりまする。是れを見せたら良作殿が夢ではないかと嬉しが

り、さぞ悦ぶでござりませう。

〽言ひつゝ受取る百兩を、しつかと文次は懷中なし、

御禮は詞に申されませぬ。左樣なれば御前樣。

ト立上るを、熊藏見て、

熊藏　道が物騷、おれが一緒に。（ト立掛るを文次拂ひ、）

文次　イヤ、それには及ばぬ。

慶十　急いで參れ。

文次　へえ。（ト熊藏を附廻し、花道へかゝり、）

〽はツとばかりに一禮なし、勇んでこそは、

ト床の三重早き合方にて、花道へ文次はひる。慶十郎は見送る、皆々よろしく引張りの見得にて、

幕

四幕目

須田町文次内の場

相州大山大瀧の場

〔役名――不動文次、金貸郷兵衞、のうまく三吉、ばさらだ千太、手代林之助、こんがら幸次、合長屋金平、同十右衞門、背高清太、中間熊藏、雲助。母親お鳥、妹お瀧、清太女房お綱、坪内娘小澤等。〕

（須田町文次内の場）――本舞臺三間の間常足の二重、總て前幕須田町文次内の體、爰にのうまく三吉ばさらだ千太の二人、酒肴を前に置き、酒盛りの體、此傍に郷兵衞煙草を呑み居る見得、稽古唄、角兵衞の鳴物にて幕明く。

郷兵　モシ、お二人の若い衆、大分はずんで晝間から、酒盛りを始めなすつたが、何かいゝ儲けでもありましたかね。

三吉　いゝ儲けどころか、昨夜も吉原まで仕事に行つたが、骨ばかり折らしやアがつて、祝儀もろくろくくれやしねえ。

千太　それでくそいまくしいから、今日は休んで酒にしたんだ、郷兵衞さん一ツ飲みなさらねえか。

郷兵　イヤモウ、お前方の酒を飲めば、どうせたゞぢや歸れぬから、まア今日はお預けとしよう、かまはず二人で飲みなさるがいゝ。

三吉　成程金貸といふ者は、しみッたれなものだナ。

千太　それでなくつちや、金はたまりますまい。

郷兵　まア、さう云やそんなものだが、稼いだ錢を翌る日直に、遣つてしまふ樣な根性では、一生人に頭は上らぬ、不斷はけちと云はれても、頭を人に下げさせて、金を貸す身分になりやあ、其方が利口ものだよ。

三吉　そりやそれに違えねえが、

千太　江戸ッ子にやあ、それは出來ねえ。

郷兵　出來ない所をするのが辛抱、それだから江戸ッ子は、かひしよがないといふのだ。

三太　なにかひしよがねえ、たとひかひしよがなからうが、

千太　宵越の錢を遣はねえのが、おらッちの持前だ。

郷兵　それも一つの江戸ッ子料簡、まア惡くいふ譯はねえが、お前達の爲だから、一寸わしの心持を云つたのだ、堪忍さつしやい。(トなだめる事あつて、)ときに內の親方、文次殿は昨日から、歸らぬのかな。

三吉　左樣さ、お前さんに約束したゆゑ、どうにかして算段すると、昨夜出たきり歸りませぬ。

千太　やつぱり金といふものは、出來るやうで出來ねえもの、モウ追付け歸つて來ませう。

郷兵　文次もあれ程言譯して、頼みなさるから男を立てゝ待つてやつたに歸らぬとは、見かけに似合は

ぬずるい人だ。それだから今朝早く、阿部川町へも行つたなれど、良作夫婦も林之助も、みんな云合せて留守ゆゑに、爰へてく〳〵やつて來れば、文次も居ぬとは太い料簡、モウ勘辨も出來ぬゆゑ、やつぱり表向き林之助へ、繩をかけて出すより外に、モウ分別は付かぬから、其の積りにて文次殿が歸つたら云つて下さい。（ト腹を立つて出かけるゆゑ、）

三吉　モシ〳〵、郷兵衞さん、そりやさうでもあらうけれど、親分も心配して居ることだから。

千太　そんな因業な事を云はずと、氣を長く待つてやつて、素直に取るがいゝぢやあねえか。

郷兵　イヤ〳〵、モウ料簡は少しも出來ねえ。歸つたらさう云つてくれ。（ト急いで表へ出て、）ゑゝどいつもこいつも、世話をやかしやあがる。

ト合方にて、ぶつ〳〵言ひ乍ら、花道へはひる。後に兩人思入あつて、

三吉　成程、金貸しといふものは、

千太　因業なものだなア。

トこれを合方になり、奥より文次の妹お瀧出來り、口の利けぬ思入にて、酒はモウいゝかげんに止せと手眞似にて眞似をする。兩人見て、

三吉　何だ、杯をふせて手をふるのは、モウ酒をよせと云ふのか。

千太　啞は強情たから止さねえと、又うるさくッてたまらねえから。

三吉　モウ、酒は切上げよう。

ト飲む眞似をして止すと手を振つて見せるゆゑ、お瀧合點々々をする。

三吉　こいつの異見ぢや。

千太　親方の小言より困らア。

ト煙草を呑み居る、おたき兩人の手拭を取つて、顏をこする眞似をして、向うへ指をさして見せる、兩人うなづき。

三吉　何だ、湯に行けと云ふのか。

千太　それぢやあ三吉、行つて來ようか。

三吉　それがいゝ〳〵。（ト下駄をはき下へおりて、）それぢやあお瀧さん。

千太　頼んだぜ。

トお瀧うなづく、兩人は合方にて、手拭を持ち花道へはひる。おたきはそこらを片付けること、是れより床の淨瑠璃になり、

〽秋の日のまだ夏さらぬ其爲か、晝は暑さの身にしみて、道はかどらぬ未の刻、思案に心と

つおいつ、しをれ乍らに出來り、（ト林之助花道より思案しながら出來り、花道にて、）

林之　我身がなせし引負の、其金故に文次殿や、兄に難儀をかけさせて、やう〳〵金子の調達も、いまだに金は調はず、所詮かうして居たならば、縄目の恥を受けるは必定、いつその事此身を捨て、兄夫婦や文次殿へ、御苦勞かけぬがまだしもの事、せめて餘所ながらのお暇乞ひにさうぢや〳〵。

〽覺悟定めて來掛りし、門口そつと細目にあけ、内の樣子を窺ひて、（トよろしくあつて、）

モシ、文次殿はお内でござりまするか。

〽言へどもこなたは返事さへ云へねば唖の手眞似にて、留守の樣子を知らすれば、

トおたき手眞似にて留守だと挨拶すること、林之助うなづき、

スリヤ、お内にてはござりませぬか。

〽云ふ聲聞いて奥の間より、文次の母は手さぐりに、やう〳〵そこへ這ひ出て、

トお鳥さぐり〳〵出來り、

お鳥　さうおつしやるは、どなたでござりまする。

林之　ハイ、私は萩原良作の弟、林之助にござりまする。

お鳥　おゝ左樣にござりましたか、まァ〳〵おはひり下さりませ。

林之　眞平御免下さりませ。（下内へはひり、下手へ住ふ。お鳥はそは〳〵茶などを出すこと、）

お鳥　さうしてまア此程は、あなたにも御心配の御様子、私はそこひにて、目は少しも見えませぬが、共に御心配申しまする。

林之　ハイ有難うござりまする。不慮の事にて爰の内の、文次殿にもいかいお世話、さうしてお内においでゞございまするか。

お鳥　ハイ、昨夜四谷へ泊りまして、今日ちよつと歸りましたが、それから直に駿河臺の、坪内様へ參ると申し出ましたぎり、今以てとんと内へは歸りませぬ。

林之　それではお歸りはござりませぬか。私も今日は餘儀ない譯にて、お目に掛りお話し申さにやなりませぬが、おいでがなくば是非ないわけ、ちよつと一筆書殘して參りまする程に、硯と紙を貸して下さりませ。

お鳥　それはお安い事なれば、直にお貸し申しまするが、私は盲目なり娘は唖なれば、何卒手眞似にてそれなるお瀧へ、おつしやつて下さりませ。

〽言はれてそれと心付き、墨する眞似と書く眞似を仕方ですればお瀧は呑込み、いそ〳〵奥へ取りに行く。

コレお瀧、わかりましたか、早う持つておぢや。

林之　只今手まねで賴みましたら、よう合點して取りに行かれてござりまする。

お鳥　そりやモウ、片輪な者ゆゑに、合點は早うござりまする。

〽あまい詞も母親の子を褒めそやすぞ道理なり、折柄硯たづさへて、いそ〳〵出る娘のおたき誰が敎へねどはづかしく、色氣ふくんで差出せば、林之助は一禮なし、卜ト件より硯箱、卷紙を取りそろへ持つて出で、はづかしさうに林之助のそばへ置く、林之助受取り、有難いと顏を見て禮の仕方することあつて、

林之　是はまアよう分りましてござりまする、さうして卷紙迄。あゝ口こそ利かね、賢い事でござりまする。

お鳥　おゝさうでござりましたか、わしは少しも目は見えず、口こそ利かねど、よう心附きましたこといなう。

林之　ほんに口こそ利かれねど、器量といひ機轉のよさ、是がまともの生れなら、どこに一ツの疵もなけれど、惜しい事でござりまするな。

〽褒める詞も聞えねど、そぶりで知るや娘氣の顏あからめて手をもぢ〳〵、何やら云ひたき

風情なり、林之助は墨すり流し、にじむ涙の筆の毛に、つゆふくまして書終り、
ト おたき恥しき思入にて、林之助に始終思ひをかける思入、林之助は書置を書きしまふ、お鳥はそばに樣子を聞いて居て、

お鳥　マアお瀧が滿足な生れであつたら、重縁といゝ丁度幸ひ、お前に頼んでめあはせようにと疳で口が利かれぬとは、何たる因果の事なるか、マア情ない事ぢやなア。

林之　誠の唖なら知らぬ事、疳で口が利かれぬとは、實にお氣の毒なことでござりまする。

お鳥　それゆゑ信心いたしまして、私の體を斷ちましても、治るやうにと神佛へ祈りまするが、まだ信心の足りぬのか、とんと御利益がござりませぬ。

林之　それは信心強情と云へば、猶もめげずにお祈りあらば、始終は御利益もござりませう程に、まア飽きずに御信心なされませ。

お鳥　左樣いたすでござりませう。（ト思入あつて、）さうして今日私共の、文次へ御用とおつしやりまするは。

〽尋ねにこなたは涙をうかめ。

林之　其用と申しまするは、此間から文次殿へ、いかい御苦勞かけましたが、最早私は遠い所へ、旅立

いたす心ゆゑ、わざ〳〵今日お暇乞ひに、出ましてござりまする。

お鳥　ムヽ、シテ其遠い所とは、いかなる所へお出でござりまする。

林之　ハイ、西の國へ參りまする。

お鳥　なに、西の國とは。

林之　ハイ所詮當地にをられませねば、西國へ行き一稼ぎなし、それから戻つて參りますれば、さう思召して下さりませ。

お鳥　それではもしや、其身をば。

林之　えゝ。

お鳥　お捨てなさる思召しか。

林之　ハイ。

〽ハイとばかりに口ごもり、涙にむせぶかたへには、口こそ利けね理にさときお瀧はそばへすがりより、何やら云へどたゞうろ〳〵、泣くより外に是非もなし、林之助も涙をかくし、トおたきそれとさつし、氣の毒なる體にて林之助にすがり泣き乍ら、無分別は止せといふこなし、林之助も涙を拂ひ立上り、

何卒文次殿が戻られたら、よろしく云うて此の手紙をお見せなされて下さりませ。

お鳥　そりや言傳は申しまするが、今にも是へ歸りますれば、少しの間此處で、お待ちなされて下さりませ。

林之　イヤ／＼、長居なしては事の面倒、おさらばでござりまする。

〽すがるお瀧を拂ひのけ、後をも見ずして走り行く、こなたは悲しくたゞフラ／＼、聞く母親も氣をあせり。

ト林之助おたきの手を拂ひ、淨瑠璃にて花道へ走りはひる。おたきはハア／＼あせりたつ、母親は是れを聞付け、

お鳥　コレおたき、林之助さんはモウ行かれたか、どうやら愁ひをふくみし樣子、そちは目かいは見ゆれども、口がきけねば留立出來ず、わしは樣子が分らねば、心に任せぬ事ぢやなア。

〽あゝ情なや二人とも爰に居ながらいなすとは、何の因果か淺ましやと悔み歎く其折しも、文次はいそ／＼喜びの足を早めて立歸り、

トお鳥お瀧歎き悲しむ、此時花道より以前の文次、逸散に走り出來り、門口へ來て、

文次　おふくろ、今歸つた。（ト云ひ乍ら舞臺へ通る。）

お鳥　忰歸つたか、待つて居たわいの。
文次　あゝ息が切れてならぬ。
　　トお瀧に水をいつぱい持つて來いと云ふ、お瀧合點して茶碗へ水を汲んで來る、文次一口飲み。
　ムヽ有難え、是でやう〳〵口が利けらア。
お鳥　さうして望みの其金は、調達が出來ましたかの。
文次　まアおふくろ悦んで下せえ、あれから思ひ切つて、駿河臺の、坪内樣へ押しかけて、たうとう百兩かりて來た。
お鳥　スリヤ百兩調ひしとか。エヽ有難い事ぢやなう。
　〽お鳥のよろこぶなりを見て、こなたのお瀧も打悦び、思はず文次の姿を見て、我手で頭をなで廻し。
　　トお鳥悦び、お瀧も樣子にて喜び、文次の頭に氣がつき、自分の手にて自分の頭をなで廻し、なぜ坊主になつたと云ふこなし、文次思入あつて、
文次　ムヽ、おれが坊主になつたのは。
お鳥　なに、文次は坊主になつたとか。

文次　ナアニ、こりやつまらぬ喧嘩の中へ入り、よんどころなく頭を剃つたのだ。（ト思入あつて、）さうして留守の内、阿部川町から誰も來やアしませぬか。

お鳥　今林之助さんが、來なすつたわいの。

文次　成程今日暮方迄の約束ゆゑ、樣子を聞きにござつたか、今一足早くば、金の工面の出來た事を、云つて上げるに丁度よかつた。

お鳥　いえ〳〵何か樣子は知らねど、遠い所へ行くと云つて、暇乞にござつたが、そなたが居ぬゆゑ手紙を書き、爰へ置いて行かれましたわいの。

〽聞いて文次は氣に掛り、猶もお鳥に打向ひ、

文次　ム、遠い所へ行くといつたか。

お鳥　サア、西の國へ行くと云ひましたわいの。

文次　エヽ。

〽聞いてびつくり魂も、顚倒なせしかたへには、手眞似でお瀧に打知せ。

ト文次びつくりしてあきれて居る、お瀧何でも林之助は死ぬのだといふ仕方をして見せる、文次氣をいらち。

エヽ手前の仕方ぢや分からねえ、その手紙を持つて來い。

ト お瀧以前の手紙を持つて來る、文次開き見て、

なにく「書置の事、私ゆゑに兄樣御夫婦又文次殿にもいかい御苦勞かけ、誠に相濟み申さず、殊に金子調達出來ぬ時は、繩目の恥辱を受けねばならず、それゆゑいつそ西國へ旅立ち此身をかくし申候間、後にて兄樣御夫婦へよろしく御取成し下され度、何事も此身の罪科ゆゑ斯くなる事はあたりまへと覺悟取極め申候ゆゑ只一遍の御回向頼みいり候。先は御禮迄、早々以上。文次殿へ林之助より。」（トよんで、びつくりなし、）それぢや命を捨てる覺悟か、あゝつまらぬ事になつたなア。

〽張りつめし氣もがつくりと、首うなだれて思案の體、母も今更面目なく（トよろしくあつて）

お鳥　そんならいよく死ぬ氣であつたか、さういふ事と知つたなら、袖にすがつて止めようもの、目かいの見えぬ悲しさには、いつの間にか歸つてしまひ、お瀧もそれを知つては居ても、知らせる口も得い利けず、二人が二人役に立たず、惜しい事をしたわいの。

〽歎く二人は文次の手前、氣の毒涙ぞ道理なり、こなたもほつと吐息つき（トよろしくあつて）

文次　かういふ事をばさせまいと、本意にあらぬ坪内樣へ、お出入り屋敷の御恩も忘れ、お姫樣と神奈

川で、出合つた事を云立に、押借同樣行つた所、包みかくした不義があらはれ、お姫樣にはあへ
ない御最期、わしも其場で諸共に、切られる所を助かつた上、生れが同じ相州ゆゑ、主人が難儀
を救つてやると、百兩金をお惠み下され、それは〳〵有難い、御恩を受けし事なれば、宙をとん
で歸つて來れば、それも千日に苅つた茅、いすかとなりし此身の薄命、あゝ殘念な事ぢやなア。

〽悔む心ぞ哀れなり、折しも爰へ合長家、打ちつれ立つて入り來り、

ト合方を冠せ、序幕の金平、十右衞門の兩人、花道より出來り、直舞臺へ來て、

金平　文次殿、お內でござるかいの。

十右　良作殿の事に就き、ちよつと相談せねば、

兩人　ならぬわいの。

文次　おゝ阿部川町の御長屋の衆、まア此方へおはひりなさい。

兩人　まア、ゆるして下されや。（ト內へ通り、下手に居て煙草を呑む、お瀧茶を出す。）

文次　シテ良作殿の事とは、何の御用でござりまする。

金平　それはまア斯ういふ譯ぢや、昨日良作殿夫婦が夜に入つて出られたぎり、朝になつても歸つて來ま
す。

十右　其内家主へ手紙が屆いたのぢや、どういふ事かと開いて見ると、今迄世話になつた禮狀に、滯つた店賃は造作をおいて行くゆゑ、それで勘辨してくれろといふことが、書いてあつた其上に、

金平　自分達二人は一と先づ存所の厚木へ行くと、書いてあつたそれゆゑに、かうして二人して、

兩人　知らせに來ました。

〽二人の詞とつくと聞き、文次はそれと察しやり、（トよろしくあつて、）

文次　それぢやあ手紙に厚木へ行くと、書認めてござりましたが、是も大方故郷へ行き命を捨てる心なりしか、今一足金の都合が早く出來れば、かういふ始末になりもせまい、あゝ氣の毒なことだなア。

金平　そりや家主でもさういつて居ましたが、てつきり金が出來ぬゆゑ。

十右　死に行つたに違ひないと、專ら長屋の噂ぢやわいの。

文次　それゆゑ夫婦兄弟とも、救はうといふ料簡にて、金の才覺して來たに、千辛萬苦も水の泡、今となつては仕方がねえわい。

お鳥　それではお長屋の衆達の、おつしやる通り良作殿も、娘も死に行つたるか、不便な事をいたしたな。

〽ハツト思ひし女氣に、直に差込む癪氣のなやみ。

ト　お鳥ウムと苦しみ打倒れる、お瀧びつくりして介抱する。

文次　ア丶コレ、お前迄が氣を落しては、此の文次が困り切る、どうぞ氣を慥に持つて下され、お袋いなう〱。

〽言ふに苦しき眼を開き、

お鳥　逆さまながら此世に居ても、生き甲斐のない此の盲、早く先へ死にたいわいの。

文次　それぢやあわしが困るといふもの。お前が死ねば其後は、口の利けねえ此お瀧、誰が世話をしてくれよう、まア其様な情ない事は、假にも思つて下さりまするな。

お鳥　それもお前に氣の毒だが、二人が二人不自由な、片輪者をそなた一人に、世話をかけるが氣の毒ゆゑ、わしも死にたうござりまする。

〽死にたいわいのと見えぬ目に、さぐり〱て兩人の手を取り歎く其の有樣、見る目もいと

ど哀れなり。（ト　お鳥左右に文次とお瀧の手をとり、歎く事よろしく。）

〽折しもいとゞくれ近き人顔見えぬ町つゞき、軒下づたい忍び來て文次の門をそつと覗き、

ト　前幕の小澤手拭を冠り、褄を端折り花道より出來り、門口を明けて、

小澤　コレ文次殿、内に居てか。

〽聲にびつくり文次は立出で、

文次　ヤ、思ひがけないお姬樣、どうして爰へは。

小澤　そなたに逢ひ度く屋敷をぬけ出で、やう〳〵爰へ尋ねて來ました。

文次　フム、それにしても最前、あの御自害なされしと承りしに、どうして爰へは。モシ幽靈ではござりませぬか。

〽文次は足許打見やり、又改めて不審の體、聞く母親はびつくりなし、

ト文次よろしく、小澤の足のまはりなど見ることある、お鳥びつくりして、

お鳥　なに、幽靈の姬君樣が、爰へお越しなされしとか。

小澤　イエ〳〵私や死にはせぬ、最前自害したといふは、母樣の僞りにて、生き延はつて居たわいなう。

文次　おゝ左樣でござりましたか、まア〳〵むさくろしくとも、これなる內へ。

お鳥　おはひりなされて下さりませ。

小澤　許してたもいなう。

〽さすがに姬の氣高くも、會釋をなして打通れば、

ト上手へ通し、駕籠蒲團を持つて來て敷くこと、此上に小澤住ひ、

文次　さうしてお一人わざ〳〵お越しは、いかなる譯でござりまする。

小澤　サア、其の譯を聞いてたもいの。（ト合方になり、）最前妾が自害をしたと、言うたは母樣の御謀り にて、まことは妾を助けし上、たとひいやしき者たりとも、一緒に添はしてやらうといふ、お情 あまる御いつくしみ、それゆゑ内々屋敷を拔け出て、爰へ來た其譯は、もしやそなたが此小澤へ 義理を立て死にはせぬかと、それを案じて來たのぢやわいなう。

〽一部始終を述べければ文次も始めて後室の、情を知つて打悅び、（トよろしくあつて、）

文次　ヤレ〳〵、それはまアお目出度うござりました。それにて私もどの樣にか安心をいたしました、 それを又私は誠に御自害遊ばされたと、一途に心得此通り、頭を丸めて御一生を、弔ふ心でご ざりました。

小澤　それに付けても表向き、此世にをらぬ小澤ゆゑ、たとひ存へ居ようとも、一生日陰の埋れ木ゆ ゑ、どうぞお前の家へ置き、可愛がつて下さんせ。

文次　どうして〳〵上つ方のお姫樣を、駕籠屋風情の私が内へ置いて何といたしませう、まア悪い事は 申しませねば、後室樣へ仰せられていづれへか御一生を、お任せなさるがよろしうござりまする。

小澤　それではいつぞや神奈川にて、申せし事は僞りかや。

文次　それでもどうも、此の家へは、

小澤　置けぬとあるなら、妾は死にます。

文次　アヽ、コレ、めつたなことを。

小澤　それなら、置いてくりやるか。

文次　サア、それは。

小澤　サア、それはとは、置かれぬか。

文次　サア、

小澤　サア、

兩人　サア〳〵〳〵。

〽思ひ込んだる女の一心、問ひ詰められて返答も何と答へん樣もなく、文次も今は當惑なし、

ト文次困りし思入にて、

文次　今日も今日とて良作殿、夫婦を始め林之助迄、死なうといふにかてゝ加へて、お姫樣迄かけ込んで來て死なうとは、こりや實に困つたものだ、それに又折角の思ひにて、調達なした百兩も、水の泡となつたるも、いかなる不運の事なるか、あゝ是非もなき事ぢやなア。

〽是非もなや情なや、此身一人に降りかゝる難儀は何の因果ぞと、身をあせりたる悔み泣き
やゝあつて涙をぬぐひ、
ト文次あせりかなしむ、此時あまり取逆上せ、聾になりし思入にて、
お鳥　なに、それではあまり取り逆上せ、俄につんぼになつたるか。
文次　何だか一向に物が聞えぬ。
お鳥　それではそなたがつんぼゥに、わしは盲目娘は唖、たうとう是にて三人片輪、
文次　テモ情ない、
皆々　事ぢやなァ。（トよろしくこなし、小澤も思入あつて、）
小澤　それではお前は耳が聞えず、私の云ふ事聞かれもせまいが、たとひお前が何といふとも、爰の家
へ置いてくれねば、此身を捨て母様へ、又もや御苦勞かけねばならぬ、なぜにお前は其樣に、
〽つれない心にならしやんした、そも神奈川の泊りの夜さ、あの腰元のお綱をば便りに忍ぶ
床の内、心のたけを打明し、たとひ身分は違ふとも一度逢うたが縁の丞必ず變るな變るまい
と、約束したに其樣な、

情ない事云うてくれては、便りに思ふ甲斐もなう、折角命存へても、又淵川へ身をなげて、死なねばならぬ仕儀となり、

〽私一人はお前ゆゑたつた一夜の情にて彌陀の御國へ旅立をするといふのも親兄の目をかすめたる皆御罰とあきらめも致しませうが、假にも母の情にて、お前と添へと勘當受け、折角尋ねて來たゆゑに、

一日たりとも女房にして置いて下さんせ、コレ文次殿、頼みますぞいなア。

〽かき口說きたる其の詞、文次はすこしも耳へ通ぜず、

文次　何をおつしやるやら私には、さつぱり聞えませぬ、あなたは早うお屋敷へ、お歸りなされて下さりませ。

小澤　イエ／＼今も云ふ通り、一旦屋敷を出たからは、死ぬとも返りは致しませぬ。

〽取りすがりたるいぢらしさ、文次は困じ果てたる折柄、道を急いで子分の二人、

ト花道より清太、幸次出來り、直に門口へ來て、内を覗き、

清太　ヲイ親分、内に居たか、様子は殘らず知つて居るが。

幸次　故主の爲とは云ひ乍ら、いかい苦勞をしなさるなう。

文次　ヲヽ背高にこんがら、まア頼みてえ事がある、爰へ來てくれ。

兩人　おゝ。（ト内へはひる。）

文次　その賴みといふは外でもねえ、さつき内へ戻つて來ると、阿部川町の合長屋が、知らせに來たには御主人夫婦が、書置を書いて自分の故鄕、厚木へ死に行つたと云ふゆゑ、後を早く追つかけてさがしあてゝ助けてくれ。

兩人　ムヽ、承知した。

文次　それから此のお姬樣をば、お屋敷迄送つてくれろ。

清太　それも合點だが、さうして心配の其の金は、

幸次　調つたのか、どうしたのだ。（ト文次聞えぬ思入にて、）

文次　何だかおれにやあさつぱり分らぬ、大きな聲で云つてくれ。

お鳥　コレ〳〵二人の衆、文次は逆上せて最前から、さつぱりと聞えぬわいの。

幸次　それぢや親分は逆上せあがり、

清太　かなつんぼうになつたのか。

お鳥　これゆゑ耳へ口を寄せ、大きく言はねば分らぬわいの。

清太　ムヽ、よし〳〵。（トそばへ行き、）おい親分、金は出來たか。

ト文次聞えぬこなしにて、

文次　なに、鐘が鳴る、鐘が鳴りやあ六ツだらう。（ト清太困りし思入にて、）

清太　こりやちつとも話しは出來ねえ、さうしてお袋、今文次の頼みだから、お姬樣をばお屋敷へ、送り屆けずばなるめえなう。

お鳥　おゝ、さうしてたもいなう。

小澤　いえ〳〵、私は歸らぬわいなア。

〽爭ふ折柄こなたより、おつなはそれと立出て、（トおつな下手より出て內へはひり、）

つな　其のお姬樣は私が、お送り申しませうわいなア。（ト清太見て、）

清太　手前は女房、餘計な事に口を出すなえ。

つな　いえ〳〵餘計ぢやござりません、後室樣の御內意で、私がさつき途中迄、お送り申したのでござんすわいなア。

お鳥　さういふ事でありましたか、そんなら手附かずお前の內へ、預かつて下さんせ。

つな　それはもう、お預かり申しまするわいなア。（ト文次思入あつて、）

文次　おれは是から厚木へ行き、萩原樣をお尋ね申し、此の金子をばお屆け申さん。（トこなしあつて、）しかしおれが居ねえでは、後にてさぞや困るだらう。

ト爰へ以前の三吉、千太下手より出來り、

三吉　親方、心配さつしやるな。
千太　留守はおれ達二人して。
兩人　しつかりと預かつた。
文次　何だか耳へ聞えねえが、二人は留守番をしてくれろ。
淸太　それぢやあこれから。
幸次　別れ〳〵に。
文次　直に是から、（ト立上るを木の頭、）出かけようか。

ト此の模樣よろしく、皆々引張りにて、

ひやうし幕

ト幕引附けると、鳴物にてツナギ、道具出來次第引返す。

（相州大山大瀧の場）――本舞臺一面松並木の道具幕を釣り、上下植込の張物にて見切り、日覆より松の釣枝、下手に東海道四ツ木宿といふ榜示杭、總て大山道の體、爰に○△○の雲助三人むしろを敷き、酒を飲み居る見得よろしく、山おろしにて幕明く

○おい〳〵相州、手前は大分いゝ仕事でもしたと見えて、景氣がいゝぢやあねえか。

△そりや其筈よ、此間から小田原の問屋場で、張るとは受け〳〵、たうとう一兩の元手で、二十三兩儲けたのだ。

□そいつアうめえ事をしたナ。それから見るとおれなぞは、出るとは取られ〳〵、竹の子よろしくといふざまだ。

○まア何にしろ二人して、相州を取卷くとしよう。

△そりやたゞ儲けた金だから、ある時に使はなけりや、ふだん苦しんだ埋草が付かねえ。

○さうだ〳〵、又おら達が儲けた日には、相州にもおごつてやらア。

△まア二人の儲けるのは、當にせず待つて居らア。

○えゝ延喜でもねえ止してくれ、又儲ける事もあらアナ。

トやはり山おろしにて、花道より、◎の雲助、人出來り、

◎コウ〳〵みんな、爰に居たか、今いゝ仕事を受合つたから、一肩入れねえか。

○ムウ、其いゝ仕事といふのは、

△□どういふ仕事だ。

◎そりやかういふ譯だ、おれが以前江戸の三河町に、渡り中間をして居たことがあらア、其時の友達に熊といふ惡い奴がある、そいつが今來ての頼みにや、今夜江戸から不動文次といふ奴が、金を百兩持つて來るから、そいつを道で叩きしめ、金を取りやあ山分けにすると、うめえ話の頼みだが、みんな是に荷擔しねえか。

○成程お前の友達が頼みで、

△その文次といふ奴を叩きしめれば、

□持つて居る金の百兩は、山分けに、

兩人すると云ふのか。

◎さうとも〳〵、それだから知らせに來たのだ。

○さういふ事は大好物だ。

△荷擔しねえで、

□　どうするものか。
◎　それぢや其氣で賴むぜ。
三人　おゝ合點だ。
ト捨ゼリフにて酒盛よろしく、やはり右鳴物にて花道より中間熊藏、草鞋がけにて出來り、花道にて、
熊藏　成程惡錢は身につかずと、良作の刀を賣つた其金を、三味線堀にてまき上げて、それを路用に姫をつれ出し、身をかくさうと封を切つたら、忽ち金はなくしてしまひ、姫は文次にしめられて、こんなつまらぬ事はねえ。（ト云ひながら舞臺へ來る、雲助四人見て、）
◎　おゝ熊公やつて來たか、今おれが仲間へ賴み、此通り網を張り、文次とやらを待つてゐるのだ。
熊藏　そいつア早速有難え、何でもその野郎を叩きしめりやあ、百兩といふ金があるから、みんなもぬからずやつてくれ。
○　そりやあこいつに聞いたから、
△　骨を惜しまず、
□　やるつもりだ。
熊藏　そりやあ早速に有難え、それぢやあ賴むぜ。

四人　合點だ。

熊藏　荷擔人が出來りやあ大丈夫だ、それぢや皆の衆。

四人　おい。

熊藏　文次の來るのを、待たうかい。

ト山おろし合方にて、熊藏先に四人上手へはひる。知らせに付き山おろし打上げ、道具幕を切つて落す。

本舞臺一面奥深に岩組の張物、眞中誂らへの大瀧見事に飾り付け、所々に蔦のからみし苔むしたる松の立木、日覆より同じく釣枝、上下やはり岩の出し瀧壺、岩と岩との間七五三繩を張り、岩の間よき所に奉納の木太刀及び護摩札等うや〳〵しく飾りある事、何れも後に遣ふ誂へあり、總て大山大瀧の體、水の音にて、道具納まる　と直ぐ大薩摩になり。

〽そも相州大山と唱うるは靈驗殊にいちじるき不動の瀧とて晝も尚小暗き木影水音は、岩に碎けて散亂なす、いと物凄き有樣なり。

ト水の音バタ〳〵になり、花道より文次、腹卷大形の浴衣にて出來り、花道にて、

文次　夜道をかけて十八里、急いで爰迄やつて來たも、此の大山の不動尊へ、参詣をばなさん爲、向う

に見えるが最早大瀧、音はさつぱり聞えぬが、あたりは霧でまつくらだ。

トすかしながら舞臺へ來て、

何にしても先月の二十八日より此事にて、千辛萬苦に夜の目も寐ず折角調へた此の百兩、それも僅かで手後れとなり、林之助殿は行方知れず、主人夫婦は厚木へ來て、いくら尋ねても手掛りなし、此の上は大山の瀧へ掛つて水垢離とり、不動樣の御力をお借り申してお二方の、どうかお命を取り止めにやあ、苦勞した甲斐がねえ。

ト文次はだかになり、禮拜して、

南無大聖不動明王神願納受なさしめて、御主人御夫婦林之助殿の、命を取りとめしめ給へ、南無大聖不動明王々々々々々々々々。

ト禮拜なす、爰へ花道より清太幸次の兩人、派手な浴衣青竹を持ち、松明を照して出來り花道にて、

清太　山霧深く朦朧と、向うは見えぬがたしかに大瀧。

幸次　是から直に雨降りの、其の御社へわけ登り。

清太　水垢離取つて、

幸次　身を清めん。（トやはり山おろし、水音にて、本舞臺へ來り文次を見て。）

清太　やゝ、そこに居るのは、
幸次　親分か。（ト云へども文次は聞えぬこなしにて、）
文次　南無大聖不動明王、のうまくさんまんだばさらだせんだまかろしやそはか。
　　ト一心に光明眞言を唱へて居る、兩人心附き、
清太　おゝ親分は此間から、
幸次　耳が少しも聞えなんだ。（ト松明をさし出す、是にて文次兩人を見て、）
文次　そこへ來たのは、清太に幸次か。
清太　おゝ、さうして尋ねる御主人の、
幸次　其の行方は知れたのか。（ト云へどもかぶりをふり、）
文次　えゝ、おれには少しも聞えねえや。
清太　聞えねえとは情ねえ。（ト文次を見て、）斯うして親分の姿を見りやあ、坊主頭へ鉢卷は、去年の文覺そつくりだ。
幸次　背中へ彫つた彫物は、丁度不動の此の尊像、
清太　差詰めおれは背高に、

幸次　見立てられゝばおれがこんがら、
清太　是れからまけず劣らずに、
幸次　不動を彫つた親方の、
清太　左右に控へて、
幸次　利益を受けん。
文次　何だかちつとも分からねえが、おれは名に呼ぶ不動文次、其名につれてこんがら背高、おれに力を添へてくれ。（ト此時水音になり、花道より以前の熊藏雲助四人出來り、）
熊藏　ソレ、三人をたゝきしめろ。
四人　合點だ。（ト四人清太幸次へ掛る。熊藏は文次に掛る。文次是を引する。）
文次　ヤヽ、わりや中間熊藏だな。
熊藏　いかにも、おれは熊藏。
清太　雲助どもを語らつて、
幸次　きのふの意趣を返しに來たのか。
熊藏　いかにも泥坊と惡名を付けられ、其の埋草がつかねえから、爰迄追かけばらすのだ。

清太　そりやあさうでもあらうなれど。
幸次　十八里ある此の山中、外に目あてが、
兩人　あつて來たらう。（ト此内文次耳の聞えぬ思入にて）
文次　わざ〳〵こいつが付けて來たは、まだ百兩の金がほしさに、付けて來たに違えねえ。
熊藏　いかにも文次が察しの通り、其の百兩を取りに來たのだ。
清太　何しに貴樣に親分が、
幸次　百兩とられてたまるものか。
熊藏　さう云やいつそ、かうして取るわ。
ト熊藏文次に掛る、後四人は二人づゝ清太幸次に掛る、兩人是を相手に立廻りあつて、上手へ追込みはひる、後熊藏は文次と立廻り、文次熊藏の脇腹を蹴る、是にてウンと熊藏倒れる、文次きつとなつて、瀧壺へ飛び込む、此內始終合方にて文次よろしく水垢離の見得、又岩に這ひ上り、
文次　南無大聖不動明王、何卒主人の一命に、恙なきやう、守らせ給へ〳〵。
ト惣身冷えて齒の根合はぬいろ〳〵のこなしあつて見得、此時熊藏息を吹返し、
熊藏　うぬ、覺悟。

ト切つて掛るを、ちよつと立廻つて、文次きつとなり、

文次　いつぞや三味線堀で我が姉の百兩を盜んだは、熊藏おのれが仕業に違えあるめえ。サア眞直に白狀しろ。

熊藏　イヤ知らねえ、覺えはねえ。

文次　覺えねえと言ひ張りやあ、此の瀧壺へ押込んで、瀧に打たして殺してしまふぞ。

ト瀧壺へつき込む。

熊藏　あゝ苦しい／＼、云ふから堪忍してくれ／＼。

文次　さあ云ふか、どうだ／＼。

ト水を飲ませる。熊藏苦しき思入あつて、

熊藏　あゝ苦しい、云つて聞かせる。（ト苦しき思入あつて、）そりやあ全く三味線堀で、百兩取つたのもおれが業、又今日爰へつけて來たも、やつぱりお前の持つて居る、其の百兩をせしめる氣で、大勢頼んで附けて來たのだ、サア、かう白狀するからは、此の水ぜめは助けてくれ。

ト此内耳の聞える思入あつて、

文次　ヤヽ手前の詞が聞えるからは、そんなら耳が聞えて來たか。これも偏に不動の御利益、（ト瀧の上

〈手を合せ、〉エ、有難え。

ト此時上手より、以前の清太、幸次出來り、

清太　親方、瀧へかゝんなすつたか、
幸次　よく無事で居てくれたなア。
文次　ムヽ、今迄一生懸命に、祈念をばして居たのだ。（ト兩人びつくりして、）
清太　ヤヽ、そんならお前は遠い耳が。
幸次　利益を受けて聞えて來たか。
文次　逆せ上つて聞えぬ耳も、利益を受けて聞えて來た。
清太　それぢやあ不動尊靈の、
幸次　御利益にて聞えるとか。
文次　してそち達に頼んだる、林之助の行方は知れたか。
清太　サア大川筋を搜しても、姿は見えぬが兩國に。
幸次　身投があつたと人の噂。
清太　して又厚木の良作樣は。

文次　是とても生死の程が、今以て分らねえ。
清太　先づそれ迄は此の熊藏。
幸次　幸ひ是なる七五三繩にて、
文次　くゝつて上へ。
兩人　差出さう。（ト清太熊藏を押へ付ける、文次思入あつて、）
文次　それに付けても、お二方や、林之助殿の生死の程も、今以て知れざれば。
清太　一心不亂に、
幸次　願ふは大山、
ト此時熊藏振切るを、文次附廻して膝に引敷き。
三人　不動明王。
ト よろしく、文次は七五三繩を持ち、片手に熊藏の刀を持ちて劍になし、不動の見得、清太は納めの木太刀、幸次は上手の護摩札を持ち、三人よき見得にて、
ひやうし　幕

大詰

東海道馬入川の場
藤澤宿本陣の場

〔役名――不動文次、坪内慶十郎、萩原良作、倉澤矢一郎、手代林之助、宿屋亭主、雲助、諸士、中間熊藏、良作妻お柳、坪内娘小澤、母お島、文次妹お瀧、淸太女房お綱等〕

（東海道馬入川の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う馬入川の遠見、左右樹木の張物にて見切り、眞中東海道馬入川といふ榜示杭、蛇籠丸石など澤山あり、正面よき所に誂への月の出入り、爰に前幕の○△□◎雲助四人、菰包みの長持をかつぎ、休んで居る見得、馬士唄にて幕明く。

○　オイ棒組、此の長持は何處迄持つて行くのだか、もう日が暮れて擔がれやしねえぜ。

△　擔がれねえといつて仕方がねえ、問屋場の御用だから、たとひ日が暮れても持つて行かにやならねえ。

□　さうよ、しかし日が暮れても今夜は月夜のことだから、夜通しにでも坪内迄、擔いで行くことにしよう。

◎　そりやこちとら等の事だから、夜る夜中でも構はねえが、此間の一件は詰らねえ目にあつたな。

□　ありやお手前が悪いのだ、元の友達の頼みだと、旨え話をしたゆゑに。

△　あたまから受合つて、文次とやらを打殺し、百兩の金をせしめようと待受けたのはよかつたが、

□　向うに助人が二人出來て、さんざんな目にあつてしまひ、今だに體の骨がうづかア。

◎　おれも一生懸命に、文次の野郎に掛つたが、なかなか強い野郎ゆゑ、あべこべになぐられて、たうとう二人に追ひまくられ、

○　イヤ馬鹿々々しい目に。

三人　あつたなア。（ト皆々煙草を呑みながら、）

○　ときに此の荷物は、大分重いが、いつたいどこの荷物だらう。

△　是は江戸の駿河臺に、坪內慶十郎樣といふ旗本がある。そこの屋敷の御荷物だ。

□　ムヽ、それで坪內の御陣屋迄持つて行くのか。

◎　さうか、それぢやあ早く出かけよう。

三人　ヤレヤレ。

ト四人は雲助唄を唄ひ、荷をかつぎ、驛路入りの鳴物にて上手へはひる。後唄になり、花道より萩原良作、妻お柳そぼろなる旅がけの拵へにて、良作杖にすがり出來り、花道にて、

良作　思ひまはせばわれわれは、いかなる前世の報いやら、數代傳はる萩原家の、家名に疵を付けし上

見るも哀れな此のなりにて、先祖の廟所へ辿るといふも。

お柳　誠にはかない此の身の上、文次殿も身に引受け、金の調達いたしくれんと、所々方々駈けあるき工面をなせど出來ぬは金。

良作　坂倉屋方へ濟まざれば、覺悟きはめて故鄕なる、先祖の墓へ參りし上。

お柳　申譯なく、共々に、

良作　命を捨てゝ、

兩人　お詫をなさん。

ト又唄になり、兩人舞臺へ來て、河原の手ごろの石に腰をかけ、

良作　お柳、そなたは足は痛みはせぬか、わしは病後の疲れにて、大分足がなやめて參つた。

お柳　あなたはさぞやお體が、勞れたことでござりませう、私も女子の足弱にて今日で三日の此道中。

良作　やう／＼故鄕の村里へ、近付いては來たなれど。

お柳　以前と違ひ今の身の上、モシ村人にでも逢うたれば、恥をかゝねばならぬ仕儀。

良作　それに付けても林之助も、定めて江戸で身を投げて死んだことゝ思はるゝ。

お柳　まことにあはれな夫婦の身の上、さうしてこれからあなたには、直にお寺を志して、お出でな

さるのでござりますか。

良作　イヤモウ、そなたとても此わしに、縁でがな連れ添うて、此厚木迄戻りしが、今となつては此の良作、たとひ故郷へ戻ればとて、田地田畑とてもなし、寄り所なき身の上なれば、死ぬと覺悟は極めしかど、何とかして其の以前、心安き人に頼み少しの無心もして見たし、まア其心にて參るがよい。

お柳　イエ／＼なまじひ人に云ひ出して、恥をかくも本意でなし、少しも早うそれよりは、御先祖樣の菩提所にて、夫婦命を捨てませう。

良作　お前がさういふ料簡なら、わしも何しに恥をかきに、故郷へ歸つて來はせぬゆゑ、少しも早う支度しや。

お柳　アイ／＼、さうしませうわいなア。

ト又唄になり、花道より林之助、頰冠り着流しにて出來り、直に舞臺へ來てすかし見て、

林之　それにお出でなされまするは、もしや兄上御夫婦ではござりませぬか。

ト此聲を聞き、良作思入あつて、

良作　おゝ、さういふ聲は弟林之助か、正しく死んだと思ひしに。

お柳　よくまア無事でござんしたなあ。

林之　お〻兄上、姉様、よう〻まアあなたも御無事にて。

良作　そちも無事にて。

お柳　目出度いわいなあ。（ト合方きつぱりとなり、）

林之　サア私も段々と考へて見まするると、御二人様を始めとしてつながる妹の文次殿迄、苦勞をかけし其上に姉様にはお命迄、捨て云譯なされうと、二度迄お歎きかけしゆゑ、所詮生きて居りましては、申譯なき體ゆゑ、文次の内へ行き、書置迄して死にませうと、覺悟をしたがお二人へもだまつて死ねば不孝ゆゑ、わざ〳〵阿部川町のお内迄、申譯に參りし所、早御夫婦には故鄕の、厚木へお越しと聞きしゆゑ、御後を慕ひて參りました。

良作　そちも定めし身でも投げ、死んだに違ひはあるまいと、思へば最早文次殿の、金が出來ても詮ない事、又日限が切れしとて、文次殿より便りもなし、これも調達出來ぬと察し、いつそ夫婦は故鄕なる厚木の土にならんと思ひ、爰迄連れ立ち參りしぞ。

お柳　今も今とて此所で、所詮生きても甲斐なきゆゑ、夫婦諸共菩提所にて、死んで言譯致しませうと取急ぎし其所へ。

良作　參り合して再び父、顏を見るのは嬉しいが、所詮存へ知り人に、顏でももしや見られては、恥の上ぬりせねばならず、それゆゑわしは死ぬ覺悟。
林之　そんなら兄上御夫婦にも、私ゆゑに命まで、お捨てなさるお覺悟か。
良作　おゝさ、先祖の墓へ申譯して、自害いたす所存なるぞ。
林之　それも何ゆゑ皆私から起りし事、それゆゑに此の林之助が、一人命を捨てますれば、それで申譯は立つ道理、是から直に身を投げて、主人へ申譯いたしますれば、せめて兄上御夫婦には、死ぬのをお止まり下さりませ。
良作　いや〳〵、それはさうでもあらうなれど、一旦引受け返濟仕ようと、受合つた上其金の調はぬはわしの罪、それゆゑわしも死にまする。
お柳　二人共に死ぬといふも、元の起りは此姉が、刀を賣つた其金を、三味線堀にて取られしゆゑ、それゆゑわしも死にまする。
林之　イエ〳〵それは私が、主人の金を遣ひしゆゑ。
良作　それもみんな此兄の、貧苦を貢ぐ爲なれば。
お柳　何でそちをばたゞ一人、死なして事が濟まうかいなう。

良作　云ひ爭つても無益のくり言、時刻延びれば恥の恥。

お柳　共に此身も死にますれば、そちは後に存へて追善供養を頼みまする。

林之　何で御二人に御命をば。

良作　イヤ〳〵捨てねば義理が立たぬ。

お柳　少しも早く良作殿。

林之　それでは所詮お止まりはござりませぬか、あゝ是も何かの罪障ならん、では私も御菩提所へ。

良作　一緒に參る心なら、少しも早う共々に。

お柳　是より連れだち、行きませうわいなう。

ト三人覺悟のこなしにて、しを〳〵と立上る。爰へ早い合方にて、花道より以前の文次出來り、良作につきあたる。

良作　エヽ、何をいたすのぢや。(ト文次と顏見合せ、)

文次　や、さういふあなたは、萩原樣か。

柳林　正しくお前は文次殿。

文次　おゝ林之助さんも御一緒なるか、あゝ嬉しや、御無事でござりましたか。(ト悦ぶ思入あつて、)是

も偏に大山の、不動尊の皆御利益、えゝ有難うござりまする。

ト手を合せ拜む、良作不審のこなしにて、

良作　それにしても文次殿には、何用あつて此所へ、夜中に尋ね參られしぞ。

文次　あなた方御夫婦に御目に掛り度く、わざ〳〵とお尋ねに參りました。

良作　なに、此の良作に逢ひたいとは。

文次　御悦びなされませ、金が首尾よく調ひました。

良作　すりや、あの、金が。

林之
お柳　調ひしとか。(ト是にて文次懷より、百兩包みを出し、)

文次　卽ち是に金百兩、御受取り下さりませ。(ト良作の前へ差置く。)

良作　おゝ、こりや百兩、夢ではないか。

お柳　さうして此の百兩は、

林之　どうして手に。

三人　入りましたぞ。(ト是より合方になり、)

文次　さあ、お賴みの金子をば、日限り通りに調へんと、所々方々と駈けあるけど、いつかな貸してく

てはなくいかゞはせんと思ふ内、追々日限おくれて來て、郷兵衛殿へ約束の、日限りもせつぱとなりしゆゑ、どうにかして調へんと、だんく工風を廻らす内、ふと胸に浮びましたは、去年の秋お出入り屋敷の、坪内樣の御供して、神奈川泊りの其晩に、お姫樣と道ならぬ、不義した事を思ひ出し、それを種にそでないが、金の無心を云ひかけて、百兩かりるつもりなりしを、殿には不義は助けられぬと、既にお手討になる所を、背中へ彫つた不動樣の、お蔭であやふい命を助り、却てそれが縁となり、一部始終を申上げたら、萩原家は存じ居れば、其難儀は氣の毒なりとたうとう百兩お惠み下され、嬉し喜び取つて返せば早あなたには御内を明け、故鄕の厚木へ御夫婦して、お出かけなされたとのお手紙が、阿部川町迄屆きしとの事、又林之助さんは私の留守へ書置をして死に行くと、お出なされし其後にて、皆食ひ違ひしそれゆゑに、せめてあなたの御後を追ひかけ、御二人樣のお命をば取りとめようと參りし所、惡者共に出會し、時刻おくれて大山の、不動尊へ水垢離をとり、あなたにお目に掛らんと、願がけして捜しに來ました。

良作　ムヽ、それでは駿河臺の坪内殿から、金の惠みを受けたるとか、元坪内家は其の以前、地面つゞきの隣家ゆゑ、其の誼にて此金も、下されしに相違ない。

お柳　何れにしても今こゝで、文次殿に出逢ふといふは。

林之　今宵につゞまる三人の命、是皆不動明王の、
文次　計らず御目に掛りしも、
良作　御利益にて有之しか。
三人　ちえゝ忝い。
　　ト三人手を合せ拜むことよろしく、文次思入あつて、
文次　それにしても殘念なは、三味線堀で刀の代金、百兩盜んだ熊藏を、大山の瀧壺へ、縛り上げておいたる所、繩をぬけて逃げしゆゑ、清太幸次が後追ひかけ、つかまへに行きしゆゑ、是も大方捉まへませう。
良作　それは何より重疊なるが、まだ其上に此の金が、そなたの蔭にて手に入れば、最早死ぬには及ばぬ三人。
お柳　せめて是より坪内樣へ。
林之　屆かぬ乍らお禮を申さう。
文次　イヤ其のお禮は丁度幸ひ、坪内樣は巡檢にて、知行へござるといふ事にて、慥今夜は藤澤泊り。
良作　おゝ、それぞ幸ひ遠からぬ、

お柳　藤澤宿迄直に行き、

林之　御目に掛つて、

三人　御禮を申さん。（ト爰へ雲助○伺ひ出て、）

○　其百兩を。

ト掛るを文次附廻し、

文次　少しも早く、（ト雲助を返すを、道具替りの知せ、）お出でなさいまし。

ト箱根八里の驛路入にて、此の道具廻る。

（藤澤宿本陣の場）——本舞臺一面の平舞臺、向う上手床の間、續いて違ひ棚、下手四枚の襖、上下折廻し、襖の出這入り、薄縁を敷詰め、總て藤澤宿本陣座敷の體、爰に褥を敷き、此上に坪内慶十郎、袴なりにて住ひ、脇息刀掛等あり、下手に倉澤矢一郎袴なり、此後ろに侍三人矢張袴なりにて住ひよろしく琴唄の合方にて、此の道具留る。

矢一　御前樣には旅中の事ゆゑ、嘸お勞れにござりませうな。

○　然し乍ら常の如く、御機嫌もうるはしく。

△　臣等身にとりいかばかりか、
□　恐悦申上げ奉りまする。
慶十　皆の者も嘸終日の歩行にて、草臥しことならん、今宵はゆる／＼休息いたせ。
矢一　ハツ、有難き其のお詞、
○　一同御禮、
皆々　申上げ奉りまする。（ト時計鳴るゆゑ、慶十郎思入あつて、）
慶十　アノ時計は、何時なるぞ。
矢一　あれは最早五ツ時にござりませう。
慶十　大分遲う相成つたの。
矢一　ハツ、當節諸侯の方々參勤交替の其爲に、戸塚宿が混雜いたし、生憎本陣が取込みますれば、無理に一宿打越しまして、此の藤澤へ參りしなれば、御着きが遲れてござりまする。
○　されども、いまだ五つにござれば。
△　まだ御寢なる譯にも參らず。
□　ゆる／＼御相手仕れば、一盞御催しこれあつては、

三人　如何にござりませうや。

慶十　おゝ予も餘程退屈ぢや、今夜は旅中のつれ〴〵に、無禮講にて一酌いたさん、矢一郎申付けてよからう。

矢一　ハツ、江戸よりは十二里なれど、お勞れも左程に見えず、いとおすこやかにて渡らせらるれば、是より御酒宴もよろしうござりませう。（ト三人の侍に向ひ、）おの〳〵宿へ申附け、御用意を賴みますろ。

○　イヤ、御酒と聞いては目のなき我々。

△　早速宿へ申付け用意いたさせるでござりませう。

□　暫時御許し下されませう。

ト侍三人は挨拶して下手へはひろ。後慶十郎思入あつて、

慶十　何と矢一郎、此度上へ申上げ、厚木に於て歿したまひし、亡父の年回に相當なすゆゑ、國許墓參を願ひし所、上にも殊勝に聞し召れ、御暇たまはりし事ゆゑに、彼の地に於て佛事供養を營まんと參りしが、何事も手都合よく、斯樣なよろこばしい儀はないわえ。

矢一　仰せの如く御先祖の御墓參に、天氣都合といひ、道中も別段さはりもござりませず、今日は戸塚

泊りと、拙者に於ては御宿割をいたしましてはござりまするが、大名衆の泊りにて、戸塚の本陣に差障りあり、此の藤澤へお越しになりしは、却つて宿も陽氣にて、もつけの幸ひにござりました。

慶十　おゝ、何事もよい都合ぢやの。

矢一　ハツ、恐入りましてござります。

ト此時奥より、以前の三人、酒肴を運ぶ事あつて、下手へ來り。

○　ハツ、御酒肴の用意、申付けまして、

△　是へ持參、

□　いたしました。（ト並べる、慶十郎見て。）

慶十　おゝ大儀々々。（ト杯を取り。）サヽ、一ツつぎやれく。

ト侍酌をなし、慶十郎飲んで矢一郎にさす、侍又酌をする。

サ、順に皆の者へまはして遣はせ。

三人　ハヽ、有難く存じ奉ります。

ト辭儀をなす、此の時下手襖を明け、宿屋の亭主袴羽織にて出來り、下手に居て、

亭主　ハヽ、申上げまする。

三人　何用ぢやの。

亭主　ハヽ、只今見世へ以前厚木の郷士にて萩原良作と申す仁が、内室をつれ、供の町人諸共に、御前へ御目通りの上、御禮を申上げたいと、參りましてござりまする。

慶十　扨は良作夫婦の者、文次郎同道にて參りしか、苦しうない是れへ通せ。

矢一　それ、お詞ぢや。

三人　通してよからう。

亭主　ハヽ、畏りましてござりまする。（ト合方にて亭主下手へはひる。）

矢一　成程此間文次へお惠み有之し、御禮の爲に參りしならん。

慶十　予も心配のいたしをつたが、よくぞ尋ね參つてくれた。

ト合方にて、下手より良作、お柳、林之助、文次出て平伏する。慶十郎見て、

おゝ珍らしや良作殿、サヽ、もそつと是へ／＼。

ト良作平伏して、

良作　ハヽ、久々お目通り仕りませねど、いつに變らぬ御尊顏を拜し、恐悦申上げまする。

慶十　イヤ、其の挨拶は互ひの事、まづ以て貴殿にも、御健勝にて重疊々々。シテこれへ伴はれしはいづくの御仁ぢやの。
良作　ハヽ、恐れ乍ら是れなるは、私の愚妻、又次ぎは拙者の弟林之助と申す者。
　　ト文次下座に頭を下げ、
文次　私は先達てお惠み受けし、文次めにござりまする。（ト矢一郎思入あつて、）
矢一　おゝ、そちは文次、又これなる御婦人は、いつぞや三味線堀にて介抱せし。
お柳　ハイ、御恩になりし、良作が妻にござりまする。
慶十　皆打揃うて參りしは、いかゞの事にて參りしな。
良作　今日是へ推參なせしは、是なる文次郎より承りし、此程の深き御恩の御禮の爲參りましたが、殿には以前の誼を思召し、なくて叶はぬ百兩金、私へ下されしは、重々厚き御惠み、それにて家內一同が、助かりましてござりまする。
お柳　それゆゑ既に兄弟三人。
林之　命を捨てる所をば、
文次　其の金子にて助かりしは。

良作　重々厚き御厚恩。

皆々　有難うござりまする。（ト四人一緒に禮を言ふ、慶十郎こなしあつて、）

慶十　イヤ〱見ず知らずの貴殿ならず、以前は領地の隣同士、其の誼にて惠みし金子、決して禮には及び申さぬ。

矢一　それに付けて不思議なは、先達御手に入りし、不動國行の一腰は、萩原氏の重寶にて、先祖傳來の品なるよし。

慶十　それを餘儀なく賣拂ひし、金子を途中で奪はれて、つひに兄弟三人が難儀に落入り苦しむよし、いかにも氣の毒千萬なれど、旅中ゆゑに致し方なし、それゆゑいかゞな物なれど、一旦求めし國行は、今日貴殿へ進上申さん。

良作　スリヤ御懇望遊ばされ、お求めありし國行をば。

慶十　いかにも今日お戻し申さん。ソレ、矢一郎。

ト是にて矢一郎床の間より、刀箱を持來り、國行の刀を出し渡す。

良作　イヤ〱、折角、御所望ありて、おもとめなされし其一腰、頂戴なしては相濟みません。それは平にお納め下され。（ト辭退をなす。）

慶十　イヤ、斯る珍器の國行をば、手放す貴殿の心の内、如何にもお察し申上げれば、平にお納め下さるべし。

良作　重々厚き御惠み、

お柳　何とも御禮の申上げやうもなく、

林之　後の世迄も心に忘れず。

文次　御恩は忘脚いたしませぬ。

ト皆々有難涙にくれるこなし、慶十郎思入あつて、

慶十　イヤそれに付けても文次郎が、故主を思ふ忠義の一心、感心のいたせしゆゑ、そちに遣はす物がある、聞及べば其方は、いまだ獨身と申す事、妻を一人世話いたせば、此の慶十郎が媒介にて、何とめとりてはくれまいか。

文次　エヽ、そりや何とおつしやりまする、其樣な勿體ない事、駕籠屋風情に、お受はいたし兼ねまする。

慶十　イヤ〳〵、辭退いたすに及ばぬ。(ト矢一郎に向ひ、)早く嫁女を、つれて參れ。

矢一　ハヽ。

ト矢一郎下手へはひり、直に前幕のお綱小澤を連れて出來り、矢一郎思入あつて、

ハ、、召連れましてござりまする。（ト是れにて文次見て、）

文次　ヤ、ヤ、コリヤお姫樣を。（ト云ふを冠せて、）

慶十　イヤ、我妹は一昨日、自殺なして相果てたり、今其方へ媒介なすは、是なる矢一郎が妹小澤。

矢一　かねて御身を執心の妹、何卒妻に持つて下され。（トお綱こなしあつて、）

つな　モシ親方、誰に憚る事はござんせぬ、よろしくお受けをなさいまし。

文次　それぢやと申して。

小澤　不束なれど、文次殿。（トはづかしきこなし、良作思入あつて、）

良作　ソリヤ御前にはどこ迄も、文次の忠義を愛でたまひ。

お柳　噂に聞きし其のお方を。

慶十　いかにも、家臣矢一郎が、義理ある中の其の妹、こりや文次郎、貰ひくれるか。

文次　冥加に餘る其のお詞、何の違背いたしませう。お受けいたすでござりまする。

トこれにて小澤うれしきこなし。

慶十　今は何をか包み申さん、義理ある中の妹が願ひ、どうぞ叶へて遣はさんと、思へど武家の掟あれ

ば、わざと小澤は自害せし體にもてなし命を助け、又其方は不義者の、成敗いたすと申せども、背中に彫りし不動尊は、日頃それがし存じ居れば、わざと御影に恐れをなし、命を助け遣はせしも、是皆浮世の義理なるぞ、又其方が此の厚木へ參る事も聞いたれば、途中に於て遣はさんと、わざ〳〵小澤は召しつれしぞ。（ト これを聞き、文次有難きこなしあつて、）

文次　すりやそれゆゑの御旅行とな、何から何迄有難う存じまする。

慶十　すれと申すも妹には、不義せしとは申し乍ら、仔細あつていたせし事、又一つには江戸表にて、其方へ遣はしては上へ恐れ、それゆゑ他聞を憚りて、途中に於ての此縁談。

矢一　それゆゑ上へは御墓參を願はれ、わざ〳〵爰迄お出張りありしは、義理にしがらむ御計ひ。

小澤　何から何迄兄上樣の、お情こもる御扱ひ、決してあだには思ひませぬ。

つな　是れとても、御實母の後室樣への一つの御義理。

お柳　萬事に屆きし此場の納まり。

林之　恐入りましてござりまする。

ト 合方になり、下手より以前のお鳥、お瀧出來り、下手へ平伏する、文次見て、

文次　ヤ、コリヤお袋に妹お瀧、どうして爰へは。

お鳥　お前が厚木へ來たと聞き、直に後を追駈けて來たところ、道にて聞けば又候や、御旅宿へ來たと聞き、直に爰迄來ましたわいの。
文次　さうしてお前は、目が見えるか。
お瀧　兄さん、私も口が利けます。
文次　ムヽ、そりやまアどうして。
お鳥　サア、聞いて下され。昨夜の夢に不動尊の劒を呑んで二人とも、血を吐いたと思つたら、それからわしの目が見えて。
お瀧　私も口が利ける樣になりましてござりまする。
文次　エヽ有難い不動の御利益。
林之　夢見たよな心地して。
お柳　嬉し涙がこぼれるわいなう。（ト良作思入あつて、）
良作　それに就いても目出度ついでに、お瀧殿は重縁なれば、林之助にめあはせん。
林之　それは私も望む所。
お瀧　私も嬉しうござりますわいなア。

ト恥しきこなし、是にて皆々こなしあつて、

慶十　萬事是にて事調ひ。

矢一　萩原一家一族も、

文次　事なく納まる御仁情、

皆々　えゝ有難うござりまする。（ト此時下手より、熊藏出來り）

熊藏　始終はお次で聞きました、大山樣の御利益は、恐ろしい者と氣が附いて、すつかり心を改めました、どうぞ御慈悲に是迄の、罪は許して下さりませ。（ト改心のこなし、文次こなしあつて）

文次　おのれのお蔭で主從三人、こんな難儀をしたけれど、

良作　坪内殿のお情にて、

お柳　其の百兩も手に入れば、

林之　罪を憎んで人を憎まず、

慶十　成敗なすべき奴なれど、萩原氏も勘辨なせば、汝が命は助けてくれるぞ。

熊藏　エヽ有難うござりまする。（ト矢一郎こなしあつて）

矢一　かゝる罪ある者迄も、

小澤　お情ゆゑに命助かり、

お島　親は目が見え、

お瀧　子は口が利け、

文次　斯く迄無事に納まりしも、

慶十　不動尊の正しく御加護、あら有難き、

ト手を合せ、禮拜なすを、木の頭。

皆々　御利益ぢやなア。

ト皆々引張りよろしく、合方にて、

ひやうし　幕

不動文次（終り）

黄金花咲陸奥山
　佐藤が館に基治が
　　未然を察する老功の諫言
主從の契約に
　車の兩輪兄弟の發足
白銀降積富士嶽
浮島が原に賴朝が
　平家を誅する義兵の上洛
義經の參着に
　鳥の羽翼兄弟の對面

[illegible]

「會稽源氏雪白旗」は明治二十一年一月、作者七十一歲の時、市村座に上演された。作者としてはこの作は活歷劇の名殘とも稱すべき時代狂言であつた。「中幕の會稽源氏は賴朝義經の對面にて、例の團十郞の古物調べで殆ど五月人形を見るが如しとの半疊もありたり」（年代記）とある程で、極端に故實調べをやつて、扮裝に凝り、費用を厭はず演出したことが明らかにされてゐる。當時の劇評によると、「福助（現中村歌右衞門）の義經大出來にて、附髭は無き方よしとの說もあれど最早子供ではなし、義經に髭の有るは錦繪でお馴染差支なし。團十郞の佐藤庄司役、義經の爲に後來を誡むる忠言の所例の辨舌一手捌きよかつた／＼、後浮島ヶ原兄弟對面の賴朝人品骨柄其人を見るが如し、然し腮の髭は無くもがななり。此場は唯兄弟對面するといふばかりで、見せる處もなく、見物いさゝか氣拔がしたり。」

書卸しの時の役割は市川團十郞（佐藤庄司基治、源賴朝）、中村福助（源九郞義經）、片岡我童（佐藤四郞兵衞忠信）、市川權十郞（佐藤三郞兵衞繼信）、中村芝翫（武藏坊辨慶、北條時政）、岩井松之助（繼信妻淺香）、市川壽美藏（庄司の奧方小澤）、嵐和三郞（忠信の妻麻生）、中村傳五郞（伊勢三郞義盛）中村歌女之丞（乳母澤野）坂東彥十郞（常陸坊海尊）、中村鶴五郞（堀近舍）等。

挿繪にしたのは稿下當時の繪番附である。此扉の題字は作者の筆ではない。

大正十五年七月下旬　　校訂者

中幕の口 佐藤庄司意見の場
中幕の奥 浮嶋ヶ原對面の場

會稽源氏雪白旗（二幕）

中幕口

佐藤繼信館の場
同庄司諫言の場

〔役名――佐藤庄司基治、武藏坊辨慶、源義經、佐藤三郎繼信、同四郎忠信、常陸坊海尊、伊勢三郎義盛、郎黨矢當太。庄司妻戸澤、繼信妻淺香、忠信妻麻生、乳母澤野、侍女、繼信一子鶴若等。〕

（丸山館庭先の場）――本舞臺四間中足の二重八枚飾り、本庇本椽附、眞中に厚板の踏段、二重の正面古代更紗形の襖、上の方手摺附の廊下、正面板羽目、廊下の留り、開き戸の出はひり、下の方網代の塀、此前に樹木よろしく、舞臺前上の方に土手板、これに的を建てあり、總て奥州信夫郡丸山の館庭先の場、爰に鶴若袴なりにて弓矢を持ち立掛り、郎黨矢當太額へ瘤の出來た鬘、袴なりにて天窓を押へ居る。下げ髮の侍女一、二、三、四、五、六の六人立かゝり居る。この見得白囃子にて幕明く。

矢當　あゝ痛やの〳〵、頭ががん〳〵割れさうぢや。

鶴若　だいよ、粗相ぢや、許してくれ。

一　若さまがあのやうに、お詫びをなされておいでなれば、

二　お弓のお稽古の矢取りをして、つむりへ瘤の出來たくらゐは、

三　弓矢のお家に仕へれば、有りうちの事とあきらめて、

四　仰山らしうそのやうに、痛いなどゝは言はぬもの、

五　ぜんたいお前のおつむりは、人並勝れてお出額ゆゑ、

六　覘ふお的の邪魔になり、つひ當つたに違ひない。

矢當　若さまが粗相だとお詫びなされば我慢もなるが、人の痛さを察しもなく、お出額などゝ言はれては、此の意趣返しをせねばならぬ。

一　どうして意趣を、

六人　返しなさんす。

矢當　若さまのお弓を借用して、おかめの面を見るやうな、みんなの額へ一矢づゝ射當てるから、さう思はつしやい。

鶴若　そのやうな事はせぬがよい。

一　お出額どのがおこりました。

二　皆さん、御油斷なされますな。

三　ならば手柄に矢當太どの。

四　額へ射當てゝ見なさんせ。

矢當　おゝ、當てなくつてどうするものか。

ト鶴若の持ちし弓を引取り、侍女六人を覗ふ、女はあちこちと逃げ廻る、爰へ上手廊下口より、奥方戸澤更けたるこしらへ、裲襠なりにて出來り、

戸澤　騷がしい、鎭まらぬか。

〽古へをしのぶの昔今こゝに、妻の戸澤が立ち出づれば。

トきつといふ、侍女六人びつくりして上手へ來り下に居る。

矢當　奥樣のお出でがなくば、此儘捨てゝはおかぬものを、えゝ忌々しい。

ト控へる。戸澤よろしく住ひ、

戸澤　奥には稀なるお客樣の御入來あるに、女子供はお持成はしやらいで、庭前へ出てどうしたものぢや、一統奥へ行き居らぬか。

侍女六人　はッ。(ト平舞臺の上手へはひる、鶴若前へ出ゝ、)

鶴若 ばゞさま、わしが粗相にて矢當太の額口へ痛み所をこしらへたれば、どうぞ詫びて下さりませ。

矢當 いえ、これしきの痛み所位で、お詫びには及びませぬ。

戸澤 扨は外れ矢が當りしか、見れば額が腫れて居る。そちが粗相とあるなれば、母にいうて矢當太へ手當をして遣すがよい。

鶴若 矢當太、一緒に參るがよい。

矢當 これは額の痛み所より、却つて痛み入りまする。（ト兩人二重の下手へはひる。跡合方きつぱりとなり、）

戸澤 御舍兄佐殿、鎌倉にて義兵の旗を揚げたまふと聞し召されて義經公にも、是非に御出馬なされんと、杉目の館へお越しにて夫を召しての御評定、老年故に繼信か忠信を御出馬のお供に立てんと御主君へ、お願ひあるべき筈なるを、二人の子供を差し置いて一世の晴れに御出陣のお供に立たんと願はれしは、深き御思慮のあることか、その意を得ざることではある。

トこれより床の淨瑠璃になり、

〽何か心に解け兼ぬる、思ひは同じおひ嫁が、襖押明け立ち出でゝ。

ト奥より淺香、麻生、下髪襠なりにて出で、戸澤の下手へよろしく手をつかへ、

淺香 母上さまへ折入つて、

麻生　お願ひ申し、

兩人　上げまする。

〽手をつかゆれば、こなたを見返り、

戸澤　誰かと思へば二人の嫁、改まつて此母へ願ひとは、そりや何事。（ト合方になり、）

淺香　外の事でもござりませぬが、此度義經公鎌倉表へ御發向、それに附けてわが夫の繼信どのを御供にお願ひあるかと思ひの外、御老體の舅御樣、自身とお供に加はらんとお願ひありし上からは、所詮二人の夫達は、此の山里の御留守居に、お殘し遊ばす御心と、推量してのこの御願ひ。

麻生　御老體の父上樣を軍のお供にお立たせ申し、壯年の身のお二人が跡に殘つてをめ〳〵と、何で此儘居られませう。願ひに願ひし源家の御運開く時節に逢ひながら、今このお供に漏れましては、お二人の身は一生埋れ木。

淺香　互ひの夫の本意なさを妻の身として見て居られず、何卒舅御樣の御名代に、二人の夫が義經公の今度のお供に立たれまするやう、母上樣のお情にて、舅御樣へお執成しをお願ひ申し、

兩人　上げまする。

戸澤　おゝそれ故の願ひなるか、其事はこの母も庄司殿の心の内推し兼ねて居るところ、嫁の身ではこ

りや尤も、さうしてわらはへ此の願ひは、繼信忠信兩人がそち達二人へ言ひ附けしか。

淺香　いえ／＼左樣ではござりませぬ、忠信どのとわが夫がお話しあるを承はれば、父上樣へ直々こたびのお供をお願ひ申し、叶はぬ時は二人とも、人に逢ふのも面伏せ、開かぬ武運とあきらめて遁世あるとの御覺悟。

麻生　天晴勇士の御身にて世をはかなみしお心が、思ひやる程おいたはしく、姉上さまと言ひ合せ、さし出ましたる事ながら、互ひの夫の心根を、思ひ餘りし此のお願ひ。

戸澤　むゝ、すりや兩人は此度の、お供の列に加はらねば、出家を遂ぐる心なるとか。

淺香　さあ、それと知つては女房が、どう餘所に見て居られませう、大事の夫が此儘に世に埋もるゝ身となるか、又は武名を顯はすかは、舅御樣のお心一つ。

麻生　どうぞあなたのお執成しにて、二人の夫が武士道を立てさせてたべ、

兩人　母上さま。

〽叶へてたべとあひ嫁が、切なる願ひ母親は、心の内を察し遣り。

戸澤　流石は繼信忠信が妻と呼ばるゝ身ほどあつて、飽きも飽かれもせぬ仲を思ひ切つての此の願ひ、それでこそまことの夫婦、母も感心しましたわいなう。

〽褒むる詞はあひ嫁が、胸にこたゆる妹背の別れ、言はぬは言ふにいやまさる、弓矢の義理こそ切なけれ、折柄次の一間より繼信兄弟立出でゝ。

ト奥より繼信忠信好みの鬘、烏帽子小素袍一本差しにて出來る。

繼信　委細の様子はあれにて聞く、我々が心を察し、

忠信　兩人して母上へ、よくぞ願ひを上げたるぞ。

戸澤　おゝ二人も次に參り居りしか。

繼信　はゝ、此度父上の思召しにて、我々兩人御供に漏れたる事の情なく、押して願ひを上げんものと心を決し居つたる所。

忠信　二人の者が我々の心を汲取り母上への願ひ、襖越しにて承知せり。麻生出來した、それでこそ我が妻なり。

繼信　淺香もよくぞいたしたり、ほゝおゝ

〽出來したり頼もしゝと、悦ぶ詞こなたには、惜しき名殘りを押隱し。

淺香　女子の身にて差出でし、母上さまへのお願ひを、

麻生　お叱りもなう今のお詞、わらはが身に取り何やうか、

淺香　お嬉しう、

兩人　存じまする。

〽口には言へど此の年月、馴染重なし妹背中、今日を限りに戰場の生死知れざる憂き別れ、堪へぬ思ひはこなたにも、不便のものと兄弟が、深き情の恩愛も絆に引かれぬ勇士の魂、實に武士の鑑なり。（ト四人よろしくあつて、）

繼信　此上は母上には、妻と妻とが申し上げし、我々兄弟が身の願ひ、

忠信　お供の列に加はりまするやう、父上へのお執成し、

繼信　偏に願ひ、

兩人　上げ奉りまする。

戸澤　必ずともに氣遣ひしやるな、此度のお供をそち達へお讓りあるやう庄司殿へは、わらはが願うてやりませう。

繼信　すりや、父上へこの身の願ひを、

忠信　お執成し下さりまするか。

戸澤　後とも言はず今の間に、どれ、執成してやりませう。

健氣な願ひ母親も、背ひ立ちは立ちながら、嫁の心を案じ遣り、思ひを包む奥の間へ、しづ〳〵とこそ立つて行く、樣子窺ひ一間より、立出る伊勢と常陸坊、兄弟それと打見やり。

ト此内戸澤思入あつて、上手の廊下へはひる。跡へ奧より伊勢三郎好みの鬘、烏帽子素袍附太刀、常陸坊同じく烏帽子素袍にて出る、忠信繼信この體を見て、

繼信　こは混雜に取紛れ、

忠信　無禮の段、御免下さるべし。

常陸　いや其のお詫びには及ばぬこと、御兄弟の御心底測らず一間で承はり、

伊勢　あつぱれ勇士のお味方を得たる心地のいたされて、悅ばしく候ふなり。（ト宜しく住ふ、合方替つて）

繼信　お聞きとあれば改めて、事の次第は申さねど、何卒此度の御供に、

忠信　加はりますやう御主君へ、御兩所よりもお執成し、偏に願ひ、

兩人　奉つる。

常陸　仰せまでも候はず、流石は主君へ軍學の御師範ありし庄司殿の、御子息兄弟ほどあつて、此度の御出陣の御供に缺けるをお歎きあつて、御老年なる御親父に代つてお供に隨はんと、御神妙なるそのお願ひ。

伊勢　我々兩人庄司殿へお勸め申して我君へよしなに執成し仕れば、御兄弟にも御安堵あつて、是れにて吉左右お待ちなされい。

織信　すりや、御兩所より御主君へ、

忠信　お願ひなされて下さるとな。

常陸　先づ兎も角も御親父へ、御目に掛りて勸めし上、

伊勢　我々諸共御主君へ、右の次第を言上なさん。

織信　然らば何卒、

忠信　御前よしなに、

常陸　是れにて吉左右、

兩人　御待ち候へ。

〽知れし勝手に案内も、長き廊下を傳ひ行く。（ト兩人上手へはひる。）

〽跡見送りて、あひ嫁が、夫の側へ差寄つて、

ト此うち淺香、麻生夫を案じるこなしあつて、替つた合方になり、

淺香　わが夫へ伺ひまするが、明朝未明の御出馬では最早時刻も夕景ゆゑ、御主君にも此館へお泊りに

相成りまするや、又は杉目の御館へ一旦御歸館あらせられ、あれよりお立ちになりまするや、心得のためわれ〳〵も、伺ひ置きたう存じまする。

繼信　されば君の御都合次第、當家へ今宵御止宿あつて、是れより御出馬遊ばすか、杉目の館より御出馬あるか、其邊はまだ知れざれど、御用意とてもあらざれば、多分は一旦杉目の館へ御歸館あつてあれよりして、御出馬あるに相違ない。

〽言はれて二人は本意なき折柄、孫を引連れ乳母諸共に、姑が、けふを名殘りとあひ嫁の心を汲みてそつと出で。

ト奥より以前の戸澤鶴若の手を引き、跡より澤野の乳母下げ髪、好みのこしらへにて、抱子を抱き附添ひ出で

澤野　若さまには父君の、お側へお越し遊ばしませ、此和子さまは私がお抱き申して父君へ、お顏を御覽に入れまする。(トみな〳〵よろしく住ふ。)

忠信　母上には次の間へ、お出でになつて在せしか。

戸澤　海尊殿と義盛殿が請合うて下されしゆゑ、君のお供は叶うた同然、目度たう歸國をいたすまでも孫には親子一世の別れ、二人に名殘りがさせたさに是れへ連れて來ましたのぢや、母が頼みぢや

嫁達にも、ようあきらめの附くやうに、言ひ聞かして遣つてたも。

〽餘る情に姑が、千歳を祝ふ鶴若を父の側へと押遣れば子はさかしくも聞き知りて。

ト鶴若繼信の前へ行き、

鶴若　父上さまには叔父さまと、軍にお出で遊ばして、お手柄をなさるとやら、わしもお連れ下さりませ。

〽まだいわけなく願ふにぞ、罪なきものと打笑みて、

繼信　十五歳にもなり居らば、そちも初陣させてやるが、何を申すも未だ五歳、今十ヶ年も經たざれば戰場へは連れ難し、然し光陰に關守なく成長なすも早や夢の間、武藝學問出精なし、あつぱれ一個の武士といはるゝやうになりし上、戰場へ出て功名せよ、父が居ぬとてばゞ様に、甘へてわやくを言ふまいぞ、忠孝の道よく守り、父の便りを待つて居よ。

〽言ひ聞かすればおとなしく。

鶴若　それでは年が行きませぬゆゑ、軍には行かれませぬか、父上様のお歸りをお待ち申して居りますから、早う戻つて下さりませ。

繼信　功名手柄をなせし上、目出たう歸國をいたすであらう。

〽歸國といへど一命は、君へ捧ぐる御供と、思へば一世の憂き別れ、こなたに和子を抱き守る、乳母はおづ〳〵進み出で。（ト澤野前へ出で、）

澤野　恐れながら申し上げまする、鶴若さまにはお五ツゆゑ、お詞お交し遊ばしますれど、此の和子さまには御當歳ゆゑ、お詞交すこともならず、父君樣のお顏を見て、にこ〳〵笑うておいでの御樣子、御歸國までに安々と御成長を遊ばすやう、お守り申して居りますれば、御目出たうお手柄遊ばして、此和子さまをお樂しみに、御歸國なされて下さりませ。

忠信　母はかやうな年若なれど、そちがわが子も同樣に愛しくれゝば我も安堵ぢや、早うあちらへ連れて參れ。

澤野　何卒これなる和子さまを、抱いてお上げ下さりませ。

〽差附けられて是非なくも、是れが別れと抱き取れば、笑ふ小兒の愛らしく、撓む心を勵まして。（ト此うち忠信抱子を見て思入あつて、氣を替へ、）

忠信　いやにこ〳〵と笑ひ居るわ、父が目出度き出陣を祝してくれるかうい奴ぢや、これ、乳母に抱れて成人なし、父が歸國を待つて居れ、悦ばしいか、あはゝゝゝゝ。

〽愁ひを隱すそら笑ひ、二人の嫁は本意なさに、尋ねて見んと打案じ。

ト忠信は澤野へ抱子を返す、淺香麻生思入あつて。

淺香　姫君へ伺ひまするが、御主君樣には今宵のうち、杉目の館へ御歸館にて、あれより御出陣相成りますや。

麻生　又兄上やわが夫には御主君の御供して、今宵のうちに杉目まで、成らねば相成りませぬか。

戸澤　まだ其の沙汰は聞かざれど、相成るべくは兄弟は、今宵ゆる〳〵支度をさせて、明朝未明に此館より、發足させたく思ひまする。

淺香　どうぞ左樣に相成るやう、

麻生　お願ひ申し上げまする。

鶴若　父上お手柄なされませ。

繼信　はて、よう申した、うい奴ぢや。

忠信　鶴若あつぱれ出來し居つた。

〽勇み勇んで。

ト床の三重にて、よろしく此道具廻る。

（佐藤館奥殿の場）――本舞臺上手へ寄せて四間中足の二重、板葺きの本屋根廻り椽、眞中よき所に厚板の踏段、下の方あとへ下げて九尺の附屋臺、正面打抜き、此の後庭の遠見、ずつと下の方の留りひらきの出はひり、上手の二重置舞臺程の一段高き上段、これに本疊と見ゆる高麗椽の薄椽を敷き詰め、此正面古代極彩色の繪襖。上手椽側の留り、宮造りの袖にて見切り、軒口一面に釣格子あり、總て佐藤の館奥殿の體、二重の上手に義經烏帽子直垂にて敷物の上に住ひ、下手よき所に辨慶、坊主髮烏帽子素袍にて控へ、大杯にて酒を飲み居る、義經の前に折敷の干肴三方に土器など並べあり、上下に燈臺を照らし、幕明きの侍女六人、長柄の銚子にて酌をして居る、此見得賑やかなる合方、調べ、鳴物にて道具留る。

一　澤山召し上り下さりますれば、御主人のお悦び、

二　辨慶さまには今日の、お供の内で御大酒とやら、

三　どれ程御酒が上れまするか、

四　お酌をいたしたう存じますれば、

五　何獻にてもお重ね遊ばし、

六　澤山召し上り下さりませ。

辨慶　いや此辨慶は飲める酒を飲まぬと申して、詞を飾り遠慮いたすが大嫌ひ、此の大杯で引受け〳〵數獻を重ねて飲んだれば、さう強られては迷惑いたす。先づこゝらで納め申さう。

一　左樣なれば御氣根に、

二　召し上り下さりませ。

義經　こりや辨慶、汝は女子が嫌ひと申すが、かやうに侍女に酌を取らせ、數獻の杯を傾けし、心地の程はどうぢや〳〵。

辨慶　産れついて此の辨慶女は嫌ひに候へど、かやうな酒宴の席などにて酌を取らする役目には、しやち張つて居る男より、やは〳〵といたした女性の方がよい心地に覺えまする。

義經　よい心地がいたすとあれば、常に女子は嫌ひと言ひしは、汝の虚言でありつるか。

辨慶　いや虚言には候はねど、酒の酌には男子より女性の方が何となく、よい心地に覺えまする。

一　不束なる私共の爲、

二　所詮御意には入りませねど、

三　お酌が御意に叶ひましたら、

四　御迷惑でも今一獻。

五　そのお杯でなみ〳〵と、
六　お過しなされて、
六人　下さりませ。
辨慶　いや、其の様に强ひられては、よい心地も惡く相成る。
義經　左樣な事を申しては、汝の方が嫌はれゝば、今一獻過すがよい。
辨慶　然らば、飮まねばなりませぬか、是れだから此の辨慶、女性は嫌ひと申すのぢや。
一　まあお過し、
六人　下さりませ。（ト皆々にて銚子の酒を、大杯へついで居る。）
〽その名も同じ武藏野や、野見つくされぬ大杯を、又引受ける折柄に、主人庄司は客人の興ある體に悅びて、海尊義盛兩人を引連れ御前へ入來り。
ト下手の開きをあけ、庄司好みの鬘、烏帽子素袍一本差しにて、中啓を持ち、以前の海尊、義盛附いて出來り下手下に居て、
庄司　はッ、申し上げたき事のありて、海尊義盛御兩所の、勸めもあれば同列なし、御前へ參上なせし所、粗末なるお持成も、咎めたまはず御機嫌の體、有難く存じ奉つる。

義經　不意の入來を斯くまでに手厚き饗應いたしくれしは、過分の至り悅ばしく、此程になき鬱散なし身も滿足に思ひ居る。

辨慶　庄司殿御免候へ、お供に立ちし常陸坊や伊勢義盛を差置かれ、辨慶一人御前へ召され、此頃になき數獻を過し、よい相伴をいたし申した。

庄司　知らるゝ如く邊土なる此地の儀ゆゑ差上げる、お肴とても候はねど、御酒は澤山たくはへあれば武藏殿のお手並にて、十分お過し下さらば、大慶至極に存じ申す。

義經　庄司が厚き持成ながら我は深くは嗜まぬ酒、大酒と誇る辨慶が何程酒を參り居るか、これへ呼出し數獻を過させ、我が名代をさせし所、其の大杯にて七獻ほど續け飮みになしたるは、あつばれ酒の豪の者見事な手並でありしなり。

辨慶　申し上げ度き事のありて、各御前へ出られしとは、何事なるか氣遣はし、まづ〳〵お席へお進みあれ。

庄司　女子共には次へ立て。

女六人　はツ。（ト六人下手へはひろ。）

義經　庄司近う。

庄司　御免候へ。（卜前へ進む、これより誂への合方になり。）

義經　海尊義盛兩人を、引連れこれへ參りしは、如何なる仔細か申し聞けよ。

庄司　餘の儀にては候はず、此度の御出陣に愚臣老後の思ひ出に、君の御供に附き隨ひ、鎌倉へ馳せ登らんと願ひしかど、兩人の愚息等が老後の父をお供に立て、此儘國に殘らんこと武門の恥辱忍び難しと海尊殿や義盛殿に迫りし望み、もだし難く、二人の兄弟君へ願ひ愚臣に代らせ御供に、立てたく存じ候へば、此儀御許容下さるやう、偏に願ひ奉つる。

義經　我も左樣と存ずる折柄、武勇の汝の子息ゆゑ、老年の父に代り、供に立ち度き其の願ひ、末頼もしく聞き濟みしぞ。

辨慶　如何なる儀かと存ぜしに、御兄弟の御子息が君の御供を願はれしは、此の辨慶も大慶至極。

海尊　君の御諚をお聞きあらば、御兄弟にも御安堵あらん。

義盛　庄司殿より早速に、仰せ聞けられ然るべし。

庄司　申し聞さば愚息等も、嘸悅び候はん。それに就いてそれがしが申し上げたき一儀あり、そも此度の出御陣に愚息等を差置き、六旬に餘る身を以て自分御供を願ひしは、君鎌倉に御出であつて御進退の儀に附き、深く思慮する所の候へば、基治君の御側に附添ひ、お心添を申さん爲め、さて

こそ御供を願ひしなり、然るに愚息等われに代り君に從ひ奉る上は、基治所存のある所を、唯この儘にもだすに忍びず、穎才拔群の君へ對し、申すは憚りあることながら、諺に申す愚者の一得、一言を呈し奉れば不敬の段は幾重にも、お許し願ひ奉つる。

義經　われ此度鎌倉へ赴くことは、わが功名を爲さんためにあらず、偏に平家を討滅ぼし、過ぎ去りたまひし頭の殿の御怨みを報い奉らんと思ふ外他事なし、然るに和殿深く思慮する所ありとは如何なるゆゑか、義經が守りとなる可き事ならん、そは又如何なる故よしなるや。

庄司　されば此度の御發向、源家の御運開くるの時なること疑ふべくも候はねど、假令平氏の一族を悉く攻め平らげたまふとも、君の御身に災害の免れたまはぬ道理なるを如何せん、既に秀衡われに先んじ、此の御發向を肯んぜざりしも恐らく某が思ふ所の外には出で申すまじ、これ基治が心中に差置きがたき一儀にして、恐れながら君の御爲め、深く御案じ申し上げ奉つる。

義經　平家を亡ぼし其上にて、身に災害の免れざる道理あるとは仔細ぞあらん。軍法智略に勝れし和殿ゝ、包まず語り聞かされよ。

〽詞に庄司は威儀を正し、（ト鳴物入り、誂への合方になり、）

庄司　恐れ多き事には候へども、基治つら〳〵思考いたすに、御兄君鎌倉殿の御人となりを申し上ぐれ

ば、萬のことに嫌疑深く人の功を喜びたまはざるの御性質におはします、されば艱難は共にすべく安樂は共にすべからずと越の勾踐が申せし如く、大功御身にある時は恐らく兄君の嫌疑を免れたまふまじ、彼の淮陰侯韓信が漢の高祖の爲に楚の項羽を討滅ほし、齊王に封ぜられしかど、終に刑戮を免るゝ能はず、狡兎死して走狗烹られ、飛鳥盡きて良弓藏めらるゝの喩の如く、たとひ我が君軍法智略を以て義仲を滅ぼし、平家を討伐したまふとも、鎌倉殿には却つて喜びたまふべからず、それのみならず、兄君が石橋山の敗軍に御命を救はせられしを、第一の功として出頭となる梶原景時、彼れ佞奸邪智の小人にて功を嫉み能を猜む、これが爲に退けられし者少からずと承はる。是れぞ御身に災害の至るべき前兆にして、卽ち秀衡はお止め申し又基治は老人の自身お供を願ひしも、趣意は變れど同一轍、今又愚息等御供を願ひ出るも壯年の身の然らずんば非ざる處、老人の身は初めより止まるべきが是れ當然、お供に立たざるそれがしが、君へ對して一言を呈する所以は是れ一ツ、何卒御身の進退斷引、始終全く御愼みの程、恐れながら此一儀、御心に掛けらるゝやう、偏に願はしう存じ奉りまする。

〽未然を計る基治が眞身の異見義經公、從ふ人々心に徹し、暫し默して居たりしが、君には喜悦の御聲すゞしく。

義經　實に忝き和殿の進言、我が爲には弓矢神正八幡の御告けならん、誓つて心を愼み居れば、必ず安堵いたされよ。
庄司　はゝ、聰明叡智におはしたまふ君へ對して老人の、思ひ過せし此の進言、斯くまで厚き御仰せは此身に取りて何程か有難く存じ奉る。
〽並居る臣も基治の、諫めを聞いて感じ入り。
辨慶　その御諫めを承はり、われ〳〵御供に附添ふ上は、
海尊　基治殿に成替り、進退駈引仕り、
義盛　忠勤盡せば我が君の、御身に氣遣ひあるべからず。
義經　然らば兄弟兩人を、出馬の供に召連れん。
庄司　こは有難き御仰せ、早速これへ呼出し、君の御諚を申し聞さん。君のお召し。
〽手を打ち鳴らせば次の間より、侍女はかしこみ進み出で、（ト下手より侍女一人出て。）
侍女　はツ、御用を仰せ聞けられませう。
庄司　三郎、四郎兩人に、君の御召しと申し聞けい。
侍女　はツ。（ト下手へはひる。）

義經　先日義經秀衡を便りし折に兄弟を、從者に附けんと言はれしを、まだ其折は忍ぶ身の心に任せぬ事ありしが、今改めて主從の杯なすは悅ばし。

〽悅びたまふ其の折柄、お召しと聞いて兩人は、父の執成し打ち悅び、急ぎ御前へ入來り。

ト下手より、以前の繼信、忠信出來り、下手下に居て、

繼信　お召しによつて三郎繼信、

忠信　弟四郎忠信、

繼信　御前へ參上、

兩人　仕つてございまする。

〽心勇んで言上す、父も二人を見返りて、

庄司　お供の願ひ御許容あれば、君へ御禮申し上げよ。

繼信　すりや、此度御出陣の御供へ、お加へ下さるとな。

忠信　これと申すも御兩所の、お執成しによる所と、

繼信　有難く存じ。

兩人　奉りまする。

〽義經御機嫌斜ならず、（ト義經思入あつて、）

義經　強將の下に弱卒なしとは、古賢王の詞ながら、父の智勇にあやかりて、何れ劣らぬ勇氣の骨柄義經如き弱將の從者になるべき者ならず、三世の緣と思ひくれよ。

庄司　恐れ多き其の御諚、東國なる陸奧に生ひ立ちましたる二人の兄弟。

繼信　無骨のみにて智に疎く、禮儀作法も辨へませねど、

忠信　三代相恩の郎黨とも思したまひて、從者の列へ何卒お加へ下さるやう、

庄司　偏に願ひ、

兩人　上げ奉りまする。

義經　平家盛んに源氏衰へ、皆重盛が徳を慕ひ六波羅へ參るそが中にて、此の陸奧へ引籠り源氏の再興祈りくれし忠臣無二の庄司が子息、今改めて兩人と主從三世の杯なさん。そこは手遠ぢや、近う近う。

辨慶　お許しなれば御兩所共、

海尊　君の御前へ、

三人　お進みあれ。

繼信　有難く存じ、

忠信　奉つる。

繼信　＼許しを受けて兄弟が、席を進んで控ゆれば。（ト兩人よろしく前へ出る。庄司下手へ向ひ。）

庄司　誰である、銚子を持て。（ト下手襖の内にて、）

淺香麻生　はツ。（ト聲する。）

＼はツと答へて兄弟の、嫁兩人が立出れば、舅が指圖に御前へ進む銚子に義經公、御機嫌よげになみ／＼と受けて干したる杯を兄繼信へ流石にも、折目正しき式禮や、返杯なせば相嫁が長柄の酌は仕れど、緣短き別れぞと案じる體を押し隱す、心の内ぞ哀れなり。

ト此内下手より、以前の淺香麻生長柄の銚子を持ち出で、下手へ控へる。庄司指圖して義經の前へ麻生三方に土器を載せしを持ち行く、淺香酌をする、義經繼信へ差し、返杯をせよといふこなし、同じく忠信へ差し、義經にて杯を納める。此内淺香麻生よろしくこなしあつて、床の文句一ぱいに双方納まる。

庄司　役目が濟めば用はない、兩人とも次へ立て。

淺香麻生　はツ。

〽小腰をかゞめ立つて行くを。

義經　あいや、兩人先づ待ちやれ、いやなに庄司此の二人は、兄弟の妻であらうな。（ト庄司思入あつて、）

庄司　お目に留りて恐れ入れど、御意の如く愚息等の嫁共に候へば、お見知り置かれ下さりませう。

義經　然らば遠慮に及ばぬこと、此の儘席へおいて遣はせ。

〽籠る情の御上意に、有難涙かき曇る、愁ひの樣子隱さんと。

繼信　有難き御諚ながら、お供の支度に愚妻等も何かと用事の候へば、

忠信　御前に長居は恐れあり、役目の濟みし上からは、お次へ立つて控へ居よ。

〽惜しむ名殘りも目前に、さらばと悟りたまふにぞ。（ト義經思入あつて、）

義經　いや、杉目の館へ立越えて、かしこより打立たんと思ひしなれど、今宵は爰に一宿なし、これより直に發足なさん。

庄司　すりや我君には當館より、御發足下さるとや。

義經　和殿に名殘りが惜しきゆゑ、今宵はこれへ一宿なさん。

庄司　願うてもなき家の規模、有難く存じ奉る。

〽それと窺ふ姑は、嬉しき儘に進み出で、

ト下手より以前の戸澤出で、

戸澤　これより君の御出馬を願はんものと思ふ折柄、冥加に餘る今の仰せ、家の面目此上の有難い事は候はず。

淺香　私共もとも〴〵に、

麻生　お嬉しう、

兩人　存じまする。

繼信　然らば此由早速に、杉目の館へ申越し、

忠信　鷄鳴告ぐる曉天に、目出度く當地を御發足。

辨慶　その着到の人々には、

海尊　杉目金剛伴知治、

義盛　惣勢合せて三百餘騎。

戸澤　兄弟二人も鎌倉へ、登るは其身の晴なるが、鎌倉武士へ對しては事辨へぬ田舍育ち、粗相の振舞せまいぞや。

義經　そは我とても陸奥に、長の年月潛み居れば、無禮粗相は同じからん。

庄司　その儀については我が君へ、御心得の爲にもと、申し上げたき事こそあり。
義經　我が心得になる儀とは、如何なる事か聞かまほし。
辨慶　我々共も後學に、
海尊　承はりて、
三人　會得なさん。
ト基治威儀を改めて、（トこれより勇ましき合方になり。）
庄司　されば此度鎌倉へ、君馳せ登りたまふとも、佐殿の御下知に背きたまはず、八平氏私黨の族の駈引な侮りたまふ事なかれ、彼れらは數度の戰場に武功の者にて候ぞ。
海尊　その面々も我が君は、義朝公の御末男、などて粗略になすべきぞ。
庄司　如何にも君は頭の殿の御公達にましませど、御妾腹といひ御末子に產れたまへば蒲殿とは、其の格式も異なれば萬事にお心置かせられ、木曾の討手の大將を佐殿命じたまふとも、二度までは御遠慮にて、御辭退あつて然るべし。
義經　して又兄の旗下といへど、此の義經が會釋なす、其の者共は誰なるぞ。
庄司　それぞ北條、宇都宮、結城なんぞに對しては、粗忽の振舞あらぬやう、御會釋あるが肝要なり。

辨慶　して、御主君が軍議を合し、賴みになるべきものは如何に。

庄司　武門を守る誠忠の侍ならんと思はるゝは、三浦の一黨、畠山、上總なんどに候はん。

海尊　して〳〵、弓矢の達人と、呼ばれしものは誰なるや。

庄司　天野藤內遠景こそ、勝れし武勇と覺えたり。

義盛　故實の家と申すのは、如何なる人に候ぞ。

庄司　故實を心得居るものは、下河部にてありつらん。

戶澤　又御主君へ無禮でも、なさんと思ふは誰なるぞ。

庄司　佐々木梶原兩人こそ、君を出しぬき先陣を、なさんと計るしれものなり。

辨慶　御老練の御進言道理せり、さりながら鎌倉殿より先陣の大將を命じたまはらば、如何なる軍慮をめぐらして、彼の怨敵には向ひたまふや。

へ申し述ぶれば義經公。

義經　軍は敵の機に臨み變に應ずるものながら、都近くの合戰には、宇治、瀨田の戰ひこそ尤も大事の一戰にて、治承四年の戰ひに、宇治の手破れ朝正には討死ありしと聞きつれば、敵瀨田口を取り固め、橋を落せば宇治川を、騎馬にて渡り攻め破らば、味方の勝利疑ひなし。

〽軍慮鋭き大将の、居ながらに知る先見は實に恐ろしき智略なり、基治小膝をはたと打ち、

庄司　天晴鋭き御軍略、基治が所存その外に候はず、はゝ、恐れ入り奉る。

〽勇み悦ぶ傍より、辨慶ぞく〳〵打悦び。

辨慶　都近くはこの辨慶、地の理を委しく知りしゆゑ。

〽瀬田の長橋切落し、渡るに難き宇治川の、早瀬に味方惱むとも、其の水上は湖や、矢走を越して裏手より、敵の備を討破り、勝利を得んは手裡にあり。兄弟達にも我君を、守護して忠勤盡されよ。

繼信
忠信　仰せにや及ぶべき。

〽羽翼の臣は御馬前に、源氏車の兩輪にて、繼信左を切立てなば、忠信右を駈け惱まし、平家の軍勢一戰に微塵になして大君の叡慮を安んじ奉らん、御安堵あれとぞ勇みける。

ト此內辨慶、繼信、忠信よろしくあつて納まる。

海尊　敵の落葉に冬の夜の、長きを明かす今宵こそ、

義經　味方の武運東海に、昇る日を待つ御旗揚げ。

義經　目出度く祝して二人の女房、舞を一指所望いたす。

淺香　仰せにはござりますれど、
麻生　餘りと申せば恐れ多い。
辨慶　君の仰せ、斟酌なしに、
庄司　拙き手振りも御見なぐさみ、御門出でをお祝し申せ。
淺香　左樣なれば御免を蒙り、
麻生　未熟ながらも一指を、
淺香　奏でまするで、
兩人　ござりませう。

ト兩人よろしく立上り、下座の謠になり、兩人今樣の模樣よろしく、此模樣木なしにて、

幕

中幕　奧

浮島ヶ原對面の場

〔役名〕——源賴朝、源義經、佐藤三郎兵衞繼信、土肥次郎實平、北條時政、佐々木四郎左衞門高綱、

安達藤九郎盛長、江間小四郎義時、狩野介重光、加賀次郎遠光、工藤五郎實政、三浦平六義澄、堀藤次近舍、土屋三郎宗近、岡崎四郎義實、安岡三助義貞、狩野次郎充行、郎黨八人、軍兵等。」

（喜瀬川松林の場）——本舞臺一面の平舞臺。上の方松林、眞中より下手振りよき所の立木、うしろ遠く松葉と見せたる書割よろしく、山おろし、床の三重にて幕明く、

〽時知らぬ富士の根方に會稽の、雪の白旗翻へし、都へ登る佐殿の跡を慕ひて義經が、夜を日について喜瀬川の、松の林に屯なす。

ト上手より義經、甲冑馬上にて弓を携へ出る、軍兵二人馬の口を取り、是れへ繼信鎧なりにて附添ひ出る、

〽向うに轡の音高く、砂を蹴立て、出で來る騎馬武者、手綱を止めてかなたに佇み。

トばた／＼カケリにて、花道より土肥實平鉢卷鎧籠手附太刀草鞋にて、馬に乗り、軍兵二人附添ひ出來り、直に舞臺下手へ來り馬を止めて、

實平　なう／＼、それへ物申さん。

繼信　何事にて候ぞ。

實平　これに白旗押立て控へたまふは誰人なるか、家名實名承はりたく土肥の次郎實平、是れまで推

參仕れり、疾く／＼その名を名乘り候へ。

〽いふに繼信一禮なし。（ト繼信前へ出で、辭儀をなし、）

繼信　扨は土肥氏にてありつるか、此方より御陣中へお屆けに參るべきを、お尋ねに預かり遲參のお詫び仕る。これは東國陸奥より、君の御味方仕らんと、夜を日についで當國まで、御跡慕ひ參りて候。

實平　君の御味方なさんとて、陸奥より參られしとは、いと頼もしきことなるが、誰人にて候ぞ。

〽尋ねにこなたも、莞爾と笑み。

義經　かねて兄には知ろしたまはれん、是れは故左馬頭が末男、幼名牛若丸と申せし者、久しく陸奥に蟄し居りしが、此度佐殿御上洛の旨承り、御供に加はらん爲め、奥州を發足なし、是れまで參着致したり、前牛若丸こと、今源九郎義經と名乘り申す、此の由を傳へられ見參を許したまはるやう、よしなに取次ぎ頼み申す。

〽詞凉しくのたまへば。

實平　扨は、御連枝にて渡らせたまふか。

〽打驚きて馬上より、ひらりと飛び下り、平伏なし。

ト實平びつくりして馬より飛び下り、平伏して、

かゝる君とも存ぜざれば、先刻より下馬も仕らず、馬上の失禮愚臣が罪、御宥免下さるべし。

〽兩手を突いて詫びければ、繼信傍より詞を添へ。（ト實平手を突き詫びる。繼信思入あつて）

繼信　未だ我君御姓名を御名乘りなき以前なれば、いかで御身を咎むべき、其のお詫びには及び申さぬ。

義經　殊更治世の時ならず、戰地へ赴く途中なれば、無禮の罪を何問ふべきぞ。

實平　はゝツ、寬仁大度の御意を蒙り、有難く存じ奉る。拙者はこれより陣所へ歸り、君の御名を言上いたさん。主人も嘸や悅び申さん。

義經　我は幼稚の時にして、お面さへも存ぜぬ兄、片時も早く見參なしたく。

繼信　土肥氏には御苦勞ながら、鎌倉殿へ仰せ上げられ、卽刻御見參に相入るやう。

實平　委細承知仕る。然らば御免下さるべし。

〽禮儀を盡し又候や、駒に跨り實平は、陣所を指して急ぎ行く。

〽こなたも駒を引返し、土肥の沙汰をぞ待ちたまふ。

トこの人數下手へはひる。跡知らせにつき、松葉を引いて取り、道具幕を切つて落す。

（頼朝陣所の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面奥深に笹龍膽の紋附きし幕を張り、上下同じ幕張り、ずつと上の方岩の張物にて見切り、所々に振りよき松の木立、向う打拔きに富士山の遠見、總て駿洲浮島ヶ原、頼朝陣所の體、爰に北條時政、佐々木高綱、安達盛長、江間義時、狩野介重光、加賀見遠光、工藤實政いづれも陣立のこしらへにて床几に掛り、下手に土肥實平、同じく陣立のこしらへにて控へ居る、此の見得、太鼓、三重にて道具納まる。

〽駿河路に其名も高き富士の裾、浮畫の如き浮島ヶ原を陣所に百八町、幕張りなせし鎌倉勢人波を打つ如くにて、四邊を拂つて見えたりける。

ト舞臺の皆々床几を下りて敷皮の上へ各よろしく住ふ。上手の奥より郎黨四人高麗緣附の一疊臺を持ち出で、上手よき所へすゑる、跡より頼朝緋威の鎧好みの烏帽子、籠手臑當虎の尻鞘かけし附太刀好みのこしらへにて出る、跡より郎黨四人附添ひ出る、頼朝上の一疊臺の上へ住ふ、郎黨八人後へ控へる、實平は下手へ出て住ふこと、

頼朝　實平には頼朝へ、申し入るべき一儀ありとは、何事なるぞ。

實平　はゝッ、別儀にも候はず、只今それがしが陣前へ出でし所、年齢二十一二とおぼしき壯士、同勢僅四五十騎にて我君へ見參を願ふにより、それがし直に其人を見るに、人品骨柄世の常ならず、

あつぱれ大將の器量あれば、たゞ人にはあるまじと親しく御名を問ひ奉れば、豈計らんや鞍馬山に在しませし牛若君にて渡らせたまひ、御名も源九郎義經と名乘りたまひ、遙々遠き陸奥より御加勢の爲め御出でありし由、我君へ申し上げよと、仰せをうけて土肥實平、この儀言上仕りまする。

賴朝　なに、牛若が參りしとや。彼れ未だ當歲の折分かれしゆゑ面體とても知るよしなく、朝暮心に忘れがたなく懷しく思ひ居りしが、よくぞ尋ねて參りたり、直樣これへ同道いたせ。

〽思ひも掛けぬ一言に。

實平　は、、委細畏つてござりまする。

賴朝　少しも早く伴ひくれよ。

實平　はツ。

〽仰せを受けて實平は、君の陣所を出でゝ行く。

時政　かねてお心に掛けたまひし、御舍弟牛若君思ひ設けぬ御來臨、君にも嘸や御滿足、我々どもにおきましても恐悅至極に。

皆々　ござりまする。

へ大將莞爾と打笑みたまひ。

頼朝　今日是れへ牛若が我を慕ひて奧州より、尋ね參らうとは思はざりし、實平が詞にはあつぱれ勝れし大將振りと、申せば最も頼もしく、如何なる姿に相成りしか別れ程經て二十餘年、今初めての對面なり。

時政　世の談柄にそれがしも聞き及び居つたるが、義朝公失させたまひ、殘る源氏はちり〴〵に、

高綱　常磐御前も街に迷ひ、伏見の里の雪の日に、御幼稚の爲に懷へ、抱かれたまふ牛若君、

盛長　池の禪尼の情にて、危ふき一命助かりて鞍馬山へ學問に、お登りありしも出家を嫌ひ、

義時　御下山あつて奧州へ、落ちさせたまふと承はりしが、今源九郎義經とお名乘りあること、承はるは今が始めて。

重光　何にもいたせ、木曾を征し、

遠光　平家追討の時に臨み、

實政　範頼公、義經公。

義實　羽翼に喩ふ御兄弟。

時政　君に降從したまふは、源家再興の吉兆なり、

高綱　恐悦申し、

皆々　上げ奉る。

〽折からあなたに聲あつて、

實平　いざ〳〵あれへ、御通り候へ。

〽案内に連れて義經公繼信伴ひ連れ靜々と、陣内へ入り來りしが賴朝公を見るよりも、禮儀正しく平伏なせば。

ト小鼓をあしらひ、花道より實平先きに、以前の義經折烏帽子、前の鎧なり、跡に以前の繼信附添ひ出來り、賴朝を見て花道よき所へ住ひ平伏する。

〽賴朝公は見たまひて。（ト賴朝義經を見て、）

賴朝　絶えて久しき牛若丸、よくこそ尋ね來られしぞ。

義經　木曾平家を追討の爲め、御上洛と承はり、御同勢へ加はりて御供なさんと陸奥より夜を日について馳せ參じ、斯く美しき尊顏を拜し、恐悦至極に存じまする。

賴朝　御身も堅固で重疊なり、ゆる〳〵對面いたさん、設けの席へ進まれよ。（ト熊の敷革へ指圖する。）

義經　仰せには候へども、御前近くは恐れあり。

賴朝　御身と我は兄弟なり、其の斟酌には及ばぬぞ。
義經　ではござれども。
時政　只今君の仰せの如く。
高綱　御連枝なれば、御遠慮なく、
賴朝　疾く〱これへ。
義經　然らば御免下されい。

〽威儀を正して靜々と、設けの席へ着きたまへば、藤次が案内に繼信も、末席へこそ連なり、賴朝公は打ちうなづき。

ト此うち義經靜々と賴朝の下手にある敷革の上へ住ふ、實平案内して繼信下手へ住ふ、賴朝思入あつて

賴朝　實に光陰は矢よりも早く、保元平治の亂れより源家の一族離散なし、憂き年月を送りしも算ふれば早や二十餘年、其折は嬰兒なりし牛若丸が成長なし、あつぱれ大將の權威ある、斯程立派な武者振りに、ならうとは思はざりし。
義經　未だ若冠の未熟もの、斯く御賞譽に預かりては、汗顏のいたりに候。

〽のたまふ面をつく〲眺め、（ト賴朝義經の顏を見て）

頼朝　はて似たるかな〳〵。
高綱　似たと、仰せられまするは。
四人　誰れ人に候ぞ。
頼朝　義經の面差が、世になき父君に生寫し。
義經　何と仰せられまする。
頼朝　われ父君に別れし折は十三歳の時なれど、よく御顔を覺え居る、今御身の面を見るに、血を分けたまふ親子とて、斯くまでよくも似るものか、誠に父君に見ゆる如く、昔懷しく思ふなり。
義經　兄にはお覺えあれど、われは其折嬰兒にして、母の懷に抱かれしなれば、父君の御面存ぜざるなり、われ父君に似て居れば兄も似て在すらん。今日是れにて見參なすは、世になき父君に見ゆる心地。
〽過ぎし昔を思ひ出で、計らずこぼす一雫。（ト頼朝義經の顏を見て、ほろりと涙をこぼす。）
頼朝　われも父君にまみゆる心地。
義經　御懷しく存じまする。
〽互ひに面を打守り、世に亡き父君に逢ふ如く、嬉しさ餘りはら〳〵と、落つる涙の村時雨

並居る諸臣も諸共に鎧の袖を濡らしける。

ト頼朝義經顏を見合せ、嬉しき思入にて、思はず涙をこぼす。是れを見て、時政はじめ皆々共に泣く思入よろしく、義經涙を拭ひ、

時政 かねて主君の御物語りに、承はり及びたる、御九男の牛若君。餘りの事の嬉しさに、思はず落涙いたして候。

高綱 今源九郎とお名乘りなされ、遙に遠き陸奥より、ようこそ御着あらせられたり。

義澄 これに並居る我々は、石橋山のお旗揚げより、

義時 君に隨從仕る、關八州の者共にて、

時政 斯く申すそれがしは、北條四郎時政。

高綱 佐々木四郎左衛門高綱。

盛長 安達藤九郎盛長。

義時 江間の小四郎義時。

義澄 三浦平六義澄。

近舍 堀藤次近舍。

重光　狩野介重光。
遠光　加賀見次郎遠光。
實政　工藤五郎實政。
實平　土肥の次郎實平。
宗遠　土屋三郎宗遠。
義實　岡崎四郎義實。
義貞　安田三郎義貞。
光行　狩野次郎光行。
時政　其外陣所に罷り在る、關八州の大小名、
高綱　君へ隨身仕れば、以後は御家臣同樣に、
盛長　麾下におつかひ、
皆々　下さるべし。
〽皆一同に辭儀をなせば。（ト皆々辭儀をなす。）
頼朝　何れも孤獨の我を守り立て、義兵の旗揚げなせし折より、源氏に力を添へる者共。

義經　そは忝けなき志し、猶も此上兄へ力を盡しくれられよ。
頼朝　して和殿がこれへ召連れしは、臣下の者に候や。
義經　かねて御旗揚の其折に、御同勢へ加はらんと、より／＼に語らひおきし者ども、凡そ員數は四十餘人、只今これへ召連れしは、股肱の臣に候なり。
繼信　拙者は佐藤庄司が男、三郎兵衛繼信と申す未熟者に候へども、戰場の御役に立つべき勇士の者共は、武藏坊辨慶、常陸坊海尊、伊勢の三郎、杉目の小太郎、龜井の六郎、駿河の次郎、片岡八郎雜式喜三太其外三十餘人の壯士、今般の御同勢へお加へ下さらば、有難く存じ奉る。
頼朝　一人たりとも出陣に、味方の欲しき時節なり、今より忠勤盡しくれよ。
繼信　はッ。
實平　佐藤殿にも今日より、御味方に加はる上は、是れより入魂に。
皆々　交はり申さん。
〽臣下の方も交はりの禮を盡せば、佐藤も面目身にあまり。
ト皆々よろしく思入、頼朝義經に向ひ、
頼朝　和殿もかねて知る如く、父君頭の殿には御運拙く、尾張の國野間の内海に果敢なくも、長田が爲

に御落命、それより源氏の一族は皆ちり〴〵になり果て、平氏は益々時を得て淸盛暴威を振ふが爲に、討たれしものは幾許なるか、中にも我は俘虜となり、旣に誅せらるべきを、池の禪尼小松内府の情によつて一命助かり、伊豆の伊東へ配流され、幾星霜を送るうち、和殿が奥州下向のことも、仄かに聞けど配流の身、音信さへも心に任せず、然るに沙門文覺が院宣を以ての勸めにより、父君の讎を報ぜんと、思ふ時しも北條始め、これなる人々味方に屬し、石橋山に旗揚なせしも、時いたらずして敗軍なし、海路を取つて安房へ渡り、それから上總下總の兵を募りて武藏より相摸へ至る路次に於て、追々味方の人數加はり、今は數萬の軍勢にて、此の駿河まで押出せしが、父君の記念と見るべきものは舍弟範賴只一人、忘れ難きは和殿のこと、明暮思へど軍務に暇なく、是非なくこれまで打ち過ぎしが、御身骨肉の情を忘れず遙に遠き陸奥より、馳せ來られし志し、是れに過ぎたる悅びなし、正しくこれは頭の殿の導きたまふ所なるかと、歡喜に堪へず覺ゆるぞよ。

義經　われらとても平氏の爲に、誅戮せらるゝ所なりしが母の情に一命助かり、七歳の折鞍馬山なる、覺月阿闍梨に托せられ勸學いたす其うちも、素より出家の心なく、如何にもして平家を滅ぼし、父祖の恥辱を雪がんと日夜肝膽を碎く折柄、金賣吉次といふ者に出逢ひ、宿志を語り彼を賴み、

陸奥へ降る途次、自ら元服なして源九郎義經と名乘り、藤原の秀衡に身を寄せ、世の動靜を窺ひ居りしに。

〽時至りてか兄が、再び靡かす義兵の旗揚げ。

聞くとひとしく馳せ參り、一臂の力を添へ申さんと存ぜし所、秀衡強ひて押し留むるに、竊に彼れの館をのがれ、信夫の庄司が許に宿り、繼信忠信の兩人を得て、夜を日について馳せ登りしに天運に叶ひ、御出陣の御門出に參り逢ふこと、是れまさに兄の仰せの如く、頭の殿の御引合せに候はめ、有難く存じ奉りまする。

〽實に三德の備はりし、九郎の君が艱難の御物語りぞ有難き、並居る諸侯も勇み立ち。

時政　關八州の大小名、皆御味方に附きしといひ、

高綱　今又圖らずも、

盛長　義經公の御着ありしは、

義時　實に千萬騎の士卒に勝る、

近令　得がたき明智の御大將、

重光　これにて味方の勢ひは、

遠光　ます／＼盛んに、十倍なし、

實政　龍に翼を得たるが如し。

實平　京地に於て一戰なさば、

義澄　必ず御勝利。

皆々　疑ひなし。

〽義經公を人々が賞賛なせば佐殿も、實にもと心にうなづきたまひ。

これより床の合方へ笙を冠せ、賴朝思ひ入あつて

賴朝　これにて思ひ合する事あり、去じ白河の院の御宇、承保二年九月曾祖陸奥守源の朝臣、奥州に於て將軍三郎武衡、同く四郎家衡等と合戰をとぐるの刻、御弟左兵衛尉義光ぬし、京師の警衛に候ひしが、此事を傳へ聞き、忽ち朝廷を衛る當時の官を辭し、弦袋を殿上に解き置き、竊に奥州へ下向し、八幡殿の軍陣に馳せ加はり、武衡家衡を討ち滅ぼされたり、今日和殿の來臨は最も彼の時の嘉例に叶ひ、喜びこれに增すものなし、われ八幡殿の智勇には及ばざれども、和殿は義光ぬしの智略にも、勝りはするとも劣りはせまじ、世に賴もしく思ふぞよ。

〽身の悅ばしさに賴朝が、過ぎし昔を思ひ出で、感涙流したまひけり。

義經　はゝ、こは過分なる仰せを蒙り、義經身に取り如何ばかりか、有難く存じ奉る、それがしが不肖を以て新羅殿の智勇に及ぶべくも候はねど、今より兄弟一致なし、都へ登り差當る木曾義仲を討ち倒し、續いて平家を追討なさば其時こそは頭の殿の御恥辱を雪ぎ、再び源氏一統の世に飜さんこと、今こそ時節到來せり。

〽勇みたまへば、頼朝公。

頼朝　ほゝお、如何にも和殿の言へる如く、今こそ時節の到來と、思へば心に勇みあり。

義經　して〳〵、木曾平家を追討の、先陣なすは誰人なるぞ。

〽尋ねたまへば打ちうなづき。（トこれより派手なる合方になり、）

頼朝　その先陣は我が舍弟、蒲の冠者範頼を大將として、附隨ふ大小名は關東勢、

時政　先手に進む若武者は、武田太郎、加賀見次郎、

高綱　續いて勇士の聞えある、伊澤五郎、一條次郎。

盛長　小笠原次郎、板垣三郎、

義時　まつた逸見の冠者等なり。

義經　後陣に隨ふ面々には、

義時　大内左衛門尉を始めとして、

遠光　畠山次郎、川越太郎、

實政　和田の小太郎、熊谷次郎。

實平　猪股の小平六なり。

義經　殘るかたなき御手配り、して又、後陣の大將は。

賴朝　軍事に馴れし剛の者安田三郎、田代の冠者を大將と定めたれど、今日和殿來たる上は、和殿を以て後陣なる大將軍と定むべし。

義經　こは兄の仰せには候へども、一旦兄お目鏡を以て、後陣の大將と定めたまはる上は、其儘になし置かれ、我は先陣蒲殿の手に附いて、此度の出陣仕らん。

高綱　その儀は何樣仰せあるとも、其の御辭退は然るべからず。北條殿を始めとして、各々方も共々に君へ御願ひ下されい。

時政　佐々木が詞も尤も至極、御連枝といひ大將の、あつぱれ權威の義經公。

盛長　君が後陣の大將に、ならせたまふが順當なり。

義時　我々どもに至るまで、御願ひ、

皆々　申し上げ奉る。

〽一同願へば賴朝公。

賴朝　北條始め方々のすゝめに任せ義經には、後陣の大將勤むべし。

義經　では候へど、未熟な拙者。

繼信　御辭退あるは謙遜を守りたまふ義經公、御尤もには候へど、斯くまで諸侯の勸めといひ、賴朝公の御許しあれば、御受けあつて然るべし。

義經　すりや何樣に辭退なすとも。

賴朝　あつぱれ大將の器量あれば、詞に任せ承諾せよ。

義經　然らば、お受け仕らん。

時政　御承諾にて臣等一統、

高綱　大慶至極に、

皆々　存じ奉る。

賴朝　富士川越せし範賴を、これへ迎へて對面させん。

義經　そはそれがしも願ふところ。

賴朝　今宵は兄弟打ちつどひ、
時政　保元平治の戰ひより、
高綱　夢と過ぎ行く星霜も、
盛長　今は昔の、
義時　二十餘年。
繼信　御兩君にも長の內、
義經　互ひに艱難辛苦せし。
賴朝　往時を語りて、酒宴をなさん。
〽三國一と名も高き、富士の根方に源の流れも淸き。
ト皆々引張りよろしく、三重カヽリにて、

幕

會稽源氏（終り）

其頃繁花の麹町へ町消場が開きたる
　又右衛門は又となき手練に忽名も高く
　　山の手切つての評判に飛彈守より招きの使者
是ぞ手討と噂を聞き仔細を唐犬權兵衛が
　名殘を惜しむ師弟の別扨對面所で帯刀を
　　取上られて小天狗も羽根をもがれし思ひにて
今は詮方長熨斗を乗せたる紙を引しごき
　木太刀に換し早速の立合天晴なる哉五體の構
　　一念の透のあらざるはこれ三吉が奥義の皆傳

「奉書試合」は明治二十二年十月、作者七十四歳の時、桐座（新富座）に於て書却された。「中幕は左團次の爲へはめて其水筆を執り、從來の奉書試合とはいたく趣を異にしたり」と「續續歌舞伎年代記」にも記してある。其水は默阿彌の俳名である。講釋種に據つた中幕物で好評を博した。

稿下の時の役割は市川左團次（荒木又右衛門）、尾上菊五郎（柳生飛彈守）、市川團十郎（唐犬權兵衛）大谷馬十（柳生の臣双川仁右衛門）等であつた。

挿繪にしたのは、歌舞伎新報へ掲載された時、芳幾が書いた似顔繪で、筋書の本文と共に亞鉛版に附したのである。此扉の題字は作者の筆ではない。

大正十五年七月下旬

校訂者

出に付添小刀の義も御遠慮然るべしトいふ思入有て（左）お歴〳〵の御前へハ恐れながら格別の思召をもつて小刀丈ハお免下されたしト頼ふを（四人）これ荒木氏のお詞とも存せぬお大名お直参の歴〳〵方の御前へ脇差ハとりや御心あつてなさるとか（左）イエ外に心あつてその事にハムり升ぬ（四人）御存寄が外にあらバ脇差たりとも御遠慮が當然でムり升ふト上るり文句よろしく是非あさ思入にて（左）猶豫いたせしハ拙者が不調法然らバ是をも渡し申升ふト脇差も出すだん八受取一

柳生荒木譽奉書（本書試合――一幕）

麹町荒木道場の場
木挽町柳生邸の場

〔役名〕――柳生飛彈守、荒木又右衞門吉包、柳生家臣双川仁右衞門、同鱗木三太夫、同梅田若八、同佐佐木右内、同笄澤九郎兵衞、同曲淵七藏、男達唐犬權兵衞、同子分長太、中間三平、駕籠舁二人。洗濯婆おぬひ、同娘おせん等。〕

〔麹町荒木道場の場〕――本舞臺三間の間常足の二重、向う上手に一間の床の間、澤庵和尙の一行の掛物、續いて一間地袋戸棚。此の上に刀掛あり、下手小形の襖、出這入りあり、上の方一間障子屋體、下の方九尺の玄關、向う襖、屋根附き、此の柱に「柳生流劍術指南」といふ大きな札をかけ、此の下黑塀。總て麹町荒木道場の體、爰に○△□◎の門弟四人袴なりにて住ひ、洗濯婆、娘おせん膳椀を片附け居る、傍に中間手傳ひ居る。此の見得、鷄笛、平河天神の大拍子にて幕明く。

中間　もう平河の大拍子が聞えるからは七ツ半、夜の明けるのに間はない。
ぬひ　今鳴いたのは、二番鷄、少し東が白みました。
中間　洗濯屋のおッ母も昨夜から御苦勞だつた、嘸たて通しで睡からう。

ぬひ　不斷お世話になりますから、斯ういふ時にお手傳ひをいたしますのは御恩送り、御遠慮なされますな。

せん　一晩ぐらゐ、たて通しをいたしましても、私共は少しも睡くはござりませぬ。

ト門弟思入あつて、

門〇　ときに何れも、いつ何時どんな事が起るか知れぬもので、師匠が爰へ道場を開いた時分は、名前も知れず、父腕前も知れぬ故、一向門弟もなかつたが、

△　町奴の子分衆が弟子に來たのが始まりで、一と月每に弟子が殖え、當時名高い幡隨院長兵衞殿を始めとして、

□　今江戸中で顏を賣る唐犬、釣鐘、放れ駒、名うての衆が懇意になり、追々先生の名もひろまり、

◎　勝れた腕と人も知つて、此間から武家方の御弟子も出來て此の頃は、先づ麴町の荒木といへば、誰知らぬ者もなく。

〇　盈れば缺くると昨日の朝、木挽町の柳生家から佐々木右内といふ家來が、使者に參つて今朝の五つ迄に出るやうにと、堅く約束して歸つたが。

△　當時柳生飛彈守殿は、將軍家の御師範役、飛ぶ鳥落ちる勢ひにて、江戸に於て柳生流の指南をな

□ さば屋敷へ呼び、手討になすといふ噂。
それ故、今日先生も柳生の屋敷へ赴かば、必ず手討にあふであらうと、覺悟をされて門弟衆を、殘らず呼び入れ暇乞ひ。

◎ 町奴を始めとして諸家の御家來浪人衆、入替り立替りひつきりなしの客來に、お暇乞ひの御酒宴でとう／＼昨晩は夜を明し。

中間　柳生の屋敷へ呼ばれるので、昨夜はとんだ御通夜をした。

ぬひ　赤の御飯をお炊きなされて、目出度くお祝ひなされたに、御通夜などゝは不延喜な。

せん　旦那樣のお耳に入つたら、しくじり道具でござんすぞえ。

○　ちと、氣を附けて口を利け。

中間　恐入りましてござりまする。

　　ト花道より唐犬の子分長吉、着附、駒下駄にて出來り、舞臺へ來り、

長吉　お頼み申します／＼。（ト中間門を明けて見て、）

中間　是は唐犬權兵衞殿の子分、何の用か通らつしやい。

長吉　眞平御免下さりませ。（ト内へはひり、）只今權兵衞が上りますから、木挽町へいらつしやるのを、

暫く御待ち下さりませ。
○　お〻昨夜から先生も、權兵衛殿はどうなされたかと、
△　お出でをお待ちなされて〻あつた。
長吉　よんどころない事があつて、神奈川まで參りましたから、昨日直に迎ひを出し、昨夜夜通しに歸りました。
ト合方になり、花道より唐犬權兵衛、男達の拵へ、一本差し四ツ手駕籠に乘り出來り、舞臺へ來て、
權兵　先生は、まだお出でなさらぬか。
長吉　へい、まだお出でなされませぬ。
權兵　やれ嬉しや、三枚で急がせましたが、もしお目にかゝられまいかと、心も心なりませなんだ。
ト駕籠より出る。
長吉　これ若い衆、お臺所へ行つて、一息ついてゝくんねえ。（ト權兵衛思入あつて、）
權兵　長吉、手前も少し待つてゝくれ。
長吉　へい、畏りました。
ぬひ　どれ、御案内いたしませう。

ト合方にて婆先に立ち、子分駕籠舁二人下手へはひる、と娘茶を汲み、

せん　お茶をお上りなされませ。（ト出す。）

權兵　お茶より水をおくんなせえ。

せん　はい、畏りました。（ト水を汲んで出すを、飲むことある。）

○　どれ先生に、

三人　お知らせ申さう。（ト立ちかゝるを、奧にて荒木又右衞門の聲にて、）

又右　いや、知らせに及ばぬ、只今それへ參るであらう。

ト合方になり、奧より荒木又右衞門黒紋附、麻上下、刀を提げて出來り、上手へ住ふ。權兵衞も下手へ住ひ、

權兵衞、よく來て下された。

權兵　へい、生憎昨日神奈川に喧嘩があつて、仲人に賴まれ參りましたが、内から迎ひが參りましたので、取る物も取りあへず、夜通しに歸りました故、委しい事は承りませぬが、どういふことでござりまするか、譯をお聞かせ下さりませ。

又右　おゝ、（ト思入あつて、）最早明るくなつたれば、おせんと三平は燭臺を、奧へ持つて參れ。

中間　畏りました。（ト兩人は燭臺を持つて奥へはひる。）

せん　豫て其方も存じ居る備前の藩中、渡邊靭負殿が道場を開く砌り、當時將軍家の御師範役、柳生流といふ流名を何とか替へたらよからうと、異見をなして下されたが、素より僞り飾るにあらず、

又右　柳生家の惣領たる、十兵衞三吉殿より讓り受けたる流義なれば、差支もあるまじと異見を用ゐず門前へ、柳生流劍術指南と看板を掛けたる處、運よく追々弟子が殖え、稽古をばして居たところ昨日計らず柳生家より家臣佐々木右内といふ者、飛彈守殿の命を受け明十八日五ツ時までに木挽町なる柳生の屋敷へ參りくれとの使者の口上、委細承知仕ると受けをなして歸せしが、跡にて樣子を承るに、柳生流の看板を懸けたるものは屋敷へ呼びよせ、手討になす由、誠に是非もない事ぢや。

權兵　其の話をば幡隨から知らせてよこしましたから、宙を飛んで神奈川から、夜通しに歸りましたが、すりや先生には柳生の屋敷へ、手討になるのを御承知で、是からお出でなされまするか。

又右　昨日使者へ承知の趣、申遣はせし上からは、一命捨つる覺悟にて、これより直に參る心ぢや。

權兵　それをお止め申さうと、駕籠を飛ばして參りました。

又右　なに、それがしが參るのを、こなたが止めに參りしとは。

権兵　ちと、密々に先生へ申し上げたい事がござりますから、失禮ながら皆樣方には、暫しの間御不承でも、お次へお出で下さりませ。

○　密々の儀とあれば、何れも退座。

三人　仕らん。（ト四人は下手へはひる。又右衛門跡を見て。）

又右　して、密々の話とは。（ト誂への合方になり、）

権兵　今日是から柳生家へ、お出でなされた事なれば、柳生家の障りになる故、呼び寄せて手討にして邪魔を拂ふ正しく手段でござりませう。それを知りつゝおとしにかゝり、命を捨つるはほんの犬死、やたらに人を手討にする卑屈な心であるからは、大概腕の知れたもの、試合をなさば十が九つ、あなたが勝に違ひない。其の腕前をむざ〳〵と失ひますが殘念故、是から柳生の屋敷へ行かず、影をお隱しなされませ。

又右　なに、影を隱せとは。

権兵　今旗本衆の親仁株、權現樣から引續き三代勤むる大久保樣へ、此の事をお話し申してお頼み申せば、必ず匿つて下さりまする、今日のところは期を延し將軍家へ大久保樣から、御前試合を申上げたら、元よりして武藝好きな將軍樣、お許しあるに違ひない、其の時向うを打倒し、懲らして

遣りたうござりまする、よし又萬一時の運で、向うが勝になりましたら、柳生殿の手討になつても仕方がないと諦めますが、たゞむざ〳〵と犬死をなされましたら、十兵衛樣の恥辱ゆゑ、よく考へて行く事は、止しになされて下さりませ。

ト權兵衛思入あつて言ふ、又右衛門忝いといふ思入にて、

又右　師匠の縁を結びしも、僅かなれど信義に厚く、此の身を思ふその異見、徒には聞かぬ忝い。既に夜前靱負殿に暇乞ひに參りし折、矢張りこなたと同樣に影を隱せと言はれしが、出所知れざる浪人故、卑怯未練に逃げ隱れしと、誹謗されんが口惜しく、招きに應じて今日參り、柳生の手討に相成ると、靱負殿にも斷りて、我が運命も是までと、覺悟を極めて參るのぢや。

權兵　其のお覺悟は申さば御短慮、私風情の體なら、それまでのことでござりますが、名に負ふ柳生十兵衛樣がお仕込みなされて極意迄、皆傳なされたあなたの體、先づ日本に何人と指を折らるゝ勝れた腕前、卑怯未練といはれても、後に其の名を上げるのが御身の譽れでござりまする。出過ぎた事と思召さず、此の權兵衛が御異見をお聞きなされて下さりませ。

又右　眞身も及ばぬ其の異見、實に感涙がこぼるゝ程それがしは思ふ故、其の異見につきたいが、先年江戸表へ參りし折、先師の家故柳生家へ委しく申して免許を受け、其の上にて道場を開くべきに

無断にて柳生流劍術指南と門前へ看板懸けしは我が誤り、申さば自業自得なりと、我は覺悟をいたせし故、折角の異見ながら用ゐざるを許してくりやれ。

權兵　すりや是程に申しましても、屋敷へお出でなされまするか。

又右　此の儘影を隱しなば、卑怯未練の名をとりて、此の身ばかりか先師の恥辱、是より參つて一命捨て、卑怯の名をば殘さぬ決心。

トきつと言ふ。權兵衛も是非ないといふ思入あつて、

權兵　さう御決心の上からは、最早お止め申しませぬ、是非もない事にござりまするが、世界に稀な達人を失ひますが殘念で、悔し涙がこぼれまする。（ト權兵衛手拭を額へ當てゝ泣く。）

又右　然し柳生の屋敷へ行き、萬一試合に到りなば、十に八九は勝つ所存。又飛彈守の手討になるともやみ／＼とは討たれまじ。（トきつと無念の思入あつて、）機に臨み變に應じ、相打位になるであらう、明日の沙汰を待つてゐやれ。

權兵　其の御樣子を承はる爲め、若黨なり草履取りなりと、お供にお連れ下さりませ。

又右　一緒に連れて參つた所、たゞ玄關に控へるのみ。我が手討になりしと聞き、若し粗相でもあつた時は、共に一命捨てねばならぬ、それぞまことの犬死、それより手討になつたらば、よく葬りて

墓印を建てゝくれるが何よりなるぞ。

權兵　それはお案じなされますな、いよ〳〵左樣なりましたら、門弟中で亡骸を引取りまして寺へ葬り
立派に墓を建てまして、追善供養をした上で、無念を晴らさにやおきませぬ。

又右　それは所詮及ばぬ事、其の身を果す悲故、必ず無用にしたがよい。

權兵　いゑ高の知れた小大名、後ろ楯は大久保樣、八萬騎が尻押し故、大丈夫でござりまする。

下下手より門弟四人出て、

四人　最早刻限にござりまする。

又右　むゝ、供の者を玄關へ廻せ。

四人　畏つてござりまする。（ト下手へはひる。）

權兵　それでは是から柳生の邸へ、直にお出でなされますか。

又右　木挽町まで餘程の道、遲刻せぬやう參るであらう。

權兵　これが試合であるならば、お勝ちなされてお歸りあれど。

又右　又柳生殿の手討にならば、

權兵　再びお目にはかゝられませぬ。

又右　まことに是れが今生の、

權兵　お暇乞でござりまする。（ト權兵衞又右衞門を見て、愁ひの思入。又右衞門思入あつて。）

又右　日頃こなたは短氣な性質、時折異見を加へたが、最早異見もいたさねば、此後はきつと愼しまれよ。

權兵　御異見に附きまして、愼みますでござりまする。

又右　どりや、參らうか。（ト刀を提げ立上り、權兵衞を見返る。）

權兵　お名殘り惜しうござりまする。

ト兩人名殘りを惜しむ思入。此の時下手にて、向う邸の時廻りの聲する。

時廻　六つ半でござい。

ト是にて奧より門弟四人出來る、是と一緒に下手へ、中間子分駕籠舁出來り、

○

　少々時刻が、

四人　遲れましてござりまする。

又右　むゝ、路次を急いで參るであらう。

權兵　木挽町までは餘程の道、幸ひ駕籠がござりますれば、是れへ乘つてお出でなされませ。

又右　いや〳〵、駕籠には及ばない。

權兵　ではござりませうが、お心急き、

又右　む〻、然らば詞に隨はん。

權兵　いざお召しなされませ。

ト合方きつぱりとなり、駕籠を前へ出す又右衞門是へ乗る、此の内權兵衞奥へはひる。見返りて

又右　權兵衞、如何いたした。（ト權兵衞奥よりつか〳〵と出て、）

權兵　ちよつとお待ちなされませ。（ト火打石に切火を打かけ、）御機嫌よろしう、いざ、お見送り。

四人　いたしませう。

又右　いや、見送るには及ばぬぞ。

ト駕籠の垂をおろす、駕籠舁杖をぬき、中間附いて花道へはひる。子分も下手へはひる。權兵衞門弟跡を見送り、

權兵　小天狗といふ異名を取つた勝れた腕の先生故、大丈夫とは思へども、向うも名におふ將軍家へ、御指南をする飛彈守、どんな手段があらうも知れねえ。

○　かういふ時は、神の助け。

△　御苦勞ながら唐犬殿、

□　貴公が日頃信心なす、

◎　目黒不動へ祈誓をかけ、

子分　どうか先生の勝利になるやう、

權兵　むゝ、水垢離取つて、

　ト立上るを、道具替りの知せ、

お願ひ申さん。

　ト此の模樣よろしく、早き合方にて、道具廻る。

（柳生家使者の間の場）――本舞臺總て平舞臺折廻し、柳生家二蓋笠の紋散らしの襖、上下へ折廻し障子屋體の出這入り、上より同じく大欄間をおろし、高麗緣の薄緣を敷き詰め、花道の揚幕杉戸の出這入り、總て柳生家使者の間の體、爰に家臣右內、吾八、九郞兵衞、七藏の四人控へ居る、此の見得、調べ、合方にて道具留る。

右內　此の頃世間で噂をなす、荒木又右衞門といふ浪人が麴町へ道場を開き、柳生流劍術指南と看板懸

けしは横道者。
吾八　もと、何處の產れなるか、其の生國も確と分からず、何れに於て柳生流を修行なして參つたか、當時將軍家の御師範たる、御當家をも憚らず、
九郎　柳生流劒術指南と、然も大きな看板を門へ懸けしは無禮な奴、聞けば町奴の者共が、大分弟子になりしとやら、
七藏　二葉の內に苅らずんば、斧を用ゐるに至る故、昨日麴町の荒木が宅へ佐々木殿が使者に參り、今日當家へ參る筈。
右內　最早刻限過ぎたれば、見えられさうな、
三人　ものでござる。（ト爰へ花道より取次の侍走り出で、花道にて）
侍　はツ、申上げます。荒木又右衞門殿、參られましてござりまする。
ト言ひ捨て引返してはひる。
右內　此由御前へ申上げん。
吾八　御兩所には、打合せの通り。
九郎
七藏　承知いたしてござる。

ト右内、普八は上手へはひる。兩人は囁き居る。是れより床の淨瑠璃になり、

〽行く空の朝日の光り箔押の紋に輝く柳生家の、きらびやかなる使者の場へ、案内につれて又右衛門、刀を提げて出來れば、兩人は出で迎へ、

ト花道より使先に、荒木又右衛門刀をさげ出來り、下手へ住ふ。侍は下手へはひる。九郎兵衞七藏の兩人こなしあつて、

九郎　荒木氏には遠路の處、

七藏　御苦勞千萬にござりまする。

又右　これは／＼、御挨拶恐入りまする、路次に暇取り遲刻せしは、何卒御宥免下されい。

九郎　今日は主人より申附にて、貴殿をば御目見得以上の御取扱ひ、

七藏　定めて只今表門を開いてお通し申せしならん、それに御刀御持參は、如何の儀かと存じまする。

又右　御尤もにはござれども、それがしは浪人の身に若黨を召連れず、草履取りに刀をば持たせまするも、武士道に背きます故餘儀なくも、自身に持參いたしてござる。

九郎　是より御旗本衆御列座にござりますれば、御刀御持參は失禮なり、斯く申す雪澤九郎兵衞。

七藏　曲淵七藏、私共が大切に、御刀お預かり申すでござる。

又右　はゝ、〽いふに否とも言ひ兼ねて、然らばお預け申すでござる。
　　ト舞臺へ來り、刀をさし出す。兩人是を受取り。
九郎　慥に兩人お預かり申す。
七藏　御安心の下されい。
又右　然らば、御案内下されい。
九郎　暫く是にお控へ下され。
七藏　只今案内いたすでござる。
〽いひ捨て奥へ入りければ、跡に荒木は案内の人もなければ兎やせんと、躊らふところへ又兩人近習の侍立出でゝ、
　　ト九郎兵衛、七藏奥へはひる。荒木思案の思入、爰へ又右內吾八出來り、
右內　これは〳〵荒木氏には、定刻通りによくこそ御入來、
又右　昨日は遠路の處御使者のお役目、御苦勞に存じまする。仰せに隨ひ又右衛門、參上いたしてござりまする。御前よろしうお執成しを願ひまする。

右内　主人もお出でと承はり、殊の外お悦び、只今御面會いたすでござる。

吾八　拙者は梅田吾八と申すもの、以後はお見知り下さりませう。貴殿の御名前高き故、手練の程を見物仕りたいと、大名方が三家程只今お出でござりまする。

右内　御門弟とは申せども、大名方の御列席へ帶刀はなりませぬ、其の差添は私共が、

吾八　慥かにお預かり申しますれば、お渡しあつて無刀になり、御目見得をいたされい。

又右　お大名方の御面前へ帶刀は恐れあれど、格別の思召しを以つて、此の一刀はお許しあるやう、お執成しを願ひまする。

右内　こは荒木氏のお詞とも覺えぬ、御大名方のお目通りへ帶刀いたす方がござるか。

吾八　たとひ浪人なればとて、武士道はお心得ある筈、速かにお渡しあれ。

〽渡せとあるは武士道の、法則故に返答も、荒木は是非なく思案を極め、

又右　御許容なくば御法通り、差添お渡し申すでござらう。

右内　いざ、お渡しあれ。（ト是にて又右衛門差添も渡す。）慥にお預かり申すでござる。

吾八　是にて憚ることなければ、お目通りをいたされよ。

又右　はッ、畏つてござりまする。

〽案内を受けて又右衞門、心ならずも奧の間へ、打連れてこそ、

ト兩人先に立ち、荒木附いて上手障子屋體へはひる。三重にて此の道具廻る。

（道場の場）——本舞臺三間の間平舞臺、正面板羽目、上の方九尺折廻し杉戸、下の方一間杉戸の出はひり、中板敷、上下薄縁、白木の机の上に、神酒徳利をのせし三方、奉書を二枚敷き、長熨斗をのせし三方能き所に飾りある。上より大欄間をおろし薄縁を敷きつめ、調べにて道具留る。と直に淨瑠璃になり、

〽入側の廊下隔てし道場も、流石天下の御指南番、檜造りの結構に目を驚かすばかりなり。

ト此の内下手杉戸の内より、吾八先に又右衞門出來り、下手にて、

吾八　暫く是れへお控へなされい。

〽指圖に任せ控ゆれば、又も兩人立出で、

トよろしく眞中へ住ふ。上手杉戸の内より家臣仁右衞門、三太夫麻上下にて出來り、

仁右　梅田殿、それにござるか。

兩人　荒木殿よな。

吾八　左樣にござりまする。(ト兩人下にゐて、)

仁右　手前は當家の臣双川仁右衞門、

三太　鱗木三太夫、以後はお見知り、

兩人　下されい。

又右　田舍産れの無骨もの、萬事不心得にござれば、よろしくお引廻しを願ひまする。

仁右　其儀は承知いたしてござる。只今主人飛彈守、御面會申すべし。

三太　それに付き當家の先例、試合の節は御懷中を、改めまするでござる。

ト合方きつぱりとなり、

又右　はッ、所持いたすは此の紙入。(ト紙入を出して渡す。)

三太　御懷中物はよろしうござるが、其の扇をお渡しなされ。

ト又右衞門思入あつて、

又右　御法によつて兩刀共、只今お渡し申したれば、扇子だけは御猶豫下され。

仁右　常の扇子でござるなら、其の儘にお許し申すが、鐵扇故に許されませぬ。

又右　とは又何故。

仁右　鐵扇は武器なる故、帶劍も同樣なり、お許し申すことならねば、速かにお渡しなされい。
三太　小身ながら我が主人飛彈守は、大名にて、將軍家へ御指南をなす身分でござる。

　　ト下手より右内、九郎兵衞出來り、又右衞門を取卷き、

右内　只今、次にて承はれば、浪人の身が武器を携へ、
九郎　主人に面會なさんとは、近頃其の意を得ざるなり。
吾八　古例に任せ其の鐵扇、お渡しめさるか。
七藏　いなむにおいては其分には、此方とても、
四人　いたされぬ。
又右　古例をそむくにあらざれど、高の知れたる此の鐵扇、人を害する器物にあらず、各々方のお執成にて、是れだけ御許し下されい。
仁右　いやく、古例に許されぬ、當時世間で小天狗と異名を揚げられし荒木殿、許してくれとは卑怯千萬。
三太　其の鐵扇を賴みにするは貴殿にも似合はぬこと、後日の恥辱でござらうから、疾くくそれを、
兩人　渡されよ。

〽前後左右を取圍み、退引させぬ手詰となり、今は詮方荒木の當惑、これまでなりと覺悟を
極め、

又右　古例とあれば是非に及ばず、此の鐵扇もお渡し申さん。（ト鐵扇を出す。）

仁右　流石は荒木又右衛門殿、當家の古例をそむかずに、

三太　帶せし鐵扇渡されしは、是でこそまことの武士、

右内　一同感心、

皆々　いたしてござる。（ト上手より近習一人出て、）

近習　はッ、只今御前がいらせられまする。

仁右　最早是へいらせられまするか。

又右　是にゐても、よろしうござりませうや。

仁右　苦しうござらぬ。

〽折柄こなたの一間より、立ち出で給ふ飛彈守、さすが天下の御指南番、威あつて猛く劍道
もさこそと、思ひ知られけり、

ト上手障子の内より柳生飛彈守、上下殿の拵へ、一本差しにて出來り、跡より近習二人刀を持ち、一

人は白鞘の刀を持ち出來り、諸士皆々跡へ下がる。
〽平伏なせし又右衛門を、打見やりて座し給ひ。

柳生　こりや仁右衛門、荒木又右衛門は、

仁右　則ち是に、控へ居りまする。

柳生　荒木又右衛門とは其の方か。

又右　はツ、お招きに預かりて、計らず今日御目見得仕り、大慶至極に存じまする。

柳生　承れば、先頃より、麹町五町目に於て柳生流劍術指南と看板を懸け、稽古をなせしと申すが、それに相違あらざるか。

又右　浪人の身のたつきに未熟なる業も顧みず、道場を開き看板を懸け、町家の者へ劍術を指南いたしてござりまする。

柳生　當柳生流は忝くも、將軍家へ御指南申す大切なる流儀なり、然るに當家の許しも受けず、みだりに柳生流の看板を懸け、稽古いたすは不屆なり、此の科に依つて手討になす、覺悟せよ。

又右　江戸表の樣子を存ぜず、お許し受けず柳生流の看板懸けしは我あやまり、御先例のことなれば今更お詫びいたすとて、御赦免はござるまじ、是非もなき次第故、御手討の儀承知仕る。

柳生　聞きしにまさる人體骨柄、一々器量あるものと思ひしに違はず、速に受をなせしは能き覺悟。

へ一命捨つるに動ぜざる又右衛門が大丈夫を飛彈守は打見遣り、手練の程を試さんと肩衣刎ねて襷をかけ、近習が差出す白鞘の、刀を拔いて紙にて拭ひ。

ト柳生は肩衣を刎ね、近習より受取りし襷をかけ、又白鞘の刀を受取り、鞘を拂つて懷紙にて拭ふことあつて、

又右衛門、是へ出よ。

又右　御前暫らく御猶豫下され。

柳生　なに、猶豫せよとは。

又右　又右衛門、今生のお願ひがござりまする。

右内　やあ、此の期に及び願ひなど〻は。

吾八　近頃卑怯未練なり。

柳生　いや今生の願ひとあらば、聞き届けて遣はさん。して、其の願ひとは。

又右　それなる三方の熨斗を頂き、然る上にて快くお手討に相成りたし。

九郎　いや、荒木殿には、血迷はれたか。

七藏　是れなる熨斗を頂きたいとは。

柳生　いや、望みに任せ遣はすべし、それ。（ト三太夫に指圖する。）

三太　いざお熨斗を頂かれよ。（ト三方を又右衞門の前へ出す。）

又右　有難う存じ奉ります。

〽三方取つて押頂く、望みは誰も白紙の熨斗に敷きたる奉書を、取るより早く引きしごき、それを携へ座を進み、

ト又右衞門三方を押頂き、奉書を引拔き前へ出て、

いざ、お手討になされませ。

柳生　おゝ、よい覺悟ぢや。

〽飛彈守は上段に、光り鋭き一刀を振りかざして立ちかゝれば、又右衞門は扱きたる一尺餘りの奉書を小太刀にかへて靑眼に、突先す手先惣身に、一分の隙もあらざれば、切込むことも叶はずして、

ト兩人ぢつと睨み合ひ、思入あつて、

〽雲を呼び風を起す互ひに術はありながら、睨み合つたる龍虎の爭ひ、並居る諸士は唾を飲

んで、手に汗握るばかりなり、飛彈守は勝れたる荒木の手練に感じ入り、

ト鳴物をあしらひ、柳生刀を振上げる、又右衛門は奉書を突付ける、是にて柳生斬れぬ思入、諸士皆々氣を揉み捺へる、柳生感心のこなしあつて、

はて、あつぱれなる手練なり、五體に毫髪の隙なきは、容易ならぬ劍術者、何れに於て斯ほどよで、柳生流を修行なし、斯く上達をいたされしぞ、包まずそれを明すべし。

又右　拙者事は大和國、帶解村にて壯年より、柳生十兵衛三吉殿の弟子となつて修業なし、皆傳受けてござりまする。

柳生　扨は實兄三吉殿の高弟なりしか、さもさうずさもありなん、なかなか以て我輩の、及ぶべき業にあらず。

又右　はゝ、過分の御意を蒙りて、又右衛門が身の面目、大慶至極にござりまする。

〽危ふき命助かりて、身をへりくだり敬へば、飛彈守は打背き、

ト飛彈守刀を鞘へ納める。又右衛門は下手へ下り平伏する。

柳生　これまでみだりに柳生流の、看板をかけ指南なす、浪人共を呼び寄せて、其の科を責め手討になすと專ら世間へ流布なすも、あながち手討になすに非ず、其の業鈍き浪人共が、當柳生流の指南

をなし、萬一他人と試合の折り、打挫かれなば流義の恥辱、それゆゑに浪人共が柳生流の指南をなすを聞けば、其の儘にさしおかず、邸へ呼寄せ試せしが、當家の權威に恐怖なし、震へわななく者多く左樣な者には異見を加へ、他國へ參りて稽古をなすやう、それ〳〵手當の金子を與へ立退かせしゆゑ世間にては、柳生家へ呼ばれしものは、手討になると專ら巷說に申すさうなが、決して一命斷ちしにあらず、然るに又右衞門が非凡の手練、今日よりして柳生流の師範をなすとも苦しからず。

又右　すりや柳生流の師範をば、お許しなされて下さりまするか、はゝあ、有難う存じまする。

〽又右衞門平伏なし、有難淚にくれけるが、荒木は威儀を改めて、

測らず今日お許しを蒙りますも先師の御蔭、御存生の其の折を思ひ出すも淚の種、始めは風の心地にて枕にお就きなされしが、次第に病は重くなり、日夜門弟入替り御看護を申上げ、神に祈り佛に賴み、祈念なせしもしるしなく、明日をも知れぬ枕邊へ私をお呼びなされ、最早壽命も旦名なれば、息ある内に其方へ流儀の奧儀を授けんと、柳生眞影淸光月皆傳の上遺物ぞと、傳書の一卷お讓り下され、飛び立つ程の悅びも憂となつて其の夕、御他業にや先師には、眠るが如く御臨終、はかないことでござりました。

〽鬼をも挫く強勇の、荒木も師匠の恩義をば、思ひ出して胸曇り、軒端の雨かはら〳〵と、涙に袖を絞りける。（トよろしく愁ひの思入あつて、柳生もこなしあつて、）

柳生　我も其の折は故あつて、旅中にて屋敷に居ず、委しき事を存ぜざりしが、扨は御身が實兄の看護せしとは忝なし、して讓り受けし一卷は、今日持參いたせしか。

又右　お手討になる覺悟故、昨夜備前の藩中なる渡邊靱負と申す仁に、預け置いて參りし故、明日受取り持參なし、御覽に入れるでござりまする。

柳生　われも三吉殿の記念とあれば、對面をなす思ひなり、持參いたすを樂しみ居るぞ。

又右　それのみならず御在世の、御物語りを申上げん。

　ト此の内以前の仁右衞門、三太夫下手へはひり、此の時大小、鐵扇を持ち出來り、

仁右　今日お出での諸侯方、荒木氏の立合を達て御所望なされますれば、

三太　所詮お相手にはなるまいが、門弟の内八人とお立合ひ下さらば、

仁右　有難う存じまする。

又右　諸侯方のお望みならば、お立合ひ申すでござる。

　ト下手より八人の門弟、白の襷、鉢卷、股立にて、竹刀を持ち出來り。

三太　いざ、お支度をなされませ。
又右　いや、支度には及び申さぬ。
　　ト是をきつかけに白囃子になり、又右衞門大小を後ろへ置き、鐵扇を持ち前へ出る。八人は竹刀を持ち下手へ並ぶ。此の時上下の杉戸を引きぬき、内に上下一本ざしの見物大勢居る。
　　御用意よくば。
八人　はッ。（ト打つてかゝる、ちよつと立廻つて、誂への鳴物になり、又右衞門鐵扇にて烈しき立廻りよろしくあつて、八人を打据ゑる。）
柳生　ほゝお、あつぱれ〳〵。
　　ト八人は下手へはひる。
仁右　まことに電光石火の如く、
三太　目にも留らぬ、
皆々　今の早業。（ト飛彈守立上り、）
柳生　實に小天狗と、
又右　はッ。

ト辭儀をする、飛彈守扇を上げるを、木の頭。

柳生　賞すべし〳〵。

ト扇を上げてあふぐ、皆々感心の思入、引張りよろしく、時の太鼓にて、

ひやうし　幕

奉書試合（終り）

師走の空の煤掃に叩く疊のほこりより浮名の立ちて勘當受け憂事積る又十郎が雪の簑輪の山中に忍ぶと聞いて腰元の小菊が親の佐五兵衛と尋ねて行し伊香保道後よりおくる狼の九助がたくみに乘せられし駕籠に泣居る幼兒を助けて戀の疑受け是非なく殺す危きを止むる坂部京太郎眞龍軒がゆるす奥儀を土産となし但馬守と夜中の手あはせ是講談の柳生傳

壽改年大宮舞臺開再新敷新富座の榮

往來も繁き淺草に强ねだりする中間を打懲せしが遺恨となり迎ひを受て五郎兵衛が妻のお汐や淸兵衛が留るも聞で内藤の邸で試合に勝し故賊の難儀に大番家一つ原田が下知により拷問嚴しく卯之助を救ふ哀れな三の切語る横目が眼に淚一心太助は彫物の命に替て再調べを願ふをりから治郎助が惡事の自訴に善人榮ふ彦左衛門が名譽の裁判これ貸本の武藏鐙

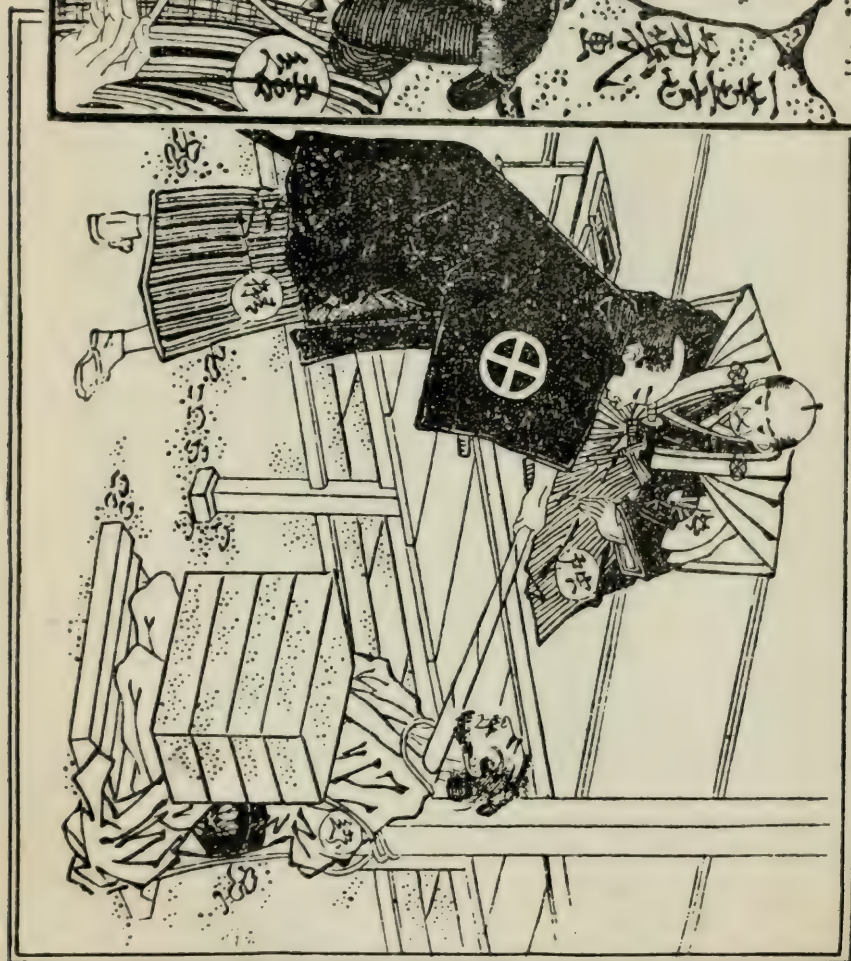
芽出柳緑翠松前

めだしやなぎみどりのまつまへ

「柳生と松前屋」は明治十六年一月、作者六十八歳の時新富座に稿下上演された。講談によつた通し狂言であるが、大好評であつたし、作者晩年の作中注目すべきものである。六二連の劇評によると「右團次の又十郎よく嵌つて申分なし、左團次の柳生更けたる拵へいかにも將軍家の御指南番たる人品ありてよく、大久保邸へ來り奧底なき話をする所實際を見るが如し。（此處は作もよく働いてゐる。）二役の内藤小旗本の風采を寫し得て妙、魚賣の一心太助打つてつけの役、大久保が振上げたる刀の下に天下の一大事を申上げる所至極の大出來大當りなり。小團次の惡中間もはまり役、仲藏の彦左衞門は申分なく仲藏が彦左衞門か彦左衞門が仲藏かと思はるゝ位當狂言第一等の當りなり。菊五郎の五郎兵衞は兎もすれば意氣になり俠客風になつて、元が武家出で今は藏前の米屋の亭主、劍術が好きで武張つた人と見えぬ恐れあれども、牢問ひの場捕物の場は申分なく、二役の次郎兵衞も無造作にしてをれど大いによし。秀調の靜江人柄なる武家のてかけらしく見え、おしほも愁歎其他よくこなしたりき」とある。

書卸しの時の役割は、尾上菊五郎（松前屋五郎兵衞、張番次郎兵衞）、中村芝翫、（坂倉屋甚右衞門、丸目藏人）、市川左團次（柳生但馬守、一心太助、內藤藤左衞門）、中村仲藏（大久保彦左衞門）、市川右團次（柳生又十郎、番頭清兵衞）、中村福助（子息京太郎、坂倉娘おなみ）、坂東しう調（妾靜江、五郎兵衞女房おしほ）、市川小團次（浪士坂部小十郎、中間次郎助）、尾上松助（若黨九助、旗本內田内匠）、尾上菊之助（丁稚卯之助）、澤村源之助（腰元小菊）等であつた。

挿繪にしたのは、歌舞伎新報に掲載された芳幾筆の牢問ひの場と五郎兵衞、太助の似顏繪である。

大正十五年七月下旬　　校訂者

芽出柳緑翠松前（柳生と松前屋―六幕）

序幕　木挽町柳生家の場

〔役名〕―柳生但馬守宗矩、米屋佐五右衛門、柳生の若黨九助、用人萩原惣兵衛、同家臣竹田嘉藏、同岡本新平、同若黨重藏、中間友平、同九助、同權六、同佐内、米春、料理屋の若い者、柳生又十郎。宗冬の妾靜江、腰元小菊實は佐五右衛門娘お菊、腰元松枝、同紅梅、下女おさが等。〕

〔柳生家煤掃の場〕―本舞臺四間折廻し、長押附の欄間、上手畫心に一間の床の間、此次地袋違ひ棚正面入側の心、廊下の片遠見、いつもの杉戸、襖を取りて庭次の間など見ゆる誂へ、總て柳生家の座敷煤掃の體。棕梠箒に采配を取り散らし、玆におさが丸髷のはした女中、白地の浴衣の上ッ張り手拭を冠り、嘉藏、新平袴股立ち、錣頭巾を冠り、重藏若黨のなり、友平、久助、權六、佐内紺看板の中間、股引尻端折り、頭巾手拭など思ひ〳〵に冠り、おさがを胴上げにして居る、此の見得目出度々々の唄に、節季候の鳴物を冠せ幕明く。

皆々　目出度々々の若松さまよ、枝も榮えて葉も茂る、おめでたや〳〵。

卜口々に唄ひながら胴上げよろしくあつて、よき所へ突つ放しにおさがを落す、おさが腰をさすりながら、

さが　あいたゝゝゝ、ひどいねえ、まあ、いやといふ程お臀をぶつたよ、あいたゝゝゝ。

嘉藏　それで少しく小さくなり、三尺口の出はひりがつかえぬやうになれるだらう、大きいのも幾らもあるが、こなたのは珍らしい、とんと辻番所の行燈のやうだ。

新平　町方の奉公と違ひ、半纏が着られぬゆゑ、背負帶をして隱さうとすれば、猶々大きく見えるゆゑ、屋敷女中は十が八九、そんなにお臀の大きいものだ。

重藏　いやもう一樣にも言はれませぬ、お腰元の小菊どのは、ほつそりとした柳腰、慾をいへば最う少し大きい方がうまさうだ。

友平　おさがどのもお屋敷へ上つた折は、瘠ッぽちで、さのみなお臀でもなかつたが。

久助　こんなに大きくなつたのは、何といつてもお屋敷は、御奉公が樂だからだ。

權六　いやそればかりではない、おさがどのは若黨の九助どのと、うまい中だといふ事だから。

佐內　そんなに大きくなつたのだらう。

さが　誰がそんな事を申しましたか、やかましやの御用人萩原さまのお耳へは入つたら、九助どのも又

嘉藏　わたしもお煤掃の一萬度、おはらひ箱にならねばならぬ、いつたい誰が言ひましたえ。人は言はぬがそなたが部屋で、やゝともすると惚けるので、今日此頃は大評判、誰知らぬものはない。

新平　萩原どのは諸事萬事拔目のないおかたゆゑ、大方とうに耳に入り、知つてござるに違ひない。

重藏　何れ近々二人とも、お拂ひ箱になるだらう。

さが　えゝも、御吉例のお煤取りは來年の事始め、延喜でもないそんな事を、嘘にも言つて下さいますな、鶴龜々々。

友平　これさ、そんなに御幣を擔いでも、古い注連の大根や牛蒡で、御幣ぐるみに梵天國。

久助　このお煤はきが前表で、疊のほこりを見るやうに、叩き出されたことなれば。

權六　九助どのと一緒になり、世間晴れて其のお臀を、突出して貰ふがいゝ。

佐内　此の上大きくなつたら、一人で持ちあげることが出來まい。

さが　大きにお世話でござります。

嘉藏　かやうな大きなお臀より、今も話しの柳腰、お腰元の小菊どのを、まだ胴上げにいたさぬが。

新平　何處の隅に隱れて居るか、不斷側へも寄られねば、かういふ時に胴上げをしたいものだ。

重藏　御祝儀の事ゆゑに胴上げもよろしいが、冬至は過ぎても目に立つ程まだ日の延びたが知れぬ暮、
さが　今にお蕎麥をいたゞくと、直に七つのお時計ゆゑ。
友平　暮方になると、寒いから、
久助　日のあるうちに手を揃へ、
權六　さあ〳〵早くお臺所の、
佐内　煤を拂つてしまひませう。

ト目出た〳〵の唄になり、皆々わや〳〵言ひながら奥へはひる。やはり此唄にて下手より紅梅・松枝、白地の浴衣を上つ張つて着た腰元にて、襖を一枚づゝ持て出來り、直に上手の屋體へ建てることあつて、

紅梅　松ヶ枝さん、お前さんのお髪は、大層亂れてゞござんすが、胴上げにお逢ひなされましたか。
松枝　今しがたお茶の間で嘉藏さまに見附けられ、大勢の衆に胴に上げられ、髪も何もだいなしにしましたわいな。
紅梅　ほんに御吉例とはいひながら、お煤取りの胴上げは、なくてもがなでござりますなあ。
松枝　これも日頃よい御方と、思ふ人にでも上げられゝば、少しは嬉しうござりますが、寢臭い體のお

中間などに、上げられるのはいやでござりますな。

紅梅　常には堅いお屋敷も、お煤取りは無禮講ゆゑ、お表の衆やお中間まで、よい事にしてわたし達を

やれ背が高いから天井を拭けの、鼻が低いから緣の下を掃除しろのと言ひたいがい。

松枝　今日の敵は一夜明け、追羽根の折仲間へ入れ。

紅梅　皆さんの顏へ存分、墨を塗るのがこちらの腹癒せ。

松枝　お正月の參るのが、

紅梅　待遠でござんすな。

ト右の唄、ばた〳〵になり、奥より小菊、島田鬘振袖腰元なりにて逃げて出來り、よき所にて蹲く。

松枝　おゝ小菊さん、どうぞなされましたかえ。

小菊　今お表の衆にとらへられ、胴上げに逢ひましたわいな。

松枝　今朝からお前さんを皆さんが、目掛けておいでゞござりました。

小菊　さういふ噂を聞いたゆゑ、靜江さまの御部屋へ行き、今まで隱れて居りましたが、御前のお召し

にお廊下へ出る所を捉へられ、胴上げに逢ひましたが、常ならぬ體ゆゑ。

紅梅　え、常ならぬと、

兩人　言はしやんすは。」
小菊　いえ、此間から血の道で常ならぬ體ゆゑ、目まひがしてならぬわいな。(ト胸を押へ居る。)
紅梅　何の障りのない者でも、上げ放しにされた時は、いやな心持でござんすゆゑ。
松枝　ほんに血の道に障りましたばかりでも、目まいがいたしますわいな。
紅梅　まだ納まりなさんせぬなら、
松枝　何ぞお藥を上げませうか。
小菊　有難うござんすが、少し落着きましたゆゑお藥には及びませぬ、ほんにわたしとした事が、胴に上げられ忘れましたが、今靜江さまがお二人に、お菓子をあげるとおつしやつたゆゑ、早うお部屋へお出でなされませ。
紅梅　それは有難うござりますが、大方お大福でござりませう。
松枝　そんなら紅梅さん、早う頂戴いたしませう。
小菊　お表の衆に見附からぬやうになされませ。
兩人　それが肝腎ぢやわいな。(ト捨ゼリフにて、兩人奥へはひる。跡に小菊あたりを見廻し、)
小菊　ふむ。(トこなしある、是れを替つた合方になり、)ほんにとんと船に搖るゝやうな心持であつたなれ

ど、氣を鎭めて居たせるか、少し動悸が落着いたが、落着かぬはさつきの文、あの若黨の九助どのに抱き上げられ、もしやあの折落せしか。どれ、もう一遍捜して見ませうわいな。

ト奥へ行かうとする、此時奥より九助袴なり若黨のこしらへにて出來り、

九助 おゝ小菊さま、爰においでなされましたか。

小菊 や、九助どのか。（ト上手へ行かうとするを、九助留めて、）

九助 これはしたり、そんなにお逃げなされずと、まあちよつとお待ちなされませ。

小菊 わたしやちつと、用があるゆゑ。

九助 御用もあらうがこつちにも、用があるから小菊さま、まあお待ちなされませ。（ト兩人下に居て、）

小菊 さうしてわたしに用といふは、何の用でござんすえ。

九助 今お錠口へお前の親御山城川岸の佐五右衛門どのが、わざ〳〵歳暮にござつたが、何も用はありませぬか、もしあるならば此の九助が、お取次ぎをして進ぜませう。

小菊 とゝさまには逢ひたけれど、先づそれよりは差掛る。（ト又行きに掛るを留めて、）

九助 あゝもし、その差掛ると言ひなさるは、もし落し物ではありませぬか。（ト小菊びつくりして、）

小菊 え、どうしてそれを。

九助　易は置かぬが筮を取つて、占つたより見通しだ、何と當りましたらうな。
小菊　それではわたしが落した物を。
九助　さつき胴上げの其時に、わしが拾つて持つて居ります。（ト是れを聞き、小菊嬉しき思入）
小菊　それはまあ御親切に、よう拾うて置いて下さんした。九助どの有難うござりまする、此お禮は何なりと、きつとわたしがしますゆゑ、拾ひなさんした其品を、どうぞわたしに下さんせいな。
九助　お禮をすると言ひなさりやあ、直に返して上げませうが、其禮はわしの方に、ちつと望みがござります。
小菊　そりや何なりと望みの品を、きつとお禮に上げませう。
九助　そりやあ何より有難い。
小菊　そんなら落した其の品を、どうぞ返して下さんせ。
九助　望みの禮をしなされば、後ともいはず今直に、返してあげる落し物。
小菊　そんならそこに、持つて居なさんすかえ。
九助　持つては居るが、小菊さん、うまくして居なさるな。（ト小菊恥かしき思入にて額を隱す。九助是れを見て氣味合のこなし、合方きつぱりとなり、）かういふことのあらうとは、少しも知らずに三河町の人

宿から此の屋敷へ、奉公に來ると間もなく、奥樣の御法事があつたので、御菩提所の廣德寺へ御佛參のお供をした折、こなたでは知るまいが、初めてしみ〴〵顔を見て、ぞつとする程惚込んだこの九助、いやでもあらうが小菊さん、どうか情婦になつて下せえな。

ト九助思入あつて小菊の手を取る、小菊惡いものにといふこなしあつて、

小菊　わたしのやうな不束ものを、疾から思うて下さんすとは、實に嬉しうござんすゆゑ、お前の心に隨ひませうと、さあ、よいお返事をする時は、わたしは兎もあれ親切なお前さんに不義者の、汚名を取らせにやならぬゆゑ、外の事なら何なりと、きつと望みを叶へませうが、是ればかりは九助どの、どうぞ堪忍して下さりませ。

九助　さう言ひなさるだらうとは、初手から承知して居るが、拾つた物を返して上げれば、何でも望みのお禮をすると、立派にこなたが言ひなさるから、爰ぞ思ひの晴らし時と、一生懸命言ひ出すからは、假令不義の汚名を取るとも、少しも厭ひはしませぬから、どうぞ願ひを叶へて下せえ。

小菊　假令何と言はしやんしても、此事ばかりは、つい應と。

九助　いけなければ仕方がない、わしが拾つて持つて居る證據の品を御用人の、萩原さまへ持出して、表沙汰にしませうか。

小菊　あゝもし、それぱかりは許して下さんせ。

九助　それ見なせえ、さうしたならば數へ日の、暮に及んでひよんな事が、出來るは知れた落しもの、そこを無事に年を越えるは、お前の心たつた一つだ、うんと言つたがいゝぢやあないか。

小菊　それぢやといふて。

九助　いやなら落した證據物を、表沙汰にしませうか。

小菊　さあ、それは。

九助　わしの言ふことを、聞きなさるか。

小菊　さあ、

九助　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

九助　一度だけで往生するから、死んだ氣になり目をねむり、おれの自由になつて下せえ。

ト小菊の手を取りきつと言ふ、是れを振拂ひ、

小菊　わたしや死んでも、いやぢやわいな。（ト九助是れまでといふこなしあつて、）

九助　さう言ひなさりやあわしも意地、腕づくでも自由にします。（ト言ひながら手を取るを振拂ひ、）

小菊　あれえ。

ト逃げるを九助追廻す、目出たく〱の唄になり、兩人追廻しよろしく、此内奥より以前のおさが出來り此中へはひろ。九助小菊と心得ておさがを押へろ、小菊奥へ逃げてはひろ、九助おさがに心附き、

九助　や、おさがゝ。

さが　九助さん、お前はなあ〱。（ト九助の胸倉を取る。）

九助　それでは今の、始末をば。

さが　殘らず聞いて居ましたが、そりやお前あんまりぢや、あんまりぢやわいな。（トをかしみの合方になり、）よもや斯ういふ心ではないと思つて、うつかり油斷をしたのがわたしの誤り、したがお前がわたしをば口說きなさんした其時の、詞は忘れはなさんすまい、ほんにおさがは色白できめ細かな餅肌ゆゑ、ちよつとさはつても氣が惡いの、やれ氣がいゝの可愛いのと煽て散らした其の擧句が、斯うしていろ〱になるからは互ひに夜業內職して金をこしらへ屋敷を出て、町家で何ぞ商ひして氣樂に生涯暮らさうと、言はしやんしたはありや噓かえ、いゝえいなあ、僞りでござんすかいな。そりや小菊さんはわたしより年も若いし又顏も、少しは綺麗でござんすが、そんじよそれには替りはないに、見替へられたが腹が立つ、えゝ悔しい〱、悔しいわいな。

ト涙をこぼし、悔しがる、九助困る思入にて、

九助　これさ〳〵おさが、何も其やうにむきになり、腹を立つには及ばぬこと、今のはほんの常談だ、手前をのけて外の者へ、何で心を移すものだ、さ、もうい〻加減に機嫌を直し、早く奥へ行くがい〻。

さが　ぞつとするほど小菊さんに、惚込んだといふからは、常談ではござんすまい、つひに一度手を取られ、いやと言つた事はないに、何で愛想が盡きたのか、それを聞かせて下さんせにや、わたしや蟲が納まらぬわいな。

九助　これ〳〵そんなにがや〳〵と、大きな聲をしてくれるな。御用人さまへ聞えたら、直に二人は梵天國だ。

さが　それもお前の心がら、わたしの知つた事かいな。

九助　手前を見捨てるとでも言やあしまいし、おれの心がらとは何の事だ。

さが　何の事だかお前の胸に、よく聞いて見なさんせいな。

九助　え〻何時までそんな分らぬ事を、言つて居るのだ。（トおさがの胸倉を取る。）

さが　わたしよりお前こそ、料簡が分らぬわいな。（ト九助の胸倉を取る。）

九助　えゝ、何をしやあがる。

ト兩人胸倉を取り爭ひ居る、爰へ奥より惣兵衛、袴大小用人のこしらへ、刀を提げ出來り、此體を見て、

惣兵　やあ、御法を破る不義の兩人、そこ一寸も動くまいぞ。

九助　それ見ろ、今いふ御用人の、

さが　萩原さまでござりましたか。（ト兩人びつくりする。）

惣兵　言はうやうなき、不屆き者めが。

トきつといふ、合方きつばりとなり、上下より以前の嘉藏、新平、重藏、中間四人附添ひ出來り、よろしく居並び、

嘉藏　只今ちよつと承はりしが、嚴しき掟も存じながら、

新平　不義をせうとは、誰でござるか、大それた奴でござるな。

惣兵　御法を破りし不義者は、これなるおさが若黨九助、言語に絶した奴でござる。

重藏　扨は二人の密通が、あなたのお耳にはひりましたか。

新平　こんな事にならぬ先き、異見をしようと思つて居たが。

久助　うつかり言ひ出し岡燒餅と、いはれるのも詰らぬから。
權六　見ても見ぬ振り、聞いても聞かぬ振りで、だまつて居たが。
佐内　隱す事ほど知れるから、惡い事は出來ぬものだ。
惣兵　こりや中間共が申す通り、好事門を出でず惡事千里を走るの諺、誰いふとなく九助おさが、密通なして居ることは、疾より耳には入りしかど、假令輕き者たりとも罪人出すは不本意ゆゑ、その內に改心なし、御奉公をいたさんかと、情を以て今日まで、聞き流しにいたし置きしが、場所もあらうにお座敷にて、御前を恐れぬ二人の高聲、もはや許し置かれねば兩人とも覺悟いたせ。

　　トこれにて九助、おさが思入あつて、

九助　仰せなくとも不義せしこと、お耳に入らばいや應なく、御成敗に預かることは、豫て覺悟でござりまする。
さが　それに附きましてお願ひは、元私から仕掛けました色戀ではござりませぬ、九助どのが口說きますゆゑ、つひ何したのでござります、どうぞお慈悲に私だけは。（ト言ひかけるを冠せて、）
惣兵　えゝ、默り居らう、是れなる九助が其方に、たとひ何樣申さうとも、御家の御法を思ひなばなぜ其時に斷らぬぞ、今日の期に至り、つひ何したと申して濟むと思ふか、たはけ者めが。

さが　そりやもう其時斷りを、申せばよろしうござりましたが、男に口說かれました時いやといへぬが
わたしのうぶすながらでござりまする。

嘉藏　それは呆れた事なるが、して、其方の生國は何れなるぞ。

さが　はい、わたくしの生國は、相模の三浦でござります。

新平　聞かずともの事ゆゑに、今日までも知らなんだが、それでは名代の相模女か。

重藏　竪にかぶりを振る方だな。

友平　それでは誰が口說いても、

久助　直に出來るに違ひない。

權六　扨さう聞くといやになり、

佐內　幾らくれてもお斷りだ。

惣兵　女は取るに足らざるが、九助は物の理非も分り無分別の年にもあらぬに、何ゆゑ御法を破りしぞ。

九助　面目次第もござりませぬ。（トうつむきになる。）

惣兵　面目ないは知れた事だが、萬一露顯の其時は、成敗受ける覺悟と申せば、元より惡いと存じてせしか。

九助　よく芝居でも申しますが、不義はお家の堅い御法度、何れいづくのお屋敷でも紋切形のせりふゆゑ、十九や二十の者ではなし、最うそろ〳〵と分別も出さねばならぬ三十男、善惡二ツの差別位は知らぬ事はござりませぬが、御當家ばかりは不義をしてもよいかと存じまして、密通いたしてござりまする。（トづう〳〵しき思入にていふ、惣兵衞前へ進み、）

惣兵　當家に限つて臣下の者が、密通をしてもよい事とは、何を以て申し居る、さりとては憎き其一言、さあ何等の仔細かそれを申せ。（トきつとなる、九助落着き居て、）

九助　何もそんなに血相替えて、御立腹には及びませぬ。當家に限つてよいと申すは、上を學ぶ下ゆゑに、御料簡下さりませ。（ト惣兵衞合點の行かぬ思入にて、）

惣兵　なに、上を學ぶ下と申すは。

九助　こりやお明らさまに私が申さぬがよし、又あなたも委しくお問ひなさらぬ方が、却つてよろしうござりませう。

惣兵　いや、不義の詮議を仕掛けしからは、身共の役にも拘はるゆゑ、こりや此儘にはいたされぬ。

嘉藏　さあ、上を學ぶ下といふは、如何なる仔細あつての事か、

新平　もう斯うなつては何事も、隱す譯には參らぬから、

惣兵 有體に申さぬか。
九助 左樣なら申しますが、御用人さまの御役柄で、御詮議をなされますなら、先づ私よりその先きへ御家の御次男又十郎樣の、御詮議をなされませ。
惣兵 何と申す。（ト思入、皆々顔な見合せ。）
嘉藏 すりや、若殿又十郎樣が、
新平 不義をなされて、
皆々 ござりますとか。
惣兵 して〳〵、相手は何者なるぞ。
九助 言ふまいと思つたが、達てあなたがお尋ねゆゑ、包まず申し上げますが、御次男の又十郎樣は、お腰元の小菊どのと、密通をしておいでなされまする。
惣兵 いかど慥に申すには、何ぞ證據があつての事か。
九助 證據のない事は申しませぬ。（ト懐より小菊が落せし文を出し、）今日御家例のお煤取りにて、男女交りの無禮講、最前胴上げの其時に、小菊どのゝ落した此文、『又十郎樣へ、小菊』とべつたり書きし此の名前、これが證據でござりまする。（ト是れにておさが前へ出て、）

さが　まだも慥な證據といふは、小菊どのは身重にて、帶をいたして居りまする。

惣兵　然らば是れにて腰元小菊を、詮議いたすが何より潔白、それ、小菊を是れへ連れ參れ。

重藏　畏つてござります。（ト奥へはひる。）

九助　御用人が嚴しいので、何から何まで行屆くが、餘りお掃除が屆き過ぎると、塵の中から襤褸が出るから、御念をお入れなさるも、程のあるものだなあ。（ト爰へ奥より重藏小菊を引立て出來り。）

重藏　もう胴上げにはしませぬから、まあそれへ坐りなされい。

トよき所へ突きやる、小菊もしやといふ思入あつて、

小菊　さうして私に、何か御用でござりますか。

惣兵　如何にも早速その方に聞かねばならぬ事がある、外でもないが御次男の、又十郎樣と其方は疾から言ひ交して居るであらうな。（ト小菊ぎつくりなし。）

小菊　いえ、左樣な覺えはござりませぬ。

惣兵　まさかあるとも言はれまいが、そちが手跡で若殿へ贈る艶書を此の九助が拾ひしゆゑ、證據となれば最早隱すに隱されぬ、さあ有體に申してしまへ。

小菊　假令何とおつしやつても、勿體ない若殿樣と私風情が、何として言ひ交して居りませう、左樣な

ことは露程も、此身に覺えはござりませぬ。

九助　いゝや覺えないとは言はさぬ、さつき是れを返してくれゝば、何でも禮をするといふので、それから起つた不義の詮議、覺えないと言ひなされば、腹にしめたる五月の帶をしたのは誰が胤だ。

小菊　えゝ。（トびつくりなし氣を替へ、）いえ、左樣なものを私が、何でしめて居りませう。

さが　さうしら〳〵しく強情張るなら、どれわたくしが其帶を解してお目に掛けませう。

嘉藏　それが何より此の場の潔白、小菊もしめて居らぬなら、隱さず是れにて見せるがよい。

小菊　それぢやと申して、お恥かしい。

九助　そんなら不義をして居るのか。

小菊　いえ〳〵、覺えはござんせぬ。

さが　それでは解いて見せなんすか。

小菊　さあ、それは。

惣藏　見せぬは正しく腹帶を、

新平　しめて居るに違ひない。

重藏　こりやいつそ、取押へて、

友平　裸にしてお見せ申さう。

皆々　それがいゝ〳〵。（ト立掛る。此時奥にて）

靜江　その詮議、暫く待ちや。

九助　や、あのお聲は。

さが　大殿樣のお召仕へ。

八人　靜江さま。

ト誂への合方になり、奥より靜江丸髷妾のこしらへ、以前の紅梅、松枝附添ひ出來り、よき所へ住ふ惣兵衞思入あつて

惣兵　委細の樣子を逐一にお聞きありしか存ぜぬが、不義せるものを其儘に、打捨て置かば御當家の、瑕瑾と相成ることゆゑに、詮議いたすを靜江どの、何ゆゑお止めなされしぞ。

靜江　お家の瑕瑾となるゆゑに、御詮議なさるを私が口出しいたすは失禮なれど、奥樣おかくれなされてより、お召仕ひの身ながらも奥を預かる此の靜江、及ばずながら腰元の、詮議は私がいたしまする、暫くお任せ下さりませ。

惣兵　すりや靜江どのが、是れなる小菊の、不義の詮議をなされますとか。

嘉藏　成程これも御尤も、女子は相身互ひゆゑ。

新平　お腰元の御詮議を、静江どのがなさるのは、

重藏　よく下々でいふ、餅屋は餅屋、

佐内　白い黑いの御詮議を嚴しくなされば分りませう。（ト靜江思入あつて、）

靜江　これ小菊どの、もそつと是れへ進みなさんせ。（トいへども小菊うつ向き居るゆゑ、）はてまあ、是れへ進みやいなう。（ト合方改め、小菊少し前へ出る、靜江こなしあつて、）最前よりの大略は一間で聞いて居ましたが、奥様のおかくれ後お奥にみだらな事あつては、わたしが御前へ濟まぬゆゑ、聞き捨てならぬ不義の詮議、そなたは物事内端にて、是れまで粗相せしことなく、御奉公向きに聊かも蔭日向なき利發者、大殿様も御意に入り、よき腰元を置きしゆゑ、目を掛けて遣うてやれと、朝夕お褒め遊ばすゆゑ、女子を預かるわたしの悦び、そりやもう誰しも年若な跡先き見ずの時分には、假令利發な者にもせよ、戀に迷うて主親を捨て、つひには其身をも果すもの往々あるゆゑ、それを御不便に思召し、堅く此道を戒めあるは、臣下の者へ御前の御慈悲、是れが町家の事なれば異見をなして改心させ、無事に濟ませもするけれど、それのならぬが武家の掟、取りわけ御當家はお物堅いとお噂を、他家で遊ばす程なれば、御法を破る其者は所詮お詫びの叶はぬこと、そ

なたも存じて居やるであらう。もう、斯うなつては殿樣に、隱しても隱されぬ、さあ有體に言うたがよい、したが、不義の相手といふは、又十郎樣ではよもあるまい、こりや大方餘所外の同じ名の者であらう。な、うろたへた事申さずと、わしに包まず言うて聞かしや。

ト靜江物やはらかに呑込ませるこなし、小菊涙にくれ有難いといふ思入にて、

小菊　恐れ入りました其仰せ、もう斯うなりました上からは、お恥かしい事ながら包まず申し上げまする、成程只今仰せの、若殿樣と同じ名の、外の男がござります。

新平　御次男樣と同じ名が、御家にあるいはれはない、して外の男と申すは、いつたいいづくの何者。

小菊　さあ、それは。（ト困る思入、靜江もこなしあつて、）

靜江　あゝこりや聞えた、大分そちが宿の近所の、幼馴染といふやうな、さういふ者であらうな。

小菊　はい、左樣にござります。

ト誰にしようかと困る思入、是れにて惣兵衞心附き、とんだ事を言ひ出せしといふこなし、九助前へ出て、

九助　幼馴染の其うちに、又十郎といふ人があるかは知らぬが文の文言、若殿樣に相違ない證據があるゆゑ、萩原さま、お讀みなされて下さりませ。（ト件の文を突きつける。）

惣兵　むゝ。(ト詰る。)
九助　萩原さまが讀まれずば、お召仕ひの靜江さま、お讀みなされて下さりませ。
靜江　さあ、その文は。
九助　わしが讀むのは造作もないが、御詮議をなさる御用人や、お奥を預かる靜江さまが、慥な證據この文を、何でお讀みなされませぬ。(ト靜江惣兵衞困る思入。)それぢやあお役が濟みますまい、さあ依怙贔屓をなさらずに、聞えるやうなお聲にて、お讀みなされて下さりませ。

トきつといふ、この時奥にて、

又十　いや其の艶書、讀むに及ばぬ。

ト替つた合方になり、奥より又十郎袴なり一本差し、若殿のこしらへ、刀を提げて出來り、

靜江　あなたは御次男、
皆々　又十郎樣。(ト又十郎よき所に住ふ。惣兵衞思入あつて、)
惣兵　不義の證據のあれなる艶書、讀むなとお止めなされしは、此の詮議の納まりを、あなたがお附け遊ばしますか。
又十　問ふまでもなく、不義の相手を速かに出す所存。

靜江　さうしてあなたと同じ名の、不義の相手と申しまするは、誰人でござりまする。

又十　その相手は外ならず、柳生の次男又十郎、面目ないがそれがしなるぞ。（ト面目なき思入にていふ。）

紅梅　すりや、小菊さんの不義の相手は、

松枝　若殿樣でござりましたか。

皆々　えゝ。（ト顏見合せ。）

又十　世俗にもいふ如く戀に上下の差別はないと、おのが隨意に濟まざれど、道理を附けていつぞやより言交し居つたれど、かゝる證據のある上は最早包み隱されず、いかにもそれなる腰元小菊と、それがし密通いたせしぞ。

九助　何と萩原さま、今若殿のお詞をお聞きなされば、此の九助が上を學ぶ下と申すも、まんざら無理でもござりますまい。

さが　お側を勤めるお腰元が、お腹へ胤を宿すほどよい事をなさるもの、いやと頭を竪にふる相模女の私が、いたさずには居られませぬ。

嘉藏　何さま主君で手本が出れば、それを見習ふ家來ゆゑ、

新平　上が堅固になさらねば、下がみだらになる道理。

小菊　ト此内靜江惣兵衛ちつと思入、小菊涙を拭ひこなしあつて、

今更申して返りませぬが、あなたにかゝる御恥辱をお掛け申しましたのも、皆私が身のいたづらから、お許しなされて下さりませ。

又十　そちばかりの科ではない、予が不所存より起りしことゆゑ、其の詫びには及ばぬぞ。

小菊　でも勿體ない其の仰せ、賤しい身にて柳生のお家の、若殿樣のお情に預かりました私は冥加に叶ひし事ながら、お家へ疵を附けましたる、申譯には此の場にて、さうぢや。

ト小菊又十郎の差添へ手を掛けるを留めて、

又十　こりや、早まつた事いたすまいぞ。

小菊　斯くなる折はと初めから、覺悟極めて居りますれば、命のお暇下さりませ。

又十　たとひそちが生害なすとも、不義をなしたる又十郎、恥辱の雪げる譯には參らぬ。

小菊　それぢやと申して。

又十　はて、犬死をいたすまいぞ。（トきつと言つて突ツ放す、小菊ハアと泣伏す。靜江思入あつて、）

靜江　そなたが常の氣質では、死なうといふも尤もなれど、懷妊なせし身をもつて自殺いたせばお胤をも、水に流さにやならぬ仕儀、かゝる事は古へよりない事でもあらざれば、必ず死ぬるには及ば

ぬゆゑ、其身を大事に、いえ、身を蟄して御沙汰を待ちや。

小菊　有難うござりまする。

九助　この納まりは萩原さま、どうなさるのでござります。

惣兵　む〻。（ト詰り、是非なき思入にて、又十郎に向ひ、）今更申すも詮なけれど、御壯年には有りうちと申されぬは、劍道の御門弟も數多あれば、人の手本になるお家で、不義いたづらをなさるとは以ての外なる御不行跡、御獨身はあなたばかりか、御舍兄刑部樣にも未だ御獨身、御順に御緣も明年は、必ずお極りなさるのに、僅な所で殘念なお家の瑕瑾になる次第、なぜお愼しみ下されませぬぞ、餘人と違ひ萩原惣兵衞、御幼少よりお側に居れば、他の嘲りを受けまするが、殘念至極にござりまする。

ト思入にていふ、又十郎面目なきこなしあつて、

又十　實に赤面の至りぢやが、是れがいはゆる思案の外、互ひに隱し居つたれど隱されぬは我が胤を、小菊が宿し居つたるゆゑ、遂には露顯に及びたり、斯くならぬ先き親許へ無事に下げて遣はさんと思ひし事も六日の菖蒲、今は是非なきこととなるぞ。

靜江　小菊どのも斯ういふ事が、あるなら早う打明けてなぜ相談はしなさんせぬ、女子は女子同士ゆゑ

仕樣もやうもあらうのに、情ないことしやつたなう。

小菊　疾からあなたへ此事を、申し上げようとは存じましたが、つひ恥かしさに申し兼ね此身は兎もあれ若殿樣の、御身に拘はることゝなり、申し譯もござりませぬ。

ト愁ひのこなし、九助いゝ氣味だといふ思入あつて、

九助　どう成り行くか知らぬけれど、御次男樣が此の儘にお詫びが出來ればこの九助も、御奉公が出來るといふもの、こんな事になつたのも、小菊どのが色よい返事を、いやさ、色の返事を細々と書いた文を落したゆゑ、斯うして見ると高いも低いも、曲つた事は出來ぬものだ。

嘉藏　何にいたせ、九助おさがの不義よりいたして事起り。

新平　小菊どのゝ懷妊も、御次男樣のお胤なりと、

重藏　御自身の仰せにて、知れたる上は是れも不義、

友平　外の事なら押詰つた、節季師走に片附けずと。

久助　目出度き春も濟んでから、出代り月をお待ちなされて、

權六　双方無疵に濟むやうに、よいお捌きも附きませうが、

佐内　それまで待たれぬお家の瑕瑾、こりや内分には、

六人　出來ますまい。

惣兵　如何にも今更内分にいたす譯にはなり難し、此の趣きを逐一に、御前へ申し上げねばならぬ。

靜江　是非ない事にござりますれば、御苦勞ながら此よしを。

惣兵　手前が申し上げるでござる。（ト立掛ると此時後にて、）

但馬　いや、知らせには及ばぬ、只今それへ參るであらう。

紅梅　すりや、此の座敷へ。

新平　御前樣が。

ト誂への合方になり、奥より但馬守、羽織袴一本差し更けたろこしらへにて出來り、皆々辭儀なする、此内紅梅、松枝、奥より褥煙草盆を運ぶこと、靜江眞中へ褥を敷き、此上へ但馬守住ひ、思入あつて、

但馬　襖を隔てゝ此の場の樣子、逐一に承はりしぞ。

靜江　すりや、御前には此の場の樣子を。

惣兵　お聞き遊ばしましたとか。（ト兩人うつむき居る。）

又十　掟を破りし身の不埒、申し譯なき次第、恐れ入つてござりまする。

小菊　只今後悔いたしますれど、泣くより外はござりませぬ。

但馬　今更事を新たになし、申さいでもの事ながら、他家と違つて旗本でも、劍道指南をいたす宗矩、數多の弟子もあることなれば、人の手本になる身の上、かゝるみだらな事あつては、他家への聞え家の恥辱、此儘には捨ておかれぬ、門弟はじめ壯年の家來の者へ見せしめに、又十郎は勘當なす、返すぐも不屆き奴めが。

又十　すりや私は御勘當とな。これみな自業自得ゆゑ、是非もない儀にござりまする。（トぢつと思入。）

靜江　御前樣の御立腹も、御道理にはござりますれど、今日は御家例にてお煤取りのお目出度ゆゑ、どうか此の儘御内分に、お願ひ申し上げまする。

惣兵　以後を禁じて拙者めが、よしなに取計らひを仕れば、何卒此度は御宥免下しおかれまするやう、偏にお願ひ申し上げまする。（ト兩人頭を下げて詫びる。但馬守思入あつて、）

但馬　彼等兩人の詫びを爲すは、そち達の心得違ひ、こゝをよく承はれ。（ト合方きつぱりとなり、）柳生但馬守守矩は、男子數多儲けあれど、兄十兵衞は望みにより家を退き大和に居住、家督なすべき次男刑部は當春より長の病氣、最早一年にも相成れど、本復なすべき驗も見えず、それゆゑ老が頼みに思ふは、又十郎一人なり、その一人の悴をば勘當なしたき事はなけれど、只今も申す如

く劍道指南をいたし居れば、人の手本になる宗矩、かゝる所行の又十郎を此の儘手許へ置く時は是れまで人に後指さゝれしこともあらざりしに、但馬は老耄なしたるか、我が子の愛に誠の武士の魂を失ひて、たゞの老爺になりしなどゝ、一犬吠ゆれば萬犬傳ふる世の譬、竟には流儀の衰微となり、門弟減ずる事あらば、柳生の名跡の瑕瑾となり、先祖へ對してそれがしが此上もなき不孝なり、何程ほしき悴たりとも、子なき昔と諦めれば、左のみ惜しきこともない、耳順の坂も越えてゐながら、我強きものと若い者は定めて思ふであらうなれど、家の恥辱には替へ難し、爰の道理を辨へて再び詫びをいたすまいぞ。今日よりして悴は勘當、又小菊は親許へ早々送り遣はすべし、言はうやうなき不孝者めが。

ト但馬守双方へ思入あつて言ふ。

靜江　御尤もなる仰せゆゑ、

惣兵　再びお詫びもいたし難し。

靜江　是非もない儀に、

兩人　ござりまする。（トぢつとなる。）

但馬　事の起りは九助おさが、彼等も暇を遣はせば、兩人左樣に心得よ。

靜江
惣兵　畏つてござりまする。

九助　斯ういふ事になる上は、お拂ひ箱は元より覺悟、未練にお詫びはいたしませぬ。

さが　是れから二人町へ出て、世間晴れて夫婦となり、氣樂に世界を送りませう。

嘉藏　いやはや、二人が二人とも、呆れた事を申す奴でござる。

新平　それに引替へ若殿には、お氣の毒な儀に。

六人　存じまする。（ト此時以前の紅梅下手より出で、下手に手を突き、）

紅梅　御前樣へ申し上げます。先刻より小菊どのゝ親御佐五兵衞どのが、御機嫌伺ひに參りましてござりまする。

但馬　おゝ左樣か、是れへと申せ。

紅梅　畏りました。

ト紅梅引返して下手へはひる。直に紅梅案内して、下手より佐五兵衞出來り、但馬守を見て下手にて辭儀をなし。

佐五　御前樣にはいつもながら、御機嫌よくお渡り遊ばし、お悅び申し上げまする。

但馬　佐五兵衞幸ひな所へ參りしぞ。

佐五　今日御煤取りの御祝儀と、御歳暮を兼ねまして、先刻上りましてはござりますが、此所へ出兼ねまして、お次に控へて居りましたが、お腰元のお取次にて、やう〳〵爰へ出ましてはござりますが、計らず娘が不仕末を承り、申し譯もござりませぬ。

惣兵　聞いたとあらば改めて、そちへ仔細は申さぬが、小菊は長の暇ゆゑ、今日直に召連れ參れ。

佐五　委細畏つてござりまする。（ト小菊に向ひ、）これ娘、今更申して詮ない事だが十四の春から今年まで厚い御恩になつたを忘れ、若殿樣と不義をなし、そちゆゑあなたは御勘當、親の身にては面目なく、最前からお次にて、もう出ようか〳〵と思ひに思つてやつとの事、お目通りはしたもの〻爰らにあれば穴へでも、おりやはひつてしまひたいわい。あゝ面目ない〳〵。

ト愁ひの思入にて、顏を隱す、小菊顏をあげ。

小菊　と〻さん、どうぞ堪忍して下さりませ。（ト泣伏す、但馬守思入あつて、）

但馬　双方ともに若い者ゆゑ、無き事にはあらざれど、そこを互ひに愼むが、これ人の道なるぞ、今更いうて甲斐なけれど、疾く〳〵この場を立去るべし、あゝ育て甲斐なき事ぢやわえ。

ト此うち又十郎思入あつて、

又十　我がなす業とは云ひながら、生れし家を今日只今、退散いたす又十郎、いはゞ當家の名殘りゆゑ

改めて父上へ、お願ひがござりまする。

但馬　やあ父とは誰がこと、勘當なせば他人も同然、父といはるゝ覺えはないぞ。

　　トきつといふ、是れにて又十郎ほろりと涙を落し思入あつて、氣を替へ、

又十　御憤りはさる事ながら、家を退く又十郎、せめて御病氣の兄上に、暫時の間對面を、お許しなされて下さりませ。

但馬　尤もなる、いやさ、尤もらしく申せども、兄は久しく疳勞にて、何事にも感じ易く、そちが對面いたしなば定めて歎いて病重らん。對面なすに及ばぬぞ。

又十　お詞返すは恐れあれど、申さば兄弟の留別ゆゑ、是非兄上にたゞ一目お逢はせなされて下さりませ。

但馬　えゝ、ならぬと申すに。

靜江　ではござりませうが不常より、お睦じい御兄弟、此儘お別れ遊ばせば、お跡でお歎き遊ばしませう。

惣兵　さすれば矢張り御病氣に、自然とお障り遊ばす道理、時刻をお移しなさらぬやう、手前がよしなに計らひますれば、

靜江　暫しが間御對面を、お許しなされて、
兩人　下さりませ。
但馬　折角の頼みなるが、此の對面は許されぬぞ。
又十　すりやかほどまで、三人が、
靜江　只管お願ひ申しましても、
惣兵　御對面が叶ひませぬか。
但馬　一旦ならぬと申せしからは、刀に掛けても許さぬゆゑ、とく〳〵此座を立去り居らう。
トきつと言ふ。
三人　はゝはあゝ。（ト本意なき思入、佐五兵衞氣の毒なるこなしにて、）
佐五　お年は召せども大殿樣は、常から烈しい御氣性ゆゑ、あゝおつしやり遊ばしては、所詮お聞濟みはござりますまい、お逢ひなされたいはお道理なれど、今日の所は此儘にお立退き遊ばしますがよろしからうと存じまする。
靜江　成程それもさうなれば、佐五兵衞どのゝ詞につき、
惣兵　一先づ今日は、な、それ、お立退きなされませ、其内拙者めが、いやさ、其の内折がござりませ

う。

ト惣兵衞又十郎に、佐五衞衞の家へ行けといふこなし、又十郎呑込み、

又十　兄上に對面せず、殘り惜しき事なれど、お詞背けば此上に、不孝の罪を重ぬる道理、是非なき事と諦めて、此の儘退散いたすであらう。

九助　こつちも同じお拂ひ箱だが、誰にも逢ひたい者はなし。お給金も此の暮まで借りてしまへば損德なし、未練も何にもない九助。

嘉藏　それは今日其方に、渡す譯には參らぬから、

さが　あるのはわたしの、葛籠と手荷物。

新平　後日に宿を呼出し、證書を取つて渡すであらう。（ト此時七ツの時計鳴る。）

但馬　今打つ時計は最早七つ、暮れざるうちに双方とも、早く屋敷を出門いたせ。

ト是れにて但馬守に向ひ、

又十　御壯健にはござりますれど、御老體のことなれば、御身御大切に遊ばしませ。

ト但馬守をぢつと見る。

但馬　おゝ。（ト言ひかけ氣を替へ、）えゝ、何も申さず、早く行かぬか。（ト思入、小菊靜江に向ひ、）

小菊　靜江さまには一方ならぬ、御恩になりし其の御禮は、詞に申し盡されませぬが、有難うございまする。

靜江　ほんにそなたは妹とも、思うて一つに居つたゆゑ、今別るゝは此靜江も、よい心持はせぬわいなう。

小菊　大殿樣初め刑部樣、あなたさまも、隨分お寒さをお厭ひなされて下さりませ。

靜江　そなたこそ身重ゆゑ、隨分體を大事にしや。

小菊　有難う存じまする。

又十　百度千度申しても、名殘りは盡きぬ事なれば、

惣兵　またもやお叱りなきうちに、

佐五　少しも早くお屋敷を、

小菊　お名殘り惜しくもお二人さま、

紅梅　もうお出でなされまするか。

松枝　悲しい事でございまする。

九助　どれ、おいらも宿へ引き取らうか。

さが　はい、皆さん、左樣なら。（ト此内五人立掛ろ、但馬守名殘惜しきを隱す思入、又十郎も思入あつて、）

又十　惣兵衞。

惣兵　はッ。

又十　兄上の御病氣御大切に、遊ばすやう傳へくれよ。

惣兵　委細承知いたしました。

又十　どれ、退散いたさうか。

ト送り三重になり、又十郎先きに佐五兵衞小菊みな〳〵辭儀をなし、舞臺を見返りながら、花道へ行く、但馬守これを見て、顏を背ける、九助おさがは後を通り上手の横へはひる。トゞ花道の三人三重一ぱいに花道へはひる。後靜江惣兵衞ぢつと思入よろしくあつて、皆々顏見合せ、

嘉藏　若殿のお詫びをば、我々どもゝ共々に、

新平　いたす心で居りましたが、御用人初め靜江どのが、

重藏　詞を盡しておつしやつても、お聞き濟みがござりませねば、

友平　所詮無駄ゆゑ、控へて居つたが、

久助　お氣の毒な事でござります。

權六　然し、とんだ騷動で、
佐內　お煤取りが遲くなつた。
紅梅　日の暮れぬうち、お掃除を、
松枝　早ういたしてしまひませう。
嘉藏　御前御免遊ばしませ。（ト皆々辭儀をなし奧へはひる。跡に但馬守思入あつて、）
但馬　こりや靜江、その方事も今日限り、長の暇を遣はすぞ。
靜江　えゝ。（トびつくりして、）そりや何故でござりまする。（ト合方替つて、）
但馬　奧に別れて朝夕の、不自由ゆゑに召抱へしが、心利きたるのみならず、操正しく實體ゆゑ申し分なき其方、それを突然暇を出すと申さば合點が參るまい、なれども退き考へ見よ、武家一統の掟なれど、小菊又十郎が不義せしも互ひに若き身の上ゆゑ、色情に泥むも強ち世界になきことならず、それを勘當せし上は、よい年をしてそれがしが、妾を置いては世間の聞え、爰を以て科もなき其方なれど暇を遣はす、今日直に引取り參れ。（ト是れを聞き靜江是非なき思入あつて、）
靜江　御尤もなる其仰せ、強ひてお遣ひ下されと、申す事もならぬ仕儀。
惣兵　又十郎樣もその內に、一つの功をお立てなされ、御勘當御免になるは必定、その節必ず拙者めが

靜江　又元々に仕れば、お氣は濟みもなさるまいが、御意に隨ひ暫時が間、お宿へお出でなされませ。
　　　仰せを守り親許へ、參る事は參りまするが嘸朝夕に御前樣が、御不自由でござりませう。

但馬　實に心の知れざる者は、使ひにくき事なるが、是れも是非なき浮世の義理。

惣兵　そのお義理を飽くまでも、お立て遊ばす御前ゆゑ、今日御家例のお目出たにも、

靜江　若殿樣の御勘當、就いては三人四人まで、

但馬　暇を出すも武を磨く、但馬守が家名の媒取り、

惣兵　思召し通りお掃除が、屆きますれば新しく、

靜江　又よき春をお迎へ遊ばし、

但馬　時節あらば、其うちに、

惣兵　御勘當も御免あつて、

靜江　お暇出でし私まで、

但馬　再ひ目出度く、（ト指を折つて鳴らすを木の頭、）歸參を待つぞよ。

ト但馬守肩の張る思入、是れを靜江惣兵衞介抱する、此の模樣目出たく／＼の唄にてよろしく、

ひやうし　幕

二幕目

淺草觀音雷門の場
旅籠町松前屋の場
新堀内藤屋敷の場

〔役名〕――松前屋五郎兵衛、内藤藤左衛門、中間次郎吉、近藤内匠、内田主計、中間團助、同金平、御家人久保田彦兵衛、松前屋若い者與助、内藤の小姓久内、坂倉の丁稚長松、坂倉甚左衛門、松前屋番頭清兵衛。松前屋女房お汐、坂倉屋の娘お浪、松前屋の丁稚卯之助、坂倉の下女お仲、卯之助母おもと茶見世のお淺。〕

(淺草雷神門前の場)――本舞臺一面の平舞臺、ずつと上手へ寄せて、二間通し見附柱のある屋體、此の正面奥深に常足の腰掛け、後ろ鼠壁板羽目の蹴込み、上手二枚引違へ障子の出這入り、よき所に三尺さゝら子の臺、此の上誂への茶釜、茶碗をのせる棚、此のうしろ正觀世音菩薩と記せし枠附の長提灯、總體屋根の軒口を見せ、此の下待乳山、白く染出せし紺暖簾を掛け、この屋體に續いて四尺、玄關構へ式臺附の屋體、この前床几に鹽を盛りし土器を並べ、下の方丸物の雷門、朱塗りの彫物よろしく、前面金剛格子、金網の内誂への風神の像、賽錢箱、しんば奉納の大提灯などよろしく、尤も出はひりあり、平舞臺へ床几二脚並べ、上下廣小路の町屋、床見世など、書割りの張物にて見切り、總て

淺草雷神門前の道具、爰に仕出し○△□◎の四人、町人思ひ〳〵のなりにて床几に腰をかけ、お淺茶屋娘、前垂がけにて皆々へ茶を出して居る、この見得楊弓の音、誂への端唄にて幕明く。

お淺　皆さん、お茶をお上りなされませ。

○　いやお淺さん、いつも美しいので引ッ切りなしの此のお客を、たつた一人でこね廻し、世辭で丸めて浮氣でこねて、

△　喜撰の文句で男の子から、茶代を取るのはいゝ腕だが、それも一つの愛嬌さね。

□　何でも當時は女でなければ、よい錢は取れないが、いや錢といへば今しがた奥山の楊弓場で、中間體の三人連れ。

◎　少しの事を種にして、ぐづり掛けて居ましたが、紺看板一枚で貧相な裝だつたから、大名の中間衆ではあるまい。

○　ありやあいつたい、何處の折助だね。

お淺　三人連のお中間衆なら、さつき私共へも參りましたが、あれは新堀端の、内藤さまといふお旗本の中間で、毎日爰らを荒して歩く、惡い人達でござります。

△　そんならあいつらは、新堀端で劍術の道場を開いて居る、内藤の折助か。

□　何ぼ殿様が劍術遣ひでも、間がよくば姉さんに、一本參る氣かも知れぬ。

◎　樽柿臭い呑だくれ、どうして言ふことをきくものか、彼奴もしないで苦勞をする質だ。

○　いや樽柿で思ひ出した、もう追ッつけ晝だらう。菜飯で一ぺい氣をつけようか。

お淺　まあ、よろしいではござりませぬか。

四人　いや、大きにおやかましうござりました。（ト四人は茶代を置いて立ちあがる。）

お淺　これは毎度、有難うござりまする。

四人　姉さん、また來ますよ。（ト端唄になり、四人は下手へはひる。跡お淺思入あつて、）

お淺　茶屋生業をして居れば、中間衆や遊び人には、少しのめりは出してもよいが、風の惡いあの人達見世で兎やかう言はれると、外のお客の邪魔になるゆゑ、つい不承して酒代を遣るのをよい事に、斯ううるさく來るのでは、何處の家でもみんな鹽花、ほんに鹽花といへば、風神さまへ上げる鹽でも盛つて置きませうか。（ト土器を持ち、下手障子の内へはひる、跡門のうちにて、）

治郎　姉さん、何も逃げるにやあ及ばねえ、まあおれのいふ事を聞きなせえといふに。

ト端唄になり、下手門の内より、治郎助紺看板尻端折り、中間にて一升樽を提げ、酒に醉ひたる思入にて、お浪島田髷、振袖大家の娘のこしらへにて手を取られ出るを、跡よりお仲下女のこしらへにて

是れを留めながら出來り。

お仲　こりやあなた、お孃さまを捉へ、どうなされまする。

治郎　何のどうするものか、此のお中間さまが御酒宴のお相手に、一つ相を頼むのだ。

お浪　あゝこれ、わたしや酒は飮めぬわいな。（トお浪怖き思入にて、顫へて居る。）

お仲　ほんに御常談も事によりまする。此の人中で年端も行かぬ者をとらへて、其の樣なことおつしやらずと、どうぞ御堪忍なされて下さりませ。

治郎　いゝや堪忍ならねえ、こんな美しい娘を見ては、どうして〱見のがせるものか、何でも一ぺい飮んでくれるか。但し酌をしてくれるか、どの道たゞは濟まされねえ。

トいやがるお浪を、無理に引寄せるをお仲隔て、

お仲　是れはまあ御無體な、どうぞ御堪忍なされて下さりませいな。

お浪　わたしや怖うて物さへ言はれぬ、お仲どうか仕樣はないかいな。

治郎　えゝ、何の怖いことがあるものか。これさ、もつと、こつちへ寄るがいゝ。

ト無理に引寄せる、爰へ上手より以前のお淺出來り、中へはひり、

お淺　あゝもしお中間衆、まあ〱お待ちなさいまし。（トいふにお浪お仲心附き。）

□　何ぼ殿樣が劍術遣ひでも、間がよくば姉さんに、一本參る氣かも知れぬ。

◎　樽柿臭い呑だくれ、どうして言ふことをきくものか、彼奴もしないで苦勞をする質だ。

○　いや樽柿で思ひ出した、もう追ッつけ晝だらう。菜飯で一ぺい氣をつけようか。

お淺　まあ、よろしいではござりませぬか。

四人　いや、大きにおやかましうござりました。（ト四人は茶代を置いて立ちあがる。）

お淺　これは毎度、有難うござりまする。

四人　姉さん、また來ますよ。（ト端唄になり、四人は下手へはひる。跡お淺思入あつて、）

お淺　茶屋生業をして居れば、中間衆や遊び人には、少しのめりは出してもよいが、風の惡いあの人達見世で兎やかう言はれると、外のお客の邪魔になるゆゑ、つい不承して酒代を遣るのをよい事に、斯ううるさく來るのでは、何處の家でもみんな鹽花、ほんに鹽花といへば、風神さまへ上げる鹽でも盛つて置きませうか。（ト土器を持ち、下手障子の内へはひる、跡門のうちにて、）

治郎　姉さん、何も逃げるにやあ及ばねえ、まあおれのいふ事を聞きなせえといふに。

ト端唄になり、下手門の内より、治郎助紺看板尻端折り、中間にて一升樽を提げ、酒に醉ひたる思入にて、お浪島田髷、振袖大家の娘のこしらへにて手を取られ出るを、跡よりお仲下女のこしらへにて

是れを留めながら出來り。

お仲　こりやあなた、お孃さまを捉へ、どうなされまする。

治郎　何のどうするものか、此のお中間さまが御酒宴のお相手に、一つ相を賴むのだ。

お浪　あゝこれ、わたしや酒は飮めぬわいな。（トお浪怖き思入にて、顫へて居る。）

お仲　ほんに御常談も事によりまする。此の人中で年端も行かぬ者をとらへて、其の樣なことおつしやらずと、どうぞ御堪忍なされて下さりませ。

治郎　いゝや堪忍ならねえ、こんな美しい娘を見ては、どうして〱見のがせるものか、何でも一ぺい飮んでくれるか。但し酌をしてくれるか、どの道たゞは濟まされねえ。

トいやがるお浪を、無理に引寄せるをお仲隔て、

お仲　是れはまあ御無體な、どうぞ御堪忍なされて下さりませいな。

お浪　わたしや怖うて物さへ言はれぬ、お仲どうか仕樣はないかいな。

治郎　えゝ、何の怖いことがあるものか。これさ、もつと、こつちへ寄るがいゝ。

ト無理に引寄せる、爰へ上手より以前のお淺出來り、中へはひり、

お淺　あゝもしお中間衆、まあ〱お待ちなさいまし。（トいふにお浪お仲心附き。）

お浪　ほんにお前は、お淺さん。
お仲　よく留めて下さんしたなあ。
治郎　いゝや、誰が留めたつて、一ぺい飲まさぬ其内は、金輪際逃すものか。
　トお浪を引寄せる、皆々當惑のこなし、端唄になり、下手の門より團助、金平いづれも紺看板尻端折り中間にて、やはり酒に醉ひたるこなしにて出來り、兩人次郎助を見て。
團助　や、治郎助、手めえはおら達を、奧山でまいて置いて、
金平　見れば美しい娘を捉へ、一人で役德をしめて居るな。
お仲　や、また二人殖えました、こりやどうしたらよからうか。
お淺　困つた事でござりまする。（ト三人當惑のこなし、團助金平はこれに聞き耳立て）
團助　何だ〳〵、二人殖えて困つたものだと、そんなに何もおら達を、蚰蜒か毛蟲のやうに、嫌ふことがあるものか。
金平　さうだ〳〵、二合半でもおら達は、これでも武家の片ッ端、巾着切りやすりをする荒稼ぎとア譯が違ふぞ。
治郎　斯う言ひ出しちやあ一寸でも、跡へ引かねえ新堀端の、內藤の折助だぞ。

團助　見れば近所で見掛ける娘、言はずと知れた藏前風。

金平　大家の娘の手入らずぢやあ、どうしてく見のがせねえ。

治郎　一ぺえ酌を、

三人　してくれろ。

ト　お浪へ無理に茶碗を突附ける。お浪は始終氣味惡きこなしにて、顫へて居る、お仲思入あつて、

お仲　おゝこりや、旦那さまはどうなされましたか、もうお見えなされさうなものぢや。

ト向うへ思入、トゞ治郎助、團助、金平はお浪を捉へ、捨ゼリフにて無理に酌をさせようとする。此の時端唄になり、門の內より甚右衞門、羽織着流し一本差し、札差のこしらへ、跡より丁稚風呂敷包を背負ひ、供をして出て來る、お浪三人を見て、

お浪　や、旦那さま、よい所へお出で下さいました。

とゝさま、わたしや怖うてならぬわいなあ。

ト甚右衞門へすがる、甚右衞門お浪を圍ひ、きつとなつて、

甚右　あゝこれ、見れば娘を始めお仲までを、三人の大男が取卷いて、無法な事でもしなさる樣子、こりやあいつたいどうしたのだ。（ト三人を尻目にかけ、床几へ掛ける。）

お仲　此の三人のお中間衆が、最前からお嬢さんに、酒の相手をしてくれと、往來中で人立ちのいたしますのを構はずに、酌をしろの半分飲めのと、無理難題を申しますので。

お浪　わたしや怖うてなりませぬから、逃げようといたしまするを、袖を捉へて放しませず、手籠にしようといたしますゆゑ。

お仲　私ばかりか、此のお茶屋の、お淺さんもとも〴〵に。

お淺　口をすくして詫びましたが、女と侮り聞き入れず、誠に困りきりました。

お浪　どうぞとゝさん、あのお方に、お詫びをして下さりませ。（ト顫へながらいふ、甚右衛門思入あつて）

甚右　譯といふのはそんな事か。見ればこなた衆三人は、大層醉つてござるから、どうで酒興の上だらうが、時もあらうに晝日中、往來繁き雷門、この人込みの其中で女を捉へて酌をしろの、酒を飲めのと言ひなさるは、ほんの一時の座興であらうが、大概にしてお前方も、しつくどくからかはぬがよい。

丁稚　こりや旦那のおつしやり通り、あつさり淺黄にやつて置きねえ、それ、濃きはまづ放るものと知れと、三下りの文句にもあるぢやあねえか。

甚右　えゝ、手前は默つて居やれ。

丁稚 おつと、しくじつた。(ト丁稚控へろ、三人は扨はといふ思入あつて、)

治郎 それぢやあお前は、此娘ッ子の血を分けた、

三人 親御さんかえ。(ト合方になり、甚右衛門思入あつて、)

甚右 いかにもわしは娘が父、此近邊の茅町で札差渡世をいたしまする、坂倉屋甚右衛門といふもの、今日觀音の開帳へ、娘を連れて參詣なし、一足あとへ遲れたゆゑお前方の目にとまり、酒興の上にてかれこれと言ひなさるのは往々あること、どうでたゞでは濟まされまいから、そこはこつちも町人ゆゑ何とか色を附けようから、わしに免じて三人の衆、どうぞ不承して下さいまし。

治郎 むゝ、そんならこんたは茅町で、二本の指に折らるゝ札差、坂倉屋の御主人か、そいつァ何より(ト思入あつて、)いやなに、そんな名高い金持を、舅に持てば不足はねえ。

甚右 なに、舅に持つたと言はるゝは。(ト不審のこなし、治郎助是れにてなりを改め、思入あつて、)

治郎 そりやあ言はずと其子が承知、話しは跡で分るから、何も言はずに其の娘を、おれが女房にくんなせえ。

お仲 あゝこれ、お前はめつさうな、何ほ減らない口ぢやというてお孃さんを女房にくれろなどゝは、そりやお前本氣の沙汰ではござんすまい。

治郎　いゝや、師直ぢやあねえが本性だ。（ト合方きつぱりとなり、治郎助酒に醉ひたる思入にて、）さつき並木の山屋の見世で、一升つがした此樽の、酒をば茶碗へついで出し、しかも娘が飲みかけの其半分を一生の固めと飲んだは三々九度、床杯はしねえけれど、待乳山には緣のある待女郎にはお淺坊、初心の娘が耳許を赧くしたのが色直し、女房になると言つたが證據だ、何でもおれにくんなさるか、但しはそつちへ聟に取るか、どつちへなりともきつぱりした其の挨拶が聞きてえのだ。

園助　それぢやあ手前はいつの間にか、あのお孃と夫婦にならうと約束したか、あゝ、色にかけては素早い手前、こりやア近年の大手柄だ。

金平　廣い世界にやあ茶人もあるもの、手めえのやうなのんだくれを、好いて亭主に持たうといふのはこいつアよつぽど替りものだ。

治郎　何でもかでも其娘を、おれが女房に貰ひてえのだ。

トきつといふ、女形皆々是れを聞き、氣を揉む思入、甚右衞門こなしあつて、

甚右　いや、それは遣られませぬ。

治郎　何だと。（ト合方になり、）

甚右 身不肖ながら茅町で、居附地主の坂倉屋、多くの屋敷を得意にして、出切米を取扱ふ、いはゞ御上の御用達、町人ながら脇指を腰に放さぬ甚右衛門、不釣合なこなた衆を、どうも娘の聟には取れぬ、然し無足に斷るも大の男の三人掛り、仕組んだ仕事は合點ゆゑ、お前方に酒手をば、不足か知らぬが上げようから、是れで一杯飲み直し、屋敷へどうぞ歸つて下され。

ト思入あつて、紙入より一兩出し、紙に包み、治郎助へ渡す。治郎助これを押返し、

治郎 いゝや、おいら金づくで娘をくれとは言やあしねえ、金は入らねえ娘がほしい。

ト言ふを團助、金平宥めて、

團助 あゝこれ兄貴、そいやさうでもあらうけれど、折角くれた金包み、

金平 幾らあるか明けて見て、不足でなけりやあ大負けに、元直限りに負けてしまへ。

治郎 なる程、それもそんなものかえ。（ト件の包みを明けて見て）こりやあたつた、小判で一兩。

團助 なに、一兩だ。（ト嬉しさうに大きくいふ。治郎助は金包みを甚右衛門の所へ投げ返し、）

治郎 思召しは忝ないが、こりやお返し申しますよ。

甚右 すりや、是れでは不足だと言はるゝか。

治郎 さあ、大家の娘の貰ひ引き、何ぼ此頃諸式の直が下つて居ても一人前、五兩宛がものはある。

團助　十や二十の目腐れ金が、惜しくばこつちも意地づくだ、新堀端の屋敷へそびいて、部屋で一しめしめてやらう。

金平　小ッ旗本でも一刀流の、勝れた腕だと評判の、內藤藤左衞門さまの中間だぞ。

甚右　そんならこなた衆三人は、かねて噂の內藤さまの、えゝゝゝ。

トびつくりこなし、治郎助急き込み、

治郎　えゝ面倒だ、やッつけろ。

ト端唄になり、治郎助先きに三人は甚右衞門、お浪、お仲を引立てようとする、お淺是を留め、トヾ甚右衞門お浪をかばふ立廻りよろしく。此唄をかり、花道より松前屋五郎兵衞、羽織着流し一本差し札差好みのこしらへ、跡より卯之助同じく小僧尻端折りにて出來り、花道にてこの體を見てびつくりなし、五郎兵衞身支度なし、舞臺へ來り此中へはひり、トヾ三人を投げ退け、きつと見得、甚右衞門みなく是れを見て、

甚右　よい所へ、松前屋五郎兵衞どの。

お浪　伯父さん、よう來て下さいました。（ト取りすがろ、五郎兵衞不審の思入にて、）

五郎　わしが爰へ來たからは、決してお案じなさいますな。

ト皆々安心の思入、此内治郎助三人は松前屋といふ名を聞いて、顔見合せ、薄氣味惡きこなし、五郎兵衞三人に向ひ思入あつて、

治郎 いや譯も絲瓜もいるものか、娘が承知で女房に、くれろといふを橫合から、何で邪魔を、見れば相手はお中間衆、どういふ越度がありましたか、まあ譯を聞かして下さりませ。

三人 しやあがるのだ。

五郎 いや決して留めはいたしませぬが、是れなる二人は私が緣家の者でござりまするが、見るに忍びず留めましたが、事の起りは聞かずとも、大概それと推量は違はぬ積りで留めた五郎兵衞、寄つてたかつて此娘を手籠めにするは、ちと無法かと思ひます。

治郎 なに、おら達が、

三人 無法とは。（ト誂への合方になり、）

五郎 さあ無法といふのは外ぢやあない、今藏前で指折りの一二といはるゝ札差の、娘を捉へお前方が女房にくれろと言ひなさるのは、こりやあちと無法だらう。それを聞かれず此言ひ掛り、達て聞かぬと言ひなされば、仕方がねえから表向に召連れ訴へでもしにやあならねえ。然しそれらも酒の上と詫びる事ならこつちでは、元より事は好まぬから、あんまりいやがらせを言はねえで、

郎治　いゝや、こつちも意地づくだ、何でたゞ歸るものか、うぬが小腕を賴みにして太平樂を吐かしやあがるが、瘦せても枯れても御直參の、內藤藤左衞門の家來だぞ。

　早く爰を歸るがいゝ。（ト是れにて三人は弱身を見せまいといふ思入あつて、）

園助　さうだ〳〵、町奉行所へ突出すなら、爰から直に三人を、

金平　繩を掛けて突出して見ろ。（ト三人五郎兵衞へ體を摺り附ける、五郎兵衞むつとして、）

五郎　それぢやあ是れ程譯を言つても、表向きにしろといふのか。

治郎　さあ、元の相手はおれだから、先きへ突出して見ろ。

五郎　むゝ、よし、突出してやらう。（ト治郎助を引附けながら、）さあ、手めえ達も一緒に來い。

　ト兩人びつくりして飛び退き、

兩人　いや、それには及ばぬ。

　ト兩人へたばる、此內甚右衞門思入あつて、紙入より金を出し、紙に包んで五郎兵衞を留める。

甚右　五郎兵衞どの待たつしやれ。

五郎　それでも此奴等が望みゆゑ。（ト治郎助を引立てる。）

甚右　まあ〳〵暫く待つて下され。さつきそなたが言つた通り、色を附けたる此の包み、是れを持つて

園助
金平　三人共不承して歸つて下さい。（ト治郎助中を開き見る。園助、金平こなしあつて、）

園助　おい兄貴、いくらある。

治郎　こりやあ、たつた小判で五兩か。

五郎　それでも言分あるといふのか。（ト立ち掛るを、園助金平是れを留め、）

園助　はて、五兩ならいゝぢやあねえか。

ト早く歸れと呑み込ませる、治郎助仕方がねえといふ思入にて、

治郎　先きの相手は大家の札差、五兩ばかりぢやあ歸りにくいが、連れの奴等が留めるから、何にも言はずお歸りなさるが、何れ其内改めて、娘を貰ひにまた行くよ。

お仲　あれ、まだあんな憎い口をば。

甚右　はて、口數きかずと歸らつしやれ。

園助　然しみす／＼おら達を、

金平　目に逢はしたる松前屋、

三人　此の返報は。（ト立ち掛るを、）

五郎　どうしたと。

團助　いえなに、へんぱう御苦勞と言つたのだ。

治郎　えゝ、つまらねえ事を言やあがるな。

ト端唄になり、治郎助先きに團助金平無念を怺へ、捨ゼリフにて花道へはひる、皆々跡を見送り、

お淺　どうなる事かと私は、お案じ申して居りましたに。

お浪　よい所へ伯父さんが、お出でなされて三人を、懲らしてお遣りなすつたゆゑ、

お仲　あれで少しは、此後のよい懲らしめにござりまする。

五郎　天下の威光を笠に着て、市中を荒す渡り中間、殊に此頃噂に聞けば、近藤、水野、矢部などの御譜代席の旗本衆が、組を立てゝ辻切りや、喧嘩をなさるといふ事だが、それ等を見習ふ中間ども憎い奴等でござります。（ト時の鐘を打つ、皆々心附き）

甚右　今打つのは、何時だね。

お淺　はい、あれは辨天山のもう八つでござりまする。

甚右　おゝさうか、今方晝だと思つたらもう八つか、いやそれはさうと、少し五郎兵衛に話しもあれば娘を始めお仲と丁稚の長松は、一足先きへ行くがよい。

五郎　それぢやあ並木を行かないで、少しの道でも船へ乗り、御厩河岸まで行くがいゝ。

お淺　そんならわたしは、吾妻橋から、

お仲　船でお歸りなさりませ。

五郎　よく氣を附けて行くがいゝぞ。

お浪　はい、有難うござりまする。（ト行きかけ思入あつて、）橋は向うに見えますが、若しや道にて今の者が。

丁稚　はて、出會したら長松が、ほん〳〵と左右へ投げ退け、指でもさゝせはいたしませぬ。なに大丈夫でござりまする。（ト五郎兵衞の聲色を遣る。）

お淺　おや長どん、音羽屋の聲色は、うまうござりますね。

お仲　そりや其筈でござります、お孃さんが音羽屋を大の御贔屓でござりますから。

お浪　あれまた、そんな事を、わたしや菊五郎は大嫌ひ。

五郎　そいつア、あんまり御挨拶だね。

甚右　はて、無駄を言はずと、早く行きやれ。

お浪　そんならとゝさん、伯父さま、お先きへ參りまする。

お仲　お淺さん、大きにお世話でござりました。

ト唄になり、お浪お仲皆々へ挨拶して、丁稚附いて上手へはひろ。跡五郎兵衞思入あつて、

五郎　さうして兄御には、わしへ何かお話しがあるとおつしやりましたが、そりや何事でござりまする？

甚右　さあ、其話しといふは。（トお淺へ思入あつて、）姉さん、茶を一つ入れておくれ。

お淺　ほんに今の騷ぎで、お茶を上げますのを忘れました。どれ、お煮花でも入れて參りませう。

ト捨ゼリフにて奥へはひろ。

卯之　わしは家の坊ッちやんに、お土産をお約束しましたから、仲見世の玩具屋までちよつと行つて參りまする。

五郎　おゝ、ゆつくりと行つて來やれ。

甚右　察しのいゝ利口者、流石こなたの仕込みだな。

五郎　いえ、形ばかり大きくても、何の役にも立ちませぬ。

卯之　左樣なれば、ちよつと行つて參りまする。

ト唄になり、卯之助思入あつて、門の内へはひろ。五郎兵衞あたりへ思入あつて、

五郎　して、わしへお話しとは。

甚右　其話しは外でもないが、五郎兵衞どの、そなたへ異見をせねばならぬ。妹が緣に繫がる兄弟、氣

に障るかは知らないが、此甚右衞門が言ふことを、どうぞとつくり聞いて下さい。（ト誂への合方になり、）日外より折を見て異見を言はうと思ふのは、外でもない五郎兵衞どの、こなたが不斷劍術や柔術を取つて兎角腕立て、それは元より武士の果て、腕に覺えのあることゆゑ、あながち惡いとばかりは言はぬが、聞けば此頃町内の明家を借受け劍術の、其の師範する道場を開いたとやら聞きましたが、元より彼等は渡り者、取るに足らねえ奴等なれど、主人といふは新堀端で疫病神と人もいふ、劍道指南の内藤某、もしも家來の肩を持ち後日の遺恨となる時は、それこそたゞでは濟まぬこと、それこれ思へば町人に、いらぬ腕立てしようより、家業を大事に松前屋の、暖簾に疵の附かぬやう、向後決して殺伐な事をばどうか愼んで、妹を始め此兄にも安心させてくれまいか。

トよろしく異見をいふ、五郎兵衞思入あつて、

五郎　段々との御異見、眞身なりやこそそれ程に言つて下さる思召し、もう是れからは心を入替へ竹刀を持つ手で算盤はぢき、又柔術で筋骨を固めた力で生業の米俵をば取扱ひ、一三味に稼ぎますから、どうぞ御案じ下さいますな。

甚右　そんならわしが異見を用ゐる、荒氣を出して下さらぬとか。

五郎　決して此後愼みますから、安心なすつて下さりませ。
甚右　いや、それでわしは安心しました。（ト卯之助出來り、）
卯之　はい旦那さま、只今歸りましてござりまする。坊さまのお土産を買つて參りました。
五郎　おゝ御苦勞々々、嘸あれが歸りを待つて居るだらう。
甚右　おゝ歸りといへば下谷まで、わしは廻らねばならぬから、爰でお別れ申します。
五郎　すりや兄御には、下谷まで、
卯之　お寄り道をなされますか。
甚右　ちよつと廻つて歸ります。
五郎　隨分道を氣を附けて、お早くお歸りなされませ。
甚右　どりや、先きへ行きませうか。
　　ト唄になり、甚右衞門よろしく、五郎兵衞へ挨拶して花道へはひる。跡五郎兵衞見送り、思入あつて端唄になり、花道よりおもと白髮鬘、切繼ぎの半纒世話なりの婆あにて出來り、花道へ留り、
もと　今そこで摺違うたは、卯之助が御世話になる松前屋さまの御親類の、慥か茅町の旦那さま、こんな裝ゐる御遠慮して、御挨拶さへせなんだが、いつもお達者で結構な事ぢやなあ。

ト言ひながら舞臺へ來り、行き過ぎようとする、卯之助これを見て呼留め、

卯之　あゝもし、そこへお出でのは、おつかさんではござりませぬか。（ト是れにておもと心附き、）

もと　おゝ卯之か、それに旦那さまも御一緒か、これはまあ失禮をいたしました。

ト五郎兵衛思入あつて、

五郎　おゝ誰かと思へば卯之助のお袋か、いつも達者でいゝの、こなたは目が惡いか。

もと　それゆゑ段々御無沙汰になりまして、申譯がござりませぬ。

五郎　何の言譯にやあ及ばねえ、御無沙汰はお互ひだ。まあ爰へ掛けなせえ。

もと　左樣なら、御免下さいまし。（ト床几へ掛ける、合方になり。）

五郎　聞けば年寄一人にて、誰も世話の仕手がないと、卯之助から聞いて居たが、それは嘸心細かつた事であらう。

もと　有難うござりまする、御存じの通り私は早く夫に別れまして、便りに思ふは卯之助ばかり、それでも人に人鬼なく、長屋の衆が親切に、世話をいたしてくれますので、どうやら斯うやら此通りまた丈夫になりました。

卯之　さういふ事ならちよつとでも、人を寄越しなされましたら、旦那さまにお暇を願ひ見舞に行つて

上げるもの、なぜ知せては下さりませぬ。

五郎　いやそれにつけいつぞやから、お前に聞かうと思つて居たが、年を取つたお前の身には、是れといふ親類もなく、末始終便りにする此の卯之助たつた一人といふことだが、それは本當の話しかね。

もと　御親切な其のお尋ね、便り少ない身の上話し、まあお聞き下さいまし。（ト合方きつぱりとなり、）元私の夫といふは其以前相當に暮して居つたものなれど、四十三の後厄で早死をいたしましたが、其時はこれの兄が一人家に居りましたが、男親がない後は女子の手で甘やかし、十一の年に奉公先きからぬけ參りに伊勢へ行き、それきりたうとう行方知れず、今では達者で居りますかそれとも死んでしまひましたか、さつぱり其後便りがなく、跡には卯之助たつた一人、まだ此外に店受けが本所にござりますが、是れもやつぱり私と同じやうな貧乏暮し、せめて只今行方の知れぬ惣領でも居りましたらと、つい折々は愚癡が出て、此行先きを案じ過し、身の不仕合せを旦那さまどうぞ御推量下さいまし。（ト思入にていふ、五郎兵衞不便だといふこなしあつて、）

五郎　そりや嘸心細からうが、其代りには卯之助が蔭日向なくよく勤め、主人大事と働くゆゑ、今に大人になつたなら、此五郎兵衞が力となり、暖簾を分けて遣らうから、氣を落さずにこれお袋、煩

はぬやうにするがいゝぜ。

卯之　旦那さまがあのやうにおつしやつて下されば、今にお樂をさせますから、どうぞそれまで達者で居て下さい。

もと　旦那さまといひそなたまで、さう言つてくれるけれど、そなたの年の明けるのは慥かまだ五六年それまで生きて居られゝばよいが。

五郎　何のそんな氣の弱えことを言ひなさんな。（ト此内金を出して、）おゝお袋、これは少しだが、好きなものでも買ひなさるがいゝ。（ト渡すを、）

もと　これは〱勿體ないお心附、御心配を掛けましては濟みませぬ。

五郎　まあさうだらうが、心ばかりだから取つておきねえ。

もと　こりやまあ卯之助、どうしたものだらうな。

卯之　折角あのやうにおつしやるもの。

もと　こりや戴いておかずばなるまい。旦那さま。

卯之
もと　有難うございます。（ト爰へ以前のお淺煮花を持ち出來り、）

お淺　おや、茅町の旦那さまは、もうお歸りなさいましたか。

五郎　今下谷へ廻るといつて、お歸りなすつたところだ。

お淺　それは御挨拶もいたしませなんだ。（ト茶を汲み、）まあ一つ召し上りませ。（ト五郎兵衛茶を取つて、）

五郎　これは少しだが、茶代だ。（ト紙包みを出す。）

お淺　毎度有難う存じます。どうぞ御ゆるりとなさつていらつしやいまし。

五郎　いや、ゆつくりしては居られぬ、卯之助もう出掛けよう。

卯之　畏りました。

もと　左樣なら、もうお歸りでございますか。

五郎　おつかあ、また尋ねて來なさいよ。

ト唄になり、五郎兵衛お淺おもとへよろしく捨ゼリフあつて、卯之助供をして花道へはひる、跡おもと見送り思入あつて、

もと　ても御親切な旦那さま、年も行かない悴をば、可愛がつてお遣ひ下され、成人したら力になつて遣らうとまでにおつしやるとは。

お淺　をばさん、お茶をお上んなさい。（ト茶を汲んで出す。）

もと　はい、これは有難うございまする。（ト茶碗を取り、）てもお心の。（ト思はず茶を飲み、）あツつゝゝ

つ。(トむせるを道具替りの知せ。)あついことぢやな。

トおもと感心のこなし、お淺捨セリフにて茶のこぼれしを拭いてやる。此の模樣誂への端唄にて、道具廻る。

(藏前松前屋見世の場)━━本舞臺四間通し、常足の二重屋體正面上手一間間平戸の押入、是れに續いて帳面の書割り、此下細き格子の出這入り、やはり家の軒口を見せ、是れに小壁の附きし欄間を取附け、二重上手に一間の帳場格子、此内帳箱、掛硯、いつもの所門口、此の外米俵を大分積みし書割、土藏にて見切り、平舞臺へ薄縁を敷き、よき所に火鉢、煙草盆、總て藏前松前屋見世の體よろしく、爰に○番頭にて帳合をして居る、門口の外に△小者にて、米俵の繩をしめて居る、此の見得稽古唄、通り神樂にて道具留る。

○　おゝ御苦勞々々、それですつぱり片附いたが、帳合も旦那さまのお歸りが遲いから、まだ仕揚げといふ譯には行かねえのだ。

△　御供は卯之助で、今日は觀音樣へ御參りですから、いゝ氣保養をして居るでございませう。

○　なか〳〵お氣に入りの小僧だから、かういふ時は獨りじめだ、はゝゝゝ。

ト△奥へはひる。通り神樂になり、花道より絹羽織袴大小の侍出來り、花道にて、

侍　向うが慥か松前屋の宅だが、どうぞ五郎兵衛が在宿いたせばよいが。（ト舞臺へ來り門口を明け、）松前屋五郎兵衛どのゝ宅は、こちらかな。

○　へい、松前屋は私共、どちらからお出でなされました。

侍　手前主人は新堀端の内藤藤左衛門と申す者ぢやが、拂ひ米の事に附きこちらの主人五郎兵衛どのに、ちと相談いたしたい儀がござれば、何卒拙者と同道にて即刻屋敷へ參つては下さるまいか。

○　それは有難うござりますが、生憎主人は今朝より他出いたし居りませねば、歸宅次第に申し聞け、早速伺ひまするでござりませう。

侍　いや、留守とあるなら是非がないが、せめて此事を支配人へでも申し傳へては下さらぬか。

○　畏りました。どりや清兵衛どのへ。（ト立たうとする。此時奥にて、）

清兵　いや來るには及ばぬ、それへ參つてお目に掛りませう。（ト合方になり、奥より清兵衛羽織着流し、番頭にて出來り、よろしく挨拶して、）只今奥で承はりますれば、お拂ひ米のことに附き、手前主人にお屋敷まで參るやうと仰せでござりますが、折惡しく他出の留守中、私でよろしくば、直にお供をいたしませう。

侍　いや〳〵、是非とも主人に參るやうとの申し附なれば、追ツつけ歸宅いたしたら、邸へお出で下さるやう、くれ〴〵も申して下され。

清兵　委細承知仕りました。

侍　然らばお暇申す。（ト侍引返して花道へはひる。跡清兵衞不審のこなし、）

清兵　遂に是れまで出入りをせぬ、新堀端の內藤さまとはどうやら聞いた名前のやうだが、是非主人に參れとは、どんな用か知らないが、こりやむづかしいお屋敷と見えるな。

○　いや新堀端の內藤なら、むづかしい所ぢやない、近所で名代の貧乏屋敷、どうしてめつたにやあ行かれませぬ。

清兵　成程わしも、名前を聞いたやうだと思つたが、そんなら慥か伊勢四郞の得意で、劍術指南をする惡い噂のある屋敷か、それが主人に逢ひたいとは、どうでろくな事ではあるまい、あゝ心配な事が出來たなあ。

ト清兵衞思案のこなし、誂への合方通り神樂になり、花道より以前の五郞兵衞先きに、卯之助手遊びの春駒を持ち出來り、兩人舞臺へ來り、卯之助門口を明け、

卯之　旦那さまのお歸りでござりまする。

清兵　おゝこれは旦那さま、ようお歸りなされました。
○　卯之どん、大きに御苦勞だつた。旦那さま、今日はお遲うござりましたな。
　ト是れにて五郎兵衞捨ゼリフにて內へはひり、上手よき所へ住ひ、
五郎　今日は思ひの外道で手間取つたが、わしが留守にお得意から、別にお使ひも來なんだか。
清兵　別段お人も參りませんが、たゞ替つた事といふは、ついに是れまでお出入りをした事のない、新堀端の內藤さまからお人が參り、
○　お拂ひ米の相談あれば、是非とも主人が歸られたら、寄越してくれとくれ〴〵も、賴んで使ひは歸りました。
五郎　え、そんなら新堀端の內藤さまから、自身に來いと使ひが來たか。
清兵　その內藤藤左衞門といふ旗本は、此邊でも疫病神と綽號を呼ばれ、良からぬお方と聞きましたがさうしてそこから旦那さまを、呼びに參るは何用か、お心當りでもござりますか。
五郎　さ、ちつと心當りもあることだが、今話して聞かせよう、これ與助、奧へ行つておれが歸つた事をお汐や坊に知らせておくれ。
○　へい、畏りました。（ト奧へはひろ。清兵衞思入あつて膝を進め。）

清兵　して、お心當りとおつしやいますのは、どういふ事でござりまする。

五郎　清兵衛どん、まあ聞いて下され。（ト誂への合方になり、）其の心當りといふ譯は、さつき淺草の雷門で、芳町の兄貴が娘のお浪を連れて觀音さまへ行つた途中、此頃並木や奥山の商人をば、門並あらす今呼びに來た新堀端の、其の內藤の中間が三人ともづぶろく醉ひ、お浪を捉へ理不盡に、既に事をば仕掛けた所へ折よくわしが出ツくはし、後日の爲と懲らしてやりしが、わしと違つて勘辨強い兄御は却つて事を好まず、金をば遣つて歸したが、それを遺恨に中間が屋敷へ歸り其事をうぬが主人に話したゆゑ、其の遺趣返しを仕ようと思ひ、自身に來いといふ使ひを、よこしたに違ひない。

清兵　すりや、其遺恨を晴らさうとお拂ひ米に事寄せて、あなたを呼びに參りましたか。

五郎　先きから呼びに來たこそ幸ひ、直に是れから內藤の屋敷へ行つて其事か、但しは外の用事なるかわしが樣子を見てこよう。（ト此內清兵衞思入あつて、）

清兵　いや〳〵、それは惡い思案、假令自身に參れといふ使ひが何度參るとも、病氣といつてお斷りをなされますのが上分別、もし又行かずに濟まぬなら、此の清兵衛が御名代に參つて樣子を見た上で、兎もかくもなされませ。

卯之　最前から私も、お出でをお留め申しませうと思ひましたが、小ませた奴と又お叱りにあつた時には、取つて返しかなりませねば。

清兵　此の清兵衛がどこまでも、御名代を勤めますから、どうぞあなたがお出でなさるは、お止まり下さりませ。

卯之　下さりませ。

トよろしく五郎兵衛を留める、五郎兵衛こなしあつて、兩人當惑の思入。合方になり、花道より以前の侍出來り、門口を明け、

侍　最前參つた、内藤の使ひでござるが、五郎兵衛どのは最早歸宅なされたか。

ト是れて五郎兵衛思入あつて、

五郎　おゝ、そんならあなたが新堀端の、内藤さまのお使者でござりまするか、五郎兵衛めは私でござりまする。

侍　すりや、貴殿が五郎兵衛か、然らば直樣同道なさん。

五郎　いや、私もたつた今歸宅いたしたばかりなれば、直ぐお跡からお屋敷へ相違なく參りますれば、あなたは一足私より先へお歸り下されませ。

侍　相違なくお出でとあらば、此の由主人へ申し聞かせん。

五郎　どうぞよろしく願ひまする。
侍　然らば、お暇申す。（ト侍花道へはひる、跡清兵衞思入あつて、）
清兵　すりや、旦那さまにはどうあつても、御自身にお出でなさるとか。
五郎　使ひに跡から行くとまで、言つてやつたら卑怯はいたさぬ、然し先きは御直參、丁度着替しこの衣類、これで袴をはいて行けば、卯之助そちは奥へ行き、お汐に袴を出させてくりやれ。
卯之　畏りました。（ト立たうとするを、此時奥にて、）
お汐　あゝこれ卯之助、來るには及ばぬ、其のお袴は今わしが、そこへ持つて行くわいなあ。（ト出來り、）旦那さま、お歸りでござりましたか。（ト誂への合方になり、奥よりお汐丸髷、前垂掛け、女房のこしらへにて、松太郎の手を引き出來り、下手に住ひ、）それ坊、とゝさまがお歸りゆゑお辭儀をしや。
ト是にて松太郎兩手を突き、
松太　とゝさま、お歸りなされませ。（トよろしく辭儀をする。）
五郎　おゝ、よくお辭儀が出來ましたな。
卯之　そのおとなしい御褒美に、仲見世で買つて參りました此の春駒、是れがおみやでござりまする。
ト件の春駒を、松太郎に持たせる、松太郎嬉しき思入にて、

松太　おゝ嬉しい〳〵。（ト五郎兵衞これを見てこなしあつて、）

五郎　土産に遣つた玩具を持ち、あの嬉しさうな後附き、可愛いやつの。

　　ト松太郎を引寄せる、お汐これを隔てゝ思入あつて、

お汐　あゝもし、あなたはそれ程までに眞實から、可愛くお思ひなされますか。

五郎　改まつた其のお尋ね、肉身分けし實の子が、可愛くなくてどうするものか。

お汐　いえ〳〵それはお僞り、二人が仲に儲けたる、此の松太郎に愛もなく、あなたは我が子をかほどまで、お憎しみなされますか。

五郎　何の憎いことがあるものか、譬にもいふ夜るの鶴、禽獸でさへ子を思ふにましてや人間、血を分けた我が子を憎がるものがあらうぞ。

お汐　其のお詞が誠なら、内藤さまへお出でなさるを、どうもお案じ申しますから、お止めなされて下さりませ。

五郎　日頃短氣な五郎兵衞ゆゑ、清兵衞始めそちまでが案じるのは尤もだが、先きは名におふ御直參町人風情の身を以て、さう無法な事もせぬゆゑ、たゞ穩便を專一と戻つて來るから案じぬがよい。

お汐　すりや、此の樣に申しましても。

清兵　御名代では、
三人　濟みませぬか。（ト五郎兵衞思入あつて、）
五郎　町人なれど藏宿家業、武家を相手の松前屋、今更跡へは引かれぬわえ。
　　　トきつといふ、三人ぢつと思入あつて、
お汐　あゝ是非もない事ぢやなあ。
五郎　お汐、袴をくりやれ。
お汐　はい。（ト最前持つて來た袴を出す、五郎兵衞穿かうとするを、）
松太　とゝさま、お寺參りにお出でなら、坊も一緒に行きたい〳〵。（ト是れを聞き五郎兵衞思入あつて）
五郎　あゝ、此間の法事のことを、そちは思ひ出していふのか、今日はお寺參りではない、お屋敷へ行つて來るのだ。
お汐　頑是ないとは言ひながら、此の幸先に忌はしい。
五郎　えゝ。
お汐　いえ、今に直ぐお歸りゆゑ、そちはお家に待つて居や。
松太　そんならおとなに、待つて居るよ。

ト此内五郎兵衞袴をはくことあつて、清兵衞思入あつて、

清兵　いや旦那さま、向うの樣子は知れませぬがもしもあなたが引留められ、夜分になつては私共が、猶々お案じ申しますれば、よい時分を計りましてお出入り屋敷の僞狀こしらへ、直ぐ御歸宅なされませと、お迎ひの者を差上げますから、それをば機會に暇を告げ、直にお歸りなさいまし。

五郎　そんな事にも及ばぬが、それ程に案じるなら、其の手紙をば使ひに持たせ、早く迎ひを寄越すがよい。

卯之　御手紙ならば私が、よい時分を見計らひ、參りますでござります。

お汐　此の松太郎が愛らしい事をお思ひ遊ばして、先きで難題言ひかけましても。

清兵　恥を忍んで旦那さま、ぢつと辛抱なされませや。（ト是れにて五郎兵衞門口へ出て）

五郎　然しこつちは穩便に濟ます心でも、出やうによつては引けは取らぬ。

兩人　え。

五郎　いや、日の暮れぬうち。（ト門口をしめるを、道具替りの知せ）行つて來るよ。

ト唄になり、よろしく花道へはひる。これにて此の道具廻る、

（內藤屋敷道場の場）――本舞臺後へ下げて四間通し常足の二重屋體、上手一間折廻し障子の出這入り、小壁の附きし附屋體、正面羽目、是れへ木太刀澤山に掛けてあり、此の上の欄間へたんぽ附の槍をかけ、下の方書心に障子の出這入り、平舞臺を劒術の稽古場に見たる道具、向う揚幕杉戸の出這入り、總て內藤屋敷道場の體、爰に內匠、主計袴大小旗本のこしらへにて二重に住ひ、平舞臺下手に以前の治郞助住ひ、此の見得よろしく、誂への合方にて道具留る。

治郞　御前どうぞ私の敵を、お取りなされて下さいまし。

內匠　いやそれは氣遣ひいたすな、其の松前屋五郞兵衞といふ奴は、以前何れかの藩中にて、神影流を少しばかり遣ふと聞きしが、町人風情の身を以て近邊の明家を借り受け道場となし、若い者等に劒術指南をいたすとのこと、

主計　拙者も先達て前町の髪結床へ月代に參つた時、暫く客を待つ間二三人の話しを聞けば、其の松前屋が劒術の達人なりと話す所へ、又一人の若い者亂鬢にて參りしが、そいつが豫て五郞兵衞が致へを受けるものと見え、我が前をも憚からず、やたらに褒めるかたはら痛さ、聞くもむやくしい事でござつた。

ト下手より以前の侍出で、

侍　只今歸りましてござりまする。

內匠　おゝ歸られたか、して、今度は五郎兵衛に、お逢ひなされたかな。

侍　仰せの如く兩度參り、二度目に彼れに面會なし、豫て仰せ附けられたる如く、お拂ひ米の事につき是非とも自身に當屋敷へ同道いたせと申せし所、聞きしに違はぬ氣丈な奴にて、直にお供いたしたけれど、今歸りしばかりゆゑ、直に跡より伺ひまするると、事もなげに受合ひましたが、今日雷門の意趣返しに呼ぶとは彼れも覺りし樣子、それをば承知で參るとは町人に珍らしい五郎兵衛めにござりまする。

主計　すりや此所へ參るとな。それは御苦勞でござつた。（ト是れを聞き治郎助思入あつて、）

治郎　私共を內藤の家來と知つて、仕返しに、呼ぶのを承知で參るといふ、さういふ肚胸のよい奴なれば、なか〳〵油斷は出來ませぬ。

內匠　いや〳〵そちは打擲され、手懲りをいたせば左樣に思ふが、高の知れたる町人風情。

主計　そんな苦勞をいたさずと、其方初め團助、金平、三人共にお次へ參り、手並の程を、

內匠　見物しやれ。（ト爰へ侍出で、）

□　はツ、申し上げます、只今お臺所へ、松前屋五郎兵衛と申す者、參りましてござりまする。

ト薄氣味惡き思入、

内匠　參つたとあるからは、御苦勞ながら其者を、お玄關へお廻し下され。

□　左樣なれば私が、案内いたしませう。

主計　然らば隨分丁寧に、よろしうござるか。

□　はッ委細承知いたしました。（ト□は下手へはひる。治郎助思入あつて、）

治郎　どりやお次で拜見いたしませうか。（ト治郎助よろしくあつて、挨拶して下手へはひる）

内匠　目指す敵の松前屋、これへ參らば打ちすゑくれん。

主計　拙者などは最前から、武者ぶるひがいたしまする。

ト誂への合方になり、花道より以前の侍□案内して、跡より五郎兵衞袴羽織一本差しにて、小腰を屈め出來り、直に舞臺下手へ來り、平伏する、兩人見て、

内匠　これは〳〵、貴殿が松前屋五郎兵衞どのか。

主計　よくこそお出で。さ、さ、是れへ進まれよ。

五郎　いえ、是れにてよろしうござりませぬ。（ト平伏する。兩人思入あつて）

内匠　かねて貴殿の御高名は、承はつて居つたなれど、よい折がなく逢はなんだが、いよ〳〵そこ許

が松前屋五郎兵衛かな。

五郎　御意にござりまする。

主計　いやなに、拙者共は御當家の內藤氏と同勤なる、近藤內匠、內田主計と申す兩人、以後はお見知り下されい。

五郎　はッ。（ト辭儀をなし、）私めは藏前にて、藏宿渡世をいたしまする、松前屋五郎兵衛めにござりまする、何卒御贔屓を願ひ上げまする。

主計　それ、お茶の用意を召され。

□　はッ。（ト下手へはひる。內匠こなしあつて、）

內匠、いやなに、內藤氏には最前より、餘程お待兼ねの御樣子なれば、五郎兵衛どのが參られたを。

主計　如何にも、ちよつと申し上げませう。（ト立たうとする、此時下手屋體にて、）

藤左　いや、お出でに及ばぬ、藤左衛門只今それへ參るであらう。

ト誂への合方になり、下手より藤左衛門、羽織袴一本差しにて、煙草盆を持ち出來り、二重眞中へ住ふ。

內匠　すりや先生には、五郎兵衛が參りし事を、お奥にて最早お聞き、

内匠
主計　なされしか。

藤左　如何にも只今五郎兵衛方へ使ひにやりし久内より、逐一承知いたしたが、すりや其方が五郎兵衛なるか、身は内藤藤左衛門なるぞ。

五郎　はッ、初めてお目見得仕り、有難う存じまする。

藤左　拙者も疾より其方には、面會いたし度く思ひしが、よくぞ來られ大慶なるぞ。

五郎　恐入りましてござりまする。して、今日私めを當お屋敷へお召しなされしは、如何なる御用にござりまするか、仰せ聞けられ下さりませ。

藤左　いかにも今日其方を、身が屋敷へ招きしは、實はそちが勝れたる、其の腕前を試さん爲ぢや。

五郎　え、そりや何と御意遊ばしまする。（ト訛への合方になり、藤左衛門思入あつて、）

藤左　かねて噂に聞き及べば、其方はその以前何れかの藩中にて神影流の奥儀を極め、町人の只今にてもあつぱれ武士の魂捨てず、明家へ假に道場を設け、聞けば近邊の若い者等に、劍道指南をいたすよし、身も陰ながら慕はしく、實は逢ひ度く思ひ居つたのぢや。

内匠　藤左衛門どのゝ仰せの如く、其方が劍術の門弟とかいふものが、承はれば近邊の酒屋髪結床などに於て、太刀打稽古の駈引を、頻りと噂するとのこと。

主計　それに其者が申すには、我が師匠たる五郎兵衞は、町人でこそあれ腕前勝れ、當時上の御指南番たる、柳生但馬守宗矩殿にも、おさ〳〵劣らぬ達人なりと、問はず語りの自慢話し。

藤左　かやうな事を聞くにつけても、此の藤左衞門は武士產れ、僅に一刀流の免許を受け、一兩人の門弟を取立ていたすがやう〳〵なるに、我に勝れし其方なら、隨うて學ぶ心、然し立合いたさねば我にそちが勝れしか、又それがしより其方が遙に業が劣れるか、試さねば分らぬゆゑ、遠慮いたさず、こりや五郎兵衞、身と立合をいたしくりやれ。

ト思入にていふ、五郎兵衞扨はといふこなしあつて、態とびつくりなし、

五郎　こは何事かと存じましたに、思ひもよらぬ御前の仰せ、なか〳〵以てお歷々のお方と立合ふなどといふは、かの蟷螂が斧の譬、思ひも寄らぬ事なれば、此の儀は平に御前さま、お許しなされて下さりませ。

ト思入にて詫びる、藤左衞門は此内五郎兵衞へ目を附け、樣子を窺ふこなし、內匠主計思入あつて、

內匠　いや其方がそれ程に、及ばぬと申すを聞いては、猶々以て此の儘にはいたされぬ。

主計　能ある鷹は爪を隱すと申せば、いよ〳〵賴もしゝ、內藤氏は兎も角も此の場に於て我々二人へ、

內匠　どうぞ指南を、

内匠
主計 いたしてくりやれ。

ト両人後に掛けある木太刀を取つて、五郎兵衛の前へ置き、捨ゼリフにて試合をすゝめる、五郎兵衛始終迷惑なるこなしあつて、

五郎 はて、これは御無體な、どういたしましてあなた方と試合などが出來ませうぞ、唯今も申し上げました通り、幼年の頃覺えし劍術、いはゞ我流の私風情、所詮及ばぬ事でござりまする。

内匠 はて、さうでもあらうが是非とも一本。

主計 さあ立合うて勝負しやれ。

五郎 はてさて、それは御無體千萬、どうぞお許し下さりませ。

藤左 すりや、飽まで其方は、劍道いまだ未熟と申すか。

五郎 御意にござりまする。

藤左 いや其の詞には心得ぬぞ、左程未熟の其方が、何故あつて身の家來を、一人ならず三人まで、事の見事に打擲いたした。

五郎 や。(トぎつくり思入、誂への合方になり、)

藤左 先刻淺草雷門に於て、何か家來が酒興の上にて、通り掛りの婦人へ戯れ居る中へ、其方參つて

中間を打ち懲らしたと聞き及びしが、そちは一人相手は三人、それをば難なく打擲なし、後日を懲らせし其の手練、あつぱれ武士も及ばぬ腕前、それを未熟と辭退なすは、こりや是れなる方にては、相手に取つて不足ゆゑ、それでそちは立合はぬか。

五郎　いえ、決して左樣では。

内匠　左樣でなくば、立合ふか。

主計　それとも不足と斷るか。

五郎　さあ、其儀は。

内匠 主計　但し相手にいたさぬか。

五郎　さ、それは、

藤左　試合をいたすか。

五郎　さあ、

三人　さあ、

皆々　さあ〳〵〳〵。

藤左　各々、それ。

ト件の木太刀を取つて、内匠主計出しぬけに五郎兵衛へ打つて掛る、ちよつと立廻り、トヾ兩人をきつと止め、

五郎 すりや、か程までお斷りを、申し上げてもあなた方は、お聞濟み下さりませぬか。

内匠
主計 何を。(ト又掛るを、五郎兵衛手早く木太刀を取上げ、是非がないといふ思入にて、)

五郎 是非に及ばず此上は、お手向ひ眞平御免下さりませ。

ト兩人を突廻して木太刀を差附ける、是れをきつかけに白囃子になり、五郎兵衛兩人を相手に試合の立廻り、よき見得にて、三絃入り白囃子になり、トヾ兩人危ふくなる、藤左衛門は始終五郎兵衛の太刀筋へ目を附ける思入。トヾ五郎兵衛兩人を打ち据ゑる。此時下手より以前の治郎助出來り、五郎兵衛へ打つて掛るを、ちよつと立廻り、トヾ三人を散々に打ちすゑる。是れにて内匠、主計木太刀を投げ捨て、體の痛む思入にて控へるを、五郎兵衛附入つて打たうとする。藤左衛門無念の思入にて、羽織を脱ぎ、塵承のたんぽ附の槍を取つて不意に突いて掛る。是れより兩人試合の立廻り、よき見得にて誂への合方、張扇の音になり、トヾ五郎兵衛早業にて體の見えぬこなし、五郎兵衛藤左衛門の槍を木太刀にて打ち落す、藤左衛門隙さず木劍を取つて打つて掛り、また立廻る、此内五郎兵衛は思入あつて態と受太刀になる、藤左衛門附入り、トヾ五郎兵衛を打ちすゑ、

五郎　はッ、恐れ入りましてござりまする。（ト木太刀を投げ棄て、飛びしさつて平伏する。）

藤左　篤と勝負は見えたるぞ。

五郎　はッ、田舎鍛錬の生兵法、今日あなたのお相手なし、及ばぬ事を始めて覺り、恐入りましてござりまする。（ト無念を怺へて詫びる、藤左衛門體の痛みを隱す思入あつて、）

藤左　すりや及ばぬと詫び入るか、いや口程でもない、未熟な奴だ。

ト藤左衛門二重へ住ふ、治郎助、內匠、主計はよい氣味だといふ思入にて、

內匠　何と內田氏、御覽じたか、我々共は後れを取りしが、流石は先生、物の見事に彼れを打ち据ゑ召されたる、お腕前には感心いたした。

主計　左樣でござる、負けて申すは如何なれど、彼れが木太刀を持ちたる手が、藤左衛門どのと立合へば、ぶる／＼ふるへて體が据らず、いやはや、みぢめなざまでござつた。

ト三人口々に五郎兵衛を蔑なす、藤左衛門思入あつて、

藤左　左樣に御賞美ござつては、藤左衛門面目ござらぬ、元より違ふ手練なれば拙者が勝は知たこと、比べものには相成らぬ。（ト術なき思入にて、）いやなに五郎兵衛、日頃高慢面をなし、斯かる未熟の腕前にて、人に指南するといふが、以後これに懲り門弟に、教授いたすは今日限り、思ひ止つた

がよいぞ。（ト五郎兵衛思入あつて、）

五郎　有難い御教訓、其儀は只今申し上げました通り、幼年の頃覺えし業を、人のあふりについ乘つて好きの道ゆゑいたしましたが、どういたしまして此後は、指南どころか竹刀さへ、生涯持ちはいたしませぬ。

藤左　それ程までに改心なし、後日を愼み町人の、身分を守るといふ事なら、取る命だが容赦いたし、首を繋いで歸してやるぞ。

五郎　有難うござりまする。左樣なれば長居は恐れ、お暇いたすでござりまする。

ト下手へ來り、辭儀をなす。

藤左　おゝ、勝手に歸宅いたせ。

五郎　はツ、左樣なれば御前さま、何れもさま、御機嫌よろしう。（ト藤左衛門始め皆々へ挨拶なし）どりや、お暇いたしませうか。

ト立ち上り、小腰を屈め花道へ掛る、此内内匠主計は藤左衛門に行つて切つてしまへと思入にていふ、藤左衛門及ばぬからよせといふこなし、ト治郎助は無念だといふこなしにて、木太刀を取り五郎兵衛の後から打つてかゝる、五郎兵衛よろしく治郎助を突廻し、其の手を捻ぢ上げ、

ても御丁寧な。（ト思入あつて其手を突放し、）いえ、御案内には及びませぬ。

ト藤左衛門と顔見合せ、氣味合の思入あつて、唄になり、五郎兵衛よろしく花道へはひる、皆々跡を見送りこなしあつて、

内匠　扨々よい氣味ではござつた、然し一圓合點の行かぬは、日頃先生の御氣質にも似合はず、いつそ彼めを後から、

主計　だまし討ちにいたさうと、刀の柄へ手を掛けしを、及ばぬ事とて目顔にて、お止めありしは不審千萬。

治郎　一度ならず二度三度、酷い目を見たあいつめを、ばらすにはよい折柄を見のがして、態とお歸しなさつたは、何ぞ深い殿樣には、思召しでもござりまするか。

内匠　どうも合點が、

三人　參りませぬ。（ト是れにて藤左衛門思入あつて、）

藤左　すりや各には彼れが腕前、此の藤左衛門に劣りしを、あれをば誠と思召すか。

内匠
主計　何と仰せらるゝ。

藤左　今それがしに打ち据ゑられしは、あれは彼れが負くる心で、態と勝をばそれがしに讓つたのでご

ざる。

内匠　え、すりやまことの御勝利では、

内匠
主計　ござらぬかな。

藤左　最前より各々方が彼れと立合ひ召されしをば、瞳をすえて太刀筋を、篤と窺ひ試せしに、然も神影の奥儀を極め、あつぱれなる彼れが手の内、如何にもあやつの門弟どもが、當時上への御指南番たる柳生殿にも劣らぬと、言つたもさら〳〵無理ならず、なか〳〵以て我々が、彼れには遠く及びませぬ。

ト是れを聞き皆々呆れし思入にて、

治郎　さういふ事なら發頭人の、此の治郎助をお役に立て、其の御工風を御前樣、お考へ下さりませ。

藤左　むゝ。（ト藤左衞門考へる思入、此時下手より以前の侍、手紙を持ち出來り、）

侍　御前、只今五郎兵衞めが歸宅いたしたと行違ひに、小僧が此の手紙を持つて迎ひに參りましたから、まだお奧に居る體にて、受取つて置きました。

内匠　すりや、松前屋が宅より、迎ひの狀を寄越せしとな。

侍　左樣にござりまする。

ト手紙を内匠に渡し、侍は辭儀をなして、下手へはひる。藤左衞門思入あつて、

藤左　其の書狀是れへ。

内匠　はツ。(ト出す、藤左衞門封を切り、開き見て、)

藤左　此の手紙の文言は、札差行事より五郎兵衞へ、拂ひ米の事に附き、卽刻罷り出るやうとの文面。(ト思入あつて、)おゝ、こりやよい物が手に入つた。

内匠　よい物が手に入つたと仰せあるは。

藤左　如何にも、是れなる手紙をば種となして、遺恨を晴らす計策浮みたり。

内匠　して〳〵、それは如何なる手段で、

内匠 主計　ござりまするな。

藤左　其の計策は後刻お話しいたさうが、先づ差當つて、こりや治郎助、そちに賴む一儀があるが、今も今とて其方が、遺恨を晴らす種にもならば、此の身を役に立てゝくれと、遮つて申したが、よもや其の儀は僞はりではあるまいな。(ト治郎助思入あつて、)

治郎　五郎兵衞めには叶ひませぬが、惡い事なら十代から、背中へ五十一百の仕置にあつた此の治郎助、決して僞りは申しませぬ。

藤左　おゝ、それ程決心いたすなら、そちが體へ四五寸の、疵を附けさせてはくれまいか。

治郎　命をくれとおつしやつても、決して違背はいたさぬ料簡、疵位ならお安い御用、御遠慮なくおやりなされませ。

藤左　おゝ小氣味のよい奴だ。然し深くは切らいでも、四五寸の疵を附けなば、定めて痛みも左こそならんが、下世話に申す膏藥代、附けたる疵の一寸に一兩づゝの手當をば、褒美を兼ねて遣はすぞ。

治郎　左樣なれば一寸切れば一兩づゝの膏藥代、二寸は二兩、三寸は三兩と前金手當に下さいますか。

内匠　いかなる事か存ぜねど、遺恨を晴らした其上で、御褒美を下さるとは。

主計　俗に申す頰ぺたを、牡丹餅で叩かれるうまい話し、こりや我々もあやかりたい。

ト治郎助覺悟の思入れ、此時下手より、以前の團助金平出來り、下手に控へ。

團助　委細はお次で承はりましたが、一寸一兩下さるなら、

金平　どうぞわつち等二人にも、疵をお附け下さりませ。

内匠　すりや兩人にも治郎助同樣、其の體へ疵を附けて、

内匠 主計　くれろと申すか。

團助　草鞋や褶をなひましても、高の知れた端た錢、タンマリ酒も飲めませぬから、痛い思ひをいたしても。

金平　酒屋の番公をいたぶつても、無理につがした水ッぽい、一升二百の酒よりか實のあるのさへ飲めますなら。

團助　痛い位は我慢をします、一寸一兩の割合で、

金平　三寸ばかり私共も、どうぞお切り、

兩人　下さいまし。

藤左　治郎助始め二人まで疵を附けよと得心で、願ふとあれば重疊ゆゑ、三人共に暫しのうち、痛みを怺へて辛抱いたせ。

治郎　それは承知でござりまする。

内匠　して、先生の御計策とは。

主計　如何な儀で、

内匠
主計　ござりまするな。（ト合方になり、藤左衞門四邊へ思入あつて、）

藤左　其の計策と申すのは、かねて各々方にも御存じの如く、拙者の奧は當上樣のお目鏡を以て、町奉

行とまで登庸せし原伊豫守が娘なれば、これぞ勿怪の幸ひゆゑ、今宵我が屋敷へ盗賊が忍び入り土藏の金子を奪ひ去らんといたせし折柄、夜廻りの我が家來三人にて、是れを認め搦め取らんといたせし所、手を負はせて行方知れず、然るに其夜藏の內に落ちありし、手紙の宛名は、藏宿渡世の松前屋五郎兵衞なりと訴へ出で、殊に彼れは斯樣々々の次第にて、其の日劍道の試合をなし我々共に打ち負けしを、遺恨に思ひて忍び入り金子を奪ひ中間どもに、疵を負はせ逃げ去りしとまことそら事打交ぜて、詮議を願ふと表向き屆けをなして賴みなば、繋がる緣の聟舅、忽ち五郎兵衞めを召捕つて拷問なすに疑ひなし、さすれば夜盜の廉を以て、上のお手を借り彼めは死罪、何と妙計ではござらぬか。

ト思入にていふ、皆々感心なし、

內匠　いや、まことにそれは妙計々々、假令眞劍の立合なすとも、彼れには所詮及ばねば、貴殿の奧方が御親父たる、原伊豫守殿へ賴みなば、

主計　そこは舅御御如在なく、五郎兵衞めを牢舍させ、手強い拷問いたした上、もし又罪に伏さずとも責め殺すといふ法もあり。

治郎　成程これは手を濡らさず、首尾よく行くに違ひなし。

團助　何にいたせ夜明けを待ち、私共は手負ひのまゝ、
金平　御門明きに奉行所へ、駈込み訴訟をいたしませう。
藤左　如何にも今宵の其のうちに、萬事の手番ひ肝要なれば、そち達は此の場にて、頼んだ一儀をば。
治郎　それは承知で、
三人　ござりまする。
藤左　然し此事くれ〴〵も、必ず他言はいたすまいぞ。
治郎　それはお案じなされますな、元をたゞせば三人から、起つた今度の一件なれば、決して他言は、
三人　いたしませぬ。
内匠　それ程までに受合ひ居れば、
主計　少しも早く、此の場にて、
藤左　三人共に覺悟いたせ。（ト是れにて治郎助先に、三人は肌をぬぎ、覺悟の思入にて體を突附け、）
治郎　さあ、腕なりと脚なりと、見事にお切り、
三人　下さりませ。
藤左　はて、下郎に惜しき。（ト刀を拔くを木の頭、）奴ぢやなあ。

ト此の見得、みな〳〵よろしく、誂への合方にて、

ひやうし　幕

二幕目返し　　淺草藏前捕物の場

〔役名〕――松前屋五郎兵衞、中間惡生治郎助、町同心赤井鯛助、家主島十、同秀助、同我平、捕手六人、松前屋手代與七。五郎兵衞女房お汐、丁稚卯之助。〕

（淺草藏前の場）――本舞臺上の方へ寄せて、二間常足の二重、板庇附き、蹴込の前式臺、正面板羽目是れへ月番を糊粉で記せし塗板、捕繩手錠など掛けあり、二重の左右あらき御簾を掛け、式臺の前上下折廻し駒寄せ、舞臺の正面町木戸、此脇潜り附き双方ともしめ切り、上下柵矢來、下手土藏の横手を見たる張物にて見切り、下寄りに旅籠町と記せし用水桶を積み重ね、總て藏前自身番の體、二重に鯛助黒羽織着流し、大小紺足袋、町同心のこしらへにて住ひ、式臺に家主三人、役半纏、駒下駄にて控へ、駒寄せの下手に長床几を置き、是れに手先六人、尻端折り、十手を差し、紺の脚絆草履にて腰を掛け居る、此の見得、西福寺の時の鐘、合方にて幕明く。

鯛助　こりや町役人、今宵の詰番は、皆揃ひ居るか。

松　前　屋

島十　へい、役目の儀にござりますれば、
秀助　當番の者は早朝より、
我平　相詰めまして、
三人　ござりまする。
鯛助　あ、左樣か、然らば書役も居らうな。
三人　へい、その書役は。（トもぢ〳〵して、）
島十　これ秀助どの、親方は臺所に居るかの。
秀助　なに、今日は讀切を聞きに行つた。
鯛助　え。
島十　いえなに、餘儀ない事で、ちよつと出ましてござりまする。
鯛助　なに、ちよつと出ました、それでは當番が揃つて居るのではないな。
我平　いえなに、書役一人でござりまする。
鯛助　えゝ、書役一人でも御用のあつた其時に、留守だと申して言譯立つか、あの、こゝな馬鹿者め。
三人　へえゝゝゝ。（ト鯛助きつといふ。家主平伏する。）

鯛助　して、申附けたる木戸は、殘らず打つたであらうな。
○ト役　仰せ渡されましたる通り、表通りより横町まで、
△　木戸々々へ鳶の者を、嚴しく番に附けさしまして、
□　警固いたして、
三人　をりまする。
鯛助　おゝ、左樣か。（ト鯛助煙草を呑み居る。）
島十　して、今日旅籠町のみ、木戸を斯樣に打ちましたのは、
秀助　何ぞ嚴しいお捕物でも、
我平　此の町内にござりまするかな。
鯛助　いかにも當町内に居る松前屋五郎兵衛なる者に、町奉行より御下知があつて、召捕に參つたのぢや。
一手先　その五郎兵衛と申す者は、元は武家出と申す由、
二　なか／＼業の勝れし奴と、かね／″＼噂に聞き及ぶが、
三　それのみならず、自宅の裏手へ劍術の道場をこしらへ、

島十　へい、役目の儀にござりますれば、
秀助　當番の者は早朝より、
我平　相詰めまして、
三人　ござりまする。
鯛助　あ、左樣か、然らば書役も居らうな。
三人　へい、その書役は。（トもぢ〳〵して、）
島十　これ秀助どの、親方は臺所に居るかの。
秀助　なに、今日は讀切を聞きに行つた。
鯛助　え。
島十　いえなに、餘儀ない事で、ちよつと出ましてござりまする。
鯛助　なに、ちよつと出ました、それでは當番が揃つて居るのではないな。
我平　いえなに、書役一人でござりまする。
鯛助　えゝ、書役一人でも御用のあつた其時に、留守だと申して言譯立つか、あの、こゝな馬鹿者め。
三人　へえゝゝゝ。（ト鯛助きつといふ。家主平伏する。）

鯛助　して、申付けたる木戸は、殘らず打つたであらうな。

○下役　仰せ渡されましたる通り、表通りより横町まで、

△　木戸々々へ鳶の者を、嚴しく番に附けさしまして、

□　警固いたして、

三人　をりまする。

鯛助　おゝ、左樣か。(ト鯛助煙草を呑み居る。)

島十　して、今日旅籠町のみ、木戸を斯樣に打ちましたのは。

秀助　何ぞ嚴しいお捕物でも、

我平　此の町内にござりまするかな。

鯛助　いかにも當町内に居る松前屋五郎兵衛なる者に、町奉行より御下知があつて、召捕に參つたのぢや。

一手先　その五郎兵衛と申す者は、元は武家出と申す由、

二　なか〱業の勝れし奴と、かね〲噂に聞き及ぶが、

三　それのみならず、自宅の裏手へ劍術の道場をこしらへ、

四　近所の者を呼び集め、毎日稽古をいたすよし、
五　迂濶に踏みこみ、怪我でもなさば、手數の掛るを恐れるゆゑ、
一　召捕るまでは、
五人　心配いたす。
鯛助　只今當所の名主方より急の迎ひを遣はしたれば、うつかり無腰で出る所を、不意に此場で召捕る手筈、その方達も氣を附けろ。
一　何の御用か存じませぬが、
二　御奉行よりの御下知とは、
三　容易な事では、
三人　ござりませぬな。
　ト合方きつばりとなり、花道よりばたばたにて、着附尻端折りの男一人走り出來り直ぐ舞臺へ來り、木戸を見遣り、
男　あゝ、もしもし、自身番の衆、どうぞ一人通して下さい。（トあわたゞしく云ふ、家主思入あつて、）
一　今少しの間、御奉行の御用筋で往來止だ、暫くそれに待つがいゝ。

男　いえ〳〵、待つては居られませぬ、今内の嬶が蟲氣附いて、取上げ婆さんを呼びに行くもの、どうぞお慈悲に通して下さいまし。（ト是れにて家主鯛助の前へ來り、）

島十　難澁の樣子でござりますが、如何いたしませうな。

鯛助　通してやらつしやい。

二　格別のお慈悲だ、通して遣るぞ。

男　それは有難うござります。あゝ、どうか、婆さんが内に居ればいゝが。

ト家主木戸の潛りを明ける、男いそ〳〵して此内へはひる。やはり右の合方にて、花道より青天窓の比丘尼、羽織、着流し、駒下駄にて出來り、

比丘　昨晩泊り込みのあのお客は、夜つぴてわたしを寢かさないので、今日は何だかぼんやりして、夢中で往來を歩くやうぢや。（ト舞臺へ來り、皆々を見てびつくりし顫へながら、）これは皆さん、眞平御免なさいまし。（ト木戸の方へ行かうとするを、）

一　これ〳〵、今御奉行の御下知があつて、暫く往來止だ、控へて居なさい。

比丘　そんなら、もしや苅込みで。

一　何ぢやや。

比丘　いえなに、川島歌遊の八人藝を、廣小路へ聞きに參りますもの、どうぞ通して下さいまし。

一　全くそれに相違ないな。

比丘　はい／＼。（トぶる／＼顫へて居る、手先これを見て、）

一　其方は此頃流行る、淫賣の比丘尼ではないか。

比丘　あゝもし、決して左樣なものではござりませぬ。（ト手先鯛助に聞く思入あつて、）

一　通してやる、早く行け／＼。（ト家主潛りを明ける。）

比丘　すんでの事に、牛に引かれて。

一　何だ。

比丘　いえなに、家へ歸つてから參りませうわいな。（ト木戸の內へ走りはひる。手先跡を見送り、）

一　證をあげねば縛られぬが、何だか怪しい比丘尼でござるな。

鯛助　近年諸所の風呂屋にて、湯女を專ら抱へる樣子、これにもお目が附いて居るて。

二　湯女と比丘尼は近年の、

三　江戸市中の、

一　流行物でござりまする。（トばた／＼になり、花道より手先一人走り出來り、）

六　松前屋の門口を、遠見に樣子を見ましたところ、五郎兵衞は無腰にて、只今是れへ參りまする。
鯛助　おゝ、さうか。
ト皆々氣味合の思入、是れにて手先六人めい〳〵支度をなし、用水桶、柵矢來の蔭へ忍ぶ、誂への合方になり、花道より前幕の五郎兵衞、羽織着流し、雪踏にて出來り、花道にて、
五郎　名主から急に來いと、けたゝましい迎ひだが、見れば木戸を打つた樣子、お藏に何かありやあしねえか。（ト本舞臺へ來る、此内家主下手へ來り、）
島十　おゝ松前屋さん、先程からお待兼ね、御町方の。
三人　お出張りでござりまする。
五郎　これは皆さま、大きに御苦勞でござりまする。して、何事が出來いたしましたな。
島十　さあ、その御用筋は、一向知らぬが。
秀助　俄に町内の木戸を打てと、
我平　奉行所よりの、
三人　御下知でござりまする。（ト五郎兵衞不審の思入あつて、）
五郎　して、お出張りになつた、御掛りは。

島十　御廻り方の赤井鯛助さま。

五郎　ちよつと御挨拶をしておかう。

ト是れにて五郎兵衞、自身番の方へ行かうとする、此の内後より手先兩人窺ひ寄つて、手先　御用。（ト十手にて打つて掛る、五郎兵衞投げ退ける。又兩人打つて掛るを身をかはして左右へ押へ）

五郎　こりや理不盡に私を、あなた方には何となされます。（ト鯛助式臺より平舞臺へ下り）

鯛助　五郎兵衞に御用の筋あつて、今此所で搦め捕るのだ。

五郎　さあ假令御用がござりませうとも、家持の一人、名主方へお招ぎなすつて、なぜ御調べはなされませぬ。

鯛助　いや、名主方へ參らぬ先きに、繩打つて引立て行くのだ。

五郎　どういふ譯か其の仔細を、聞かぬうちは掛りませぬ。

鯛助　いくら其方が言ひ張るとも、町奉行の下知なるぞ。

五郎　さあ御下知なら、名主方へ參りませう。

鯛助　いや、繩打つて召連れる。

五郎　科も分らぬ其うちに、達て繩をお掛けなされば、お手向ひいたしまするぞ。

鯛助　それ、油斷いたすな。

ト捉へし手を左右へ拂ふ。是れにて六人一時に五郎兵衞の後前よりかゝる。是れを誂への合方、鐵棒の音を冠せし鳴物になり、五郎兵衞柔術の手にて六人捕物の立廻り、此内鯛助十手を構へ、上手に控へ、家主三人は花道中程へ行き、うろ〳〵して又舞臺へ戻り、氣をもむこなし、トヾ此の立廻りのうち、よき止りにて、

こりや、幾ら手向ひいたすとも、此の隣町に先刻より、手先を大勢控へさすれば、追々是れへ繰込ませるぞ。

五郎　假令大勢の衆がおいでゞも、仔細を聞かぬ其うちは、いつかなお繩には掛りませぬ。

鯛助　然らば天下の奉行の下知を、其方は背くのぢやな。

五郎　いえ、天下の御下知は背きませぬ。

鯛助　そんなら只今、繩にかゝれ。

五郎　いや、仔細を聞かぬ其うちは。

鯛助　さすれば下知に背くのだな。

五郎　全く以て。

鐵助　これ、よく聞けよ、日頃汝が事を、義を磨く立派な町人と市中で噂をいたし居るが、天下の命に隨はぬとは、餘程卑怯な男だな。（ト爰へ家主三人顏へながら出て、）

島十　もし〱松前屋さん、繩にかゝらぬのは尤もに違ひないが、此の上隣町から手先衆が大勢爰へ踏込んでは、所詮こなたはのがれぬゆゑ。

秀助　兎に角繩にかゝつた上、跡で明りが立つならば、其の時御免にならうから。

我平　御奉行よりの御下知とあれば、此場は一旦仰せに隨ひ、繩に掛つたが、

三人　よいではないか。

五郎　外の事なら兎も角も、此身に一旦繩の掛るは、此上もなき穢れゆゑ、どうも繩は受けられませぬ。

島十　さゝ、さうでもあらうが、大勢の手先衆に踏込まれたら、互ひに怪我は知れたこと。

秀助　其上やつぱりとゞの詰りは、猶々手向ひした廉で、そればかりでも繩にかゝらう。

我平　それぢやによつて、とつくりと、こりや分別を、

三人　したがよいぞや。（ト三人よろしく諭す。五郎兵衞ぢつと思入あつて、）

五郎　御掛り始め皆さまが、事を分けておつしやるゆゑ、科の次第も分らずして、繩に掛るは不都合な

れど、奉行の二字に負けまして、爰で繩にかゝりませう。

鯛助　それ、五郎兵衞を是れへ召連れ、繩打て。

手先　はッ。

ト是れにて手先兩人、五郎兵衞を自身番へ連れて來り、繩を掛ける。此の時ばた〳〵になり、花道より前幕の女房お汐、若い者重助、丁稚卯之助、附添ひ出來り、直ぐ舞臺へ來り、此體を見てびつくりなし、

お汐　や、こりや旦那さまには、此の繩目。

重助　どうなされたので、

卯之　ござりまする。(ト自身番の側へ寄らうとするを、手先十手にて隔てる。お汐三人を見遣り、)

五郎　さ、何科あつてか譯も知れず、町奉行の御下知とあつて、爰で繩目に掛つたが、やがて樣子が分るであらう。(トお汐下手式臺の前にて、)

お汐　もうしお役人さま、夫五郎兵衞が縛られました其の譯は、

重助　どういふ事で、

卯之　ござりまする。

鯛助　詮議の次第は賊一件、新堀端の旗本にて、内藤藤左衞門どのゝ邸宅へ、昨夜賊にはひつたる訴へ
により取敢ず、彼れを召捕りに參つたのぢや。

五郎　えゝ。（トびつくりなし、）何の廉で五郎兵衞を、賊とお認めなすつたな。

鯛助　おゝ、賊と認めたは證人があるのだ。それ勘藏、治郎助を是れへ呼べ。

一　はゝ、中間治郎助是れへ。

ト合方になり、自身番の内より前幕の治郎助、疵を白布で結へ、竹の杖にて跛を引き、是れへ番太郎附いて出來り、治郎助疵の痛む思入にて、やう〳〵に上手式臺の前へ來る、五郎兵衞見遣り、

五郎　や、おぬしは昨日逢つた。

治郎　新堀端の内藤で、治郎助といふ中間だ。

五郎　さうして、おれの證人とは。

治郎　證人といふ其譯は、手めえが昨日旦那の前で、試合に負けた其の遺恨に、昨夜裏手の土塀を乘越
え文庫藏の錠を捻切り、二百兩といふ金を引ッさらつて逃げるのを、丁度折よく出會した火の廻
りのおら達三人、六尺棒でぶんなぐらうと、やつちやあ見たが相手が刃物、腰ッ骨をなぐられた
上、おらあ頭へ此通り二三ケ所の疵を受け、後の奴等ア證人に來られねえほど痛みがあつて、三

人兼て出て來たが、逃げる手めえが後影、そこは夜るでも目の高い雷門でぶたれた奴、てつきり樣子を見て置いて、今朝奧樣のお里方、町奉行の原田さまへ、直訴へになつたので、爰で手めえが揚げられたのだ。

ト治郎助悄々しくいふ、五郎兵衞はびつくりなし、

五郎　此身に覺えもねえ事を、筋をこさへて並べ立て、其の證人に出た治郎助。はゝあ、こりやあ昨日內藤で試合をしたのが根に殘り、かういふ罠にはめたのだな。

治郎　そりやあ五郎兵衞おぬしは卑怯だ。試合に負けた意趣返しに、うまく行きやあ昨夜旦那を、殺した上で金を盜み、のがれる積りであつたらうが、天道さまが許さねえ、まだ〱おれの其外に、慥な證據があがつて居るから、未練を言はずと行く支度をするがいゝ。

五郎　是れからおれが白洲へ出て、調べを受ければ知れることだが。

鯛助　いや中間の疵の其外に、證據ものが揚つて居るぞ。

五郎　なに、外に證據とおつしやりまするは。

鯛助　卽ち札差行司から五郎兵衞宛で屆いた手紙が、內藤の土藏の內に落ちてあつたと書上げあるぞ。

五郎　なに、札差行司の手紙とは。（ト五郎兵衞考へることあつて、）

お汐　昨日あなたが内藤さまへ、お出でになつた其跡で、札差行司のお手紙をこれに持たして上げましたが、あなたはお受取りなされませぬか。

五郎　いや迎ひの來ぬそのうちに、おれは一人で歸つたから、手紙を取らう筈はない。

お汐　なに、お受取りなされませぬとな。

重助　卯之どん、こちらへ來て、よく旦那にお話し申すがよい。

卯之　はい〳〵。(ト合方きつぱりとなり、卯之助五郎兵衛の側へ來り、)昨日そのお手紙を、内藤さまへ持つて參り、お取次の若黨衆へお渡し申してござりまする。(ト是れにて五郎兵衛心附きしこなしにて、)

五郎　はゝあ、扨は手紙を宙で計らひ、かういふ事を巧んだな。

ト無念のこなし、お汐等三人愁ひの思入あつて、

お汐　こりやとんだ事に、

三人　なりましたなあ。

治郎　どうでもうのがれッこはあるめえが、是れから手めえが入牢をすりやあ、再び娑婆へは出られねえぞ。

綱助　こりや〳〵、爰で爭ふには及ばねえ、われは證人に立てばよいのだ、委細は書面で分つて居るわ

え。

ト五郎兵衞思入あつて、

五郎　今白身番で言譯するとも、所詮お取り用ゐはあるまいから、奉行の白洲で一部始終を、

お汐　そんならこれから、

卯之　旦那さまは、

鯛助　それ、引立てい。

一　さ、五郎兵衞。（ト繩を取り、自身番の二重へ上る、家主は氣の毒なるこなしにて、）

島十　それぢやあ松前屋さん、

秀助　明日見舞に、

三人　まゐりますぞ。

五郎　有難うござります、誠に恐入りますが、駕籠をお賴みなされて下さりませ。

一　旦那どういたしませう。

鯛助　むゝ、苦しうない、許して遣はせ。

お汐　でも、情ない。

ト五郎兵衞の側へ寄らうとするを、治郎助杖にて隔てる。五郎兵衞思入あつて、手先に向ひ、

五郎　もし、どうぞお慈悲に。（ト同心へ思入するを、木の頭。）駕籠をお願ひなされて下さりませ。

ト　お汐ソッと泣伏す。卯之助、重助これを介抱するを、治郎助いゝ氣味だとせゝら笑ふ。此の模樣、合方、鐵棒の音にて、よろしく

ひやうし　幕

三幕目

上州簑輪山中の場
同眞龍軒閑居の場

〔役名――劍道の達人眞龍軒實は丸目藏人、浪人坂部小十郎、米屋佐五兵衞、雲助狼の九助實は柳生の若黨九助、眞龍軒の門弟小澤柳藏、同金窪運平、同柏木大助、雲助やみの三藏、同げんこの五助、同ぢばの仁平、同ろんじの六藏、柳生又十郎宗冬。佐五兵衞娘お菊、眞龍軒悴京太郎。〕

（簑輪山中の場）――本舞臺三間の間一面の平舞臺、向う榛名山を見たる遠見、上手九尺中足の岩組、これより出道入りの足掛り、此際に伊香保道と記せし榜示杭、上下岩の張物にて見切り、下手藪疊、松の立木、日覆より同じく釣枝、總て上州簑輪山中の體、爰に三藏、五助雲助なりにて焚火にあたり居

る。此の見得山おろし、禪の勤めにて幕明く。とやはり右の鳴物にて、向うより仁平、六藏雲助のこしらへにて山駕籠をかつぎ、お菊島田髷、やつしなり二つばかりの抱子を抱き、乘つて出來り、花道にて杖を立て、

仁平　山中とはいふものゝ、段々空が惡くなつて來たぜ。

六藏　どうで今夜は雪に違えねえぜ。

仁平　降つた日にやあ、法が附かねえ。

六藏　うめえ穴籠りでもしてえものだ。(ト駕籠の内にて赤子泣くを、お菊いぶり附けながら、)

お菊　おゝ泣きやんな〳〵、久しう乘つて居たゆゑに、しめしの汚れた時分、今に取替へて遣りますわいの。

仁平　もう一息で、平地へ出ますから、

六藏　急いで先きまで遣りませう。(ト兩人肩を入れ、本舞臺へ來り上手へ行かうとする。お菊思入あつて、)

お菊　あゝもし、少し待つて下さんせ。さつきから餘程の間とゝさんが後れた樣子、幸ひ爰の焚火を借り待合して行きたうござんすから、ちつと下して下さんせ。

仁平　おとつさんは足がお早いから、直ぐ跡から追つ附きませう。

六藏　ぐづ〳〵して居て山中で、雪でも降つて來た日にやあ、駕籠をかついで步かれませぬ。
お菊　それはさうでもござんせうが、とゝさんに用事もあり、それに此子がむづがるゆゑ、幸ひ爰でしめしを替へ、待合して行きたうござんす。
仁平　左樣ならちつとのうち、爰へ休んで參りませう。（ト駕籠をおろす、お菊抱子を抱きしまゝ、駕籠より出で、）
六藏　早く取替へてお上げなさい。
お菊　皆さん、少し貸して下さいまし。
三藏　さあ〳〵、ゆつくりおあたりなさい。
　　ト合方きつばりとなり、お菊籠蒲團の上にて、赤子のしめしを取替へながら、
お菊　おゝ、ぐつしより拔いてしまうたわいな。さあちよつとしぼつて行きませう。
　　トお菊後向きに抱子に小便をやろこなしにて、しめしを一切れ落すこと。此の內仁平、六藏は三藏、五助にちよつと囁くことあつて、
仁平　こウ、ます〳〵空は惡くなつて來たぜ。
六藏　もし御新造さん、坊ちやんがよろしくば、
仁平　ちつとも早く、

仁平　出掛けませう。（ト お菊駕籠のうちにておしめを直しながら、向うへ思入あつて、）

お菊　さあ、早く行きたうはござんすが、今もいふとゝさんが、まだ影が見えぬゆゑ、少し待合せて下さんせ。

仁平　もし御用がありますなら、一本道の此山中、

六藏　言傳なら此の二人に、よく賴んで參りませう。（ト 兩人急き立てる。）

お菊　さあ行く事は行きますが、勝手の知れぬ山道に、女一人で何となく、心細うござんすゆゑ、今少し待合せて下さんせ。

仁平　待つのはいつまでも待ちますが、

六藏　狼が出てもようござりますか。

お菊　えゝ。

六藏　早くお乘りなさいまし。

ト お菊向うへ心を殘すを、兩人駕籠をかつぎ、上手の山へはひる、三藏五助跡を見送り、

三藏　ぢばの仁平の話しぢやあ、是れから山へ擔ぎこんで、親仁をまいてしまひ、どこぞの宿場へばらし金にしようといふ仕事だが、何にしろ氣の惡い話しだ。

五助　お負けに女は江戸ッ子で、器量も勝れた別品だから値をよく買ふに違えねえが、こいつァ爰に網を張つて、親父が來たら横道を敎へてやつてあいつらの、仕事へ一肩棒を入れ、

三藏　酒手の割りを貰ふ魂膽、どうか親父が來ればいゝが。(ト五助向うを見て、)

五助　噂をすれば影とやら、違ふか何だか知らねえが、割掛けをした旅人が來るが、きつとあいつに違えねえ。

ト兩人焚火をなしあたり居る、山おろし在鄕唄になり、花道より佐五兵衛親仁旅なり脚絆草鞋割掛けの荷をかつぎ、足早に出來り花道にて、

佐五　つい此跡の坂道で、草鞋の間へ砂利がはひり、履き替へて居るうちに娘の駕籠を見失ひ、一町ばかりの後れと思つたが、たうとう駕籠が見えなくなつたが、幸ひ向うで聞いて見たら、通つた事が知れるであらう。(ト本舞臺へ來り、)もし、今方此ところを二つばかりの赤子を抱き、女が一人駕籠で通りはいたしませぬか。

三藏　わし共は今朝から、仕事にあぶれて爰に居ますが、そんな駕籠は見掛けなんだ、なう土浦。

五助　さうよ、わしも今此先きから、爰へ下つて來たものだが、百姓衆の外誰にも逢ひませぬ。

佐五　へゝえ、それでは爰は通りませぬか。

五助 さうしてお前は何處へ通りなさるのだえ。
佐五 伊香保の湯治場まで參りまする。
三藏 湯治場へお出でなさるなら、此の五町程あとの所に別れ道がありますが、そこを行くと下道で平地ばかりで行かれますから、駕籠屋は大抵それを廻ります。
五助 はぐれた駕籠も湯場行きなら、多分下道を行きましたらう。
佐五 是れまで參る其道は、追分のない一筋道、どうしてそこを見はぐつたか、取つて返して其道を、尋ねて行つたら知れるであらう。是れは皆さま有難うござりました。(ト下手へ戻る、此時以前のお菊が落せししめしの切れへ心附いて取上げ、)や、このしめしは覺えある、然もわしが浴衣の中形、これが爰に落ちてあるからは、娘は必定この所を。(ト思入あつて、)こりや、此の道を急いで行かう。
ト佐五兵衞とばくさと上手へ行きかゝる。此内兩人顏見合せ、三藏が持ちし息杖を佐五兵衞の足許へ突出す。佐五兵衞是れに躓き、ばつたり轉ぶ。此の途端息杖折れるゆゑ、三藏佐五兵衞を引附け、
三藏 やい親仁、うぬア途方もねえ事をしやあがつたな、雲助の息杖を折るは足を折つたも同じ事だぞ。
五助 さうだ〳〵、足を折つちやあ稼業が出來ねえ、さあ、此の仕埒を附けて行け。
ト佐五兵衞下に居て、

佐五　つい道を急ぎまして、思はす粗相いたしました、どうぞ許して下さいませ。
三藏　たゞ許せとばかりぢやあ、足を折られた趣意が立たねえ、あやまるならあやまるやうに、規模を附けて行きやあがれ。
佐五　さあ、そこをどうぞ勘辨して下さりませ。
五助　いや、たゞ勘辨ぢやあ濟まされねえ、棒組の足を折られちやあ、おれもとも〳〵稼業が出來ねえ。
三藏　さあ、此杖を元の通りに、
五助　遣へるやうにして返せ。（ト佐五兵衞の前へ折れし杖を突附ける。）
佐五　さあ、元の通りに仕ようにも、何處に賴まう家もなし、それゆゑどうぞ料簡して。
三藏　えゝ、何で料簡が出來るものかえ。
五助　よくも足を折りやあがつたな。
三藏　うぬ、どうするか見やあがれ。
　　ト折れし息杖にて佐五兵衞を打ちに掛る、ばた〳〵になり、上手の坂より以前のお菊、仁平六藏して引立て出來り、佐五兵衞此體を見て、
佐五　や、娘か。

お菊　おゝ、とつさん、よい所へござんした。（トお菊仁平六藏を振拂ひ佐五兵衛の側へ來て、）

佐五　して、孫めはどうしやつた。

お菊　さあ駕籠に殘して此の先きに、一人で泣いて居るゆゑに、早く行つて下さんせ。

佐五　なに、孫が一人で居やるとか。（トびつくりして、）さ、娘來やれ。

トお菊を連れて、行かうとする。

仁平
六藏　えゝ面倒だ、親仁をそこらへ縛り附けろ。

三藏
五助　合點だ。

ト山おろしなりに、佐五兵衛お菊上手へ行かうとするを、四人にて遣るまいとちよつと立廻り、佐五兵衛を無理に駕籠の細引にて縛り、下手の松の立木へ縛り附ける、お菊はこれをのがれ、上手へ行かうとする。此時後の藪疊より前幕の九助褞袍なり、頬冠り尻端折りにて出て、お菊を引廻し、下に置き四邊へこなし、お菊不審の思入あつて、

お菊　ついに見馴れぬこなさんは。

九助　お菊、忘れたか。

お菊　さういふお前は。

九助　誰でもねえ、若黨の九助だ。（ト手拭を取る、お菊佐五兵衛びつくりなし。）

お菊　や、お前は柳生の御家に居た、若黨の九助どの、どうして爰へは。（ト九助四邊へ思入あつて、）

九助　お菊、手めえを慰む氣だ。

お菊
佐五　えゝゝゝゝ。（ト時の鐘、凄みの合方になり、）

九助　おれも生れが上州に、屋敷を出てから故鄕へ歸り、其時一緒に連れて逃げた、おさがはおぬしと同じやうに、折れ込んで居た餓鬼を產むと、枕直しもしねえうち枕團子になつてしまひ、それからこつちへ間が惡く、する事なすこと鵤になり、はしにもかゝらぬ身の上に、たうとう雲助仲間へ入り込み、惡事の噂も高崎から、伊香保へ通る街道で直にやあ行かねえ横道の、此の山中へおびき込んで、遣らずのがさずぶつたくり喰ひ附くので此頃ぢやあ、綽名を取つた狼九助、斯う見込んだのもおぬしゆゑ、さつき立場で仲間の者に、安直で駕籠をすゝめさせ、人里放れた横道へ、此の狼が送つて來て、爰で手前を慰むのだ。（ト是れにて兩人呆れしこなし。）

お菊　すりやこなさんはあの折より、わたしの事を思ひ切らず、今まで附けて居つたのぢやな。

九助　なに、そりやあ大違ひだ、あの時お菊を引ッ拂ひ、思ひを晴らす氣であつたが、振り切れねえおさがめに附纏はれて仕方なく、故鄕へ歸つた其後は、去るものは日々に疎しの習ひ、惚れた思ひ

の念も晴れ、二年この方忘れて居たが、今日高崎の棒鼻で、目先に掛つた煩惱のそちに心を惑はされ、爰まで遠目に附けて來たのだ。（ト お菊是れまでといふ思入あつて、）

お菊　さういふ事とはつゆ知らず、お前の駕籠に乘つたが誤り、したがわたしも其實は、表向きではないけれども、又十郎さんのお胤を儲けし今は主ある此の體、剰さへお前には、いはゞ主人の妻同樣それゆゑ心に隨はれぬわいなあ。

九助　主人も絲瓜もあるものか、二年この方心を掛けた手前をば、伊香保の山中へ引摺り込んだは天の與へ、どうして是れが見のがせるものか。

五助　九助に抱れて寢るがいやなら、いや應なしに手取り足取り、

仁平　先づ音頭取りの其次は、四人のものが念佛講、珠數の玉ほど慰んで、

六藏　擧句の果てが宿場の女郎、そんな思ひをするよりやあ、

三藏　念佛講に緣のある、素直に爰で往生すりやあ、地獄の責もしねえ氣だが、

九助　お菊返事はどうする氣だ。

お菊　それぢやというて九助どのへ、此身を任す其時は、わたしやどうも又十郎さまへ。

九助　操が立たねえ事ならば、爰で手籠めに慰まうか。

お菊　さあ、それは、
九助　さあ、
お菊　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。
九助　雪風で寒いから、早く返事を聞かしてくれ。（ト九助お菊の側へ寄添ふ、お菊覺悟の思入あつて、）
お菊　退つ引きならぬ此場の仕儀、是非がないゆゑ此身をば、お前に任せますわいなあ。
　　ト思ひ切つていふ、佐五兵衞びつくりなし、
佐五　これ〳〵娘、そちや何を言ふぞ、其身を愛じ穢しては、又十郎さまに濟むまいがな。
九助　濟むも濟まぬもあるものか、もう斯うなつたら袋の鼠、どこへも逃しやあしねえから、默つてそこで見物しろ。
三藏　聲でも立てりやあ、うぬから先き、いゝどせう骨を打ちのめし、
五助　あの谷底へ、
四人　突き落すぞ。（トお菊びつくりする。）
九助　さあ、それぢやあ、おぬしやあ得心したな。

お菊　さあ得心する其替り、駕籠に殘したあの子をば、爰へ連れて來て下さんせ。

五助　連れて來るにやあ及ばねえ、もう今頃は狼が、のそ〳〵山から出掛けるから、大方喰はれてしまつたらう。

お菊　そんならあの子は、今頃は

佐五　あの狼に喰はれたとか。

お菊　とゝさん、こりや斯うしては居られぬわいなあ。

ト お菊立上り、佐五兵衞の繩を解かうとするを、山おろし合方になり、九助仁平六藏何をしやあがると、お菊を引立てに掛る、佐五兵衞是れを見てもがくを、三藏、五助息杖にてなぐる。

お菊　誰ぞ來て下さりませ。

佐五　助けて下さい〳〵。

ト 喚くを、九助五人にてお菊を擔ぎ、下手へ行かうとする。是れを佐五兵衞縛られしまゝ支へる。此立廻りよろしく、此内山おろし合方になり、下手より小十郎馬乘袴、大小竹刀の先へ面小手を附け、これを擔ぎ出來り、此の樣子を見て小十郎中へ割つてはひり、雲助を投げ退け、お菊を圍ふ、九助きつとなつて、

九助　やい、何處のどいつか知らねえが、何でわりやあ邪魔をするのだ。(ト替つた合方になり、)

小十　我は高崎在に住む武術修行の浪士にて、箕輪の山中を通り掛りし者なるが、旅人を惱ます其方ども、見るに忍びず懲らして遣らんと立ち入つたのぢや。

九助　いらざるお世話に出しや張つて、雲助達の繩張りをあらして歩くこの浪士、此儘素直に通ればよし、かれこれ言やあうぬぐるみ、生して爰は通さねえぞ。

小十　盲蛇におぢずと、身の程知らぬ匹夫めら、向後旅人の妨げゆゑ、片ッ端からこの竹刀で、手前が腕にこたへるやう、打ち据ゑるから覺悟いたせ。

九助　えゝ、生意氣な事を言やあがるな。それ、みんなして疊んでしまへ。

ト禪の勤めになり、皆々息杖にて打つてかゝる。小十郎竹刀にて扱ひ立廻る、此の内お菊は佐五兵衞の繩を解く、トゞ四人打ち据ゑられ、九助懐より劍を出して切つてかゝる。此立廻りのうち、皆々小十郎に打ち据ゑられ、トゞ上手へ逃げてはひる。小十郎跡を見送り、いゝ氣味だといふ思入、佐五兵衞お菊は悦ばしきこなしにて前へ出で、

佐五　どうなる事かと思ひましたを、

お菊　折よくあなたのお出でにて、

佐五　あやふき所をのがれまして、

兩人　有難う存じまする。（ト兩人よろしく禮をいふ、合方になり）

小十　見れば旅人の樣子なるが、此の山中を通行あるは、何れへこなたは參るのぢや。

佐五　上州邊に尋ねまするお方があつて、爰ぞといふ當もなしに出立なし、今日伊香保の湯場までと、雇ひましたる駕籠のものに、親子二人が今の難儀。

お菊　既に此身を穢されませうと覺悟いたせし其所へ、あなたさまのお越しにて、助かりましてござりまする。（ト小十郎これを聞き、思入あつて、）

小十　此の山道は街道ならず、察する所雲助どもが、是れへ連れ込む企みをせしか、返すぐも不届き奴、今又是れにて別れなば、彼等が妨げなすは必定、道まで送り遣はさんが、是れより伊香保の湯場までは、日のある内には參り難し、不自由さへ厭はぬなら此の近邊ゆゑ我が寓居へ、今宵は一泊いたされよ。

お菊　御親切のお詞に甘へてお賴み申しまするは、召連れましたる小兒をば、此の先きの山道へ、駕籠に殘してござりまする、どうぞそれまで御一緒に、お出でなされて下さりませ。

小十　それは嘸かし氣遣ひならん、して、其所は存じ居るかな。

お菊　さあ其所さへ何れやら、無體に連れて行かれし故、こゝと申す先きも知れず。
佐五　又私は道におくれ、遂にそこまで行きませず、是れにはほとんと當惑いたします。
小十　然らば爰から近邊を、尋ねたことなら、知れるであらう。
佐五　あなたと一緒に參りますれば、是れが何より心丈夫。
お菊　どうぞ今宵は御住居へ、お泊めなされて下さりませ。
小十　其儀は必ず心配いたすな。(ト小十郎思入あつて、氣絶せし六藏に活を入れ、)こりや、何れへ駕籠を置いたるか、さあ其所へ案内いたせ。
六藏　何を。(トまた組附くを突放し、)
小十　うぬ、手向ひいたさば。(ト鯉口をくつろげ、きつとなつて、)命がないぞ。
　　トしやんと鍔音をさせる。是れにて六藏ふるへながら、
六藏　手向ひはいたしませぬ、御案内いたしまする。
小十　むゝ、然らば命は許してやる。
六藏　有難うござりまする。(ト顫へながら辭儀をする。小十郎氣を替へ、)
小十　さあ、二人の衆。(ト竹具足を擔ぐを道具替りの知せ、)同道しやれ。

ト此模様、山おろし、禪の勤めの合方にて、道具廻る。

(山續きの場)――本舞臺一面の平舞臺、向う山々の梢を見たる遠見、上下山の張物、舞臺すつと前へ出し、杉丸物の立木諸所に建て、日覆より同じく釣枝、總て前の山續きの模様よろしく、舞臺よき所に以前の山駕籠を置き、是れに抱子を殘しある、山おろし、合方、赤子笛にて道具留る。と時の鐘の合方になり、花道より又十郎、袴の露を取り、大小草鞋にて、腰に鳥を入れたる網を提げ、背中に矢を背負ひ弓を持ち、片手に菅笠をかざし出來り、

又十　師匠の命に是非なくも、小鳥狩りに趣きしが、今日は丁度母の忌日、未だに一羽も得物なきは、此の身に取つては菩提の爲、殺生せぬは幸ひなり。(ト舞臺の方へ聞耳たて、)はて心得ぬ、此の山中に赤子の泣きごゑ、誰ぞあれに居ると見える。

ト窺ひ〳〵舞臺下手へ來る。此時上手より縫包みの狼出來り、駕籠の傍へ來て赤子を窺ふ、又十郎下手より此體を見てびつくりなし、つか〳〵と立寄り、弓にて狼を突放す、是れにて狼怒つて、又十郎に飛び掛るを、弓にて支へる立廻り、又駕籠へ飛びかゝらうとする。是れにて又十郎是非なく刀を拔き一太刀切る。狼は苦しみながら是れに恐れて上手へはひる。又十郎跡を追つかけ、上手へ思

入あつて刀の血ぶるひをなし、鼻紙にて血を拭ひ鞘へ納める。此内頻りに赤子泣く、又十郎駕籠へ立寄り、赤子を抱き取り、四邊へ思入あつて、

駕籠の内に小兒のみ殘しありしは心得ず、それとも是れへ捨て行きしか、此儘これへ置く時は、必ず今の狼の餌食にならんは必定なり、見捨てゝ行くも本意ならねば、母の忌日を幸ひに、老先き長き小兒が一命助け得させて兩親の、行方を尋ね渡し遣はさん。（トいぶりながら四邊を見る、此時しきりに泣く、）おゝ、泣くな〳〵、今懷で溫めて遣るぞ。（トいぶりながら懷へ入れる、是れにて泣き止む、又十郎ぢつと顏を見て、）あゝ、何れの誰が小兒なるか、我が手に取るも他生の緣。（トぢつと思入あつて、）おゝ、もうすや〳〵と寐るさうだ。はて、子供は無心なものぢやなあ。

ト時の鐘、合方にて、又十郎抱子をいぶりながら、上手へはひる。此の合方にて花道より、以前の六藏先きに、小十郎佐五兵衞お菊出來り、

小十　こりやそちが駕籠を置きたるは、いまだ餘程先きなるか。

六藏　いえ、つい向うの森の内に、駕籠は置いてござります。

小十　いざ、さらば案内いたせ。

六藏　へい。（ト皆々舞臺へ來る、六藏駕籠の側へ來り、）是れでござりまする。

ト佐五兵衛お菊は、つか〳〵と駕籠の側へ來り、

お菊　おゝ又市、さぞ寒かつたらうの。（ト駕籠の内を見遣り、）やゝ、又市が居ませぬわいな。

佐五　なに、孫が見えぬとか。（ト兩人うろ〳〵あちこち見廻し、）

佐五　えゝゝゝ。

小十　なに、小兒が是れに居らざるとな。（ト佐五兵衛四邊の血汐に心附き、）

佐五　此の血汐の樣子といひ、そんなら噂に違ひなく、こりや狼に喰はれしか。

お菊　もし、とゝさん、どうせう〳〵ぞいな。（ト兩人途方に暮れ泣く、小十郎四邊を見廻し、）

小十　小兒の死骸が分らぬのみか、四邊に血汐の夥しきは、扨は獸の餌食となりしか、今一足早くんば斯かる事にはさせまじきに、不便な事をいたした。（ト無念のこなし。）

佐五　產れだちより何處一つ、ついに惡いといふ事なく、他人の手へも渡さずに、育てし甲斐も情なや。

お菊　旦那さまへお目に掛けず、やみ〳〵こゝで餌食になせしは、神や佛もないことか。

佐五　孫をも連れずどの面さげ、旦那さまへお目に掛れう。

お菊　あの子を爰で失うては、わたしや生きては居られぬわいなあ。

佐五　おゝ尤もぢや／＼、そちばかり殺しはせぬ、おれも一緒に死ぬ氣ぢやわい。
お菊　えゝ、情ないことに、
兩人　なつたなあ。
　　ト兩人わつと泣き伏す。此内小十郎四邊を見廻し、又十郎が刀を拭きし鼻紙の落散りあるに目を附け
　　ぢつと思入あつて、
小十　こりや、兩人とも、歎くには及ばぬぞ。
佐五　なに、歎くに及ばぬとは。
小十　さあ、その譯は。（ト六藏へ思入あつて、）こりや、其方に用はない、早く爰を行け／＼。
六藏　いや、やう／＼の事で命拾ひをした。
　　ト山おろしにて、六藏駕籠をかつぎ、足早に下手へはひる、跡合方彈流しにて、
小十　こりや親子のもの、只今歎くまじと申せしは、小兒の死骸が見えざれば、確とそれとは言ひ難けど、あたりの此の血汐は、正しく刀で切つたる滴り、其の證據は此所に血ぶるひをせし血のあと察する所何者かその狼を切つたるならん。左すれば小兒は何れへか、助け行きしに相違なし、血氣にはやるは尤もなれど、死する命をながらへて、小兒の行方を尋ねられよ。（ト兩人四邊を見て）

佐五　さうおつしやれば此の邊から、向うの山へ血汐の跡、成程切られた狼が、歩いたやうにも思はれまする。

お菊　さうおつしやれど又市が、死骸が見えねば私は生きて居る氣はござりませぬ。

小十　さあ、さう思ふは尤もなれど、今此處で一命捨て、若し其跡で小兒の行方知れたる時は六日のあやめ、先づ早まらずと死を止まり、幸ひ我が家に母も居れば、心置きなく一泊なし、此の近邊を尋ねられよ。（ト是れにて成程といふ思入あつて、）

佐五　それ程までにおつしやつて、下さりますれば仰せに隨ひ、

お菊　死ぬのは思ひ止まりまして、今宵はお宿をお願ひ申し、

佐五　此の上州路へ參りました、委しき譯もお話し申し、

お菊　尋ぬるお方の御住所も、何處と當途のなき身の上。

小十　それやこれらも承はり、又添心もいたすでござる。

佐五　これを思へば世の中に、捨てる神あれば又此のやうに、

お菊　助ける神の引合せ。

小十　世はさま／＼なものでござる。（ト此時風の音になり、日覆より氷柱ばら／＼と落ちる、小十郎思入あつ

て、ゝ榛名おろしの雪風に、梢をおとす氷柱の折れ。

佐五　襟に當つてひいやりと、

お菊　驚く胸も子ゆゑの闇、

小十　くらき山路を。（ト不便なといふ思入あつて、）さあ行きやれ。

ト小十郎先きに、兩人連立ち、上手へ行く。此の模樣時の鐘、合方にて此の道具廻る。

（眞龍軒閑居の場）——本舞臺四間中足丸太造りの屋體、藁葺きの庇、少しさげて丸太の本緣、正面上の方地袋戸棚、此の上に机、誂への兵書繪物などを置く、眞中一間不摺の唐紙、出這入り、下の方鼠壁、木太刀、たんぽ附きの槍を掛け、本舞臺ずつと上の方山の張物、いつもの所竹簀戸の門口、此の外空虚のある杉の大樹、後ろ山の張物、總て山中一軒家の體、爰に京太郎若衆かづら後ろ茶筅、小振袖袴一本差しにて竹刀を持ち、柳藏、運平、大助、何れも門弟にて後ろ鉢卷、竹具足稽古着にて竹刀を持ち、京太郎へ三人掛りの試合をなし居る。此の見得在鄉唄へ白囃子を冠せ、道具留る。

柳藏　やつとう〳〵。（ト打つて掛る、是れを京太郎三人を相手に試合の立廻りあつて、京太郎に打たれること。）

三人　や、參つた〳〵。

ト下へさがり、竹刀を投げ出し、平伏する。是れにて京太郎も、襷を取りて住ひ。

柳藏　いや今日は又格別、若先生の竹刀が身共が骨身にこたへて、降參いたしてござる。

運平　身共が業が未熟か知らんが、斯樣に稽古の度毎に、身内に生疵が絕えぬとは、これが譬の生兵法大疵の元でござる。

大助　今少し竹刀が延びれば、若先生へ打ち込まれるが、今一寸で屆かぬが、是れが自由になる事なら身共が足の長いを切つて、手の先きへ附けたいものだ。

京太　まだ未熟のそれがしへ三人掛つて打たれるなどゝは、全く手練の至らぬゆゑ、此の上ともに出精なし、必ず恥辱をお取りなさるな。

柳藏　大先生のお仕込みゆゑ、餘人も及ばぬ御手練に、なか〳〵我等は及ばぬゆゑ、打たれまするは是非もないが、

運平　二年この方御當家へ食客になつて居る、當時江戶で將軍家の、御指南番たる柳生の悴、

大助　又十郎が勘當受け、喰ふに困つて先生の、厄介になつて居る、彼れと試合をいたす度每、

柳藏　ついに勝を得ませぬが、

運平　われ〳〵共は、

三人　心外にござる。

京太　又十郎どのは江戸表を、御勘氣うけて諸國を廻り、流れ〳〵て當家へ參り父の師範を一心不亂日夜出精いたすゆゑ、未だ三年に滿たざれど、父眞龍軒の門下に於ては、近江の坂部氏に勝りし武術の者なりと、每度父の仰せでござる。

柳藏　坂部氏は御當家で、年來の御門弟、年は格別違はぬが、業を尊み兄弟子と敬ふはよけれども、

運平　又十郎は今日此頃使つて來りし居候、いはゞ師匠の厄介者、彼等に負けるは心外ゆゑ、

大助　此次の試合の折は、三人掛つて言合せ、打つて打つて打ち据ゑて、彼れを道場へ埋めて遣り、

柳藏　生恥かゝせて、

三人　遣りたうござる。

京太　いや、それとても御身等の、出精次第にござるゆゑ、猶々稽古を勵まれて、上達なされば知らぬこと、容易なことでは柳生どのとは。

三人　え。

京太　いやさ、負ける事はござるまいから、隨分ともに心掛けを。

柳藏　そのお詞に勵みが附き、何だか腕がりう〳〵して參つた。

運平　今度は具足を附直し、面を當てゝ遣ひませう。

大助　身共は後備へをいたし、負けた方へ出ますぞ。

柳藏　成程それがよろしうござる。

運平　どれ、支度をいたさうか。

ト京太郎二重へ上り住ひ、三人は面小手を當て、竹具足を附直すことよろしく、合方になり、以前の又十郎小兒を懐へ入れ出來り、直ぐ舞臺へ來ようとして附際まで戻り、

又十　先刻までは火の附くやうに泣き入つたる此の小兒も、我が懐にて溫まりこゝろよく寐入り居るが此儘戻るも師の手前、何とやら憚れば、幸ひあれへ寐かしおかん。（ト四邊へ思入あつて杉の大樹の許へ來りうろの所へ竹具足の胴を敷き、中へ抱子をすつぽりと入れ、持ちたる菅笠を冠せ、）これにて暫時は冷えもせまじ、師匠の折を見合せて、小兒の事を申し出でん。（ト思入あつて門口へ來り、）只今戻りましてござりまする。

京太　おゝ又十郎どの、戻られしかな。

柳藏　先刻よりお待ちかね。

運平　ちつとも早く、

三人　おはひりなされい。

京太　どれ、父上へ申し上げん。

　　ト又十郎草鞋を脱ぎ、下手へ住ふ。京太郎奥へ行かうとする、此時後にて、

眞龍　なに、又十郎が戻りしとな。（ト合方になり、奥より眞龍軒散髪好みの鬘。同じこしらへにて出來る。京太郎有合ふ搦火鉢を二重へ直し、眞龍軒これへ住ひ、）今朝よりの雪催ひに、老の身の體にこたへ、一間に籠り讀書なせしが、又十郎等は山狩りにて、一層凌ぎ兼ねしならん。

又十　勿體なき其仰せ、我等は未だ若き身の上、聊か厭ひは仕りませぬ。

京太　して、父上が御養生の爲、御食料に遊ばされんと、申し附けたる小鳥狩り、何ぞ得物はござりしかな。（ト又十郎じゆつなきこなし）

又十　さ、其の得物は。

眞龍　得物は何がありしよな。

又十　さあ、それは。（ト又十郎はッとうつむく、柳藏三人此體を見て、合方になり、）

柳藏　見受けし所又十郎どのゝ、所持いたしたる袋の内には、小鳥一羽居らざる樣子。

運平　察するところ今日は、終日山へ出でられて、何も得物はないと見ゆる。

大助　無いなら無いと有體に、此場でお返事、

三人　いたされよ。

又十　さ、御返事申し上げ兼ねしは、今朝より諸所方々、小鳥を尋ね求むれど、折惡しく一羽も居らず、段々山へ深入りなし、せめて小鴨の一羽なりとゝ氣はあせれども是れとても、居らざるゆゑに是非なくも遲刻いたして戻りしは、面目次第もござりませぬ。

トうつむき、ぢつとこなし、京太郎思入あつて、

京太　餘人にあらば知らぬこと、貴殿は弓術衆に勝れ、空飛ぶ鳥も射落す手練、今日に限つて一羽も打たぬは、何とも以て合點行かず、（ト京太郎合點の行かぬこなし、門弟三人思入あつて、）

柳藏　若先生の最員にか小鳥一羽うたぬのを、合點行かぬと仰せあれど、決して左樣な事にあらず。

運平　動かぬ的を射るとは違ひ、生きたる鳥を射落すは、未熟な業では出來ますまい。

大助　それとも所詮及ばぬと、見切りを附けて百姓家の、圍爐裏で終日ひまを費やし、獵がなきとて戻られしか。

柳藏　大方そこらが、

三人　當りでござらう。

又十　是れまで師匠の教へを受け、空飛ぶ鳥を射ることは覺え居れども今日は、折惡しく一羽も出逢はず、まことに是非もなき儀でござる。
柳藏　いや其の言譯は受取れぬ、空飛ぶ鳥は居ぬにせよ、谷間に古洲ござるからは、雁鴨くらゐは其所に必ず居るに相違ない。
運平　察する所、その邊で、こりやあ打ち損じたのでござらうな、何と當てられましたらう、いやさ、此的ばかりは外れますまい。
大助　人間なれば師匠の前、どの面さげてすご〳〵と、手ぶらで戻つて來られまいに。
柳藏　いや、いけしやあ〳〵とした、
三人　ものでござる、はゝゝゝゝ。
ト三人又十郎を尻目に掛け、よろしくこなし、此時表にて赤子笛になり、皆々思入あつて、
京太　やゝ表に小兒の泣き入る聲、誰ぞ參りはいたさぬか。
柳藏　拙者が參つて樣子を見ん。（ト柳藏立ちかゝるを、又十郎留め、）
又十　いや、泣き入る小兒はそれがしが、召連れ參つて林の内へ、寐かしておいてござりまする。
眞龍　なに、小兒を召連れ參りしとなっ此の寒さに門外では定めし冷える事であらう、早う内へ連れられ

よ。

又十　先生のお許しなれば、是れへ召連れ參りまする。

ト又十郎門口の外の抱子を取り、いぶり附けながら内へはひる。門弟跡の樣子を見る、又十郎二重下手へ住ひ、合方になり。

京太　して其の小兒は何れのものにて、如何いたして召連れしぞ。

又十　今日小鳥の得物なきに箕輪の山へ深入りなし、あちらこちらと尋ぬるうち谺に聞ゆる赤子の泣き聲、それを知るべに參りし所、たゞ山駕籠に小兒のみ、既に狼の餌食とならんを拙者參つて助けしが、誰に渡さん者もなく、其儘見捨て兼ねまして、是れまで抱き參つてござる。

京太　それは不便な事であるが、定めし腰に守りがあらん。それを其許改めしか。

又十　それとても早急ゆゑ、未だ改め遣はしませぬ。

柳藏　こりや若先生の仰せの通り、守りの内を改めなば、假令姓名知れずとも、生國くらゐは知れるであらう、どれ、身共改めて遣はしませう。（ト是れより替つた合方になり、又十郎の抱きし抱子の附紐を解き、巾着を取つて、中を明けいろ／＼守りを出し、）中には種々の守りがある、御兩所もお見分け下され。

運平　委細承知いたしてござる。(ト普賢菩薩の小さな御影を出し、)

大助　鶯鷲を見るやうな、木で彫つた細工物、是れは何でござらうな。

運平　それは江戸で名高い、山王から出る猿でござる。(ト柳藏山王の守りを取つて、)

大助　爰に山王の守りがあれば、正しく小兒は山王の、氏子の者と見えるわえ。

柳藏　ト運平たゝみある書附を取つて

運平　これは臍の緒書でござらう。(ト開き見て、)「青銅二十疋、御神樂料受納いたし候、山城稻荷神職米屋佐五ト衛どの。」

又十　えゝ。(ト思入。)

運平　是れはお神樂料の受取だ。

又十　して、其外に記しある姓名などはござらぬかな。

大助　おゝ、是れに臍の緒書が出ました。

眞龍　早く讀み上げい。

大助　「寛永五年五月五日誕生、柳生又十郎悴又市。」

又十　なに、柳生が悴又市とな。

ト又十郎びつくりなす、是れを眞龍軒京太郎顔見合せ、扨はといふ思入、門弟三人はよき手掛りとい
ふこなしあつて合方にて、

柳藏　はて、聞いたやうな其の名前、柳生又十郎悴又市。

運平　柳生又十郎。

大助　柳生又十郎。

柳藏　これ、是れでもそこ許聞えぬか。（ト又十郎の耳の側へ口を遣る）

又十　なに、聞えぬかとは。

柳藏　柳生又十郎が悴といふ。

運平　臍の緒書に、

三人　記してあるを。

又十　さあ、それは。

柳藏　隱さるゝな又十郎どの。

運平　御身が悴で、

三人　ござらうがな。

又十　さあ、それは。
柳藏　さゝ貴殿が紋も同じ紋、名前ばかりか定紋まで、しつくり出合ふは正しく悴、何とこれでも知らぬといふか。
運平
大助　悴ではござらぬか。
又十　さあ、
四人　さあ〳〵〳〵。
柳藏　よもや知らぬとは、
三人　申されまいがな。（ト三人口々にいふ、又十郎うつむきぢつと思入、運平進み出で、）
運平　是れにて思ひ當りしは、又十郎が江戸表にお出でありし其頃は、小菊とやら申す腰元と密通せられしと承はつたが、察するところ此小兒は其の小菊が產落したる、貴殿のお胤でござらうがな。
大助　さすれば小菊は此邊に圍つてあるか、但し又、下宿をさしてござるのか。道理で終日小鳥狩りの得物もなしに、手振編笠で戻られたも、無理ではないと思はるゝ。
柳藏　それを簑輪の山中の駕籠に殘してござつたなどゝ、のめ〳〵悴を師匠の內へ、連れてござつた御心中、お胸の程が思ひやられ、實に抱腹々々。

三人　いたすでござる、むゝはゝゝゝゝ。（ト三人當てこする、京太郞又十郞の側へ寄り。）

京太　最前より此所で貴殿の樣子を見受けし所、守りに入りし臍の緒書と、又二つには紋所、しつくり出合ひし是れなる小兒、目串の拔けぬ事と思ふが、いよ〳〵貴殿が子息でござるか。

ト又十郞も是れまでといふ思入にて、上帶をとり、枕にして抱子を下へ寐かし、誂への合方になり、

又十　朋輩衆を始めとして、左樣に思召さるゝは、こりや御尤もにはござれども、其の言交せしと申す婦人を此邊へ呼び寄せし、毛頭覺えはござらねば、しかと我子と申し上げる、此の身に覺えはござりませぬ。

京太　知らぬとばかりでは、此の言譯は立ちますまい、何ぞ證據を見せられよ。

又十　さあ、別に證據と申しては。

京太　さすれば、御身が子息でござるかな。（トきつといふ。）

又十　さあ、それは。（ト又十郞切なき思入、眞龍軒思入あつて。）

眞龍　又十郞それへ出い。

又十　はツ。（ト出兼ねるを。）

眞龍　いやさ、ずつと出い。

又十　はあゝゝ。（ト又十郎摺り寄ろ、眞龍軒思入あつて、）

眞龍　又十郎、今改めて此の場に置き、そちと師弟の緣を切りしぞ。

又十　えゝ。（トびつくりなし、）そりや、何故に先生には。

眞龍　何故とは愚なり、こりや我が申すこと、よツく聞かれよ。（ト誂への合方になり、）其方入門せしは何ケ年前、其砌り懺悔いたせしは、腰元小菊と申す者と密通なして居たりしが、物堅き但馬守世間の聞え門弟の手前を憚り勘當されて、二年この方指南せしが、其の業茶に勝れたる手練に我も鼻高く、先づ三年相立たば親父但馬守へ改めて歸參させんと存じ居りしが、其第一たる色情に心亂れし上からは、最早師弟の緣も是れまで、疾く〳〵此家を立ちのかれよ。

ト眞龍軒きつといふ、又十郎こなしあつて、

又十　御立腹はさる事ながら、臍の緖書と定紋のしつくり出合ひし事ゆゑに、申譯いたせしとて、御聞き濟みはござりますまいが、今當家を退轉いたさば諸人の嘲り目のあたり、遠からずして是れなる小兒の親を尋ねて渡せし上、潔白を立てますれば、暫しが間御宥免を。

眞龍　いや、そりや相成らぬ、武士たる身として血判せし、誓紙を反故にいたす奴、詞かはすも身の穢れ何れへなりと立ち退いて、良き師もあらば其時は、再び心を磨かれよ、我は今日限りなるぞ。

ト立上るを、又十郎側へ行き袖に縋り、

又十　さゝ、そこを何卒今暫らく、潔白立つるそれまでを。

眞龍　いやならぬ、是れも汝が爲めゆゑに。

又十　え。

眞龍　いやさ、詞交すも。（ト行き掛けるを、）

又十　あゝもし。（ト縋るを振拂ひ、）

眞龍　えゝ、穢らはしいわえ。（ト又十郎又縋るを、眞龍軒振拂ひ奥へはひる、柳藏等三人思入あつて、）

柳藏　又十郎どの、腕前を先生見習へと仰せありしが、女をたらす腕前は末は斯樣なざまになるゆゑ、
こりや見習はぬがようござらう。

運平　此場に長居をいたす時は、女をたらす腕前が、傳染なさんも計られず。

大助　しばしが間お暇を願ひ、當村境の煮賣屋にて、惡病除けの御神酒をあげ、

柳藏　病を拂ふが上分別。

運平　若先生、暫くお暇を、

三人　お願ひ申し上げまする。

京太　淫酒は誓ひの三つのうち、深くせぬやう愼しまれよ。
柳藏　委細承知、
三人　いたしてござる。（ト三人京太郎へ會釋して、門口へ出て）
柳藏　女を殺す手練が勝れ、先づ槍先の功名で、
運平　漸く儲けた子寶も、今となつては重荷に小附け、
大助　やつぱりしないで打たれた上、小手の利かぬが、
三人　勝でござらう。（ト山おろし合方にて、三人花道へはひる。京太郎思入あつて）
京太　最前より此場にて、御身の上を推察いたし居つたれど、何を申すも一克なる父上のことなれば、執成しいたす間もなき場合、一先づ爰を立ち退れよ。（ト京太郎奧へ行かうとするを）
又十　すりや、御子息までが、御立腹にて。
京太　何か一つの功を立てなば、其時こそは又お詫びを。（ト又十郎思入あつて）
又十　然らば、とくと思案なし。
京太　よき返答を、お聞かせなされよ。（ト唄になり、京太郎奧へはひる。跡床の淨瑠璃になり。）
〽跡に柳生はたゞ一人、胸に時打つ遠山の、鐘も無常を告げ渡る、霜にこゞへし枯紅葉、凍

る手先をあたゝめつ、小兒を抱き歎息なし、

ト時の鐘、又十郎抱子をいぶりながら、跡を見送り思入。床のめりやすになり。

又十 そちは如何なる宿縁にて、今日計らずも山中にて、我が手に來りしものなるか、不便と思ひ助けしも、今となつては此身の難儀、とあつて此儘捨てんにも守りに附けし臍の緒に、姓名記しある上に、小菊が身重になつたるより、算へて見れば十月目が、丁度寛永五年五月、慥に我が子に相違なし、心殘せしそれ故に、つひに師匠の御立腹、再び面は合さぬと仰せありしも是れまでに御教諭受けし大恩に今一際にて眞影流の奧儀を御傳授下されん際に至つて此の始末、一足我が遲く行き、いつそ汝が狼の餌食となつて死せしなら、此身に取つてましならめ、なまじ助けしばつかりに、そちには幸ひ我れには不幸、

〽是れぞ浮世の習ひぞと、子の愛着に物思ひ。（ト抱子を見やり思入あつて）

今先生のお詞にも、再び心を磨けよと、仰せは我に的中せり、爰が肝腎要の思案、不便ながらも、汝が一命、打つて此の身の潔白立てん。

〽思ひ立ちたる武士の、磨く刃金の差添を、拔けば玉ちる氷の刃。

ト思入あつて小の方を拔き、抱子を見遣り、

情を知らぬものと思ふであらうが、是も定まる約束と、諦めてくれ、許してくれ、こりや悴

〽許してくれと目に涙、口に唱名手に劍、刺さんとすれば幼子は。

ト又十郎抱子の胸許へ刀を突き立てようとして、ぢつと見て、

今殺さるゝとも知らずして、こりやにこ〳〵と笑うて居るか、こりやもういつそ小兒を助け、切腹なさんがいつち早道、いでや、冥土へ赴かん。

〽抱きし小兒かたへに下し、覺悟も死出の旅立も、劍の山に愛着の子ゆゑに迷ふ心根を、さぐる足許踏みしめて、表へ來掛る小十郎、內には隔て押明けて、樣子窺ふ眞龍軒、こなたは弓手の脇腹へ突立てんとして、又も思案し。

ト此文句の內抱子を下へ寢かし、兩肌を脫ぎ切腹の支度をする、よき程に奧の襖を明け、眞龍軒窺ふ、下手より以前の小十郎刀を構へ、思入あつて、

これにて空しく相果てなば、二ヶ年この方先生より、御教諭受けし大恩を、水の泡になす道理、こりやいつその事に小の蟲、悴を殺して言譯立てん。

〽又も我が子を抱き上げ、突かんとなせば恩愛に、親の心も目なし鳥、手先ふるへて突き兼ぬるを、斯くては果てじと氣をいらち、既に危き左右より、

ト又十郎抱子を取上げ、胸許へ差附け殺しかける事あつて、トゞ突かうとする、此の時奥と門口にて、

眞龍　心底見えた。

小十　暫し待たれよ。

又十　え、暫し待てと止められしは、もしや身共が。

〽不審たつれば、内外にて。（ト此時奥にて）

眞龍　いかにも、柳生又十郎、

小十　止まられよ。

〽驚くこなたの奥の間より、當家の主人門外より、一時に入り來る小十郎、こなたは見るより威儀を正し、

ト奥より眞龍軒、京太郎附添ひ出る、下手より小十郎内へはひり住ふ、又十郎手を突き、

又十　再び逢はぬと仰せありし、先生の御出席、然のみならず坂部氏が、不意の入來は心得ず。

〽いふに老人座を正し。（ト眞龍軒思ひ入あつて合方になり、）

眞龍　先刻より此場の樣子、逐一あれにて窺ひしに、まこと婦人に心亂さぬ心底見えしゆゑ。

小十　あたら一命捨てさせんが、如何にも惜しく存ずるゆゑ、外よりお止め申したる我が心底も先生と

先づ御同意で安堵いたした。

又十　はッ、勿體なき其の仰せ、死を止むるは幸ひなれど、此儘にては功立たず、せめて小兒は此の場に於て。

ト抱子を突かうとするを、

眞龍　はて、我が止めし上からは、其の潔白は見るに及ばぬ。

又十　それぢやと申して。

眞龍　はてさて、助けいと申すに。

又十　はあゝゝゝ。（ト是非なく控へる。眞龍軒思入あつて、）

眞龍　心底見拔きし上からは、今改めて其方が、武術を試し其上にて、柳生但馬殿へ家督の儀を申し遣さん。

小十　すりや又十郎どのゝ御歸參を、

京太　父上御添心。

小十
京太　遊ばさるゝとな。

眞龍　外ならぬ但馬殿、舊友なりしあらましを、又十郎始め承はられよ。（ト眞龍軒居直り、谺の入りし跳

への合方になり」元我が師と頼みしは、小田原北條氏政どの繁昌なりし其折に、隨身なせし軍學者、上泉伊勢守とて眞影流の達人にて、其頃天下に譽れの人なり、御身が父但馬どのも我も共々伊勢どのが同門にてありつるが、則ち皆傳免許を受け、宗矩どのには柳生流の一流を弘め、我は又師が館地たりし上野國箕輪の鄕に引籠り、心貫流と改めて、近國近在の者に仕込み、今日までは送りしが、其舊友の縁故ある又十郎が身の上を、再び柳生へ戻さねば、是れまで教諭いたしたる、積る苦心の立たざるゆゑ、一命助け其方を歸參をさせん所存なるぞ。

又十 すりや左程まで拙者めを、思召し下さりますとは、詞に申し盡し難し、此上ともに劍道に一層修業いたしまする。

眞龍 我も最早古稀を越し、追々老年に及びしに、未だ忰は若年ゆゑ、極意を讓るは其方のみ、幸ひ是れにて小十郎と試合をいたせ、我は是れにて見物なさん。

又十 すりや先生の御前にて、坂部氏と、

小十 試合は我も願ふところ、有難う存じ。

兩人 奉つりまする。

京太 して、それなる小兒は、

又十　さ、親も知れざる孤兒に、寒氣も強き山家の冬、此儘肌にあたゝめながら、
京太　試合召さると申さるゝか。
又十　はあゝゝゝゝ。
京太　然らば双方、立合ひ召され。
兩人　はッ。
　　ト白囃子になり、小十郎襷をかける、京太郎壁に掛けし長短の木太刀を持ち來り、平舞臺へ直す、小十郎上手に長き木太刀を持ち、又十郎抱子を懐に入れしまゝ、下手に短き木太刀を持ち、
小十　いざ、
又十　いざ、
兩人　いざ〳〵〳〵。
　　ト三絃入りの白囃子になり、小十郎上段に構へ、又十郎木太刀を差附ける、小十郎打ち込めぬ思入、此時赤子泣く、此隙を見て打ち込む、又十郎いぶり附けながら、立廻りよろしくあつて、眞龍軒目を放さず檢分するこなしあつて、
眞龍　双方待つた。

兩人　はッ。（ト兩人木太刀を下に置き、平伏する。）

眞龍　いや、あつぱれなる二人が手練、我に於ても悅ばしいぞ。

兩人　はあゝゝゝ。

眞龍　然し双方見るところ、又十郎は九分にして、其業未だ一分足らず、又小十郎は七分にして、未だ三分足らざるなり、其の術十分に至るやう、又十郎に極意を示さん。

又十　すりや、拙者めへ。

眞龍　如何にも。

〽言ひつゝ立つもやう／＼に、曲れる腰を延ばし得ず、下りる踏段とぼ／＼と門へ來かゝる佐五兵衛親子、双方窺ふ試合の呼吸、眞龍軒弱腰をぢつと構へ。

ト眞龍軒大儀さうに立ち上り、やうやくに本舞臺へ下りる、又十郎抱子を下へ置かうとするを、京太郎これへと抱き取る。文句よき程に下手より、以前の佐五兵衛、お菊足早に出來り、門口にて樣子を窺ふ、又十郎は切手水を遣ひ、下手に長き木太刀を上段に構へる。眞龍軒上手に短き木太刀を取り、下段に構へる。又十郎切込まうとして切込めぬ思入、文句の止り溜入りの合方になり、眞龍軒木太刀を差附け、傳授する思入あつて、木太刀を引く、又十郎打つてかゝる、ちよつと立廻つて又十郎の後

へ廻る、又十郎左右を見返る。眞龍軒下手へ出で、木太刀を差附ける、又十郎打ち込めず、たち／＼と跡へ下がる、總て位取りの立廻りよろしく、此の内傳授する思入、眞龍軒振りあげる、又十郎眞龍軒のした通りに差附け、思入あつて平伏する。

眞龍　會得なせしか。

又十　慥に會得いたしてござる。

眞龍　むゝ。

〽何思ひけん眞龍軒、懷中より一卷取出し。（ト懷中より一卷を取出し、）

極意を記せし傳授の一卷、只今汝に讓るぞよ。

又十　すりや御傳授の一卷を、はゝ、有難う存じ奉つりまする。（ト一卷を又十郎に渡す。）

眞龍　我がなき後に賴むは其方、是れなる悴二つには高弟坂部が劍道を、よしなに教諭いたしくれよ。

京太　父なき後は父と思ひ、軍法奥儀の祕密の傳書。

小十　偏に御指南下さるやう、お願ひ申し、

兩人　上げまする。

又十　仰せまでも候はず、御教諭受けし廉々は、逐一御指南申し上げまする。

眞龍　最早奥儀を極めし上は、直樣これより江戸表の但馬どのゝ許へ參り、其身の詫びをいたしなば、必ず勘當赦免あらん。

又十　何から何まで厚きお情、此の六韜三略を持參いたして勘當の、詫びをいたすでござりまする。（ト又十郎に向ひ、）折入つて坂部氏へ、賴み入れたき一儀と申すは、召連れ來りしそれなる小兒、お手數ながら何れへか里の口もござるなら、お世話なされて下さりませ。

小十　その御心配には決して及ばぬ、身共直樣この所より、小兒が母へ渡すでござる。

又十　心得ぬその仰せ、小兒が母へ渡すとは。（ト合方になり、）

小十　實は先刻山中にて雲助どもが惡巧み、婦人を捉へし其所へ、參り合して老人親子を、助けし折に求はれば、駕籠に小兒を殘せし由、直ぐに其場へ駈附けて、尋ねさがせど行方知れず、餘儀なく親子兩人は、我が伴ひ歸宅せしが、小兒を渡さば其者が、さぞ悦ぶ事でござらう。

又十　すりや、此の小兒の母親も、父を尋ねて。（ト此時門口の兩人覗くを、又十郎と思はず顏見合せ、）いやさ、我が子を尋ねて居りますとか、それは誠によい幸先き、何分ともにお賴み申す。

ト京太郎より抱子を取り、小十郎へ渡す。

小十　とてもの事に母親に、柳生どのには御對面を。

又十　いや誓ひを立てし上からは、他人にいたせ、女子には。

眞龍　流石は武士、あつぱれ出來した。

又十　左樣ござれば、仰せに隨ひ、

京太　直樣發足いたされよ。

又十　はツ。（ト立ち上るを、）

眞龍　こりや待て。（ト又十郎下に居る、）忰、門出を祝せ。

ト京太郎扇を持つて、平舞臺へ下り、よろしく居直る、眞龍軒形を改め、

〽是までなりや嬉しやな。（トよろしく下座の謠になり、）

〽是れまでなりや嬉しやな、斯くて都に御供せば、又もや御意の替るべき、たゞ此儘にお暇を夕告げの、鳥が啼く東路さして行く路の、やがてやすらふ逢坂の、關の戸ざしも心して、

ト京太郎舞の振りあつてよろしく納まる。又十郎手をつかへ、

又十　左樣ござれば、御機嫌よろしく。

眞龍　おゝ、そちも堅固で歸參いたせ。

又十　はツ。（ト辭儀をなし、京太郎に向ひ、）大先生は御老體、隨分ともに御孝養を。

京太　盡すは子としてなすべき事。

小十　其の孝行もなさずして、逢ふは別れの。

佐五
お菊　え。（ト門口を明けようとするを、又十郎制し、）

小十　いやさ、生者必滅會者定離。（ト内外皆々愁ひのこなしあつて、眞龍軒氣を替へ、）

眞龍　おゝ、目出度い。

皆々　はあ――。

〽明け行く跡の山見えて、花を見捨てる雁金の、それは越路我は又東に歸る名殘かなく。

ト此内又京太郎謠の切を舞ふ、又十郎下手へ平伏なす。小十郎抱子を抱き立上り、下手へ出る。門口の兩人は内を伏し拜む、此の模樣よろしく、

ひやうし　幕

四幕目

駿河臺大久保の場

木挽町柳生家の場

〔役名――柳生但馬守宗矩、大久保の用人藤田門兵衞、雲助狼の九助、柳生の用人萩原惣兵衞、大久保の中間權平、同專藏、柳生の若黨柳藏、近習、同中間、立廻りの門弟、大久保彦左衞門、柳生又十郎宗冬。宗矩の妻靜江、佐五兵衞娘小菊、腰元松枝等。〕

（大久保屋敷の場）――本舞臺三間の間常足の二重、向う雲母形の襖、上の方一間障子屋體、下の方九尺の玄關、常足の二重、式臺附き、向う同じく雲母形の襖、左右間平戶、此の下黑塀、二重と玄關の間低き板羽目にて見切り、總て駿河臺大久保屋敷の體、玄關に門兵衞袴なり、更けたる味噌用人のこしらへにて住ひ、式臺に中間權平、專藏、紺看板にて腰を掛け居る、此の見得稽古唄にて幕明く。

門兵　あの唄は何處でうたふのだ。

權平　あれは前町の八百屋の娘が、師匠から歸つてさらひますのだ。

門兵　なか〳〵節もいゝが、聲もいゝ聲だ。

專藏　聲はあんなにいゝ聲だが、顏はぼつちやり牡丹餅顏。

權平　持參金が附かなければ、嫁入りの口はむづかしい。

門兵　顏はどんな顏でもいゝが、持參金が附くなら、さういふ娘を貰ひたい。

專藏　いくら金が附かうとも、女房は生涯連添ふもの。

權平　あんなでゞふくは一晩でも眞平だ。
門兵　ところが夫婦になつて見ると、言ふに言はれぬ味ひで、どんなでゞふくでも可愛いものだ。
專藏　お前さんは、そんな事をおつしやるが、
權平　わつちやあ色氣より、喰氣の方だから眞平だ。
門兵　いや、喰氣といへば、此頃風が吹くので不漁なせゐか、さつぱり肴屋の聲がしないな。
權平　なに、不漁な事はござりませぬが、駿河臺で名代なお屋敷、いつもお拂ひが悪いから、
專藏　御門前をだまつて通り、辻番から先きへ行つて肴を呼んで歩きます。
門兵　當お屋敷は御家風で昔から五節句拂ひ、晦日十四日に遣らぬから、それで商ひをしないのだらう以前こちらに勤めて居た、草履取りの一心太助が、旦那さまからお暇を貰ひ、今は肴を賣つて居るが、遠州の秋葉から在所へ廻つて來るといつて、久しく商ひに來ないので、肴の味をさつぱり忘れた。
權平　ほんに太助どのは氣前がよく、殘りものでもある時は、一盤臺そつくらと部屋へくれて行くゆゑに、
專藏　曖の出る程鰯などを、喰つた事があつたけれど、太助どのが來ねえので鯷の酢入りも喰はれね

え。

門兵　早く太助が旅から歸り、商ひに來てくれゝばよいが。

ト又稽古唄になり、花道より九助、そぼろなるこしらへ、細き帶をしめ草履にて出來り、花道にて、

九助　もうそろ〳〵寒いので、御玄關の日溜りに、日向ぼつこをして居るのは、味噌用人の藤田門兵衞きやつで話しが分かればいゝが。（ト思入あつて舞臺へ來り小腰を屈めて）はい、お頼み申します。

門兵　どちらからござつた。

九助　あちらから參りました。

門兵　そりやあ言はねえでも知れたことだ、一方道の玄關前、向うより外に道はない。

權平　どちらからと言はつしやつたのは。

專藏　お前の所を聞いたのだ。

九助　へい、左樣でござりますか、それは粗相を申しました。

門兵　して、どちらからのお使ひだ。

九助　いえ、使ひではござりませぬ、私の用で參りました。

門兵　なに、こなたの用とは。

九助　お見忘れなさいましたか、以前お使ひに上りました、柳生但馬守の若黨、九助と申します者でございます。

門兵　以前當家へお使ひにござつた事があるか知らぬが、毎日諸家からござるお使ひ、一度や二度では覺えて居らぬが、こなたの用と言はるゝは。

九助　何をお隱し申しませう。采女ヶ原の餘毒が殘つて、骨揃みで體がきかず、武家奉公も出來ませぬから、今度暇を取りまして草津へ湯治に參ります、どうか御前から草鞋錢を頂戴いたしたうござります。

門兵　なに、夜鷹を買つた餘毒が殘り草津へ湯治に行きたいから草鞋錢を貰ひたい、いや途方もない事をいふ男だ、そんな事を願ふなら、お臺所へでも來ればよいに、當時天下の御旗本で、肩を並べるものもない、三代勤仕の御老公、大久保彦左衞門樣のお玄關だぞ、又者の分として失禮も顧みず、草鞋錢をくれなどゝは、何の緣を以ていふのだ。

九助　何の緣もござりませぬが、こちらの御前が私の主人の屋敷へお出での時は、お目通りをいたしまして、九助といふ名も御存じゆゑ、斯ういふ事で願ひに來たとお取次ぎ下さいましたら、幾らか下さいませうから、御面倒でも藤田さま、どうぞお取次ぎ下さりませ。

門兵　いや左樣な事は取次がれぬ、毛坊主の時分から當家へ勤める藤田門兵衞、是れまで猪で草津へ行く草鞋錢の取次を、ついにいたしたことがない。
九助　左樣でもござりませうが、人一人助かりまするこ と、お取次ぎ下さりまして、幾らかお貰ひ下さりませ。
門兵　えゝ、しつこい、出來ぬといふに。
九助　さう一途に言はずとも、奧へおつしやつて下さいまし、御前がならぬとおつしやりやあ、そりやあ仕方もないけれど、酸いも甘いも御存じの、古狸といふ大久保さま、野暮なことはおつしやりますまい。
權平　これ〳〵いゝ加減に言はねえか、今藤田さまのおつしやる通り、お旗本の御玄關へ草鞋錢を貰ひに來るものが、何處の國にあるものか。
專藏　料理茶屋か酒屋なら、ぐづ〳〵言はれるが面倒だから、百か二百はくれもせうが、博奕や地獄をするやうな、旗本とは譯が違ふぞ。
門兵　達てぐづ〳〵申すなら、御門前へつまみ出すぞ。
九助　以前お目通りをいたしたから、お賴み申しに參りましたが、取次ぐことが出來ないとおつしやり

ますれば仕方がない、明日にも旦那が御登城の、途中でお願ひ申しませう。

門兵　それはどうとも勝手にいたせ、屋敷ゆゑ料簡いたすが、途中で無禮をいたす時は、手討ちにするからさう心得よ。

九助　瘡と借りで此首がおれの自由に廻らねえが、是れでも生きて居たいから、草津へ湯治に行きますのだ、手討にされてうまるものか。

權平　命が惜しくばぐづ／＼せずと、早くこなたも歸るがいゝ、お年は取つても御氣性ゆゑ、旦那さまのお耳へいつたら、

專藏　無禮な奴と一打ちに討たれまいものでもない、さあ／＼早く歸るがいゝ。

九助　取次ぐことが出來ねえなら、爰に居ても無駄なこと、お暇をして歸りませう。

門兵　今日はこの儘許してやるが、此後來ると許さぬぞ。

九助　誰が再び來るものだい。（ト立上り）ちよつといつぺい飲みてえが、二百貸してくんなさらねえか。

門兵　まだそんな事を言ふか。（ト立ち掛るを、）

權平　はて、うつちやつてお置き、

專藏　なされませ。

九助　貸せずば借りねえまでの事だ。（ト稽古唄になり、九助悠々と花道へはひる。）

權平　旗本屋敷へぐづりに來るとは、

專藏　呆れ返つた奴だ。

門兵　成程あいつは柳生殿に、以前勤めて居た奴だが、暇になつたは三年ばかり慥か跡のことであつた、何處へ今まで行つて居つたか、そぼろなりをして居るからは、ぐれ宿にでも居ると見える。

權平　おいら達も前町の、酒屋へ行つて、よくぐづるが、

專藏　今の九助を見るに附け、いやがられるのは尤もだ。

門兵　良いに附け惡いに附け、大久保さまの中間だと、一に旦那のお名が出るから手前達も酒屋へ行つて、必ずぐづ〳〵言はぬがよい。

權平　是れからきつと、

專藏　愼しみませう。

ト誂への合方になり、又十郎月代を延し亂れたる鬘、やつしなり、大小脚絆草鞋にて、菅笠を持ち出來り、花道にて、

又十　三年越しで江戸へ歸り、板橋から本鄉まで來る道々も以前と替り、追々人家も建續き僅かなうち

に街の繁榮、自然と華美を好む世に、大久保殿の邸宅は三年跡も同じ事、質素を好む御性質、はて感心な事ではある。（ト思入あつて、四邊を見る、これを見て、）

權平　もし、又汚ない奴が參りましたが、

專藏　錢貰ひかも知れませぬ。

門兵　これ、聞えると惡い、靜かにいたせ。（ト此内又十郎感心せし思入にて舞臺へ來り、下手へ小腰を屈め、）

又十　お賴み申します。

門兵　何れからお出でなされしぞ。

又十　拙者は武術修行の爲め、諸國を廻る者でござる。

門兵　諸國を廻るとおつしやれば、もし草鞋錢の御無心なら御賴みのない其うちにお斷り申しまする。

又十　いえ決して左樣な事ではござらぬ、御目通りがいたしたく、態々是れへ參つてござるが、御在邸でござりまするか。

門兵　されば、よい事なれば御在宿、惡い事なら御他出ゆゑ、どちらとも申されませぬが。

又十　御念の入つた御挨拶、かゝる見苦しき姿ゆゑ、合力でもお賴み申す浪人者と思召さうが、決して左樣な者ではござらぬ、お見掛け申して御主人に、お願ひあつて參りし者。

門兵　おつウ今度は手を替へて、合力などは頼まぬと言はるゝ下から、折入つて願ひがあると油斷のならぬ。如何なる願ひか存ぜぬが、先づ差當りそこ許の、御姓名が承はりたい。
又十　かゝる姿で姓名を、名乘るも面なき事ながら、拙者は柳生又十郎でござる。
門兵　ハヽえ、柳生さまでござりますか。
權平　それではやつぱり、今の九助と、
專藏　一つ玉なら草鞋錢だ。
門兵　えゝこれ。(ト押へる。)
又十　どうか御主人大久保氏へ、又十郎が參りしと、お取次ぎ下さりませ。
門兵　お取次ぎはいたしませうが、惡い事ではござるまいな。
又十　いや、御迷惑は掛けませぬ。
門兵　左樣なれば、旦那樣へ。(ト門兵衞立ち掛る、此時奧にて、)
彥左　いや知らせに及ばぬ、只今それへ參るであらう。
門兵　こりや、お耳へ入つたと見える。
ト合方きつばりとなり、奧より彥左衞門白髮鬘、紙子の羽織着流し、一本差しにて刀を提げ出來り、

彦左　今奥で承はつたが、柳生又十郎どのが參られしか。
門兵　はい、左樣でござります。
彦左　なぜ、是れへ通さぬのぢや。
門兵　餘り身なりが汚ないゆゑ。
彦左　身なりはどうでもよい事を。（ト言ひながら玄關の二重へ出て）おゝ又十郎どのか、やれ／＼思ひ掛けないことだ、手前の所に遠慮はいらぬ、さあ／＼こちらへ通らつしやい。
又十　左樣なれば、御免下さりませう。

ト足のほこりを拂ひ、刀を提げ玄關より二重へ上る、彦左衞門二重より平舞臺上手へ通り、是れへ來いといふ思入、又十郎下手へ住ふ。

門兵　これ、手前達には用はない、部屋へ行つて休息するがいゝ。
專藏　左樣なら、部屋へまゐつて、
權平　盛切り酒でもやりませう。（ト權平專藏下手へはひる、門兵衞は平舞臺へ來り）
門兵　只今はお見外れ申し、失禮を申し上げました。（ト辭儀をする。）
又十　いや、手前も失禮いたしてござる。

彦左　これ、茶の支度でもいたさぬか。

門兵　はい、畏りましてござります。(ト合方にて奥へはひる。彦左衞門思入あつて、)

彦左　さて久々にて對面したが、變る事もあらざりしか。

又十　仕合せと私も息災にござりますが、御老公には三年以前御目通りいたせし時と、更にお變りのございませぬは、重疊な儀にござりまする。

彦左　其樣に褒めさつしやつても、當時彦左衞門儉約中ゆゑ、一升は扨置き二合の酒も買ひませぬぞ。

又十　いえお面も水々と、實にお變りござりませぬ。それに引替へ私は、父の勘氣を受けましてより諸國を遍歷いたしまして、變り果てたる此の姿、御目通りをいたしまするも、恐縮の至りにござりまする。

彦左　今褒められた返禮に、變らぬと言ひたいが、以前に替り色黑く辛苦をせしか頰も瘦せ、外で逢うてはお手前と存ぜられぬ程變りしぞ。

又十　仰せの如く流浪中路用とても乏しきゆゑ、或は野に伏し山に臥し、雨露霜雪の厭ひなく艱難辛苦をいたせしかば、自然面も瘦せ衰へ、以前に變りし又十郎、御推察下さりませ。(ト面目なき思入。)

彦左　實に今の姿では、戀ゆゑ勘氣を受けしとは、なか〳〵見えぬ其の有樣、既にあの砌り我が方へ詫

びを賴みに參るかと、日々待つて居つたるが、兄刑部が異見によつて女を里へ預け置き、武術修行に出でしと聞き、流石は但馬の胤なりと、其の志しを感じて居つた。して、是れまで何れにて武術修行いたせしぞ。

又十　其砌り大和へ立越し兄十兵衞に身の不埒を懺悔いたして半年程、指南を受けてそれよりは、九州路より中國筋、北國かけて二ヶ年間、こゝかしこに身を寄せて、修行いたしてござりまする。

彥左　それでは定めて一廉に上達いたせし事であらう、又此の江戶へ出て來たのは、何ぞ用でもあつての事か。

又十　光陰は矢の如く、早くも三ヶ年經ちしゆゑ、勘氣の詫びもいたしたく、江戶表へ參りましたが、容易な事では此の詫びを聞き濟みませぬ父が氣質、此のお口添は當時天下に、御老公より外になし、それゆゑかゝる見苦しき姿をも顧みず、お口添へを願はんと、推參いたしてござりまする。

彥左　大方そんな事であらうと推量いたしたが、今いふ通り容易な事ではなかなか承知はいたすまい。然し多年の懇意ゆゑ、彥左衞門が詞を盡し、詫び入つた事ならば聞き濟むまいものでもない。詫びの種は劍術だが、天晴勘氣を許される程、修行の功が積んだかな。

又十　我が身の事を我が申すは甚だ恐入りますが、先づ是れならばと指南せし師匠の許しをうけまして

歸國いたしてござりまする。

彥左　むう、して、御身に指南せし、師匠といふは誰なるぞ。（ト合方替つて、）

又十　小田原の北條家世に在りし其砌り、軍學の師範なせし上泉伊勢守の高弟、當時上州片岡郡箕輪の山中に閑居なす、丸目藏人にござりまする。

彥左　おゝ、世に眞龍軒と名の高い、丸目藏人の教へを受けしか。

又十　我が父も元上泉伊勢守の門弟にて丸目氏とは則ち同門、それゆゑ此身の不埒を明かし、父が勘氣の許りますやう、何卒御指南下されと折入つて賴み、それより日夜懈怠なく、劍術修行いたせしゆゑ、心貫流の極意をば、此の程免許皆傳受け、是なら父が許すであらうと師の詞を力となし、歸國いたしてござりまする。

彥左　神影流より一派を開きし心貫流の極意をば、讓り受けしとあるからは、それぞ父へのよき土產、勘氣の詫びをいたすであらう。

又十　すりやお口添へ下さりますとか、有難うござります、然し丸目氏に指南を受けしを、父へはお明かし下さりませず、只諸國を遍歷なし武術修行いたせしと、仰せ聞けられ下さりませ。

彥左　いかさま師匠を明かしなば、其の流儀が知れるであらう、是れは言はぬ方がよい。何しろ詫びに

行つても所詮一度では承知はしまい、先づ兩三度も此の親仁が足を運ばずばなるまい、其のうち宿屋に居るも無駄、手前屋敷へ參るがよい。

又十　御厚志のお心附け有難う存じまする。何分ともに御老公の、お執成しをお願ひ申しまする。

彦左　假令斷りを申さうとも、百度參りをいたしても聞き濟んで貰ふから、安堵して居るがよい。

又十　其仰せを承はり、心丈夫にござりまする。

ト此時合方きつぱりとなり、奥より門兵衞盆へ土瓶を乘せ持ち出來り、

門兵　お茶がはひりましてござりまする。

彦左　こりや門兵衞、火急に柳生但馬が屋敷へ參らねばならぬから、供廻りの用意いたせ。

門兵　はツ、お乘物にいたしませうか。

彦左　いや年を取ると氣がせはなしい、駕籠より馬にいたさう。

門兵　畏りましてござりまする。

ト此内花道より但馬守白髪かづら上下大小草履にて出來る、跡より絹羽織袴股立大小の友藏、紺看板の運六附添ひ出來り、本舞臺へ來り、

友藏　頼まう。

門兵　どうれ。（ト玄關へ出で、但馬守を見てびつくりなし、奥へ駈込む。）
友藏　お取次は如何なされしか。（ト合點の行かぬ思入。）
門兵　もし旦那さま、柳生さまがお出でなされました。
彦左　なに、但馬が參られた。
門兵　はい、左樣にござりまする。
彦左　それは丁度幸ひだ。
又十　父が參りしとあるからは、拙者は暫しお次へ參つて。
彦左　姿を見られぬやうにいたせ。
又十　はツ、畏りましてござりまする。（ト合方にて又十郎奥へはひる、門兵衞は玄關へ手を突き、）
門兵　これは〳〵、柳生さまには、ようこそお出で遊ばしました。
但馬　御主人は御在邸なるか。
門兵　はい、在邸にござりますれば、あれへお通り下さりませ。
但馬　然らば許しやれ。（ト合方きつぱりとなり、但馬守玄關より二重へ出る、）
彦左　思ひ掛けない但馬どの、さあ〳〵是れへござられよ。

但馬　まことに久々御無音申した。
彦左　手前も知つての通り世話好きに種々な事を持ち込まれ、繁用ゆゑにお尋ね申さぬ、御無音はお互ひだ。して、今日は何れへござられしぞ。
但馬　四男刑部が忌日ゆゑ廣德寺へ佛參なし、上野に大分返り咲きがいたせしと申す噂を聞き、見物なして歸りがけ、二月餘りそこ許の憎まれ口をきかぬゆゑ、如何かとお寄り申した。
彦左　よくお尋ね下された、先づゆつくりといたされよ。これお供があらう、臺所で一杯飮まして遣るがよい。
門兵　畏りました。(ト門兵衞玄關へ出で、)
但馬　いや、必ずお構ひ下さるな。
門兵　これお前方に臺所で酒を飮ませろと、わしが主人の言ひ附けだ。
友藏
運兵　それは有難うござりまする。
門兵　そこから附いて廻らつしやい。
　　ト合方にて、門兵衞は奧、友藏運六は下手へはひる。跡兩人思入あつて、
彦左　時に但馬どの、貴殿も手前もよい年だが、心は昔に替らぬから、未だ若い者に負ける氣はない。

但馬　言はるゝ通り御同然に、六十の坂は越したれど、木挽町から廣德寺まで駕籠に乘らず參る程だ。

彦左　それは手前も同じ事だ。今以て登城をするに、駕籠に乘つた事はない、それを今の若い者は步ける足を持ちながら、駕籠に乘つて登城をする故、途中手前に出つくはすと、駕籠から出るのが面倒ゆゑ、橫町などへ逃げ出すざまは見られない。

但馬　兎角今の者共は容體振つて、四十から目鏡などを掛けるけれど、手前などは今日まで目鏡を掛けた事はない。

彦左　目のよいのは何より仕合せ、それでは齒もようござらうな。

但馬　齒は甘い物が好きなせゐか、奧が少しゆるんで參つた。

彦左　手前は未だ一本も齒の拔けた事がないから、堅餅などはぼり〳〵と、若い者のやうに嚙ぢるて。

但馬　それは何より羨しい、齒が惡くなつてから、何を喰つても味がない。して、耳は遠くはならぬかな。

彦左　ちと聞え過ぎて困る程で、臺所で家來どもが、惡くいふのが直ぐに聞える。

但馬　其勢ひではお寐間のお伽も、定めし若いのがござらうな。

彦左　いや、男女の道は二十年一度も交へた事はない。

但馬　餘りさうでもござるまい。

彦左　それは手前より貴殿の事だ、お氣に入りの靜江どのを、暇を出してしまはれたが、跡へよいのを置かれたな。

但馬　世間の聞えを憚りて、暇を出せし事なれば、あの後妻は置きませぬ。

彦左　嘸閨さびしい事でござらう。

但馬　この節は忘れたが、その當座は淋しうござつた。

彦左　其氣があつては但馬どのも、若い者に負けぬ筈だ。

但馬　差合がないから申すが、實は不自由な事でござる。

彦左　六十を越えて不自由がるは、餘程貴殿も好きな方だな。

但馬　されば三人の子が出來たて。（ト兩人顏見合せ、）

兩人　はゝゝゝ。（ト笑ひ、彦左衞門思入あつて、）

彦左　その好者を不自由させぬやうに取計はうが、それに附いて彦左衞門が折入つて頼みがあるが、何と聞いてくれまいか。

但馬　何事か存ぜぬが、聞かれる事なら聞きませう。

彦左　ずんと聞かれる事でござる。
但馬　して、其頼みと言はるゝは。（卜誂への合方になり、彦左衛門思入あつて、）
彦左　外の事ではござらぬが、三年以前追放した又十郎が、勘氣を許して遣つてはくれまいか。
但馬　思ひ掛けない事でござるが、如何なる趣意で勘當を、許してくれと言はるゝぞ。
彦左　又十郎も不義をせし其身の不埒を後悔なし、心迷ひし色情の念をすつぱり斷ち切つて、武術修行に諸國を廻り、三ケ年の功を積みあつぱれ上達いたせしゆゑ、それを土産に歸國なし、我等へ詫びを頼みに參つた、これを趣意に勘當を許してやつて下されい。
但馬　我が總領の十兵衛は、妾腹ゆゑに身を顧み、多病なりと言ひ立て領國大和へ退去なし、次男刑部は衆に勝れ弓馬槍劍の道に達し柳生の家を繼ぐべき者ゆゑ、惣領を除き家督となし、又十郎は三男にて所謂手前が血の餘り、一方ならず奥が祕藏に甘やかして育てしゆゑ、幼稚の折から柔弱にて武術も至つて未熟なれど、刑部が役に立たぬゆゑ、彼れを當にいたすれば、よい事にして附上り腰元小菊と密通なし、門弟共が不埒をしても、小言をいへぬ但馬守、父へ恥辱を與へし奴武藝を修行いたせしとて、何程の事がござらう、此儀はお斷り申しまする。（卜きつと言ふ。）
彦左　言ひ出した事跡へ引かぬ昔氣質の但馬どの、一通りは尤もだが、先づ惣領の十兵衛どの、又次男

の刑部少輔どの續いて病死いたされたれば。跡に世嗣のござらぬ貴殿、達者を自慢になされど申さば老木の中は空虚、大病といふ大きな風が一吹き吹けば倒るゝ體、明日をも知れぬが人の命、萬一不慮の事があつたら、誰が家督を嗣ぎますぞ。

但馬　むゝ。（ト思入。）

彦左　家督をなすべき者なければ、天下の掟家は斷絶、爰を思はゞ勘當を、許してやつたがよいではないか。

但馬　その儀は手前も存じ居れば、疾より養子をいたさうと、人にも頼み置いてござる。

彦左　肉身分けし悴があるに、他人を養子にいたすは無益、先づ劍術の修行を見て、勘當許してやつて下され。

但馬　左程までに貴殿のお頼み、聞き屆けぬも數年來懇意にいたす甲斐もなければ、聞き濟みにくき所なれど、御頼みゆゑに又十郎と、試合をなして武藝を試さん。

彦左　すりや、聞き屆けて下さるか、それは千萬忝ない。

但馬　試合をなして又十郎が、修行なしたる功あつて我を打つたことならば、貴殿に免じて勘當を、許して家督相續させせん。

彥左　もし又其業至らずして、貴殿に負けた事ならば。

但馬　元の通り勘當にて、再び出入りはいたさせませぬ。（ト彥左衞門思入あつて、）

彥左　是れとても尤もゆゑ、然らばかやういたさうか、諸國修行に難儀をなし、色は黑み頰は瘦せ、ちよつと見ては誰なるかと見違へる程なれば、九州邊より武術修行に江戶へ出し者と申し立て、夜に入つて連れ參らん、家來や又は門弟は其場を遠ざけ置いて下され。

但馬　成程是れはよい御手段、他人の積りで對面なし、劍道試合をいたすでござらう。

彥左　然らば今宵同道いたせば、屋敷へ歸つてお待ち下され。

但馬　承知いたしてござる、用人惣兵衞に申し聞け、そこ許へは九州の浪人とのみ申し置かん。

彥左　先づ聞き濟んで下すつて、手前に於ても大慶なるが、又十郞にも嘸かし悅び。（ト但馬守思入あつて、）

但馬　三ケ年が其間武術修行に諸國を廻り、色は黑み頰は瘦せ、貴殿が見てさへ面影變り、見違へる程やつれしとは、餘程難儀せしと見ゆる。憎い奴とは思へども肉身分けし實子ゆゑ、手前に於ても早く顏が。

ト但馬守逢ひ度き思入、此時上手の障子を明け、又十郞顏を出す、但馬守振返り見る。又十郞障子をしめる、但馬守氣を替へ、

いや、然らば早く歸つて、お待ち申さん。

彦左　最早夕景お止め申さぬ。

但馬　お暇いたすでござる。（ト但馬守立ち上る、玄關へ門兵衛出で、）

門兵　お立ちでござるぞ。

友藏　はッ。

ト下手より以前の友藏運六出で、草履を直す、門兵衛式臺にて辭儀をする。合方にて但馬守刀を提げ出來る、跡より彦左衛門見送り出る、

但馬　お送りあつては恐れ入る。

彦左　左樣ござれば柳生氏。

但馬　後刻お目に掛るでござる。

ト唄になり、但馬守先に友藏運六附いて花道へはひる、門兵衛玄關の下手へはひる。上手障子屋體より又十郎出て、跡を見送り手を突き、

又十　舍兄十兵衛どの、刑部どの、引續いて死去ゆゑか、以前に變る頭の白髮、わづか三ヶ年の其内に御老體になられしは、御心勞が見えまする、お側に居つて力になるべき拙者が御勘氣うけ、他國

いたせし身の不孝、お許しなされて下さりませ。（ト辭儀をなす、此内彦左衞門元の所へ來り、）

彦左　それも勘當許さるれば、其時是れまで苦勞を掛けた不孝の詫びをいたすがよい。定めて奧で但馬守が申せし事を聞いたであらうが、九州より修行に出でし浪人の體で試合をなし、見事勝たぬ其時は勘當は許さぬと、例の親仁が片意地だが、試合の節に勝つ程のこなたの腕に覺えがあるか。

又十　先づ十が九ツは勝を得る氣でござりますが、子として親を打つは不孝、此儀は如何致しませう。

彦左　假令親に不孝でも、打たねば勝つたしるしがなければ、勘當は許すまい。

又十　はて何をがな打つ代りに。（ト合方きつばりとなり、又十郎思案の思入あつて、つか〳〵と玄關へ行き以前の菅笠を取つて來り、）簔輪の山に居るうちにも、常に冠りし此の菅笠、是れを試合の其節に持參いたして我が父の、つむりへ冠せし事ならば、それで打つたも同然ゆゑ、手前が勝とお極め下され。

彦左　むゝ、面白い〳〵、それでは試合の其節に、但馬守を打つ代り、其の菅笠を冠せるとか。

又十　はい、冠せてお目に掛けませう。

彦左　しかとよいか。

又十　私が手心にござりまする。

彦左　むゝ。（ト思入あつて、刀を拔き峰打ちに、）宗冬覺悟。（ト打つてかゝる、又十郎身をかはし、菅笠で立廻

り、彦左衛門の後へ隠れ、菅笠を冠せろ、彦左衛門びつくりして、）あゝ、冠せたか。

又十　先づ此樣にいたしまする。（ト笠を取る。）

彦左　むゝ出來した。（ト刀をしやんと納めるを、道具替りの知せ、）感心々々。

　ト感心の思入、又十郎ははツと辭儀をする、此の模樣よろしく、合方にて道具廻る。

（柳生稽古場の場）――本舞臺向う一面の平舞臺、上手雲母形の襖、下手鼠壁、これへ刀掛を取附け、誂への木太刀掛けあり、上の方折廻し同じく襖、下の方杉戸の出這入り、總て柳生家劍術稽古場の體爰に萩原惣兵衛袴一本差し、用人のこしらへ、左源太、右平次、袴なり近習にて控へ居ろ、此の見得調べにて道具留る。

惣兵　今宵大久保彦左衛門どのが、九州方の浪人にて武術修行に出しもの、殿へお手合せをお頼みなされ、後刻御同道なさるゝ由、先刻申し附けましたが、掃除はよろしうござるかな。

左源　只今御玄關より御使者の間を、兩人して見廻りましたが、

右平　隅から隅まで塵もなく、綺麗に出來ました。

惣兵　夜中の事ゆゑ燭臺を、間毎々々に置かずばなるまい。

左源　して、大久保さまとおいでなさる、九州方の御浪人は、
右平　何れの藩にてお名前は、何と仰せられまする。
惣兵　未だ姓名は承はらぬが、當時上樣の御指南番たる、殿へお手合せを願ふからは。
左源　定めし勝れし業でござらう。
右平　おつしやる通り殿樣へ、試合を願ふはたゞ者ならず。
左源　門弟一同その時は、拜見が出來ませうか。
惣兵　いや、大久保どのゝお賴みで、試合の席はお人拂ひ、後見はたゞ手前一人、其餘は出席相成りませぬ。
左源　それは近頃殘念千萬、我々どもゝ後學の爲、
右平　そのお立合を片隅で、拜見いたしたいものでござる。
惣兵　御前より出席を、堅くお止めなされたれば、隙見などは相成りませぬぞ。
左源　委細承知。
兩人　いたしてござる。（トばた〳〵にて、下手より以前の友藏出來り）
友藏　萩原さまへ申し上げます。

惣兵　何事なるぞ。

友藏　只今お臺所へ三年以前、不義の科にて御追放になりました、若黨の九助めが參りましてござります。

惣兵　何しに參りしぞ。

友藏　瘡をかいて體がきかず、露命を繫ぎ兼ねますゆゑ、御合力を願ひますと、のめ〳〵と、參りました。

惣兵　御暇の出た其時に、下世話で申す後足で砂をかけて參つた奴、合力は扨置いて、足踏みも相成らぬと、直ぐに歸してしまつたがよいに。

友藏　如在なく申しましたが、何分にも萩原さまへ、此の趣きを申してくれと、動きませぬゆゑ仕方なく、願ひの趣きを申し上げます。

左源　彼れめと密通いたし居つた、おさがめはどうし居つたか。

右平　大方九助めに捨てられて、難儀をいたして居るであらう。

友藏　噓か誠か分りませぬが、產後で死んだと九助めが申しましてござります。

惣兵　何にいたせ九助めを、早く門外へ追出してしまへ。

友藏　以前一杯飮んだ仲ゆゑ、何分にも私が申しては動きませぬ。

左源　然らば我々兩人が、

右平　追ひ返して遣りませう。

友藏　どうぞお頼み申します。

ト合方にて、三人下手へはひる。ばた／＼になり、揚幕の杉戸より四郎三出來り、花道にて、

四郎　はッ、大久保彦左衞門さまが、お出でになりましてござります。

惣兵　直に是れへ御案内申せ。

四郎　はッ。（ト引返してはひる。時の鐘、床の淨瑠璃になり、）

〽早日も暮れて燭臺の燈火輝く客の間へ、入り來る大久保彦左衞門、懇意の中に遠慮なく、設けの席へ打ち通れば、

ト此内惣兵衞上下へ燭臺を出す、よき程に花道より以前の彦左衞門、羽織袴一本差し刀を提げて出來り、直に舞臺へ來る。

惣兵　これは／＼御老公には、お早いお出でにござりまする。

彦左　年を取ると氣がせはしく、馬で是れへ參つたから、少し早かつたかも知れぬて。

惣兵　お早い方が何よりか、都合が宜しうござります。

彦左　最早用意はよろしいかな。

惣兵　主人もやはり性急ゆゑ、用意いたしてござりまする。（ト此時奥にて、）

但馬　大久保どのが見えられたかな。

〽襖押明け靜々と、立出る主人但馬守。（ト奥より以前の但馬守羽織袴脇差にて出來り、）

これ、褥を上げぬか。

惣兵　はッ。（ト下手より褥を持ち出で、眞中へ敷く、）

彦左　いや〳〵、それには及ばぬ。

但馬　手前も御免を蒙るから、遠慮なく敷いて下され。

彦左　實は足が痛いゆゑ、蒲團の馳走は何よりだ。（ト合方きつばりとなり、彦左衞門蒲團の上へ住ふ、但馬守も會釋して住ふ。）先刻手前が頼みの儀、萩原は承知でござるかな。

但馬　惣兵衞には始終の樣子を申し聞せて置きました。

惣兵　此度は御老公の御配慮に預かりまして、有難い儀にござりまする。

但馬　して、貴殿より又十郎へ、先刻申せし試合の儀を、お傳へなされて下されたか。

彦左　手前が申すまでもなく、襖の蔭で聞いて居つて、貴殿が歸つて申すには、如何に試合の勝負とて、親を打つては不孝の至り、此儀は許してくれといふゆゑ、打たねば勝つたる證據がないから、親子の禮を捨て丶是非打つやうにと申したれば、左樣なれば斯樣いたさうと、道中を冠つて來た菅笠を取出し、試合のうちに我が父へ菅笠を冠せましたら、則ち打つたも同然なれば、手前が勝にいたしてくれと又十郎が申したて。（ト但馬守思入あつて、）

但馬　む丶、それでは手前に勝つ氣でござるか。

彦左　なか／＼修行の功積めば、冠せられぬやうに致されよ、既に先刻手前なども。

但馬　え。

彦左　いや先刻手練の樣子を見たが、天晴手腕が勝れてゐさうだ。（ト惣兵衞は是れを聞き悦ばしき思入。）

惣兵　それは結構な事でござります、今宵の試合にお勝ちなされば、直に御勘氣御免にて、柳生の御家の御家督相續、恐悦な儀にござりまする。（ト但馬守は心に叶はぬ思入にて、）

但馬　産れだちより柔弱にて、武藝未熟の又十郎、わづか三年修行したとて、何程の事あらん。田舍道場を廻りし者は業より先きへ慢心して、人を見下してならぬもの、當時將軍家の御師匠番たる手前に笠を冠せるなど丶は、身の程知らぬ憎き過言、試合をなさば彼れめをば、一刀の下に打ち据

ゑて、又もや諸國を修行なすやう、今に辛き目見せてくれん。

ト但馬守腹の立つ思入、彦左衛門笑ひながら、

彦左　然し譬にいふ通り、三年たてば三ツになるゆゑ、必ず左樣に侮らるゝな。

但馬　他人は知らず我が悴、大概手並は知れてござる。

彦左　何は兎もあれ伴はん。（ト彦左衛門立ち掛るを、

惣兵　いや、拙者がお呼び申しませう。それにお控へなされたる九州の御浪人、大久保さまのお召しゆゑ、是れへお通りなされませ。（ト花道にて）

又十　はッ、畏つてござりまする。

〽招きに應じ杉戸をば、明ける音さへしとやかに、又十郎は約束の菅笠携へ出來り、禮儀も厚くおのが身の、越度を恥ぢてためらへば。

ト此内花道より、以前の又十郎袴一本ざし、刀を提げ出來り、花道にて會釋なすを、

彦左　あゝ苦しうござらぬ、是れへ〳〵。

又十　はッ。

〽はつとばかりに進み寄り、頭を下げて座に附けば、

ト又十郎舞臺へ來り、下手へ住ひ、辭儀をなす。

彥左　これが則ちお話し申した、九州方の浪士でござる。

但馬　して、御浪士には九州は、何れの產にて御姓名は、何と仰せられますぞ。

又十　はッ。（ト差詰りし思入。）

彥左　いや、產しは肥後の熊本にて、則ち加藤淸正が緣家、その名は加藤虎右衞門。

但馬　すりや、加藤虎右衞門とな。

又十　はッ。

惣兵　いや、强さうなお名でござりますな。

〽いふに面を上げ兼ねて。（トやはり又十郎うつ向きしまゝ。）

又十　豫て先生の御高名は九州までも鳴り響き、疾くより承知仕つる、それゆゑ今般是れにござる、大久保氏へお賴み申し、お手合せを願ひしに、早速お聞き濟み下さりまして、大慶至極にござりまする。

但馬　不思議な御緣で御目にかゝるが、手前は柳生但馬守、以後はお見知り置かれ下されい。

又十　はッ。

〽はつとばかりに面を上げ、初めて見交す兩人が、やれ無事なるかと言ひたさを、怺ゆる但馬宗冬も、思ひは同じ親と子の、恩愛深き霜ぐもり、濕り勝にぞ見えにける。

ト此内兩人顏見合せ、互ひに名乘りたき思入あつて、怺ゆるこなし、

武術も至つて未熟な拙者、お手合せを願ひまするも、嗚呼がましうござりまするが、何卒御免下さりませ。

但馬　して、加藤氏には此程まで、いづ地で修行いたされしぞ。

又十　先づ九州より中國、北國、諸所を修行いたしました。

但馬　三ヶ年のその間、旅中は物憂き事多く、嘸御苦勞をなされましたらうな。

又十　元より旅用も手薄の拙者、道も知らざる山路に迷ひ、木の根を枕に一夜を明かし、艱難辛苦をいたしました。

但馬　未だ御壯年に似もやらず、面にやつれの見ゆるのは、長の旅中に艱難辛苦、なされし事は承はらずとも、手前お察し申すでござる。

又十　身に餘りたる其の仰せ、有難うござりまする。

ト但馬守又十郎のやつれし姿を見て、不便だといふ思入、又十郎もうつ向いて涙を拭ふ、彦左衞門思

入あつて、

彦左　いや餘談は後のことにして、試合の勝負が肝腎だ、疾く〳〵此場でいたされよ。

但馬　如何にも左様いたすでござる。こりや惣兵衛、木太刀を是れへ持參いたせ。

惣兵　はッ、畏つてござります。

〽用意なしたる長短の、二刀の木太刀差出せば。

ト惣兵衛木太刀掛けより、長短の木太刀を二本持ち出て眞中へ直す。

彦左　して、約束の菅笠は持參せしか。

又十　見苦しき品ゆゑ、お次へ差置きましてござりまする。

惣兵　拙者が持參いたしませう。

〽言ひ捨て次へ立つて行く。（ト惣兵衛向うへはひり、直に以前の菅笠を持つて出來る。）

彦左　双方共に、用意召されい。

但馬　はッ。

ト白囃子になり、但馬守羽織を脱ぎ、下緒を襷にかける。又十郎も同じく下緒を襷にかけて前へ出る。

但馬　御支度はようござるか。
又十　よろしうござりまする。
但馬　木太刀は長きがよろしきか、又短きがよろしきか、そこ許の隨意に召され。
又十　左樣ござれば、短き方が手前はよろしうござりまする。
惣兵　すりやお客人には、短き方を。
又十　常に短劒が得手でござる。
但馬　むう。(ト但馬守思入あつて、)二刀の内で何れでも、手前に於ては得手はござらぬ。(ト但馬守思入あつて、長き木太刀を取りあげる、又十郎短き木太刀を取り、左に菅笠を持ち前へ出る。)すりや菅笠を片手に持ち。
又十　手前が勝てばおつむりへ、
但馬　見事載せて見られよ。
又十　はツ。
〽兩人太刀を取りあげて、左右へ別れて上段下段、位を取つてためらひしが、但馬がいらつて打込むを、身をかはしててうと受け、又もほぐれてちやう〳〵、飛鳥の如き手練の早業

ト文句の如く但馬上段に構へ、又十郎は片手に菅笠を持ち、下段に構へ、暫し位を取り但馬守打込むを、又十郎身を開き受け止め、是れより兩人ちよつと立廻つてきつと見得、

彦左　よウ〳〵。（ト褒める、是れより誂への鳴物になり、兩人よろしく立廻りあつて、トゞ又十郎但馬守の後へ隠れる、但馬守四邊を顧みる、此時後より又十郎菅笠を天窓へ載せる、但馬守ぎよつとする、惣兵衛驚く、）ほゝお、あつぱれ見事、感心々々。

これにて又十郎菅笠を持つて、下手へ來り平伏する、但馬守感心するこなしあつて、

但馬　成程、これは勝れし手練。

惣兵　驚き入つてござります。

彦左　是れだから言はぬことか、三年たてば三つになると、怖いものではござらぬか。

〽但馬守座に附いて手練を感じ打ちうなづき。（ト但馬守下に居て思入あつて、）

但馬　こりや、御身は丸目氏に、指南を受けしな。

又十　や。

但馬　最前より其方が太刀筋を見たる所、神影流の極意にして、上州箕輪の山中に浮世をのがれて閑居なす、丸目藏人に指南を受けしか、何とさうであらうがな。

又十　はッ、驚き入つたる御眼力、仰せの如く眞龍軒丸目殿に心貫流の極意を授かり、則ち傳書の一卷讓り受けてござりまする。

〽袱紗包みの一卷を、取出し見すれば、打ちうなづき、

ト又十郎懷より、紫の袱紗に包みし一卷を出し見せる、但馬守うなづき、

但馬　む〻、實にやさこそありつらん、丸目氏は其の以前、それがしと同門にて、師匠といふは小田原の、北條家へ軍學の師範をなし、劍道は神影流の奧儀を極め、英名天下に轟きし上泉伊勢守より當時世界にこの極意を傳ふるものは丸目の外、又と一人あらざるゆゑ、左こそと推量いたしたり。

〽星を指したる一言に、彥左衞門は横手を打ち、

ト但馬守よろしく思入、彥左衞門感心なし、

彥左　聖は道に依つて賢しと、所謂これが餅屋は餅屋、明かさぬ流儀を推量されしは、流石は天下の御師匠番、これも感心いたしたて。

但馬　大久保どの〻お口添にて劍道上達いたせし上、丸目氏より傳書の一卷讓り受けしを一つの功に、勘當許し遣はすぞ。

又十　すりや御勘氣御免とな。はツ、有難う存じ奉つりまする。

彦左　こりや斯うなくてはならぬ筈、手前も是れにて口添せし甲斐があつて忝ない。

惣兵　何より御家督定まりて、此上もない儀でござりまする。

〽宗冬始め惣兵衞も、悦び勇むを見るにつけ、世を果敢なくも秋の夜の、長き旅路へ赴きし刑部が事を思ひ出で。

ト又十郎惣兵衞悦ぶ、但馬守は愁ひの思入、床の合方になり、

但馬　あゝ運拙くて世を去りし、刑部にそちが程まで劍道上達なしたるを、見せぬが如何にも殘念なり、今日まで存命にて此の立合を見たならば、嘸や悦ぶ事であらう、三年此方長病にて、苦痛に過す煩ひ中、いかな日とても其方の噂をいたさぬ事はなく。

又十　すりや、兄上には其樣に、身持不埒の私を、お愛しみ下さりましたか。

但馬　三年この方長病にて笑ひし顏を見ざりしが、今日ならば悦びて、定めて笑ふことであらう、近頃愚癡な事ながら、それを見ざるが殘念なるぞ。

〽過ぎ越し方を思ひ出で、空より胸のうち曇り、袖に時雨ぞ降りにける。

ト但馬守よろしく愁ひのこなしあつて、咳に紛らす思入あつて、氣を替へ、

こりや惣兵衞、刑部が位牌と記念の品を、此處へ持參いたせ。

惣兵　はツ。

〽はツとばかりに惣兵衞は、佛間をさして入りにける。

ト惣兵衞奥へはひる。彦左衞門思入あつて、

彦左　もう一年早くんば、刑部どのも勘當の、許りたを嘸や悦ばれんに、何事も皆時節の成行き、是非もない事なるぞ。

〽悔みを述ぶる奥の間より、萩原惣兵衞小机へ位牌記念を取り乘せて、又十郎の前へ直せば、兩手を突きて拜をなし。

ト奥より惣兵衞小机の上へ誂への位牌とこしらへ附の刀を乘せて是れを持ち出來り、又十郎の前へ直す、又十郎辭儀をなして、

又十　是れが兄上の、御法名でござりまするか。（ト床の合方にて位牌を見て、）翠柳院春山月光居士、はツ、先頃父の勘氣を蒙りし折、是れに居る惣兵衞を以て御異見をなし下されし兄上の弟を憐れむ御慈愛に改心なして三ヶ年、諸國を武術修行なし、丸目殿に指南を受け、心貫流の極意を授かり、今日御免を蒙りしも、是れ兄上の御蔭ゆゑ御禮申し上げまする。何卒お悅び下さりませ。

〽兄の位牌へ打向ひ、いますが如く宗冬が、禮を盡せば但馬守。

ト又十郎位牌へ向ひ、よろしく思入あつて、但馬守は記念の刀を取りあげ、

但馬　また是れなる一刀は、世に稀なる郷の義弘、先頃好みて求めしが、病中ゆゑに其儘に未だ一度も差さゞるが、今際のきはに其方が勘當許りし其時に、讓りくれよと遺言ゆゑ、今日記念に遣はすぞ。

〽差し出せば押頂き。（ト但馬守件の刀を出す、又十郎取り上げ、押しいたゞき、）

又十　すりや、此の一刀を兄上より、御記念に下さりますとか。はッ、有難う存じまする。

彦左　名には聞くが是れまでに、中身を見たる事がない、年老いし身にいらぬ事だが、後學の爲見て置きたい。

又十　いざ、御覽下さりませ。（ト又十郎出すを彦左衞門取つて、）

彦左　どれ、拜見いたさうか。

〽鞘を拂つて切先きより、鍔際まで打ち見やり。

ト彦左衞門目鏡をかけ、刀を拔きとつくと見て、

ほゝお、金色といひ燒刃といひ、あつぱれ勝れし業物なり、切味もよさゝうだが試して御覽なさ

れたか。

但馬　未だ求めし其儘に、試して見たことはござらぬ。

又十　そのうち試して見るでござる。

〽刀受取り宗冬も、刃裏刃表打ち返し、見遣る處へ若黨が、留めるもきかず駈出る九助。

ト又十郎刀を打返し見ること、ばた〳〵になり、下手より以前の九助、友藏が留めるを聞かずつかつかと出來る。

友藏　これ、お客さまがあるにつか〳〵と、奥へやることはならないぞ。

九助　なるもならねえもあるものか。（ト留めるを振拂ふ、惣兵衞立ち掛り）

惣兵　やあ、おのれは不義せし若黨九助、又もや是れへ參りしか。

九助　お留めなさるを振拂ひ、押して是れへ出ましたは、不屆き至極のこの九助、申し上げ度き事がござりまする。

惣兵　やあ、聞くに及ばぬ、きり〳〵立て。

九助　どうぞさうおつしやらずと、たつた一言。

惣兵　まだ〳〵申すか。（ト惣兵衞立ち掛るを）

但馬　いや惣兵衞、暫く待て。
惣兵　はツ。
但馬　思ひ入つたる彼れが樣子、何事なるか仔細を聞きやれ。
惣兵　いえ、聞くまでもござりませぬ、無心を申すのでござります。
九助　決して御無心ではござりませぬ、申し上げたいと申すのは、此の九助が一つのお願ひ、其御刀で私をお試しなされて下さりませ。
但馬　何と申す。（ト合方になり、）
九助　只今お庭の垣越しに承はりましてござりまするが、又十郎さまは私と一緒に不義の其科で御勘當におなりなされましたが、武藝を御修業なされたので御免におなりなされたも、御改心なされたゆゑ、それに引替へお屋敷を出ましたおさがは產後で死に、それから諸所をぐれ歩き、故鄕へ歸る錦は扨置き、襤褸を着たまゝ上州で雲助をして居ましたが、身持の惡さに瘡を煩ひ、たうとう今では乞食同然、路頭に迷ひまするのも御主人さまの皆お罰、生き甲斐のない體ゆゑせめてのことに其お刀でお試しなされて下さらば、一ツのお役に立つて死にます。のたれ死にいたしませうより、遙にましでござりますれば、お試しなされて下さりませ。

ト九助よろしく思入にていふ、但馬守思入あつて、

但馬　すりや、其方は是れまでの、先非を後悔せしとあらば、罪を憎んで人を憎まず、頼む方なく路頭に迷はゞ、屋敷に置いて遣はさん。

九助　冥加に餘る其お詞、あまり勿體なうござります、やはりそれより其お刀で、お試しなされて下さりますが、是れまで數年盡したる惡事の罪滅しでござります。

彥左　いや惡い奴は惡いだけ、なかく小氣味のよい奴だ、助けて置いたら何ぞの役に立つであらう。

又十　父上の仰せといひ又御老公のお口添ゆゑ、そちが是れまでの罪を許し、召使うて遣はすぞ。

九助　心よからぬ私を、又もやお使ひ下さりますとは、親が死んでも泣かぬ目に、有難涙がこぼれます。

ト九助手拭を額へ當て泣く、惣兵衞思入あつて、

惣兵　此お悅びに拙者めも、お願ひがござります。

但馬　なに、其方が願ひとは。

惣兵　三ヶ年以前此儀に附き、お暇になりましたる小菊どのをお許し下され、靜江どのを元々にお呼び戾しになりますやう、お願ひ申し上げまする。

彥左　こりや尤も至極なことだ、宗冬どのゝ勘氣がゆりれば、小菊も共に許すは當然、又靜江に暇を出

されたは世間の聞えを憚る爲め、兩人共に今日の祝ひに呼び戻すがようござる、手前も共々口添いたす。

但馬　大久保どのゝお口添ゆゑ、靜江小菊兩人とも、歸參を許し遣はすぞ。

惣兵　すりや、お聞き濟み下さりますとか。

彦左　早く呼びに遣るがよい。

惣兵　先刻御位牌を持參の折、御勘氣御免になりし事を、早使ひで知らせましたれば、程なく參るでござりまする。

〽詞終らぬ其ところへ。（トばた／＼になり、下手より腰元紅梅出で、）

紅梅　はッ、萩原さまへ申し上げます。只今靜江どの小菊どの、參られましてござりまする。

惣兵　それは早き事であつた。

彦左　直に是れへ通すがよい。

紅梅　はッ。（ト引返してはひる。是れと一緒に友藏はひる。）

〽程もあらせずいそ／＼と、靜江小菊が立ち出でゝ、會釋をなして控ゆれば。

ト下手より靜江紋附着流し、小菊やつしなり、紅梅又市の抱子を抱き附添ひ出來り、下手にて辭儀を

なす。

彦左 苦しうない、是れへ〱。

靜江
小菊 はあゝ。（ト合方になり前へ出る、但馬守思入あつて、）

但馬 勘當なせし又十郎、劍道上達なせしゆゑ、それを功に勘當許せば小菊が罪も許し遣す、又大久保氏のお口添ゆゑ、靜江も今日より召使ふぞ。

靜江 又十郎さまの御勘當お許しになりましたは、此上もない御悦び。

小菊 また私が不義いたせし、科をお許し下さりまして、

靜江 不束なる私まで、お召使ひ下さりますは、

兩人 有難う存じまする。

惣兵 よくお二人とも、大久保さまへ。

靜江 あなたさまのお口添ゆゑ、

小菊 兩人共に有難く、御禮、

兩人 申し上げまする。（ト彦左衛門に辭儀をする。）

彦左 何の禮に及ぶものだ。（ト又十郎靜江に向ひ、）

又十　靜江どのへ手前ゆゑに、長々苦勞を掛けました。

靜江　いえ私よりはあなたこそ、長々御苦勞遊ばしましたな。

小菊　然しながら、それゆゑ御勘氣御免になりまして、

紅梅　お目出たう、

三人　ござりまする。

九助　その御苦勞を掛けたのも、元の起りは此の九助、殊にはいつか小菊どのは。(ト言ひ掛けるを、)

但馬　いや、罪を許せば過ぎ去りし、以前の事は水なるぞ。

九助　はッ、有難うござりまする。(ト此時抱子泣く、)

紅梅　おむつがりなされますれば、お乳をお上げなされませ。(ト抱子を小菊へ渡す、但馬守是れを見て、)

但馬　小菊が抱きし、あの小兒は。

靜江　此のお子は又十郎さまの、則ちお胤でござりまする。

但馬　おゝ、さうでありしか。

彦左　その小兒これへ。(ト抱子を抱き取り、)但馬どの見さつしやい、是れは貴殿の初孫だが、何とよい子ではないか。(ト見せる、但馬守餘念なく抱子を見て、)

但馬　おゝにこ〳〵と笑ひ居る、月鼻だちといひ口許といひ、又十郎に瓜二つだ。

彦左　細工に念が入つたと見える。

但馬　なか〳〵これは上出來だ、はゝゝゝ。（ト彦左衞門抱子を小菊に渡し、）

彦左　いつぞや誰かの話しに聞いたが、小菊は以前然るべき武家の胤だと申す事、かゝる可愛い子まであれば、彦左衞門が娘となし、又十郎へ遣はさんが、誰も否やはあるまいな。

又十　御老公の御計らひ、手前に於ても異存はござりませぬ。

惣兵　何から何まで御配慮下され、

靜江　お禮は詞に、

小菊　盡されませぬ。

但馬　實に貴殿のお世話になつた。

彦左　年を取ると世話が燒きたく、こんな事は大好きだ。然し媒人は宵の內、どりやお開きといたさうか。

但馬　まだ更けぬゆゑ、せめて一献。

彦左　いや、馳走は後日になるでござらう。

又十　然し、餘りおそう〳〵ゆゑ。
彦左　手前に馳走は若夫婦の、仲のよいのが何よりだ。
惣兵　元より好き合ふ仲なれば、
靜江　そりや御安心でござります。
彦左　いや、若い者はいゝけれど、但馬どの、三年振りで過さつしやるな。
但馬　そりや何を。
彦左　何をとは、橫着者め。
但馬　是れは怪しからね。
彦左　はて、目出度いな。（ト扇子を開くを木の頭）目出たい〳〵。
　　ト此模樣よろしく、常の唄にて、

ひやうし　幕

五幕目

牢屋敷詮議所の場
旅籠町松前屋の場
駿河臺大久保の場

〔役名＝＝松前屋五郎兵衞、牢屋の張番次郎兵衞、魚屋一心太助、與力高橋藤十郎、大久保の用人藤田門兵衞、與力宍戸喜右衞門、牢屋同心靑柳伴藏、牢屋同心熊井傳平、松前屋の手代與七、旗本水野十兵衞、同矢部四郎次郎、大久保の中間權平、同專藏、牢屋下男、坂倉屋甚右衞門、大久保彥左衞門、松前屋の番頭淸兵衞、五郎兵衞女房お汐、甚右衞門娘お浪、松前屋の丁稚卯之助、同下女お富、同丁稚三太、同一子松太郎、卯之助、おもと等。〕

（牢屋敷詮議所の場）＝＝本舞臺四間通しの二重、ずつと前へ出したる本庇、平舞臺の上下へ出庇の受柱、下手の柱に釣し責の鐶取付けあること、二重正面雲母形の襖、下手一間の附屋體折廻し本緣附、是れに薄緣を敷詰め、平舞臺の上手板羽目の張物にて見切り、よき所に出這入り口、下手瓦屋根白壁の張物、舞臺一面鼠木綿の布を敷詰め、上手の棲に抱石を澤山積み重ね、總て牢屋敷詮議所の體、下手附屋臺の内に、伴藏、專平羽織着流し一本差し紺足袋の同心にて住ひ、此脇に羽織着流しの醫者藥入れの曲物と眞鍮の箆を持ち控へ、平舞臺の下手に牢屋番二人、石出の印を附けたる法被紺の股引腹掛にて住ひ、此の見得時の太鼓にて幕明く。

醫者　今日は松前屋一件につき、何れも御出役、御苦勞にござりまする。

○　承はれば今日は、先達より御詮議の五郎兵衞といふ、囚人をお呼び出しと申すこと。

△　最早お刻限にござりますれば、支度をいたすでござりませう。

伴藏　いかにも此程御奉行より、嚴しき御下知で召捕りし、松前屋五郎兵衞を、又候牢問ひいたせとある御奉行よりのお達しなり。

專平　御目附衆と共々に高橋宍戸のお二人、先刻出役召されたれば、もう御出席に間もあるまい、其方等も用意いたせ。

△○　はツ。

ト此時奧より、小人目附先に徒士目附、羽織着流し一本差しに出來ろ、跡より藤十郎、喜左衞門兩人とも繼上下一本差し、提げ刀にて出來り、互ひに會釋してよき所へ住ふ、伴藏は下手より横とぢの半紙と硯箱を持ち來り、藤十郎喜左衞門の前へ置き下手へ來り、

伴藏　これは〳〵御目附衆を始め、高橋さまには先頃よりして、五郎兵衞めを再度のお調べ。

專平　又今日は宍戸さまがお添役と申す事、御手數の程嘸かしと、御苦勞至極にござりまする。

徒士目附　はや刻限でござれば、五郎兵衞の、

小人目附　調べを是れにて、

兩人　お始めなされい。

喜左　はッ、御奉行の御下知にて高橋氏が此程より、再度御詮議いたされても、口を明かざる死太き奴ゆゑ、添役として今日は手前が立合ひ調べをなし、手痛き牢問ひいたして、白狀させねば相成らぬ。

藤十　詮議に埒が明かざるゆゑ、怨せなるかと御奉行より、貴殿を今日添役に遣はされしは、手前が身に取り忘りなき則ち面晴れ、彼の五郎兵衞といへる奴、町人なりと申せども武術に達し我が宅に鎧兜が祕めあるなど、手前が鑑定いたせしは、正しく武家の産れにて祿を穢せし成れの果て、なか〳〵以て我々の、吟味で白狀いたすべき性根の奴とは見え申さぬ。

喜左　いや〳〵、それはそこ許の世俗にいへる力負け、假令以前が武家なりとも、今は下民の素町人、殊更宅に武器などが隱しありしが不審の第一、今日こそ嚴重の拷問なして速に、白狀させてお目に掛けん。

藤十　然らば手前は一應の、詮議を遂げて牢問ひは、そこ許にお任せ申す。

喜左　それは手前が望むところ。それ鍵役を是れへ。

○　はッ。(ト○上手板羽目の際へ行き)鍵役衆。(ト上手にて)

鍵役　はあゝゝゝ。

ト板羽目の潛り戸を明け、鍵役羽織袴草履下駄にて、牢の鍵を澤山さげ出來り、平舞臺に控へる。

喜左　五郎兵衞卯之助を是れへ。

鍵役　はッ、畏りました。(ト引返してはひる、是れより床の淨瑠璃になり、)

〽無慙なるかな鬼蔦に、しめからまるゝ松といふ、名にも寄りしか五郎兵衞は、綠の林盜賊の疑ひかゝる縛り繩、木の子も同じ卯之助も、倶に引かれて詮議所へ觀念なして入來り、見る影もなく控ゆれば、高橋威儀を改めて。

ト此內よき程に上手の潛り戸より、以前の鍵番先きに、跡より五郎兵衞月代の延びし御仕着せなり手錠にて跡より卯之助同じくお仕着せなり、手錠にて、是れを下男兩人附添ひ出來り、上の莚へ住ひ、藤十郎思入あつて、

藤十　こりや五郎兵衞、先達より幾度となく、拷問に及び吟味をなせど、そちは我慢を申し張れど、此方にては三人まで見知り人もこれある上、確といたせし證據あつて、上の御用に相成る上は、假令知らぬと申し張るとも、其分にはいたし置かれず、又今日より宍戸氏のお掛りとなつて御詮議あれば、只今までの手續きを、今一度申し上げい。(ト五郎兵衞思入あつて、)

五郎　恐れながら申し上げます、仰せの通り先方には、三人まで見知り人がござりますとは申せども、

是れ皆以てこしらへごと、又證據物と申しまするは是れに居ります卯之助が、持參の書狀を先方へ取上げおいて證據となし、賊にはひりし其場所に落散りありし品などゝ御奉行さまへ訴へ、無實の罪に私を落す巧みの內藤どの、其御詮議ゆゑお掛りへ如何程お手數掛けませうとも、知らぬと申し上げますより、外にお答へはござりませぬ。（ト喜左衞門思入あつて、）

喜左　いや〳〵斯樣な御吟味にては一向埒が明かぬ筈、手前が代つて問ひ糺せば、暫時お任せ下されい。

〽肩臂いからし進み出で。

こりやよツく承はれ、其方五月廿日の夜內藤どのゝ邸宅へ深更に及び忍び入り、土藏の錠をこぢ明けて貯への金子二百兩奪ひ取つて立出る折柄、夜廻りの中間たる治郞助、團助、金平といふが賊と認め、携へし棒にて打つて掛りしを白刃を以て切拂ひ、淺手といへど三人に手疵を負はせ逃げ去る折、落せし書狀はこれ天命、汝の名宛で生駒家より、急用ありとの迎ひの文面、認めありし上からは、いか程陳じ僞るとも、のがれぬ所と知れて居るに、白狀なさぬ死太き奴、今日こそは嚴重の拷問なしても言はさにやならぬ、覺悟いたして待つてをれ。（ト卯之助思入あつて、）

五郞　毎度の儀ゆゑ申し上げるも、詮なき儀とは存じますれど、御吟味さまが替りますれば、此の五郞兵衞が覺えなき次第を申し上げまするが、內藤どのへ盜賊がはひりしといふ其夜には、私は他

出いたさず、在宅いたして居りましたが、身に覺えなき慥な證據、何卒それらの御吟味を篤とお願ひ申し上げます。

喜左　然らば其夜在宅にて、他出いたさぬ證人に立つべき者があらうから、何者なるか申し上げい。

五郎　その證人は愚妻を始め、召使ひのもの一同が、證人にござります。

喜左　いや〳〵それは緣者の證據、他人の證人あらざればお取上げにはならぬわえ。

五郎　すりや、證人には相成り申さぬか。

喜左　おゝ家內一統申し合せ、いか程上を僞るとも、それを證據にいたさうや、陳じ立てする憎い奴め

〽只一言に言ひ曲げられ、是非なき事と差しうつ向く、後の方に卯之助が主人思ひに進み出で。（卯之助思入あつて）

卯之　恐れながら御掛りさまへ、申し上げますでござりまするが、土藏の中に落ちてあつて盜みにはひりし證據となりし其の手紙は、私が內藤さまのお屋敷へ持つて參つて主人をば、お呼びなすつて下されと申しましてござりますが、今劍術の試合にて五郎兵衞は參られぬから、おれが屆けて遣はすと手紙を持つて御家來が奧へおはひりなされましたが、うか〳〵其時渡しましたは私の不調法、盜みにはひつた其跡に落ちてあつたと申すのは、こしらへ事でござりまする。

〽苛責に聲も瘦せ枯れて、小音ながらどこまでも誠は通る潔白を宍戸はまたも言ひ曲げて。

喜左　やあ、おのれも主人から申し附つて虚言を構へ、上を僞る丁稚めよな、然らば其節内藤の屋敷で家來の姓名は何と申す名の者に、われは手渡し致しをつた。

卯之　いえ其の名前は聞きませぬが、逢ひさへいたせば其方のお顏は覺えてをりまする。

喜左　やあ名も聞かずに渡せしとは、不都合極まる其答へ、上を僞る横道者めが。

卯之　いえ〳〵、嘘ぢやござりませぬ。

喜左　えゝまだ〳〵申すか、控へてをらう。

〽權威を笠に言ひ伏せられ、これも是非なく控ゆれば、高橋それと察し遣り。

ト藤十郎思入あつて、

藤十　先日よりの彼れが振舞、年に似氣なく理非わかり、賢きやうには見ゆれども流石は小使、使ひとて名前を聞かずに渡せしとは、はて念の足らぬ事ぢやなあ。

喜左　いや〳〵左樣に言はるゝから、兎角吟味が屆きませぬ。丁稚が手紙を内藤の屋敷へ持參いたせしと申すも彼れがこしらへ事、それなればこそ先達て彼れを召捕る其跡へ、出役の者罷り越し、家内を詮議いたせし所、土藏の二階に祕めありしは町人の身に不用なる戰國の世の鎧兜、盜みし

品にあらざれば、其の出所を申すべきに白狀せぬが不審の第一、但し鎧の出所をば白狀いたしてござるかな。

藤十　あいや、其儀は故あつて申されぬとの儀でござれど、それは後日の調べもの、先づ差當る盜賊の吟味を遂ぐるがわれ〲の、役目でござれば其邊は、未だ詮議をいたしませぬ。

喜左　いや其邊より調べねば、なか〲吟味は屆きませぬ、如何なる仔細で彼れが宅に鎧兜が祕めありしか、其御詮議をなされぬと手溫いやうに存じ申す。

〽詰り掛けられ高橋も、役目の表立たざれば。（ト藤十郎思入あつて）

藤十　こりや五郎兵衞、先達てより問ひ糺せども、鎧兜の一條は故あつて傳來せしゆゑ、それとあらはに申し難しと、只管宥免願ふに任せ、後日の調べと延引せしが、今宍戸氏の批判あるも、その理なきにあらず、如何なる仔細で傳來せしか、其の出所を申してしまへ。

五郎　はツ、餘の儀に於ては何事も速に申し上げますが、其一條は故あつて傳來の儀を憚りますれば御吟味の儀は幾重にも、御宥免なし下さりませう。

藤十　いや假令如何なる憚りありとも、其の出所を申さねば、今日汝にかゝる盜賊の罪まぬかれず、却つて汚名を受けねばならぬ。さ、盜賊の汚名がのがれたくば、傳來の儀を申してしまへ。

五郎　さあ、それは。

藤十　但し汚名の晴れずとも、武器の出所を申さぬか。

五郎　さあ、

藤十　さあ、

兩人　さあ〳〵。

藤十　五郎兵衛答へは、どうぢやな。

〽それを申さば盜賊の無實も晴るゝ事もやと、籠る情の問ひ狀に、忍ぶ素性も有體に言ふに言はれぬ陸の奥、遠き先祖を憚るにぞ。（ト此内五郎兵衛じゆつなきこなし宜しくあつて、）

五郎　假令如何なる汚名をうけ、此身の難儀に及びますとも、其傳來は故あつて申す譯にはなりませぬが、内藤方へ忍び入りしと、無實の罪を受けましたる遺恨の次第を、逐一只今申し上げまする。

藤十　なに、遺恨とは如何なる儀ぢや、仔細があらば申し上げい。（ト是れより誂への合方になり、）

五郎　是れが遺恨と改めて申し上げるは恐れながら、私事は幼年より町人の身にあるまじき劍術柔術を好みまして、暇ある時は住居の裏の明地へ出まして、見世の手代や若い者に、武藝を教へて居るうちに、いつか近所の噂となり、劍術指南をなされます内藤どのゝお耳に入り、かたはら痛き奴

とお憎しみでも受けましたか、去年九月廿日の午過ぎ、内藤さまのお屋敷へお招きにより出ました所、種々劍道のお話しに時を移せし其末に試合の相手をいたすやうと、未熟の武藝を御懇望、御辭退すれどもお許しなく其場に居合すお二人が竹刀を持つて左右より、打つてお掛りなされしゆゑ、餘儀なく立合ひ打ち据ゑしを、奇怪なりと思はれしか、内藤さまが御自身に又もや打つてお掛りなされ、是非なく其場でお相手いたし、初手から打たれましたなら此の大難はござりますまい、なれど町人風情として劍術試合の遺恨などゝ、申し上げるも恐れ入れば、今日まで包み隱しましたが、實はそれらの遺恨より、訴へ出たに相違なければ、何卒上の御慈悲にて、御吟味願ひ上げまする。（ト喜左衞門思入あつて、）

喜左　やい五郎兵衞、先日内藤方よりの訴へには、われが其日の立合には不覺を取りしそれゆゑに、遺恨を含み忍び入り、内藤どのゝ寐首をばかゝん所存であつたれど容易に寐間へはひれぬゆゑ、無念の餘り貯への金子を奪ひ中間へ手疵を負はせ逃げ去りしと、申す事まで相分り、事明白に調べあるわえ。

藤十　假令その日の勝負いづれが不覺を取つたりとも、それは世にいふ水掛論、御不審掛りし鎧兜の出所知れざるそのうちは、どこまでも賊の汚名はのがれぬところ、有體に白狀せよ。

五郎　いか程御詮議ござりませうとも、鎧兜の傳來は、只今申し上げられませぬ。

喜左　むゝ、それでは是れ程申しても、手前は言はねえか、言はねえなら言ふな、口で言はざあ背中で聞いてやらう。（ト喜左衛門下手へ向ひ、）打役衆。

半藏
傳平　はツ。（ト下手附屋體より伴藏傳平平舞臺へ來り、二重の下へ控へる、）

喜左　お縛りなされい。

伴藏
傳平　はツ。

〽と下知の下、情容赦もあら〱しく、右と左りにまつはりて絡む千筋の縛り繩、扱ふ二人は牛頭馬頭の鬼に等しき荒くれ男、有合ふ打棒おつとつて、息をもつかせぬ續け打ち。

ト此うち伴藏、傳平、五郎兵衛の手錠を取り、下男四人手傳ひ繩を掛け、伴藏傳平有合ふ箒尻を取つて、前後よりさあ申し上げろと、むごく打ち据ゑる事よろしく、五郎兵衛よろしく苦しみ、トヾ仕掛にて膝へ血にじむ、卯之助此體を見てびつくりして、

卯之　あゝもし、どうぞお役人さま、私を如何やうとも拷問にお掛け下さりまして旦那さまの拷問はお許しなされて下さりませ。

〽お願ひ申すと卯之助が、寄らんとするをあらけなく、弱き體を打役が、隔てにこなたは涙

ごゑ、宍戸は是れを見返りて。

卜卯之助上手へ摺寄るを作藏、傳平の兩人箒尻にてむごく突く是れにて卯之助どうとなる、喜左衞門この體を見て、

喜左　こりや丁稚、われも陳じて白狀せねば、今見る如く拷問なし、憂き目を見せてほざかせるぞ。

卯之　いえ、白狀しろとおつしやつても、手紙を持つて內藤さまのお中の口へ私が參りましたに違ひはない、それを嘘だとおつしやりまするは、お上が無理でござりまする。

喜左　やあ、まだ〳〵左樣な事を申し、上を僞る憎き奴。それ、丁稚めをお打ちなされい。

傳平　はツ。（卜卯之助の傍へ行き、）さあ、うぬも爰で白狀しねえと、此の箒尻で體の皮の破れるほど叩きなぐるぞ。

卯之　假令死んでも私は、身に覺えのない疑ひは、白狀いたされませぬ。

傳平　いや別に白狀しなくつていゝのだ、たゞ手紙は屋敷へ持つて行つたと、誰が手めえに入智慧をしたか、それを爰で言つてしまへ。（卜箒尻にて額を突く、卯之助これを怺へ默つて居るゆゑ、）さあ、ぬかせ、ぬかさねえか、えゝ強情な餓鬼だなあ。（卜此內傳平卯之助を責めること、伴藏前へ出て、）

伴藏　あいや熊井氏、お待ちなされい、丁稚の責めは下へ下げ、五郎兵衞めを白狀させませう。

傳平　然らば双方一時に、責めてほざかせませうかな。

卯之　えゝ、そんなら又もや旦那さまを。

喜左　おゝ手前達が強情だから、今一倍責めてやるのだ。（ト打役に向ひ、）五郎兵衛には石を抱かせ、丁稚はそれにて釣しにお掛けなされい。

五郎　え、すりや卯之助も此所で。

伴藏　うぬが強情だから。

傳平　責めるのだ。

五郎　どうぞお慈悲に、卯之助は。

伴藏
傳平　えゝ、さうは行かねえわえ。

〽又立寄つて左右より、手早く掛ける縛り繩、からむ主從無慙なる張番どもが扱ひに、胸に波打つ五郎兵衛が、我が子の如くいたはるを、思ふ心の抱名に積み重ねたる苦しみは、膝もつんざく如くなり、こなたは宙に引き上げられ、りう〳〵〳〵と續け打ち、苦しむ聲に五郎兵衛は怺えかねたる憂き思ひ。

ト此文句のうち、伴藏、傳平外四人、五郎兵衛を縛り繩にて小手を引き上げ、上手の柱へくゝし附け

算盤の上へ住はせ厚石を段々に積み重ねる、是れにて五郎兵衛は藻搔き苦しむ、下手の卯之助は右の人數にて、やはり二筋繩にて宙に釣り上げ、傳平笄尻にて打つ、是れにひい〳〵と苦しむ、五郎兵衛は苦痛ながらにこれを見遣り、

五郎　えゝお情ないお役人さま、此身は如何なる責に逢ふとも、覺悟の上ゆゑ是非もないが、何科もない卯之助を、無實の罪のお疑ひにて、お責めなさるは無益の事、彼れめに嘘はござりませぬ、許しておやりなされませ。

伴藏　おゝ、丁稚が苦痛を助けたくば、早く白狀してしまへ、今一打ちあの丁稚を、拷問なして責める時は、多分氣絕をするであらう。

卯之　どうぞ代りに私を、お責めなさつて旦那さまを、お助けなされて下さりませ。

傳平　おゝ、助けたくば何者に、入れ智慧されたか言つてしまへ。

喜左　それ丁稚めを、構はずお打ちなされい。

伴藏
傳平　はッ。

〽纖弱き體を細繩に、しめ括りたる有樣は無慙といふも愚なり、五郎兵衛是れを助けんと、

ト此うち下男卯之助に繩を掛け直し居る。これを五郎兵衛見て、

五郎　これ〳〵卯之助、その責めに逢つては命がたまらぬぞ、あの番頭の清兵衛に、頼まれたとでも言つてしまへ。

卯之　いえ〳〵、左樣ぢやござりませぬ。假令爰で死にましても、噓僞りは申されませぬ。

喜左　それ見ろ、入智慧した奴の口が明いて參つた　さ、もつと手酷くお責めなされい。

作藏
傳平　はツ。

〽差圖に張番諸共に、重ぬる石に向うさへ見えぬ眼に血走りて、苦しむ卯之助四苦八苦。

ト此うち五郎兵衛の抱石を增すこと、卯之助は宙へ掛り苦痛のこなしにてもがく

五郎　あゝもし、暫くお待ち下さりませ。

喜左　待てとは、白狀いたすと申すか。

五郎　へい、白狀いたしまする。

喜左　双方許しなされい。

作藏
傳平　はツ。

ト是れにて皆々手傳ひ、五郎兵衛の石を取り、筵の上へ連れて來る、卯之助の繩も解く、是れにて兩人うつとりして、ばつたり仰向けに倒れろ。

喜左　さ、五郎兵衞、われが願ひ通り拷問をゆるめたが、逐一これにて白狀せい。

〽問はれてやう〳〵顏をあげ。（ト五郎兵衞思入あつて、）

五郎　今日まで口を閉ぢ、白狀いたしませぬが、實は九月廿日の夜、内藤どのへ忍び入り、金子を盜み中間に、手疵を負はせてござりまする。（ト卯之助前へ出で、）

卯之　もし旦那さま、なぜあなたは其樣な、覺えもない事おつしやります。

五郎　いや〳〵そちは知らぬこと、今まで包み隱して居たが、盜みをしたに違ひない、とさあ、おれが盜みをせぬ時は、生い先き長きそちが命、むざ〳〵爰で見殺しにせねばならぬが不便さゆゑ、又二つにはそちが母、我が子の育つを指折つて樂しみ居るであらうから、死んだと聞かば途方に暮れ、共に命を捨てるであらう、左すれば親子二人とも、むざ〳〵殺さにやならぬゆゑ、それで白狀したのだわ。

〽それと言はねど今生の、これが別れと兩の目に、浮む涙の愛着に、三世の縁も厚き恩、卯之助頭を打振りて。（ト兩人よろしくこなしあつて、）

喜左　それ、丁稚はそつちへおやりなされい。

卯之　いえ〳〵、どうぞ私を。

伴藏　えゝ、どきやあがれ。

〽手荒く脇へ突きやられ、わつとばかりに泣き沈む、宍戸は手柄自慢顏。

ト此うち伴藏卯之助を下手へやる、喜左衞門思入あつて、

喜左　高橋氏お聞きなされしか、手前が詮議で五郎兵衞めが、やう〳〵白狀いたしてござる。

ト此うち藤十郎扇を膝へ突き立て、さし俯き居て、此時面を上げ、

藤十　今に始めぬ宍戸氏の、お手柄の程感心いたす、左はさりながら五郎兵衞にも、此程より數度の牢問ひ身體疲れし其上に、内縁のある訴へゆゑ、いやさ、身に覺えなきなどゝ上を僞る憎き奴めが先づ今日は五郎兵衞が、白狀なせし上からは、是れにて歸牢を申し附けん。

喜左　然らば左樣仕らうかな。

〽折から告ぐる時計の音。（ト七つの時計鳴る藤十郎思入あつて）

藤十　刻限なれば、歸牢申し附けん。（ト上手へ向ひ）鍵役衆。（ト上手にて）

鍵役　はあゝゝゝ。（ト以前の鍵役、やはり鍵を澤山提げ出來り控へる。）

藤十　兩人大分疲れし樣子、藥用手當を御申し附け下さい。

鍵役　委細畏りました。

喜左　それ。

伴藏　はッ。（ト是れにて五郎兵衞卯之助の繩を解き、手錠を掛け、）さあ、立て。

〽とあらけなく急き立てられて主從が、心はせけど立ち惱み、どうとまろべば。

ト兩人やうやく立上り、歩かうとして苦痛の思入にてどうと轉ぶ、伴藏傳平見て、

伴藏　大分疲れて居るぜ。

傳平　歩けさうもねえ。

兩人　それ、釣臺を是れへ。

下男四人　はッ。（ト張番四人下手より白木の釣臺を一つ持ち來り、是れへ乘せる、藤十郎見やり、）

藤十　こりや、いたはつて遣はせ。

〽善と惡との二道に、哀れな受に。

ト此内下男四人釣臺へ五郎兵衞卯之助を載せる、藤十郎喜左衞門と御目附に會釋して立上る、平舞臺の皆々釣臺をかき上げる。此の模樣よろしく、三重、風の音にて、

幕

ト幕引附けると、角兵衞獅子の鳴物にて、直に引返す。

（松前屋裏口の場）――本舞臺眞中四間常足の二重、正面扉に封印なしてある土藏の入口、此の左右板羽目、上の方九尺の障子屋體、前面一面障子建切りあり、いつもの所屋根のある格子の入口、此外正面路地の口を裏から見たる心この下手一面高塀にて見切りあり、總て松前屋裏口の體、上手障子屋體の柱へ八幡宮の掛軸をかけ、與七手代着流し前垂がけ、お富下女同じく前垂がけ、三太丁稚同じく前垂がけにて、松太郎の手を引き、百度緡を持ち皆々平舞臺にて、下手より門口の所まで行きつ戻りつして百度を踏んで居る、此の見得稽古唄、角兵衛の鳴物にて幕明く。

與七　南無正八幡大菩薩さま、主人が無實の災難を免かれますやう、救はせたまへ。

お富　南無八幡大ぼさつさま。

三太　旦那さまの御難儀を、お救ひなすつて下さいまし。

トみな〳〵上手の掛軸を拜むことよろしくあつて下に居る。

松太　これ三太、もうおしまひにするのかや。

三太　これでお百度になりますから、又明日いたしませう。

トやはり右の鳴物にて、下手路地口よりおもと白髮かづら窶しなりの婆にて出來り、門口を明け、

もと　御免下さいまし。（ト内へはひる。）

與七　おゝ卯之どんのお袋か、よくお出でだ、こつちへ通んなさい。

もと　御新造さまの御病氣を、お見舞に參りました。

お富　御新造さま、卯之どんのお袋さんが、御病氣のお見舞に參られましてござりまする。

ト合方きつぱりとなり、上手の障子を明ける、内にお汐やつれたる女房、病人のこしらへにて、蒲團の上に住ひ、お浪振袖娘にて介抱して居る、お汐こなしあつて、

お汐　おゝおもとゞの、ござつたか、不慮の事にて卯之助が牢へ引かれて行きしゆゑ、嘸こなたにも心配と察して居れど心に任せず、よくまあ見舞うて下された。

もと　いえもう段々承はれば、あの悴めがお手紙を旦那さまへ、お手渡しにいたしませんのが身の誤り、内藤とやらの家來衆に渡しましたるばつかりに、それが後日の證據となり、旦那樣が、御入牢なされましたと申すこと、お氣の毒でなりませぬ。

お汐　いや其詫びはこちらから、言はねばならぬ今度の仕儀、ひよんな所へ奉公によこしたゆゑとこなたにも、主人を恨んでござらうと、氣の毒でなりませぬ。

もと　いえ勿體ない、御主人さまを何でお恨み申しませう、是れも定まる約束と、諦めて居りまする。

お汐　何はともあれ、まあ、お茶なと上ぎや。

お富　畏りました。

もと　えゝも、お構ひなすつて下さいますな。

ト　お富おもとへ茶を出して居る。やはり稽古唄角兵衛の鳴物になり、下手の路地より甚右衛門羽織着流し、更けたるこしらへにて、丁稚劍術遣ひの人形を持ち出來り、

甚右　おゝ、お汐にはそれに居つたか。（ト内へはひる。）

與七　これは茅町の旦那さま、ようこそお出でなされました。

松太　伯父さん、今日は。（ト辭儀をする。）

甚右　おゝ松坊おとなしいな、そちにお土産を買うて來たぞ。善太それを是へ出せ。

善太　へいへい、畏りました。（ト件の人形を出す。）

三太　これはよい物を、旦那さまにお土産にお貰ひなさいました。（ト松太郎件の人形を取りあげ。）

松太　母さま、是れをお貰ひ申しました。（トお汐に見せる。）

お汐　おゝ、よいお土産を下されたわいなう。よくお禮を申すがよい。

松太　伯父さん、有難う。（トいたゞく。）

甚右　これ娘、病人の樣子はどうぢや。
お浪　お姉さまの御病氣は、お氣病みゆゑお兄いさまが御出牢をなされませねば、所詮御全快にはなりませぬわいなあ。
甚右　それゆゑ今日も八丁堀の、手蔓の方へ立寄つて、委しく樣子を聞いて來たが、五郎兵衞どのゝ明りも立ち、赦免になるといふ事ゆゑ、必ず心配せぬがよい。
お浪　えゝ、そりやほんの事でござりまするか。
甚右　はい、與力衆のお宅へ行き、慥な事を聞いて來たから、安心をして居るがよい。
もと　それでは悴も御一緒に、御免になつて歸りませうか。
甚右　扨はこなたは卯之助の、お袋と見えますな。
もと　たつた一人の悴ゆゑ、案じて今日御新造さんの、お見舞旁參りました。
甚右　いや、それなれば案じまい、やがてこつちの五郎兵衞と、赦免になつて歸つて來ます。
ト此うちお富甚右衞門へ茶煙草盆を出すことよろしく、よき程に下手の路地口より清兵衞番頭のこしらへにて出で、門口にて窺ひ居て、此時門口を明け、
清兵　これは茅町の旦那さま、ようこそおいでにござりまする。（ト內へはひり、辭儀をする。）

甚右　おゝ番頭の清兵衛どの、こなたも嘸かし心配で、諸方を毎日駈け廻り傳手を求めて居るとやら、いかい苦勞を掛けまする。

清兵　お家は封印、家内中預けの身の上でござりますから、表立つて出ることならず、人目をかねて裏口から、こつそり出ては諸々方々、傳手を求めて歩きますが、扨よい引きもござりませぬので、今日も傳馬町へ參りまして、入りもいたさぬ赤膏を賣つて貰ふを手蔓にして、牢屋の脇の小屋へはひり、それと言はずに牢内の樣子を聞いて參りましたが、譬にもいふ此世の地獄、むごい事をいたしまするを、申すことでござります。

甚右　はて、それも手當の入れやうで地獄の沙汰も金次第と、わしが方から手蔓を求め、絶えず手當を入れてあれば、案じる程の事でもあるまい。

　　ト やはり角兵衛の鳴物になり、下手の路地口より次郎兵衛好みの鬘、半纏着流し、張番のこしらへにて出來り、門口を明け小腰を屈め、

次郎　御免下さいまし、張番の次郎兵衛でござりまする。

與七　おゝ次郎兵衛どのか、誰も遠慮な御人は居らぬから、さあ〳〵こつちへはひんなさい。

次郎　左樣なら、御免下さいまし。（ト内へはひり、下手へ住ふ。）

お汐　富や、お茶を上ぎやいなう。

お富　畏りました。（ト茶を汲んで出す。）

次郎　これは恐入りまする、どうぞお手で下さいまし。（ト茶を呑んで居る。）

清兵　今までわしも傳馬町まで、内用あつて行きましたが、出かけて來て下すつたか。

甚右　さうして態々ござつたのは、何ぞ用でもあつてかな。

次郎　これは茅町の旦那さま、こちらにおいでゞござりましたか。

お汐　變つた事でもありはせぬか、心掛りでならぬゆゑ。

お浪　樣子を聞かせて下さりませ。（ト次郎兵衛思入あつて、）

次郎　變つた事があつたら、知らせてくれとのお頼みゆゑ、それで出掛けて參りました。

甚右　さうしてそれは、どういふ譯。

次郎　不思議な御緣で私もこちらの旦那が御牢内へ、入らつしやつてから茅町さまや、こちらさまから
お手厚いお惠みうけて居りますから、よいお話しでもござりましたら、早速お知せ申しませうと
樂しんで居た甲斐もなく、まことにお話し申すのも、お氣の毒な事でござりまする。

ト言ひにくさうに言ふゆゑ、

お汐　氣の毒な事とは、どのやうな事でござりまする、早く聞かせて下さんせ。

ト顔見合せ、ぎつくりせしこなしよろしく、合方きつばりとなり、

次郎　外の事でもござりませぬが、昨日も例のお調べで、旦那さまは牢問ひにおかゝりなすつて、無慙な有様、元より覺えのない事は初手から知れて居りますが、何をいふにもお奉行から嚴しいお下知で御詮議方が、手酷い拷問なされるゆゑ、張番如きが氣を揉んでも及ばぬことゝ塀の外で、樣子を聞いて居りましたが、知らぬ事ゆゑ旦那さまには、何處がどこまで知らぬと言張り、蔭で聞くさへ身の毛立つ辛い吟味の拷問を、齒を喰縛り怺える御樣子、やがて一人のお役人が所詮たゞでは言ふまいから、丁稚を先きへ海老にかけ、しめあげろとのお指圖に、情を知らぬ下役があのひがいすな小僧さんを、箒の尻でむごく打ち、是れで白狀せぬ時は主人と共に海老にかけ、憂き目を見せると手酷い拷問、蟲の息なる聲をしてひい〳〵泣いて居ながらも、其身の苦痛はおし怺へ、只御主人をお慈悲にて助けてあげて下さいと、泣いて賴んで居る樣子、これといふのも不斷から、奉公人をいたはつてお使ひなさるお宅ゆゑ、小僧ながらも恩を思ひ、其身の責苦に引きかへて、御主人さまを庇ふかと思へばこつちも胸が一杯、われを忘れて男泣きに蔭で泣いて居りました。

ト思入にて言ふ、是れを聞きおもと堪りかねし思入あつて、

もと　ても情ない、わあ〳〵〳〵。（ト泣き出すゆゑ、お汐も愁ひのこなしにて、）

お汐　おゝおもとゞの尤もぢや、嘸やこなたも悲しからう、聞けば聞くほど此の胸が、張り裂くやうでござるわいなう。

もと　いえ、私が泣きましたは、日頃の御恩を忘れずに、御主人さまを庇ひしとは、健氣な奴と思ひました、嬉し涙でござりまする。

ト言ひながら泣いて居る、此うち三太これを聞き、べそをかき居て、此の時堪へかれて、

三太　わあ〳〵〳〵。（ト大聲をあげて泣き出すゆゑ、）

與三　これ〳〵三太、手前はまだそんな責めにも逢はぬのに、何でそんなに泣き出すのだ。

三太　あの意地ッぱりの卯之どんゆゑ、使ひに出てもわしより先きへ歸り、旦那さんや御新造さんに褒められるのが忌々しいと思ひましたが、そんな酷いめに逢ふと聞いては、可愛さうでなりません、伯母さんお前も悲しからう、おいらも悲しい。（ト泣いて居る、松太郎も是れを見て、）

松太　三太手前も悲しからう、坊も悲しくなつたわいなう。（ト泣く。）

お浪　おゝさうであらう、これが泣かずに居られうかいなう。

お富　悪戯盛りの三太どのさへ、泣き出すほどのその話し、涙の止めどがござりませぬ。

ト皆々よろしく泣伏す、甚右衞門、清兵衞も是れを聞き涙を怺へるこなしにて、

お汐　して、それから二人とも、どんな責苦に逢ひましたか。

次郎　さあ、旦那さまには責殺され、假令死んでも知らぬ事は知らぬと言ひ張るお心でも、主人を庇ふ健氣なる子供の責苦が助けたく、お思ひなさつた御樣子にて、身に覺えなき盗賊の罪に落ちたる昨日の樣子。（ト是れを聞き皆々びつくりなし、）

甚右　なに、そんなら覺えもなき事を、たうとう白狀なされしか。

お汐　身に覺えなき罪科でも、白狀なされし上からは。

お浪　やつぱりお上のお仕置に、おなりなさらにやなりませぬか。

次郎　假令覺えのない事でも、罪に落ちればお上の法で、死罪になるかも知れませぬ。

お汐　そんならやつぱり、あの死罪に。（ト取り詰めし心にて、うんと倒れる。）

與七　やゝ、こりや御新造さまが、癪をお起しなされたか。

甚右　これお汐、しつかりしろ。

清兵　お富どん、水を下さい。（ト皆々立ち上る。）

松太　あれ、かゝさまが死んだわいなう。

三太　いえ死んだのぢやござりません、早く呼んでお上げなさい。
　　ト此うち甚右衞門、お汐に水を飮ます。みな〳〵介抱しながら、
皆々　御新造さまいなう。（ト皆々にて呼びいける、是れにてお汐やう〳〵心附き、）
お汐　あゝ苦しや、いつそ死んだがましであらうに、なぜ呼び生けて下さりました。
甚右　えゝ、此の取込みの其中で、そちに死なれてなるものか。
お浪　まあ〳〵、お氣を、
皆々　お鎭め下さい。（トみな〳〵よろしく下に居て、）
清兵　お案じなさるな御新造さま、假令白狀なされましても、無實といふ事は知れたことゆゑ、容易にお仕置などにはなりますまい、何と次郎兵衞、そんなものではござらぬか。
次郎　そりやもう罪にお落ちなされても、今一ヶ條のお内にあつた鎧兜に詮議が殘つて居れば、今日明日と限つた譯ではござりますまいが、元より向うの言ひがゝり罪なきお方に罪を着せ夜盜に落す企みゆゑ、外から故障の出ぬうちに、落着させて取り急ぎ仕置に出すかも知れませぬ、それゆゑ早くこちらでも、手蔓を求めて上からでもお聲がゝりがござりませんでは、所詮旦那のお命は助かるまいと思はれまして、申しにくいと知りながら、お知らせ申しに參りました。

甚右　扨次郎兵衞どの、見らるゝ通りの混雜だが、どうか工風はあるまいか。
次郎　何でも是れは御老中か、又は上野の宮樣か、奉行の一日置くとこから、お聲掛りがなければいけない、何ぞ尋ねる事があるなら、細かく書いてお寄越しなさい、そつと中へ入れて上げよう。
甚右　それは有難うござります、今夜認めて置きますから、御用もあらうが又明日、お出でなされて下さりませ。
次郎　どうで溜りへ參りますから、又明日參りませう。（ト此内甚右衞門紙入より金を出して紙に包み、）
甚右　これ次郎兵衞どの、こりや些少だが小屋頭や、中間の衆へこなたから分けて上げて下さい。
次郎　これは毎度のお心附け、御辭退申すも失禮ゆゑ、有難くいたゞきます。餘計な事をお知らせ申し却つてお歎きを掛けました、左樣なら旦那さま、御新造さま、どなたさまもおやかましうござりました。（ト稽古唄角兵衞の鳴物になり、次郎兵衞門口へ出て件の金を見て、）又も五兩の心附け、あゝお氣の毒な事だなあ。（ト下手の路地口へはひる、此時子役持つて居る人形の首落ちるゆゑ、）
松太　あれ、人形の首がおちた。
皆々　えゝ。（ト思入よろしく、三太件の首を取つて、人形の胴へ附けようとして又落ちるゆゑ、）
三太　こりやどうでも繼けませぬから、首無しにしておきませう。（ト是れにてお汐思入あつて、）

お汐　時も時とて人形の、首の落ちたは氣にかゝる。

甚右　はて、それも手蔓の絲にて繋がば、

清兵　繋げないことはござりませぬ、どれ〳〵、ちよつとお見せなさい。

ト件の人形を取り、首をつがうとして又落ちるゆゑ、是れをお汐に隱すこなし、松太郎これを見て、

松太　あれ、又首が落ちたわいなう。

お浪　ても、忌はしい、

お汐　はあゝゝゝ。
皆々

ト泣伏す。此時又稽古唄、角兵衞の鳴物になり、下手の路地口より、太助好みの鬘、半纏三尺魚賣のこしらへにて、盤臺の荷をかつぎ出來り、門口へ荷をおろし格子を明け、

太助　御免なさい、魚屋の太助でござります、大きに御無沙汰をいたしました。

ト よろしくこなし、清兵衞見て、

清兵　おゝ太助どの、しばらくこなたは見えなんだが、何處ぞへ行つて居なすつたか。

太助　へい、講中仲間に誘はれまして、遠州の秋葉山へ參詣にいつて參りましたが、產れ故郷が三州ゆゑ在所へ廻つて三月越し、長逗留をしましたので、大きに御無沙汰いたしました。

お富　久し振りでお出でなれど、お取込みゆゑお魚の、今日は御用はあるまいわいなあ。
太助　いやもう、こちらさまでもとんだ事で、嘸御心配でござりませう。
お富　それではこちらの御樣子を、どこぞでお聞きでござんしたか。
太助　やつと一昨日家へ歸り、今日久し振りで商ひに出掛けてこつちへ參りまして、今お隣りでお店の樣子を、聞いてびつくりいたしまして、早速お見舞に參りました。
與七　そんなら隣りの伊勢屋さんで、樣子を聞いて來なすつたか。
太助　あんな結構な旦那さまが、わづかな金に目がくれて夜盜にはひるなんぞとは、跡方もない無實の災難、なぜ又そんな知れ切つた事で御入牢をなされましたか、御親類やお見世の衆に生きたお人がないやうで、蔭で聞いても馬鹿々々しく、腹が立つてなりませんから、どういふ次第か御樣子を委しく聞きに參りました。
甚右　成程傍目で見る時は、さう思ふのは無理ではない。これ清兵衞どの、其入譯を話すがよい。
清兵　おつしやる通り三人寄れば、文珠の智慧と申しますから、膝とも談合、よい工風があるまいとも申されませぬ。これ太助どの、其譯を話しますから、まあこつちへ通つて下さい。
太助　左樣なら、御免なさいまし。（トこちらへ來ようとして、）いや〱犬がけんのんだ。（ト門口へ出て盤

臺を格子の内へ入れ、門口をしめこちらへ來り、どういふ譯でござりまする。

ト誂への合方になり、

清兵　樣子を聞いたと言はつしやるが、其のあらましは隣りにて聞いて來たでもござらうが、此の騷動の元といふは、あれにおいでの茅町のお娘御が觀音へ、御參詣の途中にて中間共に取卷かれ、御難儀なさる其所へ内の旦那が行き合せ其の亂暴を懲らしたのが、そも〳〵遺恨の始まりで、中間どもの主人といふは、新堀端に道場を開いてわづかな門弟へ指南をして居る内藤ゆゑ、それと言はずに内の旦那を屋敷へ招き劍術の試合の相手に打ちすゑて、遺恨を晴らす目論見も、却つて向うが恥辱を取り、旦那の爲に内藤の師匠はもとより高弟が、不覺を重ねた悔しさに、女房の縁で町奉行に引きのあるを幸ひに、根もなき無實の罪を着せ、旦那を夜盜の罪に落し入牢をさせたと思はつしやれ。

太助　へゝえ、それぢやあ旦那が不斷から町人ながら劍術に、達してござつて此の近所の、若い者や出入りの者に心得の爲劍術や、柔術をお教へなされたのが、却つて其身の害となり、いはゞ生業忌敵に、新堀端の内藤に、遺恨をお受けなすつたか。

清兵　それゆゑ幾らこつちから無實の事を願つて出ても、向うは根のある囚人ゆゑ理を非に曲げて罪に

落し、夜盗にはひり二百兩の金を盗んで立去る折、見咎められて三人の中間達に手疵を負はせ、又あはよくば內藤を殺す所存に相違ないと、三日に揚げず呼び出しては酷い責苦で旦那さまに白狀しろとの無理難題、元より覺えのなき事ゆゑ、何處がどこまで知らぬ事は、知らぬと言ひ張る氣であつたが、見世の小僧の卯之助が新堀端の內藤へ旦那がお出での其時に、手紙を持つてお迎ひに行つたが因果其手紙を、向うの奴に取り上げられ、夜盗にはひつた其跡に、落ち散りありし證據物と手紙の詮議になりしゆゑ、證人の爲と卯之助が願つて出たを逆捻ぢに、是れも無實の疑ひで倶に苛責の拷問が助けたいので旦那さまが、身に覺えもない盜賊の罪に落入り近々に、お仕置になる一部始終、今方爰へ張番の次郎兵衛といふ男が來て、知らせて行つてくれたので、どうしたものと、途方に暮れ、實は思案に餘つて居ります。

太助　それぢやあ覺えのない事を、旦那さまには罪に落ち、近々仕置に出なさるとか、何のこつた馬鹿馬鹿しい、そんな非道な事をして、それで天下の政事向きの奉行の役が勤まるか、うぬどうするか見やあがれ。(ト腹を立つこなしよろしく、おもと前へ出て、)

もと　それゆゑどうかこなさんも、世間を廣く歩かつしやる、魚屋さんの事なれば、よい手蔓でもござるなら、その邪な衆達の頭を押へて潔白な御政道になるやうな、よい手立をして下さりませ、

わしは一人の悴をば、殺しましても旦那さまの、無實の罪を潔白にさせて上げたうござります。

お浪　それといふも此程から、お姉えさまにはお氣病みで、此通りのお煩ひ、お兄いさまがお仕置にでもおなりなされし其時は、それこそ共に泣き死になされませうと思ひますと、今から悲しうござりまする。

お汐　今も今とて松太郎が、手遊びにした人形の首の落ちたは旦那どのゝ、お首の落ちる知らせかと、最う諦めて居るものゝ、助から工風があるならば、どうぞ助けて下さりませ。

ト此うち太助腕組なして考へ居て、

太助　いや、決してお案じなさいますな、常日頃からお世話になる、御恩返しは此の時ゆゑ、命に替へても旦那さまは、きつとお助け申しませう。

お浪　して、助けると言はつしやるは。

清兵　よい手蔓でもござるかな。

太助　外に手蔓はござりませんが、わしが親分に頼んだら、きつと助けてくれませう。

甚右　なに、親分と言はつしやるは。

太助　駿河臺に居りまする、旗本仲間の肝煎株、大久保彦左衛門でござります。

清兵　お丶成程こなたは其の以前、大久保さまの家來であつたと、いつぞや話した事があつた。
太助　貧乏屋敷で年が年中苦しがつては居りますが、天下の爲にならぬ事はきつい嫌ひのわしが親分、そんな非道な事をして奉行の役が勤まるかと、あの親分から横鎗を一本入れて貰ひましたら、元より覺えのない事を緣家の引きでした事ゆゑ、それにて向うはひや〳〵もの、事によつたら裁判も引つくり返して退役させ、腹でも切らして遣りませう。
與七　成程さういふ手蔓があれば、少しも早く大久保さまへ、賴んで貰ふがよい工風。
お富　何分ともに太助さん、一骨折つて下さりませ。
太助　それぢやあ是れから商ひの、得意廻りを止めにして、直に屋敷へ出かけませう。
甚右　その替りには仕込んで來た、魚は殘らず買ひますから、みんな置いて行つて下さい。
太助　いえ親分へも四月越し、無沙汰をいたして居りますから、是れは土產に持つて行きます。
お汐　とは云へ折角仕込みしを、土產に持つてござつては、嘸御不都合でござんせう。
お浪　どうぞとゝさん太助どのへ、お禮をして下さりませ。
太助　いえ、其のお禮がほしいとて、太助は骨は折りません、是れが不斷の御恩返しだ。（ト立上る。）
清兵　そんなら何分太助どの、首尾よく遣つておくんなさい。

太助　そこはわッちだ、お案じなさるな。（ト盤臺をかつぎ門口へ出るを、おもと送つて出て、）

もと　何分ともに、よろしうお願ひ申しまする。

太助　あい承知だよ、これは皆さん、おやかましうござりました。

ト太助下手の路地へはひる。跡にみな／＼思入あつて、

甚右　思ひがけなく魚屋の、一心太助が爰へ來て、よい手續きにありつくも、

清兵　是れぞ所謂積善の、家には必ず餘慶あり。

お汐　又二つには皆のものが、神々さまへ祈誓を掛け、願うてくれし神の加護。

お浪　その信心の一心が、届いて一心太助どのに、助けられるといふ前表。

もと　ほんに一心太助とは、

與七　心附かずに居りましたが、

お富　よい辻占でござりまする。（ト此うち三太件の人形をよく／＼見て、）

三太　やゝこの人形に内藤の、屋敷の紋が附いて居る。（ト人形を出す、甚右衛門手に取り見て、）

甚右　まことにこれは竹具足の、胴にあり／＼下り藤。

清兵　扨は向うの首が落ちる、

お汐　神のお告げで、

皆々　あつたるか。

清兵　三太出來した。

甚右　先づ〳〵目出度い。（ト膝を叩くを道具替りの知せ、悦べる〳〵。

ト此模樣稽古唄、角兵衞の鳴物にて道具廻る。

（大久保邸勝手口の場）――本舞臺ト手へ寄せて二間中足の二重、板羽目の蹴込み、下の方折廻し二間の落間、下流しの心にて大振りの水瓶、水桶などを置き、上流しを取附けあり、軒口一面の欄間本庇二重正面、上の方反故張りの障子を二枚建切り、出這入りあり、此下の方中仕切りのある臺所戸棚ずつと下の方落間の向う板羽目にて、よき所へ二つ竈を置き、上寄り勝手道具を乘せし釣戸棚、二重の上ド白壁の張物にて見切り、總て此の道具古びたる誂へ、大久保屋敷勝手口の體、二重の上に門兵衞、袴着流し一本差し、更けたる用人のこしらへにて二升樽を持ち、中間角助佐平平舞臺に立ちかゝり居る、此の見得本町二丁目の合方にて道具留る。

門兵　これ〳〵角助、一升にしては此酒は、目方が餘程輕いやうだが、途中で手前はいゝしけはせぬか。

角助　何でそんな事をしますものか、量りの惡いも合點で、やう〳〵ごまかして借りて來ましたが、どこの酒屋でもお斷りで、なか〳〵ついぢやあくれませぬ。

門兵　それは其筈去年から、拂ひといつては三文でも、遣はしてないこつちの屋敷、仕出し屋などはかれこれと、定めて言ひ草を言つたであらう。

佐平　お察しの通り仕出し屋では、先々の勘定が滯つて居りますから、現金でなければ上げられぬと斷られました。

門兵　いや現金で買ふ位なら、あんなまづい仕出しを取るものか、然し酒屋は感心だ、つぎが惡くつても斯うやつて、よこしてくれるとはいゝ氣性だ。

角助　そこは私の口前で、ちやらつぽこを言つて借りて來ましたが、もう一升とおつしやつても、跡は所詮いけません。

門兵　全體拂ひもせぬくせに、お客人へ酒を出せの、料理を出せのと言はぬがよいに、御同役のお二人がたま〳〵御入來なすつたとて、酒はまだかの肴は來ぬかと、こんな困つたことはない。

佐平　水尾さまも矢部さまも、錢の出ない酒だと思ふと、醉ひ倒れる程あがられるから、なか〳〵それでは足りますまい。

門兵　よし〳〵それでは今のうち、水でも割つて出したなら、跡の愁ひをのがれるだらう。
角助　いえ〳〵酒屋で勘定が取れぬを承知でよこした酒、玉川四分に酒六分といふ、いとゞ水ッぽい酒の中へ、又水を割りましたら、酒の氣が拔けてしまひませう。
門兵　いや〳〵氣はあつてもなくつても、酒の匂ひが少しすれば、燗の熱いのでごまかす積りだ。
佐平　爰いら近所は狐が多く、人が化されますから、小便だと思やあしませんか。
門兵　いや〳〵水道に近い駿河臺　玉川は土地の自慢だ。

ト二升樽の中へ片口にて水を割つて居る、やはり右の合方にて、花道より以前の太助、荷をかつぎ出來り、

太助　荷の多いのに急いだので、びつしより汗になつた、どうか親分が居ればいゝが。（ト舞臺へ來り、）魚屋でござい、太助でござい。（ト下手へ荷をおろす、中間二人太助を見て、）
角助　おゝ太助か、久しく屋敷へ見えなんだが。
佐平　あんばいでも惡かつたのか。
太助　秋葉山から在所の方へ行つた次手に廻つて來たので、大きに御無沙汰になつたのだ。

ト門兵衞この聲を聞き、前へ出て、

門兵　おゝ太助歸つて來たか、講中仲間で秋葉へ行くと、暇乞に屋敷へ來たぎり、四月越し見えぬゆゑ旦那もどうしたかとお案じであつたが、いつ江戸へ戻つた。

太助　二三日あとに歸りましたが、永らく遊んで來たので、家の米櫃が干上つてしまひ、先づ兎も角も生業に取りかゝらうと元手を借込み、今日から川岸へ出掛けましたが、何は扨おきお屋敷へ顏を出さうと思ひまして、こつちの方へ廻つて來ました。

角助　さうとは知らず拂ひの惡い、こつちの屋敷のことだから、

佐平　それで久しく來ねえのかと、おら達は思つて居た。

太助　はて勘定などは取れても取れなくつても、元奉公をしたこつちの屋敷、そんな事は構はねえが、ときに親分は、內に居なさるかね。

門兵　なに、親分とは誰の事だ。

太助　誰でもねえ、彥左衞門さまよ。

門兵　えゝ又しても御主人の事を親分などゝ失禮千萬、そんな事は言はぬものだ。

太助　はて、元奉公をした主人の上に、元手を貰つて女房まで、持たせてくれた旦那だから親分に違えねえ、なに失禮な事があるものか。

門兵　いや、さりとは分らぬ奴だ、當時お旗本のお仲間でも、肝煎とか御老體とか尊敬される旦那さまを、魚屋風情の身を以て、親分といふがあるものか。

太助　それぢやあ、是れから駿河臺の、親分の旦那さまと言はう。

角助　やつぱり、それぢやあ同じ事だ。

佐平　屋敷へ來てまで言ふから、世間へ行つても言ふかも知れねえ。

太助　あゝ言ひますとも〳〵、駿河臺の親分と、何處へ行つてもさう言ふのだ。

門兵　扨々理合の分らぬ奴だ、蔭でいふなら仕方がないが、面と向つて親分などゝ、失禮な事を言つてはならぬ、よく心得て居るがよい。

太助　言ふなとあるなら言ふまいが、ちつと旦那にお目に掛つて、お頼み申したい事があるから、どうぞお内なら取次いで下さい。

門兵　いや〳〵今日は御同役のお客樣があつてお話し最中、奥へ取次いでも無駄だから、又出直して來るがいゝ。

太助　さうして御同役のお客といふは、どこの誰が來て居るのだ。

門兵　麹町の水尾さまに、三軒家の矢部さまだ。

太助　あゝ水居に矢部公か、そんな奴なら構はねえから、奥へ取次いでおくんなせえ
角助　これ〳〵太助、奴とは何だ、御同役のお歴々を、奴と言つては濟まねえぞ。
太助　やつで悪けりやあ九つといふから、どうか〳〵旦那に逢はせて下せえ。
佐平　いや、こなたのやうな我雜なものは、お客のある時旦那さまに、逢はせる事はまあならねえ。
門兵　さうとも〳〵、お客樣が歸つた跡で申し上げるから、用ならわしに言ひ置いて行け。
太助　言ひ置いたり出直しては間に合ねえ急用だから、是非とも逢はせて下せえ。
門兵　はて、無駄だから取次がれぬといふに。（ト太助當惑のこなし、佐平角助下手の盤臺を見て）
角助　大分今日は盤臺へ、魚を仕込んで來たやうだ。
佐平　おゝ、此の鯛が一枚あれば、何より立派な酒の肴だ。
門兵　今仕出し屋で斷られ、肴に困つて居る所。客に出すに丁度幸ひ。
太助　えゝ。（ト聞き咎める。）
門兵　何さ、今仕出し屋が立込んで手間が取れるといふ斷りで、實は困つて居た所だ、其鯛とやらを見せるがいゝ。（ト是れにて太助思入あつて）
太助　こつちの鯛も客來があつて、逢はせる事が出來ねえから、用があるなら出直しなせえ。

門兵　え丶、鯛に客來があるものか、これ〳〵角助、爰へ持つて來い。
角助　へい〳〵。こんな大きな鯛でござります。（ト二重の盤臺を持つてくる。）
太助　え丶、餘計な世話を燒きなさんな。（ト門兵衞盤臺の中を見て、）
門兵　成程これは奇妙々々。凡そ目の下一尺五寸、此の大鯛を切りこなせば、刺身にもなれば吸物にもなる。これ〳〵太助、是れは幾らだ。
太助　値を聞いても無駄だから、用があるなら出直しなせえ。（ト盤臺を片附ける。）
角助　これ〳〵太助見くびるな、幾らお勝手が迫つても、そこは古川に水絶えずだ。
佐平　大きな鯛の一枚位、買はれぬ事があるものか、さあ〳〵早く値を言やれ。
太助　所が容易に買はれぬのは、此間から不漁續きで、川岸にたつた四五枚あつた、神奈川廻りの活鯛だ、貧乏屋敷の用人風情が、値を聞くのは無駄なことだ。（ト是れにて門兵衞むつとなし、）
門兵　いや此奴が〳〵、御恩になつたお屋敷を、よく貧乏と申したな、今一言いつて見ろ、其分にはいたさぬぞ。
太助　お丶聞きたけりやあ言つて聞かせる。此の近所は借りだらけで大久保さまの御用といへば、疫病神か風の神のやうに人の恐れる貧乏屋敷、鯷の目刺か鰯なら屋敷相應買ふかも知れぬが、目の下

一尺五寸といふ神奈川廻りの活鯛を買はうといふのは押が強い。それとも匂ひがかぎたいなら、爰ら近所で内福な屋敷へ賣つた其跡で、腸ぐらゐはくれて遣るから鹽辛にして甜めるがいゝ、どうして〱こんな鯛は、疱瘡見舞の張子なら買はれるかも知れねえが、貧乏屋敷の親分に正の物が買はれるものか。(トわざと憎々しくいふゆゑ、門兵衞猶々むつとなし、)

門兵　やい太助、うぬ大恩ある御主人の、屋敷へ參つて左樣なる、惡口申して濟まうと思ふか。

太助　濟むも濟まぬもあるものか、狸親仁の禿頭に、おれが言つたとさう言つてくれ。

門兵　やあ返す〲も無禮な奴、眞ッ二つにする覺悟しろ。

ト刀を抜いて振廻す、此刀錆びてゐるゆゑ太助見て、

太助　何だ、其刀でおれを切る氣か、節分の日に門へさす赤鰯のやうなその刀で、生きた人間が切れるものか、とても切るなら狸親仁の、刀で切れとさう言つてくれ。

門兵　ちえゝ。(ト無念のこなしあつて、)うぬ、何うするか待つて居れ。

ト刀を鞘へ納め奥へはひる。中間二人氣の揉めるこなしにて、

角助　これ〱、太助どうしたものだ、あの藤田さんが旦那さまに尾に尾を附けていふ時は、お年は寄つても氣早な御氣性、憎い奴ゆゑ手討にすると、おつしやり兼ねぬ旦那さまだ、今のうち早く逃

けるがいゝ。

太助　いや逃げ隠れはしやあしねえ、將軍樣の御異見番、我儘御免の親分に殺されて死にやあ本望だ、狸親仁を呼んで來てくれ。

佐平　これさ、なぜそんな事をいふのだ。別段こなたに恩もねえが、不斷鯊や鰯ッ子を肴に貰ふ義理があるから、命をかばつて助けるのだ、惡い事は言はぬから、今の內逃げてしまへ。

太助　いや其の親切は有難いが、親分子分の間柄で斯う言ひ出すはよくせきだ、首を取られて死ねばとて何で五分でも引くものか、おれが切られて死んだ跡の、魚は二人に遣らうから、追善と思つて喰つてくれ。（ト悠々と煙草を呑んで居る。）

角助　佐平、さて〳〵困つた奴だなあ。（ト當惑のこなし、爰へ奥より以前の門兵衞出で、）

門兵　やい太助、只今われが申した事を、旦那さまへ申し上げたら、以ての外なる御立腹にて、これまで惠み遣はしたる恩を仇なる憎い奴、手討にするから庭口より、我が目通りへ廻せとある嚴しい仰せだ、覺悟しろ。（ト太助これを聞き嬉しきこなしにて、）

太助　えゝ、それぢやあ手討になるとか。

角助　それ見たことか、それだから、

佐平　早く逃げろと言つたのだ。

太助　これでおれの、

三人　やあ。

太助　いやさ、おれの命も。（ト足の先にて烟草の吹殼を落すを、道具替りの知せ。）今が年明きだ。

　トにつたり笑ふ、三人は呆れしこなし、此の模樣本町二丁目の唄にて道具廻る。

（庭先の場）――本舞臺四間通し中足の二重、本庇本椽附、二重正面上の方、九尺の床の間、此次に地袋違ひ棚、下の方白地紋散しの襖、正面長押に槍などを掛け、床の間の前に鎧櫃直しあり、總て古びたる道具の誂へ、二重の上下建仁寺垣、よき所に紅葉の立木、日覆より同じく釣枝、いつもの所技折戸、此外正面玄關の方へ行く出はひりあり、大久保屋敷庭先の體、二重の上手に彥左衞門、白髮鬘袴一本差しにて住ひ、下手に十兵衞、四郎太郎、羽織袴大小の旗本にて住ひ、前に茶烟草盆など出してあり、此見得合方にて道具留る。

十兵　只今藤田が御老體へ申し上げたる太助めは、我々ども、御當家へ每度參上いたすので、まだ御家來の時分より見知り居るゆゑ心置きなく、太助々々と呼びますれば、何か友達かなんぞのやうに

上下の差別更になく、途中に於て逢ふ時など迷惑いたす事がある。

四郎　水尾氏の言はるゝ如く、先日などもそれがしが登城の節に彼に出逢ひ、顔を背けて行き過ぎしを魚を荷ひ居りながら、おい矢部公どこへ行くと、大聲あげて呼びかけられ、聞かぬ振りして行き過ぎれば、又三軒家の矢部公と、念の入つたる粗言には、まことに赤面いたしてござる。

彦左　いや、さういふ奴でござるゆゑ、是れへ呼び出し懲らしてやらねばなり申さぬ、其癖心に邪氣などは微塵もござらぬ奴なれど、田舎育ちのがさつ者にて貴賤上下の差別を知らず、各々方へ途中にて左樣な粗言を申すなどゝは、扨々憎い奴でござる。

十兵　定めてお腹も立ちませうが、所謂罪なき小人と思召されて今日は、お懲らしあつて助命の儀を、兩人よりしてお願ひ申す。

四郎　用事がなくば是れに居つて、お詫びをいたす筈なれど、本郷の近藤方へ呼ばれてをれば、我々はこれにてお暇仕つる。

彦左　いや〳〵偶の御入來ゆゑ、粗酒を一獻差上げんと、先刻家來に申し附けたれば程なく參るでござらう、今暫くお待ち下さい。

十兵　いや折角の御心配なれど、はや時刻も遲れてござれば、

四郎　今日はお預けにいたし、そのうちゆる〳〵參上いたさう。
彦左　さて〳〵何で手間取ることか、此の駿河臺程近邊に食類のない不自由な所はござらぬ。
十兵
四郎　いや又近日參上いたさう。（ト立ち上る、爰へ奥より以前の門兵衞出で、）
門兵　これは〳〵御兩所さまには、最早お立ちでござりまするか。
十兵　誂へものまでなされたさうぢやが、
四郎　今日はお預けにいたす。
門兵　是れと知つたら水を割らずに。
彦左　何ぢやと。
門兵　いえなに、水尾さまのお口に合ふのを、申し附けてやりました。
十兵　然らば是れにて、御老體、
四郎　最早お暇いたすでござる。
彦左　それ玄關まで、お送り申せ。
門兵　はツ。

ト案內して十兵衞四郎太郎正面の襖の內より、下手へ出て枝折戶の外を通り、花道へ行き立留り、

十兵　いやなに矢部氏、先刻より酒を出せの肴を出せのと掛聲ばかり、藤田がもぢ〳〵いたし居るのは何處もかしこも塞がつて當惑いたしをると見えまする。

四郎　左樣でござる、氣の毒ゆゑに見切りを附けて、立ち歸つてはござれど、扨旗本の內證は、いづくも同じ秋の夕暮、さて〳〵淋しいものでござる。

ト唄になり、兩入花道へはひる。此內彥左衞門煙草を呑みながら、耳を立つて聞いて居る、奥より門兵衞出て、同じく聞いて居て、

門兵　旦那さま、あんな事を申して歸りました。

彥左　おれの耳が遠いと思つて、惡く言つて歸り居つたが、土產も持たずに來た奴に、酒を出すのは無駄と思へど、餘り長居をいたすゆゑ、たゞ盤面のみを申したのぢや。

門兵　左樣の事とは存じませんで、やう〳〵酒を一升ほど取寄せましてはござりますが、所詮あれでは足りぬと存じ、水を半分割りまして、水ッぽくしてしまひました。

彥左　おれは少しも飮まぬゆゑ、中間と手前とで寢酒にでも飮んでしまへ。

門兵　それと知つたら水を割らずに、うまい酒が戴かれましたに、惜しい事をいたしました。

彥左　して太助めは如何せしか、よもや手討と申したら、びつくりいたして逃げたであらう。

門兵　いえ、本望だと申しまして、悦んで居りまする。

彦左　なに本望だと申して居る、いやはや呆れた奴ぢやわえ。

門兵　只今お庭へ引出しますから、懲らしておやり下さりませ。

彦左　がさつな奴とは申しながら、日頃恩義をよく辨へ、惡口などは申さぬ奴が、常に似げなく我が事を惡口せしは心得ず、立腹なして居ると申して庭先へ連れ參れ。

門兵　委細畏つてござりまする。（ト門兵衞奧へはひる、是れより床の淨瑠璃になり、）

〽立つて行く跡に大久保彦左衞門、其意を得ざる惡口の太助が底意測りかね、思案の胸の晴れやらぬ、折柄庭の縁先へ引立て來たる門兵衞は、忠義一途のやら腹立ち、太助を大地へ押へ附け。

ト此うち彦左衞門よろしくこなし、よき程に下手の垣の蔭より、以前の太助を門兵衞引立て出で、こちらへ來り下に居させ、

さあ太助、今お臺所で申した事を、旦那さまの前で申して見ろ。

〽言へといはれて流石にも、心にもなき惡口を、恩義の手前言ひ兼ねて、

ト太助、彦左衞門を見て思入あつて、

太助　旦那さま、いつもながらお變りもなく、お目出たうござります。
〽しを〳〵として述べければ、大久保わざと苦り聲。（ト彦左衞門きつとなつて、）

彦左　やい太助、おのれは恩義と申すことを、今に至つて打ち忘れしか。

太助　いえ〳〵、忘れはいたしませぬ、よく覺えて居りまする。

門兵　覺えて居らば何でまた、あの惡口は申したのぢや、さあ今一言いつて見ろ。

太助　言へといふなら今言ふから、餘計な口を出しなさんな。（ト彦左衞門思入あつて、）

彦左　改め申すに及ばねど、われは三州岡崎在なる我が領分の產れにて、先年便り參りしが正路を守る奴ゆゑに、年久しく屋敷へ置き、小者となして遣ひしが、追々武家の作法も覺え、其上人體實直にて見所ありと思ひしゆゑ、小身なる我へ仕へずとも、他家へ參つて侍奉公いたせよと、申し渡し手當といたして五十金、惠み遣りしを、よも忘却はいたすまい。

太助　何しにそれを忘れませう、おつしやる通り金までお惠み下されたれど、此身の出世になればとて外へ參つて奉公を、いたす心はござりませねば、下さいました五十兩を元手にいたして世帶を持ち、又旦那さまのお目鏡で下女のおまさを女房に持ち、魚賣りになりまして、長の年月どうか斯うか、かうして暮らして居りますのも、みんなあなたのお陰ゆゑ、夜る寐ましても駿河臺の、此

のお屋敷の方角へは、足を向けては寐やあしませぬ。

彦左　むゝ、左程恩義を忘れぬものが、貧乏屋敷の狸親仁の兀頭のと申したは、如何なる所存で申したか其次第を言つて聞かせい。

太助　さあ、それは。

〽爰ぞ命を詫びとなし、望みを叶へる緒と、臆する體を押し隱し。

ト太助思入あつて氣を替へ、

それに相違がござりませぬから、言つたに違ひござりませぬ。

彦左　何と。

太助　此の駿河臺で貧乏の、屋敷といへば大久保と、誰でもみんな言ひますから、それで太助も言ひました、又兀頭でないものを、兀頭とでも言ひましたら、腹を立つても仕方がないが、誰が目に見ても旦那さまの、あなたの頭は兀けて居ります。

門兵　えゝそれだから料簡が。（ト立ち掛るを、）

彦左　こりや〱門兵衛、先づ控へい。そりやはや困難極りし、貧乏ゆゑに貧乏と申したならばそれもよし、又兀頭に相違なきゆゑ、さう申したとあるならば、勘辨もいたしてくれんが、いさゝかた

りとも恩義ある、我が事を獣に例へ、狸親仁と申せしは、如何なる譯ぢや、それを申せ。

太助　さあ、その狸と申しましたは、よく是れまでにいろ〳〵と化けてござつた御老體、わしは知らぬが評定の席へ列なりござつても、悪い事なら空とぼけ、坐睡をして聞かぬ振り、善いこと聞けば人先きへ差出て事をなさるゆゑ、御老中だの若年寄列席をする方々が、蔭であなたを大久保の狸親仁といふとやら、睾丸などは人並より、大きからうと思ひます。

〽案に相違の言ひたいがい、嘲ける詞に大久保も、正路の氣質色めけば、門兵衛傍に怺えかね。（ト此内三人よろしくあつて、）

門兵　えゝ、さりとては憎い奴、是れではよもや旦那さまにも、もう御我慢はなりますまい。

彦左　おゝ、それ聞いては許されぬ、手討にするから支度いたせ。

〽下緒を取つて綾襷、刀引つさげ庭先へ下り立つ主人門兵衛が、水桶取つて立寄るを、太助も覺悟諸肌を脱げば左右の二の腕かけ、いつか文字の入痣。

ト此うち彦左衛門門兵衛文句の通りよろしく、太助兩肌を脱ぐ、誂への彫物あること、彦左衛門門兵衛是れを見て、

門兵　やゝ、こりや太助には、いつの間にか、兩の腕にこの彫もの。

彥左　右の腕に念佛の六字を彫りし其上に、左の腕におのが名の、命と彫りし入痣、さては疾くより覺悟なし、手討を望む所存なるか。

太助　いや、爰であなたのお手討にならうと思つて此の太助が、彫つた譯ではござりませぬが、武家奉公の大小捨て腰にさしたる長物が、天秤棒となり下り、田舍訛りで江戸ッ子の氣性を眞似る魚賣り、河岸で兄イと呼ばれるが心嬉しく達引も、駿河臺には親分の大久保さまが控へて居ると、曲つた奴にも突つかゝり、男づくなら命でも捨てる覺悟で彫つた腕、海鼠は酢で喰へ男は氣で喰へ、身から一心一向に命は惜しまぬ太助といふ、積りで六字の名號も、南無阿彌陀佛は此世からあの世へ背負つて行く土產、覺悟は疾うからして居ります。

彥左　おゝ、よい覺悟だ、それへ直れ。

〽刀すらりと拔き放し、家來が掛ける水よりも、淸き性根に大久保も、心に感じ脅しの爲、太助が側へ立寄りて。（ト此うち文句の通りよろしくあつて、）

さあ太助、今が最期だ、覺悟せよ。

〽峰打ちなさんと、振りあげるを。（ト彥左衞門刀の峰を向けて振上げるを、太助思入あつて、）

太助　旦那さま、暫くお待ち下さりませ。

門兵　やあ、此期に及んで待つてくれと、申すは命が惜しいのか。

太助　いや、影物までした此の太助、命は少しも惜しまぬが、天下の大事をたゞ一言、今際の際に言ひ置いて、其上で死にたうござります。

彦左　なに、天下の大事とは。

太助　暫時の間旦那さま、お人拂ひを願ひまする。

彦左　なに、人拂ひを願ふとな。

門兵　いえ〳〵、左樣な事を申して逃げる心でござりませう、必ず御油斷なされまするな。

彦左　いや〳〵、人の將に死なんとする時その言ふ事やよしと、如何なる事か存ぜぬが、大事とは聞き捨てならぬ、如何なる次第か疾く申せ。

太助　そんなら、お聞き下さりますとか。

門兵　とは云へ、どうやらあぶないもの。

彦左　いや、そちは次ぎへ遠慮いたせ。

門兵　へい。

〽跡をあやぶみ門兵衛は、庭の外へと出でゝ行く。

ト門兵衞思入あつて、下手へはひる。彥左衞門こなしあつて、

彥左　して、天下の大事とは。

太助　へ太助は四邊見廻して、諸肌いれて兩手を突き。（ト太助よろしくあつて、）其お願ひと申しまするは、淺草藏前旅籠町に札差渡世をして居りまする、松前屋五郎兵衞といふ町人ながら劍術などもよく遣ひ、あの近所でも評判の陰德家でござりますが、其親類の娘ッ子が觀音樣へ參る途中、雷門で中間の悪者めらに取卷かれ、難儀をして居る所へ五郎兵衞が行き合せ懲らしましたる中間は、新堀端の內藤といふ劍學者の家來ゆゑ、それが遺恨の元となり、屋敷へ呼んで五郎兵衞を試合の勝負に打ち据ゑて、遺恨を晴らす目論見も、却つて向うが打ち据ゑられ恥辱を重ねた所から、其內藤の女房の里といふのが町奉行の、伊豫守ゆゑそれへ賴み、賊にはひつて中間へ、手疵を負はせ逃げ去つたは、五郎兵衞なりと試合の時、小僧が迎ひに持つて來た手紙を證據に訴へ出で、無實の科で召捕らせ、權威を笠に理を非に曲げ、小僧と共に酷い責め、其身の苦痛は怺えても手紙の詮議で小僧まで、手酷い責めを目の前に見るが不便と五郎兵衞が、無實の罪に落入つて、近々仕置に出まするど、聞くも哀れな一部始終、どうして〳〵松前屋へ、不斷出入りをいたしまして、太助が樣子を知つて居りますが、二百兩や三百兩の金に目がくれ盜賊

を働らくやうな身代の曲つた家ではござりませぬ、是れは全く内藤が重なる遺恨で町奉行に、引きのあるのを幸ひに賄賂を遣つてした事だと、あの近所でも言つて居りますが、是れを正路に調べるには駿河臺の親分より、いやさ、旦那さまより外にないと、實は願ひに參りました、太助の命は悪口を、申したお詫びにこれへ差出しますが、いまはの願ひ五郎兵衛の、命をお助け下さるやう、どうぞお頼み申しまする。

〽誠顯はす一心が、心の底を明すにぞ、大久保はたと小膝を打ち。(ト彦左衛門思入あつて)

彦左　ほゝお、天に口なし人を以て言はしむと、豫てよからぬ風説ある原田伊豫の奉行の職、折かなあらば手入れをなし、調べて遣らんと思ひしに、其一條なら案じるな、早速老中伊豆守と内談の上町奉行へ、手入れをなして松前屋の、一命助け遣はすぞ。

太助　そんなら早速お願ひを、お聞き届け下さりますとか。

彦左　おゝ原田を始め新堀端の、内藤とやらの非を糺し、理非明白にいたし遣るぞ。

太助　えゝ有難い其のお詞、それ聞く上は旦那さま、無禮を言つた此の太助、お腹のいるやうすつぱりと、お手討にして下さいまし。(ト太助よろしくこなし、)

彦左　いや、そちが過言は此の一儀を、頼まう爲であらうがな。

太助　えゝ、どうしてそれを、旦那さまには。

彦左　はて知らいでならうか平生より、恩義を忘れぬ其方が、心にもなき惡口は五郎兵衛の、危急を救ふ所存なりしと、今こそよめし上からは、如何で手討にいたされやう、さゝ、早く肌を入れろ入れろ。

ト彦左衛門二重へ上り、元の座へ住ふ、太助も肌を入れ、

太助　そんなら無禮を申しましたを、お許しなされて下さりますか。

彦左　おゝ、許さいで何といたさう、よくぞ惡口してくれた。

太助　惡口雜言したならば、御立腹にてお目通りへ、引き出されるであらうと、思ひ附いたる猿智慧もお許しうけて此樣な、嬉しい事はござりませぬ。

〽悅ぶ折柄庭口に、立ち聞く藤田が中間に、荷ひを持たせ二升樽携へ出て手をつかへ。

ト此内下手より以前の門兵衛、二升樽を提げ、佐平角助の中間、魚の盤臺を荷ひ出で、枝折戸の內へはひり、下に居て、

門兵　左樣な譯とも存じませず、大きに立腹いたしましたが。

角助　それと知れゝば前祝ひ、太助が命の助かる悅び、

佐平　水割りながら此の酒を、開いて魚は望み次第、

門兵　一杯遣りたう、

三人　ござりまする。

太助　お丶命さへ助かれば、魚ぐらゐは何でもない、殘らず土產に差上げませうから、よろしいやうに旦那さま、どうぞ上つて下さいまし。

彥左　お丶土產とあれば其の魚を、料つて賞翫いたさうが、先づ差當り五郎兵衞の、家内の者が愁傷なし、そちの安否を待兼ね居らう、早く吉左右知らせて來やれ。

太助　おつしやる通り松前屋の、女房は氣病みで煩ひ附き、家中案じて居りますから、あなたの今のお詞を、知らせて安心させませう。

門兵　行つて來るうち料理方は、わしが萬々仕て置けば、

角助　そんなら早く、太助兄イ。

佐平　その吉左右を知らせて來なさい。

太助　それぢやあちよつと行つて來るから、肴ごしらへを何分賴む。（ト立ち上る。）

彥左　然し折角仕込んだのを、みんな貰ふは氣の毒だ。

太助　はて、以前の御恩にくらべれば、こんな魚は何でもない。
門兵　ても、氣前のいゝ、
三人　男だなあ。
太助　へん、おだてなさんな。（ト尻を端折る木の頭、）どれ、行つて來よう。
ト皆々引つぱりよろしく、鉦太鼓の入りし、本町二丁目の唄にて、
ひやうし　幕

大詰

常磐橋内土手の場
吹上御評定所の場

〔役名――松前屋五郎兵衞、魚屋一心太助、中間惡生治郎助、原田伊豫守、近藤内匠、濱田主膳、小屋頭喜兵衞、中間團助、同金平、松前屋手代與七、老中、若年寄、目附、大福餅賣角助、小使小助、酒屋の御用徳藏、非人、大久保彦左衞門。五郎兵衞女房お汐、丁稚卯之助、卯之助母おもと、下女お富等。〕

（常磐橋内土手際の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う石垣の上草土手、松の立木、後ろ淺黄幕、上の

方見附り石垣にて見切り、下の方九尺の黒塀、内に雪隠の屋根を見せ、日覆より松の釣枝、總て常磐橋内土手際の體、爰に角助半纏がけ、股引尻端折り、草鞋にて、大福餅の荷をおろし、鐵盆へ大福餅を並べ燒いて居る、傍に小助、着流し草履一本差し提籠を置き、徳藏柿素の着附、股引尻端折り、草履にて、紐の附きし徳利を二三本置き、兩人共大福餅を喰つて居る、此の見得摺鉦入り、飴賣りの鳴物にて幕明く。

角助　大福餅はあつたかい、あつたかい〳〵。

小助　そのあつたかいに引替へて、二三日はめつぽう寒くなつて來たではないか。

徳藏　お堀の縁へ氷が張るから、寒くなつた筈でございます。

角助　町と違つて丸の内は、吹き拂ひでござりますから、昨日のやうに西北の風に強く吹かれては、體が縮み上ります。

小助　それでもたゞの商人より、火を持つて居るからいゝが、おいらなどは提籠を、提げて居る手が切れるやうだ。

徳藏　そりやあお前のいふ通り、わたしなども徳利を提げる手に覺えがない、是れから先きは大福餅屋と燗酒に限るのだ。

角助　寒に入れば寒いのは、當り前だから仕方がないが、風のないやうにしたいものだ。昨日のやうに吹かれては、砂がたつてたまらない。

小助　いや吹くといへば吹上に、今日御評定があるさうだな。

徳藏　此間から世間で話す、松前屋の一件だらう。

角助　その一件は奉行所で、一旦調べが附いたのだが。何か不筋な調べ方で、今夜大久保彦左衛門さまが、お調べをなさるさうだ。

小助　兎角今の役人は、賄賂を取つて頼みを聞くから、其の身に覺えのない事でも科を着る事がある。

徳藏　彦左衛門さまのお捌きでは、蛇の目を灰汁で洗つたやうに、善は善惡は惡と、必ず分かるに違ひない。

角助　大御所様から二代様三代様まで御勤めなされ、將軍様に惡い事でもあつた時に御異見を、なさるは當時たゞお一人、大久保さまの外はない。

小助　惜しいお人がお年を取つたが、もう二十年置きたいものだ。

徳藏　山下へ出た人魚でも、あがつたらようござりませうに。

角助　なか／＼お達者でござりますから、ちよつと見でも五つ六つは、お年が若く見えまする。

小助　大久保さまより大福餅を、五つ六つならいゝけれど、幾つ喰つたか忘れてしまつた。
徳藏　詰らぬ話しに實が入つて、おいらも幾つ喰つたか知れない。
角助　二十並べて置いたのが、四つ殘つて居りますから、十六あがつたと見えまする。
徳藏　どつちが餘計に喰つたか知れぬが、面倒だから二つ割りに、八つ宛拂ひませう。
小助　今買物に行きがけだから、金ばかりで錢がない、酒屋一緒に出してくりやれ。
徳藏　わたしも今日は拂ひを取らねば、それだけ錢があればいゝが。
角助　もし御不足なら明日又、一緒にお貰ひ申しませう。
小助　なに無い事があるものか、足輕部屋で拂ひを取つたを、さつきおれが見て置いた。
徳藏　それを知られたら仕方がない、一緒に拂つて置きませう。
小助　その拂ひを手前がせずば、明日屋敷へ入れやあしない。
徳藏　いつでもそれで割を喰ふのだ。
角助　とてもの事にもう四つ、上つてしまつて下さりませぬか。
小助　溫石替りに道々喰ふから、四つはおれが持つて行かう。
徳藏　それもわたしが拂ふのかえ。

小助　えゝ四つばかり拂つておけ、いやだといへば、屋敷へ入れぬぞ。

德藏　あゝ仕方がない、拂ひませう。（ト德藏錢を角助に渡す。）

小助　どれ、買物をして來ようか。（ト小助上手へはひる。）

德藏　屋敷商ひは儲かる替り、あゝいふやからが多いので、勘定合つて錢足らずだ。

角助　とんだ御散財でござりました。

德藏　この埋め草をして來ませう。

角助　わしも一廻り廻つて來ませう。

德藏　そんなら大福餅屋さん。

角助　又明日お目に掛りませう、大福餅あつたかい。

ト右の鳴物にて、德藏上手へはひり、角助下手へはひる。ばた〳〵にて、上手より太助尻端折り、草履にて出來り、四邊を見て、

太助　駿河臺の親分へ、おれが行つて賴んだお陰に、松前屋の一件が吹上での再調べ、それに附き親分から、賴まれた事があつて、今日呼出しを幸ひに、爰でお目に掛る手筈、又御新造の煩らひも根が氣病みから起つた事ゆゑ、調べ直しになつたので、昨日床上げをなすつたから、一目お逢はせ

申さうと、さつきお家へ行つて來たが、もうお出でなさりさうなものだ、女の支度といふものは、何であんなに長いものだか。(ト上手を見て、)待つ御新造は見えないが、もう旦那がお見えなさる。

ト謡への合方になり、上手より左六、羽織着流し、紺足袋雪踏出役の同心にて先きに立ち、跡より五郎兵衛、月代の延びし好みの鬘、下着附き縞の着附、四ツ折の半紙を懐へ入れ、小手を緩め、繩に掛り畚に乗り、是れを○△の非人兩人擔ぎ、喜兵衛手拭を冠り、股引尻端折り、小屋頭のこしらへにて附き是れと一緒に挑三、助平お仕着形、四人にて繩に掛り、是れを左八の繩取り、一纏めになし、非人擔ぎ出來り、

挑三　もし、かゝつめに參りたうございます。

助平　お願ひなされて下さりませ。(ト是れにて、)

左八　囚人がかゝつめを願ひます。

左六　むゝ、向うへ連れて行つてやれ。

左八　はッ。

左六　喜兵衛。

ト喜兵衞へちよつと思入あつて、左六附添ひ、桃三助平の四人、左八繩を取り足早に花道へはひる、此うち喜兵衞思入あつて眞中へ來り、

喜兵　坂倉の旦那、爰にお出でなさつたか。

太助　傳馬町から先きへ駈け拔け、爰で待つて居りました。

喜兵　駿河臺の大久保さまから、石出さまへ御賴みで、今朝殿樣から御內意ゆゑ、御出役へ願つてあるから、長い事はいかないが、何なりともお話しなさい。

太助　それは有難うござりまする。(ト金を包みし紙包みを出し、)こりやあ少しばかりだが、二人に一杯飮まして下せえ。(ト喜兵衞へ渡す。)

喜兵　こりやあ有難うござります。これ、旦那から手前達へ、お心附けを下すつた。

非〇　毎度お心附けに預かりまして、

△〇　有難うござります。

喜兵　何にしても爰に居ては、二人の衆の邪魔になるから、向うへ行つて話すとせう。

太助　それぢやあどうぞ喜兵衞さん、少しのうち賴みます。

喜兵　爰の二人は承知だが、外の奴等に見つかると、內意はあつても表向き、こつちの役目のしくじり

だから、早く話しをしてくんなせえ。（ト合方にて喜兵衛非人兩人下手へはひる。太助思入あつて、）

太助　五郎兵衛どの、とんだ日に逢つたなう。

五郎　おゝ太助どのか、よく逢ひに來て下すつた。

太助　以前と替るお顏のやつれ、よく無事でおいでなすつた。

五郎　おれが今度の一條は、定めて家で聞いたであらうな。

太助　へい、こないだ久し振りでお家へ上り、委細の譯を聞きましたから、直ぐ大久保さまへ行きまして、町奉行の曲つた捌きを委しくお話し申し上げ、どうぞ御詮議を引くり返し、お助けなされて下さいましと、お賴み申したばかりに、御老中から目附衆まで、御立合で吹上のお調べになりました。

五郎　此間張番の次郎兵衛どのから、其の事は話しがあつて委しく聞いた、久しい馴染といふでもないに、よく親切に大久保さまへ、おれが事を賴んでくれた。

太助　たゞ殘念なのは一日遲くなつたが爲、罪に落ちし跡にて後手になつたばかりに、早く片が附きませぬ、どういふ事で鎧兜を、御所持なすつてお出でなさるか、仔細を聞かして下さりませ。

五郎　故あつてあの品は、其の以前より所持なして、藏へしまつて置いたのだが、何遠慮ないこなたで

も、是れぱかりは明かされぬ。

太助　それをお明かしなさらねば、あなたの明りが立ちませぬ。

五郎　此事ばかりは口外せずに、死なうと覺悟はしたけれど、こなたの勝れた氣性を見込み、隱す仔細を話して聞かさう。

太助　すりや、お聞かせなされて下さりますか。（ト太助嬉しき思入、誂への合方になり、）

五郎　太助どの、聞いて下され、元五郎兵衞は奧州津輕家の藩中にて、父は即ち家老職松前五左衞門と申す者、我が幼年の其砌り母か病死に後妻を迎へられ、程なく出生なせし妹が、成人なすに隨つて繼母が我が子を家督に立てんと、所謂世間の繼子いぢめ、兎角辛く當るゆゑ針の莚に居る如く長く居りなば如何なる日に逢ふまいものでもあらざるゆゑ、家出いたして江戸へ來り、遂に町人となりし五郎兵衞、父は心を察せしか翌年死去の其砌り、鎧兜へ讓り狀を添へて遙々贈られし、今は筐のあの二品、其後繼母は我がことを惡しざまに申しなし、妹房へ聟を取り、心の儘に松前家を實子に嗣がせたく、是れを明らさまに申す時は、古主へ不忠繼母へ不孝、それゆゑ仔細は明かさぬのだ。

ト太助嬉しき思入にて、

太助　よくおつしやつて下さりました、是れであなたの潔白な、お心が知れました、數なりませぬ私へ仔細を明かし下さりましたは、有難うござります。して、親御さまのお讓り狀は、何れへお置きなされました。

五郎　人の心の附かぬやう、佛檀の下段の下へ、箱に入れしまつてあれば、死んだ後跡の始末をするものゝ目に掛りなば其時に、扨は父より讓り受けたる品なるかと、盜まぬ事が知れるであらう。

ト合方きつぱりとなり、上手より前幕のお汐、與七、松太郎を背負ひ、お富附添ひ出來り、與七松太郎をおろす、お汐かけ寄り、

お汐　もし旦那さま、お懷しうござります。（ト五郎兵衛に縋る。）

五郎　おゝお汐、松太郎も來たか。

松太　とゝさま、逢いたうござります。（ト取り附く。）

五郎　そちよりおれが、逢ひたいわい。（ト五郎兵衛松太郎を抱きしめ思入あつて、）今太助どのゝ話しに聞いたが、おぬしも煩つて居たさうだが。

お汐　あなたが御牢舍なされてより、煩ひましてござりますが、お調べ直しになりましたので、心が勇みさつぱりと、直りましてござります。

五郎　それは何より仕合せだ。道理で常より瘠せたやうだ。
お汐　いえ私よりあなたこそ、大層おやつれなさいましたが、見ればお髪も綺麗に出來、又御召物も新らしく人の話しに聞きましたのとは、大した違ひでござりますな。
與七　おつしやる通り淺草の、溜りへ行くのを見まするると、汚れた淺黄のお仕着のみ。
お富　旦那さまもあのやうな、おなりをなされます事かと、思ひまするると情なく、いつも泣いて居りましたが。
お汐　見ると聞くとは大きな違ひ、今日のおなりを見ましたので、少しは安堵いたしました。
五郎　いや、おれとても牢内に居れば同じ囚人ゆゑ、その仕着を着ねばならぬが、今日吹上のお呼出しに、其なりでは見ッともないと、牢名主が好い人で今朝髮も結つてくれ、仕立おろしの此の仕着を二枚重ねて着せてくれたが、今もいふ茅町の附屆けがよいゆゑに、客座といつて牢内では、一疊敷に居るけれど、この寒空にも火の氣はなし、夜るは誰やら知れぬ黑闇に、此の世からなる地獄なるぞ。
お汐　して又いつ頃御免になつて、家へお歸りなされませう。（ト五郎兵衞思入あつて）
五郎　何時といつてお上の事ゆゑ、その日限は分からねど、遠からずして遺骸を、引き取るやうになる

であらう。

お汐　えゝ。（トびつくりして、）遺骸を引取るとは、どういふ事でござりまする。

トお汐五郎兵衞に縋り泣く、五郎兵衞ぢつと思入あつて、

五郎　盗みはせぬが此間おれゆゑ一緒に入牢して、拷問に逢ふ卯之助を、助けたいばツかりに、罪に落ちてしまつたれば、所詮おれは助からぬ。これ松太郎、是れから成人したならば、あつぱれ立派な人となり、此恥辱を雪いでくれよ。

松太　あい、手習や學問を、精出してしますから、早う家へ歸つて下され。

五郎　とゝは是れから遠くへ行くから、もう來年の七月でなくては家へは歸られぬ。

松太　お閻魔さまの出る時かえ。

五郎　おゝ地獄の釜の蓋の明く日だ。

お汐　何の心もない此子が、お閻魔さまの出る時かと、いふのは蟲が知らしてか。

與七　それではどうでも旦那さまは。

お富　果敢ない御最期をなされますか。

お汐　この正直な五郎兵衞どのを、助ける神も佛もないとは、ても情ない事ぢやわいなあ。

ト お汐身を顫はして泣く、此時下手より以前の喜兵衛非人二人出來り、

喜兵　まだお話しは盡きまいが、大きに時刻がおくれました。

五郞　嘸待遠でござつたらう。

喜兵　石出さまから御內意ゆゑ、斯うしてお逢はせ申すけれど、ひよつと是れがやかましやの、町奉行の原田さまへ知れた日にはしくじり道具、又此次ぎのおいでの時に、御出役に願つて上げませう。

太助　喜兵衛さんの目こぼしで、逢はれぬ所を斯うして逢ひ、有難うござりました。

お汐　お待たせ申してお氣の毒だが、是れぎり逢はれぬ事ならば、言ひたい事がござりますから、暫く待つて下さりませ。

喜兵　邪險なことを言ふやうだが、時刻が切れると御出役と、

○　かついで來ましたわつちらまで、

△　しくじらにやあなりませぬ。

お汐　さういふ事があつては濟まぬ、早く擔いで行つて下さい。

非人　承知しました。

ト 非人兩人五郞兵衛を擔ぎ上げる、此時上手より前幕の卯之助・お仕着なりにて畚に乘り、これを非

人二人かつぎ出來り。

非一　喜兵衞さん、まだ爰に居なすつたか。

非二　大層ゆつくりしなすつたね。

喜兵　手前達を待つて居たのだ。（ト卯之助五郎兵衞を見て）

卯之　旦那さま。

五郎　おゝ、卯之助か。

お汐　なに、卯之助が參りました。（ト卯之助を見て）おゝ、可愛さうに瘠せ衰へ、見る影もないその有樣。

卯之　御新造さま、御坊さま御免下さりませ。（ト辭儀をする。）

お富　卯之助どの、煩はぬやうにしなさんせ。

卯之　はい、有難うござります。

松太　坊は卯之助と一緒に行きたい。

お汐　えゝ、めつさうな事を言やる、卯之助の行く所は、怖いところでござります。

喜兵　さあ〳〵時刻が遲れたから、御出役がお待兼ねだ、ちつとも早く出掛けよう。

非人四人　行きやせう〳〵。（ト四人下手へ行く、お汐五郎兵衛に縋り、）

お汐　そんなら是れぎり、逢はれませぬか。

五郎　お汐。

お汐　はい。（ト兩人顏見合せよろしくあつて、）

五郎　松太郎を賴んだぞ。

お汐　はゝい。（ト顏へ袖をあてゝ泣く。）

喜兵　さあ、遲くなつた、急いでくれ。

四人　合點だ。

ト誂への合方にて、五郎兵衛卯之助喜兵衛附いて花道へかゝる、お汐追ひかけようとするを、太助留める、松太郎跡を追ふをお富抱き上げる、五郎兵衛卯之助振返り、トヾ顏を背ける、是れをキツカケに早足に花道へはひる、お汐跡を見送り、

お汐　えゝ情ない、もうこれぎり逢ふ事はならぬかいな。（ト太助思入あつて。）

太助　大久保さまが呑込めば、今に目出度く逢はれますから、必ずお案じなされますな。

お汐　なに、再び目出度く逢はれるとは。

太助　一心太助が受合うて、旦那はお助け申します。

お汐　それに又助からぬと、今のやうに言うたのは。

太助　是れは手立があつての事、もしちよつとこちらへ。

ト下手へ呼び、お汐に囁く思入、お富與七は心掛りの思入にて、

お富　どういふ手立か知らぬけれど、是れまで度々茅町さまや、御親類からお手を廻し、諸方へお頼みなされても。

與七　根が意趣から起つた事で、棒ほど願つて針ほども、上へは通らぬ事ゆゑに、實にあぐみ果てたけれど。

お富　太助さんが受合ふは、何ぞいゝ智慧があるのかいな。

ト兩人案じる。此時お汐よろしく思入あつて嬉しきこなし。

お汐　さういふ事なら、少しも早う。

太助　見附を出たら本町から、駕籠でお歸りなされませ。

與七　それでは是れから、御新造さまには。

お富　お家へお歸りなされませぬか。

お汐　おゝ、一先づ歸らにやならぬわいの。

太助　左樣なれば、お早くお家へ。

お汐　さうしてお前は、

太助　大久保さまへ此の事を。

お汐　そんなら太助どの。

太助　これでお別れ申します。

ト早き唄にて、お汐お富與七松太郎を背負ひ上手へはひる。太助は足早に花道へはひる。跡時の鐘誂への合方にて下手塀の蔭より、二幕前の治郎助、紺看板中間なり、諸所へ膏藥を張りこしらへにて出來り、思入あつて、

治郎　今日吹上へ引合で、中間の者と一緒に來たが、刻限が早いから見附外で一杯やり、歸つて來たら五郎兵衛と、女房や太助がひそ／＼話し、何をいふかと手水場の塀の小陰で聞いて居たら、三の切の愁歎場、あの五郎兵衛にやあ遺恨があるが、女房や餓魂に科はねえ、可愛さうな事だなあ。（ト思入、ばた／＼になり上手よりおもと窶しなり婆のこしらへにて走り出來り、治郎助に突き當りばつたり轉ぶ。）えゝ、目を明いて歩きやあがれ。

もと　はい、御免なされて下さりませ、ちつと心の急きますものゆゑ、つい突き當りましてござります。

ト治郎助おもとを見て、

治郎　突當つたは野郎と思つて、けんつくを喰はしたが、婆あさんぢやあ氣の毒だ、どこぞ怪我でもありやあしねえか。

もと　いえ〳〵、どこも怪我はいたしませぬ。（ト砂を拂つて起き上る、手に疵の附きしを見て、）

治郎　怪我をしねえと言ひなさるが、砂利で手をすりこはしたぜ。

もと　はい、左樣でござりまする。

治郎　おらあ何も藥がねえが、おめえ何ぞ持つては居ねえか。

もと　はい、此の巾着に切疵へ附ける藥がござります。（ト帶の間から子供の提げる誂への巾着を出し、）憚りながら此中から、お出しなされて下さりませ。

ト治郎助巾着を取り上げ中から貝へ入れし藥を出し、鼻紙を切つてこれへ附け、

治郎　さあ、手を出しねえ、附けてやらう。

もと　これは〳〵御親切に、有難うござります。（ト治郎助巾着を見て、）

治郎　もし婆さん、此の巾着はおめえのかえ。

もと　その巾着は私の忰の巾着でござりまする、今は不用になりましたから錢入れにして居ります〻。

治郎　此の巾着をさげて居た、忰は内に居なさるか。

もと　はい、それを提げたは私の惣領の子でござりますが、産れた時に親類から、貰ひましてござりますが、もう巾着も提げぬやうに、段々成人いたしまして、十一の年お伊勢さまへ、ぬけ參りに行つたきり家へ歸つて參りませぬが、神隱しにでも逢ひましたか、但しは旅で死にましたか、今に生死が分りませぬ。

治郎　そりやあとんだ事であつたが、其十一の年伊勢參りから、行方の知れぬ忰といふのは、名は何といひなすつた。

もと　房太郎と申しました。

治郎　え。（ト治郎助びつくりして、）えゝ、面西北風で寒くなつた。
ト治郎助手拭を冠り、顏を隱す。おもと思入あつて、

もと　もしお前さんにお聞き申しますが、今しがた傳馬町から、爰へ若衆の囚人をかついでは參りませぬか。

治郎　そりやあ今しがた通つたが、もう吹上へはひつたらう。

もと　一日逢ひ度く參りましたが、老の足で間にあはず、惜しい事をいたしました。
治郞　逢ひに來たといふからは、若衆はおめえの身寄りかえ。
もと　今お話し申した房太郞の弟で、卯之助と申しまするが、はるか後れて出來たゆゑ、伊勢へ參つた時はやうく二つでござりました、賴みに思ふは是ればかりに微な暮しの其中で育て上げ、藏前の松前屋といふ札差へ奉公にやりましたが、其の御主人が災難うけ忰も共に入牢なし、酷い責めに逢ひますので、瘦せ衰へたと申すこと、今日お呼出しと承はり、途中で逢はうと參りましたが、足が遲いので跡になり、殘念な事をいたしました。（ト治郞助思入あつて、）
治郞　今おめえがいふ松前屋も、又卯之助といふその小僧も、元より覺えのない事だから、今に許されて歸らうから、必ず婆さん案じなさんな。
もと　それでは御主人の五郞兵衞さまも、また忰の卯之助も、助かりますでござりますか。
治郞　噂を聞けば駿河臺の大久保さまが再吟味、今日は大方黑白が分かつて片が附くだらう、早く歸つてよい沙汰のあるを、家で待つて居ねえ。
もと　さういふ事を承はつては、少しも早く御主人さまへも、よいお耳をお聞かせ申し、お悅ばせ申しませう。（ト此内治郞助構はず煙草入から金を出し、鼻紙へ包み、）

治郎　こりやあ少しばかりだが、小遣ひにでもしてくんねえ。（トおもとに渡す。）
もと　有難ゥはござりますが、お前さまから私が、お金をお貰ひ申します譯がござりませぬ。
治郎　さつき爰に居たばかり、突當つておめえが轉び、怪我をしたのはおれが科だ、いはゞ是れは膏藥代、とやかう言はずに受けてくんねえ。
もと　左樣なればお詞に、あまへてお貰ひ申します。（トいたゞいて巾着へ入れる。）
治郎　さあ、丸の內は寒いから、早く家へ行きなせえ。
もと　はい、參りますでござります。
治郎　氣を附けて行きねえよ。
もと　あゝ、お慈悲深いお方ぢやなあ。

ト合方にて、おもと嬉しき思入にて下手へはひる。治郎助跡を見送り、思入あつて手拭を取り、

治郎　神ならぬ身の露知らず、今出逢つたが子供の折別れたおれが實の親、忘れもしねえ十一の、三月ふつと神風に誘ひ出されて拔參り、伊勢から直に京大阪、奈良大和と經廻つて、とてもの事に金毘羅へ參つて來ようと船に乘り、流れ渡りに四國から九州路へぐれ出して、旅から旅を十四五年遊び歩いて故鄉へ歸り、三河町の人宿から小旗本の渡り中間、惡性といふ名を取つた、碌でな

しの此の治郎助、産みの恩あるお袋や又弟が世話になる、主人と知らず松前屋を、入牢させて卯之助まで、憂き目を見せるも其元はみんなおれがした事だ、體へ疵を附けたらば、ちやつと一兩やらうといつた、金もくれねえ内藤どの、うぬが試合で負けた遺恨に、何科もねえ五郎兵衛どのを、罪に落した巧み事、悪事に附いてどこまでも、切られたと言ひ張らうか。善に返つてお袋や又弟が恩返しに、巧みを割つて松前屋の、五郎兵衛どのを助けようか。（ト思入あつて）こいつア一番。（ト腕を組む、道具替りの知せ、）考へものだ。

ト時の太鼓にて、よろしく道具廻る。

（吹上評定所の場）――本舞臺四間通し高二重、本庇、本緣附、白洲階子、向う上下一枚づゝ金襖この後一段高く二重に飾り、向う金襖、上下あとへ下げて一間障子屋體、本舞臺に莚を敷き總て吹上評定所の體、二重眞中に伊豫守、上下、脇指、町奉行のこしらへ、上手に彦左衛門上下脇差にて住ひ、下手緣側に内匠上下にて控へ、二重上下に老中二人、若年寄二人、目附二人、上下脇差にて住ひ、平舞臺上下に羽織袴股立の同心二人控へ、平舞臺莚の上に以前の五郎兵衛卯之助住ひ、此の見得時の太鼓にて道具留る。

目附　それなる囚人五郎兵衛は、過ぎし九月二十日の夜、內藤藤左衛門が屋敷へ塀を乗越え忍び入り、則ち土藏の戸口を破つて、金子二百兩盜み取り、

○　逃げ去らんといたせし折、夜廻りをなす中間共に見咎められて出端を失ひ、用意なしたる一刀にて三人の者に手を負はせ、遂に其場を逃げ去りしも、

△　土藏の內へ取落せし五郎兵衛名宛の一通に、中間共が同人と、慥に姿を認めしゆゑ。

○　それを證據に町奉行へ、內藤方より訴へ出で直に五郎兵衛を召捕りて、種々詮議をなせし所、

△　過日白狀に及びしゆゑ、既に上樣へも申し上げ、死刑の沙汰に及ばん折柄、

○　大久保殿より不審の廉これある由にて此程より、諸役人立合にて、今日是れにて、

皆　再調べ。

彦左　今日上樣御不例にて、是れへ御出座あらざれども、天下の老中若年寄諸役人出席あれば、町奉行の役目ゆゑ、伊豫守殿此場に於て、一通り詮議召され。

伊豫　委細承知仕つる。

彦左　見れば相手の內藤殿には、今日出席いたされぬか。

內匠　先刻御屆けいたせし如く、藤左衛門病氣に附き拙者親戚ゆゑ名代に、罷り出ましてござります。

彦左　おゝ元より貴殿もかゝり合、餘の名代よりよくござる。さ、とく〳〵詮議いたされよ。

伊豫　はッ。（ト前へ進み、）淺草旅籠町家持五郎兵衞。

五郎　はッ。

伊豫　同人召仕卯之助。

卯之　はッ。

伊豫　當月十日宋問の節、其方白狀いたせし通り、過ぎし九月廿日の夜内藤藤左衞門が屋敷へ塀を乘越し忍び入り、庭内土藏の戶口を破り、金子二百兩盜み取り、逃げ去りしは其方なりと、白狀に及びしゆゑ、口書爪印取り置きしが、それに相違あらざるな。

五郎　仰せの如く廿日の夜内藤どのへ忍び入り、金子二百兩盜み取り、中間三人に手を負はせしは、五郎兵衞に相違ござりませぬ。

伊豫　其節忍びし土藏の内へ、札差より送りたる五郎兵衞名宛の一通を、取り落せしに相違ないか。

五郎　それも相違ござりませぬ。

伊豫　詮議の廉に不審ありとて、再吟味を願はれしお世話好きの大久保殿、只今彼れが申せしを、それにてお聞きなされしか。（ト彦左衞門思入あつて、）

彥左　近頃耳が遠くなり、小さな聲で申すことは、何を言ふかさつぱり分らぬ、面倒ながら大きな聲でもう一遍言つて下さい。（ト伊豫守忌々しいといふ思入あつて、大きな聲で、）

伊豫　去る九月廿日の夜内藤方へ忍び入り、金子を盜み取りし上中間三人に手を負はせしは、此程白狀いたせし通りに相違ないと、五郎兵衞が只今これにて申してござる。

彥左　あゝ、左樣であつたか。

伊豫　其節忍びし土藏の内へ、五郎兵衞名宛の一通を、取落し參りしも、相違ないと申します。

彥左　なに、相違があると申すか、こりやさうありさうな事だ。

伊豫　いえ〳〵、ないと申します。

彥左　いや、ない事はあらざるぞ、噂を聞けば五郎兵衞は、幼年なる召仕卯之助が拷問を、助けん爲に覺えない盜賊の罪に命を捨つる覺悟とやら、詮議に不審があると申すは、誠盜賊にあるかないか篤と詮議をいたされぬぞ。

伊豫　土藏の内へ取落せし、手紙が慥な證據にて、とくと詮議をいたせしゆゑ、遂に白狀いたしてござる。

ト彥左衞門思入あつて

彥左　こりや卯之助とやら、手紙はそちが持參なしたか。

卯之　はい、私が持つて參りました。

彦左　其方主人五郎兵衞へ、直に手渡しいたしたか。

卯之　主人へ直に渡しませうと、存じましたをお取次ぎの御家來が出て、そちが主人は今道場で試合最中、跡で屆けてやらうから、置いて行けとおつしやいますので、ついお渡し申しました。

彦左　その取次は存じたものか。

卯之　初めて參りしお屋敷ゆゑ、お名前さへも存じませぬ。

彦左　内藤方では其の手紙を、五郎兵衞へ渡せしか。

内匠　只今卯之助が申せしは、手紙が證據になりしゆゑ、内藤方へ持參せしと申すは卽ち僞りにて、罪をのがれんこしらへごと、されば内藤方にては、誰受取りし者はござりませぬ。

彦左　その手紙を内藤方で五郎兵衞に渡しなば、のがれぬ所の證據ながら、こしらへ事と申すのは、爰が不審の廉でござる。

内匠　なに、御不審とは。

彦左　まだ十五未滿の卯之助、彼れが僞り申さぬのは詞にいさゝか淀みなく、面に誠は顯はれしぞ、この彥左衞門の目から見れば、内藤方に遺恨あつて持參なしたる手紙を幸ひ、罪を被せしと思は

るゝ、然し内縁ある原田殿には、此の詮議は出來まい、彦左衞門が成り替り、きつと詮議いたすでござる。
内匠　大久保殿には何故に、左樣な事を仰せらるゝか、手紙の有無は扨おいて、内藤方へ盜賊に忍び入りしは夜廻りの、中間共が五郎兵衞と、慥に認めましたるゆゑ、その趣きを訴へ出で、直に五郎兵衞を召捕られ、初めは陳じ居つたれど、數度の拷問に怺えかね、白狀いたせしが何より證據、若し御不審に思召さば、中間共が證人ゆゑ、お呼出し下さりませ。
彦左　おゝ中間共が切られしといふが、町人ながら五郎兵衞は、内藤殿に勝りし腕前、深手のみにて淺手ではあるまい。
内匠　え。（ト内匠ぎつくり思入、）
彦左　彼れらが疵の淺深を、見たいと思ひ居つたる所、その者共を呼び出せ。
同心　はツ。（ト下手へはひり、直ぐ以前の治郎助を連れ出來り、下手へ控へ、）中間治郎助、召連れましてござりまする。
伊豫　こりや治郎助、その方外二人の者と先達て、我が役所へ訴へ出でし趣きは、則ち是れなる五郎兵衞が内藤方へ忍び入り、金子を奪ひ逃げ去る所を、其方共が五郎兵衞なりと、認めしゆゑに捕へ

んとして、彼れに手疵を負はされたのぢやな。〔ト治郎助思入あつて、〕

治郎　いえ、左様な事はござりませぬ。

伊豫　こりや〳〵、治郎助何を申す、數ケ所の疵所へ膏薬打ち、其方訴へ出でたでないか。

治郎　へい、訴へ出は出ましたが、あれは嘘でござります。

ト皆々顔を見合せ、合點の行かぬ思入、内匠急き立ち、

内匠　こりや〳〵、そちは如何せしぞ、察する所日頃好む酒を過して酩酊なせしか。

治郎　さつき一杯やりましたが、二合や三合の端た酒で醉つた事はござりませぬ、しらふも同じ悪性治郎助、今嘘だと申したのは、誠の事でござりまする。

内匠　まだ〳〵左様な事を申すか、跡先きの考へなく、うか〳〵根もない事を申すと、そちが主人内藤殿の身分に拘はる大事だぞ。

治郎　そりやあわつちも承知だが、言はにやあならねえ事があつて、包み隠さず言ひますのだ。

彦左　如何なる事があつてか知らぬが、再調べなす幸先きに詮議の種になりさうだ、包み隠さず早く申せ。

伊豫　あゝこれ、それをうか〳〵此の場で申さば、内藤殿はいふに及ばず、

内匠　緣家の我等の身にも拘はる、必ずそれを言ふまいぞ。
治郎　それでは爰でぶちまけて、言つては惡うござりますか。
伊豫　申す事があるならば、奉行所へ參つて申せ。（ト伊豫守氣を揉む思入）
老中甲　再調べは大久保殿の、願ひによつて當吹上へ。
老中乙　上樣よりの御免にて、別に開きし此の捌き。
若年寄一　今奉行所へ行くに及ばぬ、
若年寄二　たとひ何樣の事なりとも、
目附一　遠慮に及ばぬ此の場にて、
目附二　疾く〳〵仔細を、
皆々　申すべし。
伊豫　ではござれども拙者めは、此の一件の係りゆゑ。
目附一　然らば貴殿が此の場にて、
目附二　その仔細を承はられよ。
伊豫　さあ、それは。

彥左　やあ、誰彼と面倒だ、彥左衞門が承はらん。（ト前へ進み、）こりや中間治郎助、僞りといふ其の仔細を、今有體に身共に申せ。

治郎　包まず申し上げまする。（ト合方になり、）何をお隱し申しませう。元劍術の遺恨から五郎兵衞殿を屋敷へ呼び、試合で打たうと思ひの外、主人を始め內田や又そこにござる近藤どの、三人共に見事に負け、却つて恥辱を取つたゆゑ、どうがな意趣を返さうと是れなる小僧が持つて來た手紙のあつたを幸ひに、それを證據に五郎兵衞が盜みにはひつた體になし、夜廻りに出た中間が手疵を負つたといふのは僞り、手疵は一寸一兩で、內藤どのが附けた疵、爰に三寸かしこに五寸拾ひ集めて三百も、まだその規模さへくれませぬ。

彥左　大方こんな事であらうと、我が推量に違ひない、よく打明けて申したぞ、なか〳〵氣性のよい奴だ。

伊豫　いや斯樣な事を申すからは、いよ〳〵おのれは發狂したな、如何に分別なき者とて、主人の難儀になることを、申すといふがあるものか。

內匠　大方これは何者にか、金でも貰つて慾に迷ひ、さやうな事を申すであらう。扨々下郎といふものは取るに足らぬものでござる。

治郎　取るに足らぬ下郎でも、性根を据ゑて言ふからは決して嘘は言ひませぬ、疵は殘らず上ツつら、皮を切つたばかりゆゑ、御大層に膏藥を斯うして張つて居りますが下は直つて居りまする。これも私一人にて證據にならずば、殘つて居る、二人を爰へ呼び出して、お聞きなされて御覽じませ。

ト此うち治郎助膏藥をはがし、下を見せる。

彥左　さあ、跡の二人を呼び出せ。

同心　はツ。（ト下手へはひり、直ぐ同心先きに二幕目の團助、金平の中間、紺看板にて附添ひ出來り、下手に控へる、）內藤の中間團助、金平、相連れましてござりまする。

團助　只今あれで私共も、承はつて居りましたが、此の治郎助が申す通り、五郎兵衞どのが盜みをしたと、言ふのは眞つ赤な僞りごと。

金平　三人共に手を負つたと、いふのは一寸一兩で金が欲しさに附けた疵、それも痛い思ひをしただけ損で金にもならず。

團助　あんまり非道な仕方ゆゑ、愛憎が盡きて私共も、

金平　この治郎助と共々に、巧んだ事を、

兩人　申し上げます。

内匠　よくも〳〵おのれ等は三人ともに、左様な根なし事を申し立て、主人に難儀を掛けるとは、言はうやうない不忠者め。

治郎　もし一つ穴の近藤さま、窪んだ目玉で睨みなさんな、おめえも其時二三ヶ所、疵を附けた仲間だぜ。

團助　好きな酒でも飲みてえから、痛さを怺えて切られたが、それから跡は二朱一つ金をくれねえ内藤どの。

金平　知行所から出た中間なら、我慢も仕ようがこつとらは、先きから先きを渡り歩き、主も家來もありやあしねえ。

伊豫　揃々憎い奴等だわえ。（ト伊豫守内匠顏見合せ思入、五郎兵衞嬉しき思入にて、）

五郎　天道人を殺さずと我が正直の顯はれて、敵と思ひし中間衆が、内藤さまの企みをば、大久保さまへ申せしゆゑ、疑ひかゝりし盜賊の曇りも晴れし身の仕合せ。

治郎　もうこれからは何處までも、此の治郎助が證人で、二人に難儀は掛けませぬ。

彥左　一人ならず三人まで證人あればそれが證據、我が推量に違はずして藤左衞門が企みなりしか、し

て五郎兵衞には牢内にて、怺え難く罪に落ちしか、但し又最前手前が申せし如く、その卯之助を助けん爲、罪に落ちて死する覺悟か。（ト五郎兵衞思入あつて、）

五郎　一旦罪に落ちし上は、後に明りの立つを待ち、死する覺悟でござりましたが、大久保様のお尋ねに手前も包まず申し上げまする。（ト誂への合方になり、）意趣の元は内藤方にて、試合に勝ちしが始めにて、遂に身は召捕られ入牢なして是れまでに、數度牢問ひに逢ひましたが、所詮長くは生きられぬ我が命數と知つたるゆゑ、此の卯之助を助けんと、身に覺えなき盜賊の、罪に落ちましてござります。

彥左　素性は知らねど劍道に、勝れしからは五郎兵衞は、正しく以前は武家出ならん、其の身非道の拷問に長く存命ならぬと知り、汚名を受けて卯之助を、助ける主の慈悲心は、なか〳〵人の及ばぬ事だ。

ト此内治郎助ぢつと思入あつて、

治郎　其有難い思召しを承はつて心を改め、企んだ事を打ち割つて、五郎兵衞さまをお助け申すは、長年御恩になりました、母と弟が御恩返し。

五郎　なに、母と弟が恩返しとは、

卯之　もしやお前は小さい時、
治郎　伊勢參りからぐれ出した、おぬしが兄の房太郎だ。
卯之　えゝ、兄さんでござりますとか。（ト卯之助立ち掛るを、五郎兵留めて、）
五郎　これ、立騷いでは濟まざるぞ。
卯之　はい。（ト卯之助下に居る。）
五郎　すりや、常々おもとが生死の知れぬと話しに話したは、此の卯之助の兄であつたか。
卯之　どうしてわたしが弟と、いふのがお前に知れました。
治郎　常磐橋の見附内で思ひがけなくお袋に、出逢つてそれと知つたのは、子供の折にさげて居た其の巾着が目印に、素性を知つたも盡きぬ緣、名乘り合はうと思つたが、身なりが惡さに手拭で、顏を隱して別れたが、親兄弟の御恩になる、お主を罪に落しては、濟まねえことゝ氣が附いて、企んだ惡事を明かしたのだ。
彥左　扨は汝は卯之助が、別れ程經た兄でありしか、親兄弟が恩返しに企みを明かして五郎兵衞が、無實の難を救つたは、性は善なる人心、斯くこそ人はありたきものだ。
ト彥左衞門感心の思入、治郎助も思入あつて、

治郎　とはいふものゝ三日でも、主人となした內藤どの、假令惡い人にもせよ、家來が主人の惡事を言ふは、こんな不忠な事はない、御法通りのお仕置に、わしをなされて下さりませ。（ト覺悟の思入）
團助　この治郎助が善心に、なつたを聞いて共々に、惡い心を止めました。
金平　是れから堅氣になりますれば、私共も治郎助同樣、科を着せて下さりませ。
治郎　この二人は證人に、なつてくれた義理あれば、科は私一人に仰せ附けられて下さりませ。
彥左　なか〳〵中間風情には、よい魂の者共だ、仕置は附けて遣らうから、暫らくそれに控へて居よ。
三人　畏りましてござりまする。（ト三人下手跡へ下る。）
彥左　かゝる企みのある事を、詮議いたすが奉行の役、腕前勝れし五郎兵衛が、切つたる疵かおのが手に附けた疵か調べもせず、片落しな裁判は、こりや內緣がある故か。
伊豫　何しに左樣な事がござらう。
彥左　我が召仕を助ける爲に、罪に落ちたを糺しもせず、此儘死刑になした後、今のやうに中間共が企みし事を訴へなし、一旦受けし盜賊の汚名はそれで消えるとも、死罪になりし五郎兵衛は、再び生きて歸りますまい。
伊豫　む。（ト伊豫守ぐつと思入。）

彦左　奉行の越度は天下の瑕瑾、さりとはたはけた捌きでござる。（ト せゝら笑ふ、伊豫守無念の思入っ）斯く明白に分りし上は、最早盗賊の科はない、五郎兵衛卯之助とも、その縛めを解いて遣はせ。

同心　畏つてござります。

伊豫　いや、其儀は暫くお待ち下され。

彦左　なに、待てとは。

伊豫　五郎兵衛は盗賊の未だ詮議が残つてござる。

彦左　未だ詮議が殘り居るとは。

伊豫　土藏の内に隱しありし、町人の身にあるまじき鎧兜は、何れかで盜みし品と認めたり、此の言譯が立たざれば、彼れが繩目は許されませぬ。

内匠　こりや原田殿の言はるゝ通り、鎧兜は五郎兵衛が、正しく盗みし品ならん、その言譯も立たざるに、濫りに許すと言はるゝは、是れも何ぞの御縁でござらう。（ト伊豫守と顏見合せ、せゝら笑ふ。）

彦左　こりや大きに粗相であつたが、すりや許しては惡いかな。

伊豫　鎧兜を所持なし居るからは、容易ならざる事故に、繩目を許すをお止め申した。

彦左　然らば篤と紀した上、繩目を許し遣さん、こりや五郎兵衛、汝が所持なす鎧兜は如何なる事で所

持なし居るか、何れより傳來せしか、其の出所を包まず申せ。

五郎　大久保樣のお尋ねゆゑ、申し上げぬは恐れ入れど、此儀ばかりは故あつて、此の場で申し上げられませぬ。

彥左　定めて言はれぬ仔細もあらうが、其の出所を言はざれば、汝へ賊の疑ひかゝるぞ。

五郎　假令賊の疑ひうけ、死刑の御沙汰になりませうとも、鎧兜の出所をば是れにて申し上げ兼ねまする故、御推察下さりませ。

彥左　內藤、內田、近藤とも、皆劍道を指南なす者、此の三人を相手となし、試合に勝ちし汝が手練、以前は由緖ある武家なること、此の一條にても知れて居るぞ、家傳來で所持なし居るか、但しは他家より受けたる品か。

伊豫　出所を言はぬは、正しく盜賊。

內匠　盜みし品に相違あるまい。

彥左　鎧兜の出所は、如何に。

五郎　さあ、それは。

伊豫　いよ〳〵盜みし品なるか。

五郎　さあ。
彦左　出所を申すか。
五郎　さあ。
内匠　賊に落ちるか。
五郎　さあ、
彦左　さあ、
四人　さあ〳〵。（トきつと言ふ、此時ばた〳〵になり、以前の太助走り出來り、花道に居て、）
太助　憚りながら其の詮議、暫らくお待ち下さりませ。
彦左　何者ぢや。
太助　私は五郎兵衛の兄坂倉甚右衛門と申す者、御歴々樣の御前をも憚からず、恐入つてござりまするが、申し上げたい事がござりまして、罷り出ましてござります。
彦左　何事なるか、是れへ參れ。
太助　眞平御免なされませ。（ト合方になり、太助小腰を屈め舞臺へ來り、下手よき所へ住ふ。）
彦左　して、其方が申すといふは、如何なることか、疾く〳〵申せ。

太助　只今御詮議がござりました、五郎兵衞どのゝ所持なしたる、鎧兜の儀に附いて申し上げる儀がござりまする。（ト是れを聞き五郎兵衞びつくりなし、）

五郎　や、こりや太助どのには、最前のわしが明かした一部始終を、申し上げる氣でないか。

太助　如何にも、あれを申す氣だ。

五郎　それをこなたに言はれては、是れまで怺えし五郎兵衞が、心盡しも水の泡。

太助　それだといつてお前さまが、身に覺えなき盜賊に、落ちなさるを餘所に見て、どうまあ居られませう。

五郎　その親切は忝けないが、是ればかりは太助どの、どうぞ言つて下さるな。

ト ばた〳〵になり、下手より侍出で、

侍　はツ、申し上げます、松前屋五郎兵衞が女房汐と申す者、お目通りを願ひまする。

彥左　おゝ、其女是れへ。

侍　はツ。（ト引返し、直に以前のお汐を案内して出て來る、）

太助　もし、讓り狀は知れましたか。

お汐　爰へ持つて參りました。（ト懷より讓り狀を出す、太助受取り、）

太助　いざ、御覧下さりませ。（ト彦左衛門の前へ出す。彦左衛門開き見て、）

彦左　むゝ、父五左衛門より讓り狀、實印据ゑし慥な證據。

伊豫　然し證據と言はれても。

内匠　僞筆なるかも計られず。（ト此時上手屋體より主膳上下にて緣側へ出來り、）

主膳　その目利仕つらん。

彦左　濱田どのには、御苦勞千萬。

伊豫　さいふ貴殿は何人なるぞ。

主膳　津輕越中守が家來、濱田主膳と申す者。

内匠　如何いたして此の席へ、

彦左　昨日太助よりあらかじめ聞きしゆゑ、早便にて濱田殿を、目利役に招き置きたり。

伊豫　はて、念の入つたる事でござる。

彦左　いざ、お目利下さい。（ト讓り狀を出す、主膳開き見て、）

主膳　これぞ松前屋五左衛門が自筆に相違ござらぬ上、持參なしたる印鑑に、引合すれば印形も聊か相違ござりませぬ。

彦左　こりや五郎兵衞、その身の素性鎧の出所、其方遂一此場で申すか。

五郎　さあ。

彦左　さなくば太助に申させようか。

五郎　むゝ。

彦左　所詮のがれぬ事なれば、包み隱さず疾く〳〵申せ。（トきつと言ふ。）

五郎　斯くなる上は是非に及ばず、鎧兜を所持なす仔細、只今申し上げまする。（ト誂への合方になり、）元私が出生は、津輕越中守が家臣、父は家老職を勤め松前五左衞門と申す者、私未だ幼年の砌り、母は血癪の病にて終に病死仕り、其後私の養育に困り、同勤の者のすゝめにより後妻を迎へし所翌年女子出生いたし實子に家督を繼がせんと、兎角我を疎まれて朝暮辛く當るゆゑ、長く居なば一命にも拘はる事と家出なし、此江戸へ立越せしが、父五左衞門死去の砌り、鎧兜へ讓り狀を添へまして親戚へ預けしを、家來文兵衞と申す者、はる〳〵持參いたせしゆゑ、再び世に出る時もやと亡父の記念に土藏の內へ、しまひおきましてござりまする、又繼母は家出なしたるを、是れ幸ひと我が娘に聟を取りて家を繼がせ、今日までも榮え居る由、御不審受けし鎧兜のその傳來を申し上ぐれば、數代御恩を蒙りし故主の御名を法廷へ出すは何より不忠の至り、又心よからぬ

繼母ながら、數年來養育の恩は産みの母にも勝れり、それを惡しざまに申すのは、子の身にては大不孝、假令この身を捨てればとて、言はぬにしかずと臍を固め、數度の御詮議に申し上げぬは故主へ不忠繼母へ不孝、忠孝二つに數日の間、上お役人を煩はせ、恐入つてござりまする。

ト五郎兵衛よろしく思入にて言ふ、太助嬉しき思入にて、

彦左　扨は彦左衛門が察せし如く、津輕藩の家臣なりしか。

伊豫　さすれば土藏に祕めありし、不正な品と思つたが、

内匠　鎧兜は五郎兵衛が、父五左衛門が讓りの品か。

伊豫　ふむ。

彦左　それ、兩人の繩目を解け。

同心　はツ。（ト五郎兵衛、卯之助の繩を解く。）

彦左　鎧兜はその方が父より讓り受けたる品なれば、五郎兵衛卯之助今日よりして構ひなし。

五郎　すりや盗賊の汚名も晴れて、御赦免なされて下さりまするか。

お汐　是れと申すも、大久保さまの。

卯之　お情厚きお陰ゆゑ、

治郎　縁に繋がる私まで、
太助　お禮は詞に、
五人　盡くされませぬ。
彥左　かゝる無實を訴へ出し、內藤、內田、近藤どの、評定の上御所置あれば、後日の御沙汰を相待たれよ。
內匠　はッ、承知いたしてござる。
治郎　して私共、
三人　三人は。
彥左　一旦惡事に荷擔なすとも、先非を悔いて改心なし、自訴によつて構ひなし。
三人　有難うござりまする。
彥左　まつた原田伊豫守には、其身奉行の職を忘れ、內緣に依つて邪な捌きをなせし科により、奉行役は今日限り、御身も後日の沙汰を待たれよ。
伊豫　恐入つてござりまする。（ト平伏する。）
老中　大久保殿の再吟味にて、

目附　落着なして、
六人　大慶至極。
五郎　忠孝二つを捨てまじと、死する覺悟をいたしたが、
お汐　夫が命の助かりしも大久保樣のお情ゆゑ、
太助　それも其身の行ひにて、
主膳　惡は滅び善は榮え、
彦左　賞罰正しき德川の、
五郎　あ、水は逆には、
彦左　流れぬなう。（ト伊豫守内匠に當てつける。是れなと息込むを木の頭ゝむゝはゝゝゝゝ。
ト皆々引張りよろしく、太撥の太鼓にて、
ひやうし　幕

柳生と松前屋（終り）

#（附錄）主なる興行年表

不動文次

年時	明治十六年九月	明治二十五年七月
座名	市村座	春木座
名題	今文覺助命刺繡	今文覺助命刺繡
役割		
文次	尾上菊五郎	坂東家橘
慶十郎	助高屋高助	中村駒之助
良作	片岡我童	中村芝鶴
林之助	坂東家橘	市村竹松
清太	坂東家橘	中村芝鶴
幸次	片岡我童	中村駒之助
小澤	岩井松之助	岩井松之助
お柳	河原崎國太郎	中村富十郎
熊藏	尾上松助	中村勘五郎

奉書試合

年時	明治二十二年十月	明治四十五年一月
座名	桐座	演伎座
名題	柳生荒木譽奉書	柳生荒木譽奉書
役割		
又右衛門	市川左團次	中村東藏
飛彈守	尾上菊五郎	市川壽美藏
權兵衛	市川團十郎	市川權三郎
仁右衛門	大谷馬十	片岡島十郎

柳生と松前屋

年時	明治十六年一月	明治二十年四月	明治二十三年五月	明治二十五年一月	明治三十年三月	明治四十三年一月	大正三年一月	大正十二年五月
座名	新富座	中島座	春木座	壽座	明治座	市村座	本郷座	新富座
役割／名題	芽出柳翠緑松前	柳松世談大窪裁	芽出柳翠緑松前	芽出柳翠緑松前	芽出柳翠緑松前	芽出柳翠緑松前	松前屋五郎兵衛	一心太助
五郎兵衛	尾上菊五郎	中村壽三郎	市川右田作	坂東家橘	市川左團次	尾上菊五郎	市川小團次	坂東壽三郎
次郎兵衛	尾上菊五郎	尾上幸藏	市川八百藏	坂東家橘	市川小團次	尾上菊五郎	市川小團次	坂東壽三郎
但馬守	市川左團次	中村壽三郎	中村駒之助	―	市川左團次	中村駒助	―	―
藤左衛門	市川左團次	中村時藏	中村駒之助	市川猿之助	市川權十郎	中村吉右衛門	―	―
太助	市川左團次	市川猿之助	中村駒之助	市川猿之助	市川左團次	中村吉右衛門	市川左團次	市川左團次
又十郎	市川右團次	市川猿之助	中村芝鶴	―	市川權十郎	坂東三津五郎	―	―
清兵衛	市川右團次	勝川又吉	中村芝鶴	市川喜猿	市川壽美藏	守田勘彌	市川壽美藏	市川莚升
彦左衛門	中村仲藏	中村時藏	市川八百藏	市川壽美藏	片岡市藏	中村歌六	市川八百藏	松本幸四郎
甚右衛門	中村芝翫	嵐冠十郎	市川八百藏	市川九藏	市川權十郎	尾上榮三郎	市川八百藏	市川壽美藏
お汐	坂東秀調	岩紫若	中村梅太郎	岩井小紫	坂東秀調	尾上美雀	坂東秀調	市川松蔦
次郎助	市川小團次	尾上幸藏	中村福圓	―	市川小團次	中村駒助	中村又五郎	市川壽美藏

「因幡小僧」と「會稽源氏」には再演なし。

大正十五年八月十三日印刷
大正十五年八月十五日發行

『默阿彌全集第二十五卷』
非賣品

著作權者印

補修 河竹糸女
校訂 編纂者 河竹繁俊
發行者 東京市日本橋區通四丁目五番地 和田利彦
印刷者 東京市小石川區諏訪町五十六番地 堀江闢武
印刷所 東京市小石川區諏訪町五十六番地 常磐印刷所
發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地 春陽堂